

曾我墓所遺跡 第2・3次調査

— 横越排水区雨水調整池築造工事に伴う曾我墓所遺跡第2・3次発掘調査報告書 —

2023

新潟市教育委員会

そ が ほ しょ
曾我墓所遺跡 第2・3次調査

－横越排水区雨水調整池築造工事に伴う曾我墓所遺跡第2・3次発掘調査報告書－



例　　言

- 1 本書は新潟県新潟市江南区横越字下郷 6052 ほかに所在する曾我墓所遺跡の第 2・3 次発掘調査記録である。
- 2 本調査は雨水調整池築造工事に伴い、新潟市教育委員会（補助執行：新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター）が新潟市長（担当：東部地域下水道事務所）から依頼を受けて行った。
- 3 令和元（2019）・2 年度に発掘調査と整理作業、令和 3・4 年度に整理作業、令和 5 年度に報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第Ⅲ章に記した。
- 4 出土遺物及び調査、整理作業に係る記録類は、一括して新潟市文化財センター（以下、市文化財センターという）が保管・管理している。
- 5 本書の編集は龍田優子（市文化財センター）が行った。造構図版及び造構写真図版の作成は高柳俊輔（株式会社吉田建設）、龍田が行い、遺物図版及び遺物写真図版の作成は中川晃子（株式会社吉田建設）、龍田・西山美那（市文化財センター、令和 4 年 7 月まで）が行った。執筆分担は以下の通りである。

第 1・Ⅲ章、第Ⅳ章第 1 節、第Ⅴ章第 1・3・5・8 節、第Ⅵ章第 1 節、第Ⅶ章第 3 節	龍田
第Ⅷ章第 2 節	脇本博康（株式会社吉田建設）
高柳	高柳俊輔（株式会社吉田建設）
第Ⅸ章第 2 節 A	中川
第Ⅹ章第 7 節	中川・龍田
第Ⅺ章第 4・6 節	西山
第Ⅻ章第 2 節 B	西山美那（市文化財センター、令和 4 年 7 月まで）
- 6 なお、第Ⅵ章第 2～7 節は株式会社古環境研究所に分析・執筆を委託し、龍田が編集した。
- 7 本書に掲載した写真的撮影者は、写真図版 1 が米軍（国土地理院発行）、写真図版 2～5 が株式会社オリス、それ以外の造構写真は高柳・中川・阿部 司・田中万里子（株式会社吉田建設）である。遺物写真是株式会社吉田建設と有限会社 MAX に委託した。ただし、写真図版 98・100 の X 線画像は市文化財センターで撮影し、図版 116・117、写真図版 92～94・98・100 の X 線 CT 画像（立面像・断面像）撮影、及び図版 116 の X 線 CT 画像（立面像）の合成写真作成は新潟県工業技術総合研究所下越技術支援センターの中部 昇 専門研究員が行った。
- 8 造構図・遺物出土微細図等のトレースは株式会社オリス、遺物実測図のデジタルトレース及び DTP ソフトによる各種版下の作成は有限会社不二出版に委託し、完成データを印刷業者へ入稿した。
- 9 今回の調査成果については、これまで現地説明会資料（令和元年 10 月 19 日・令和 2 年 10 月 10 日）や新潟市遺跡発掘調査速報会 2019（澤野 2020）・同 2020（龍田 2021a）で発表されている。報告書と類似のある場合は、本報告書をもって正とする。
- 10 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関よりご指導・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。

荒川隆史・伊藤秀和・小野本敦・春日真実・加藤 学・加藤 竜・川崎 保・小林昌二・坂井秀弥・高橋照彦・ 滝沢規朗・寺崎裕助・田海義正・鶴巣康志・戸根与八郎・中島栄一・名村威彦・奈良貴史・福田仁史・古澤要史・ 古谷 穎・増子正三・水澤幸一・宮尾 亨・山本 哲
新潟医療福祉大学・新潟県教育庁文化行政課（令和 4 年度より観光文化スポーツ部文化課）
（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

（所属・敬称略、五十音順）

凡　例

- 1 本書は本文と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約8度である。
- 3 掲載図面のうち、既存の地形図等を使用した場合は、原図の作成者・作成年を示した。
- 4 引用文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示し、巻末に一括して掲載した（但し、第VI章は同章の中で一括し、引用・参考文献一覧の末尾に記した）。
- 5 造構番号は発掘調査現場で付したものを使いた。番号は造構の種別ごとに付さず、通し番号とした。造構の種別記号は〔文化庁文化財部記念物調2010〕を参考に以下のように付けて表した。

豊穴建物 (SI)	掘立柱建物 (SB)	井戸 (SE)	土坑 (SK)	焼土造構 (焼土)	性格不明造構 (SX)	石列 (石列)
溝状造構 (SD)	柱穴・ビット (P)					
- 6 土層の土色及び遺物の色調観察は『新版 標準土色帖』(小山・竹原1967)を用い、色調名と土層の土色のみ記号を掲載した。
- 7 遺物実測図は1/3を基本とし、これと異なる場合は各図面に明記した。
- 8 土器実測図で全周の1/12以下のような遺存率の低いものについては、誤差があるため中軸線の両側に空白を設けた。土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、それ以外を白抜きとした。トーンについては以下のとおりである。

土 器	……黒色処理	[■]	赤 彩	[■■■]	漆	[■]	スス	[■]	欠け	[■]
土製品	……磨耗	[■]	ハガレ	[■]	断面・欠け	[■]				
石製品	……紙面・磨面	[■■■]	付着物	[■]	被熱 (黒化)	[■■■]				
鉄製品	……鉄残存部	[■]	柄の痕跡	[■■■]						
木製品	……炭化	[■■■]								

- 9 石製品実測図に示す矢印は、断面表示箇所が磨耗範囲、遺物内表示箇所が研磨・磨耗方向を示す。
- 10 造構の記述は、豊穴建物 (SI)、掘立柱建物 (SB)、井戸 (SE)、土坑 (SK)、焼土造構 (焼土)、性格不明造構 (SX)、溝状造構 (SD)、柱穴・ビット (P) の順に、時代ごとで番号順に記述した。石列は性格不明造構に伴うため、個別記載はしていない。
- 11 遺物の掲載番号は種別関係なく通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版に共通して用いた。
- 12 本文中の挿図に用いた地形図、造構・遺物図の縮尺は各図に示した。
- 13 造構計測表における（ ）付きの値は残存値を意味し、遺物観察表中における（ ）付きの値は推定値を意味する。
- 14 造構計測表では、造構の新旧関係を表現する際に「<」や「>」を用いた。例えば、SK1<SK2となる場合はSK1が古く、SK2が新しいことを示す。
- 15 土器・土製品の出土位置は実測図に記載したため、各観察表には主たる造構・グリッドのみ示した。
- 16 遺物の注記は、遺跡名の略記号を第2次調査は「曾我墓所」、第3次調査は「ソガ」とし、出土地点や層位を統けて記した。また、各調査年度（西暦）の後半数字の「19」・「20」を略記号の前に付した。

目 次

第Ⅰ章 序 章

第1節 遺跡概観	1
第2節 発掘調査に至る経緯	1

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	2
第2節 周辺の遺跡	2
第3節 歴史的環境	6

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 確認調査	8
A 調査方法と経過	8
B 調査体制	8
第2節 本発掘調査	8
A 調査方法	8
1) グリッドの設定	8
2) 調査方法	10
B 調査経過	10
1) 第2次調査の経過	10
2) 第3次調査の経過	11
C 調査体制	11
第3節 整理作業	12
A 作業方法	12
1) 遺物	12
2) 遺構	12
B 作業経過	12
C 作業体制	12

第Ⅳ章 遺 跡

第1節 概要	14
第2節 層序	14
第3節 遺構	15
第4節 遺構各説	15
A 古代の遺構	15
1) 穴立柱建物	15
2) 捜立柱建物	17
3) 井戸	19
4) 土坑	19
5) 焼土	28
6) 性格不明遺構	29
7) 溝	33
8) ピット	34
B 中世の遺構	34
1) 溝	34

C 近世の遺構	34
1) 井 戸	35
2) 土坑・墓坑	35
3) 性格不明遺構	37
4) 溝	37

第V章 遺 物

第1節 概 要	38
第2節 土 器	38
A 記述の方法	38
B 古代土器の分類	39
C 土器各説	43
1) 古墳時代の土器	43
2) 古代の土器	43
3) 中世の陶器	58
4) 近世の土器・陶磁器	58
第3節 土 製 品	58
第4節 鍛治関連遺物	60
第5節 石器・石製品	60
第6節 金 屬 製 品	62
第7節 木 製 品	64
第8節 そ の 他	66

第VI章 自然科学分析

第1節 概 要	68
第2節 花 粉 分 析	68
A 試 料	68
B 方 法	68
C 結 果	69
D 花粉分析から推定される植生と環境	71
第3節 植物珪酸体分析	72
A 試 料	72
B 方 法	72
C 結 果	72
D 植物珪酸体分析から推定される農耕と環境	74
第4節 動物遺存体同定	75
A 試料と方法	75
B 結 果	75
C 考 察	76
第5節 花粉分析・寄生虫卵分析	76
A 試料と方法	76
B 結 果	76
C 考 察	77
第6節 樹 種 同 定	77
A 試 料	77
B 方 法	77

C 結 果	77
D 考 察	80
第7節 放射性炭素年代測定・ウイグルマッチング	81
A 試 料	81
B 方 法	81
1) 化学処理	81
2) 測 定	82
C 結 果	83
D 考 察	83
第VII章 総 括	
第1節 遺構について	85
A 穴室建物について	85
1) 新潟県内の穴室建物	85
2) 曽我墓所遺跡の穴室建物	85
B 建物遺構とその変遷について	87
1) 建物遺構について	87
2) 建物遺構の変遷	90
C 小 結	90
第2節 遺物について	92
A 古代土器について	92
1) 年代的位置づけ	92
2) 遺構別器種構成比率と機能別構成比率	95
3) 時期別食器具種類別構成比率	98
4) 須恵器の胎土構成比率	99
B 金属製品・鍛冶関連遺物について	100
第3節 曽我墓所遺跡の位置づけ	102
A 祭祀の痕跡について	102
1) 祭祀遺物	102
2) 祭祀の場	108
B 遺跡の性格と位置づけ	109
引用・参考文献	112
別 表	121
報告書抄録・奥付	卷末

挿 図 目 次

第 1 図 曽我墓所遺跡周辺の地形分類図	3	第 12 図 花粉ダイアグラム②(試料Ⅲ)	70
第 2 図 曽我墓所遺跡周辺の遺跡分布図	4	第 13 図 主な花粉の顕微鏡写真	71
第 3 図 確認調査トレンチ配置図と本調査範囲	9	第 14 図 植物珪酸体分析結果	73
第 4 図 確認調査土層柱状図	9	第 15 図 主な植物珪酸体の顕微鏡写真	74
第 5 図 現地説明会風景	13	第 16 図 動物存存顕微鏡写真	76
第 6 図 器種分類図 1	40	第 17 図 土器内面の付着物(試料Ⅲ)	76
第 7 図 器種分類図 2	41	第 18 図 主な木材・炭化材の顕微鏡写真	79
第 8 図 器種分類図 3	42	第 19 図 ウィグルマッチング試料採取位置	81
第 9 図 井戸側に転用された丸木舟の断面・模式図	65	第 20 図 历年較正年代グラフ	84
第 10 図 SE278 出土種実	66	第 21 図 ウィグルマッチングによる木材最外輪の 历年較正年代グラフ	84
第 11 図 花粉ダイアグラム①(試料①～⑩)	70		

第 22 図 木材のウイグルマッチング	84	第 30 図 鎌治関連遺構	101
第 23 図 県内の古代（8世紀以降）における 豊穴建物検出遺跡	85	第 31 図 鳥形製品 1	104
第 24 図 豊穴建物分類図	86	第 32 図 鳥形製品 2	105
第 25 図 建物出土遺物の整理 1	88	第 33 図 鳥形製品・模型須恵器環状瓶・ 鉄製錫杖頭（古代）の出土遺跡	105
第 26 図 建物出土遺物の整理 2	89	第 34 図 横型須恵器環状瓶	106
第 27 図 建物遺構の変遷	91	第 35 図 鉄製錫杖頭（古代）	108
第 28 図 土器の変遷	93	第 36 図 調査区北側の祭祀痕跡	110
第 29 図 食器具種類別構成比率・須恵器の 胎土構成比率	99		

表 目 次

第 1 表 曾我墓所遺跡周辺の遺跡	4	第 11 表 編年対照表	92
第 2 表 篩選別資料一覧	67	第 12 表 器種構成比率（機能別構成比率）1	96
第 3 表 花粉分析結果	69	第 13 表 器種構成比率（機能別構成比率）2	97
第 4 表 植物用機体一覧と含量	73	第 14 表 周辺遺跡の土器機能別構成比率	98
第 5 表 動物遺存体同定結果	75	第 15 表 周辺遺跡の食器具種類別構成比率	99
第 6 表 樹種同定結果	78	第 16 表 遺構別鍛冶関連遺物出土重量（g）	101
第 7 表 測定試料及び処理	81	第 17 表 近世墓坑出土鉄製品及び釘頭部点数	101
第 8 表 測定結果	83	第 18 表 鳥形製品・横型須恵器環状瓶・ 鉄製錫杖頭（古代）出土地一覧	103
第 9 表 ウィグルマッチング結果	83	第 19 表 祭祀関連遺構出土遺物一覧	109
第 10 表 豊穴建物一覧	86		

別 表 目 次

別表 1 造構計測表	121	別表 5 石器・石製品観察表	146
別表 2 土器観察表	134	別表 6 金属製品観察表	147
別表 3 土製品観察表	146	別表 7 木製品観察表	147
別表 4 鍛冶関連遺物観察表	146		

図 版 目 次

図版 1 周辺の旧地形図（1/50,000）	図版 14 造構平面部分図 4（1/150）・ 古代造構側別図（1/80）
図版 2 周辺の旧土地利用図（1/12,500）	図版 15 造構平面部分図 5（1/150）
図版 3 周辺の遺跡（1/10,000）	図版 16 造構平面部分図 6（1/150）・ 古代造構側別図（1/80）
図版 4 グリッド設定図（1/2,500）	図版 17 造構平面部分図 7（1/150）・ 古代・近世造構側別図（1/80）
図版 5 造構全体図（1/400）	図版 18 造構平面部分図 8（1/150）・ 近世造構側別図（1/80）
図版 6 小グリッド別出土遺物重量分布図 1（1/1,000）	図版 19 造構平面部分図 9（1/150）
図版 7 小グリッド別出土遺物重量分布図 2（1/1,000）	図版 20 造構平面部分図 10（1/150）・ 古代・近世造構側別図（1/80）
図版 8 小グリッド別出土遺物重量分布図 3（1/1,000）	図版 21 造構平面部分図 11（1/150）・ 古代・中世造構側別図（1/80）
図版 9 基本順序（1/40）	図版 22 造構平面部分図 12（1/150）・ 古代・中世造構側別図（1/80）
図版 10 胡付図（1/800）	
図版 11 造構平面部分図 1（1/150）・ 古代・近世造構側別図（1/80）	
図版 12 造構平面部分図 2（1/150）・ 古代造構側別図（1/80）	
図版 13 造構平面部分図 3（1/150）・ 古代・近世造構側別図（1/80）	

图版 23	古代造構側別圖 (1/40 · 1/80)	图版 72	近世造構側別圖 (1/40)
图版 24	古代造構側別圖 (1/40 · 1/80)	图版 73	古墳時代土器 1 古代土器 1
图版 25	古代造構側別圖 (1/40 · 1/80)	图版 74	古代土器 2
图版 26	古代造構側別圖 (1/20 · 1/40 · 1/80)	图版 75	古代土器 3
图版 27	古代造構側別圖 (1/40 · 1/80)	图版 76	古代土器 4
图版 28	古代造構側別圖 (1/40 · 1/100)	图版 77	古代土器 5
图版 29	古代造構側別圖 (1/100)	图版 78	古代土器 6
图版 30	古代造構側別圖 (1/40)	图版 79	古代土器 7
图版 31	古代造構側別圖 (1/40 · 1/100)	图版 80	古代土器 8
图版 32	古代造構側別圖 (1/40 · 1/100)	图版 81	古代土器 9
图版 33	古代造構側別圖 (1/40)	图版 82	古代土器 10
图版 34	古代造構側別圖 (1/40)	图版 83	古代土器 11
图版 35	古代造構側別圖 (1/40)	图版 84	古代土器 12
图版 36	古代造構側別圖 (1/40)	图版 85	古代土器 13
图版 37	古代造構側別圖 (1/40)	图版 86	古代土器 14
图版 38	古代造構側別圖 (1/40)	图版 87	古代土器 15
图版 39	古代造構側別圖 (1/40)	图版 88	古代土器 16
图版 40	古代造構側別圖 (1/40)	图版 89	古代土器 17
图版 41	古代造構側別圖 (1/40)	图版 90	古代土器 18
图版 42	古代造構側別圖 (1/40)	图版 91	古代土器 19
图版 43	古代造構側別圖 (1/40)	图版 92	古代土器 20
图版 44	古代造構側別圖 (1/40)	图版 93	古代土器 21
图版 45	古代 · 近世造構側別圖 (1/40)	图版 94	古代土器 22
图版 46	古代造構側別圖 (1/40)	图版 95	古代土器 23
图版 47	古代 · 近世造構側別圖 (1/40)	图版 96	古代土器 24
图版 48	古代造構側別圖 (1/40)	图版 97	古代土器 25
图版 49	古代造構側別圖 (1/40)	图版 98	古代土器 26
图版 50	古代造構側別圖 (1/40)	图版 99	古代土器 27
图版 51	古代造構側別圖 (1/40)	图版 100	古代土器 28
图版 52	古代造構側別圖 (1/40)	图版 101	古代土器 29
图版 53	古代造構側別圖 (1/40)	图版 102	古代土器 30
图版 54	古代造構側別圖 (1/40)	图版 103	古代土器 31
图版 55	古代造構側別圖 (1/40)	图版 104	古代土器 32
图版 56	古代造構側別圖 (1/40)	图版 105	古代土器 33
图版 57	古代造構側別圖 (1/40)	图版 106	古代土器 34
图版 58	古代造構側別圖 (1/40)	图版 107	古代土器 35
图版 59	古代造構側別圖 (1/40)	图版 108	中世土器 近世陶磁器
图版 60	古代造構側別圖 (1/40)	图版 109	土製品 1
图版 61	古代造構側別圖 (1/40)	图版 110	土製品 2
图版 62	古代造構側別圖 (1/40 · 1/100)	图版 111	土製品 3
图版 63	古代造構側別圖 (1/40)	图版 112	土製品 4 鍛治関連遺物 石器 · 石製品 1
图版 64	古代造構側別圖 (1/40)	图版 113	石器 · 石製品 2
图版 65	古代造構側別圖 (1/40)	图版 114	石器 · 石製品 3
图版 66	古代造構側別圖 (1/40)	图版 115	石器 · 石製品 4
图版 67	古代造構側別圖 (1/40)	图版 116	金属製品 1
图版 68	古代造構側別圖 (1/40)	图版 117	金属製品 2
图版 69	古代造構側別圖 (1/40)	图版 118	木製品 1
图版 70	近世造構側別圖 (1/40)	图版 119	木製品 2
图版 71	近世造構側別圖 (1/40)	图版 120	木製品 3

写真図版 目次

写真図版 1 曾我墓所遺跡周辺空中写真 1	SI207- 焼土 823 A-A' 土層断面
写真図版 2 曾我墓所遺跡周辺空中写真 2	SI207- 焼土 823 B-B' · C-C' 土層断面
曾我墓所遺跡周辺空中写真 3	SI207- 焼土 823 C-C' · SB252-SD468 土層断面
写真図版 3 曾我墓所遺跡 完掘	SI207 完掘
路線部分 完掘	SI243 B-B' 土層断面
写真図版 4 竪穴建物・掘立柱建物集中区 完掘	SI243 完掘
溝状造構集中区 完掘	SI451 A-A' ① 土層断面
写真図版 5 SK413 · 418 · 419 · 488 完掘	SI451 A-A' ② 土層断面
SK418 · 419 遺物出土	SI451 A-A' ③ · SK455 土層断面
写真図版 6 SK419 遺物出土	SI451 B-B' ① 土層断面
写真図版 7 調査前風景	SI451 B-B' ② · SK460 土層断面
調査前風景 路線区	SI451 C-C' ① 土層断面
基本層序①	SI451 C-C' ② 土層断面
基本層序②	SI451 C-C' ③ 土層断面
基本層序③	SI451 遺物出土
基本層序④	SI451- 焼土 820 A-A' 土層断面
写真図版 8 基本層序⑤	SI451- 焼土 820 B-B' 土層断面
基本層序⑥	SI451 · SK455 · 460 完掘
基本層序⑦	SI453 A-A' ① 土層断面
基本層序⑧	SI453 A-A' ② 土層断面
SI65 A-A' 土層断面	SI453 A-A' ③ 土層断面
SI65 B-B' · P448 土層断面	SI453 B-B' ① · P597 · 598 土層断面
SI65- 焼土 817 A-A' 土層断面	SI453 B-B' ② 土層断面
SI65- 焼土 817 B-B' 土層断面	SI453 焼土 822 A-A' 土層断面
写真図版 9 SI65 完掘	SI453 焼土 822 B-B' 土層断面
SI103 A-A' · B-B' 土層断面	SI453 完掘
SI103- 焼土 114 土層断面	SI608 A-A' 土層断面
SI103 完掘	SI608-P622 土層断面
SI108 A-A' 土層断面	SI608-P773 土層断面
SI108 B-B' 土層断面	SI608-P774 土層断面
SI108- 焼土 211 土層断面	SI608 B-B' 土層断面 · 完掘
SI108-P123 土層断面	SB251 完掘
写真図版 10 SI108-P200 土層断面	SB251-P95 土層断面
SI108-P203 土層断面	写真図版 16 SB251-P101 土層断面
SI108-P204 土層断面	SB251-P149 土層断面
SI108 完掘	SB251-P152 土層断面
SI181 A-A' 土層断面	SB251-P176 土層断面
SI181 C-C' 土層断面	SB251-P178 土層断面
SI181- 焼土 830 A-A' 土層断面	SB251-P256 土層断面
SI181- 焼土 830 B-B' 土層断面	SB251-P273 土層断面
写真図版 11 SI181-P81 土層断面	SB251-SD153 土層断面
SI181-P188 土層断面	写真図版 17 SB251-SK68 土層断面
SI181-P189 土層断面	SB251-SK68 完掘
SI181-P198 土層断面	SB251-SK106 土層断面
SI181 完掘	SB251-SX130 土層断面
SI207 A-A' · SK242 土層断面	SB251-SX134 土層断面
SI207 B-B' · SK215 土層断面	

	SB252 完掘	SB252-P140 土層断面	SB252-P169 土層断面	SE388 土層断面
	SB252-P172 土層断面	SB252-P179 土層断面	SB252-P191 土層断面	SE388 遺物出土・完掘
写真図版 18	SB252-P202 土層断面	SB252-P206 土層断面	写真図版 24	SK29 土層断面
	SB252-P216 土層断面	SB252-P257 土層断面		SK29 遺物出土・完掘
	SB252-P270 土層断面	SB252-P276 土層断面		SK32 土層断面
	SB252-P458 土層断面	SB252-SK71 土層断面		SK32 遺物出土・完掘
写真図版 19	SB252-SK76 土層断面	SB252-SK132 土層断面		SK48 土層断面
	SB252-SK136 土層断面	SB252-SK137 土層断面		SK48 完掘
	SB252-SK468 A-A' 土層断面	SB252-SK468 B-B' 土層断面		SK53 土層断面
写真図版 20	SB252-SK468 C-C' 土層断面	SB252-SK468 完掘	写真図版 25	SK53 遺物出土・完掘
	SB828 完掘			SK67 土層断面
	SB828-P286 土層断面			SK67 燃土検出
	SB828-P287 土層断面			SK67 完掘
	SB828-P326 土層断面			SK73 土層断面
	SB828-P328 土層断面			SK73 完掘
	SB828-P360 土層断面			SK79 土層断面
写真図版 21	SB828-P366 土層断面		写真図版 26	SK79 完掘
	SB828-P372 土層断面			SK107 土層断面
	SB828-P376 土層断面			SK107 完掘
	SB828-P383 土層断面			SK131 土層断面
	SB828-P384 土層断面			SK131 完掘
	SB828-P435 土層断面			SK145 土層断面
	SB828-P442 土層断面			SK145 遺物出土・完掘
	SB828-P450 土層断面			SK220 土層断面
写真図版 22	SB828-P452 土層断面			SK220 炭化物検出
	SB829 完掘			SK220 完掘
	SB829-P148 土層断面		写真図版 27	SK281 A-A' 土層断面
	SB829-P151 土層断面			SK281 B-B'・P289 土層断面
	SB829-P156 土層断面			SK281 完掘
	SB829-P159 土層断面			SK285 土層断面
	SB829-P160 土層断面			SK285 完掘
	SB829-P161 土層断面			SK298 土層断面
写真図版 23	SB829-P187 土層断面			SK298 完掘
	SB829-P197 土層断面			SK336 土層断面
	SE278 土層断面			SK341 A-A' 土層断面
	SE278 遺物出土			SK341 B-B' 土層断面
	SE278 井戸側出土			SK341 遺物出土・完掘
	SE278 井戸側内 土層断面			SK346 土層断面
				SK346 完掘
				SK350 土層断面
				SK350 完掘
				SK352 土層断面
			写真図版 29	SK352 完掘
				SK356 土層断面
				SK356 完掘
				SK363 A-A'・D-D' 土層断面
				SK363 完掘
				SK413 遺物出土
				SK413 B-B' 土層断面

	SK413 C-C' 土層断面	SK616 遺物出土
写真図版 30	SK413 完掘	SK616 完掘
	SK418 A-A' 土層断面	SK624・630 土層断面
	SK418 B-B' 土層断面	SK624 完掘
	SK418 遺物出土	写真図版 37 SK630 完掘
	SK418 完掘	SK631 土層断面
	SK419 A-A' 土層断面	SK631 完掘
	SK419 B-B' 土層断面	SK647 B-B' 土層断面
写真図版 31	SK419・SX486・SD380 土層断面	SK647 完掘
	SK419・SX486・487 土層断面	SK654・663・SD651 土層断面
	SK419 遺物出土	SK654 土層断面
	SK419 遺物(鳥足)出土	SK654 完掘
	SK419 遺物(鉄輝・鶴杖頭)出土	写真図版 38 SK658 A-A' 土層断面
写真図版 32	SK419 完掘	SK658 完掘
	SK455 A-A' 土層断面	SK668 土層断面
	SK455 完掘	SK668 完掘
	SK460 土層断面	SK674 土層断面
	SK460 完掘	SK674 完掘
	SK472 土層断面	SK680 土層断面
	SK472 完掘	SK680 完掘
	SK488 A-A' ① 土層断面	写真図版 39 SK689 土層断面
写真図版 33	SK488 A-A' ② 土層断面	SK690 土層断面
	SK488 B-B' ① 土層断面	SK690 完掘
	SK488 B-B' ② 土層断面	SK691 土層断面
	SK488 遺物出土	SK698 土層断面
	SK488 完掘	SK698 完掘
	SK499 土層断面	SK699 土層断面
	SK499 完掘	SK699 完掘
写真図版 34	SK532 A-A'・SD537 土層断面	写真図版 40 SK700 土層断面
	SK532 B-B'・SK546・SD537・538 土層断面	SK700 完掘
	SK532 完掘	SK706 土層断面
	SK533 A-A' 土層断面・SD380 完掘	SK706 完掘
	SK533 B-B' 土層断面	SK721 土層断面
	SK533 完掘	SK721 完掘
	SK543 B-B' 土層断面	SK722 土層断面
	SK543 遺物出土	SK722 完掘
写真図版 35	SK543 完掘	写真図版 41 SK758 土層断面
	SK546・P551 A-A' 土層断面	SK758 遺物出土
	SK546・P551 B-B' 土層断面	SK758 完掘
	SK546・P551 完掘	SK781 土層断面
	SK553 A-A' 土層断面	SK781 完掘
	SK553 B-B' 土層断面	SK785 土層断面
	SK553 完掘	SK785 完掘
	SK584 A-A' 土層断面	SK802 土層断面
写真図版 36	SK584 完掘	写真図版 42 SK802 完掘
	SK589 土層断面	燒土 374 A-B' 土層断面
	SK589 遺物出土	燒土 454 土層断面
	SK616 A-A' 土層断面	燒土 454 完掘
		燒土 588 土層断面

	燒土 810 A-A' 土層斷面	SX425 完掘
	燒土 810 B-B' 土層斷面	SX469 A-A' ① 土層斷面
寫真図版 43	SX3 A-A' ① 土層斷面	SX469 A-A' ② 土層斷面
	SX3 A-A' ② 土層斷面	寫真図版 49 SX469 A-A' ③ 土層斷面
	SX3 A-A' ③ 土層斷面	SX469 B-B' ① 土層斷面
	SX3 遺物出土・完掘	SX469 B-B' ②・S1453 土層斷面
	SX31 A-A' 土層斷面	SX469 完掘
	SX31 B-B' 土層斷面	SX509 A-A' 土層斷面
	SX31 遺物出土・完掘	SX509 B-B' 土層斷面
	SX63 A-A'・B-B' 土層斷面	SX605・SD592・826・827 土層斷面
寫真図版 44	SX63 完掘	SX605・SD592・826・827 完掘
	SX64 A-A' ① 土層斷面	寫真図版 50 SX711 土層斷面
	SX64 A-A' ② 土層斷面	SX712 土層斷面
	SX64 B-B' ① 土層斷面	SD338 土層斷面・完掘
	SX64 B-B' ② 土層斷面	SD359 土層斷面
	SX64- 燒土 816 A-A' 土層斷面	SD397 土層斷面
	SX64- 燒土 816 B-B' 土層斷面	SD420 A-A' 土層斷面
	SX64- 石列 381 検出・SX64 完掘	SD420 B-B' 土層斷面
寫真図版 45	SX66 土層斷面	SD420 C-C' 土層斷面
	SX70 A-A' 土層斷面	寫真図版 51 SD420 完掘
	SX70 完掘	SX515 土層斷面
	SX124 土層斷面	SD523・P522 土層斷面
	SX125 遺物分布範囲	SD525 土層斷面
	SX240 A-A' 土層斷面	SD531 土層斷面
	SX247・248 土層斷面	SD538 A-A' 土層斷面
	SX249 土層斷面	SD538 B-B' 土層斷面
寫真図版 46	SX283 A-A' ① 土層斷面	SD592 土層斷面
	SX283 A-A' ②・SB828-SD357 ① 土層断面	寫真図版 52 SD606 A-A' 土層断面
	SX283 A-A' ③・SB828-SD357 ② 土層断面	SD606 C-C' 土層断面
	SX283 B-B' ①・SE388 土層断面	SD606 E-E' 土層断面
	SX283 B-B' ② 土層断面	SD606 完掘
	SX283 B-B' ③ 土層断面	SD651 土層断面
	SX283- 燒土 819 A-A' 土層断面	SD652 土層断面
	SX283- 燒土 819 B-B' 土層断面	SD651・652・678 完掘
寫真図版 47	SX283 遺物出土	SD673 土層断面
	SX283 完掘	寫真図版 53 SD678 土層断面
	SX406 B-B' 土層断面	SD725 A-A' 土層断面
	SX406 完掘	P110 土層断面
	SX407 土層断面・完掘	P165 土層断面
	SX411 土層断面	P184 土層断面
	SX415 遺物出土	P185 土層断面
	SX415 A-A' 土層断面	P186 土層断面
寫真図版 48	SX416 土層断面	P212 土層断面
	SX421 土層断面	寫真図版 54 P219 土層断面
	SX421 遺物出土・完掘	P254 土層断面
	SX425 土層断面	P272 土層断面
	SX425 炭化物検出	P385 土層断面
		P434 土層断面
		P448 土層断面

	P489 土層断面	写真図版 61	出土遺物 2 古墳時代土器 古代土器 1
	P551 遺物出土	写真図版 62	出土遺物 3 古代土器 2
写真図版 55	P587 土層断面	写真図版 63	出土遺物 4 古代土器 3
	P590 土層断面	写真図版 64	出土遺物 5 古代土器 4
	P610 土層断面	写真図版 65	出土遺物 6 古代土器 5
	P610 遺物出土・完掘	写真図版 66	出土遺物 7 古代土器 6
	P716 土層断面	写真図版 67	出土遺物 8 古代土器 7
	P718 土層断面	写真図版 68	出土遺物 9 古代土器 8
	P806 土層断面	写真図版 69	出土遺物 10 古代土器 9
	P815 土層断面	写真図版 70	出土遺物 11 古代土器 10
写真図版 56	SD47 A-A' 土層断面	写真図版 71	出土遺物 12 古代土器 11
	SD47 B-B' 土層断面	写真図版 72	出土遺物 13 古代土器 12
	SD226 土層断面	写真図版 73	出土遺物 14 古代土器 13
	SD226 完掘	写真図版 74	出土遺物 15 古代土器 14
	SE6 土層断面	写真図版 75	出土遺物 16 古代土器 15
	SE6 完掘	写真図版 76	出土遺物 17 古代土器 16
	SE20 土層断面	写真図版 77	出土遺物 18 古代土器 17
	SE20 完掘	写真図版 78	出土遺物 19 古代土器 18
写真図版 57	SK1 土層断面	写真図版 79	出土遺物 20 古代土器 19
	SK8 A-A' 土層断面	写真図版 80	出土遺物 21 古代土器 20
	SK9 土層断面	写真図版 81	出土遺物 22 古代土器 21
	SK10 A-A' 土層断面	写真図版 82	出土遺物 23 古代土器 22
	SK10 完掘	写真図版 83	出土遺物 24 古代土器 23
	SK11 土層断面	写真図版 84	出土遺物 25 古代土器 24
	SK13 土層断面	写真図版 85	出土遺物 26 古代土器 25
	SK15 土層断面	写真図版 86	出土遺物 27 古代土器 26
写真図版 58	SK15 遺物出土・完掘	写真図版 87	出土遺物 28 古代土器 27
	SK16 土層断面	写真図版 88	出土遺物 29 古代土器 28
	SK19 A-A' 土層断面	写真図版 89	出土遺物 30 古代土器 29
	SK19 B-B' 土層断面	写真図版 90	出土遺物 31 古代土器 30 中世土器 近世陶磁器
	SK26 土層断面	写真図版 91	出土遺物 32 古代土器（括大）31
	SK52 土層断面	写真図版 92	出土遺物 33 土製品 1
	SK544・545 土層断面	写真図版 93	出土遺物 34 土製品 2
写真図版 59	SK556 土層断面	写真図版 94	出土遺物 35 土製品 3 磁治窯遺物
	SK600 土層断面	写真図版 95	出土遺物 36 石器・石製品 1
	SK600 完掘	写真図版 96	出土遺物 37 石器・石製品 2
	SX42 B-B' 土層断面・完掘	写真図版 97	出土遺物 38 石器・石製品 3
	SX476 A-A'・SK511・SD477・525 土層 断面	写真図版 98	出土遺物 39 金属製品 1 X線写真
	SX476 B-B'・SD515・523・525 土層断面	写真図版 99	出土遺物 40 金属製品 2
	SD25 A-A' 土層断面	写真図版 100	出土遺物 41 金属製品 3 X線写真
	SD25 B-B' 土層断面	写真図版 101	出土遺物 42 木製品 1
	SD25 完掘	写真図版 102	出土遺物 43 木製品 2
写真図版 60	出土遺物 1 集合写真	写真図版 103	出土遺物 44 木製品 3

第Ⅰ章 序 章

第1節 遺跡概観

曾我墓所遺跡は新潟市江南区横越字下郷 6052 ほかに所在する。昭和 60 (1985) 年に新潟県が行った詳細分布調査で平安時代の土器が採集され、曾我家の墓所に近かったことから曾我墓所遺跡として周知化された。阿賀野川左岸の自然堤防上に立地し、標高は 3.8 ~ 4.5m を測る。当初は周囲よりも一段高い南北約 250m × 東西約 50m の水田部分が遺跡として登録された。遺跡の東側に南北に延びる現集落内には、下郷遺跡や下郷南遺跡など古代・中世の遺跡が点在し、近年でも新たに遺跡が見つかっている。平成 29 (2017) 年度に遺跡の北側で行われた確認調査で、古代の土器が大量に出土したため遺跡範囲を拡大した。その後、今回報告する令和元・2 年度の本発掘調査により古墳時代から近世まで断続的に続く集落跡で、建物跡が複数検出された 8 世紀後半から 9 世紀初頭が最盛期の遺跡であると確認された。さらに、様々な祭祀具の出土により古代祭祀を考える上で重要な遺跡であることも分かった。

第2節 発掘調査に至る経緯

平成 29 年、曾我墓所遺跡の北側で雨水調整池建築工事が計画され東部地域下水道事務所建設課（以下、東部下水道事務所という）から新潟市教育委員会教育長（以下、市教育長という）あてに埋蔵文化財の事前調査依頼書が提出された（平成 30 年 1 月 10 日付）。工事着手予定が平成 30 年度であり、歴史文化課（市教育長）は文化財保護法（以下、法という）第 99 条の規定に基づき着手報告を提出し（県教育長あて、平成 30 年 3 月 1 日付け新歴 B 第 247 号の 2）調査を開始した。調査中、調整池建設に伴って整備する排水管敷設工事が遺跡の範囲内であることが分かり、対象範囲を拡大し確認調査に切り替えて同年 3 月 12 日～28 日まで実質 7 日実施した（第 1 次調査）。調査では、漆が付着した須恵器など奈良・平安時代の遺構・遺物が多量に見つかった。また、遺跡が事業予定地全体に広がることが確認され、終了報告（県教育長あて、平成 30 年 4 月 13 日付け新歴 F 第 17 号）・埋蔵文化財発見通知（県教育長あて、平成 30 年 4 月 13 日付け新歴 F 第 17 号の 3）・保管証（江南警察署長あて、平成 30 年 4 月 13 日付け新歴 F 第 17 号の 4）の提出とともに遺跡範囲の変更をした（県教育長あて、平成 30 年 4 月 13 日付け新歴 F 第 17 号の 5）。防災・安全対策のための雨水調整池であり、その建設地の変更は難しく、発掘調査に係る課題解決のため東部下水道事務所と歴史文化課（以下、歴文課という）との間で協議を重ね、平成 30 年 7 月、事業予定地全体の約 7,727m² を対象に現地調査 2 カ年、整理・報告書作成 2 カ年の 4 カ年事業となることで合意した。その後、東部下水道事務所（市長）から法第 94 条第 1 項の通知（県教育長あて、平成 30 年 10 月 9 日付け新東下水第 909 号）が提出され、県教育長から市長あてに本発掘調査の勧告が行われた（平成 30 年 11 月 12 日付け教文第 1117 号）。これを受け、東部下水道事務所（市長）から本発掘調査依頼書（市教育長あて、平成 30 年 12 月 3 日付け新東下水第 1156 号）が提出された。歴文課（市教育長）は受諾し、本発掘調査の着手報告を提出し（県教育長あて、令和元（2019）年 5 月 27 日付け新歴 F 第 26 号）、同年 6 月 3 日から事業地の東側半分を対象に調査を開始した（第 2 次調査）。翌年、事業地の西側と排水管敷設部分、さらに前年度調査の遺構密集部分について東部下水道事務所から本発掘調査依頼書（歴文課長あて、令和 2 年 2 月 3 日付け新東下水第 1560 号）が提出された。歴文課（市教育長）は着手報告を提出し（県教育長あて、令和 2 年 4 月 1 日付け新歴 F 第 19 号）、同日から準備工事を開始した（第 3 次調査）。なお、法 94 条通知に係る幅 1m 以下の狭小工事については、職員が立会い必要な措置を執った。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境（第1図、図版1・2）

新潟市が所在する越後平野は、信濃川と阿賀野川の運ぶ土砂により形成された沖積平野であり、西縁には角田・勢彦山地、東縁には笛神丘陵と村杉低地帯を介して、五頭山地が分布し、南には新津丘陵が控える。海岸部には、村上から角田山麓に至るまで海岸線に沿うように南北幅約70kmにわたって10列の砂丘が存在し、その内陸側には低地が広がっている。これらは新潟砂丘と呼ばれ、分布形態により新砂丘I（約7600～4800年前）、新砂丘II（約4600～1400年前）及び新砂丘III（約1800～900年前）に大別され、さらに各砂丘の細別は、それぞれ内陸側から算用数字の枝番号が付されている（鶴井・田中・安井2015）。

曾我墓所遺跡のある新潟市江南区は、西を信濃川、東を阿賀野川、南を小阿賀野川に囲まれた地域であり、江戸時代には横越島、近年では亀田郷と呼ばれた。亀田郷の地形は、北東から南西にかけて走る数列の砂丘、後背湿地、自然堤防、潟湖から成り立っており、古くからの集落は砂丘列と微高地に立地している。また亀田郷は、かつては信濃川、阿賀野川、小阿賀野川の氾濫による水害常習地帯であり、低湿地帯の排水は困難を極めた。河川の氾濫によってもたらされた土砂により形成された自然堤防は、現河道周辺以外にも広く認められ（第1図）、河川が頻繁に流路を変動していた事がうかがえる。このような地理的条件から、近世以降には新田開発など水害の回避を図るために放水路の開削が進められてきた。

今回調査を行った曾我墓所遺跡は、亀田郷の南東部（旧横越町）に位置し、阿賀野川左岸の自然堤防上に存在している。周辺の現況は主に平坦な水田地帯であるが、明治中頃の土地更正図などによれば、明治から戦前における多くが畑地であった（図版2）。遺跡の標高は3.8m～4.5mを測り、洪水層が厚く堆積している。このことから、度々阿賀野川の氾濫による影響を受けていることが推測できる。

第2節 周辺の遺跡（第2図、第1表）

縄文時代 亀田砂丘周辺では、縄文時代前期初頭から人類の活動の痕跡が認められる。前期初頭の布目式土器が出土している砂崩遺跡（61）[新潟市2007]は中期初頭から前葉の拠点的集落であり、前期前葉から後期後葉の笛山前遺跡（72）[廣野2007]からは新谷式土器が出土している。いずれも、角田山麓周辺地域との交流がうかがえる。また、前期後葉から中期の山ノ家遺跡（64）[川上1993]や、近年本発掘調査が行われ中期から晚期の土器・石器とともに遮光器系土偶が出土した砂崩前郷遺跡（60）[達藤ほか2020]など、総じて亀田砂丘前に集中するが、晚期後半の小杉上田遺跡（81）は低湿地に営まれている。ほかには、埋没砂丘上に立地する道正遺跡（8）では埋設土器・土坑・遺物廃棄場が検出され、多数の晚期中葉の土器や石器などとともに県内最大級のヒスイ製の勾玉が出土した。さらに、隣接する岡崎遺跡（7）では後・晚期の土坑2基が確認されている[高橋2021]。

弥生時代 弥生時代は、縄文時代晩期から弥生時代中期の土器や石器などが多く出土した養海山遺跡（23）[新潟市2007]、前期の星形付土版や管玉などの玉類、水田跡は見つからなかったものの前期～中期前葉の炭化米が出土した西郷遺跡（10）[土橋ほか2009]がある。特に、西郷遺跡は地表下3mに遺構確認面があり、このように沖積地下に埋没している砂丘上の遺跡が近年相次いで発見されている。これらの遺跡は、砂丘に営まれた遺跡が地盤沈下によって埋没したものと考えられる。中期後半の遺跡が最も多く、竪穴住居が検出された駒込小丸山遺



第1図 鶴ヶ墓所遺跡周辺の地形分類図



第2図 曾我墓所遺跡周辺の遺跡分布図

第1表 曾我墓所遺跡周辺の遺跡

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	鶴ノ子	平	31	鬼田城山A	繩、弥・古代	61	砂堀	繩・古代	91	下郷西	中世
2	下郷	古墳	32	高島	古代	62	砂山	繩・室・近世	92	前川郷南	古墳・室・中世
3	鬼田の「鶴野村村」	平	33	高島前	繩・古代・近世	63	油屋	繩・弥・古代	93	曾我郷東	古墳・室・中世
4	鬼田	平	34	鬼田八代村	古墳・室・平	64	油山家	弥・古代	94	下郷中	平
5	早見前	平・縄	35	岡田	平	65	油屋敷	古代	95	下郷南	平・縄・室・近世
6	西御郷	繩・古代	36	牛島	平	66	油屋小山	繩・弥・古代	96	越前御所跡	室
7	河内	繩・弥・古墳・平	37	伊藤	平	67	油屋御所	古代	97	上郷D	平
8	通川	繩・弥・古墳・平	38	通川向山	繩	68	油山	繩・弥・平	98	下郷北	平
9	通川南	繩	39	通川	繩	69	油山	平	99	通川御所跡	室・中世
10	西御南	繩・弥・古代	40	舟山	古代	70	舟山	平	100	大郷C	平・室・近世
11	大通	古代	41	舟山前	繩・古代	71	舟山曲	平	101	大郷A	古墳・平
12	舟山東	平・縄	42	舟山七	古代	72	舟山前	繩・弥・古墳・古代	102	大郷B	平
13	舟山	平・縄	43	舟山	平	73	舟山石伝	古代	103	内通寺石伝	室
14	船山	古代	44	人森路	平	74	中山	繩・古墳・古代	104	天ノ松	平
15	船山前	古代・近世	45	清水丘丘	平	75	船山	繩・古墳・平・縄	105	新七馬	古墳・古代
16	千代山北	古代・中世	46	丸山	平	76	船町B	不明	106	内櫛	古墳・平
17	千代山	古代・中世・縄	47	毛呂各盆地	平	77	船町C	不明	107	中谷内	古墳・平・中世
18	日向	古代・中世	48	毛呂各	古代	78	船町寺	平	108	神ノ辻	古墳・古代・中世
19	毛呂山	古代・中世	49	鬼塚	繩・弥・古墳	79	小村中岡	古墳	109	内野	平・中世
20	木ノ木	古代・中世	50	若り山B	平	80	日置	平	110	新久免の森	室・江
21	鬼木前	繩・平・中世	51	丸山	繩・古墳・平・中世・近世	81	小村上田	繩・古代	111	星屋敷の森	古墳・平・縄・室・近世
22	七王山	平・中世	52	若り山A	平	82	山のハサハ	平	112	吉根	平
23	西御山	繩・弥・古墳・平	53	高島東	平	83	御前A	平・室	113	三ノ里	平
24	西御門裏	繩・弥・古墳・古代	54	山前	中世	84	御前B	平	114	通川御所下北	平
25	通川	平・中世	55	通川御所山	平	85	御前C	古代	115	通川御所	繩・平
26	通川前	平・中世	56	通川前	平	86	御前D	平	116	通川御所跡	繩・平
27	通川前下	平	57	通川前	古代	87	通川林	史	117	通川A	平
28	通川前下	平	58	通川上ノ山	古代	88	木戸	平・近世	118	通川津 代津屋	近世
29	通川山B	古・室・江	59	通川上ノ山	繩・古代・近世	89	通川	古代	119	通川御所跡	近世
30	舟山	繩・弥・古代	60	通川前	繩・平・江	90	通川西	古代			

跡（51）〔家田 1987〕をはじめ、前郷遺跡（63）、山ノ家遺跡（64）〔川上 1993〕、上の山遺跡（68）などがある。いずれの遺跡でも北陸系土器を主体として東北南部系・信州系など外來系の土器が一定量混在するという越後平野北部に典型的な様相を示している〔酒井 2000〕。また、前郷遺跡（63）からは管玉の未成品や玉作りの際に使用する工具である擦切具が、山ノ家遺跡（64）では擦切具が出土している。緑色凝灰岩の剥片が出土した駒込小丸山遺跡（51）なども含め近接しており、玉作り集落を構成していた可能性が指摘されている〔酒井 2000〕。

古墳時代 古墳時代は、砂丘以外にも自然堤防上に展開する遺跡が現れるようになる。前期では砂丘の沿岸砂洲上の微高地に営まれ総量約 4kg に及ぶ炭化米が出土した東開遺跡（49）〔朝岡・諫山 2003〕、阿賀野川左岸の自然堤防上には遺構の検出はないが、土師器の高杯や甕が出土した上郷 A 遺跡（101）〔上野・春日 1997〕や、砂丘上で土坑が検出され土師器甕などが出土した武左衛門裏遺跡（24）〔土橋ほか 2007〕がある。また笠山前遺跡（72）〔旗野 1997〕は中期の竪穴建物や土坑、後期の掘立柱建物が検出され、一定量の祭祀遺物が出土したことから拠点的性格を持つ集落と考えられている。近年発掘調査された埋没砂丘に位置する道正遺跡（8）からは古墳時代前期の特大型竪穴建物が検出された。また、古墳時代前期に限定される多数の土器とともに、2 艘の準構造船が描かれた線刻土器などが出土した。

古代（奈良・平安時代） 古代は土木技術が発達して低湿地への進出が確認されるようになり、9 世紀中頃からは砂丘上だけでなく自然堤防上にも爆発的に遺跡数が増加する。砂丘上の遺跡では、7 世紀末から 8 世紀初頭に荒木前遺跡（21）〔渡辺 1991、川上 1996b〕が現れ、8 世紀中頃には銅製帶金具の出土から官人層の関与が想定される若荷谷遺跡（48）〔新潟市教育委員会 1987〕のほか、8 世紀後半には山ノ家遺跡（64）〔川上 1993〕が成立している。また、新津丘陵窓跡群も 8 世紀半ばには操業しており、本遺跡でも多くの新津丘陵須恵器が出土している。また、9 世紀に入ると鍛冶関連遺構を作った山遺跡（19）が成立し、同じく自然堤防上には手代山北遺跡（16）〔朝岡・丹下ほか 2009〕、畝状遺構が検出された牛道遺跡（36）〔立木（土橋）ほか 1999〕が分布する。9 世紀後半になると、亀田郷にもさらに多くの遺跡が営まれるようになり、砂丘上には富裕層の居住域と想定される小丸山遺跡（51）〔小池・本間 1995〕、砂丘間低地や後背湿地に水田跡と畝状遺構が検出された上郷 A 遺跡（101）〔赤羽・高橋 1994、上野・春日 1997〕などが展開する。さらに、本遺跡の北約 5 km にある大淵遺跡では、出土した綠釉陶器とともに 10 世紀後半の土師器碗を大量に廃棄した痕跡があり祭祀的な意味をもつものと考えられている〔旗野・朝岡 1999〕。古代の遺跡は他にも多数あるが、多くは 10 世紀中頃に途絶えるようである。

中世 この地域で人々の活動が再び始まるのは 13 世紀以降である。砂丘上では掘立柱建物 10 棟・井戸 11 基・溝などが検出された荒木前遺跡（21）〔渡辺 1991、川上 1996b〕や、運河的な機能を持つと推定される溝が検出された中の山遺跡（19）〔川上 1982〕・貝塚遺跡（18）は隣接して立地しており遺跡の広がりから同一遺跡であると考えられている〔新潟市 2007〕。付近の伝承を記録した『温故之栄』〔温故談話会 1892〕には「金津荘城所手代山に古城あり、孤主せし小山の頂上凡二千坪平坦にて井戸空堀の痕跡に見ゆ、元亨年中（1321～1323）より上杉家の一将荒木五郎左衛門為久の居城とす。」とあり荒木氏の居館が存在していた可能性が考えられている〔川上 1996b〕。また掘立柱建物や井戸・溝などが検出され、珠洲焼や越前焼などの中世陶器が出土した三王山遺跡（22）〔酒井 1980、朝岡ほか 2010〕は、砂丘上に位置し、古代から中世にわたって営まれた遺跡と考えられる。

旧横越村内に点在する寺院のうち小杉の妙傳寺（文明 16（1484）年創建）、法輪寺（天正 17（1589）年創建）、木津の圓通寺（天文 2（1533）年改宗）、横越の宋賢寺（文明 13（1481）年創建）、沢海の大榮寺（天文 4（1535）年頃前身の寺が創建）などが、室町から安土桃山時代にかけての創建伝承を持っていることなどから、この頃には自然堤防上に集落が営まれていた様子が推察できる〔帆苅 2003〕。

なお、本遺跡の東側に隣接している宋賢寺は、文明 13（1481）年真言宗寺院として創建された。その後、慶長 6（1601）年に草木觀音寺 11 世笑山全悅によって曹洞宗の寺院として再興された〔新潟県寺院名鑑企画編集委員会 1983〕。明治中頃の土地更正図には寺域の西側には埋葬地が広がっており、今回の発掘調査の結果、多数の墓坑が検出されたことから、この埋葬地は本調査区の辺りまで広範囲に広がっていた可能性が考えられる。また、

宋賢寺の北側の下郷經塚（87）からは現存しないが金銅製の経筒が出土したと伝わり、周辺の中世の活発な信仰活動がうかがわれる（酒井 2000）。また、周辺には遺構は何も残っていないが、館ノ越という小字名を持つ横越館跡（96）からは16世紀前葉の瀬戸美濃焼と茶臼が出土している。蒲原津を中心とした阿賀野川水上交通の中継地点として機能していた可能性が推測されている（酒井 2000）。さらに、本遺跡の南東300mの自然堤防上に位置する下郷南遺跡（95）からはロクロ成形底部へラ切りの土師器皿が土坑から200点以上一括出土しており（相澤 2013）、阿賀北地域とのつながりが中世にも続いていることを示している。

近世 近世の集落跡は現在の住宅地と重なることが多く、発掘調査も少ないため実態は不明な点が多い。現在の集落と重なる江内遺跡では17世紀前半からの集落の一部が確認されている（春日ほか 1996）。また、細池寺道上遺跡では屋敷地や道路状遺構、墓などの遺構が確認されており、肥前系の陶磁器を中心に17世紀後半から19世紀の遺物が出土している（立木・奈良ほか 2018）。なお、大正時代中頃から昭和初期にかけての阿賀野川改修工事で破壊され、現在ではその痕跡をうかがうことはできないが、沢海城跡（119）は近世後期の絵図までその存在が確認できる。また、大榮寺の沢海藩二代藩主溝口政勝墓（118）は、全国的にも調査例の少ない近世前期の大名墓の発掘調査例である。調査では、武士階級の埋葬施設の構造と、ヒノキ製の木棺内からは8個体の割られた土師質のかわらけと、瀬戸美濃鉄釉四耳壺（藏骨器）が確認されている（福田 1999、酒井 2000）。

第3節 歴史的環境

律令以前、日本海側の地域は広く越国と称されていた。大化三（647）年に渟足柵、翌年に磐舟柵が相次いで設置され、漸次北方の整備が図られていたと考えられる。越後国は、当初これら二柵の位置する阿賀野川以北の沼垂郡・岩船郡より北を指していたようである。越後国の領域の確定は、大宝二（702）年に越中国4郡（頸城・古志・魚沼・蒲原）を割いて越後国に編入（『続日本紀』）し、和銅五（712）年にそれまで越後国に属していた出羽郡を分割して出羽国を建国したことによる。その後、天平十五（743）年に佐渡国を越後国に合併し、ほぼ現在の新潟県と同一の領域となった。しかし、天平勝宝四（752）年には、渤海朝貢使節の来島により、朝廷による直接把握を目的として佐渡国が復置されている。天平宝字五（761）年に造営が始まった佐渡國分寺には、小泊窯で製作された瓦が大量に運ばれており、古代越後国に影響な須恵器の供給をもたらす小泊窯操業の契機としてとらえられよう。なお、新津丘陵における須恵器生産は、7世紀後半に始まり8世紀前半から9世紀中頃が主な操業時期である。これらは越後国内の他地域の須恵器生産動向とほぼ一致しており、「一郡一窯制」であった。

曾我墓所遺跡のある亀田郷は、旧阿賀野川（現在の通船川）以西を蒲原郡とする一般的な説（小林編 1996）に従えば蒲原郡に属していたことになるが、遺跡の多い亀田砂丘周辺が沼垂郡に属していた可能性も指摘されている（坂井ほか 1989、上野・春日 1997）。

古代の蒲原郡には宝龟十一（780）年の『西大寺資財流記帳』によって、鵜橋莊・槐田莊という莊園が施入されていた事が知られており、鵜橋莊は五泉市橋田、槐田莊は三条市周辺とされている。これらの西大寺領莊園は、神護景雲三（769）年の『越後国水田并耕田地帳』などから、8世紀中葉以降には確実に成立していたと考えられる。西大寺領莊園は早くに衰退したと思われるが、その理由として、東大寺領莊園に比べ進出が遅かったため、惡条件地に寺田を設定したためと考察されている（木村 1993）。

平安時代末から中世にかけての越後は、本格的な莊園が多く成立する一方、律令制下の地方官府である国衙が領有した土地（国衙領）も並存していた。新潟市域では、蒲原津があったと思われる信濃川下流域周辺が国衙領と考えられ。特に旧新津市を中心とした国衙領を金津保と呼んだ。金津保は11世紀後半から12世紀後半頃に成立したと考えられ、この地域の在地領主として平賀氏が知られる。平賀氏はのちに金津姓を名乗るが、その傍系には木津氏があり、『尊卑分脈』には木津氏が金津保の木津東方を伝領したことが記されている。また『遊行上人縁起』には時宗二世他阿真教を木津入道がもてなした記述がある。石井家文書「木津邑古老伝在来帳」に

よると、応永（1394～1427年）頃、阿賀野川の分流の一つが木津、沢海を通り、川根谷内から袋津・城山方面に流れ、栗ノ木川経由で蒲原津・沼垂津へ往来してきたという。また、阿賀野川の渡し場のコクラノワタリが横越村内にあり、永禄7（1564）に京都醍醐寺の僧侶が阿賀野川を下って、会津から新潟湊へ向かうにあたって、横越のコ克拉ノワタリを経由していることが『北国下り遣足帳』に記されており、中世においても交通の要所であったことがわかる〔大家2003〕。これらから、木津氏は交通要衝の有力な在地領主であり、横越地域は阿賀野川・小阿賀野川の水上交通の拠点の一つとして重要な役割を担っていたことがうかがえる。

16世紀になると、守護上杉氏と守護代長尾氏の対立が激化し、越後国内での内乱が勃発するようになるが、この時期の金津保の実態については不明な点が多い。天文6（1578）年に上杉謙信が急逝すると、養子である景勝と景虎の間で後継地位をめぐる「御館の乱」が起き国内領主層の分裂をもたらした。この間における亀田郷に関する直接的な資料はないが、天正年間に謙信方・景勝方として戦陣に参加した武将として亀田小三郎岳信・亀田小三郎長乗の名が見られるが、史料上では彼らの越後国での活躍は皆無である。

景勝の移封に伴い、慶長3（1598）年に加賀国大聖寺から新発田に溝口秀勝が入封し、亀田郷は新発田領となつた。関ヶ原の戦いの際に会津国境付近より起きた「越後一揆」が画期となり、新発田藩は徳川方の支配大名としての地位を確立し、兵農分離が推進された。溝口秀勝の死去後、秀勝の次男に1万石を分知し、沢海藩が創設された〔後藤2003〕。新発田藩は、新田開発を積極的に行ない、多くの新田村が開村したことが寛永16（1639）年に作成された「横越島絵図」〔横越町2003〕から読み取れる。

新発田藩では領内を14の組に分けて支配した。横越村は近世初頭に成立した村で、寛政元年（1789）頃の石高は『寛政元年分年貢納高』〔後藤2003〕によれば、1710石7斗6升2合（横越、城山、所島、袋津、藤山、駒込の6か村）内貢租960石4斗2升6合6勺である。新発田領内で最大の石高の蒲原横越組の治所が置かれ、大庄屋・名主・組頭（宝暦9（1759）年以降は同前組頭）という村方三役が藩から任命されて村内の統治にあたつた。大庄屋は当初、坂井氏や小沢氏、元禄7（1694）年からは曾我四兵衛が務めていた。本遺跡の一隅に葬られている曾我順次は、天保8（1837）年大庄屋の小林喜七の次男として生まれ、『横越村誌』を著した小林存〔明治10（1877）年～昭和36（1961）年〕の叔父にあたり人物で、後に曾我家に養子として迎えられ曾我家4代目を受け継いだ〔小林1952〕。

明治22（1889）年の町村制施行に伴い、横越、小杉、沢海、二本木、木津の五か村が生まれた。明治34（1901）年には沢海、木津、二本木、小杉の四か村が旧横越村に合併し、横越村が成立した。平成7（1995）年以降は人口1万人を超え、基準審査による認可を受け、平成8（1996）年に「横越町」がスタートした。平成17（2005）年には横越町を含む13市町村が合併し、新しい新潟市となった。その後、平成19（2007）年の政令指定都市への移行に伴い8つの行政区を設置し、本遺跡は江南区に位置することになった。

第III章 調査の概要

第1節 確認調査(第3・4図、図版2、写真図版1)

A 調査方法と経過

平成29年度に雨水調整池施設工事に伴う確認調査を行った(第3・4図)。25か所のトレンチを設定し、バッカホーで表土から徐々に掘削した後、人力により精査を行い、遺構・遺物の有無と土層堆積状況を記録した。トレンチの大きさは6~16m²で合計344m²(建設計画面積に対して約4.4%)の調査を行った。

現況は水田・排水路・歩道である。一帯の水田は、昭和24年頃からの区画整理によって造成されたもので、それ以前は昭和23年の米軍写真(写真図版1)や明治24年発行の土地更正図によると、自然堤防の名残である微高地が点在し、広範囲が畑として利用されていた(図版2)。調査の結果、全域で古代の遺構・遺物が確認された。調査区は阿賀野川に由来する度重なる洪水堆積土で厚く覆われ、表土からも古代の土器が出土し、IV・V層では平面プランが明瞭でない大規模な落込みや炭化物・焼土が集中する遺構が複数検出された。また、9・16トレンチではII層で遺構が検出され、古代以降の遺構確認面もある可能性が指摘された。古代の遺物包含層(III・IV層)までは地表面(GL)から0.3~1.2mであり、工事施工区全域について記録保存のための本発掘調査を実施することになった。第2次調査は調査区東側半分、第3次調査は西側半分とその南側の路線部分の2か年調査を計画した。なお、本発掘調査との層位の違いは第IV章第2節で記している。

B 調査体制

調査主体	新潟市教育委員会(教育長 前田秀子)
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 (課長:藤井希伊子 課長補佐:廣野耕造 埋蔵文化財担当係長:朝間政康)
調査担当	潮田憲幸(新潟市歴史文化課主査)

第2節 本発掘調査

A 調査方法

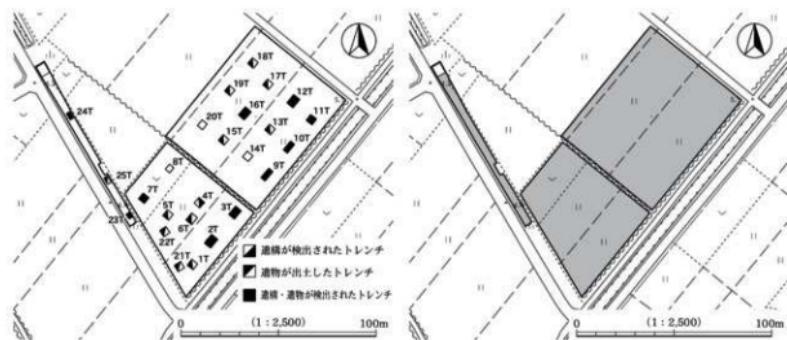
1) グリッドの設定(図版4)

グリッドは令和元年度の第2次調査の際に遺跡範囲が入るように調査地区の約500m北西を調査基準点として1A1杭を設定した。1A1杭は、X座標:206500.000、Y座標:57200.000(測地成果2011、平面直角座標系第VII系)、緯度:北緯37°51'32"9335、経度:東経:139°09'00"2165である。また、この基準点から10m方眼のグリッドを組んだ。大グリッドの名称は、南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットとして表したが、東西方向はZの次をAA・AB…と表記した。さらに、大グリッドの中を2m方眼に区切って25分割する小グリッドを設定し、「24AL16」のように呼称した。基準杭の打設は測量業者に委託した。発掘調査区内2点北西隅の座標は次のとおりである。

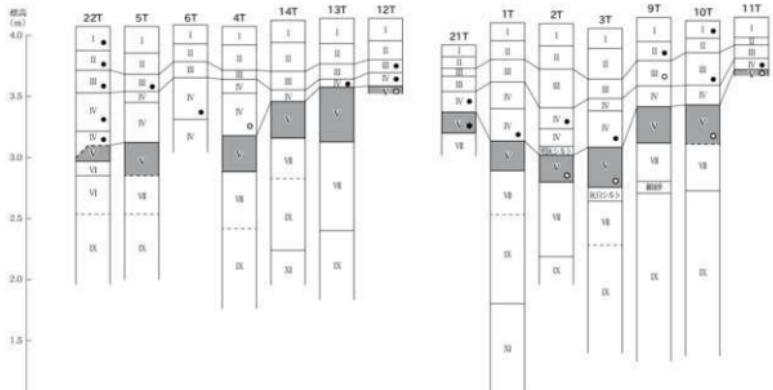
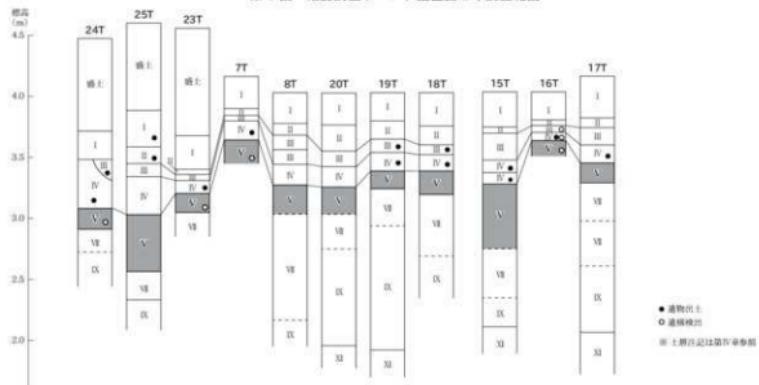
18AN(X座標:206330.000、Y座標:57590.000、緯度:37°51'27"3311、経度:139°09'16"1228)

21AF(X座標:206300.000、Y座標:57510.000、緯度:37°51'26"3762、経度:139°09'12"8415)

座標北は真北に対して0度24分05秒東偏し、磁北は真北に対して8度22分西偏する。



第3図 確認調査トレーンチ配置図と本調査範囲



第4図 確認調査土層柱状図

2) 調査方法

① 表土剥ぎ：確認調査の結果から古代の遺構確認面がV層であることは判明していたが、I・II層をパックホウにより除去しつつ古代以降の遺構確認面であるIII層上面でまず遺構検出作業を行った。遺構が検出された場合は島状に残し、遺物の出土に注意しながら数cmの厚さで遺物包含層（IV層）上面まで掘り下げた。出土遺物が少ないとIV層の途中あるいはV層上面まで掘削する場合もあり、平面的に層を捉えることが非常に難しかった。調査で生じた堆土は調査後の埋戻しに使われることになっていたため、第2・3次調査とも調査区内に仮置きした。また、湛水防止のため、表土剥ぎと並行して調査区の周囲及び調査区内に土側溝を掘り、2時のポンプで24時間強制排水を行った。土側溝は、幅20cm、深さ20cm程度を人力で掘削した。土側溝による遺構の破壊が考えられたが、湛水により調査が不能になることを防ぐ処置である。

② 包含層掘削・遺構検出・発掘：重機で掘削後、人力で行った。包含層は連続した2層（III・IV層）であるが、人力ではIV層を掘削している。ただ、場所によってはIV層が分層されるなど平面的には非常に区別付にくい土質であった。特に、遺構・遺物が密集する第2次調査区北東側では遺構のプランも不明瞭であり、3～5m間隔で調査区やグリッドに合わせてトレーニングを入れ、断面観察をしながら遺物出土にも注意して作業を進めた。第3次調査では、遺構確認面の精査で検出された遺構プランは、1/100の略図に記録し遺構番号を付けた。遺構の発掘は、半蔵して覆土の観察・記録をしてから完掘を行った。堆土はベルトコンベアを用いて各調査区外に排出した。

③ 実測・写真：調査に係る実測・測量は全て測量業者に委託した。断面実測は手取りと写真測量を併用し、平面実測はトータルステーションを用いて作業を行った。遺構断面・平面の写真撮影は、35mm版のフィルムカメラとデジタル一眼レフカメラを基本に、内容によって6×7版のフィルムカメラを用いて、白黒フィルム・カラーポジフィルムを適宜選択しながら行った。遺構の全体（俯瞰）写真は、ラジコンヘリコプター及び無人航空機（ドローン）により撮影した。

④ 遺物取り上げ：包含層出土遺物は小グリッド単位で取り上げたが、遺物が集中している場合は範囲不明瞭な遺構である可能性を考慮してトータルステーションによる地点測量で取り上げた。遺構出土遺物はトータルステーションと小グリッド単位の一括取り上げを併用した。また、重要遺物についてはトータルステーションを用いた。

⑤ 自然科学分析：古環境復元や栽培植物の解明のために植物珪酸体・花粉・樹種・種実の各分析を行い、遺構の年代推定の参考とするために放射性炭素年代測定（ウイグルマッチング法による測定をしたものもある）を実施した。なお、分析は専門業者に委託した。

B 調査経過

1) 第2次調査の経過

令和元年6月3日から諸準備を開始し、27日から調査区南側より表土掘削を開始した。III層上面で炭化物・焼土が集中する近世遺構の検出範囲を島状に残しながらIV層上面まで掘削を進めた。7月9日からは表土掘削と並行してこれらの遺構掘削作業を開始し、調査後には再度重機でIII層の掘削を行った。調査区北東側では、IV層上面あるいはIV層中に炭化物や遺物、焼土などが集中して検出された。これらは複雑に切り合って、遺構埋土は包含層（IV層）との判別が難しかったため平面的な遺構プランを明確にできなかった。そこで、9月9日から調査区に合わせて約3mごとに幅30cm程度のトレーニングをV層上面まで適宜掘削して、断面で遺構の切り合を確認しながら調査を進めた。その結果、豊富な遺構や鍛冶関連遺構が多数検出され、調査区全体の完掘が難しいことが判明し、北東側約900m²を次年度分と合わせて調査することに変更した。11月23日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影と高所作業車による撮影を行った。その後、土層確認の深掘りと自然科学分析のための土壤採取や測量の最終確認をして12月16日現地調査を終了、埋戻しを開始した。発掘調査の最終面積は3,726.2m²である。

発掘調査中の8月1・7日には動く市政教室（市の事業）が行われ、それぞれ29名と21名の参加があり調査中の現場や出土品の見学と土器洗いの体験をした。また、9月5日にはインターンシップの大学生3名の職場体

歴史習を受け入れ、発掘現場や出土品の見学と土器洗いなどの体験をした。さらに、10月1・2日には亀田西中学校2年生4名の職場体験が行われ、現地で発掘体験をした。19日には現地説明会を開催し96名の参加があった。

2) 第3次調査の経過

令和2年4月1日から諸準備を開始した。前年度末から世界的に猛威をふるい始めた新型コロナウィルスの感染拡大防止対策で、発掘調査道具を共有しないため人数分準備し、プレハブ内の仕切り設置、全作業員へ県外往来制限やマスクの着用、毎日の検温や手指消毒の徹底などについて研修を行った。感染対策が浸透した5月11日から調査区北側より表土掘削を開始した。並行して土側溝掘削、法面仕上げを行い、翌日からは測量業者による杭打ちが行われた。遺構・遺物ともにほとんど検出されなかつたためIV層上面まで数cm厚で下げていったが、部分的にV層上面まで掘削してしまう場所もあった。土層確認のため17グリッド上を東西に1m幅でベルト状に残す予定で表土掘削を進めていたところ、15日にベルト北側で鳥形製品が出土した(SK413)。昨年度からの継続調査か所も遺構精査・掘削を進めていたが、丸舟舟を井戸側に転用した井戸(SE278)が新たに検出されるなど調査は捲らなかった。表土掘削が全体の1/3ほど終了したところで排土高が眼界となった。一時的に排土は増えるが、増加の割合が少ないため表土掘削を一時中断して南側の路線部分の調査を優先して進めることにした。25日から西側より表土掘削を開始したが、大部分は隣接する道路敷設時の地盤改良によって包含層まで削られていた。改良土直下の遺構確認面は現地表面から-1.3mほど非常に深かった。近世以降のハサ木の痕跡が北西から南東方向に検出されたが、古代の遺構・遺物は調査区東端以外では希薄であった。全ての調査を終了した6月16日に無人航空機(ドローン)による空中撮影を行い、19日には埋戻しも終了した。中断していた表土掘削は路線に隣接する南側から再開することにし、準備ができるまで調査区北側で遺構精査や土側溝を掘り下げて土層確認を行った。23日、土側溝中から鳥形製品(SK418)、さらに県内初の須恵器環状瓶が出土した。遺跡の性格を決定づけるような遺物に驚きつつ、25日には南側から表土掘削を始めた。並行して調査区北側で続けていた遺構精査中に須恵器大型甕(239)が潰れた状態で検出され(SK488)。須恵器環状瓶の周辺からは壺・高杯・鳥形製品の頭部などが次々と出土したが、埋土が非常に分かりづらく遺構プランも不明瞭であった(SK419)。各遺構内に複数のピットや周溝が検出されるのではないかという意見があり、8月12日に県内有識者による遺構検討会を現地で開催した(参加者:坂井秀弥氏(奈良大学名誉教授)、浜田敦氏・山崎忠良氏(県文化行政課)、春日真実氏・滝沢規朗氏(県埋蔵文化財調査事業団)、伊藤秀和氏(加茂市教育委員会)、古澤妥史氏(阿賀野市教育委員会)、市歴文課、市文化財センター)。その結果、SK488としていた須恵器大型甕の廃棄遺構は大きな土坑と分かり(SK488に変更)、他の遺構もサブレンチの断面で確実にV層を確認することで同様に理解できるという方向性が示された。同時に、本遺跡における遺構検出の難しさも共通理解となった。また、出土位置が重要であるためSK418・419の遺物取り上げは最後に一括して行うこととなった。昨年度からの継続調査区の調査が終了した9月10日に無人航空機(ドローン)による空中撮影を行い、SK418・419の遺物出土状況も記録した。15日にはSK419の遺物を取り上げ、その下から出土した鉄製品が陽杖頭であることが分かった。次々と類例の少ない遺物とともに、須恵器環状瓶は3本の鳥足を模した脚が付く全国初の出土品という記事が新聞等で報道されたため、10月10日の現地説明会には433名の参加があった。全ての調査が終了した11月13日に、ラジコンヘリコプターによる空中写真を撮影した。その後、土層確認の深掘りと自然科学分析のための土壌採取や測量の最終確認をして11月27日に現地調査を終了し、すぐに埋戻しを開始した。発掘調査の最終面積は4,345.7m²である。

C 調査体制

【令和元年度: 第2次調査】

調査主体	新潟市教育委員会(教育長 前田秀子)
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 (課長: 小沢昌己 漢字補佐: 広野耕造 埋蔵文化財担当主幹: 朝岡政康) 新潟市文化財センター(所長: 渡邊朋和 主幹: 天野泰伸 遠藤恭雄 係長: 立木宏明)

調査担当	澤野慶子（新潟市文化財センター非常勤職員）
調査員	遠藤恭雄（新潟市文化財センター主幹） 脇本博康・高柳俊輔・阿部 司（11月～）（株式会社吉田建設）

【令和2年度：第3次調査】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 (課長：遠藤和典 漢長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当主幹：朝岡政康) 新潟市文化財センター（所長：渡邊朋和 主幹：天野泰伸 遠藤恭雄 係長：立木宏明）
調査担当	龍田優子（新潟市文化財センター主査）
調査員	澤野慶子（～7月）・前山精明（8～11月）（新潟市文化財センター会計年度任用職員） 脇本博康・高柳俊輔・阿部 司（～10月）・中川晃子（9月～）（株式会社吉田建設）

第3節 整理作業

A 作業方法

1) 遺物

第2次調査でコンテナ（内寸 54.5×33.6×10.0cm）187箱、第3次調査で246箱と水槽（内寸 1.6×1.0×0.6m）2槽分の遺物が出土している。土器を中心であり、他に土製品・石器・石製品・金属製品・鍛冶関連遺物・木製品・自然遺物などが出土している。

遺物の整理作業は、①洗浄→②注記→③グリッド別・種別の重量計測→④接合→⑤報告書掲載遺物の抽出→⑥実測図・観察表作成→⑦写真撮影の順を基本とし作業を行った。進捗状況によって、作業の順番が逆になったり、並行して行ったりしたものもある。

2) 遺構

現場の測量図はすべて測量業者作成のものであり、トータルステーションで測量した遺構平面図は1/20で出力したものを校正した。また、手取りの断面図についてはデジタル化し出力したものを校正した。さらに、平面図・断面図の整合については、それぞれ確認した図面を用いて作業を行い、原図と校了図データを残した。現場で撮影した記録写真については、フィルム写真はフィルムの現像・ペタ焼き（ネガフィルムのみ）を行いアルバムに収めた。デジタル写真は、撮影日ごとに整理しハードディスクに保存した。

B 作業経過

出土遺物の水洗・注記は発掘調査と並行して行い、現場でほぼ終了した。その後の作業については、第2次調査は株式会社吉田建設巻整理室、第3次調査は新潟市文化財センターと株式会社吉田建設巻整理室に場所を移して行ったが、現地説明会のために現場で接合までの作業を行ったものもある。遺構実測図等の測量図は、デジタルデータの出力紙による平面図・断面図の整合の後に掲載遺構の抽出を行い、図面図版・写真図版のレイアウトを行った。遺物実測図のトレース・各図版の版下作成はデジタル図化編集業者に委託した。令和3・4年度に全体編集等を行い、令和5年度に報告書を刊行した。

C 作業体制

【令和元年度】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 (課長：小沢昌己 漢長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当主幹：朝岡政康) 新潟市文化財センター（所長：渡邊朋和 主幹：天野泰伸 遠藤恭雄 係長：立木宏明）

調査担当	澤野康子（新潟市文化財センター非常勤嘱託）
調査員	遠藤恭雄（新潟市文化財センター主幹）　脇本博康、高柳俊輔・阿部司（株式会社吉田建設）

【令和2年度】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長：遠藤和典　課長補佐：廣野耕造　埋蔵文化財担当主幹：朝岡政康） 新潟市文化財センター（所長：渡邊朋和　主幹：吉沢範久　遠藤恭雄　係長：立木宏明）
調査担当	龍田優子（新潟市文化財センター主査）
調査員	脇本博康、高柳俊輔、中川晃子（株式会社吉田建設）

【令和3年度】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長：遠藤和典　課長補佐：廣野耕造　埋蔵文化財担当主幹：朝岡政康） 新潟市文化財センター（所長：佐藤敏宏　主幹：遠藤恭雄　係長：立木宏明（～5月） 飯塚和美）
調査担当	龍田優子（新潟市文化財センター主査）
調査員	西山美那（7月～）（新潟市文化財センター主事）、中川晃子、高柳俊輔（株式会社吉田建設）

【令和4年度】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長：遠藤和典　課長補佐：廣野耕造　埋蔵文化財担当主幹：朝岡政康） 新潟市文化財センター（所長：佐藤敏宏　主幹：遠藤恭雄　係長：立木宏明（～5月） 飯塚和美）
調査担当	龍田優子（新潟市文化財センター主査）
調査員	西山美那（～7月）（新潟市文化財センター主事）、中川晃子（株式会社吉田建設）

【令和5年度】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長：萬歳真紀　課長補佐：廣野耕造　埋蔵文化財担当主幹：遠藤恭雄） 新潟市文化財センター（所長：村山 明　主幹：朝岡政康　係長：飯塚和美）
調査担当	龍田優子（新潟市文化財センター主査）



現地説明会（野外）



現地説明会（室内展示）

第5図 現地説明会風景

第IV章 遺 跡

第1節 概 要

曾我墓所遺跡は阿賀野川左岸（約700mの位置）の自然堤防上に立地し、調査時における地表面の標高は約4mである。調査前の現況はほぼ水田であり、遺跡周辺での高低差はほとんど見られない。遺構検出面の平均標高は、約3.2～3.5mである。調査では古代・中世・近世の遺構と遺物が認められたが、古代の遺構・遺物が最も多い。遺構総数は725基で、内訳は竪穴建物9軒、掘立柱建物4棟、井戸4基、土坑281基、焼土遺構25基、性格不明遺構61基、石列2基、溝56条、ピット283基であった。時代ごとの遺構数は、各節で記載している。主体となる古代の遺構は北東部と南西部に多く分布しており、北東部には建物群、南西部には土坑や溝が集中している。北西側の遺構密度は希薄であるが、須恵器環状瓶や鳥形製品などが出土したSK418や、ほぼ完形の須恵器大型甕が出土したSK488などが検出されている。

第2節 層 序

基本層序はI～XI層に分別でき、I・II層が近現代の水田耕作土、III・IVa層が古代の遺物包含層、V層以下が自然堆積層である。中・近世の遺物包含層は、削平により失われている。遺構確認面は二面あり、III層が中・近世、IVb層が古代の遺構確認面である。なお、確認調査のIV層はIVa・IVb層に細分できる。IVb層はIVa層に比べ、わずかに色調が暗く、遺物を含んでいない。このIVa・IVb層の違いは特に調査区北東部で顕著だが、その他の地点では色調と土質を識別することが困難であった。さらに明確に遺構検出できるのがV層であったため、IVb層で確認した遺構以外は、遺構確認面を「IV層」に統一した。

以下に土層説明を行う。VI層以下は、遺構調査等終了後の重機による深掘りによって得た認識である。

I層：褐灰色シルト(10YR6/1)。しまりなし、粘性あり。現代の水田耕作土。

II層：灰黄褐色シルト(10YR5/2)。しまりあり、粘性ややあり。調査区のほぼ全域に分布するが、路線部分には存在しない。現代の耕作土で古代～現代の遺物が混入する。

III層：にぶい黄橙色シルト(10YR7/3)。しまりあり、粘性あり。灰黄褐色シルトブロックを多量含む。古代の遺物包含層であり、中・近世の遺構確認面でもある。

IVa層：にぶい黄橙色シルト(10YR7/4)。しまりあり、粘性あり。灰黄褐色シルトブロックを微量含む。古代の遺物包含層である。

IVb層：明黄褐色シルト(10YR6/6)。しまりあり、粘性あり。灰黄褐色シルトブロックを微量含む。古代の遺構確認面である。

V層：にぶい黄橙色シルト(10YR7/4)。しまり強い、粘性あり。V層以下が基盤層である。

VI層：褐灰色粘土質シルト(10YR6/1)。しまりあり、粘性強い。水酸化鉄を多量含む。

VIIa層：オリーブ灰色粘土質シルト(5GY5/1)。しまりあり、粘性あり。

VIIb層：オリーブ灰色粘土質シルト(5GY6/1)。しまりややあり、粘性あり。水酸化鉄を少量含む。

VIIc層：オリーブ灰色粘土質シルト(5GY5/1)。しまりややあり、粘性強い。未分解腐植物を微量含む。

VIII層：灰黄褐色粘土質シルト(10YR6/2)。しまりなし、粘性強い。

- IX層：灰色シルト（N5/）。しまりあり、粘性あり。同色のやや砂質土を含む。ラミナ堆積。
- X層：暗灰色シルト（N3/）。しまり弱い、粘性ややあり。未分解腐植物を少～中量含む。
- XI層：灰白色砂（10YR8/1）。しまりなし、粘性弱い。腐植土を含む。

第3節 遺構

遺構名は遺構の性格を示す（種別）記号と数字によって付けている。種別記号は〔文化庁文化財部記念物課 2010〕を参考に豊穴建物-SI、掘立柱建物-SB、井戸-SE、土坑-SK、焼土遺構-焼土、配石遺構-石列、性格不明遺構-SX、溝状遺構-SD、柱穴・ピット-Pとし、遺構番号は遺構の種別に関係なく検出順に付けた。掘立柱建物のように複数の遺構によって構成されるものについては、それを表す番号を各遺構番号の頭に付して表記した。本文では、主要遺構を時代ごとに豊穴建物・掘立柱建物・井戸・土坑・焼土・性格不明・溝状遺構・ピットの順で記述を行った。各遺構の属性等の情報は別表1に示したが、主軸方位の計測は豊穴建物・掘立柱建物・溝状遺構など長軸が捉えやすいものに限り、可能な範囲で計測したものである。また、遺構の検出位置や新旧関係について記載が煩雑になる場合は、大グリッドのみとするなど適宜省略している。また、別表1には遺物の有無だけ記し、その詳細は本文中に述べ別表2～7に示した。なお、遺構の形状は和泉A遺跡での分類（荒川・加藤ほか1999）を参考に、平面形が円形・楕円形・方形・長方形・不定形の5種類、断面形が箱形・台形・皿形・U字形・不定形の5種類を基本として表中に記載したが判断が難しいものも多い。

第4節 遺構各説

A 古代の遺構

古代の遺構は、豊穴建物9軒・掘立柱建物4棟・井戸2基・土坑258基・焼土25基・性格不明遺構58基（豊穴状の掘り込みを確認した遺構を含む）・溝39条・ピット280基をIV層で検出した。遺構埋土の土色は黒褐色（10YR3/1）または褐灰色（10YR4/1）が多いが、IV層との判別がつきにくいにぶい黄橙色（10YR7/2・10YR7/3）の遺構も存在する。そのため、炭化物の広がりや遺物の有無などを手がかりにして検出した遺構もある。

遺構の時期は出土した遺物により、おおむね8世紀後半～9世紀前半に収まると考えられる。

1) 豊穴建物

豊穴建物から出土している遺物は、春日編年〔春日1999・2005〕でIV1期～IV2・IV3期にあたり、おおむね8世紀後半～9世紀初頭とみられる。

SI65（図版16・23・41・63、写真図版8・9）

17AQ、17ARグリッドに位置する。多くの遺構と重複しているため、新旧関係は別表1に記載した。主軸方位はN-1°-Wである。平面形は方形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸7.73m、現存短軸6.88m、深さ0.13～0.31mで、面積は約53.18m²である。埋土は単層でしまりが強く、硬化が認められたため、床面であった可能性がある。P372・452・347・360が規則的に配置されたため、主柱穴と想定されたが、P372・452・360はSB828の柱穴とみるのが妥当と考えており、SI65の主柱穴ではないと判断した。P347のみ、主柱穴の可能性を否定できないが、SB828-SD357に切られるため、詳細は不明である。

住居北辺中央部にカマド（SI65・焼土817）があり、1層で検出された。焼土817の埋土は2層で、1・2層ともに被熱痕跡がある。煙道はわずかに外側に張り出しが、カマド油は検出できなかった。火床のみが残存していると考えられる。

遺物は須恵器無台杯（7～13）、有台杯（14～16）、杯類・杯蓋（17～19）、稜碗（20）、黒色土器鉢（21）、杯・杯蓋（22）、短頸壺、須恵器横瓶（23・24）、壺蓋・壺・瓶類・甕、土師器無台椀・鉢・長甕・小甕（25）、鍋、砾

石(654)、釘(713)・鉄製品(722)、鉄滓、粘土塊が出土している。

SI103 (図版15・23、写真図版9)

17AN、17AO、18AN、18AOグリッドに位置する。SI108、SI108-P203を切る。主軸方位はN-30°-Wである。平面形は方形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸6.98m、短軸6.70m、深さ0.24mで、面積は約46.76m²である。埋土は2層である。1層はIV層由来の堆積土で、自然堆積と考えられる。2層は炭化物を多く含み、硬化が認められるため、床面の可能性がある。SI103の平面プランの中に土坑やピットが検出されているが、1層からの掘り込みであることや、規則的に配置されないことから建物に伴うものかは不明である。住居北辺の中央東寄りにカマド(SI103-焼土114)があり、2層で検出された。焼土114の埋土は4層で、2・3層に焼土を多く含む。カマド袖や煙道は検出できなかった。

遺物は、SI103から須恵器無台杯(26・27)・有台杯・杯蓋・甕(28)・横瓶(29・30)、土師器無台椀・長甕・小甕(31・32)・鍋、焼土114から須恵器無台杯(33)・有台杯(34)、土師器長甕・小甕・鍋が出土している。

SI108 (図版15・24、写真図版9・10)

18AO、19AOグリッドに位置する。SI103、SB252-SD468に切られる。主軸方位はN-0°である。平面形は長方形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸8.72m、短軸6.01m、深さ0.22～0.28mで、面積は約52.40m²である。埋土は2層である。1層はIV層由来の堆積土で、自然堆積と考えられる。2層は炭化物を多く含み、硬化が認められるため、床面の可能性がある。主柱穴はP123・200・203・204とみられ、方形に配置される。住居北辺中央部にカマド(SI108-焼土211)があり、2層で検出された。焼土211の埋土は2層で、2層に焼土塊を含む。煙道はわずかに外側に張り出しが、カマド袖は検出することはできなかった。

遺物はSI108から須恵器無台杯(35)・有台杯(36・37)・杯蓋・壺・瓶類・甕、土師器長甕(38)・小甕(39)・鍋、羽口(639)、焼土211から須恵器無台杯・甕、土師器長甕(40)、P123から須恵器無台杯・有台杯・杯蓋が出土している。

SI181 (図版16・25、写真図版10・11)

18AQ、18ARグリッドに位置する。SX249・250、P199に切られる。主軸方位はN-39°-Eである。平面形は長方形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸8.43m、現存短軸6.20m、深さ0.30～0.40mで、面積は約52.26m²である。埋土は2層である。1層はIV層由来の堆積土で、自然堆積と考えられる。2層は炭化物を多く含み、硬くしまっていることから床面と考えられる。主柱穴はP81・188・189・198とみられ、方形に配置される。住居北辺中央部に袖と煙道があるカマド(SI181-焼土830)を、2層で検出した。焼土830の埋土は7層で、2層が被熱した火床、5・6層が灰黄褐色シルト土でカマドの袖が割れたものである。煙道の長さは0.92mで、緩やかに立ち上がる。

遺物は、SI181から須恵器無台杯・有台杯(41)・杯蓋・横瓶(42)・甕、土師器無台椀・鉢・長甕・小甕(43)・鍋(44)、焼土830から焼成粘土塊、P81から土師器小甕(45)が出土している。造構の時期は出土遺物の年代観から8世紀末～9世紀初頭頃と考えられる。

SI207 (図版15・16・26・40、写真図版11・12)

17AP、18APグリッドに位置する。多くの造構と重複しているため、新旧関係は別表に記載した。主軸方位はN-13°-Eである。平面形は方形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸7.12m、短軸6.70m、深さ0.22～0.34mで、面積は約47.70m²である。埋土は3層で、1層が自然堆積層、2層がしまりの強い炭化物を含む床面、3層が掘り方である。SI207の平面プランの中にピットが多数検出されているが、1層からの掘り込みであることや、規則的に配置されないことから建物に伴うものかは不明である。北辺の中央にカマド(SI207-焼土823)があり、2層で検出できる。焼土823の埋土は5層で、1層が被熱した火床、5層が白色粘土を含む袖と考えられる。煙道の長さは1.4mで、緩やかに立ち上がる。

遺物は、SI207から須恵器無台杯・有台杯・杯類・杯蓋(46)・短頭甕(47)・甕、土師器無台杯・長甕・小甕

(48)・鍋、鉄製品、鉄滓、焼土 823 から須恵器無台杯・有台杯、土師器長甕が出土している。

SI243 (図版 19・24、写真図版 12)

20AL、21AL、21AM グリッドに位置する。主軸方位は、N-66°-W である。平面形は長方形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 4.92m、短軸 3.16m、深さ 0.15m で、面積は約 15.54m² である。埋土は 2 層である。中央よりやや南西側に炭化物が梢円状に検出され、カマドの可能性を想定したが、被熱痕跡が見られないため性格は不明である。柱穴は検出できなかった。

SI451 (図版 12・16・27、写真図版 12～14)

17AP、17AQ グリッドに位置する。SK455・460、SD422 に切られる。SD420 との新旧関係は、SI451 の掘削中に底面近くで SD420 を検出したため、現場の所見では SI451>SD420 とした。しかし、各遺構の出土土器の時期から新旧関係を誤認した可能性が考えられ、断面・写真等で精査したものの、明瞭ではなかったため出土遺物の傾向に従い、SI451<SD420 として扱った。東側は擾乱によって切られる。平面形は不定形で、断面形は台形を呈する。規模は短軸 6.12m、深さ 0.16～0.40m である。埋土は 2 層である。1 层はIV層由来の堆積土で、自然堆積と考えられる。2 層は炭化物を多く含み、硬化が認められるため、貼床の可能性がある。SI451 の平面プランの中にピットは検出できなかったため、柱穴が伴うかは不明である。西辺の南寄りにカマド (SI451・焼土 820) があり、2 層で検出できる。焼土 820 の埋土は 5 層で、1 層に焼土を含む。カマド袖や煙道は検出することはできなかった。また SK821 はカマドをつくる際の掘り込みの可能性がある。

遺物は、SI451 から須恵器無台杯 (49～56)・有台杯 (57・58)・杯類・杯蓋 (59)・稜楕 (60)、黒色土器碗 (61)、土師器無台杯・鉢 (62・63)、須恵器鉢 (64)・短頸壺 (65)・壺・瓶類・甕 (66)、土師器長甕 (67～70)・小甕 (71・72)・鍋、土製筋錐車 (631)、砥石 (656)・敲石 (666)・軽石製品 (669)・編み物石 (685・687)、鉄製品、鉄滓、焼土 820 から須恵器無台杯・有台杯、土師器長甕・小甕が出土している。特に 72 の小甕底部は逆位の状態で出土した。

SI453 (図版 12・15・27、写真図版 14・15・49)

17AO、17AP グリッドに位置する。P597・598 を切る。出土遺物から遺構の時期は、8 世紀中葉頃と考えられる。主軸方位は、N-80°-W である。平面形は方形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 6.49m、短軸 5.71m、深さ 0.16～0.22m であり、面積は約 37.05m² である。埋土は単層で、炭化物を含み硬くしまるために、貼床の可能性がある。主柱穴は P461・465・471 であると考えられる。西辺のやや南寄りにカマドと考えられる焼土 822 があり、1 层上面で検出できる。焼土 822 の埋土は 3 層で、1 层に焼土を多量含む。カマド袖や煙道は検出することはできなかった。

遺物は SI453 から須恵器無台杯・有台杯 (73)・杯類・杯蓋 (74)・壺蓋 (75)、土師器無台杯・鉢・長甕・小甕・鍋、須恵器壺・瓶類・甕、鉄製品、鉄滓が出土している。

SI608 (図版 12・26、写真図版 15)

15AO9・10・14・15 グリッドに位置する。遺構北側の大部分は調査区外に延びる。断面形は台形を呈する。規模は短軸 2.72m、深さ 0.48m である。埋土は 9 層である。P622・773・774 が主柱穴であると考えられる。遺物は須恵器無台杯、土師器長甕・小甕・鍋、羽口、鉄滓が付着した焼窯 (682)、鉄製品が出土している。

2) 摨立柱建物

SB251 (図版 15・16・28、写真図版 15～17)

18AP、19AP グリッドに位置する側柱建物である。建物の規模は、桁行 3 間 (7.18m)・梁行 2 間 (4.72m) で、面積は約 33.89m² である。主軸方位は N-47°-W で、平面形は長方形である。柱間寸法は桁行方向が 2.20～2.53m、梁行方向が 2.42～2.43m である。北西隅の柱穴は擾乱の影響で残存せず、8 基の柱穴が現存している。柱穴の形状は平面形が円形または梢円形であり、断面形は台形、皿形、U 字形を呈している。柱穴の深さは検出面から 0.19～0.89m で、底面標高は 2.21～2.98m である。P152・178・273 には柱根が遺存していた。ま

たSB829とP149が重複しており、短期間での建て直しが想定されるが、新旧関係は不明である。SB251の北側と南側に、SK106、SX130・134、SD153が存在し、これらは軒先下に掘られた雨落ち溝の可能性がある。SK68は、堆積状況に違いがあるもののSX130より新しくSK106より古いという新旧関係から、単独造構ではなく同様に雨落ち溝と考えた。なお、東側と西側では検出できなかった。SK67・71・73・76・128から粒状滓や鍛造片などが多く検出されているため、鍛治関連造構である可能性がある。SK71・76はSB252の雨落ち溝ともしており、再利用されたと考えられる。

遺物はP95・101・149・152・256・273、SK68・106、SX130、SD153から須恵器無台杯(77)・有台杯(76)・杯類・杯蓋(78・81)、土師器無台椀・杯・鉢・長甕・小甕・鍋、須恵器甕(79・80・82)、鉄製品、鍛造片、鉄滓、焼成粘土塊が出土している。

SB252 (図版15・16・29・30、写真図版12・17~20)

17AP、18AO、18AP、18AQグリッドに位置する。周溝(SD468)がめぐる総柱建物である。建物の規模は、桁行3間(6.94m)・梁行2間(4.78m)で、面積は約33.17m²である。主軸方位はN-48°-Wで、平面形は長方形である。柱間寸法は桁行方向2.11~2.34m、梁行方向2.39~2.40mである。柱穴の形状は円形または楕円形であり、断面形は箱形、台形、皿形、U字形を呈している。11基の柱穴で構成されており、北西隅の柱穴は搅乱に切られる。柱穴の深さは検出面から0.14~0.73mで、底面標高は2.45~2.90mである。周溝(SD468)はSB252の北側と南側に位置し、弧状にめぐる。規模は長軸10m以上、短軸0.62~1.74m、深さ0.20mである。埋土は単層である。またSK76・132・136は軒先下に掘られた雨落ち溝の可能性がある。

遺物はP140・179・191・202・216・458、SK71・76・132・136、SD468から須恵器無台杯・有台杯(83~85)・杯類・鉢・杯蓋、土師器甕(86)・長甕・小甕・鍋、須恵器甕(87)、粒状滓、鍛造片、鉄滓、焼成粘土塊が出土している。

SB828 (図版16・31・33・63、写真図版20~22・46)

17AQ、17ARグリッドに位置する。柱穴の規模は並びがやや不整形であるが、周溝(SD357)がめぐり、北の妻と東の平に廂が付く二面廂付建物である。建物の規模は、桁行2間(4.38~5.04m)・梁行2間(2.94~3.66m)で、廂部を含めると桁行3間(6.48~6.64m)・梁行3間(4.01~5.06m)となる。身舎の面積は約14.83m²である。主軸方位はN-55°-Wで、建物の平面形は長方形である。身舎の柱間寸法は桁行方向2.05~2.20m、梁行方向1.30~1.70mである。14基の柱穴から構成されている。柱穴の形態は、円形または楕円形であり、断面形は、箱形、台形、皿形、U字形である。柱穴の深さは検出面から0.05~0.48mで、底面標高は2.73~3.60mと差が大きい。埋土断面に柱痕跡が認められる柱穴は、P383とP435のみである。周溝(SD357)はSB828の南東側に位置し、弧状にめぐる。規模は長軸14m以上、短軸1.10~1.46m、深さ0.15mである。埋土は単層である。

遺物はP286・287・326・360・366・372・383・384・435・442・450・452、SD357から須恵器無台杯・有台杯(88)・杯類・杯蓋(92)、黒色土器椀(90)・杯蓋(93)、土師器鉢(89・91)、須恵器甕・瓶類・甕、土師器長甕(94)・小甕・鍋、鉄鋤の舌(701)、鉄滓、焼成粘土塊が出土している。

SB829 (図版15・16・32、写真図版22・23)

18AP、19APグリッドに位置する。側柱建物である。建物の規模は、桁行3間(5.04m)・梁行2間(4.04m)で、面積は約20.36m²である。主軸方位はN-50°-Wで、平面形は長方形である。柱間寸法は桁行方向1.58~1.99m、梁行方向が1.75~2.21mである。柱穴の形状は円形または楕円形であり、断面形は箱形、台形、皿形、U字形を呈している。9基の柱穴で構成されている。柱穴の深さは検出面から0.10~0.57mで、底面標高は2.42~3.05mmである。埋土断面に柱痕跡が認められるものが多いが、柱根は遺存していなかった。SB251とP149が重複しており、短期間での建て直しが想定されるが、新旧関係は不明である。

遺物はP148・149・160・161から須恵器無台杯(95)・有台杯、土師器長甕・小甕、粒状滓、鍛造片、鉄滓(646)

が出土している。

3) 井 戸

SE278 (図版 16・33、写真図版 23)

17AQ22・23、18AQ2・3 グリッドに位置する。SX63 を切る。主軸方位は、N-30°-E である。平面形は梢円形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸 2.47m、短軸 1.48m、深さ 1.94m である。埋土は 7 層で、1～5 層は井戸の堆積土、6～7 層は井戸側 (740～749) の裏込めである。井戸側には、2 艘の丸木舟を転用したもの (747～749) の隙間を埋めるように板材が使用されている。板材は 11 枚使用されているが、そのうち 7 点 (740～746) を図化した。井戸側の上部は腐食により失われており、横桟などは見られない。

遺物は須恵器無台杯 (96・97)・有台杯 (98・99)・杯類・杯蓋 (100)・甕・土師器鉢 (101)・長甕・小甕 (102)、編み物石 (692)、鉄製品 (716)、棒状木製品 (734・735)、著状木製品 (732)、木製小皿未完成品 (733) が出土している。また、篩選別資料からは多くの種実と炭化米などが検出された (第 10 図・第 2 表)。

SE388 (図版 16・33・63、写真図版 23・46)

17AQ13・14 グリッドに位置する。SI65、SB828-SD357、SK341、SX283 を切る。主軸方位は、N-63°-W である。平面形は梢円形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸 1.02m、現存短軸 0.96m、深さ 0.86m である。埋土は 2 層である。井戸側はなく、素掘りである。

遺物は須恵器無台杯 (103)・有台杯 (104)・杯類・杯蓋 (105)、土師器無台杯、須恵器壺・瓶類・甕・土師器長甕・小甕・鍋が出土している。

4) 土 坑

古代の土坑は 258 基検出し、そのうち遺物が出土した土坑は 208 基あった。出土している遺物は春日編年で IV 期～V 期にあたり、おむね 8 世紀後半～9 世紀前半とみられる。竪穴建物から、V 期にあたる遺物は出土していないため、竪穴建物よりやや新しい土坑も存在すると考えられる。

SK29 (図版 20・34、写真図版 24)

22AM25、22AN21 グリッドに位置する。主軸方位は N-30°-E である。平面形は方形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸 1.20m、短軸 1.12m、深さ 0.29m である。埋土は 2 層ある。遺物は須恵器壺蓋 (106)、土師器長甕・小甕・鍋が出土している。

SK30 (図版 20・34)

22AM24・25 グリッドに位置する。南西側は調査区外に延びる。断面形は皿形を呈する。規模は短軸 1.25m、深さ 0.17m である。埋土は単層である。遺物は黒色土器椀 (107)、土師器無台杯・長甕・小甕が出土している。

SK32 (図版 20・34、写真図版 24)

22AN17・18・22・23 グリッドに位置する。主軸方位は、N-81°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 2.64m、短軸 1.55m、深さ 0.23m である。埋土は 2 層である。遺物は須恵器無台杯 (108)、土師器長甕・小甕・鍋が出土している。

SK48 (図版 20・34、写真図版 24)

22AO3・4 グリッドに位置する。SK19 に切られる。平面形は円形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸 1.32m、現存短軸 1.06m、深さ 0.23m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (109)、黒色土器杯、土師器小甕 (110・111) が出土している。

SK53 (図版 19・22・35、写真図版 24)

23AM18・19・23・24 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.62m、短軸 1.44m、深さ 0.21m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (112) と杯蓋 (113) が並んだ状態で出土しており、儀礼的な意図で埋設されたと思われる。そのほかの遺物は土師器長甕 (114)・小甕 (115) が出土している。遺構の時期は出土遺物の年代観から 9 世紀初頭頃と考えられる。

SK74 (図版 15・36)

19AP11・12・16・17 グリッドに位置する。SK147 を切る。平面形は円形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸 1.80m、短軸 1.58m、深さ 0.39m である。埋土は単層である。遺物は須恵器壺・瓶類・壺蓋 (116)、土師器無台碗・鉢・長甕 (117)・小甕が出土している。

SK79 (図版 16・36、写真図版 25)

19AP5・10、19AQ1・6・7・11・12 グリッドに位置する。南東側は調査区外に伸びる。断面形は皿形を呈する。規模は短軸 1.48m、深さ 0.17m である。埋土は単層である。SB252 の周溝の一部とも考えられたが、SB252 の位置から大きく外れるため、単体の遺構として扱った。遺物は須恵器無台杯・有台杯 (118)・壺・瓶類、土師器長甕・小甕 (119) が出土している。

SK85 (図版 20・35)

20AP2・7 グリッドに位置する。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 2.18m、短軸 1.28m、深さ 0.15m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯、土師器鉢・長甕・小甕 (120) が出土している。

SK90 (図版 15・37)

19AN10、19AO1・2・6・7 グリッドに位置する。主軸方位は、N-48°-E である。平面形は不定形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 3.56m、深さ 0.12m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (121)・有台杯・壺蓋 (122)・壺・瓶類、土師器長甕 (123) が出土している。

SK104 (図版 16・37)

18AP15 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸が 0.77m、短軸 0.71m、深さ 0.19m である。埋土は 2 層である。遺物は須恵器無台杯・有台杯 (124) が出土している。

SK107 (図版 16・38、写真図版 25・26)

18AP3・8・9 グリッドに位置する。主軸方位は、N-82°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.02m、短軸 0.75m、深さ 0.11m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・有台杯 (125)、土師器長甕が出土している。

SK118 (図版 15・38)

19AO14・15 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.38m、短軸 0.34m、深さ 0.09m である。埋土は単層である。遺物は須恵器短頸壺 (126) が出土している。

SK131 (図版 16・38、写真図版 26)

17AP24・25、18AP4・5 グリッドに位置する。主軸方位は、N-34°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.34m、短軸 0.88m、深さ 0.23m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (127)・横瓶 (128)、土師器長甕・小甕が出土している。

SK139 (図版 16・38)

18AP25、18AQ21、19AQ1 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.66m、短軸 1.62m、深さ 0.16m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯、土師器長甕・小甕 (129) が出土している。

SK145 (図版 16・39、写真図版 26)

18AQ18・19・23・24 グリッドに位置する。主軸方位は、N-84°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は現存長軸 0.68m、現存短軸 0.42m、深さ 0.06m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・有台杯 (130)・甕 (131) が出土している。

SK146 (図版 15・39)

19AO20 グリッドに位置する。主軸方位は、N-48°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.30m、短軸 1.04m、深さ 0.12m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (132)・有台杯、

土師器長甕が出土している。

SK166 (図版 15・39)

18AP21 グリッドに位置する。SB251-P178 を切る。平面形は円形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸 0.50m、短軸 0.48m、深さ 0.30m である。埋土は 2 層である。遺物は須恵器無台杯 (133) が出土している。

SK182 (図版 15・39)

19AN3・4・8・9 グリッドに位置する。主軸方位は、N-72°-E である。SK127 に切られる。平面形は楕円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.10m、短軸 0.70m、深さ 0.10m である。埋土は 3 層である。遺物は須恵器甕 (134) が出土している。

SK215 (図版 16・26、写真図版 11)

17AP22・23 グリッドに位置する。主軸方位は、N-82°-W である。SI207、SK353 を切る。平面形は楕円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.80m、短軸 1.20m、深さ 0.40m である。埋土は単層である。遺物は須恵器杯類・杯蓋、土師器無台杯・長甕・小甕 (135)、鍋、編み物石 (684) が出土している。

SK220 (図版 12・15・39、写真図版 26)

17AP17 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.52m、短軸 1.33m、深さ 0.11m である。埋土は 2 層で、1 層に炭化物の集中範囲が見られる。遺物は須恵器無台杯・有台杯 (136)・壺・瓶類 (137)、土師器長甕・小甕 (138)、円面鏡 (638)、鉄製品、粘土塊が出土している。

SK228 (図版 21・39)

24AJ11・12・16・17 グリッドに位置する。主軸方位は、N-65°-E である。平面形は楕円形で、断面形は皿形を呈する。規模は現存長軸 1.94m、現存短軸 0.90m、深さ 0.09m である。埋土は単層である。遺物は土師器長甕 (139)・鍋が出土している。

SK281 (図版 16・41・42、写真図版 27)

17AR1・2・6～8・11～13 グリッドに位置する。東側は調査区外に延びる。SI65 を切り、P289 に切られる。断面形は皿形となる。規模は深さ 0.08～0.17m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (140・141)・有台杯・杯類・杯蓋 (142)、黒色土器鉢 (143)、須恵器壺・瓶類・甕、土師器長甕・小甕・鍋、鉄製品、鉄滓が出土している。

SK282 (図版 16・42)

17AR13・14・18・19・23・24 グリッドに位置する。東側は調査区外に延びる。SK285 を切る。断面形は皿形となる。規模は深さ 0.15m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・有台杯 (144)・杯類・杯蓋、土師器無台杯・長甕・小甕・鍋が出土している。

SK285 (図版 16・42、写真図版 27)

17AR8・13・14・18 グリッドに位置する。東側は調査区外に延びる。SK282 に切られる。断面形は皿形を呈する。規模は深さ 0.09m である。埋土は単層である。遺構の東側は調査区外であり、全容は不明である。遺物は須恵器無台杯・有台杯 (145)・杯類・杯蓋 (146)、土師器無台杯・鉢 (147)・長甕・小甕 (148)・鍋 (149) が出土している。

SK298 (図版 17、写真図版 27)

23AG13・14・18・19 グリッドに位置する。主軸方位は、N-58°-W である。平面形は楕円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 2.19m、短軸 1.33m、深さ 0.24m である。埋土は単層である。遺物は須恵器有台杯 (150・151)・杯蓋、土師器長甕・小甕 (152)・鍋が出土している。

SK333 (図版 17・41)

22AG17・22・23 グリッドに位置する。東側は調査区外に延びる。主軸方位は、N-31°-W である。断面形は皿形を呈する。規模は現存長軸 3.00m、深さ 0.46m である。埋土は 3 層である。遺構の東側が調査区外であ

り、全容は不明である。遺物は須恵器無台杯（153）・有台杯・杯類・杯蓋（154・155）・甕、土師器長甕・小甕が出土している。

SK335（図版9・17・42）

23AG8・9・14グリッドに位置する。東側は調査区外に延びる。SK334を切る。断面形は皿形を呈する。規模は長軸1.54m、深さ0.14～0.34mである。埋土は2層である。遺構の東側が調査区外であり、全容は不明である。遺物は須恵器無台杯、土師器長甕（156）・小甕が出土している。

SK336（図版16・40、写真図版27）

17AQ2・3・7・8グリッドに位置する。西側は擾乱に切られる。断面形は皿形を呈する。規模は長軸1.55m、深さ0.21mである。埋土は2層である。遺物は須恵器無台杯（157）、土師器長甕・小甕・鍋が出土した。

SK341（図版16・43・63、写真図版28）

17AQ8・9・13・14グリッドに位置する。主軸方位は、N-90°である。SE388、SX283に切られる。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は現存長軸1.89m、現存短軸1.25m、深さ0.12～0.28mである。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯（158）・杯蓋、土師器無台杯（159）・有台杯（160）・鉢（161）、須恵器壺蓋（162）・甕（163）、土師器長甕（164）・小甕（165～169）・鍋、鉄滓が出土している。

SK346（図版16・42、写真図版28）

17AQ12・13グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸0.94m、短軸0.77m、深さ0.23mである。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯（170）・杯蓋（171）・杯類、土師器無台杯・長甕・小甕（172）・鍋、円筒形土製品（634）が出土している。

SK350（図版16・43、写真図版28）

17AQ13グリッドに位置する。SB828-P435を切る。平面形は円形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸0.65m、短軸0.56m、深さ0.24mである。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・杯類・杯蓋、土師器長甕（173）・小甕（174）・鍋が出土している。

SK352（図版16・42、写真図版28・29）

17AP23・24、18AP3グリッドに位置する。主軸方位は、N-82°-Wである。断面形は箱形を呈する。規模は深さ0.27mである。埋土は3層である。遺物は須恵器杯類・杯蓋、土師器長甕（175）・小甕（176）・鍋が出土している。

SK353（図版15・43）

17AP22・23グリッドに位置する。SK215に切られる。平面形は梢円形で、断面形は台形を呈する。規模は短軸0.94m、深さ0.26mである。埋土は単層である。遺物は須恵器杯類・杯蓋（177）、土師器鉢・長甕・小甕・鍋が出土している。

SK356（図版16・43、写真図版29）

16AQ24・25、17AQ4・5グリッドに位置する。主軸方位はN-84°-Wである。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸1.74m、短軸1.46m、深さ0.26mである。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・杯蓋（178）、土師器無台杯・長甕・小甕（179）・鉢（180）・鍋が出土している。

SK363（図版17・43、写真図版29）

20AE15・20、20AF11・16グリッドに位置する。東側は調査区外に延びる。断面形は皿形を呈する。規模は深さ0.11mである。埋土は5層である。遺物は土師器長甕（181）・小甕・粘土塊が出土している。

SK400（図版16・27・43）

17AQ12・13グリッドに位置する。SX283を切る。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は現存短軸0.78m、深さ0.12mである。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯（182）、土師器長甕・小甕が出土している。

SK413 (図版 11・13・44、写真図版 5・29・30)

16AM12 グリッドに位置する。断面形は皿形を呈する。規模は深さ 0.07m である。埋土は単層である。土色が地山と見分けがつきにくかったため、わずかな炭化物や遺物出土範囲で遺構プランの認定を行った。遺物は須恵器無台杯 (183)、鳥形製品 (626) が出土している。

SK418 (図版 11・14・44、写真図版 5・30)

17AL19・20・24・25 グリッドに位置する。主軸方位は N-79°-W である。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 2.30m、短軸 2.12m、深さ 0.06m である。埋土は単層である。土色が地山と見分けがつきにくかったため、褐色粒子や遺物出土範囲で遺構プランの認定を行った。南東側で検出された SK419 からは鳥形製品を含む遺物が、南西側の SK488 では須恵器の大型壺がつぶれた状態で出土している。このように似たような非日常的な状況を示しているため、両者とは関係があると考えられる。遺物は鳥形製品 (625a) が出土している。

SK419 (図版 14・45、写真図版 5・6・30～32)

17AM21・22、18AM1・2・6・7 グリッドに位置する。SX486 に切られる。主軸方位は N-10°-W である。平面形は不定形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 3.28m、深さ 0.15m である。埋土は 2 層で、褐色粘土質シルトやにぶい黄褐色粘土質シルトが主体であり、地山と区別がつきにくい。そのため、わずかな炭化物や遺物出土範囲で、遺構プランの認定を行った。前述のとおり北西側の SK418・488 とは状況が似ているため、何かしら関係があると考えられる。

遺物は須恵器無台杯 (184～187)・有台杯 (188)・杯蓋 (189～192)・高杯 (193・194)・環状瓶 (195)・長頸瓶 (196)・甕 (197)・鉢 (198)・壺・瓶類・土師器鍋形鉢 (199)・小壺 (200～204)、鳥形製品 (625b・627～630)、鉄製錫杖頭 (696)・鉄鋤 (697・698)・刃物と考えた鉄製品 (709) がほぼ完形の状態でまとめて出土している。

SK444 (図版 16・23・46)

17AQ10・15、17AR6・11 グリッドに位置する。主軸方位は N-74°-W である。SI65、P449 を切り、SK443 に切られる。平面形は方形で、断面形は皿形を呈する。規模は現存長軸 2.04m、深さ 0.22m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (205)・有台杯 (206)・杯類・杯蓋、土師器杯・鉢・須恵器壺・瓶類・壺蓋・甕・土師器長壺・小壺 (207)・鍋、鉄製品釘 (711・712)、鉄滓が出土している。

SK455 (図版 12・16・27・46、写真図版 12・14・32)

17AP14・15・19・20 グリッドに位置する。SI451 を切る。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 2.20m、短軸 2.08m、深さ 0.11～0.26m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (208～210)・有台杯 (211)・杯類・杯蓋 (212～214)・甕、黒色土器短頸壺、土師器無台杯・長壺 (215～217)・小壺 (218)・鍋、台石 (680) が出土している。

SK462 (図版 12・16・44)

17AP18 グリッドに位置する。主軸方位は N-50°-W である。SD397 に切られる。断面形は台形を呈する。規模は長軸 1.05m、深さ 0.19m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・有台杯 (222)・杯蓋・甕、土師器長壺・小壺・鍋、鉄製品、鉄滓が出土している。

SK466 (図版 15・47)

17AO17～19・22～24、18AO2～4・8 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は現存長軸 4.86m、短軸 4.44m、深さ 0.40m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (223)・杯類・杯蓋 (224)・壺蓋、土師器長壺・小壺・鍋、鉄製品、鉄滓が出土している。

SK470 (図版 12・15・44)

17AO12・13・17・18 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は現存長軸

1.58m、短軸1.40m、深さ0.29mである。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯(225)・有台杯(226)、土師器長甕・小甕・鍋が出土している。

SK472 (図版12・15・46、写真図版32)

16AP16・17・21・22グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸1.54m、現存短軸1.38m、深さ0.29mである。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯(227)・有台杯(228・229)・杯蓋、土師器無台杯(230)、黒色土器椀(231)、須恵器甕(232・233)、土師器長甕(234)・小甕(235)・鍋、鉄製品、鉄滓が出土している。

SK488 (図版14・48、写真図版5・32・33)

17AL22～24、18AL2～4グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸3.29m、短軸2.75m、深さ0.28mである。埋土は3層である。前述したが、北東側のSK418、南東側のSK419とは状況が似ていることから、何か関係があると考える。遺物は須恵器無台杯(236)・有台杯・杯蓋・長胴瓶(237)・横瓶(238)・甕(239)、鉄鋤の舌(702)が出土している。

SK499 (図版11・14・46、写真図版33)

17AM11グリッドに位置する。主軸方位はN-14°・Eである。平面形は楕円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸1.27m、短軸0.86m、深さ0.09mである。埋土は単層である。遺物は須恵器壺・瓶類、土師器長甕(240)、鳥形製品(625b)の一部が出土している。

SK530 (図版17・47)

22AG25、22AH21、23AG5、23AH1グリッドに位置する。主軸方位はN-10°・Eである。SK529を切る。平面形は不定形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸1.35m、短軸1.09m、深さ0.31mである。埋土は2層である。遺物は須恵器無台杯(241)・杯蓋、土師器鉢・長甕・小甕が出土している。

SK532 (図版17・49、写真図版34)

22AH11・12・16～18・21～23グリッドに位置する。主軸方位はN-74°・Wである。SK546・584、SD537・538を切り、SX476に切られる。平面形は楕円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸4.04m、短軸2.67m、深さ0.22mである。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯(242・243)・杯蓋・甕、土師器鉢・長甕・小甕、鉄滓が出土している。

SK533 (図版11・14・49、写真図版34)

17AM16～18・22グリッドに位置する。主軸方位はN-85°・Wである。SD380に切られる。平面形は楕円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸2.63m、短軸1.09m、深さ0.18mである。埋土は単層である。遺物は土師器長甕(244)が出土している。

SK543 (図版11・14・48、写真図版34・35)

17AM12・13グリッドに位置する。主軸方位はN-51°・Wである。平面形は不定形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸1.68m、深さ0.22mである。埋土は単層である。遺物は土師器壺蓋(245)・短頭甕(246)・長甕・小甕(247)・鍋(248)、焼甕・編み物石(691)が出土している。特に小甕(247)は逆位の状態で検出された。

SK546 (図版17・50、写真図版34・35)

22AH6～8・11～13・16・17グリッドに位置する。主軸方位はN-48°・Eである。SK502・532、P551に切られる。平面形は楕円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸4.05m、短軸3.10m、深さ0.26mである。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯(249)・有台杯(250)・杯蓋(251・252)、土師器長甕(253～255)・小甕(256)・鍋、鉄滓が出土している。

SK547 (図版17・18・47)

22AH13グリッドに位置する。主軸方位はN-64°・Wである。平面形は楕円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸1.08m、短軸0.77m、深さ0.10mである。埋土は単層である。遺物は須恵器有台杯(257)、土師

器長甕・小甕が出土している。

SK553 (図版 17・18・51、写真図版 35)

21AH23・24、22AH2 ~ 4・7・8 グリッドに位置する。主軸方位は N-66°-E である。P639 を切る。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 4.23m、短軸 2.30m、深さ 0.15m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (258 ~ 260)・杯類・杯蓋、土師器無台杯・長甕 (261)・小甕・鍋、鉄製品が出土している。

SK562 (図版 17・49)

21AH22-23 グリッドに位置する。主軸方位は N-83°-E である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 2.46m、短軸 1.42m、深さ 0.10m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯、土師器長甕・小甕・鍋が出土している。

SK576 (図版 11・14・49)

17AM2 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は径 0.56m、深さ 0.09m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (262) が出土している。

SK581 (図版 18・51)

22AH25 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.88m、短軸 0.84m、深さ 0.25m である。埋土は 2 層である。遺物は須恵器無台杯・甕、土師器無台椀 (263)・長甕・小甕が出土している。

SK584 (図版 18・51、写真図版 35・36)

22AH18・19・23・24 グリッドに位置する。主軸方位は N-83°-W である。SK532 に切られる。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は現存長軸 2.91m、現存短軸 2.44m、深さ 0.30m である。埋土は単層で、炭化物を多量に含む。竪穴建物の可能性も考えられたが、付属施設が検出できなかつたため、土坑とした。遺物は古墳時代の土師器甕 (1・2)、須恵器無台杯 (264)・有台杯・甕、土師器無台椀 (265)・鉢 (266)・長甕・小甕が出土している。

SK585 (図版 18・52)

22AH13-14-19 グリッドに位置する。主軸方位は N-44°-E である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 2.01m、短軸 1.42m、深さ 0.07m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・杯類・杯蓋、土師器長甕・小甕 (267) が出土している。

SK589 (図版 12・15・50、写真図版 36)

16AP16・17・22 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.28m、深さ 0.17m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (268・269)・有台杯 (270)・杯蓋 (271)、土師器長甕 (272)・小甕 (273)、鉄滓が出土している。

SK602 (図版 16・51)

17AP20・25、17AQ16・21 グリッドに位置する。主軸方位は N-50°-W である。平面形は不定形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.92m、短軸 0.71m、深さ 0.04m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (274)・有台杯、土師器小甕が出土している。

SK616 (図版 15・52・58、写真図版 36)

18AN2・3・7 グリッドに位置する。主軸方位は N-42°-E である。SK779 を切る。断面形は皿形を呈する。規模は長軸 3.34m、深さ 0.18m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・甕、土師器長甕・小甕 (275)・鍋が出土している。

SK617 (図版 15・52)

17AN19・23・24 グリッドに位置する。主軸方位は N-38°-E である。断面形は皿形を呈する。規模は長軸 2.25m、深さ 0.14m である。埋土は単層である。遺物は土師器長甕 (276)・小甕が出土している。

SK620 (図版 12・15・53)

16AO19・20・24・25 グリッドに位置する。断面形は皿形を呈する。規模は深さ 0.10m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯、土師器長甕・鍋が出土している。

SK624 (図版 18・52、写真図版 36)

22AH9 グリッドに位置する。SK630 を切る。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.60m、短軸 0.50m、深さ 0.16m である。埋土は 2 層である。遺物は須恵器杯類、土師器長甕(277)・小甕が出土している。

SK631 (図版 18・53、写真図版 37)

22AH24・25、23AH4・5 グリッドに位置する。主軸方位は N-26°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は現存長軸 2.68m、短軸 2.06m、深さ 0.10m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (278)・有台杯・杯蓋 (279)・壺・瓶類・甕、土師器有台杯 (280)・長甕・小甕・鍋が出土している。

SK647 (図版 17・18・54、写真図版 37)

21AH13・18 グリッドに位置する。主軸方位は N-45°-E である。SK643 に切られる。平面形は梢円形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸 2.16m、短軸 1.52m、深さ 0.28m である。埋土は 2 層である。遺物は須恵器無台杯、土師器無台碗 (281)・長甕・小甕・鍋 (282) が出土している。

SK654 (図版 18・54、写真図版 37)

22AH9 グリッドに位置する。主軸方位は N-44°-E である。SD652 を切り、SK663 に切られる。平面形は梢円形で、断面形は半円形を呈する。規模は現存長軸 1.07m、短軸 0.76m、深さ 0.34m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯、土師器長甕 (283)・小甕 (284) が出土している。特に長甕 (283) が正位の状態で検出され、完形ではないが一個体に復元できた。遺構の時期は出土遺物の年代観から 8 世紀中葉頃と考えられる。

SK658 (図版 18・55、写真図版 38)

21AI16・17 グリッドに位置する。主軸方位は N-76°-E である。SK648 に切られる。平面形は長方形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸 2.13m、現存短軸 1.40m、深さ 0.40m である。埋土は 3 層である。遺物は須恵器無台杯・土師器長甕 (285)・小甕・甕が出土している。

SK668 (図版 18・55、写真図版 38)

22AI11～13・16～18 グリッドに位置する。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は現存長軸 3.40m、短軸 2.48m、深さ 0.20m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (286)・甕・土師器長甕・小甕が出土している。

SK674 (図版 18・54、写真図版 38)

21AJ13・14 グリッドに位置する。主軸方位は N-51°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 2.13m、短軸 1.48m、深さ 0.19m である。埋土は単層である。遺物は須恵器杯蓋 (287)・土師器無台碗 (288) が出土している。

SK680 (図版 18・53、写真図版 38)

23AI9・10・14・15 グリッドに位置する。主軸方位は N-54°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.91m、短軸 0.71m、深さ 0.10m である。埋土は単層である。遺物は須恵器有台杯 (289)・折縁杯 (290)・杯蓋・土師器小甕・鍋が出土している。

SK689 (図版 18・55、写真図版 39)

22AJ15 グリッドに位置する。平面形は不明で、断面形は皿形を呈し、規模は長軸 0.6m 以上、短軸 0.96m、深さ 0.09m である。埋土は単層である。遺物は須恵器有台杯 (291) が出土している。

SK690 (図版 18・56、写真図版 39)

21AI21、22AI1・2 グリッドに位置する。主軸方位は N-63°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.92m、短軸 1.10m、深さ 0.16m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・

有台杯（292）・横瓶（293）・甕、土師器長甕・小甕が出土している。

SK691 (図版 18・56、写真図版 39)

21AI22、22AI2 グリッドに位置する。SK648 に切られる。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.90m、短軸 0.84m、深さ 0.10m である。埋土は単層である。遺物は須恵器有台杯（294）、土師器長甕が出土している。

SK698 (図版 18・56、写真図版 39)

21AK11・16 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.18m、短軸 1.06m、深さ 0.10m である。埋土は単層である。遺物は須恵器有台杯（295）、土師器長甕が出土している。

SK699 (図版 18・56、写真図版 39)

21AK11 グリッドに位置する。主軸方位は N-36°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.77m、短軸 0.45m、深さ 0.03m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・折縁杯（296）が出土している。

SK700 (図版 18・56、写真図版 40)

21AH24・25 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は現存長軸 1.11m、短軸 1.04m、深さ 0.27m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯（297）・甕、土師器長甕・鍋が出土している。

SK706 (図版 18・56、写真図版 40)

22AJ17・18 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.55m、短軸 0.51m、深さ 0.09m である。埋土は単層である。遺物は須恵器甕、土師器鍋（298）が出土している。

SK708 (図版 13・56)

19AJ24 グリッドに位置する。主軸方位は N-55°-E である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.32m、短軸 0.83m、深さ 0.07m である。埋土は単層である。遺物は須恵器有台杯（299）が出土している。

SK721 (図版 14・57、写真図版 40)

19AL7・12 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.90m、短軸 0.80m、深さ 0.13m である。埋土は単層である。遺物は須恵器杯蓋（300）、土師器長甕・小甕が出土している。

SK722 (図版 14・57、写真図版 40)

19AL3・8 グリッドに位置する。主軸方位は N-0° である。平面形は長方形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.76m、短軸 0.64m、深さ 0.14m である。埋土は単層である。遺物は土師器台付鉢（301）が出土している。

SK723 (図版 14・57)

19AL10・15 グリッドに位置する。主軸方位は N-14°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.88m、短軸 0.55m、深さ 0.13m である。埋土は単層である。遺物は須恵器壺・瓶類（302）が出土している。

SK741 (図版 14・57)

18AL18・19 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.51m、短軸 0.50m、深さ 0.11m である。埋土は単層である。遺物は土師器無台椀（303）が出土している。

SK746 (図版 11・14・57)

17AL3 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.74m、短軸 0.66m、深さ 0.07m である。埋土は単層である。遺物は須恵器有台杯（304）・横瓶が出土している。

SK781 (図版 14・58、写真図版 41)

18AM3・4 グリッドに位置する。主軸方位は N-4°-E である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。

規模は長軸 0.74m、短軸 0.53m、深さ 0.19m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・杯蓋（305）が出土している。造構の時期は出土遺物の年代観から 8世紀末～9世紀初頭頃と考えられる。

SK785 (図版 14・15・58、写真図版 41)

18AN6 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.60m、短軸 0.52m、深さ 0.15m である。埋土は単層である。遺物は須恵器長頸瓶（306）が出土している。造構の時期は出土遺物の年代観から 8世紀中葉～後葉頃と考えられる。

SK786 (図版 14・58)

18AM9 グリッドに位置する。主軸方位は N-17°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.57m、短軸 0.40m、深さ 0.10m である。埋土は単層である。遺物は須恵器杯蓋が出土している。

SK796 (図版 12・59)

15AP16・17・21 グリッドに位置する。主軸方位は N-40°-E である。SX415 に切られる。平面形は不明であるが、断面形は皿形を呈する。規模は現存長軸 1.00m、深さ 0.21m である。埋土は 2 層である。遺物は焼成粘土塊が出土した。

SK802 (図版 11・14・59、写真図版 41・42)

17AL10・15、17AM6・11 グリッドに位置する。主軸方位は N-41°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.63m、短軸 0.45m、深さ 0.14m である。埋土は単層である。遺物は須恵器杯蓋（307・308）、黒色土器杯蓋（309）が出土している。特に杯蓋（307・308）は逆位で重なった状態で検出された。造構の時期は出土遺物の年代観から 8世紀末～9世紀初頭頃と考えられる。

5) 焼 土

焼土は 25 基検出された。7 基は竪穴建物のカマド、3 基は竪穴状造構とした SX に伴うものと考えた。ここでは、検出時に竪穴建物のカマドと想定したが、明確な竪穴部を伴っていなかった残りの焼土を単体の造構として記述する。簡易的な炉であることも想定できるが、壁面や底面の酸化が弱いものも多い。

焼土 374 (図版 16・60、写真図版 42)

16AQ21 グリッドに位置する。主軸方位は N-75°-E である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.46m、短軸 0.36m、深さ 0.06m である。埋土は 2 層で、1・2 層ともに炭化物を多量に含む。壁面や底面の酸化は弱い。遺物は須恵器無台杯（310）、土師器長甕・小甕（311）が出土している。

焼土 379 (図版 12・16・60)

17AP4 グリッドに位置する。主軸方位は N-55°-W である。平面形は不定形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.30m、短軸 0.17m、深さ 0.07m である。埋土は 2 層で、1 層に焼土塊や炭化物を多量に含む。壁面や底面の酸化痕跡は弱い。遺物は出土していない。

焼土 387 (図版 16・60)

17AQ7 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.26m、短軸 0.25m、深さ 0.08m である。埋土は 2 層で、1・2 層ともに炭化物を多量に含む。壁面や底面の酸化痕跡は弱い。遺物は土師器小甕・鍋が出土している。

焼土 441 (図版 16・60)

17AQ9 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.28m、短軸 0.28m、深さ 0.06m である。埋土は単層で、焼土塊を含む。底面や壁面の酸化は見られない。遺物は出土していない。

焼土 446 (図版 16・60)

17AQ10 グリッドに位置する。主軸方位は N-1°-E である。SK443 に切られ平面形は不明であるが、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.30m、深さ 0.06m である。埋土は単層で、焼土塊を多く含む。底面や壁面の酸化は弱い。遺物は出土していない。

焼土 447 (図版 16・60)

17AQ5・10 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.24m、短軸 0.20m、深さ 0.05m である。埋土は単層で、焼土塊を多く含む。底面や壁面の酸化は弱い。遺物は出土していない。

焼土 454 (図版 16・60、写真図版 42)

17AP23・24 グリッドに位置する。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.51m、短軸 0.32m、深さ 0.10m である。埋土は単層で、焼土塊を多く含む。底面や壁面の酸化は弱い。遺物は土師器長甕(312)が出土している。

焼土 588 (図版 16・60、写真図版 42)

16AQ21、17AQ1 グリッドに位置する。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は現存長軸 0.36m、短軸 0.28m、深さ 0.05m である。埋土は 3 層で、焼土塊を多く含む。底面と壁面が被熱し、酸化している。遺物は出土していない。

焼土 594 (図版 16・60)

16AP25 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は現存長軸 0.24m、短軸 0.22m、深さ 0.03m である。埋土は単層で、焼土塊を含む。底面が被熱し酸化している。遺物は出土していない。

焼土 810 (図版 16・60、写真図版 42)

17AQ8 グリッドに位置する。主軸方位は N-45°-W である。平面形は不定形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.54m、短軸 0.52m、深さ 0.10m である。埋土は 4 層で、焼土塊を多く含む。底面や壁面が被熱し、酸化している。遺物は出土していない。

焼土 814 (図版 16・60)

17AQ7・8 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.40m、短軸 0.35m、深さ 0.08m である。埋土は 3 層で、2 層に焼土塊を含む。壁面が被熱し酸化している。遺物は出土していない。

焼土 818 (図版 16・60)

17AQ10 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.34m、短軸 0.30m、深さ 0.04m である。埋土は 2 層で、1 層に焼土塊を含む。底面や壁面の酸化は弱い。遺物は出土していない。

6) 性格不明遺構**SX3** (図版 21、写真図版 43)

23AJ22、24AI10、24AJ1～3・6～8・11～13 グリッドに位置する。SD55 に切られる。北西側の立ち上がりは明瞭ではなかったが、平面形は梢円形で、断面形は台形を呈する。規模は現存短軸 4.94m、深さ 0.42m である。埋土は 2 層である。竪穴状の落ち込みが検出されたが、カマドや床面が確認できることから、竪穴状遺構と考えた。遺物は須恵器無台杯・有台杯・杯蓋(313～315)、土師器無台椀・無台杯(316)、須恵器横瓶・甕、土師器長甕・小甕・鍋(317)、火打ち石、鉄製品が出土している。

SX31 (図版 20、写真図版 43)

22AM10・15・20、22AN6・11・16 グリッドに位置する。主軸方位は N-38°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 4.48m、短軸 2.24m、深さ 0.21m である。埋土は 3 層である。遺物は 2・3 層を中心須恵器無台杯・甕、黒色土器杯類・椀(318)、土師器無台杯・長甕(319)・小甕(320)が出土している。

SX37 (図版 20・60)

21AO2・3・7・8 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.85m、短軸 1.65m、深さ 0.25m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯(321)・有台杯(322)、黒色土器杯類・椀、土師器無台杯・長甕・小甕・鍋が出土している。

SX38 (図版 20・61)

21AN16・17・21～23 グリッドに位置する。主軸方位は N-69°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 3.45m、現存短軸 1.72m、深さ 0.19m である。埋土は 2 層である。1 層に粘性の強い白色の粘土が確認出来るが、性格は不明である。遺物は須恵器無台杯 (323)、黒色土器杯、土師器小甕が出土している。

SX62 (図版 22)

24AK、24AL、24AM グリッドに位置する。平面形は不定形で、断面形は皿形を呈する。規模は西側が複雑に切られるが長軸は 15m 以上と考えられ、短軸 2.98m、深さ 0.12m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (324)・有台杯・杯蓋 (325・326)、黒色土器無台杯、須恵器甕 (327)、土師器長甕・小甕・鍋、砥石 (653) が出土している。

SX63 (図版 16・61、写真図版 43・44)

17AP、17AQ、18AQ グリッドに位置する。SE278 に切られる。主軸方位は N-90° である。平面形は方形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸 4.02m、短軸 3.70m、深さ 0.23m である。埋土は単層である。竪穴状の落ち込みが検出されたが、カマドや床面、柱穴が確認できないことから、竪穴状遺構と考える。遺物は須恵器無台杯 (328～337)・有台杯 (338～340)・杯蓋 (341～346)・高杯 (347)・壺・瓶類、黒色土器無台杯、須恵器壺蓋・甕 (348)、土師器無台碗・無台杯・鉢・有台杯・長甕・小甕 (349～351)・鍋、砥石 (660・661)、鉄鐸 (700)・鉄製品 (724)、粘土塊が出土している。

SX64 (図版 16・62、写真図版 44)

17AQ3・7～9・12・13 グリッドに位置する。遺構の北西部部分は複雑に切られる。SI65、SB828-P435・422 を切り、SX283 に切られる。主軸方位は N-42°-E である。平面形は長方形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸 3.33m、深さ 0.22m である。埋土は 4 层である。検出時は竪穴状の落ち込みが確認できたが、床面や柱穴は検出できなかったため、竪穴状遺構と考えた。出土遺物に鉄製品や鉄滓などがあり、鍛冶関連遺構の可能性がある。また、東辺や西北寄りの IV 層で焼土 816 が検出された。焼土 816 の埋土は 5 層で、1・4 層に焼土を多く含む。鍛冶炉の可能性も想定されるが、底面や壁面の酸化は弱い。3 層からは石列 381 や焼土 811 が検出されている。石列 381 には梢円形や不整形の搬入磧が使用されているが、掘り込みなどは確認できなかった。焼土 811 は単層で、底面の酸化は弱い。遺物は SX64 から須恵器無台杯 (352・353)・有台杯 (354・355)・杯蓋・壺・瓶類、土師器無台碗 (356)・鉢 (357)・長甕 (358～361)・小甕 (362～364)・鍋 (365～368)、黒色土器椀類・短頸壺、鉄製品、橢形鍛冶滓 (643)、焼土 811 から土師器長甕、焼成粘土塊、焼土 816 から須恵器甕類が出土している。

SX66 (図版 15・60、写真図版 45)

19AO4・5・9・10 グリッドに位置する。主軸方位は N-18°-E である。平面形は不定形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 3.22m、現存短軸 2.25m、深さ 0.42 m である。埋土は 2 層である。遺物は須恵器無台杯 (369)・有台杯 (370～372)・杯蓋、黒色土器無台杯、土師器無台杯 (373)、須恵器甕、土師器長甕・小甕・鍋が出土している。

SX70 (図版 16、写真図版 45)

19AP グリッドに位置する。主軸方位は N-74°-E である。平面形は方形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸 5.88m、短軸 5.12m、深さ 0.24m である。埋土は 3 層である。遺物は須恵器無台杯 (374・375)・有台杯 (376・377)、横瓶 (378)・長頸瓶 (379)・壺蓋 (380)・甕、土師器無台碗・鉢・長甕・小甕・鍋、刀子 (706)、鉄滓、編み物石 (688) が出土している。

SX124 (図版 16、写真図版 45)

18AP、18AQ、19AP、19AQ グリッドに位置する。平面形は不定形で、断面形は台形を呈する。規模は長

軸 10m 以上、短軸 3.30m、深さ 0.18m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (381 ~ 385)・有台杯 (386 ~ 387)・杯蓋 (388)、土師器鉢 (389)、黒色土器壺蓋 (390)、須恵器壺・瓶類・甕 (391)、土師器無台楕・無台杯・長甕・小甕・鍋、砥石 (655)、鉄製品、楕形鍛治津 (644)、炉壁が出土している。

SX215 (図版 16・62、写真図版 45)

16AP、16AQ、17AP、17AQ グリッドに位置する。検出時は広範囲の遺物分布と石列が認められた。しかし遺構のプランがつかめず、石列に掘り込みも認められなかつたため、この石列 831 を含めた遺物集中範囲を SX125 とした。遺物は須恵器無台杯 (392 ~ 395)・有台杯 (396 ~ 399)・杯蓋 (400 ~ 402)・壺蓋・黒色土器杯蓋 (405)、土師器無台杯 (403)・有台杯 (404)・鉢 (406)・長甕 (407)・小甕 (408 ~ 412)・甕 (3)・鍋 (413)、須恵器甕 (414)、砥石 (652)、磨石、鉄製品、楕形鍛治津 (641) が出土している。

SX240 (図版 19・61、写真図版 45)

23AM11 グリッドに位置する。主軸方位は N-71°-E である。平面形は不定形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.30m、短軸 0.88m、深さ 0.05m である。埋土は 2 層である。カマドの可能性があるが、竪穴建物は検出できなかつた。3 レンチに位置し、第 1 次調査で削平された可能性がある。遺物は須恵器無台杯 (415) が出土している。

SX283 (図版 16・63、写真図版 46・47)

17AQ7 ~ 9・11 ~ 14・17 ~ 19 グリッドに位置する。多くの遺構と重複しているため、新旧関係は別表 1 に記載した。主軸方位は N-58°-W である。平面形は方形で、断面形は台形を呈する。規模は現存長軸 4.68m、現存短軸 4.00m、深さ 0.29m である。埋土は 2 層である。検出時は竪穴状の落ち込みが確認できたが、床面や柱穴は検出できなかつたため、竪穴状遺構と考える。出土遺物に鉄製品や鉄津などがあるため、鍛冶関連遺構の可能性がある。また東辺中央に焼土 819 が検出された。焼土 819 の埋土は 2 層で、1 層に焼土塊を含む。鍛冶炉の可能性も想定されるが、底面や壁面の酸化は弱い。遺物は SX283 から須恵器無台杯 (416 ~ 419)・有台杯 (420・421)・杯類・杯蓋 (422)・稜楕 (423)、土師器無台杯 (424 ~ 426)・鉢 (427)、須恵器横瓶・壺蓋・長頸瓶 (428)・甕・黒色土器杯・土師器長甕・小甕 (429・430)・鍋、鉄製品、鉄津が、焼土 819 から須恵器甕・土師器長甕・小甕・砥石・編み物石 (690) が出土している。

SX365 (図版 17)

23AG14 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.9m 以上、短軸 0.68m、深さ 0.32m である。埋土は単層である。遺物は黒色土器高杯 (431) が出土している。

SX382 (図版 16・63)

17AQ9 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.46m、深さ 0.06m である。埋土は単層である。遺物は出土していない。

SX406 (図版 16、写真図版 47)

16AP25、16AQ21・22、17AP4・5、17AQ1・2・6 グリッドに位置する。断面形は皿形となる。規模は深さ 0.11m である。埋土は単層である。検出時は竪穴建物と想定したが、平面プランがはっきりせず、床面や柱穴を作わないことから、竪穴状遺構の可能性がある。遺物は須恵器無台杯・杯類・杯蓋・土師器長甕・小甕 (432)・鍋が出土している。

SX407 (図版 16・64、写真図版 47)

16AQ6・7・11 ~ 13・16 ~ 18 グリッドに位置する。SK422 を切る。主軸方位は N-55°-W である。平面形は楕円形で、断面形は台形となる。規模は長軸 5.16m、深さ 0.39m である。埋土は 2 層である。遺構の北側は調査区外のため全容は明らかでない。2 層直上に搬入跡を用いた集石がみられ、炉の可能性があるが被熱してはいない。遺物は須恵器無台杯・杯類・杯蓋 (433)・高杯 (434)、土師器無台杯・長甕 (435)・小甕・鍋 (436)、羽口が出土している。

SX411 (図版 11、写真図版 47)

15AM15、15AN11 グリッドに位置する。主軸方位は N-79°-W である。平面形は不定形で、断面形は皿形となる。規模は現存長軸 1.96m、短軸 1.01m、深さ 0.12m である。埋土は 2 層である。遺物は須恵器無台杯(437)、土師器鉢(438)が出土している。

SX415 (図版 12・64、写真図版 47)

15AP16・17・21・22、16AO5、16AP1・2 グリッドに位置する。SK796 を切る。主軸方位は N-38°-E である。平面形は梢円形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 3.88m、深さ 0.10m である。埋土は単層である。底面で破壊した焼碟がまとまって出土 (208 点、約 18kg) したが、性格は不明である。遺物は須恵器無台杯 (439～441)・有台杯 (442)・壺・瓶類・甕 (443・444)、土師器長甕・鍋、焼碟が出土している。

SX416 (図版 12・15・64、写真図版 48)

16AO5・10 グリッドに位置する。平面形は円形か梢円形と推定され、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 0.9m 以上、短軸 1.57m、深さ 0.16m である。埋土は単層である。SX415 同様に破壊した焼碟がまとまって出土 (170 点、約 6.7kg) した。遺物は須恵器杯蓋 (445)、土師器小甕 (446)、焼碟が出土している。

SX421 (図版 12・65、写真図版 48)

15AP17・18・22～24、16AP3・4 グリッドに位置する。東側は調査区外に延びる。SD420、P417 に切られ、平面形は不明、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 1.6m 以上、短軸 6.7m 以上、深さ 0.22m である。埋土は単層である。造構の西側に集石がみられ、炉の可能性が考えられるが被熱してはいない。遺物は須恵器無台杯 (447)・有台杯 (448)・杯類・杯蓋・高杯 (449)・壺・瓶類・甕 (450)、土師器長甕・小甕・鍋、円面鏡 (638)、砥石、鐵滓が出土している。

SX425 (図版 16・64、写真図版 48)

17AQ7・8・11～13 グリッドに位置する。北西側は搅乱で切られる。P436 を切る。断面形は台形を呈する。規模は長軸・短軸ともに 2.85m 以上、深さ 0.55m である。埋土は 2 層である。2 層直上から炭化した獸と思われる木製品が出土したが、脆弱であったため、取り上げには至っていない。遺物は須恵器無台杯 (451～455)・有台杯 (456)・杯類・杯蓋・壺蓋 (459)・壺・瓶類・甕、土師器無台杯 (457)・有台杯 (458)・鉢・長甕 (460)・小甕 (461～464)・鍋、鐵滓が出土している。

SX469 (図版 12・16、写真図版 48・49)

16AP6～8・11～25、17AP1～5 グリッドに位置する。平面形は方形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 6.8m 以上、現存短軸 7.59m、深さ 0.26m である。埋土は単層である。検出時は竪穴状造構と考えたが、掘り込みは浅い。遺物は須恵器無台杯 (465～469)・有台杯 (470)・杯類・杯蓋 (471・472)、土師器無台杯 (473)・杯類・鉢・黒色土器碗 (474)、須恵器高杯 (475)・壺蓋 (476)・壺 (477)・甕、土師器長甕 (478・479)・小甕 (480・481)・鍋 (482)、磨石 (676)、鐵製品、鐵滓が出土している。

SX509 (図版 17、写真図版 49)

22AG14・15・19・20・24・25、22AH16・21 グリッドに位置する。SD480 に切られる。西側は調査区外に延びるため、平面形は不明、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 3.15m 以上、短軸 4.2m 以上、深さ 0.34m である。埋土は 2 層である。遺物は須恵器無台杯 (490)・有台杯・杯類・杯蓋 (491)、土師器無台碗・鉢、須恵器甕、土師器長甕・小甕 (492) が出土している。

SX613 (図版 12・15)

16AO21・22、17AO1～3・6 グリッドに位置する。主軸方位は N-38°-E である。平面形は梢円形と推定され、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 4.00m、短軸 1.95m 以上、深さ 0.20m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・有台杯 (493)・壺・瓶類・甕、土師器長甕・小甕・鍋が出土している。

SX623 (図版 18・65)

22AH19・20 グリッドに位置する。主軸方位は N-72°-E である。西側は SK584 に切られるため、平面形は不明、断面形は皿形を呈する。規模は長軸 2.4m 以上、短軸 0.98m、深さ 0.09m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・杯類、土師器無台杯、須恵器壺・瓶類・甕、土師器長甕・小甕・鍋が出土している。

7) 溝

SD397 (図版 16・66、写真図版 50)

17AP12・13・17～19・24 グリッドに位置する。SK462 を切る。断面形は皿形を呈する。規模は短軸 0.22m 以上、深さ 0.10m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (497)・有台杯・杯蓋、黒色土器杯、須恵器壺・瓶類、土師器長甕・小甕・鍋が出土している。

SD420 (図版 12・16・27・66、写真図版 50・51)

16AP、17AP、17AQ グリッドに位置する。北側は調査区外に延びる。SI451、SX421 を切る。断面形は台形を呈する。規模は短軸 0.58～2.26m、深さ 0.18～0.47m である。埋土は 2 層である。北から東に向かって緩やかにカーブしており、東に行くほど幅が狭くなる。溝の向きから、SB829 の周溝である SD357 と同一である可能性もあるが、遺構の重複が激しく、不明瞭だったため、単独の遺構として扱っている。遺物は須恵器無台杯 (498～504)・有台杯 (505～513)・杯類・杯蓋 (514～516)・壺蓋 (518)、土師器無台杯、黒色土器鉢・短頸壺 (517)・椀類、須恵器鉢 (519)・壺・瓶類・甕 (520)、土師器長甕 (521・522)・小甕 (523・524)・鍋、鐵石 (662)、砾石 (658)・軽石製品 (668)、鉄製品、鉄滓が出土している。

SD515 (図版 17・18・66、写真図版 51・59)

23AH6・7・11～15 グリッドに位置する。西側は調査区外に延びる。SK540、P539 を切り、SX476 に切られる。断面形は U 字形を呈する。規模は短軸 0.75m、深さ 0.33m である。埋土は 3 層である。遺物は須恵器無台杯 (531・532)・有台杯・杯類・杯蓋 (533・534)・鉢、土師器無台椀 (535・536)・無台杯、須恵器壺蓋・壺・瓶類・甕、黒色土器鉢・短頸壺、土師器長甕・小甕・甕、軽石製品 (671)・鍋、鉄製品、鉄滓が出土している。

SD525 (図版 9・17・18・66、写真図版 51・59)

23AG5、23AH1～4・9 グリッドに位置する。東側は調査区外に延びる。SK511、SX476 に切られる。断面形は皿形を呈する。規模は短軸 0.60m、深さ 0.08～0.32m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (539)・杯類・杯蓋・壺・瓶類・甕、土師器長甕・小甕、軽石製品 (671) が出土している。

SD531 (図版 17・66、写真図版 51)

23AH11～13 グリッドに位置する。東側は調査区外に延びる。断面形は U 字形を呈する。規模は短軸 0.47m、深さ 0.20m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (540)・有台杯・杯蓋、土師器長甕・小甕、鉄滓が出土している。

SD537 (図版 17・49、写真図版 34)

22AH16～18 グリッドに位置する。SK532 に切られる。主軸方位は N-79°-W である。断面形は U 字形を呈する。規模は長軸 3.87m、短軸 0.40m、深さ 0.23m である。埋土は単層である。遺物は土師器長甕・小甕・鍋 (541) が出土している。

SD538 (図版 17・18・49・66、写真図版 34・51)

22AH16・17・21～24 グリッドに位置する。SK532、SX476 に切られる。主軸方位は N-77°-W である。断面形は皿形を呈する。規模は長軸 5.75m、現存短軸 1.47m、深さ 0.25m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (542)・有台杯・杯類・甕、土師器長甕・小甕・鍋が出土している。

SD592 (図版 12・15・65・66、写真図版 49・51)

17AO13・14・19 グリッドに位置する。SX605 を切る。断面形は台形を呈する。規模は現存短軸 0.50m、深さ 0.20～0.32m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・有台杯・杯蓋 (543)・壺・瓶類・甕、土

師器長甕・小甕（544）が出土している。

SD606 (図版 11・12、写真図版 52)

14AM、14AN、14AO、15AO グリッドに位置する。東側と西側は調査区外に延びる。断面形は皿形・台形を呈する。規模は短軸 0.36 ~ 2.20m、深さ 0.36m である。埋土は 4 層である。東側の調査区端は擾乱で明瞭ではないが、埋土の堆積状況が異なるため別遺構の可能性がある。遺物は須恵器無台杯、土師器長甕・東側調査区端から鉄滓が付着した焼甕（683）、鉄製品が出土している。

SD673 (図版 18・66、写真図版 52)

22AI14・15・19・20・24・25 グリッドに位置する。SK703 を切る。主軸方位は N-16°-E である。断面形は皿形を呈する。規模は長軸 4.17m、短軸 1.05m、深さ 0.09m である。埋土は单層である。遺物は須恵器無台杯・杯類・杯蓋（547）、土師器長甕・鍋が出土している。

8) ピット

古代のピットは 280 基検出し、柱痕が認められるものや遺物が多く出土したものを掲載した。集中している範囲は調査区の北東側と南西側で、北東側では竪穴建物や掘立柱建物が隣接する。各ピットから出土した土器は春日編年で IV 期～V 期にあたり、おおむね 8 世紀後半～9 世紀初頭とみられる。記述が煩雑になるのを避けるため、以下、個々のピットについての記述は別表 1 に譲り省略する。

B 中世の遺構

中世の遺構は溝 4 条で、Ⅲ層で検出した。調査区南東部に存在している。遺構埋土の土色はにぶい黄褐色、褐色、灰黃褐色が主体である。

1) 溝

SD47 (図版 22、写真図版 56)

24AK、24AL、24AM グリッドに位置する。西側は調査区外に伸びる。断面形は皿形となる。規模は短軸 0.62m、深さ 0.12m である。埋土は单層である。溝の向きが一致するため、SD54 と同一遺構の可能性がある。遺物は土師器長甕、珠洲焼片口鉢（606）が出土している。

SD49 (図版 21)

26AJ、27AJ グリッドに位置する。南側は調査区外に伸びる。断面形は皿形となる。規模は短軸 0.35 ~ 0.62m、深さ 0.11m である。埋土は单層である。溝の向きが一致するため、SD226 と同一遺構である可能性がある。遺物は出土していない。

SD54 (図版 21・22)

24AI、24AJ、24AK グリッドに位置する。断面形は皿形となる。規模は短軸 0.94m、深さ 0.17m である。埋土は 2 層である。溝の向きが一致するため、SD47 と同一遺構の可能性がある。遺物は須恵器無台杯（494）、土師器長甕・小甕（495）・鍋が出土している。

SD226 (図版 21、写真図版 56)

24AJ、25AJ グリッドに位置する。断面形は皿形となる。規模は短軸 0.68m、深さ 0.10m である。埋土は单層である。溝の向きが一致するため、SD49 と同一遺構の可能性がある。遺物は土師器小甕、珠洲焼甕（607）が出土している。

C 近世の遺構

近世の遺構は井戸 2 基・土坑 23 基・性格不明遺構 3 基・ピット 3 基・溝 13 条で、調査区の全域にまばらに分布している。検出面はⅢ層である。土坑のうち埋土が黒色シルト土主体の 16 基 (SK1・2・8 ~ 13・15・16・52・478・544・545・556・600) は墓坑と考える。土壤を採取して篩選別を行い、得られた資料を第 2 表に示す。

した。その結果も含めて銭貨や焼骨片・炭化物・焼成粘土塊・焼土塊などが多く出土した 10 基 (SK1・2・8～11・478・544・556・600) は、火葬墓の可能性も考えられるが、遺構底面などに被熱痕跡はなく硬化も見られなかった。平面形は方形で皿形や箱形の断面形状を呈するものが多いが、表土直下のⅢ層で検出される遺構もあり SK12・13 などは非常に浅い。

1) 井 戸

SE6 (図版 21・70, 写真図版 56)

26AJ4・9 グリッドに位置する。主軸方位は N-36°-W である。平面形は円形で、断面形は U 字形となる。規模は長軸 0.92m、短軸 0.89m、深さ 0.71m である。埋土は 6 層である。遺物は土師器長甕、銭貨が出土している。SE20 の埋土と土質・色調ともに類似しているため近世の遺構とした。

SE20 (図版 20・70, 写真図版 56)

20AN24, 21AN3・4 グリッドに位置する。主軸方位は N-53°-E である。平面形は円形で、断面形は箱形となる。規模は長軸 1.25m、短軸 1.10m、深さ 1.36m である。埋土は 4 層である。遺物は土師器長甕、近世陶器碗 (608)・播鉢 (609)、砥石、火打ち石 (678)、粘土塊が出土している。

2) 土 坑・墓 坑

SK1 (図版 21・70, 写真図版 57)

25AI9・14・15 グリッドに位置する。主軸方位は N-57°-W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 1.48m、短軸 1.02m、深さ 0.42m である。埋土は 2 層である。埋土に焼土塊や焼骨片が含まれることから墓坑と考える。遺物は土師器長甕・小片、銭貨 (728)、鉄製品、木製数珠玉 (750～752)、焼成粘土塊が出土している。

SK2 (図版 21・71)

24AI25 グリッドに位置する。主軸方位は N-28°-E である。平面形は円形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 0.54m、短軸 0.44m、深さ 0.07m である。埋土は単層である。埋土に焼土塊や焼骨片が含まれることから墓坑と考える。遺物は出土していない。

SK7 (図版 21)

26AJ20・25、26AK16・21 グリッドに位置する。主軸方位は N-29°-W である。断面形は皿形となる。規模は長軸 2.06m、深さ 0.13m である。埋土は 2 層で焼骨片や炭化物が含まれることから墓坑と考える。遺物は近世陶磁器が出土している。

SK8 (図版 22・70, 写真図版 57)

24AL1・6 グリッドに位置する。主軸方位は N-67°-E である。平面形は長方形で、断面形は皿形となる。規模は現存長軸 1.94m、短軸 1.00m、深さ 0.19m である。埋土は 2 層である。埋土に焼土塊や焼骨片が含まれることから墓坑と考える。遺物は銭貨 (727)、鉄製品、焼成粘土塊が出土した。

SK9 (図版 22・70)

24AL11 グリッドに位置する。主軸方位は N-82°-E である。平面形は梢円形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 1.14m、短軸 0.76m、深さ 0.10m である。埋土は 2 層である。埋土に焼土塊や焼骨片が含まれることから墓坑と考える。遺物は焼成粘土塊が出土している。

SK10 (図版 19・70, 写真図版 57)

22AM21, 23AM1 グリッドに位置する。主軸方位は N-8°-W である。平面形は長方形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 2.46m、短軸 1.39m、深さ 0.32m である。埋土は 3 層である。埋土に焼骨片が含まれることから墓坑と考えられるが、遺構底面や壁面に被熱痕跡は見られず、硬化などは確認できなかった。遺物は土師器長甕・小甕、近世磁器染付皿 (610)、銭貨 (730)、鉄製品、木製数珠玉 (753・754)、焼成粘土塊が出土している。

SK11 (図版 19・70)

21AL8 グリッドに位置する。主軸方位は N-69°-W である。平面形は楕円形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 1.00m、短軸 0.63m、深さ 0.15m である。埋土は 2 層である。埋土に焼骨片が含まれることから墓坑と考える。遺物は出土していない。

SK12 (図版 19・71)

21AL3・8 グリッドに位置する。主軸方位は N-20°-W である。平面形は円形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 0.91m、短軸 0.82m、深さ 0.07m である。埋土は単層である。埋土に焼骨片が含まれることから墓坑と考える。遺物は出土していない。

SK13 (図版 19・71)

22AM8・9 グリッドに位置する。主軸方位は N-82°-W である。平面形は方形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 0.74m、短軸 0.60m、深さ 0.10m である。埋土は 2 層である。埋土に焼土塊や焼骨片が含まれることから墓坑と考える。遺物は出土した。

SK14 (図版 19・71)

20AM6 グリッドに位置する。SD380 に切られる。主軸方位は N-40°-E である。平面形は円形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 0.91m、深さ 0.13m である。埋土は単層である。遺物は出土していない。

SK15 (図版 20・72、写真図版 57)

21AN19・20・24・25 グリッドに位置する。主軸方位は N-77°-W である。平面形は楕円形で、断面形は台形となる。規模は長軸 0.85m、短軸 0.63m、深さ 0.17m である。埋土は 3 層である。埋土に歯を含む焼骨片がみられることから墓坑と考える。また、今回の調査では唯一、造構の底面で底板が検出された。遺物は石製数珠玉 (650)、釘 (717・718) が出土している。

SK16 (図版 15・72)

18AN14・15 グリッドに位置する。主軸方位は N-54°-W である。平面形は円形で、断面形は台形となる。規模は長軸 1.06m、短軸 0.98m、深さ 0.39m である。埋土は 2 層に分層されるが、黒褐色シルト主体であり墓坑と考える。遺物は銭貨 (729・731) が出土している。

SK19 (図版 20・71、写真図版 58)

20AO22・23, 21AO2・3 グリッドに位置する。SK48 を切る。主軸方位は N-86°-W である。平面形は長方形で、断面形は箱形となる。規模は長軸 2.93m、短軸 1.67m、深さ 0.50m である。埋土は 6 層である。遺物は須恵器甌、土師器長甌、肥前磁器皿 (611)・徳利 (612)・近世陶磁器が出土している。

SK26 (図版 20・71、写真図版 58)

21AO3～5・8～10 グリッドに位置する。東側は調査区外に伸びる。SK36 を切る。断面形は台形となる。規模は短軸 1.40m、深さ 0.48m である。埋土は 4 層である。遺物は須恵器無台杯・杯類・甌、土師器長甌が出土している。

SK284 (図版 17・72)

23AG19・24 グリッドに位置する。主軸方位は N-58°-E である。平面形は円形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 0.76m、短軸 0.75m、深さ 0.05m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・杯蓋、土師器小甌が出土している。

SK478 (図版 21・72)

24AI6・7・11・12 グリッドに位置する。主軸方位は N-59°-W である。平面形は楕円形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 1.98m、短軸 1.55m、深さ 0.05m である。埋土は黒色シルトの単層である。焼骨片や炭化物などはわずかであるが墓坑と考える。遺物は鉄製品が出土している。

SK544 (図版 18・72)

21AH25・22AH5 グリッドに位置する。SK545 を切る。主軸方位は N-2° -E である。平面形は梢円形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 1.20m、深さ 0.21m である。埋土は 2 層で焼骨片が含まれることから、墓坑と考える。遺物は近世陶磁器、銭貨、鉄製品が出土している。

SK545 (図版 18・72)

21AH24・25 グリッドに位置する。SK544 に切られる。平面形は梢円形で、断面形は皿形となる。規模は短軸 0.96m、深さ 0.13m である。埋土は 2 層に分層されるが、黒色シルト主体であり墓坑と考える。遺物は銭貨、鉄製品が出土している。

SK556 (図版 18・72、写真図版 58)

21AI11・12・16・17 グリッドに位置する。主軸方位は N-11° -W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 1.45m、短軸 1.07m、深さ 0.26m である。埋土は 3 層である。焼骨片が含まれることから墓坑と考える。遺物は銭貨、鉄製品が出土している。

SK600 (図版 12・72、写真図版 58・59)

14AN20 グリッドに位置する。主軸方位は N-7° -E である。平面形は梢円形で、断面形は箱形となる。規模は長軸 1.10m、短軸 0.70m、深さ 0.61m である。埋土は 6 層に分層され、黒色シルト主体である。墓坑と考えるが、非常に深く、他の墓坑とは断面形状が明らかに異なる。遺物は鉄製品が出土している。

3) 性格不明遺構**SX476** (図版 17・18・47、写真図版 59)

22AH、23AG、23AH グリッドに位置する。多くの遺構と重複しており、新旧関係は別表 1 に記載した。断面形は皿形となる。規模は短軸 6.47m、深さ 0.16m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯 (483・484)・有台杯 (485～488)・杯類・杯蓋・甕、土師器無台椀・無台杯・長甕・小甕・鍋が出土している。

SX482 (図版 17・72)

23AH6・7 グリッドに位置する。主軸方位は N-69° -W である。平面形は梢円形で、断面形は皿形となる。規模は長軸 2.20m、短軸 0.85m、深さ 0.13m である。埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・有台杯 (489)、土師器無台杯・長甕・小甕、粘土塊が出土している。

4) 溝**SD25** (図版 20、写真図版 59)

20AN、20AO、20AP グリッドに位置する。西側は複雑に切られ、東側は調査区外へ延びる。西側は幅が狭く浅いが、東側は幅が広く非常に深くなり別遺構の可能性がある。断面は台形で、埋土は 2 層である。遺物は須恵器有台杯・甕類、土師器長甕・近世陶磁器、軽石製品、搬入罐が出土している。

SD55 (図版 21・72)

24AI、24AJ グリッドに位置する。SX3 を切るが、両端は第 1 次調査によって削平される。断面形は皿形で、埋土は単層である。遺物は須恵器無台杯・有台杯、土師器長甕・小甕、近世陶磁器、煙管の雁首 (726)・鉄製品が出土している。

SD343 (図版 17・72)

23AG13・14 グリッドに位置する。主軸方位は N-71° -W である。断面形は U 字形となる。規模は現存長軸 1.05m、短軸 0.31m、深さ 0.22m である。埋土は単層である。遺物は土師器小甕・瓶 (496) が出土している。

第V章 遺物

第1節 概要

今回の調査では土器・陶磁器・土製品・石器・石製品・金属製品・鍛冶関連遺物・木製品・自然遺物が出土している。その量は、第2次調査でコンテナ（内寸54.5×33.6×10.0cm）187箱、第3次調査で246箱と水槽（内寸1.6×1.0×0.6m）2箱である。全体の内訳は、古代（古墳時代を含む）土器288箱、中近世陶磁器14箱、土製品6箱、石器・石製品83箱、金属製品・鍛冶関連遺物12箱、木製品4箱と水槽2槽、歯などを含む自然遺物26箱で古墳時代～近世の遺物がある。古代土器が圧倒的に多く古墳時代及び中近世の土器・陶磁器の出土量は少量で、土製品・石器・石製品・鍛冶関連遺物などの帰属時期はおおむね古代と考える。なお、金属製品・木製品・自然遺物の大半は古代と近世の遺構から出土している。また、接合資料はその帰属判断が難しいが、遺構出土資料が含まれる場合には遺構出土遺物として扱い、複数の遺構資料が含まれる場合には、遺構の切り合い関係や破片数・破片の大きさで帰属を決めている。接合関係は観察表（別表2～7）に記載したが、土器・土製品は実測図に出土地点すべてを示した。

掲載遺物のうち、土器については各時代の遺構出土資料を優先し、第IV章の遺構順に記載している。その他の遺物については、量が少ないため種別・器種ごとに記載した。各遺物の属性・情報については観察表にまとめたが、特に注意される点や補足が必要なものは本文に記した。各項目の注意点は、別表2の最初に示している。

第2節 土器（図版6・7・73～108、写真図版60～91）

出土した全土器・陶磁器の総重量は422,215gである。そのうち、時代ごとの土器が占める割合は重量比で古墳時代0.06%（263g）、古代99.00%（418,011g）、中世0.02%（64g）、近世0.92%（3,877g）である。古代土器については各種別の割合は須恵器43.5%（181,800g）、土師器55.7%（232,829g）、黒色土器0.80%（3,382g）である。土器は奈良時代（8世紀後半）が最も多く、平安時代（9世紀前半）が次に続く。古代土器の小グリッド別重量分布図を見ると、土師器・須恵器の分布は遺構と重なり調査区北東側と南西側で出土量が多い。また、黒色土器は調査区南西側では少なく、調査区北東側でやや多く出土している（図版6・7）。古墳時代の土器は6点出土し、全て円化した。帰属時期は全て前期である。出土地は試掘調査（第1次調査2トレンチ）で1点、ほかは調査区南西側及び北東側の古代遺構から出土した。中世と近世の土器・陶磁器は当期の遺構が分布する調査区南東側に散在している。

A 記述の方法

土器は時代順に遺構出土、包含層出土に分けて記述した。土器の法量や胎土等などの詳細な情報は別表2に記載した。古代の時期区分及び年代観については、春日真実氏による編年（春日1999・2005）に従った。調整技法及び実測図の表現方法については、山三賀Ⅱ遺跡〔坂井ほか1989〕の報告書を参考に以下のとおりとした。

ロクロ回転を利用したナデをロクロナデ。利用しないものをナデとした。

ロクロ回転を利用した削りをロクロケズリ。利用しないものをケズリとした。

ロクロ回転を利用した刷毛目をカキメ。利用しないものをハケメとした。

ロクロ成形による底部の切り離しは回転ヘラ切りと回転糸切りがある。記述の際には「回転」を省略した。

須恵器壺や土師器長壺などの外面に見られる叩板の痕跡をタタキメ、内面の当て具の痕跡を当て具痕とした。小破片のため径の復元が困難な場合は、実測図の中心線と左右の線の間隔をあけた。

色調については『新版標準土色帖』(小山・竹原 1967)に従い、土器外面の平均的な色調を観察表に記載した。本資料の須恵器胎土及び編年の位置付けなどは、春日真実氏にご教示頂いた。須恵器の胎土については(春日 2019)に準拠し、以下のとおりとした。

A群：大型の石英・長石などを多く含む粗い胎土。阿賀北地域の窯跡群産に特徴的な胎土。

B群：白色小粒子を多く含むきめ細かい胎土。器面に黒色の吹き出しや斑点が見られる。佐渡小泊窯跡群産に特徴的な胎土。

C群：小型の石英・長石を少量含む粘土質の胎土。新津丘陵窯跡群産に特徴的な胎土。

D群：A～C群以外のもの。

B 古代土器の分類（第6～8図）

(春日 2019)を参考に、種別ごとに器種を分類した。器形による分類はアルファベット、細分する場合は算用数字、法量による分類はローマ数字を使用し、器種ごとに組み合わせて表記した。

須 恵 器

無台杯 杯のうち高台が付かないもの。底部切り離しはヘラ切りで、後にナデを加えるものが多い。糸切りは1点のみ確認した(469)。底部の形態により、丸底をA類、平底をB類とした。また口径14cm以上をI類、口径12cm以上14cm未満をII類、口径12cm未満をIII類とした。

有台杯 杯のうち高台が付くもの。器高指数35以下をA類、器高指数36以上をB類とした。また外面に沈線が施される、金属器を模倣したものをX類とした。さらに口径15cm以上をI類、口径13cm以上15cm未満をII類、口径11cm以上13cm未満をIII類、口径11cm未満をIV類とした。

杯蓋 有台杯に伴う蓋である。口端部径14.0cm以上をI類、口端部径11.0cm以上14.0cm未満をII類、口端部径11.0cm未満をIII類とした。

鉢 口縁部が内湾する鉄鉢形鉢(64・198)と、頸部くびれて口縁部が外傾する鉢(519)がある。

稜挽 腹部に強い稜線が入る椀である。出土量は少ない。

折縁杯 阿賀北地域で主にみられる有台器種で、口縁端部が折縁状となる。

高杯 脚部が長いもの(193・194)と短いもの(449)がある。

横瓶 伝型の胴部に短く外反する口縁部が付く。

長頸瓶 算盤玉状に肩が張る胴部に長い頸部が付く。大型(379)・中型(196)・小型(306・428)がある。

環状瓶 胸部が環状で1か所に口頸部を付す瓶。鳥足を模した脚が3本付く。1点のみ出土した(195)。

罐 完形品が1点ある(197)。口縁部は段をもち、高台が付く。

短頸壺 球胴に短い口縁部が付く壺。出土量は少ない。

壺蓋 短頸壺に伴う蓋である。口端部が外傾または直立するもの(380・459)と内側に屈曲するもの(528)がある。

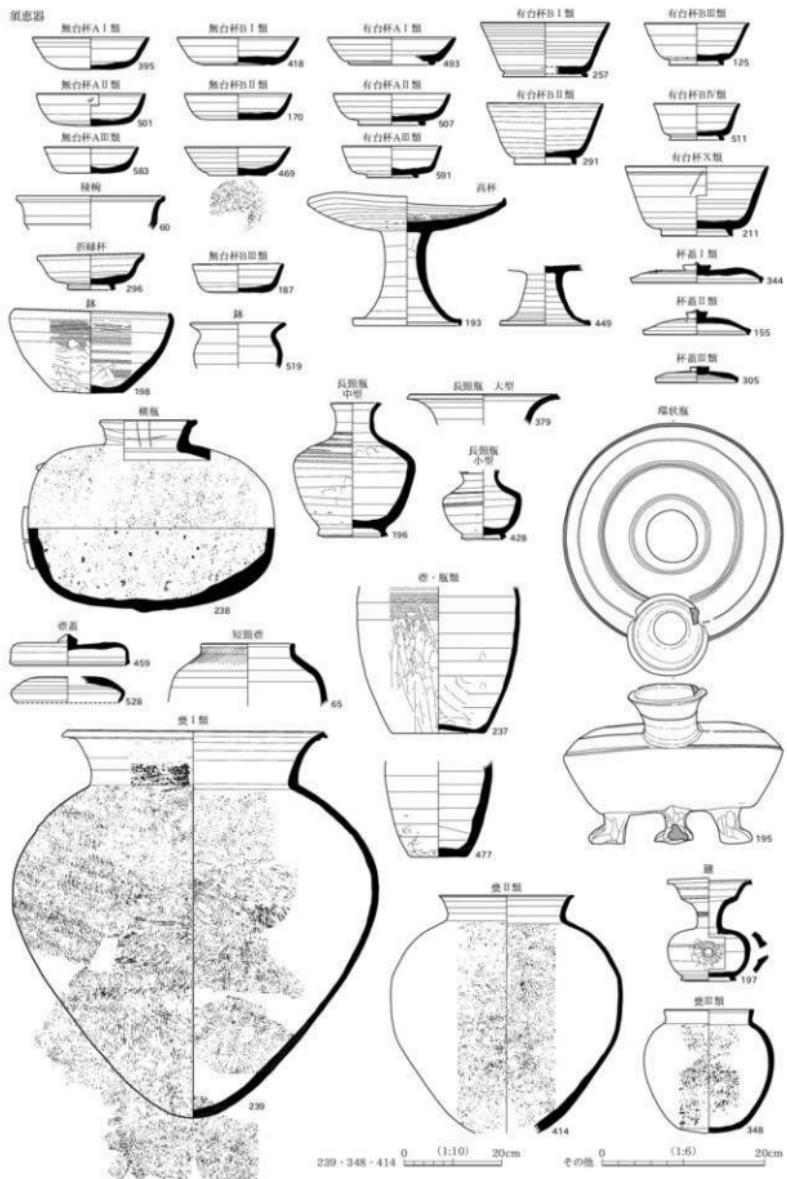
壺・瓶類 口頸部が残存していないなどで壺か瓶か判別できないものを壺・瓶類とした(237・477)。

壺 口径38cm以上のI類(大型)、口径22～38cmのII類(中型)、口径22cm未満のIII類(小型)がある。I類の口縁部には波状文が施され、II類・III類は無文である。

土 師 器

無台杯 須恵器無台杯と器形や製作技法が同じもの。須恵器無台杯と同様に口径12～13cm程度のものが多いが、口径10cm未満の小型で深身のものもある(426・457)。前者には、内外面が赤彩されたものもある(597)。

有台杯 須恵器有台杯と器形や製作技法が同じもの。内外面が赤彩されたもの(160)もある。出土量は少ない。



第6図 器種分類図1

無台椀 ロクロ成形の椀である。

鉢 口縁部が外傾する A 類と、くの字状に外傾する B 類がある。A・B 類とも非ロクロ成形とロクロ成形があるが、出土量が少ないので細分はしていない。小型の鉢を C 類とした。台付と台が付かないものがある (266・301)。

高杯 全形が残る個体は無い。1 点のみ確認した (568)。

盤 ロクロ成形で杯よりも浅い。内外面に赤彩が施されたもの (86)。

短頸壺・壺蓋 外面と高台内面は赤彩され、体部にはミガキが施される (245・246)。

長甕 山三賀Ⅱ遺跡 [坂井ほか 1989] の分類を参考に、非ロクロ成形を A 系、ロクロ成形を B 系、ロクロ成形で平底を C 系とした。また口縁部形態により以下のように細分した。

1 類：口縁端部が丸いもの

2 類：口縁端部に面をもつものの

3 類：口縁端部をつまみ上げるもの

長甕 A 系は全形が残存する資料はないが、長胴で平底と丸底の器形がある。口縁部形態は 1・2 類が確認できる。平底の底部外面には木葉痕が残るものがある (69・361 など)。A2 類としたが口縁部はロクロナデ、丸底で胴部は主にハケメを施す「西古志型甕」 [坂井 1990・春日 1999] がごく少数存在する (358)。長甕 B 系は長胴で丸底の器形で、胴部上半はカキメ調整、下半はタタキ成形する (240・244 など)。長甕 C 系は口縁部が水平方向に強く屈曲する。口縁部はロクロナデ、胴部上半はカキメ、下半はハケメやケズリを施し、タタキ成形は用いない。

球胴甕 非ロクロ成形で丸底になる甕で、いわゆる「佐渡型甕」である (114)。

小甕 非ロクロ成形を A 系、ロクロ成形を B 系とし、口径により細分した。口径 17cm 以上を I 類、口径 12～17cm を II 類、口径 10～12cm を III 類とした。小甕 A 系は長甕と同様に口縁部形態は 1・2 類とも確認できる。小甕 B 系の底部切り離しは糸切り・ヘラ切りがある。口縁部が水平方向に強く屈曲する小甕は確認されなかつたが、西古志型が少数存在し、A 系の 2 類にした (537)。

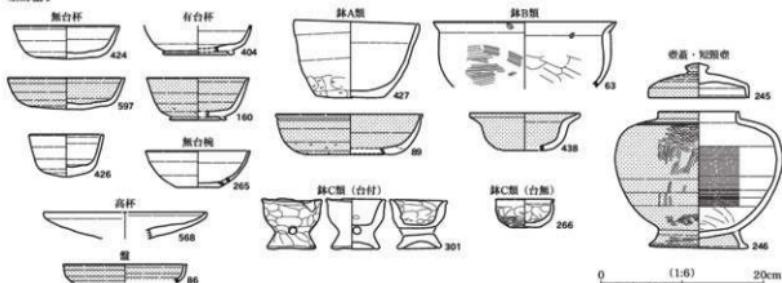
鍋 分類の基準は小甕と同様である。鍋 A 系は長甕と同様に口縁部形態は 1 類のみで、底部は平底が 1 点ある (413)。鍋 B 系は口縁部形態 2・3 類のほかに、口縁端部が肥厚するもの (4 類)、口縁端部が受け口状のもの (5 類) がある。口縁部が水平方向に強く屈曲する鍋は確認されなかつたが、西古志型が少数存在し、A 系の 2 類にした (365)。

甕 口縁部 (496) と把手 (605) が出土している。ロクロ成形でタタキメが残る。

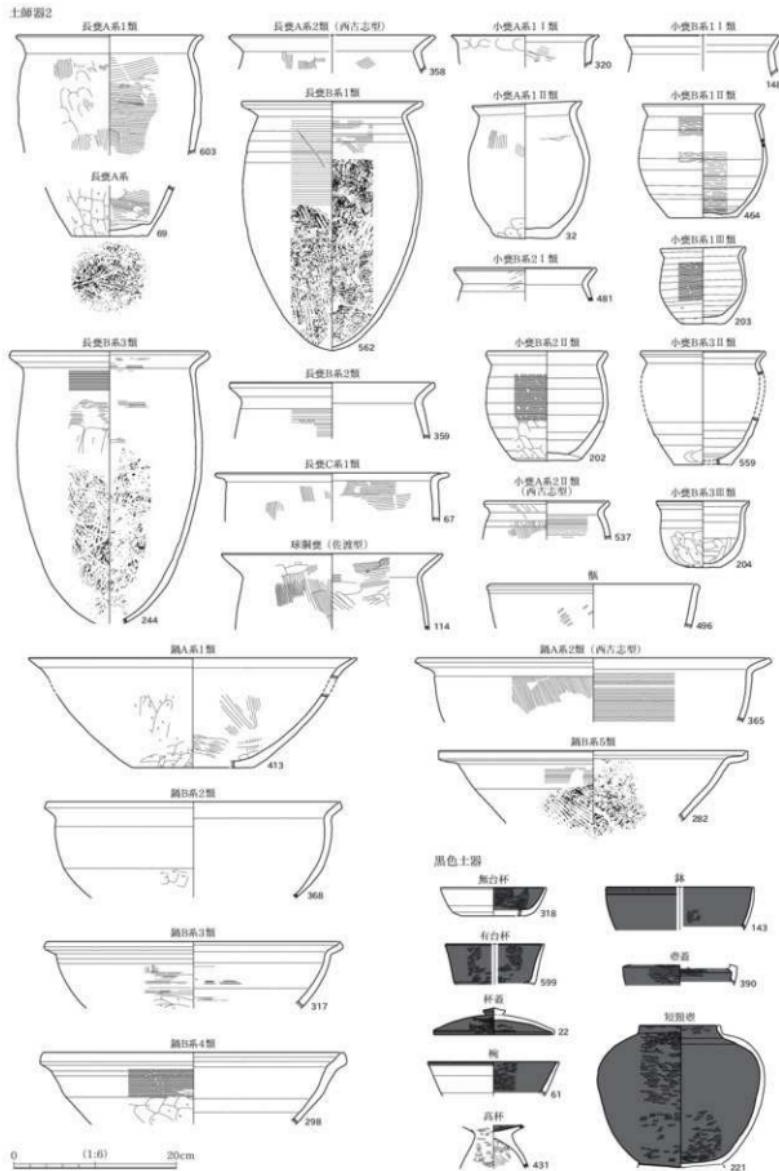
黒色土器

無台杯・有台杯・杯蓋・鉢・椀・高杯のほかに壺蓋・短頸壺がある。高杯以外はロクロ成形で丁寧なミガキが施され黑色処理される。

土師器 1



第 7 図 器種分類図 2



第8図 器種分類図 3

C 土器各説

1) 古墳時代の土器

SK584 (図版 73、写真図版 61) 瓢の口縁部(1)と底部(2)を図示した。1・2は粗砂粒を多く含む粗い胎土で、同一個体の可能性が高い。2は底径が小さい平底である。

SX125 (図版 73、写真図版 61) 3は口縁部が「く」の字状に外反する瓢で、口縁端部は丸い。器面は磨耗している。

SX299 (図版 73、写真図版 61) 4は小型器台で、口縁部と脚部の破片から図上復元した。口縁～体部は強い稜をもち外反する。脚部には円形の透かしが2か所確認できる。内外面とも赤彩されるが脚部内面には認められない。新潟シンポジウム編年〔日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993〕の6～7期、滝沢規朗氏による編年〔滝沢 2019〕の3～4段階に相当すると考える。

SX406 (図版 73、写真図版 61) 5は3と同様の口縁部形態の瓢で、胴上半部に最大径をもつと推測される。

包含層 (図版 73、写真図版 61) 6は瓢の底部で、2と同様に底径が小さい平底である。

1・3・5の瓢口縁端部は丸く、2・6は底径の小さな平底であることから、1～6はいずれも新潟シンポジウム編年の6～8期頃に収まとと考える。

2) 古代の土器

SI65 (図版 73・74、写真図版 61) 須恵器無台杯(7～13)・有台杯(14～16)・杯蓋(17～19)・稜椀(20)、黒色土器鉢(21)・杯蓋(22)、須恵器横瓶(23・24)、土師器小瓢(25)を図示した。7は無台杯 A II類、8・9・11はB II類である。10は無台杯 A III類で口縁部内面にはスグが付着し、器面は全体的に使用により磨滅している。11の底部内面には「」のヘラ書きがある。14・16は有台杯 A III類、15はA II類で、14の底部外面にはヘラ書きの一部が確認できる。16の口縁部内外面には漆が部分的に付着する。17・18は杯蓋II類で、17の内面はロクロナデの後にナデを加える。20の稜椀は口縁部を欠くが、口径 20cm 程度と推測する。21は黒色土器鉢で、底部外面にも丁寧なミガキが施される。22は黒色土器杯蓋で、摘みは擬宝珠形であり、内外面とも丁寧なミガキが施される。23・24は横瓶で、23の外面にはカキメが施され、内面には同心円文當て具痕と閉塞痕が残る。24は口縁部内面に自然軸がかかる。25は小瓢 B 系 I II類で、胴部内面はカキメ、外面はハケメが施される。頸部と胴部の境界に緩い段があり、東北地方北部における土師器の特徴に類似している〔加藤 2004〕。

7・8・12の無台杯は大型で底部に厚みがあり、IV 1期に比定される。9～11・13は小ぶりの無台杯、14～16は小型の有台杯、17～19は摘み径・口縁部径とも小さい杯蓋で、IV 2・3期に比定される。15・17の出土地点はSB828-SD357と重複しており、本来の帰属はSB828-SD357であった可能性が考えられる。また14・18・19・21・22も出土位置がSX283と近く、本来の帰属はSX283であったと考えられる。

SI65は多くの遺構と重複しており、新旧関係は最も古い遺構である。**SI65**出土土器の所属時期はIV 1期で、IV 2・3期に比定される土器は**SI65**と重複する遺構の所属であったと考えられる。

SI103 (図版 74、写真図版 61・62) 竪穴部出土土器は須恵器無台杯(26・27)・瓢(28)・横瓶(29・30)、土師器小瓢(31・32)を図示した。26は無台杯 B II類、27はA II類で、どちらもIV 2期に比定される。28は須恵器瓢III類の可能性がある。29は閉塞部がみられない側面部の破片であり、片面閉塞の横瓶と考える。30は横瓶の胴部片であるが、胴部の上下の判別がつかない。31は小瓢 B 系で、底部切り離しは静止系切りである。32は小瓢 A 系 I II類で、被熱のため器面全体が荒れている。外面の色調は全体的に橙色であるが、内容物が吹きこぼれた範囲は浅黄褐色に変色している。

焼土 114 出土土器は須恵器無台杯(33)・有台杯(34)を図示した。33は無台杯 B II類で、大型で底部は厚いことからIV 1期に比定される。34は有台杯 A II類で、やや細い高台が底部中央側に付くことから、IV 2期の所産と考える。

SI103 のカマドである焼土 114 から IV 2 期の有台杯 (34) が、また竪穴部から小甕 A 系 (32) が出土していることから、IV 1 ~ IV 2 期と考える。

SI108 (図版 74、写真図版 62) 竪穴部出土土器は須恵器無台杯 (35)・有台杯 (36・37)、土師器長甕 (38)・小甕 (39) を図示した。35 は無台杯 B III 類で、杯部下半の外面ともウロコ状の打ち欠きの痕跡がある。底部外面はロクロケズリされる。36 は有台杯 A II 類で、口径が大きく太い高台が付き、IV 1 期に比定される。38 は長甕 A 系の底部である。39 は小甕 A 系 I II 類で、被熱のため外面の器壁が剥落している。

焼土 211 出土土器は土師器長甕 B 系 2 類 (40) を図示した。胴部外面はカキメが施される。

SI108 出土土器は 35 の無台杯のように底部外面にロクロケズリが入る古い要素も見られるが、SI103 の有台杯 34 よりも古相を呈する有台杯 (36) があることから、IV 1 期の所産と考える。

SI181 (図版 75、写真図版 62) 竪穴部出土土器は須恵器有台杯 (41)・横瓶 (42)、土師器小甕 (43)・鍋 (44) を図示した。41 の有台杯は高台がやや細く、SI103 の 34 と似ていることから IV 2 期の所産と考える。42 の横瓶は口縁端部を欠く。43 は小甕 B 系 I II 類で、胴部外面はカキメが施される。44 は鍋 A 系 I 類で胴部外面はケズリ、内面はハケメが施され、胴部外面にススが付着する。

主柱穴は 4 基あり、P81 のみ土器が出土し、土師器小甕 (45) を図示した。B 系で磨耗のため判然としないが、底部外面はナデ調整である。

SI181 出土土器はやや細い高台が付く有台杯 (41)、鍋 A 系 I 類 (44) があることから、IV 1 ~ IV 2 期の所産と考える。

SI207 (図版 75、写真図版 62・91) 須恵器杯蓋 (46)・短頸壺 (47)、土師器小甕 (48) を図示した。46 は杯蓋 I 類で、摘みはボタン状で口端部の屈曲は強い。内面には「V」字状のヘラ書きがある。胎土は D 群で、信濃川左岸の窯跡群産と推測され、IV 2 期の所産と考える。47 は短頸壺で、胴部外面はロクロナデ後ケズリ、内面はカキメ後ケズリが施される。48 は小甕 A 系 I II 類で、内外面ともハケメが施される。

SI207 は図示できる資料が少ないと所属時期の決め手に欠けるが、46 の杯蓋と小甕 A 系 I II 類 (48) があることから、IV 1 ~ IV 2 期の所産と考える。

SI451 (図版 75 ~ 77、写真図版 62 ~ 64・91) 多数の遺物が出土した。須恵器無台杯 (49 ~ 56)・有台杯 (57・58)・杯蓋 (59)・稜桙 (60)、黒色土器椀 (61)、土師器鉢 (62・63)、須恵器鉢 (64)・短頸壺 (65)・甕 (66)、土師器長甕 (67 ~ 70)・小甕 (71・72) を図示した。49・50・53・56 は無台杯 B II 類、51・52・55 は A II 類、54 は B I 類である。49・50 は底部外面にヘラ書きがあり、49 は漢字の草冠に似ており、50 は「×」である。56 の底部外面には墨書文字の一部が確認できるが、字体は不明である。57 は有台杯 X 類、58 は A I 類で、57 は口縁部外面に浅い沈線が 2 条施され、杯部下半外面はロクロケズリされる。58 の底部内面は使用により磨滅している。59 は杯蓋 I 類で、口端部は強く屈曲する。摘みは低い擾宝珠形である。60 は稜桙で、口端部はつまみ上げる。61 は椀で、内面は黒色処理され丁寧なミガキが施される。62 は鉢で、胴部下半～底部外面はロクロケズリされ、内外及び底面まで赤彩される。63 は土師器鉢 B 類で、非ロクロ成形である。口縁部内外面に種子圧痕がある。64 は口縁部が内湾する須恵器鉄鉢形鉢で、底部外面にはヘラ書きがある。焼成時の歪みが認められる。胎土は D 群で、信濃川左岸の窯跡群産と推測される。65 は短頸壺で、口頸部外面にはタタキメが残る。66 は II 類の中型甕で、口縁端部は面をもちわざかに内傾する。67 は長甕 C 系 I 類で、口縁部は水平方向に強く屈曲し、胴部外面はハケメが施される。68・69 は長甕 A 系の底部で、外面に木葉痕が残る。70 は長甕 B 系 2 類で、胴部外面はカキメ及びハケメ、内面はカキメ後にナデとハケメが施される。71 は小甕 B 系 2 II 類、72 は小甕 B 系の底部で、底部外面はナデ調整である。

SI451 出土土器は、口径・底径とも大きめの須恵器無台杯 (49 ~ 56)、金属器模倣の須恵器有台杯 X 類 (57)、口径が 15cm を超える有台杯 A I 類 (58) があることから、IV 1 期の所産と考える。

SI453 (図版 77、写真図版 64) 須恵器有台杯 (73)・杯蓋 (74)・甕蓋 (75) を図示した。73 は有台杯 A II 類で、

杯部は内湾気味に立ち上がり、太い高台が付くことからIV 1期に比定される。74は杯蓋で、口端部は強く屈曲する。75は盃蓋で、胎土D群で信濃川左岸の窯跡群産と推測される。口縁部～天井部には細い沈線が4条施文され、自然軸がかかる。74はSI451の59よりも小ぶりで新しい様相であるが、有台杯A II類の73があることから、SI453の所属時期はIV 1期と考える。

SB251 (図版77、写真図版64) SB251は8基の柱穴で構成されており、この内6基の柱穴から土器が出土した。P149出土の須恵器有台杯(76)を図示した。口縁部片であるがA III類と推測される。

雨落ち溝と推測される遺構が4基あり、SK68出土の須恵器無台杯(77)・杯蓋(78)・甕(79・80)、SK106出土の須恵器杯蓋(81)、SD153出土の須恵器甕(82)を図示した。77は無台杯B I類で底部の厚みは無く、杯部は直線的に開く。78は摘みを欠くが杯蓋I類であろう。口端部は強く屈曲する。80はII類の中型甕で、口縁部片は面をもつ。81は口端部の屈曲は弱くはつきりしない。胎土はD群で信濃川左岸の窯跡群産と推測される。82の外表面は平行タタキメ、内面には同心円文當て具痕が残る。

SB251出土土器はA III類と推測される有台杯(76)、口端部の屈曲が弱い杯蓋(81)があることから、IV 2・3期の所産と考える。SK68出土土器はIV 1～IV 2期の所産と考える。

SB252 (図版77、写真図版64) SB252は11基の柱穴で構成されており、この内6基の柱穴から土器が出土した。P191出土の須恵器有台杯A III類(83)を図示した。高台は内端接地で華奢である。周溝SD468出土の須恵器有台杯(84・85)、土師器鉢(86)を図示した。84は有台杯X類で、口縁部外表面に沈線が1条施文される。85は有台杯A III類と推測され、高台は細い。86は盤で、胎土は精良、内外面とも赤彩される。

雨落ち溝と推測される遺構が4基あり、SK136出土の須恵器甕(87)を図示した。87の外表面は平行タタキメ、内面には同心円文當て具痕が残る。

SB252出土土器は、高台が細い有台杯A III類(83・85)があることから、IV 2・3期の所産と考える。

SB828 (図版77、写真図版64・65) SB828は14基の柱穴で構成されており、この内12基の柱穴から土器が出土した。P366出土の須恵器有台杯(88)、P383出土の土師器鉢(89)、P450出土の黒色土器椀(90)、P452出土の土師器鉢(91)を図示した。88は底径が小さく、B IV類と推測される。89は口縁部外表面に沈線が1条施文され、胴部下半～底部外表面はロクロケズリされる。内外面とも赤彩される。90は口縁部外表面に沈線が1条施文される。91は口縁部外表面に沈線が1条施文され、内外面とも赤彩される。周溝SD357出土は須恵器杯蓋(92)、黒色土器杯蓋(93)、土師器長甕(94)を図示した。杯蓋92は口端部径14.6cmとやや小ぶりである。93の杯蓋は内外面とも黒色処理され、丁寧なミガキが施される。94は長甕C系の底部で、胴部外表面に縱方向のハケメが施される。

SB828出土土器はIV 1期に比定されるものがある(89・91・94)。これはIV 1期のSI65の上にSB828が塗かれているため、SI65の土器がSB828の柱穴や溝に混入した結果と考えられる。よってSB828の所属時期は、小型の有台杯(88)や小ぶりの杯蓋(92)があることから、IV 2・3期と考える。

SB829 (図版77、写真図版65) SB829は9基の柱穴で構成されており、この内4基の柱穴から土器が出土した。SB829-P160出土の須恵器無台杯(95)を図示した。A II類かB II類であろう。

SE278 (図版78、写真図版65) 須恵器無台杯(96・97)・有台杯(98・99)・杯蓋(100)、土師器鉢(101)・小甕(102)を図示した。96・97は無台杯B II類で、97の底部外表面にはヘラ書きがある。98は有台杯X類で、口径20cmの大型品である。口縁部外表面に細く浅い沈線が2条施文される。99は有台杯の底部で、A II類と推測される。SI103-焼土114の34と似た形である。100は杯蓋で、摘みは小さなボタン状である。101は鉢の底部で胎土は精良、切り離しは糸切りである。102は小甕B系の底部で、切り離しはヘラ切りである。

SE278出土土器はSI451出土土器よりも須恵器無台杯が小ぶりとなり(96・97)、杯蓋の摘みが小さい(100)など新しい様相が見られることから、IV 2・3期の所産と考える。

SE388 (図版78、写真図版65) 須恵器無台杯(103)・有台杯(104)・杯蓋(105)を図示した。103は無台杯

A II類で、口縁部内面及び底部外縁は使用痕が顕著である。104は有台杯A III類である。105は杯蓋I類で摘みは擬宝珠形、口端部は強く屈曲する。

SE388出土土器は105がやや古い要素をもつが、小ぶりの無台杯（103）・有台杯A III類（104）があることからIV 2・3期の所産と考える。

SK29（図版 78、写真図版 65）須恵器壺蓋（106）を図示した。口端部は欠損し、天井部に自然軸が厚くかかる。

SK30（図版 78、写真図版 65）黒色土器椀（107）を図示した。磨耗のため判然としないが、底部外縁はケズリが施される。

SK32（図版 78、写真図版 65）須恵器無台杯（108）を図示した。B II類で底部外面にはヘラ書き「-」がある。口径 12.6cm と小ぶりで、底部は厚みがあることからIV 2期の所産と考える。

SK48（図版 78、写真図版 65）須恵器無台杯（109）、土師器小甕（110・111）を図示した。109は平底の無台杯で、外面にヘラ書きがある。110は小甕 A 系 I II類で、頸部と胴部の境界に段があり、底部はないものの東北地方北部における土師器の特徴（加藤 2004）に類似する可能性がある。111は小甕 B 系 I II類で、胴部内面に梢円形の刻線がある。

SK53（図版 78、写真図版 65）須恵器無台杯（112）・杯蓋（113）、土師器長甕（114）・小甕（115）を図示した。112は無台杯 A II類で、厚みがあることからIV 1期に比定される。113は杯蓋II類で、摘みは低いボタン状、口端部の屈曲は弱いことからV期に比定される。114は球胴形のいわゆる「佐渡型甕」（坂井ほか 1989）である。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部内面と胴部外面にはハケメ、胴部内面はハケメとナデが施される。115は小甕 B 系 2 II類で、底部外面はナデ調整である。

SK53出土土器はIV 1期の無台杯（112）もあるが、113の杯蓋や114の佐渡型甕があることから、V期の所産と考える。

SK74（図版 78、写真図版 66）須恵器壺蓋（116）、土師器長甕（117）を図示した。116は壺蓋で、口端部は欠損する。117は長甕 B 系 2 類で器面はやや磨耗している。

SK79（図版 79、写真図版 66）須恵器有台杯（118）、土師器小甕（119）を図化した。118は有台杯 X 類で、口縁部外面に浅い沈線が1条施される。119は小甕 A 系の底部で、磨耗のため底部外面の調整痕は不明である。

SK85（図版 79、写真図版 66）土師器小甕（120）を図示した。B 系の底部で、器面は磨耗している。

SK90（図版 79、写真図版 66）須恵器無台杯（121）・壺蓋（122）、土師器長甕（123）を図示した。121は無台杯 A II類である。122は壺蓋で外面に自然軸がかかる。123は長甕 C 系の底部で切り離しはヘラ切り後ナデである。

SK104（図版 79、写真図版 66）須恵器有台杯（124）を図示した。底径 6.0cm と小さく、B IV類と推測される。
SK107（図版 79、写真図版 66）須恵器有台杯（125）を図示した。B III類で杯部外面にヒダスキ痕が残る。V期の所産と考える。

SK118（図版 79、写真図版 66）須恵器短頸甕（126）を図示した。胴部外面には自然軸が厚くかかる。

SK131（図版 79、写真図版 66）須恵器無台杯（127）・横瓶（128）を図示した。127は無台杯 B II類である。128は横瓶で、閉塞部付近の破片である。

SK139（図版 79、写真図版 66）土師器小甕 B 系 I II類（129）を図示した。口縁部内外面はロクロナデ、胴部内外面はカキメが施される。

SK145（図版 79、写真図版 66）須恵器有台杯（130）・甕（131）を図示した。130は有台杯 A II類と推測される。131は甕で、底部付近の破片である。

SK146（図版 79、写真図版 66）須恵器無台杯（132）を図示した。平底で内外面ともヒダスキ痕が残る。

SK166（図版 79、写真図版 66）須恵器無台杯（133）を図示した。平底でV期の所産と考える。

SK182（図版 79、写真図版 66）須恵器甕（134）を図示した。底部付近の破片で、内外面とも自然軸がかかる。

SK215 (図版 79、写真図版 66) 土師器小甕 B 系 (135) を図示した。被熱のため外面は剥落している。

SK220 (図版 79、写真図版 66) 須恵器有台杯 (136)・壺・瓶類 (137)、土師器小甕 (138) を図示した。136 は底部を欠くが有台杯 A III 類であろう。137 は器種が判別できないため壺・瓶類とした。138 は小甕 B 系で胴部外面に墨書きがあるが、文字か記号か判別できず人面の可能性がある。

SK228 (図版 80、写真図版 66) 土師器長甕 (139) を図示した。C 系の胴上部の破片で、頸部はハケメ後ロクロナデが施される。西古志型甕である。接合せず図示していないが同一個体の口縁部小片がある。端部は外側だけやや面取りされる。胎土には海綿骨針を含む。

SK281 (図版 80、写真図版 66) 須恵器無台杯 (140・141)・杯蓋 (142)・黒色土器鉢 (143) を図示した。140 は無台杯 A II 類、141 は B II 類である。142 の杯蓋は口端部径 13.1cm と小ぶりである。143 の黒色土器鉢は口縁部外面に浅い沈線が 2 条施文される。

SK281 出土土器は無台杯が口径 13.4 ~ 13.5cm と小ぶりで (140・141)、杯蓋 (142) の口端部の屈曲が弱いことから、IV 2・3 期の所産と考える。

SK282 (図版 80、写真図版 66) 須恵器有台杯 (144) を図示した。小破片のため判然としないが、高台が太く底径も大きいので、口径 15cm を超える大型品の可能性がある。

SK285 (図版 80、写真図版 67) 須恵器有台杯 (145)・杯蓋 (146)、土師器鉢 (147)・小甕 (148)・鍋 (149) を図示した。145 の有台杯は底部に厚みがある。146 の杯蓋は口径 19cm と大型である。147 は鉢の底部で内外面とも赤彩される。148 は小甕 B 系 I 類で、口径 19cm と大型である。149 は鍋の把手で、先端は欠損している。SK285 出土土器は IV 1 期の所産と考える。

SK298 (図版 80、写真図版 67) 須恵器有台杯 (150・151)、土師器小甕 (152) を図示した。150 は有台杯 X 類で、口縁部外面に浅い沈線が 1 条施文される。151 は有台杯 B IV 類で、底部内面には自然釉がかかり、降灰している。152 は小甕 B 系 3 II 類で、口縁部内面にはコゲが帶状に付着する。SK298 出土土器は IV 2・3 ~ V 期の所産と考える。

SK333 (図版 80、写真図版 67) 須恵器無台杯 (153)・杯蓋 (154・155) を図示した。153 は無台杯 B II 類である。154 は摘みを欠くが杯蓋 I 類であろう。外面にはヒダスキ痕が残る。155 は杯蓋 II 類で、摘みは低い擬宝珠形、口端部は猫足状を呈する。胎土 D 群で、関川左岸の窯跡群産と推測される。SK333 出土土器は IV 2・3 期の所産と考える。

SK335 (図版 80、写真図版 67) 土師器長甕 (156) を図示した。B 系で丸底である。

SK336 (図版 80、写真図版 67) 須恵器無台杯 (157) を図示した。B II 類で IV 2・3 期の所産と考える。

SK341 (図版 80・81、写真図版 67) 須恵器無台杯 (158)、土師器無台杯 (159)・有台杯 (160)・鉢 (161)、須恵器壺蓋 (162)・甕 (163)、土師器長甕 (164)・小甕 (165 ~ 169) を図示した。158 は無台杯 B II 類である。159 は無台杯の底部で、丸底で大型である。160 は須恵器有台杯 B III 類に相当する器形である。磨耗しているが丁寧な作りで、内外面とも赤彩される。161 は土師器鉢 A 類で、口縁部外面に浅い沈線が 1 条施文される。162 は須恵器壺蓋で、外面には自然釉が部分的にかかる。163 は須恵器甕 III 類である。164 は長甕 B 系 2 類である。165 は小甕 A 系 I II 類、166・167 は A 系 I III 類である。167 は口縁部の屈曲がかなり緩い。168 は小甕 B 系 2 II 類で、胴部内外面はロクロナデ仕上げる。169 は小甕 B 系 3 II 類で、被熱のため胴部外面の器面が剥落している。胴部内面はケズリが施される。

SK341 出土土器は赤彩土器有台杯 (160) の器形や小甕 B 系 3 類 (169) など新しい要素をもつ土器も見られるが、底径が大きい丸底の土師器無台杯 (159) や小甕 A 系 (165 ~ 167) があることから、主体となる時期は IV 1 期と考える。

SK346 (図版 81、写真図版 67) 須恵器無台杯 (170)・杯蓋 (171)、土師器小甕 (172) を図示した。170 は無台杯 B II 類である。171 は杯蓋 I 類で摘みは低平なボタン状、口端部の屈曲は緩い。172 は小甕 B 系 2 II 類で、

口縁部内面にコゲ、外面にはススが付着する。SK346出土土器はIV 2・3期の所産と考える。

SK350 (図版 81、写真図版 67) 土師器長甕 (173)・小甕 (174) を図示した。173は長甕 B系2類で、胴部内外面はカキメが施される。174は小甕 B系1II類で、口縁～胴部の調整はロクロナデである。

SK352 (図版 81、写真図版 67) 土師器長甕 (175)・小甕 (176) を図示した。175は長甕 B系1類で、胴部外面はハケメ後カキメが施される。176は小甕 A系1II類で、口縁部は短く屈曲は緩い。いずれもIV 1期に比定される。

SK353 (図版 81、写真図版 67) 須恵器杯蓋 I類 (177) を図示した。摘みは扁平で径が 3.8cm と大きく、口端部の屈曲がしつかりしていることからIII 2期の所産と考える。

SK356 (図版 81、写真図版 67) 須恵器杯蓋 (178)、土師器小甕 (179)・鉢 (180) を図示した。178は摘みを欠くが杯蓋 I類であろう。179は小甕 A系1II類で、胴部内外面は細かいハケメが施される。180は非ロクロ成形の鉢 B類で、口縁部外面に沈線が1条施文される。

SK363 (図版 81、写真図版 67) 土師器長甕 B系2類 (181) を図示した。胴部中央の外面はカキメ後ケズリが施される。IV 1期の所産と考える。

SK400 (図版 81、写真図版 67) 須恵器無台杯 B I類 (182) を図示した。口径は大きいが器高は低く、杯部は直線的に開くことから、IV 2・3期の所産と考える。

SK413 (図版 81、写真図版 67) 須恵器無台杯 (183) を図示した。底部の縁辺を打ち欠いている。胎土 B群で、底部外面はヘラ切り後ロクロケズリされる。IV 3期頃の所産と考える。

SK419 (図版 82～84、写真図版 60・68～70) 須恵器無台杯 (184～187)・有台杯 (188)・杯蓋 (189～192)・高杯 (193・194)・環状瓶 (195)・長頸瓶 (196)・甕 (197)・鉢 (198)、土師器鉢 (199)・小甕 (200～204) を図示した。184は無台杯 A II類、185はB II類、186・187はB III類である。184は内面全体と外面の一部にススと油煙が付着する。185は内面の一部に油煙が付着する。188是有台杯 B I類としたが、口縁部外面に強い稜線が1本入り、金属器を意識していると思われる。189～191は杯蓋 I類、192はII類である。190・192の摘みはボタン状で中央が少し突出し、189・191は擬宝珠形である。いずれも径が小さく華奢であり、口端部の屈曲も短く緩い。193・194は高杯で、長い脚部に盤状の杯部が付く。どちらも杯部内面はロクロナデの後、中央から外側へ直線的に中心をずらしながらナデ調整を加える。195はSK419中央部から出土した横型の須恵器環状瓶で鳥足を模した脚が付く。完形であるが、口頭部下の胴部外周面と脚部が破損して出土した。器高 19.7cm、外径 27.1cm、内径 6.4cm である。環状の胴部に高さ 4.8cm、径 10.2cm の口頭部と、高さ 3.8cm、径 3.1cm、足裏の長さ 4.5cm、幅 5.0cm 前後の脚 3 本が付けられる。脚部は水かきが表現されていることから水鳥を模していると考えられ、全て外側を向くように接合される。いずれの脚も接合部は丁寧にナデられているため胴部から剥がれていない。右後ろ足の第4趾（第1趾は表現されていない）先端の割れ口には 7.2mm の粉殿圧痕が認められる。口頭部は胴部から外側へ斜めに延び、開いた口縁部は水平ではなく傾き 2 か所欠けている。口頭部中央に浅い1条、胴部には2条の沈線が認められる。胴部は粘土の接合痕跡などから板状の粘土帯を円環状に成形して接合する名村のIII類である（名村 2017）。4枚の粘土帯のうち1枚はL字状に折り曲げ円環状につなぎ（内周面と底部）、残りの粘土帯は外周面、その上部、さらに頂部の順に貼り合わせ断面がやや歪んだ五角形を呈する。内外面のロクロナデ成形により接合部分が不明瞭であるが、外周面には部分的にタキ痕が残る。頂部の最後の粘土帯の接合部は口頭部より 90 度傾く。口頭部の接合をするためにヘラで径 5.0～5.5cm の楕円形の孔が開けられるが、その痕跡は口頭部を接合した後の整形もされず生きしく残る。胎土はA群で 5～8mm 大の白い長石が目立つ。重量は約 4.0kg を測り、容量は 2.2ℓ である（口頭部を含めると 2.3ℓ）。196は中型の長頸瓶でほぼ完形に復元できるが、意図的に割っている可能性がある。197は甕で、口端部はつまみ上げて面をもち、口縁部と頸部の境界は有段である。胴部中央の円形の孔（径 1.3cm）は、胴部をロクロナデで仕上げた後に粘土を足して盛り上げてから削り出して作られており、外側に少し突出している。底部

には高台が付く。胎土はD群で、信濃川左岸の窯跡群と推測される。ほぼ完形品であるが頸部の根本から削れており、196と同様に意図的に削っている可能性がある。198は鉄鉢形鉢で、外面はカキメ後ケズリが施される。199は鉢B類で、鍋形鉢である。器面は全体的に磨耗している。200・202は小甕B系2II類、201はB系1II類、203はB系1III類としたがいずれも口端部の面取りはしっかりしていない。204は小甕B系3III類で内面にコゲのようなものが付着するが、204以外の小甕はスス・コゲの付着が無く煮炊きには使用されなかつたようだ。

SK419出土土器はIV1期に比定されるSI451出土土器に比べて杯類が小型化していることから、IV2・3期の所産と考える。

SK444（図版84、写真図版70）須恵器無台杯（205）・有台杯（206）、土師器小甕（207）を図示した。205は無台杯BII類である。206は有台杯AI類で高台が底部の外縁により付く。207は小甕B系1II類で、口縁部内面にコゲが帶状に付着する。SK444出土土器はIV1期の所産と考える。

SK455（図版85、写真図版71・91）須恵器無台杯（208～210）・有台杯（211）・杯蓋（212～214）、土師器長甕（215～217）・小甕（218）を図示した。208は無台杯BI類、209はAI類、210はBII類である。209は内外面に「十」字状のヒダスキ痕が残る。210は杯部内面にヘラ書きがある。211は有台杯X類で、口縁部外面上に沈線が1条施文される。また杯部外面及び底部外面上にはヘラ書きがある。213は杯蓋I類で、摘みは低いボタン状である。214の摘みは程の小さな擬宝珠形である。215は長甕A系1類で7世紀頃の可能性がある。216は長甕A系の底部で外面に木葉痕が残る。217は長甕B系2類で、胴部外面上はカキメ、内面はロクロナデが施される。218は小甕B系1II類で、内外面ともロクロナデで仕上げる。

口径は大きいが器高が低い無台杯（208～210）、有台杯X類（211）、ボタン状の低い摘みが付く杯蓋（213）であることから、SK455の所属時期はIV2期と考える。

SK460（図版85、写真図版71・91）須恵器無台杯（219・220）、黒色土器短頸壺（221）を図示した。219は無台杯AI類、220はBII類である。220は底部外面にアルファベット「R」か漢数字の「九」のようなヘラ書きがある。221の短頸壺は内外面とも黒色処理され、丁寧なミガキが施される。底部外面及び高台は剥落している。SK460出土土器はIV2期の所産と考える。

SK462（図版85、写真図版70）須恵器有台杯X類（222）を図示した。外面には浅い沈線が2条施文される。

SK466（図版85、写真図版70）須恵器無台杯（223）・杯蓋（224）を図示した。223は無台杯BI類である。224は摘みを欠くがI類であろう。口端部の屈曲は弱い。

SK470（図版86、写真図版71）須恵器無台杯（225）・有台杯（226）を図示した。225は無台杯BII類でIV2・3期の所産と考える。226の有台杯は焼成不良で器面は磨耗している。

SK472（図版86、写真図版71）須恵器無台杯（227）・有台杯（228・229）、土師器無台杯（230）、黒色土器壺（231）、須恵器壺（232・233）、土師器長甕（234）・小甕（235）を図示した。227は無台杯BII類である。有台杯228・229は底部を欠くがそれぞれBI類・AIII類と推測される。230は土師器無台杯で、底部付近の外面はケズリが施される。231は椀で、内外面とも黒色処理される。底部外面にもミガキが施されるが磨耗している。232はI類の大型甕で、外面には沈線と波状文が交互に施文される。233はIII類の小型甕である。234は長甕B系2類である。235は小甕B系1II類で、口縁部内面にコゲが帶状に付着する。SK472出土土器は小ぶりの無台杯（227）・有台杯（229）であることから、IV2・3期の所産と考える。

SK488（図版86・87、写真図版72・73・91）須恵器無台杯（236）・長胴瓶（237）・横瓶（238）・甕（239）を図示した。236は無台杯AI類でIV2・3期の所産と考える。237は甕・瓶類で、底部内外面には爪形圧痕と思われる痕跡が数か所ある。238の横瓶はほぼ完形で、胴部の長さは30.1cmである。両面閉塞で、口縁部内面の中央には漢字の草冠のようなヘラ書きがある。239はI類の大型甕である。廃棄された状態で出土し（破片数1,650片、総重量は30.165g）、小破片は接合できなかつたため胴部を部分的に欠くが底部まで復元した。胎土

はA群である。外反する口縁部の端部は上方と横に摘まれ、直下に突帯が1条巡る。突帯下には6条の波状文が一部重なるものの、下、上の順で2段施される。外面は平行タタキメの後、胴部には横位に全周しないカキメ状のハケメが何度も広範囲に施され、底部には縱位にハケメが認められる。タタキメ凹部の木目方向から工具の刻みが斜めであったことが推測される。ハケメー単位の最大幅と木目は、胴部で2.5cmに12条、底部では4.7cmに22条であり、胴部の幅が狭いため同一工具か否かは明瞭でない。また、ハケメの新旧は不明である。内面は、口頸部にカキメ状のハケメが施され、胴部から底部には同心円状の当て具痕がみられる。胴部の最大径より下にはハケメが縱・横・斜位に施されるが、底部に向かうほど縱位が目立つ。胴・底部で同一工具を使用し、ハケメの最大幅3.5cmで木目は16条である。さらに、口頸部から胴部にかけての屈曲した接合部分の外面には布の圧痕が最大幅7.0cmほどみられる。布そのものか圧痕に貼り付けた粘土が剥落した部分などで観察され、ほぼ全周に布が巻かれていたようである。接合か補修の際に乾燥を防ぐために使用された痕跡と考える。布目圧痕のある須恵器は、上越市の大寺古窯跡群【小田ほか2006】や加茂市鬼倉遺跡【伊藤2001】、新潟市道正遺跡などでも出土している。新潟市岡崎遺跡の土師器小甕に認められる布圧痕などから土器製作時の布の活用が指摘されている【新潟市文化財センター2023】。なお、実測図断面の内側ラインから3Dモデルを作成して計測した口縁部までの容量は約190ℓである。

SK499 (図版88、写真図版74) 土師器長甕B系3類(240)を図示した。胴上半部の内面は磨耗のため調整は不明であるが、胴下半部の内面はハケメと当て具痕がわずかにみられる。V期の所産と考える。

SK530 (図版88、写真図版74) 須恵器無台杯(241)を図示した。A II類でIV 2・3期の所産と考える。

SK532 (図版88、写真図版74) 須恵器無台杯(242・243)を図示した。242はA III類で胎土B群で、243はA III類で胎土C群である。いずれもロクロ回転方向は左で、V期の所産と考える。

SK533 (図版88、写真図版74) 土師器長甕B系3類(244)を図示した。胴外面上半部はカキメとケズリが施され、下半部にはタタキメと内面上半部はカキメが施され下半部には当て具痕が残る。V期の所産と考える。

SK543 (図版88、写真図版74) 土師器壺蓋(245)・短頸壺(246)・小甕(247)・鍋(248)を図示した。245の摘みは擬宝珠形で口端部はやや面をもつ。内面の一部は還元され褐灰色を呈する。246は口縁部内面の一部が還元され褐灰色を呈する。肩部には沈線が2条施され、肩部及び底部付近は横方法のミガキ、胴部中位は縱方向のミガキが施される。245・246とも外面は赤彩される。247は小甕B系1 III類で、底部切り離しは糸切りである。外面にはわずかにススが付着している。248は鍋B系4類で、胴上半部はロクロナデ、下半部外面はケズリ・タタキメ、内面には当て具痕が残る。SK543出土土器はIV 2・3～V期の所産と考える。

SK546 (図版89、写真図版74・75) 須恵器無台杯(249)・有台杯(250)・杯蓋(251・252)、土師器長甕(253～255)・小甕(256)を図示した。249は無台杯B II類でIV 2・3期に比定される。250は口縁部を欠くが有台杯B IV類と推測され、胎土B群でV期に比定される。251は杯蓋II類と推測される。252は杯蓋II類で、摘みは小さな擬宝珠形、口端部の屈曲はかなり緩い。251・252ともIV 2・3期に比定される。253は長甕B系2類でロクロナデ・カキメの後にハケメやケズリが施される。254・255は長甕B系1類で、255の胴部内面はロクロナデが施される。256は小甕B系2 II類で口縁端面がわずかに窪む。SK546出土土器は249～252や256のように新しい要素をもつ土器が出土していることから、IV 2・3～V期の所産と考える。

SK547 (図版89、写真図版75) 須恵器有台杯(257)を図示した。B I類で胎土はD群、信濃川左岸の窯跡群産と推測される。底部外面はロクロケズリされる。

SK553 (図版89、写真図版75) 須恵器無台杯(258～260)、土師器長甕(261)を図示した。258は無台杯B I類で、杯部は直線的に開く。259は無台杯B II類、260はA II類である。260の内外面にはヒダスキ痕が残る。261は長甕B系2類である。SK553出土土器はIV 2期の所産と考える。

SK576 (図版89、写真図版75) 須恵器無台杯(262)を図示した。B II類で胎土はB群、V期に比定される。

SK581 (図版89、写真図版75) 土師器無台椀(263)を図示した。内外面とも磨耗している。

SK584 (図版 89、写真図版 75) 須恵器無台杯 (264)、土師器無台椀 (265)・鉢 (266) を図示した。264 は無台杯 B III 類で胎土 C 群であるが、ロクロ回転方向は左である。V 期に比定される。265 は無台椀で底部外面はナデ調整である。266 は小型の鉢 C 類で、台は付かない。非ロクロ成形で内面はナデ、外面はナデとハケメが施される。

SK585 (図版 90、写真図版 75) 土師器小甕 B 系 2 II 類 (267) を図示した。胴部内外面は磨耗している。

SK589 (図版 90、写真図版 75) 須恵器無台杯 (268・269)・有台杯 (270)・杯蓋 (271)、土師器長甕 (272)・小甕 (273) を図示した。268 は無台杯 A I 類、269 は B I 類である。270 は有台杯 A II 類で高台が底部の外縁近くに付く。271 は杯蓋で外面にヒダスキ痕が残る。口端部の屈曲は弱い。272 は磨耗が著しくハケメは残存していないが長甕 C 系 1 類とした。273 は小甕 B 系 1 I 類で、口縁部内面にコゲが帶状に付着している。SK589 出土土器は 271 がやや新しい様相であるが、主体となるのは IV 1 期と考える。

SK602 (図版 90、写真図版 75) 須恵器無台杯 (274) を図示した。B II 類で胎土は D 群、信濃川左岸の窯跡群産と推測される。外面にヒダスキ痕が残る。底部の外縁は使用により磨滅している。

SK616 (図版 90、写真図版 75) 土師器小甕 (275) を図示した。A 系 1 II 類で口縁部は短い。被熱のため器面は全体的に剥落しており、胴部内面と底部外面の調整は不明である。

SK617 (図版 90、写真図版 76) 土師器長甕 A 系 1 類 (276) を図示した。内外面ともヨコナデとハケメが施される。

SK624 (図版 90、写真図版 76) 土師器長甕 (277) を図示した。B 系 1 類で外面にはタタキメが残る。

SK631 (図版 90、写真図版 76) 須恵器無台杯 (278)・杯蓋 (279)、土師器有台杯 (280) を図示した。278 は無台杯 B II 類で IV 2・3 期に比定される。279 は杯蓋 II 類で胎土は B 群、V 期の所産と考える。280 は土師器有台杯で、内面には漆が付着する。

SK647 (図版 90、写真図版 76) 土師器無台椀 (281)・鍋 (282) を図示した。281 の器面は内外面とも磨耗している。282 は鍋 B 系 5 類で、胴部内面は磨耗しているが下半部に当て具痕が残る。VI 期の所産と考える。

SK654 (図版 90、写真図版 76) 土師器長甕 (283)・小甕 (284) を図示した。283 は長甕 B 系 2 類でタタキ成形、丸底である。284 は小甕 B 系で底部内面にカキメがらせん状に施される。

SK658 (図版 91、写真図版 76) 土師器長甕 (285) を図示した。B 系 2 類で胴部外面はタタキメの後に部分的にナデが施される。

SK668 (図版 91、写真図版 76) 須恵器無台杯 (286) を図示した。B II 類で IV 2・3 期の所産と考える。

SK674 (図版 91、写真図版 76) 須恵器杯蓋 (287)、土師器無台椀 (288) を図示した。287 は杯蓋 II 類で、摘みは小さなボタン状である。288 は無台椀で内外面ともススが付着する。287・288 は V 期の所産と考える。

SK680 (図版 91、写真図版 76) 須恵器有台杯 (289)・折縁杯 (290) を図示した。289 の底部外面にはヘラ書きがある。290 の内面には「キ」字状のヒダスキ痕が残る。底径の小さな有台杯 (289) と折縁杯 (290) があることから、SK680 の所属時期は IV 2・3 期と考える。

SK689 (図版 91、写真図版 76) 須恵器有台杯 (291) を図示した。B II 類で内外面とも器面が剥落するように割れている。胎土は B 群で、V 期の所産と考える。

SK690 (図版 91、写真図版 76) 須恵器有台杯 (292)・横瓶 (293) を図示した。292 は有台杯 A II 類で、底径がやや小さいことから IV 2 期の所産と考える。293 は横瓶で、内面の当て具痕の中に木目がみられる。

SK691 (図版 91、写真図版 76) 須恵器有台杯 B II 類 (294) を図示した。胎土 B 群で、V 期の所産と考える。

SK698 (図版 91、写真図版 76) 須恵器有台杯 (295) を図示した。底部外面はロクロケズリされ、ヒダスキ痕のような痕跡がある。底径が大きく高台が太いことから、III 期頃の所産と考える。

SK699 (図版 91、写真図版 77) 須恵器折縁杯 (296) を図示した。高台及び内面は磨滅している。IV 2・3 期の所産と考える。

SK700 (図版 91、写真図版 77) 須恵器無台杯 (297) を図示した。B III 類で胎土 C 群だが、ロクロ回転方向は

左である。V期の所産と考える。

SK706 (図版 91、写真図版 77) 土師器鍋 B 系 4 類 (298) を図示した。胴部外面の上半はカキメ、下半はケズリが施される。VI期の所産と考える。

SK708 (図版 91、写真図版 77) 須恵器有台杯 (299) を図示した。高台の大きさで底部周縁を打ち欠いて円板状にしている。底径が小さいことからIV 2・3 期の所産と考える。

SK721 (図版 91、写真図版 77) 須恵器杯蓋 (300) を図示した。I 類でIV 1 期の所産と考える。

SK722 (図版 91、写真図版 77・91) 土師器鉢 C 類 (301) を図示した。手づくね成形で台が付く。底部には径 10mm の円形の孔が水平方向に貫通する。内面には種子の圧痕があり、全面ナデ調整である。

SK723 (図版 92、写真図版 77) 須恵器壺・瓶類 (302) を図示した。口縁部は有稜で内外面に自然軸がかかる。壺である可能性も考えられる。

SK741 (図版 92、写真図版 77) 土師器無台椀 (303) を図示した。器面は内外面とも磨耗している。

SK746 (図版 92、写真図版 77) 須恵器有台杯 (304) を図示した。深身の有台杯 B II 類と推測される。

SK781 (図版 92、写真図版 77) 須恵器杯蓋 III 類 (305) を図示した。内面に重ね焼きの痕跡がある。摘みはボタン状で、IV 2・3 期の所産と考える。

SK785 (図版 92、写真図版 77・91) 須恵器長頸瓶 (306) を図示した。小型で高台は剥落している。肩部上の外面に沈線 2 条とヘラ書き「×」が施される。

SK802 (図版 92、写真図版 77) 須恵器杯蓋 (307・308)、黒色土器杯蓋 (309) を図示した。307・308 は杯蓋 I 類で、口端部の屈曲は弱い。309 の杯蓋は内外面とも黒色処理され、丁寧なミガキが施される。SK802 出土土器は IV 2・3 期の所産と考える。

焼土 374 (図版 92、写真図版 77) 須恵器無台杯 (310)、土師器小甕 (311) を図示した。310 は無台杯 B I 類である。311 は小甕 B 系 1 II 類で、胸部内外面はカキメが施される。

焼土 454 (図版 92、写真図版 77) 土師器長甕 (312) を図示した。B 系 1 類で、胴部外面はケズリが施される。

SX3 (図版 92、写真図版 77) 須恵器杯蓋 (313～315)、土師器無台杯 (316)・鍋 (317) を図示した。313・314 は杯蓋 I 類で、313 は口端部径と摘み径が大きく IV 1 期に比定される。314 は歪みが著しく、天井部には自然軸が全く認められない部分があり、重ね焼きの痕跡かもしれない。IV 2・3 期に比定される。315 は杯蓋 II 類で、V 期に比定される。316 は土師器無台杯である。317 は鍋 B 系 3 類で IV 2・3～V 期の所産と考える。

SX31 (図版 92、写真図版 77) 黒色土器杯 (318)、土師器長甕 (319)・小甕 (320) を図示した。318 は杯で、内面は丁寧なミガキが施され黒色処理される。319 は長甕 B 系の底部で、内外面とも磨耗しているがタタキメと当て具痕がわずかに残る。320 は小甕 A 系 1 I 類で、口縁部外面は指おさえで仕上げている。

SX37 (図版 92、写真図版 78) 須恵器無台杯 (321)・有台杯 (322) を図示した。321 は無台杯で平底である。322 は有台杯 A II 類で、やや小ぶりであることから IV 2・3 期の所産と考える。

SX38 (図版 92、写真図版 78) 須恵器無台杯 (323) を図示した。厚みのある平底である。

SX62 (図版 92・93、写真図版 78) 須恵器無台杯 (324)・杯蓋 (325・326)・甕 (327) を図示した。324 は無台杯 A II 類で口縁部内外面に油煙が付着する。IV 1～IV 2 期の所産である。325 は杯蓋 I 類で IV 2・3 期、326 は小さな摘みが付くことから V 期の所産と考える。327 は甕の胴下半部の破片である。

SX63 (図版 93・94、写真図版 78・79・91) 須恵器無台杯 (328～337)・有台杯 (338～340)・杯蓋 (341～346)・高杯 (347)・甕 (348)、土師器小甕 (349～351) を図示した。328・333・335 は無台杯 B II 類、329～332・334・336・337 は A II 類である。332 は内外面にヒダスキ痕が残る。334 のヘラ書きはアルファベット「R」か漢数字「九」のように見え、SK460 の 220 のヘラ書きに似ている。330 は身が深いことから III 期、328・329・331～334 は IV 1 期、335～337 は小ぶりであることから IV 2・3 期に比定される。338・339 は有台杯 A II 類で、338 は IV 2 期、339 は IV 1 期に比定される。340 は有台杯 B III 類で V 期の所産と考える。

える。底部外面には「×」のヘラ書きがある。341～344は杯蓋I類、345はII類である。341はIV2・3期、342～344はIV1期、345はV期の所産と考える。346の杯蓋は内面に3点の記号墨書「○」が並ぶ。347は高杯で内面はロクロナデの後にナデ調整を加える。348はIII類の小型甕で、口縁部は直立する。底部外面は指頭押圧とナデ調整で仕上げ、ヘラ書き「×」が認められる。349は小甕A系I II類で、胴部外面はハケメとナデ調整である。350は小甕B系2 II類で、口縁部内面にコゲが帶状に付着する。351は小甕A系の底部で底部外面はケズリが施される。

SX63出土土器は340・341・345のようにIV2・3～V期の資料があるが、主体となる時期はIV1期と考える。

SX64 (図版 94・95、写真図版 79・80) 須恵器無台杯 (352・353)・有台杯 (354・355)、土師器無台椀 (356)・鉢 (357)・長甕 (358～361)・小甕 (362～364)・鍋 (365～368) を図示した。352は無台杯A II類で、IV2・3期に比定される。353は底径の小さな平底の無台杯である。354は有台杯A II類で杯部外面下半はロクロケズリされており、IV1期の所産と考える。355は有台杯A III類でIV2・3期に比定される。356は無台椀でV期以降のものである。357は鉢B類で非ロクロ成形である。358は長甕C系2類で西古志型である。359・360は長甕B系2類で、359の胴部外面にはタタキ目が残る。360は内外面とも残存部はロクロナデで仕上げている。361は長甕A系の底部で、外面上には木葉痕が残る。362は小甕A系の底部で、胴部～底部外面はケズリが施される。363は小甕A系I II類で、胴部外面は被熱のため器面が剥落している。364は小甕B系I II類で、胴部内面はカキメとナデが施される。365は鍋C系2類で西古志型である。胴部外面はハケメ、内面はカキメが施される。366～368は鍋B系2類で、366・368の胴部は膨らみがあるが、367は膨らみが無く直線的に開く器形である。

SX64出土土器はIV1期の資料があるが (354)、主体となる時期はIV2・3期と考える。356はV期以降のもので、混入かもしれない。

SX66 (図版 95、写真図版 80) 須恵器無台杯 (369)・有台杯 (370～372)、土師器無台杯 (373) を図示した。370・371は有台杯A II類で370はIV1期、371はIV2期に比定される。372は有台杯B III類で、胎土B群でV期に比定される。373は無台杯で、内外面とも赤彩痕がわずかに確認できる。

SX66出土土器は372がV期に比定されるが、主体となる時期はIV1期と考える。

SX70 (図版 95・96、写真図版 80・81) 須恵器無台杯 (374・375)・有台杯 (376・377)・横瓶 (378)・長頸瓶 (379)・壺蓋 (380) を図示した。374は無台杯B I類、375はA II類で、375の外面上にはヒダスキ痕が残る。376は有台杯X類で、外面上に3条の沈線が施文される。377は有台杯A I類で、小ぶりであることからIV2期の所産と考える。378は横瓶で閉塞痕が残る。胴部外面には自然釉が筋状にかかる。379は大型の長頸瓶で、内外面に自然釉がかかる。380は壺蓋で口端部は外傾し、外面に自然釉がかかる。

SX70出土土器の主体となる時期はIV1期と考える。

SX124 (図版 96、写真図版 81) 須恵器無台杯 (381～385)・有台杯 (386・387)・杯蓋 (388)、土師器鉢 (389)、黒色土器壺蓋 (390)、須恵器甕 (391) を図示した。381・384は無台杯B II類、382はA II類である。381の内外面にはヒダスキ痕が残る。385は厚みのある無台杯底部である。386・387は有台杯A II類で、どちらもIV1期に比定される。388は杯蓋I類でIV2・3期の所産と考える。389は鉢で、口縁部外面に浅い沈線が1条施文される。内外面とも赤彩されるがかなり磨耗している。390は壺蓋で内外面とも黒色処理され、推定径4mmの円形の孔が1か所ある。391は須恵器甕で底部付近の破片である。

SX124出土土器はIV2・3期に比定されるものもある (384・388) が、主体となる時期はIV1期と考える。

SX125 (図版 96～98、写真図版 81・82・91) 須恵器無台杯 (392～395)・有台杯 (396～399)・杯蓋 (400～402)、土師器無台杯 (403)・有台杯 (404)、黒色土器杯蓋 (405)、土師器鉢 (406)・長甕 (407)・小甕 (408～412)・鍋 (413)、須恵器甕 (414) を図示した。392・394は無台杯A II類、393はB II類、395はA I類である。392はIV1期に比定され、口縁部内外面にはススと油煙が部分的に付着する。393の底部外面にはヘラ

書きがある。395の底部外面には墨書があるが、判然としない。底部は厚みがあり、Ⅲ期に比定される。396は有台杯A II類でIV 1期、397の底部外面にはヘラ書き「一」がありA III類でIV 2・3期と考える。398是有台杯B IV類で、V期に比定される。399是有台杯X類で、口縁部外面に沈線が1条施文される。内外面とも著しく磨耗している。400・401は杯蓋I類、402はII類である。400はIV 1～IV 2期、401・402は低いボタン状の摘みが付くことからIV 2・3期に比定される。403は土師器無台杯で、胎土は精良で丁寧な作りである。404は土師器有台杯で、高台の一部にススが付着する。405は黒色土器杯蓋で口縁部内外面～天井部内面は黒色処理され、ミガキが施される。406は鉢A類で、胴部は内湾気味に立ち上がり、口縁部外面に浅い沈線が1条施文される。407は長甕C系I類で、胴部外面は縱方向のハケメが施される。408・409は小甕A系の底部で、408は胴部下半～底部外面にケズリが施される。409の底部外面はナデ調整である。410は小甕B系I II類、411はB系III類で、411の胴部外面は被熱のため剥落している。胴部内面はハケメが施される。412は小甕B系の底部で、底部の切り離しはヘラ切りである。器面は全体的に磨耗している。413は鍋A系I類で、平底である。胴部下半～底部外面はケズリが施される。414はII類の中型甕で、外面と胴部下半の内面には自然軸がかかる。

SX240 (図版 98、写真図版 81) 須恵器無台杯B II類 (415) を図示した。口径 12.4cm と小ぶりであることからIV 2・3期の所産と考える。

SX283 (図版 98・99、写真図版 83) 須恵器無台杯 (416～419)・有台杯 (420・421)・杯蓋 (422)・稜楕 (423)、土師器無台杯 (424～426)、土師器鉢 (427)、須恵器長頸瓶 (428)、土師器小甕 (429・430) を図示した。416は無台杯B II類、417・419はA II類、418はB I類である。418は底部外面に板目压痕が残る。416～418はIV 1期、419はIV 2・3期に比定される。420は有台杯X類で、杯部外面には細い沈線が2条施文される。421は有台杯A III類で、打ち欠きによるものか底部には径6mmの円形の痕跡が認められる。IV 2・3期に比定される。422は杯蓋I類で、摘みはシャープな作りの擬宝珠形で、口端部は強く屈曲する。423は稜楕で、口縁部と稜線の下に沈線が施文される。424～426は土師器無台杯で、424はIV 2・3期に比定される。425は杯部外面下半～底部外面はロクロケズリされ、内外面とも赤彩される。IV 2・3期に比定される。426は小型で深身である。427はロクロ成形の土師器鉢A類で、胴部中位に稜をもつ。428は小型の長頸瓶で、底部外面にはヘラ書きがある。429は小甕B系II類、430は小甕A系I II類で、430は被熱のため器面が荒れている。

SX283 出土土器はIV 1期に比定されるものがある (416～418・420・422・423) が、主体となる時期はIV 2・3期と考える。

SX365 (図版 99、写真図版 83) 黒色土器高杯 (431) を図示した。杯部内面は黒色処理される。IV 1期の所産と考える。

SX406 (図版 99、写真図版 83) 土師器小甕 (432) を図示した。B系I II類で、胴部外面は被熱のため器面が剥落している。

SX407 (図版 99、写真図版 83) 須恵器杯蓋 (433)・高杯 (434)、土師器長甕 (435)・鍋 (436) を図示した。433は杯蓋I類で摘みは低平な擬宝珠形、口端部径が小さいことからIV 2期の所産と考える。434は高杯の脚部で、胎土D群で閑川左岸の窯跡群産と推測される。435は長甕B系II類、436は鍋B系II類で、436の胴部内面はカキメが施される。

SX411 (図版 99、写真図版 83) 須恵器無台杯 (437)、土師器鉢 (438) を図示した。437は底部の縁辺を打ち欠いている可能性がある。底部はやや薄く、IV 2・3期に比定される。438は鉢で、口縁部は外反する。ロクロ成形で内外面とも赤彩されるが全体的に磨耗している。

SX415 (図版 99、写真図版 83) 須恵器無台杯 (439～441)・有台杯 (442)・甕 (443・444) を図示した。439・441は無台杯B II類で、440は底部外面にヘラ書きがある。442は有台杯A II類で、IV 1期に比定される。443はI類の大型甕で、口縁部外面に波状文が施される。444はII類の中型甕である。

SX416 (図版 99、写真図版 83) 須恵器杯蓋 (445)、土師器小甕 (446) を図示した。445 は杯蓋 II 類で摘みは小さなボタン状で、V 期に比定される。446 は小甕 B 系 I II 類で、口縁部内面にコゲが帶状に付着し、外面には吹きこぼれによるものか帶状にコゲついている。

SX421 (図版 99・100、写真図版 84) 須恵器無台杯 (447)・有台杯 (448)・高杯 (449)・甕 (450) を図示した。447 は無台杯 B II 類で、底部外面にヘラ書きがある。448 は有台杯 A II 類で、IV 2 期の所産と考える。449 は高杯で、脚部が短いタイプである。450 は I 類の大型甕で、長い口頭部の外面には波状文が施される。

SX425 (図版 100・101、写真図版 84・91) 須恵器無台杯 (451～455)・有台杯 (456)、土師器無台杯 (457)・有台杯 (458)、須恵器壺蓋 (459)、土師器長甕 (460)・小甕 (461～464) を図示した。451・453・455 は無台杯 B II 類、452 は A II 類、454 は B III 類である。451・452 は底部外面にヘラ書きがある。452 のヘラ書きは SI451 の 49 に似ている。454 は杯部下面半にケズリが施され、底部外面はロクロケズリされる。455 は底部内面に漢数字「七」のようなヘラ書きがある。456 は有台杯 A II 類で、太い高台が付く。457 は小型で深身の土師器無台杯で、底部外面は直線的なケズリが施される。458 は土師器有台杯で、磨耗が著しく高台は剥離している。459 は壺蓋で、天井部はヘラ切り後ロクロナデが施される。460 は長甕 A 系 I 類で、胸部外面は縱方向、内面は横方向のハケメが施される。461・462 は小甕 A 系 I II 類で、462 の胸部外面は被熱のため器面が荒れている。463 は小甕 B 系、464 は B 系 I II 類で、どちらも底部外面の調整はナデである。

SX425 出土土器は IV 1 期の所産と考える。

SX469 (図版 101、写真図版 85・91) 須恵器無台杯 (465～469)・有台杯 (470)・杯蓋 (471・472)、土師器無台杯 (473)、黒色土器椀 (474)、須恵器高杯 (475)・壺蓋 (476)・壺 (477)、土師器長甕 (478・479)・小甕 (480・481)・鍋 (482) を図示した。465 は無台杯 A II 類、466～469 は B II 類で、465～467 は IV 1 期に比定される。468・469 は IV 2・3 期で、469 の底部切り離しは糸切りである。470 は有台杯 A II 類で、IV 1 期に比定される。471 は杯蓋 I 類で、口端部の屈曲は弱い。472 も口端部の屈曲が弱く、471・472 は IV 2・3 期に比定される。473 は無台杯で、胎土は精良で内外面とも赤彩される。474 は黒色土器椀で、口縁部外面には沈線が 1 条施文される。475 は高杯で、脚部が短いタイプと推測する。476 は小型の壺蓋で、外面にはヘラ書きがある。477 は口頭部が残存していないため、壺・瓶類とした。器壁は厚く、底面の調整は明瞭でない。内面の一部に、黒色の付着物が認められる。478 は長甕 B 系 2 類で、口縁端部はわずかに窪む。479 は長甕 C 系 1 類で、器面は全体的に磨耗している。480 は小甕 B 系 I II 類、481 は B 系 2 I 類で、どちらも口縁部内面にコゲが帶状に付着する。

SX469 出土土器は IV 1 期のものもある (465～467・470) が、主体となる時期は IV 2・3 期と考える。

SX476 (図版 102、写真図版 85) 須恵器無台杯 (483・484)・有台杯 (485～488) を図示した。483・484 は無台杯 B II 類で、483 は口縁部がかなり外傾しており VI 期まで下ることも考えられる。486 は有台杯 A III 類、485 も口縁部を欠くが A III 類と推測される。487 は有台杯 B I 類で、杯部内外面には部分的にスヌと油煙が付着する。484～488 は IV 2・3 期の所産と考える。

SX482 (図版 102、写真図版 85) 須恵器有台杯 (489) を図示した。B I 類で、IV 2 期に比定される。

SX509 (図版 102、写真図版 85) 須恵器無台杯 (490)・杯蓋 (491)、土師器小甕 (492) を図示した。490 は無台杯 A III 類、491 は杯蓋 II 類で、どちらも V 期に比定される。492 は小甕 B 系 I II 類で、胸部内面は被熱のため器面が荒れている。

SX613 (図版 102、写真図版 85) 須恵器有台杯 (493) を図示した。A I 類で口径が大きく、高台は底部の外側に付く。III 期の所産と考える。

SD54 (図版 102、写真図版 85) 須恵器無台杯 (494)、土師器小甕 (495) を図示した。494 は無台杯 A II 類で、IV 2・3 期の所産と考える。495 は小甕 B 系 I I 類で、胸部外面はロクロナデで仕上げる。

SD343 (図版 102、写真図版 85) 土師器瓶 (496) を図示した。ロクロ成形で外面にはタタキメが残る。

SD397 (図版 102、写真図版 85) 須恵器無台杯 (497) を図示した。B II類でV期の所産と考える。底部外面にはヘラ書きと思われる刻線がある。

SD420 (図版 102・103、写真図版 86・87・91) 須恵器無台杯 (498～504)・有台杯 (505～513)・杯蓋 (514～516)、黒色土器短頸壺 (517)、須恵器壺蓋 (518)、鉢 (519)・甕 (520)、土師器長甕 (521・522)・小甕 (523・524) を図示した。498は無台杯 B I類、499・501・502はA II類、500はB II類で、いずれもIV 1期の所産と考える。501の口縁部外面には翫圧痕がある。506は有台杯 B I類、507・508・510はA II類で、506はIV 2・3期、507・510はIV 1期に比定される。508はかなり太い高台が底部の外縁付近に付き、III期の所産と考える。底部外面には記号墨書「○」が4点並び、SX63の346と似ている。509・512は有台杯 B III類、511はB IV類で、いずれもIV 2・3期に比定される。513はX類でSD420を中心に広範囲から出土し、図上復元している。口径が大きく深身でありIV 1期と考える。514・515は杯蓋 I類でIV 1期、516はII類でIV 2・3期に比定される。517は黒色土器短頸壺で、胴部内面の器面は剥落している。518は須恵器壺蓋で摘みは小さな擬宝珠形である。天井部には沈線が2条施文される。519は頸部がくびれ口縁部が外傾する鉢である。520はII類の中型甕である。521・522は長甕 B 系2類である。523は小甕 B 系3 II類で、口縁部内面にコゲが帶状に付着し、胴部内面に翫圧痕がある。524は小甕 B 系の底部で、切り離しはヘラ切りである。

SD420 からはIV 1期とIV 2・3期の2時期の土器が出土していることから、IV 1～IV 2・3期の間、溝が機能していたと推測される。

SD477 (図版 104、写真図版 87) 須恵器無台杯 (525・526)・有台杯 (527)・壺蓋 (528・529)、土師器長甕 (530) を図示した。525は無台杯 B III類、526はB II類で、どちらも胎土B群でV期に比定される。527の高台は剥離しているが、有台杯 A III類と推測される。底部の割れ口は砥面のように平滑で、砥石として再利用されていたと推測される。時期はIV 2・3期に比定される。528・529は壺蓋で、528の口端部は内側に屈曲する。529は胎土B群でV期に比定される。530は長甕 B 系2類である。

SD515 (図版 104、写真図版 87・91) 須恵器無台杯 (531・532)・杯蓋 (533・534)、土師器無台椀 (535・536)・小甕 (537・538) を図示した。531・532は無台杯 B II類で胎土B群である。どちらもV期に比定されるが、531は底部外面がロクロケズリされており古相を呈する。534は杯蓋 I類で、IV 2・3～V期の所産と考える。535・536の無台椀はVI期に比定され、535の口縁部内外面にはススが付着する。537は小甕 A 系2 II類で、西古志型である。胴部外面はハケメ、内面はカキメが施される。538は小甕 B 系3 II類で、底部外面はナデ調整で翫圧痕が残る。

SD525 (図版 104、写真図版 87) 須恵器無台杯 (539) を図示した。胎土B群でV期に比定される。

SD531 (図版 104、写真図版 87) 須恵器無台杯 (540) を図示した。B II類でV期に比定される。底部外面にはヘラ書きがある。底部外縁は使用により磨滅している。

SD537 (図版 104、写真図版 87) 土師器鍋 (541) を図示した。B 系2類で、器面はかなり磨耗している。胴部外面下方はケズリが施され、口縁部外面に翫圧痕がある。VI期の所産と考える。

SD538 (図版 104、写真図版 87) 須恵器無台杯 (542) を図示した。A II類でIV 2・3期に比定される。

SD592 (図版 104、写真図版 87) 須恵器杯蓋 (543)、土師器小甕 (544) を図示した。543は摘みを欠くが杯蓋II類であろう。V期の所産と考える。544は小甕 B 系2 II類で、口縁部内面にコゲが帶状に付着する。

SD651 (図版 104、写真図版 87) 須恵器無台杯 (545) を図示した。口縁部を欠くがB III類と推測され、V期に比定される。

SD652 (図版 104、写真図版 87) 546は底部中央を欠くため、器種は不明である。底部内面は平らで、底面は高台が付くように見えるため、須恵器有台杯 X類の可能性がある。外面には細い沈線が3条施文され、やや歪んでいる。胎土B群でV期の所産と考える。

SD673 (図版 104、写真図版 87) 須恵器杯蓋II類 (547) を図示した。歪みが著しい。V期の所産と考える。

- P183 (図版 105、写真図版 88) 須恵器無台杯 (548) を図示した。B II類である。
- P184 (図版 105、写真図版 88) 須恵器無台杯 (549) を図示した。口縁部を欠くがB II類と推測される。
- P212 (図版 105、写真図版 88) 須恵器無台杯 (550) を図示した。549 と同様に B II類と推測される。
- P393 (図版 105、写真図版 88) 須恵器無台杯 (551)・杯蓋 (552) を図示した。551 は無台杯 B I類で、IV 1期に比定される。底部外面には「×」のようなヘラ書きがある。552 は杯蓋 I類で、IV 2・3期に比定される。
- P414 (図版 105、写真図版 88) 須恵器無台杯 (553)・有台杯 (554) を図示した。553 は無台杯 B II類で、IV 2・3期に比定される。554 は有台杯 B III類で、V期に比定される。
- P434 (図版 105、写真図版 88) 土師器小甕 (555) を図示した。B 系 3 II類で、胴部はやや下彫れである。
- P437 (図版 105、写真図版 88) 須恵器無台杯 A III類 (556) を図示した。杯部外面はケズリが施され、底部外面はロクロケズリされる。
- P448 (図版 105、写真図版 88) 須恵器杯蓋 (557) を図示した。大型で、天井部に沈線が2条施文される。高杯である可能性も考えられる。
- P489 (図版 105、写真図版 88) 土師器無台椀 (558)・小甕 (559) を図示した。559 は小甕 B 系 3 II類で、底部外面の調整はナデである。558・559 はどちらも V期の所産と考える。
- P528 (図版 105、写真図版 88) 土師器小甕 B 系 3 III類 (560) を図示した。全体的に磨耗しているため内外面ともスス・コゲみられない。IV 2・3～V期の所産と考える。
- P551 (図版 105、写真図版 88) 土師器長甕 (561・562) を図示した。561・562 は長甕 B 系 1類で、561 は胴上半内外面ともカキメ、下半外面はケズリ、内面は縱方向のハケメが施される。562 の胴部外面にはヘラ書きがある。561・562 は IV 1期の所産と考える。
- P587 (図版 105、写真図版 88) 須恵器短頸壺 (563) を図示した。焼成時、口縁部に乗せていた壺蓋が破損してずれてしまったためか、外面の自然軸が部分的に口縁部までかかる。
- P590 (図版 105、写真図版 88) 土師器長甕 (564) を図示した。A 系の底部で、外面には木葉痕が残る。
- P610 (図版 106、写真図版 88・91) 須恵器無台杯 (565・566) を図示した。565・566 は無台杯 A II類で、どちらも IV 1期の所産と考える。565 の底部外面にはヘラ書き「×」がある。
- P628 (図版 106、写真図版 88) 土師器小甕 (567) を図示した。B 系 3 II類で、胴部下半～底部外面はケズリが施される。IV 2・3期の所産と考える。
- P716 (図版 106、写真図版 88) 土師器高杯 (568) を図示した。ロクロ成形で、盤状の杯部である。
- P718 (図版 106、写真図版 89) 須恵器甕 (569) を図示した。口頸部を欠くが、II類の中型と推測する。内面の当て具痕には柾目状の木目がみられる。
- P815 (図版 106、写真図版 89) 土師器小甕 A 系 1 III類 (570) を図示した。胴部外面は縱方向のハケメが施される。
- 包 含 層**
- 須恵器 (図版 106・107、写真図版 89～91) 無台杯 (571～587)・有台杯 (588～591)・杯蓋 (592～596)・壺蓋 (600)・甕 (601) を図示した。572・573 は無台杯 B I類、571・574・578・579・581 は A II類、575～577・580・584～586 は B II類、582・583 は A III類である。571～574・576・578 は IV 1期、575・577・579・580～583・585・586 は IV 2・3期に比定される。584・587 は V期である。573 の内面には漆が付着する。578 の内外面にはヒダスキ痕が残る。582 の底部外面には「×」のヘラ書きがある。588 は有台杯 A II類で、IV 1期に比定される。底部外面には漢字の「六」または「大」のような墨書き文字がある。589 は有台杯 B IV類、590 は B III類、591 は A III類で、いずれも IV 2・3期に比定される。593 は杯蓋 I類で IV 1期に比定され、内面には「×」と「！」のヘラ書きがある。592・594・595 は杯蓋 I類で IV 2・3期、596 は II類で V期に比定される。600 は壺蓋で天井部はロクロケズリされ、自然軸がかかる。601 は II類の中

型窯である。

土師器（図版 107、写真図版 90）無台杯（597・598）・長甕（602・603）・小甕（604）・瓶（605）を図示した。597は無台杯で内外面とも赤彩され、IV 1期に比定される。598は無台杯でIV 1期に比定される。602・603は長甕 A 系 1 類である。604は小甕 B 系 2 Ⅱ類で口縁部の屈曲が緩い。605は胴部から剥がれた瓶の把手で、指で胴部に張り付けた時の痕跡が残る。剥がれた面には胴部のタタキメの転写が認められる。外面下部に付着したススは剥がれた面にも認められ、使用時に付着したものではないかもしれない。

黒色土器（図版 107、写真図版 90）有台杯（599）を図示した。内外面ともミガキが施され、黒色処理される。

3) 中世の陶器

SD47（図版 108、写真図版 90）珠洲焼片口鉢（606）を図示した。吉岡康暢氏による編年（吉岡 1994）のⅢ期であろう。

SD226（図版 108、写真図版 90）珠洲焼甕（607）を図示した。胴上半部の破片である。

4) 近世の土器・陶器

SE20（図版 108、写真図版 90）陶器碗（608）・擂鉢（609）を図示した。608 の内面は鉄釉で、19世紀の会津本郷焼の可能性がある。609 の内外面は鉄釉で、肥前系の可能性がある。

SK10（図版 108、写真図版 90）磁器皿（610）を図示した。見込に團線と意匠不明の文様を描く。高台に砂粒が付着し中国産の可能性がある。

SK19（図版 108、写真図版 90）磁器皿（611）・徳利（612）・碗（613）、陶器擂鉢（614）を図示した。611～613は肥前系である。611は見込蛇目釉剥ぎで、高台は一部無釉である。染付で内面に草花文を描き、18世紀初頭のものである。612は染付で外面に團線と草花文を描く。613は見込にコンニャク印判による五弁花文を施し、外面は團線と丸文を描く。裏銘は崩れているが方形枠に福である。612・613は18世紀のものである。614は須佐唐津で、内外面とも鉄釉である。

SD21（図版 108、写真図版 90）磁器染付皿（615）を図示した。肥前系で、輪花皿である。外面は團線と唐草文、内面は團線と草花文を描く。18世紀のものである。

SD25（図版 108、写真図版 90）磁器染付碗（616）、陶器皿（617）・徳利（618）・擂鉢（619）を図示した。616は底地不明で、見込に意匠不明の文様がある。青の発色からコバルトの可能性がある。617は見込に重ね焼きの目痕が残る。瀬戸・美濃焼の可能性がある。618は在地の松郷屋焼で、19世紀のものである。619は越中瀬戸焼の可能性がある。

包含層（図版 108、写真図版 90）陶器皿（620）、磁器染付碗（621）、青磁香炉¹（622）、陶器擂鉢（623）、土師質焰燒（624）を図示した。620～623は肥前系で、18世紀代のものである。620は見込蛇目釉剥ぎで、疊付に砂目が付着する。621はくらわんか碗で、外面は團線と草花文を描く。622は太鼓型香炉である。623は見込に砂の重ね焼き痕が残り、内面には御目が放射状に入る。624は口縁部に推定径 5.5mm の円形の孔が 1 か所ある。

第3節 土 製 品（図版 109～112、写真図版 60・92～94）

古代と近世の遺構を中心に総重量 2,573.3g 出土した。最も多いのは築造別作業で得られた焼成粘土塊である（第2表）。SK1（1,433.0g）や SK9（403.0g）など近世の火葬墓と考える土坑からの出土が多く、古代の遺構からは 236.3g 出土している。図化したのは 14 点で、内訳は鳥形製品の体部 2 点（接合しない頸部あり）と脚部 2 点（1 足）・頭部 2 点、紡錘車 1 点、土錐 2 点、円筒形土製品 4 点、円面鏡 1 点である。また、図化していないが近世の遺構からは土人形 2 点、泥面子 4 点が出土している。なお、625a・626 は鳥の体部を模しており、器としての機能のほかにオブジェなど置物としての利用も考えられるため鳥形製品と呼称し土製品として扱った。

出土した鳥形製品はすべて須恵器質であるため、小片では須恵器と区別することが難しい。

鳥形製品（図版 109～111、写真図版 60・92・94） 625 は体部（a）と接合しない頭部（b）に分かれる。体部片の多くは SK418 から、頸部境界の接合した小破片及び頭部は SK418 周辺の遺構（SK499・SK419・SK740）を中心に広範囲から出土している。首の付け根辺りを上（背）部からの衝撃によって破碎されている。上下（背腹）の一部と尾部右側を欠く。ロクロ成形で胸部は閉塞され、後方は尾状に整形され外面には一部タタキメが残る。水搔きが表現された脚部は丁寧にケズリが施され体部に接合され、前方から左右側面には断面三角形の隆帯によって羽の輪郭が表現されている。また、ごく細い沈線によって羽が丁寧に描かれ、胸部から頭部に竹管状工具の断面を押圧して径 6・7mm の輪が表現される。同時期の山形県から北陸地方の日本海側に分布する鳥形に特徴的な文様（吉田 2004）である。上（背）面全体に緑色の自然釉がかかり、頭部は後方半分に自然釉が認められる。背面全体に釉がかかるように窓の中に置かれ焼成されたと考える。頭部は、X 線 CT 画像（立体・断面）によると、やや前方に傾くもののほぼ直立に接合する（写真図版 92）。626 は尾部から体部にかけての破片すべて SK413 から出土した。ロクロ成形で、後方は尾状に整形され外面には一部タタキメが残るが下面は先端に向かってナデられている。尾の先端は、閉じるだけでなく内側に粘土を追加して長い尾を作り出している。尾の端部は連続したケズリによって作出され、上（背）面中央と左右側面からこの中央に向かって断面三角形の隆帯が貼り付けられる。その後、約 1mm 幅の連続した V 字状沈線によって羽が描かれる。627・628 は 1 足分の脚部である。湾曲した体部から剥がれた傾きから 627 は左足で 628 は右足であり、SK413 から南へ約 18m 離れた SK419 から出土した。接合はしないが白色凝灰岩の入る胎土や整形が酷似する 626 と同一個体と考える。両足とも水搔きが表現され、全面にナデ整形が行われる。足の両側縁はケズリによって直線的に仕上げられ、627 の踵は最終的に粘土を 6mm 分ほど足して長さを調整している。628 の裏面は工具で何度も同一方向に調整している痕跡が残る。629・630 は水鳥を模した鳥形製品の頭部である。629 は SK419 底面から横を向いた状態で出土した。上嘴の先端を欠くが完形である。全体的に縦方向のナデ・ケズリによって丁寧に整形され、ソケット状の端部先端は平坦に整えられる。頭頂には長さ 8mm、幅 2mm の楕円形の穴が開く。断面逆三角形状の穴で 14mm の深さがある。何かを押すためか焼成時の破裂を防ぐためか、目的は明瞭でない。目は径 8mm ほどの竹管状工具を押圧して表現される。鼻孔は長さ 7mm、幅 1mm で表現され、断面逆三角形の穴は深さ 4mm 程度である。嘴は幅 1mm 程度の沈線で描かれ、繋がる口角部分は幅約 2mm となり長さ約 6.5mm で表される。この部分は両側の高さが異なるため貫通していないが、いずれからも深く差し込まれている。また、X 線 CT 画像を撮影したところ中央部分が円柱状に淡い色であった。これは含有物や焼成程度の差異が反映した結果と考える。胎土は C 群で、隣接する SK418 出土の鳥形製品（625a）に酷似する。ソケット状の端部は何かに差し込むことを想定して作られたと考えられ、接合しない 625b の同一個体頭部が想定される。長さ 12.5cm、ソケット部の長さ 4.5cm・幅 2.8cm、重量 348.8g である。630 は SK419 の須恵器環状瓶（195）のすぐ横で上を向いた状態で出土した。嘴を欠く。全体的に縦方向のナデによって仕上げられ、ソケット状の先端部は丸く整形されている。目は幅 1.0～1.3mm の細く先端の尖った工具で一筆書きによって描かれる。耳も同様の工具で表現されている。喉は押圧してくぼませている。また、X 線 CT 画像を撮影したが 629 と異なり一様に同色であった。胎土は A 群で、一緒に出土した須恵器環状瓶（195）に酷似する。ソケット状の端部であり、環状瓶の口頭部に差し込まれていた可能性もある。長さ 14.4cm、ソケット部の長さ 4.4～5.0cm・付け根の幅 3.0cm、重量 344.3g である。

筋籠車（図版 112、写真図版 94） 図化した 1 点のみの出土である（631）。SI451 から出土した。約半分を欠くが断面形態は台形を呈し、直径 5.4cm、中央の孔径は 0.87cm、厚さは 2.80cm である。磨耗の痕跡は認められない。

土鍾（図版 112、写真図版 94） すべて細身の管状土鍾で 3 点出土し 2 点図化した。632 は P448 から出土し、約半分を欠くため長さは分からぬが、径は 1.7cm で孔の径は 0.57cm である。633 は包含層から出土し、成

形時の指頭圧痕が全体に残る。欠損して長さは明瞭でないが、孔の径は0.3cmと632の約半分しかなく非常に細い。

円筒形土製品（図版112、写真図版94）出土した4点すべてを図化した。634はSK346から出土した端部破片である。端部の径は11.0cmで外面はロクロナデ、内面には弧状の当て具痕が残る。635・636は包含層から出土した端部破片である。635は端部に面があるため底部と仮定した。全体像は明瞭でないが、筒にならず焼成前に縱方向に切り取られる。また、内面には端部から約6.5cm部分が断面三角形の帶状に大きく張り出し、その外面は段差を設けるためか厚さがほぼ半分になっている。用途なども分からぬが上浦A遺跡〔川上1997〕に類例がある。内外面はロクロナデの後に横位のケズリが施され、その後外面はナデ、内面はハケメも認められる。636は端部が2.7cmほど斜めに内側へ傾斜して細くなる。内外面ともにロクロナデで、内面には一部に不定方向のナデが認められる。637はSK229から出土した小片であるが、径が小さく砂粒を多く含む胎土と、外面とともにハケメの痕跡が明瞭に残る点など、他の円筒形土製品とは異なる。

円面鏡（図版112、写真図版94）図化した1点のみの出土である（638）。南北に約18m離れて出土した破片が接合したが、2/3ほどを欠く。長方形の透かしの間には、横向きの「日」が線刻される。観面部分は自然軸による凹凸のまま磨滅がみられず、また墨痕もないことから少なくとも残存部には、使用した痕跡は認められない。

第4節 鍛冶関連遺物（図版112、写真図版94）

羽口・鉄滓・炉壁のほかに鍛冶関連と推定した遺構（SB251-SD153、SB252-SK71・76・132、SB829-P161、SK67・73・82・112・128）よりサンプリングした埋土の篩選別作業により検出した粒状滓・鍛造剥片を合わせて総重量3,273.2g出土した。内訳は羽口342g、鉄滓2,765.5g、炉壁106.3g、粒状滓3.0g、鍛造剥片56.4gである。羽口2点、鉄滓6点を図化した。

羽口（図版112、写真図版94）14点出土し2点図化した。639は先端部の破片資料で、左側の一部を欠き先端から約3cmが残存する。身厚は2.5cm前後で、通風孔は直径1.9～2.0cm前後の円形を呈する。先端肩部が溶損して斜めになり、頸部にオリーブ灰色のガラス質滓が垂れる。胎土に翻版の圧痕がみられる。640は細身の羽口小破片で、直径の4分の1程が残存する。外面は細かく発泡し、内側には通風孔表面の一部が残る。身厚は1.1cm程と薄い。

鉄滓（図版112、写真図版94）641～644は椀形鍛冶滓。641は平面形が不整五角形を呈する。粒状の小塊が溶着したような外観で凹凸が多い。上面の一部は膜状に黒色ガラス質滓化する。底面の一部は滓が重層気味である。642は平面形が三角形を呈し、全体的に酸化土砂に覆われる。底面に炉床土らしき粘土が付着する。643は平面形が不整五角形を呈する。半分は分厚い酸化土砂に覆われているが、発泡の少ない緻密質な滓である。644は平面形が不整な五角形で、右側部が破面である。底面に炉床土らしき粘土が付着している。炉床土上面は平滑気味で、一部に工具痕らしき跡が残っている。上下で滓質が若干異なり、発泡が少ない滓の上により色調が暗く微細に発泡した滓が重層する。滓質は全体的に緻密である。645・646は鉄滓。片方の端部が破面である。645は3単位程度の小塊が溶着した形状で、上半部は酸化土砂に覆われる。鍛造剥片らしき小片や木炭が付着している。646は比較的緻密な滓に、細かく発泡した小塊状の滓が溶着した形状。

第5節 石器・石製品（図版112～115、写真図版95～97）

研磨（磨耗）や敲打、二次加工などの痕跡が認められる砾のほかに、加工痕や使用痕のない搬入砾（軽石類含む）や被熱した焼砾もここで扱う。石錘、敲石、磨石類、砥石、台石、二次加工のある砾、編み物石、火打石、数珠

玉、碁石がある。遺跡の時代は古墳時代・古代・中世・近世と多岐にわたるが主体は古代である。出土分布は図版7に示したとおりで古代の遺構密度に比例し、調査区北西部で特に多い傾向にあることから大半が古代に所属するものと考える。軽石類を除く搬入礫は3,369点(340.1kg)で、そのうち焼礫は2,804点(270.3kg)出土している。焼礫が最も多く、点数で搬入礫の83.1%を占める。特に、15AP21や16AO5グリッド周辺で検出されたSX415・416からは、破碎した焼礫がまとまって出土(SX415:208点(18.1kg), SX416:170点(6.7kg))し注目される(図版64)。また、軽石類は543点(12.1kg)出土したうち97点(2.6kg)に磨耗痕跡が認められる。点数で約18%にあたる。以下、種別ごと図版掲載順に説明する。

数珠玉(図版112、写真図版95) 近世の土坑墓から出土した4点と調査区内の表探1点(650)である。647～649はSK52から、650はSK15から出土した。647は觀玉である。649は水晶で、それ以外は石英製である。

砥石・敲打石(図版112、写真図版95) 敲打痕と砥面が認められる。1点のみ出土した(652)。SX125で検出された石列831の周辺で出土した(図版62)。表面及び両側面に砥石としての使用痕が、上下端部と左側面に敲打痕が認められる。ホルンフェルス製。

砥石(図版112・113、写真図版95) 磨耗痕や明瞭な線状痕を有するものを一括した。28点(4.8kg)出土し9点図化した。653はSX62から出土し、上下端部と裏面を欠く。細かい擦痕が明瞭に残る。粘板岩製。654はSI65から出土し、上下端と左側面さらに裏面を欠く。凝灰岩製。655はSX124から出土し、表面と右側面に砥面が認められる。緑色凝灰岩製。656はSI451から出土し、上下両端を欠く。表面と左右両側面に砥面が認められ断面は方形を呈す。砂岩製。657は調査区北東側の包含層から出土し、被熱しており上下両端など大部分を欠く。割れ口以外には砥面が認められ、一部に線状痕も残る。砂岩製。658はSD420から出土し、表面のみ砥面が認められる。凝灰岩製。659は調査区南西側から出土し、下端と右側縁を欠く。表面と左側面に砥面が認められ、右側面には木葉化石が認められる。砂岩製。660はSX63から出土し下端部を欠く。断面は方形を呈し表面は使用により傾斜し中央部分は薄くなる。緑色凝灰岩製。661はSX63と約9m離れたSX125から出土したもののが接合した。断面方形を呈し右上半を欠く。凝灰岩製。

敲石(図版113・114、写真図版95・96) わずかでも使用した痕跡があるもので、8点(2.9kg)出土し6点図化した。662はSD420から出土し、右側縁の一部と下端部にわずかな使用痕が認められるが、下端部の剥離痕は使用によるものではないかもしれない。流紋岩製。663は調査区北東側包含層から出土し、端部と側縁の一部にわずかな使用痕が認められる。流紋岩製。664はSX469から出土し、側縁に使用痕が認められる。玄武岩製。665はSI108から出土し、断面円形の棒状礫の破損した端部に使用痕が認められる。流紋岩製。666はSI451から出土し、断面梢円形の棒状礫の下半部を欠く。右側縁部に使用痕が認められる。流紋岩製。667は調査区北東側包含層から出土した棒状礫で、側縁の一部にわずかな使用痕が認められる。流紋岩製。

軽石類(図版114、写真図版96) 8点図化した。磨面が認められるもの(670・672・674)や中央部に未貫通の穿孔痕跡があるもの(669・673)がある。688・671は磨面が認められない。668はSD420から出土し、断面が梢円形を呈する。671はSD525から出土し、磨面は認められないが扁平である。669はSI451から出土した。一部を欠くが、平面は円形で全体的に磨面が認められる。中央部には断面V字状の穿孔痕がある。670はSK443から出土し、表面に磨痕が認められる。672は近世の溝SD25から出土し、片面のみ認められる磨面は平らである。673は一部を欠くが平面は円形を呈し、中央には断面U字状の穿孔痕がある。674は近世墓SK19から出土した。全体的に磨面が認められ一部が直線的に平らになっている。675は調査区北東部の包含層から出土し、下半部を欠く。全体に磨面はないが、中央部に表面からの穿孔痕が認められる。

磨石(図版114、写真図版97) SX469から出土し図化した1点のみである(676)。表面と表面の一部に磨面が認められる。粉岩製。

石錐(図版114、写真図版97) 3点(0.3kg)出土し1点図化した。677は調査区南西部の包含層から出土し、全体的に磨耗している。軽石製。

火打石 (図版 115、写真図版 97) 近世の井戸 SE20 から出土し図化した 1 点のみである (678)。断面は三角形を呈し、稜線には使用時の微細な剥離痕が認められる。チャート製。

二次加工のある礫 (図版 115、写真図版) 12 点 (264g) 出土し、穿孔痕の認められる 1 点を掲載した。679 は大部分を欠くが、おそらく中央部分に径約 1.5cm で深さ 0.5cm ほどの断面 V 字状の穿孔痕跡がある。穿孔部分はそれほど磨耗していない。凝灰岩製。

台石 (図版 115、写真図版 97) 掲載した 2 点 (2,333g) のみの出土である。680 は大部分を欠くが、表面には磨り面が残り、全体的に被熱して褐色を呈す。また、割れ面には木葉の化石が認められる。砂岩製。681 は調査区南側の包含層から出土した。大部分を欠くが被熱しており、表裏面には使用した痕跡が認められる。凝灰岩製。

焼礫 (図版 115、写真図版 97) 鉄滓が付着した 2 点を掲載した。682 は SI608 から出土した。下方を欠くが、一部わずかに敲いた痕跡が認められる。表面には縦 5.0cm、横 4.3cm の範囲に鉄滓が付着している。流紋岩製。683 は大部分を欠く。割れ面には鉄滓が厚く付着し、表面は被熱により一部黒化している。流紋岩製。

編み物石 (図版 115、写真図版 97) 長楕円形の礫で使用した痕跡がほとんど認められない長さが 10cm 前後のもの。これまで古墳時代の遺構などからまとめて出土し、編み物用の鍤としての使用が指摘された礫 (波辺 1981a・b) を推測した。156 点 (27.8kg) 出土し 12 点図化した。116 点が遺構から、40 点が包含層から出土し、遺構密度に比例している (図版 7)。最も多いのは SI451 で 17 点、次いで SX469 の 8 点、以下 5 点出土の SI65・SX283・SD420・SB252-SD468・P385 が続く。P385 からは 693・694 を含む 5 点の編み物石がまとめて出土した (図版 68・写真図版 54)。また、約 20m 離れた SI65 と SX124 から出土した資料が接合している。長さを基準に分類し、6.0 ~ 7.9cm を I 類、8.0 ~ 10.4cm を II 類、10.5 ~ 14.5cm を III 類とした。欠損して長さが分からぬ 7 点を除く 149 点の内訳は、I 類が 35 点 (23.5%)、II 類が 77 点 (51.7%)、III 類が 37 点 (24.8%) である。684 ~ 687 が I 類、688 ~ 691 が II 類、692 ~ 695 が III 類で、被熱しているものは 5 点認められた。特に 691 は被熱し中央付近の一部に黒色の物質が付着している。684・687・688・691 ~ 695 が流紋岩、685・686・690 が玄武岩、689 が凝灰岩である。

第6節 金 屬 製 品 (図版 116・117、写真図版 98 ~ 100)

鉄製品と銅製品が出土している。鉄製品は、錫杖頭や鉄鋤などの希少品のほか鉄鎌・刀子・結錠車・鎌・釘を含む工具類がみられる。遺構内から 1,823.6g、包含層からは 2,826.5g (合計 4,650.1g) 出土し、古代の遺構から 1,383.2g、近世の遺構から 440.4g と古代が圧倒的に多い。銅製品は、近世の遺構から出土した煙管 (726) と錢貨 (727 ~ 731) のみである。鉄製品 30 点、銅製品 6 点を図化した。以下、種別ごとに記載する。

錫杖頭 (図版 116、写真図版 98) 696 は柄に輪をつけた鍛造鉄製の錫杖頭である。鋒により、輪の付着方法は明瞭でない。遊環は、出土状況や取り上げ直後の写真、X 線 CT 画像などを参考に復元実測した。残存長は約 39cm で、輪と遊環の一部を欠く。柄の断面形は、輪より上部の先端部が一辺約 6mm の方形、それより下は 5.5 ~ 15.0mm の円形で下方ほど太くなる。柄の上端部に刻線や装飾はない。中ほどは鋒が進行しやや空洞気味である。下端は長さ約 4.7cm の袋穂で、左側面に合わせ目がある。輪は括れや蘇手形などが付かないシンプルな宝珠形であり、上部と下部は両側から柄の側面に取り付けているようである。右側に 1 個、左側に 2 個の遊環が遺存する。遊環は直径約 4.5cm、断面は直径 3 ~ 4mm の円形である。なお、(公財) 元興寺文化財研究所の初村武寛研究員から錫杖頭全体に有機質のものがみられ、布などが巻かれていた可能性が指摘されている。

鉄鋤・舌 (図版 116、写真図版 98) 鉄鋤は 4 点、舌は可能性があるものも含め 3 点を確認し、すべて図化した。697 は上部を欠く鋤身である。錫杖頭や環状瓶などと共に SK419 から出土した。残存長 8.9cm を測り、合わせ目は縦方向である。上部の合わせ目付近に直径約 3mm の孔が 1 か所開く。下端の合わせ目は前後に約 4mm ずれが生じている。698 は完形の鋤身。697 と同じく SK419 から出土した。長さ 9.5cm を測る。合わせ目は

斜方向で、鋒身上部の背面に3×4mm程とやや横長の孔が1か所開く。X線CT画像では、上端右側面が折れ曲がって割れている様子が観察できる。699はほぼ完形の鋒身。SK419から約12m西に位置するSK758から出土した。鋒の付着が薄く外形が分かりやすい資料である。長さ12.2cmと今回出土した鉄鋒の中で最も大きい。合わせ目は縦方向で、上部両側面に直径4mm前後の孔が開く。上端は斜めになっており、下端の合わせ目付近の角は一部欠損する。700は完形の鋒身である。調査区東側のSX63から出土した。長さは9.8cmで、他の鉄鋒と比べ細身で円筒形に近い形状を呈する。合わせ目は縦方向である。孔は確認できなかった。上端の形状は斜めで、下端の合わせ目は前後に約4mmずれる。厚い酸化土砂に覆われているが、遺存状態は比較的良好である。701は完形の鉄鋒の舌である。調査区東側、掘立柱建物に伴う可能性がある溝(SD828-SD357)から出土した。本体の長さは7.5cmで、やや尖らせた上端を蕨手状に巻いている。内部は鋸びてほぼ空洞化している。断面形は一辺6mmの隅丸方形である。702は蕨手状に巻く上端の一部を欠くが、ほぼ完形の鉄鋒の舌である。須恵器壺などと共にSK488から出土した。本体の長さは10.1cmを測り、内部はほとんど空洞化している。断面形は8×9mmの隅丸方形を呈する。703は上端部を欠くが、上部が先細りやや湾曲する形状や大きさが701と類似することから、鉄鋒の舌と考える。本体の長さは7.3cmで、中央付近がやや空洞化している。断面形は一辺7mmの隅丸方形である。

鐵鎌(図版117、写真図版99・100) 704は有頭有茎鎌である。かえしと茎部の先端がそれぞれ欠損する。鎌身の関部は深めの脇抜で、鎌身部の断面は両面丸みを帯びる両丸造である。かえしは前後方向にやや歪む。頭部は角闘で、断面形は8×4mmの長方形を呈する。茎部は1cm程が残存し、断面形は一辺4mmの方形である。

紡錘車(図版117、写真図版99・100) 705は鉄製紡錘車である。紡輪は完形で直径4.2cm、厚さ約7mmを測る。紡茎は直径4mmで、やや歪んでいるが長さ2cm程が紡輪に通った状態で遺存する。

刀子(図版117、写真図版99・100) 706は3か所で折れているが完形品である。刀身の背と刃の両方に闇をもつ両闇形である。刀身は5.9cmを測り、柄の長さとほぼ同じである。刃は研ぎ減りによるものかやや内湾する。707は両闇形である。柄と刀身の先端をそれぞれ欠くが、残存部で刃5cm、柄6.3cmを測る。X線写真には、柄の一部に樹皮様のものを斜めに巻いていた痕跡が残る。708は2か所で折れているが完形とみられる。刀身の背は直線的、刃は曲線的な形状を呈し、無闇形である。鋒による変形が、X線画像では凹凸のある外形が写る。内部はやや空洞化している。709は刀身の一部で、SK419の北端から出土した。両端が欠損しており、残存部で長さ8.3cm、身幅2.2cmを測る。厚さ2mm弱と薄手である。

工具類(図版117、写真図版99・100) 形状から、釘など工具類と推定されるものを一括した。710～716は古代、717・718は近世遺構からの出土である。710は釘で、上端を曲げてやや扁平な頭部を作っている。断面形は一辺3.5mmの方形を呈する。鋒に覆われ不明確だが、先端は破面の可能性がある。711は先端を欠く階折釘と考える。鋒の影響かX線画像では頭部の写りが不明瞭である。断面形は6.0×3.5mmの長方形で、全体的に扁平な形状を呈する。裏面に木炭片が多数付着している。712は頭部が欠損する釘で、上部の鋒が剥落している。芯部に鉄が残る。断面形は一辺4mmの方形である。713は先端が尖る棒状の製品である。頭部が曲がらず、先端部を若干打ち伸ばす形状などから、工具類の可能性がある。体部から先端の芯部には鉄が残る。本体の断面形は5×4mmの長方形である。714は先端がV字状に屈曲した製品で、芯部は空洞化している。本体の断面形は、屈曲部で4.0×2.5mmの長方形である。折れ曲がった釘や工具類と推定される。715は左脚部を中ほどから欠く「コ」の字状の製品である。左脚部は後ろへ、右脚部は手前へ曲がっている。断面形は9×5mmの長方形で、扁平な形状である。内部は空洞化している。716は完形の整状製品である。断面形は11.0×0.6mmの長方形で、下端は刃状である。頭部は本来の形状か使用によるものか明瞭でないが、やや潰れている。717は先端を欠く釘である。上端を曲げて頭部を作っているが、頭部先端は破面にも見え、元々は巻頭だった可能性がある。断面形は先端破面で2.5×2.0mmの長方形である。木目が横方向の木質が付着している。718は完形の釘で、鋒により不明瞭だが頭部は巻頭と思われる。断面形は一辺3.5mmの方形で、頭部付近に木目が横方向の木質が付着

している。

鎌（図版 117、写真図版 99・100） 719 は完形の直刃鈍角鎌である。刃部は背側に向かって若干反り、身幅は柄付近で 4cm 前後、先端付近で 3.5cm 前後である。峰部は厚さ 9mm と、720 と比べ刃が幅広で分厚い。左端部を短く折り返している。720 は 3 か所で折れているがほぼ完形の直刃鈍角鎌である。刃部の身幅は柄付近が 3cm 前後、先端付近が 2cm 前後と先細る形状を呈する。峰部の厚さは 6mm を測る。36 と同様に、左端部を短く折り返している。鎌には折り返しと並行するように柄の痕跡が残る。刃部の基部には柄に沿って湾曲した薄い鉄板が遺存しており、鉄板の上から目釘を打ち込んでいる。

その他（図版 117、写真図版 99・100） 器種や用途が不明確なものを一括した。721 は 3 点のうち 2 点が接合する製品である。棒状部は直径 5 ~ 6mm で断面形は円形～楕円形を呈し、両端が欠損する。内部はやや空洞化している。接合しないもう 1 点は、先端が枝分かれした直径 5mm 程の丸棒に、湾曲した細い部品が付着した外観である。722 は厚さ 1 ~ 2mm の鉄板を渦巻状に巻いた製品である。上端付近の鎌が層状に剥離し本体が露出している。下方へ向かうほど太くなる形状である。X 線 CT 画像によると、内部は鎌が進み一部変形や破損が生じているようである。723 は接合しないが中央に長方形の孔が開いた隅丸長方形の薄板状の製品である。縦 4.7cm、横は 7cm 弱程度と推定される。厚さは 2 ~ 3mm と薄く、中央の長方形の孔は縦 0.9cm、横は残存している部分で約 2.7cm である。左側の角 2 か所に直径 4mm の鉢状の突起がある。X 線画像では左側短辺に台形の抉りがあるように見える。724 は平面形が不整な台形を呈する。X 線 CT 画像では、内部に気泡状の空隙が多数存在する様子が観察でき、下部以外は破面とみられる。下部は片面が斜めになっている。725 は球体の不明品である。全体が鎌に覆われ、ひび割れた外観をしている。X 線 CT 画像によると内部は空洞である。

煙管（図版 117、写真図版 99） 726 は火皿が欠損した雁首部である。直径 1.2cm で、吸い口から火皿部に向かって右横に合わせ目がある。羅字の一部が残存している。SD55 からの出土で、年代は近世に位置づけられる。

錢貨（図版 117、写真図版 99） 図化したものはいずれも近世の土坑や墓坑からの出土で、墓坑から出土したものは六道銭と推定される。727 は全体の半分ほどが残存する新寛永通宝である。背側に「文」の字がある。728 は文字が不鮮明だが寛永通宝とみられる。両面に炭化した植物繊維らしき付着物がある。遺存状態は良くない。729 は完形の古寛永通宝である。730 は 4 枚が固着している。文字面が表を向いている方は古寛永通宝で、反対側は裏面のため銭種不明である。一部に炭化した植物繊維状の付着物が確認できる。731 は 3 枚が固着している。両端の銭は文字面が表を向いているため古寛永通宝と判別できるが、中の 1 枚は銭種不明である。一部に煤が付着し、周縁部の一部に欠けが見られる。

第7節 木製品（図版 118 ~ 120 写真図版 101 ~ 103）

総数 55 点出土した。内訳は箸状製品 1 点、小皿未成品 1 点、棒状製品 2 点、柱根 5 点、井戸側 14 点、数珠玉 28 点（完形）、不明品 4 点である。古代の井戸（SE278）や近世の墓坑（SK1・10 など）を中心に、遺存状態の良好な 19 点を図化した。井戸側は丸木舟を転用したものが 3 点ある。木取りや器種の分類、実測図の表現等については荒川隆史氏にご教示頂いた。以下、種別ごとに記載する。

箸状製品（図版 118、写真図版 101） 1 点出土した。732 は下端欠損し上端は炭化している。

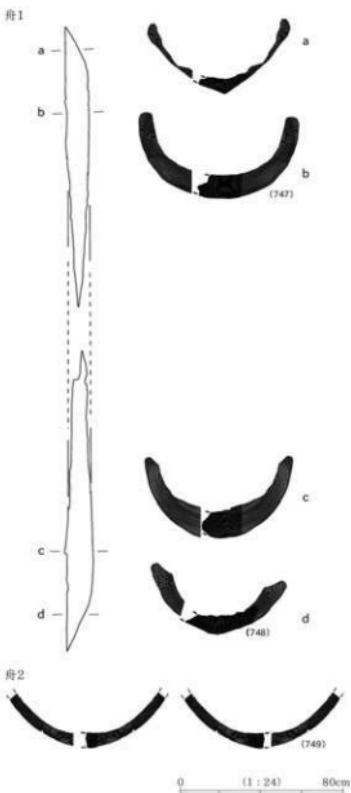
小皿未成品（図版 118、写真図版 101） 1 点出土した。733 は径 9.4cm の円盤状を呈する。側面には全面に加工痕が認められる。

棒状製品（図版 118、写真図版 101） 2 点出土した。734・735 はいずれも SE278 出土で下端は欠損し、735 は一部折損している。

柱根（図版 118、写真図版 101） SB251 を構成する柱穴から出土した柱根 3 点と、SI108・焼土 211 から出土した柱材 1 点を図化した。736 は SB251-P152 から出土した。木取りは芯持ミカン剤である。737 は

SB251-P178 から出土した。木取りは芯持ミカン削で下面是斜めに加工される。738 は SB251-P273 から出土した。木取りは芯持偏ミカン削である。仕口の部材を再利用したものと推測される。739 は柱材で木取りは芯去ミカン削である。遺存状態は良くない。

井戸側(図版 118 ~ 120、写真図版 101 ~ 103) 10 点として取り上げたが、整理の結果 14 点となった。そのうち腐食の進んだ小片を除く 10 点を図化した。740 ~ 745 は板材や角材の転用、747 ~ 749 は丸木舟の転用である。747・748 は丸木舟の先端(船首か船尾かは不明瞭)を下に向け、749 は舟の体部を用いて径約 70cm の円形に配置している(図版 33)。747(木枠①・②)と 748(木枠④)の間に 746(木枠③)を設置し、器壁の薄い 749 の外側には 740(木枠⑤)・741(木枠⑧)・743(木枠⑦)・744(木枠⑨・⑩)の板材等を置いて補強している。742・745(いずれも木枠③)は 746 の根元付近から出土した。740 は柾目角材で、上部は腐食しているが下端は V 字状に尖らせている。741 は板目角材で、上部は腐食しているが、貫孔の痕跡がわずかに残る。742 ~ 745 は板目材である。742 の上部は腐食し下端中央が一部欠損する。743・744 の下端には平坦にした際の加工痕が残る。745 の下端は V 字状に尖らせている。746 は平面を平らにした際の手斧痕(幅約 3.6cm)が認められ、その後に先端が鋭い工具で突き刺した痕跡が一部に残る。747 ~ 749 は丸木舟を転用したので、丸木舟本来の姿を復元して図化した。747 は木枠①と②が接合した。上端外面には断面 V 字状に稜線が入り、船首(か船尾)に近いと思われる。右舷から船底中央付近までが残存するが、下半は腐食している。内外面とも舟製作時の手斧痕(幅約 4cm)が残るが、上端内面は手斧痕の上から打ち割りが行われており、井戸側転用時の再加工と思われる。右舷側の破片(木枠②)は打ち割り後さらに加工を加えており、転用時の木枠①・②分割後、別々に再加工を行っている。外面の稜線付近では幅約 4cm の手斧痕の上に幅約 1.5cm の細長い加工痕が確認でき、舟製作時に 2 種類の工具を使用していたと推測される。748 は上端外面に 747 と同様の稜線があり舟の先端に近い部分と考える。左舷から船底中央付近までが残存し、下半は腐食している。上端には一辺約 4cm の方形の孔が 1 か所ある。井戸側転用時に分割され全形は残っていないが、柾綱を通すための孔と推測される。747 と同様に内外面とも舟製作時の手斧痕が残り、上端内面は手斧痕の上から打ち割りが行われている。井戸側転用時の再加工と考える。外面の稜線付近では手斧痕の上に重なる幅約 1cm の細長い工具痕が確認できる。747 と同様に舟製作時に 2 種類の工具を使用していたと思われる。749 は木枠⑥・①・②が接合した。左舷から船底中央付近の破片で、船縁は残存していない。上半は腐食している。内外面とも舟製作時の手斧痕が残り、下端には井戸側転用時に分割された痕跡がある。接合の痕跡から 2 片に分割した後に井戸側へ転用するため再加工している事が推測できる。



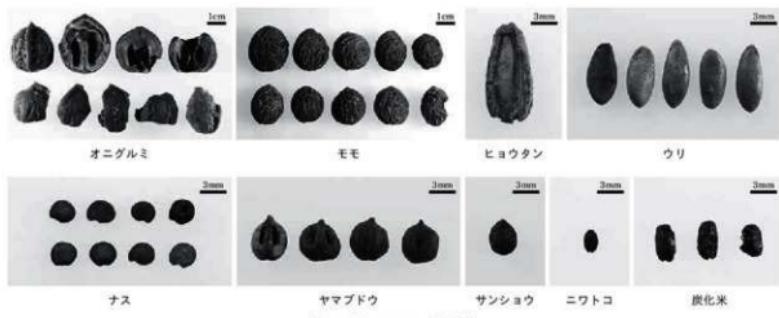
第 9 図 井戸側に転用された丸木舟の断面・模式図

747～749の製作時の痕跡や断面と傾き、器壁厚などを参考に、井戸側へ転用される前の丸木舟を推定復元すると第9図になる。747・748のどちらが船首・船尾かは不明瞭だが、同一の丸木舟の両端であろう（舟1）。残存していない断面は反転させて推定線とすると、幅約72～81cm（断面b・c）、深さ41～42cmの丸木舟が想定される。腐食で全体の長さは分からぬが少なくとも234cm以上の舟であろう。749は器壁が薄く舟の断面がやや開くことから、別の丸木舟（舟2）と考える。両端が残っていないが、前述の舟（747・748）より浅い舟が想定され、SE278構築時に少なくとも2艘の舟を所有していたと考える。

数珠玉（図版118、写真図版101）近世の墓坑SK1から完形22点と欠損品7点、SK10から完形6点が出土し、全て炭化している。大きさについて、SK1から出土した完形の数珠玉の平均値は長さ4.3mm、幅3.7mm、厚さ3.0mmで、SK10は長さ5.6mm、幅5.5mm、厚さ4.6mmであった。SK10の方が一回り大きい。各々平均的な大きさの数珠玉5点を図化した。750～752はSK1から、753・754はSK10から出土した。

第8節 その他の

有機遺物など上記分類に含まれない遺物を一括した。古代・近世遺構から埋土を採取して筛选別作業を行った結果、種実（炭化種実も含む）、炭化米・焼骨・炭化物が多数検出された。筛选別によらない出土資料も含めた各遺構の出土量内訳は第2表のとおりであるが、任意の遺構かつ遺構内の埋土すべてを採取していないことと、採取した土壤の重量が不明瞭であるため、表の数値がすべてではない。炭化物はほぼすべての遺構から出土し、炭化米は近世の墓坑を中心に古代の遺構からも出土している（図版8）。特にSB251-SD153からは古代遺構出土炭化米の約半数がみられる。この遺構は、鍛冶関連施設の可能性があるSB251の雨落ち溝であり、101粒もの炭化米が出土している点は特筆される。また、SE278からは肉眼で判別可能な多くの大型植物遺存体（種実）が出土した（第10図）。周辺から出土は検出されていないが、調査区南東側で東西に延びる溝群が検出された（図版17・18）。出土と考るこの溝群から種実は検出されていないが、SE278で出土したナスやウリなどごく普通の植物が栽培されていたと推察できる。また、近世の墓坑9基で骨様物質がみられた（第2表の「*」）。SK11出土の101.3gについて奈良貴史氏（新潟医療福祉大学自然人類学研究所教授）から「最大でも5mmに満たない哺乳類由来と思われる骨片が1.0g（約10点）確認された。すべて白色を呈し、かなりの高温で被熱している」という所見を得た。なお、種実については『原色日本植物種子写真図鑑』（石川1994）に基づき6倍ルーペを用いて同定を行った。



第10図 SE278出土種実

第2表 頭骨別資料一覧

古代遺構

遺構	重量(g)				和(点)
	炭化物	穀実	穀骨	昆虫	
SH65	0.2	0.4			7.0
SH103	0.4	0.5			
SI103-燒±114	15.5		0.4		
SI108-P203	1.2				
SI181-P81		0.9			
SI181-燒±830	5.5			2.6	
SE207-燒±823	0.2				
SI243	1.5				
SH451	0.2			35.0	
SH451-燒±820	0.8		0.3		
SH453	0.1				
SH453-燒±822	0.1				
SB251-SD152	11.7	0.9		0.1 101	
SB252-SK71	9.6			2.2 9	
SB252-SK76	4.5				
SB252-SK132	2.1			1	
SB828-P326	0.1				
SB828-P328	0.1				
SB828-P384	0.3	0.1			
SB828-P442	0.2				
SB828-SD357	0.1			5.0	
SB829-P161	0.7			3	
86.4					
SE278	99.0	(オニグルミ, モモ, ヤマブドウ, ヒュウタン, ナス, サンショウ, ニクトコ, クリ)	0.8	0.7	37
SK67	14.6			17.7	
SK73	3.5				
SK82	1.4			27	
SK84	14.9		0.1		
SK112	0.5			1.6	
SK128	2.7			0.3 4	
SK182	3.2				
SK220	19.1			0.1 1	
SK235	0.9	0.1			
SK242	49.9				
SK268	0.1				
SK281	1.6	0.5			
SK285	0.1				
SK346	2.1				
SK352	3.9			1	
SK363	110.7	0.4 (ウリ)		114.0 5	
SK413	0.1				
SK418	0.2				
SK419	2.7	0.3	0.2 0.2		
SK443	9.2	2.4		1	
SK444	14.3			8	
SK455	7.9			1	
SK457	0.1				
SK466	1.0				
SK472	0.1				
SK488	0.8	0.4			
SK543	0.1			1	
SK546	0.2				
SK562	0.1				
SK630	0.1				
SK631	0.1				
SK643	0.5				
SK658	3.0				
SK663	10.6		0.1		
SK708	0.1	0.1	0.1	1	
SK720	4.4				
SK787	1.4				
SK796				4.0	
SX56	287.0	0.3	0.3		
SX63				1.6	
SX64	7.5	0.2		4.0 3	
SX125	0.3				
SX240	1.3				
SX248	0.3				
SX283	0.2			12.0 1	

遺構	重量(g)				和(点)
	炭化物	穀実	穀骨	昆虫	
SX375		0.2			
SX377		2.3			
SX378		1.6	0.1		
SX382		0.1			
SX390		0.4			1
SX407		0.2			
SX421		0.1	0.5		
SX425		18.1	0.3	0.1	4
SX469		0.5			
SX605		166.9	0.2		
SID359		0.5			
SID397		0.2			
SID420		5.2	0.1	0.1	
SID515		0.2			
SID537		80.9	0.1		2
SID606		25.5	0.3		
SID664		0.1			1
SID665		0.2			
SD725		0.4		0.1	
SD731		0.1			
P110		70.5			29.1 2
P253		0.1			
P267		0.1			
P330		0.1			
P262		5.5	0.1		4
P427		0.4			
P459		1.8			
P603		0.6			
P642		0.8			
P551		1.0			
P632		1.4			
P728		2.1			0.8
P729		2.8			0.8
燒±374		0.3			
燒±379		0.1			
燒±443		0.2			
燒±454		0.1			
燒±588		0.4			
燒±594		0.2			
合計(古代)	1,129.1		95.1	3.6 1.0 236.3 219	

近世遺構

遺構	重量(g)				和(点)
	炭化物	穀実	穀骨	昆虫	
SE6		0.2			4
SE20	23.7 (毛モ、ヤマブドウ、ウリ、サンショウ、ウカ)			0.3 1.0	9
SK1	266.2	0.3 (ヤマブドウ)	29.4*	1,433.0	965
SK7	144.2		1.3	0.1	
SK8	9.2	0.1	2.8	28.0	146
SK9			2.0		403.0 8
SK10	576.4	0.3 (ヤマブドウ)	7.2*	0.4 6.0	1,331
SK11	0.4	1.5			55
SK12		0.2			9
SK13	0.1	0.3	5.9*	0.1	
SK15	0.2	0.2	3.1(麻)	0.2	
SK16	0.1	0.1			2
SK19	4.2	1.4 (モモ)			7
SK52				0.1	
SK478	0.1	1.5 (ヤマブドウ)	0.5*		14
SK544	9.6	0.9	2.0*		114
SK545	1.0	0.2			38
SK556	7.2	0.1	0.3*		26
SK600	0.6			0.2*	3
SK476	0.1	4.1			
SK482					5.0
SD380	4.0				
合計(近世)	1,047.3		30.8	186.0*	1.1 1,876.0 2,731

*は骨髄物質を含む量

第VI章 自然科学分析

第1節 概 要

遺跡は阿賀野川左岸に延びる自然堤防上に立地する。今回の調査では、古代の竪穴建物、掘立柱建物、井戸、土坑、溝、ピットなど多くの遺構が検出された。そこで、古代の植生や用材選択、各遺構の年代や水田跡の検討など、さまざまな目的で自然科学分析を行った。

調査区の基本土層はI～V層に分けられ(図版9)、おおむね以下のように捉えられる。I層は現在の水田耕作土、II層は主に場整備などに伴う改良土、III層はにぶい黄褐色のシルト層で古代の遺物包含層及び中・近世の遺構確認面、IV層は黄褐色のシルト層で古代の遺物包含層及び遺構確認面、V層は無遺物の基盤層である。III・IV層は遺跡の東側を流れる阿賀野川由来の堆積土で、厚く堆積しているため土層の境界が明瞭でなく、分析にあたり各層の上位・下位で土壤を採取したものもある。詳細は後述するが、周辺の古植生を検討するため花粉分析を、古植生と用材選択を明らかにするために出土木材や炭化材の樹種同定を、水田跡を検討するため植物珪酸体分析を行った。また、特殊な祭祀遺構(SK419)をはじめとする遺構の年代に関する資料を得るために放射性炭素年代測定を行い、深掘した11トレンチ(以下、Tとする)から出土した立木の伐採年を検討する目的でウイグルマッティングを実施した。

第2節 花 粉 分 析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

A 試 料

分析試料は、深掘11T(21AJ9)X層より採取された試料1点と、17AO1のIII層(上位・下位)、IV層(上位・下位)、V層、23AJ16のIII・IV層(上位・下位)、26AJ21のIII・IV層、SD804(22AJ4)の1層の計11点である(図版9-66)。深掘11Tでは、古代の地表面下約1.6mで立木が検出され、同層から採取した試料である。他の11点とは異なり、遺跡形成以前の古植生を検討するものである。

B 方 法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.25mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
- 6) 再び水酢酸を加えて水洗処理

7) 沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

8) 檢鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亞科、属、亞属、節及び種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(–)で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本と比較して行い、鳥島(1973)、中村(1980)も参照した。イネ属については、チール石炭酸フクシン染色を施し、中村(1974-1977)を参考にして現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定した。なお、花粉分類では樹木花粉(AP)及び非樹木花粉(NAP)となるが非樹木花粉は草本花粉として示した。

C 結 果

(1) 分類群

産出した分類群は、樹木花粉 26、樹木花粉と草本花粉を含むもの 2、草本花粉 13、シダ植物胞子 2 形態の計 43 分類群である。これらの学名と和名及び粒数を第 3 表に示し、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第 11-12 図に示す。深掘 11T とそれ以外で採取した試料は、目的が異なるため、別々

第3表 花粉分析結果

のダイアグラムで示した。主要な分類群の顕微鏡写真を第13図に示した。同時に寄生虫卵についても観察したが検出されなかつた。以下に産出した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

トウヒ属、ツガ属、マツ属複維管束亞属、マツ属單維管束亞属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、モチノキ属、トチノキ、ブドウ属、シナノキ属、ツツジ科、エゴノキ属、トネリコ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属—ミクリ属、イネ科、イネ属、ナデシコ科、アブラナ科、タンボボ亜科、カヤツリグサ科、コウホネ属、キンポウゲ属、セリ亞科、キク亞科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

单条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

花粉構成と花粉組成の特徴を記載する。

1) 試料①～⑤ (17AO1 III～V層)

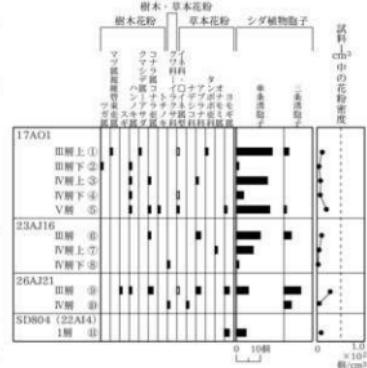
樹木花粉のハンノキ属が下部より継続して産出し、コナラ属コナラ亜属などが伴われる。上部では、ツガ属、マツ属複維管束亞属の針葉樹が産出する。シダ植物单条溝胞子がやや多く、草本花粉は、ほとんど検出されないが、イネ科、イネ属、アブラナ科、タンボボ亜科、ヨモギ属、シダ植物三条溝胞子がわずかに産出する。

2) 試料⑥～⑧ (23AJ16 III～IV層)

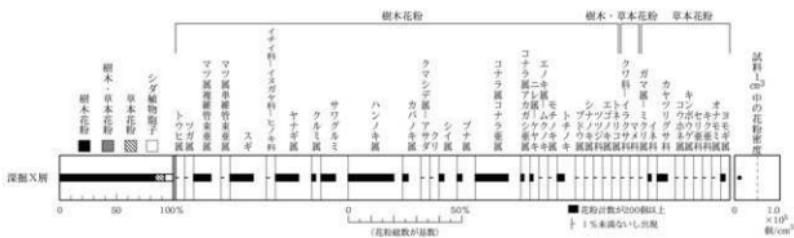
いずれの試料も花粉はほとんど検出されないが、シダ植物单条溝胞子が下部から上部に向かい増加傾向を示す。

3) 試料⑨、⑩ (26AJ21 III～IV層)

試料⑨ (III層) では、コナラ属コナラ亜属、スギ、ハンノキ属の樹木花粉とアブラナ科、ヨモギ属、イネ属の草本花粉、シダ植物三条溝胞子、シダ植物单条溝胞子がわずかに産出する。試料⑩ (IV層) では、クワ科—イラクサ科、



第11図 花粉ダイアグラム①(試料①～⑫)



第12図 花粉ダイアグラム②(試料⑯)

ナデシコ科、シダ植物三条溝胞子が極わずかに産出する。

4) 試料⑪ (SD804 1層)

ヨモギ属の草本花粉、シダ植物单条溝胞子がわずかに産出する。

5) 試料⑫ (深掘 11T)

樹木花粉の占める割合が高く、83%を占める。ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、スギ、ヤナギ属、マツ属複維管束亜属、サワグルミの産出率が高く、トチノキ、ブナ属、シイ属などが伴われる。草本花粉では、カヤツリグサ科、ヨモギ属、イネ科が低率に産出し、コウホネ属が検出される。

D 花粉分析から推定される植生と環境

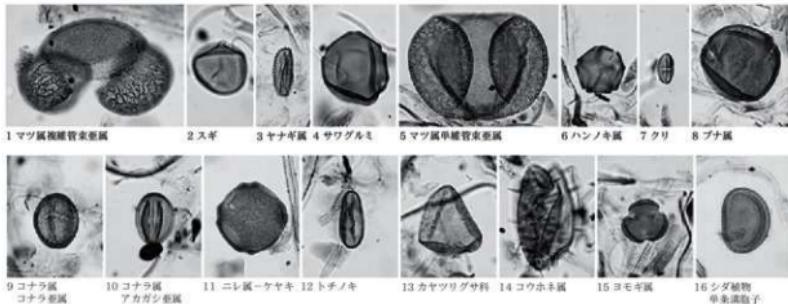
(1) 試料①～⑪ (Ⅲ～V層)

いずれの試料も花粉密度が低い。花粉が集成する水成の環境ではなかったか、花粉などの有機質遺体の分解が行われる乾燥ないし乾湿を繰り返し土壤生成作用を受けて形成された堆積物と推定される。検出された花粉はほとんどが風媒花植物であり、少量でも検出されやすい種類である。17AO1では、ハンノキ属がほぼ各層準から検出されることから、各時期を通じ近隣に生育していたと考えられる。草本では単条溝胞子が多く、シダ植物も周辺に生育していたとみなされる。SD804は分解を受ける乾湿を繰り返す環境であり、季節的ないし引水された時だけ滞水したとみられる。発掘調査の所見では畠の痕跡とみられており、花粉分析の結果はそのことを否定するものではない。

(2) 試料⑫ (深掘 11T)

ハンノキ属とヤナギ属を中心とするサワグルミ、クルミ属、トチノキが比較的多い。ハンノキ属は、生態上湿地林を形成するハンノキが考えられ、調査地にはこれらの樹木が生育する沼澤湿地の環境が示唆される。草本では、カヤツリグサ科、ガマ属ミクリ属、コウホネ属の抽水植物を含む水生植物が検出されており、樹木同様、沼澤湿地の環境が示唆される。コナラ属コナラ亜属、スギ、マツ属複維管束亜属もやや多いことから、近隣の乾燥地には二次林要素のコナラやアカマツの樹木が生育し、これらにスギも加えた林分が地域の森林植被として分布していたとみなされる。他に森林要素としては、ブナ属やカバノキ属の落葉広葉樹、シイ属やコナラ属アカガシ亜属の照葉樹が検出されることから、コナラ属コナラ亜属(ミズナラ)も含め、ブナ属(ブナ)、カバノキ属が山地部に落葉広葉樹林として分布し、シイ属やコナラ属アカガシ亜属の照葉樹が山地や台地の縁辺の低地に近い部分に生育していたとみなされる。なお、イネ科が検出されないことから、周辺地域での水田耕作は確認できない。深掘 11T X層は稻作以前の層準である可能性がある。

以上のことから、調査地周辺はハンノキ属(ハンノキ)やヤナギ属を中心にサワグルミ、クルミ属、トチノキ



第13図 主な花粉の顕微鏡写真

の湿地性樹木に、少ないもののカヤツリグサ科、ガマ属-ミクリ属、コウホネ属の水生草本が生育する沼澤湿地であったと推定された。近隣の乾燥地にはコナラ属コナラ亜属（コナラなど）やマツ属複雑管束亜属（アカマツ）の二次林要素の樹木が生育し、地域の森林としてもコナラ属コナラ亜属やマツ属複雑管束亜属が地域の森林植生として分布していたと推測される。

第3節 植物珪酸体分析

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定及び古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山 1984）。

A 試 料

分析試料は、17AO1 のⅢ層（上位・下位）、IV層（上位・下位）、V層、23AJ16 のⅢ・IV層（上位・下位）、26AJ21 のⅢ・IV層、SX711（18AJ10）の1層、SD804（22AJ4）の1層である（図版 9・13・66）。

B 方 法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピース法（藤原 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1g に対し直徑約 $40\mu\text{m}$ のガラスピースを約 0.02g 添加（0.1mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（ $550^{\circ}\text{C} \cdot 6$ 時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散
- 5) 沈底法による $20\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、主にイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピース個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率を乗じて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。なお、植物珪酸体の生産量は植物種によって差異があることから、検出密度の評価は分類群によって異なる。そこで、主な分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重）を乗じて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山 2000）。

C 結 果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 4 表及び第 14 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を第 15 図に示す。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ヨシ属、シバ属型、ススキ属型、ウシクサ族型（チガヤ属など）
〔イネ科-タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキユウチク節・ヤダケ属）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ

第4表 植物珪酸体一覧と含有量

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 (和名・学名)	17AO1					23AJ16					26AJ21					SD804			SX711	
	Ⅲ層上	Ⅲ層下	Ⅳ層上	Ⅳ層下	V層	Ⅲ層	Ⅳ層上	Ⅳ層下	Ⅴ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅲ層	Ⅳ層
(①)	(②)	(③)	(④)	(⑤)	(⑥)	(⑦)	(⑧)	(⑨)	(⑩)	(⑪)	(⑫)	(⑬)	(⑭)	(⑮)	(⑯)	(⑰)	(⑱)	(⑲)	(⑳)	(㉑)
イネ科 Gramineae (Grasses)																				
イネ <i>Oryza sativa</i>	14	3	10	3		2	11	2	19	2									3	
キビ族型 <i>Panicoid type</i>		2		2														2		
ヨシ属 <i>Phragmites</i>	7	3	4	3		2	2		9	7							2		7	7
シソ属型 <i>Zesaria type</i>																				
スキ属型 <i>Miscanthus type</i>	17	6	2	9	2	4	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	3	3		
クワクサ族型 <i>Andropogonoid type</i>		2		2	3	2	2	2												
タケ科 Bambusoideae (Bamboo)																				
メダケ節型 <i>Pleiothrix sect. Nipponocoma lamus type</i>	2	3	6	12	9	4	9	2	5	5	5	5	5	5	3					
チマキザサ節型 <i>Sasa sect. Sasa etc. type</i>	27	28	14	37	20	24	19	42	24	29	14	26								
ミヤコザサ節型 <i>Sasa sect. Crassinodi type</i>	5	6	2	6	7	4	4	7	5	7	11	11								
その他 Others	7	3	4	9	7	4	4	7	7	7	5	6	5	5	5					
未分類等 Unknown	34	28	19	27	16	18	19	16	21	16	26	26	29							
(海綿骨針) Sponge	2	3	2	9	7	2	2	2	5	2	6	5								
植物珪酸体総数	117	80	65	109	63	64	72	78	96	73	63	77								

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m² · cm)

イネ <i>Oryza sativa</i>	0.41	0.09	0.29	0.09	0.06	0.32	0.06	0.56	0.06	0.06	0.06	0.09							
ヨシ属 <i>Phragmites</i>	0.44	0.19	0.25	0.19		0.13	0.13		0.57	0.44									
スキ属型 <i>Miscanthus type</i>	0.21	0.07	0.02	0.11	0.02	0.05	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.04	0.04						
メダケ節型 <i>Pleiothrix sect. Nipponocalamus</i>	0.02	0.03	0.07	0.14	0.10	0.05	0.10	0.02	0.06	0.06	0.06	0.03							
チマキザサ節型 <i>Sasa sect. Crassinodi</i>	0.20	0.21	0.11	0.28	0.15	0.18	0.14	0.32	0.18	0.22	0.11	0.20							
ミヤコザサ節型 <i>Sasa sect. Crassinodi type</i>	0.02	0.02	0.01	0.02	0.02	0.01	0.01	0.02	0.02	0.02	0.03	0.03							

節など)、ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ

サ節など)、その他

〔イネ科ーその他〕

未分類等

メダケ節型、チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節など)、ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

〔イネ科ーその他〕

未分類等

〔その他〕

海綿骨針

以下に、植物珪酸体の検出状況を記す。

1) 試料①～⑤ (17AO1 III～V層)

III層 (試料①・②) では、イネ、ヨシ属、

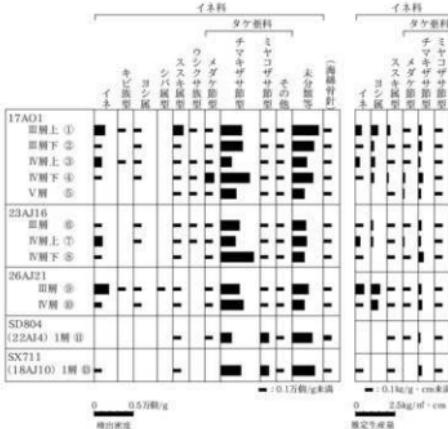
スキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型。

ミヤコザサ節型が、上位 (試料③) ではほ

かにキビ族型、ウシクサ族型が検出されているが、いずれも少量である。IV層 (試料④・⑤) では、イネ、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が、上位 (試料③) ではほかにキビ族型が検出されているが、いずれも少量である。V層 (試料⑤) では、スキ属型、ウシクサ族型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されているが、いずれも少量である。各層で植物珪酸体以外に海綿骨針が検出されているが、いずれも微量である。

2) 試料⑥～⑧ (23AJ16 III～V層)

III層 (試料⑥) では、イネ、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されているが、いずれも少量である。IV層 (試料⑦・⑧) では、イネ、スキ属型、メダケ節型、チ



第14図 植物珪酸体分析結果

マキザサ節型、ミヤコザサ節型が、上位（試料⑦）ではほかにヨシ属とウシクサ族型が検出されているが、いずれも少量である。各層で植物珪酸体以外に海綿骨針が検出されているが、いずれも微量である。

3) 試料⑨・⑩ (26AJ21 III・IV層)

III層（試料⑨）では、イネ、キビ族型、ヨシ属、シバ属型、ススキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されているが、いずれも少量である。IV層（試料⑩）では、イネ、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されているが、いずれも少量である。各層で植物珪酸体以外に海綿骨針が検出されているが、いずれも微量である。

4) 試料⑪ (SD804 1層)

ススキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されているが、いずれも少量である。植物珪酸体以外では海綿骨針が微量で検出されている。

5) 試料⑫ (SX711 1層)

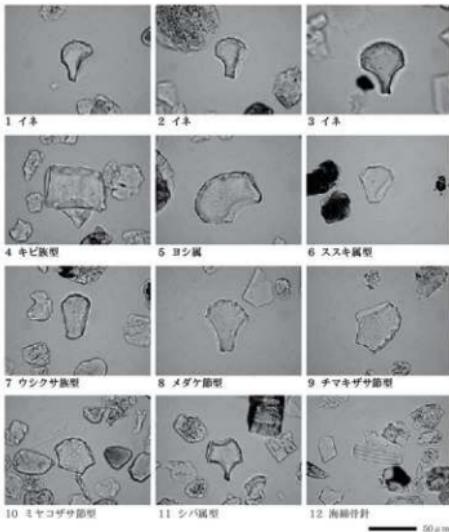
イネ、ススキ属型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されているが、いずれも少量である。植物珪酸体以外では海綿骨針が微量で検出されている。

D 植物珪酸体分析から推定される農耕と環境

植物珪酸体分析で稲作跡の探査や検証を行う場合、通常、イネの植物珪酸体が試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山2000）。なお近年の調査では、密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満であっても水田遺構が検出された事例が報告されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行う。

今回の調査地では、17AO1のIII・IV層、23AJ16のIII・IV層、26AJ21のIII・IV層、SX711の1層でイネが検出されている。密度はそれぞれ1,000個/gとやや低く、稲作跡の可能性の判断基準値には達していない。したがって、ここで検出されたイネは他所から混入したものと判断され、III層、IV層及びSX711の1層の時期は、調査地の近傍で稲作が行われていた可能性が考えられる。仮に調査地で稲作が行われていたとするならば、イネの密度が低い要因として、1) 稲作が行われていた期間が短かった、2) 稲の生産性が低かった、3) 畑稲作が行われていた^{※1}、4) 土層の堆積速度が速かった、5) 耕作土が流出した、6) 採取地点が畦畔など耕作面以外であった、などが考えられる。

SD804の1層は、発掘調査の所見では畠の痕跡とみられている。植物珪酸体分析で同定される分類群のうち



第15図 主な植物珪酸体の顕微鏡写真

^{※1} 畑稲作（陸稲栽培）では、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり、休閑期間をおく必要があるため、イネの密度は水田と比較してかなり低くなり、1,000個/g程度である場合が多い。

栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクヒエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれも検出されなかつた。このことから、植物珪酸体分析においては痕跡の可能性を積極的に肯定することはできない。ただし、イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

イネ以外の分類群では、各層ともチマキザサ節型が優勢であり、スキ属、ウシクサ族、メダケ節型、ミヤコザサ節型が検出され、ヨシ属は少量である。こうしたことから、III・IV層、SD804の1層、SX711の1層の堆積当時は、調査地周辺はササ属（チマキザサ節やミヤコザサ節など）、スキ属、ウシクサ族（チガヤ属等）などが生育する比較的乾いた開けた環境であったと推定される。

ササ属のうち、チマキザサ節・チシマザサ節は日本海側に広く分布しており、積雪への適応性が高い。一方、ミヤコザサ節は積雪の少ない比較的乾燥したところに分布している。両者の分布境界はミヤコザサ線とよばれ、最大積雪約50cmの等深線とほぼ一致している（室井1960、鈴木1996）。このことに着目して、両者の推定生産量の比率から過去の積雪量の推定が試みられている（杉山2000・2017など）。調査地ではチマキザサ節型（ササ属チマキザサ節、ササ属チシマザサ節など）がやや優勢であることから、当時は最大積雪深が約50cmを超えていた可能性が考えられる。

第4節 動物遺存体同定

一般に日本の国土は、火山灰性的酸性土壤に広く覆われ、高温多湿というモンスーン気候ともあいまって動物遺存体の保存状態には恵まれていない。そのため、ほとんどの乾燥地遺跡では動物や植物性の遺物は分解されて残らず、遺跡で動物遺存体が出土するのは、おもに貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰などであった。しかし、近年では湿地環境の遺跡や遺構から多くの動物遺存体が報告されつつある。出土した動物遺存体の同定から、過去の人々の生業や食生活に関する情報を得ることができる。特に大部分が無機塩類（おもに炭酸カルシウム）からなる貝殻をもつ貝類は腹食に強く、土中でも残りやすいことから、その生態的情報を援用して当時の土中水環境の復原や、種によっては水深を知ることができる。

A 試料と方法

分析試料は、17AP10のIV層で出土した骨と、SX425（17AQ12）の1層で出土した骨である。試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴及び現生標本との対比によって同定を行った。

B 結 果

同定結果を第5表に示す。

1) 試料④ (17AP10 IV層)

哺乳類の椎骨腰椎破片2点、不明破片2点が同定された。いずれも細片であるため、

科などの同定に至らなかつた。なお、腰椎破片はいずれの試料も被熱によって白色を呈する。

2) 試料⑤ (SX425 1層)

哺乳類の不明破片4点が同定された。いずれも細片であるため、科などの同定に至らなかつた。なお、いずれの試料も被熱によって白色を呈する。

第5表 動物遺存体同定結果

試料 No.	遺構名	グリッド 層位	結果 (学名/和名)	部位	部分	左右	個数	備考
17AP10	IV	Mammalia Mammalia	椎孔類 椎孔類	椎骨	腰椎	2	被熱白色変化	
SX425	17AQ12	I	Mammalia Mammalia	椎孔類 椎孔類	不明	被熱白色変化	4	被熱白色変化、右2

C 考 察

同定された動物遺存体はいずれも哺乳類の骨破片であった。試料店の椎骨腰椎破片は大きさと形状からニホンジカの可能性があるが、細片であることから断定はできない。いずれの試料も全て白色になるまでよく焼けており、強い火を受けた可能性が考えられる。これらの哺乳類は、食用とした後に炉や竈などの火中に投じたものが残存したか、二次的に投棄された可能性がある。なお、ニホンジカなどの野生動物は比較的近隣の森林より獲得されたと考えられる。



第16図 動物遺存体顕微鏡写真

第5節 花粉分析・寄生虫卵分析

花粉分析と寄生虫卵分析をあわせて行うことにより、当時の人々の生活域の確認、農耕における人施肥肥の有無、さらには便所遺構を確認することが可能である。ただし、花粉や寄生虫卵などの有機物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

A 試 料 と 方 法

分析試料は、SK624 (22AH9) 1層で出土した土器器長甌の体部破片1点である。内面に白色の付着物が観察される(第17図)。花粉・寄生虫卵の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 上器片の内容物で、色調の異なる部分を2か所搔き取る
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 論別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す
- 4) 25% フッ化水素酸を加え30分静置(2・3度混和)
- 5) 水洗後サンプルを2分
- 6) 2分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製
- 8) 観鏡は、プレバラート作製後直ちに、生物顕微鏡(Nikon ECLIPSE Ci)によって300~1000倍で行う
基本的にアセトリシス処理を施したプレバラートで花粉分析、アセトリシス処理を施していないプレバラートで寄生虫卵分析を行う。

B 結 果

付着内容物の色調が異なるため、褐色部分を@-1、白っぽい部分を@-2として分析を実施した(第17図)。分析の結果、褐色部分の@-1、白っぽい部分の@-2のいずれの試料も密度が極めて低く、花粉、寄生虫卵および明らかな消化残渣、シダ植物胞子、石細胞、微粒炭などは検出されなかった。



第17図 土器内面の付着物(試料番号)

C 考 察

SK624 の 1 層より出土した土器器片に付着した内容物において、花粉分析と寄生虫卵分析を行ったところ、花粉、寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。分析の反応中もほとんど変化せず、有機物は含まれていなかつたとみなされる。付着物は添加した試薬で溶解する無機質の結晶と思われる。

第 6 節 樹 種 同 定

A 試 料

試料は、遺構内から出土した炭化材 13 点（試料①～⑩）、柱根 4 点（試料⑪～⑯）、木製品や自然木など生材 8 点（試料⑰～⑲）の合計 25 点（⑯は 2 点あるため厳密には 26 点）である。柱材や自然木は、採取された木片を試料とした。

B 方 法

柱材や木製品のうち、試料⑪～⑯の 5 点は、木取りを観察した上で、剃刀を用いて横断面（木口）・放射断面（極目）・接線断面（板目）の 3 断面について徒手切片を採取した。その他の試料については、剃刀を用いて採取された木片から 3 断面の徒手切片を採取した。切片をガム・クロラール（泡水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとした。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察した。炭化材は、自然乾燥させた後、3 断面の削断面を作製してアルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定した。炭化材の周囲を樹脂でコーティングして補強し、走査型電子顕微鏡（低真空）で木材組織の種類や配列を観察した。各試料で観察された組織の特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定した。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 [1982]、Wheeler [1998]、Richter [2006] を参考にした。また、日本産木材の組織配列は、林 [1991] や伊東 [1995・1996・1997・1998・1999] を参考にした。

C 結 果

樹種同定結果を第 6 表に示す。木製品及び木材と炭化材は、針葉樹 1 分類群（スギ）、広葉樹 9 分類群（カツラ、サクラ属、カエデ属、モクレン属近似種、ヤナギ属、サワグルミ、マタタビ属、トネリコ属シオジ節、トネリコ属近似種）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晚材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2 ～ 4 個。放射組織は単列、1 ～ 10 細胞高。

・カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科カツラ属

散孔材。道管はほぼ単独で散在し、年輪界付近で道管径を減少させる。道管の分布密度は高い。道管の穿孔板は階段穿孔板となる。放射組織は異性、1 ～ 2 細胞幅、1 ～ 30 細胞高。

・サクラ属 *Prunus* パラ科

散孔材。道管は単独または 2 ～ 6 個が放射方向や斜方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は单穿孔板、壁孔は交互状となる。道管の内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1 ～ 4 細胞幅、1 ～ 30 細胞高。

広義のサクラ属のうち、栽培種を除く落葉性のサクラ属と考えられる。

・カエデ属 *Acer* ムクロジ科

散孔材。道管は単独または2~3個が複合して散在し、年輪界に向かって道管径を漸減させる。道管の穿孔板は單穿孔板、壁孔は対列~交互状となる。道管の内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~5細胞幅、1~30細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・モクレン属近似種 cf. *Magnolia* モクレン科

散孔材。道管は単独または2~4個が放射方向に複合して散在する。道管の穿孔板は單穿孔板、壁孔は階段状~対列状となる。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~40細胞高。

観察された特徴からモクレン属の可能性が高い⁴、土壤由来と考えられる微細な鉱物粒子が道管内や木繊維内に大量に付着し、それが組織観察の障害となっている。そのため、同定を確定することができず、近似種とした。

・ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

散孔材。道管は単独または2~3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管の穿孔板は單穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は異性、単列、1~15細胞高。

・サワグルミ *Pterocarya rhoifolia* Siebold et Zucc. クルミ科サワグルミ属

散孔材。道管は単独または2~3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。年輪界を挟んだ道管径の変化は比較的大きい。道管の穿孔板は單穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性~異性、1~2細胞幅、1~20細胞高。

・マタタビ属 *Actinidia* マタタビ科

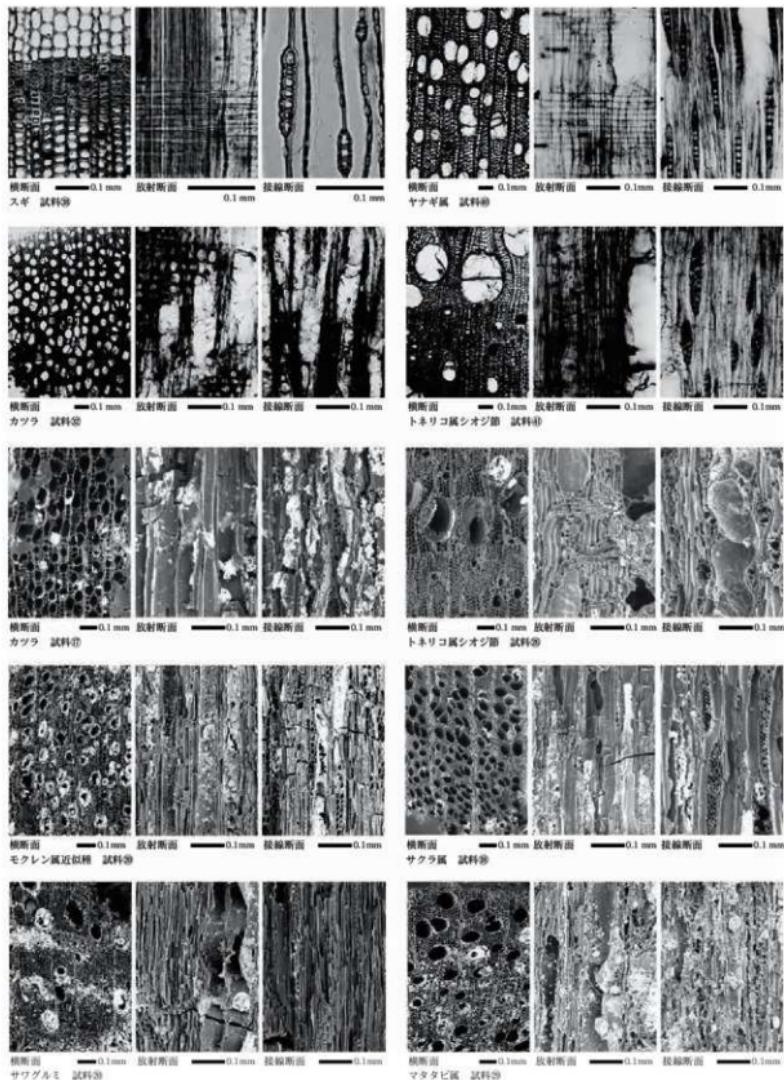
環孔材。道管はほぼ単独で配列する。孔圈部は1~4列、孔圈外への移行は緩やかで、道管は晚材部に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板單穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は異性、1~4細胞幅、1~40細胞高。

・トネリコ属シオジ節 *Fraxinus sect. Fraxinaster* モクセイ科

環孔材。孔圈部は1~2列、孔圈外で急激に道管径を減じたのち、厚壁の道管が単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は單穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1~2細胞幅、1~20細胞高。

第6表 樹種同定結果

試料No.	通称	グリッド	樹位	時代	漏材等	状態	本取り	樹種	備考(番号は開載No.)
⑦	SK352	17AP23	2	古代	炭化材	破片	カツラ		
⑧	SK363	20AE15	5	古代	炭化材	破片	サクラ属		
⑨	SK419	18AM1	1	古代	炭化材	芯材	トネリコ属近似種		
⑩	SK569	18AM10	1	古代	炭化材	破片	サワグルミ		
⑪	SK569	18AM10	1	古代	炭化材	破片	サクラ属	炭化物集中	
⑫	SD826	17AO14	1	古代	炭化材	破片	トネリコ属シオジ節		
⑬	SN537	22AH16	1	古代	炭化材	破片	サクラ属		
⑭	SN658	21AI16	3	古代	炭化材	破片	カエデ属		
⑮	SN663	22AH9	1	古代	炭化材	破片	カエデ属		
⑯	P414	15AO11	1	古代	炭化材	破片	トネリコ属シオジ節		
⑰	P903	17AL20	1	古代	炭化材	破片	カエデ属		
⑱	P551	24AH12	1	古代	炭化材	破片	カエデ属		
⑲	P577	17AL14~19	1	古代	炭化材	小破片	マタタビ属		
⑳	P162	19AP8	1	古代	柱根	生材	—	スギ	
㉑	P178	18AP21	1	古代	柱根	生材	—	スギ	
㉒	SH108-棟土211	18AO3	1	古代	柱材	生木	破片(崩近く)	カツラ	739
㉓	SB251-P273	18AP7	2	古代	柱根	生木	分割材	スギ	738
㉔	SE278	17AQ23	4	古代	神状乳品	生木	削出棒材	スギ	734
㉕	SE278	17AQ23	4	古代	神状乳品	生木	削出棒材	スギ	735
㉖	SE278	17AQ23	5	古代	神状乳品	生木	削出棒材	スギ	732
㉗	SE278	17AQ23	4	古代	小鹿木未成	生木	板目	スギ	733
㉘	SE278	17AQ23	—	古代	丹戸闇	生木	板目	スギ	749
㉙	SE278	17AQ23	—	古代	板目材	生木	板目	スギ	742
㉚	—	19AJ11	IX	—	生材	—	ヤナギ属	深埋OT	
㉛	—	17AO11	IX	—	生材	—	トネリコ属シオジ節	深埋TT	



第18図 主な木材・炭化材の顕微鏡写真

・トネリコ属近似種 cf. *Fraxinus* モクセイ科

試料は小片で保存状態が悪い。道管径の変化から環孔材と考えられる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～2細胞幅、1～30細胞高。

観察された特徴からトネリコ属の可能性があるが、観察範囲が狭く、道管配列の詳細も確認できなかつたことから近似種とした。

D 考察

木材・炭化材には10分類群が認められた。各分類群の特徴をみると、針葉樹のスギは適湿地に生育する常緑高木であり、木材は割裂性や耐水性が比較的高い。広葉樹のカツラは渓畔等に生育する落葉高木である。カツラの木材は木理が直通であり、割裂性が高く、加工は容易であるが、強度と保存性は低い。サクラ属は、二次林等に生育する落葉低木～高木であり、木材は重硬・緻密で強度が高い。カエデ属は、二次林や渓畔等に生育する落葉小高木～高木であり、木材は比較的重硬で強度が高い。広葉樹のモクレン属（近似種）、ヤナギ属、サワグルミ、シオジ節は、河畔や渓畔等に生育する落葉低木～高木である。シオジ節を含むトネリコ属の木材は重硬で強度が高いが、その他の3種類は軽軟で強度や耐朽性が低い。マタタビ属は、林縁部等に生育する落葉性のつる植物。木材は比較的柔軟性が高い。

器種別にみると、柱材4点のうち3点は耐水性の高い針葉樹のスギ、1点は広葉樹のカツラに同定されている。伊東・山田（2012）のデータベースによれば、古代の柱材はクリを中心とした広葉樹材の利用が多い。一方、スギについては、新保遺跡（五泉市）や上浦遺跡・沖ノ羽遺跡（いずれも旧新津市）で確認されている。本遺跡に近い地域にスギを用いた柱材の事例が多い結果は注目される。また、春日（2008）によれば、新潟県（主に中越地域）における古墳時代～中世の柱材では、時代が下るほどスギやクリの利用例が増加する傾向にあること、倉庫と考えられる掘立柱建物跡でクリの利用が多いこと、スギが集落内で特別な建物の柱材に利用された可能性があることなどが指摘されている。こうした指摘や材質の違いなどを考慮すれば、本遺跡においても用材の違いが建物の用途や機能を反映している可能性がある。

その他の木製品についてみると、板目材と井戸便はいずれも比較的大型な板目板材である。棒状製品2点は、削出棒状を呈しており、よく似ていることから、同一器種の可能性がある。箸状製品は、細い削出棒状の製品である。小皿未成品は、円形の板目板状を呈する。これらの木製品は、いずれもスギに同定され、加工性の高い木材の利用が推定される。伊東・山田（2012）のデータベースによれば、中越地域における古代の木製品ではスギの利用が多い傾向にある。今回の結果についても、スギを様々な用途に多用する一例といえる。

炭化材は、土坑（SK）、溝（SD）、ピット（P）など遺構から出土している。炭化していることから、人間による火の使用による炭化が推定されるが、用途・機能の詳細は不明である。これらの樹種は、全部で7種類の広葉樹（カツラ、サクラ属、カエデ属、モクレン属近似種、サワグルミ、マタタビ属、シオジ節）であり、遺構によって異なる。このうち、SK569ではサワグルミとモクレン属近似種が認められ、2種類が混在していることが推定される。一方、SK419では年代測定に用いた破片も含めて4～5片の炭化材片があるが、全て同一の分類群であった。樹芯に隋の残る破片もあり、小径木に由来する可能性がある。炭化材に確認された種類は、河畔林・渓畔林を構成する種類や、河畔の林縁部でマント群落を作るつる植物であり、遺跡周辺の河畔や沖積地を中心にこれらの広葉樹やつる植物が生育していたことが推定される。

深掘トレンチから出土した木材はシオジ節とヤナギ属に同定された。いずれも河畔林・渓畔林の構成種であり、IX層の時期の遺跡周辺に生育していたことが推定される。

第7節 放射性炭素年代測定・ウイグルマッチング

A 試 料

試料は、SE278 (17AQ23) から出土した井戸側 2 点（試料㊂・㊃）、SK472 (16AP22) の 1 層から出土した土師器片に付着した炭化物（試料㊄）、SK569 (18AM10) の 1 層から出土した炭化物（試料㊅）、SD826 (17AO14) の 1 層から出土した炭化物（試料㊆）、SB251-P273 (18AP7) の 1 層から出土した柱根（試料㊇）、SK419 (18AM1) の 2 層から出土した須恵器環状瓶 (195) 直下の炭化材（試料㊈）と、深掘 10T (19AJ11) の IX 層から出土した木材 1 点（試料㊉）の計 8 点である。なお、試料㊉についてウイグルマッチングを実施する。

試料㊈には、炭化材が 4 ~ 5 片認められる。樹種同定作業で全て同一種であることが確認されたことから、同一個体由来する可能性がある。年代測定試料は、最大片を抽出した。

試料㊈は、横（接線方向）が約 16cm、縦（放射方向）が約 5.5cm の木片であり、最外部には樹皮が残る。実体顕微鏡で年輪を計数した結果、10 年分の年輪が確認された。内側から 1 年目（内）、5 年目（中）、10 年目（外）の 3 点を採取して試料とした（第 19 図）。

B 方 法

1) 化 学 溶 理

試料の付着物を取り除いた後、酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 溶理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 溶理における酸処理では、通常 1 mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表に記載した（第 7 表）。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドブレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

第 7 表 測定試料及び処理

試料番号	グリッド	出土遺構・層位	試料	前処理・調整	測定法
㊂ 17AQ23	SE278	木片	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS	
㊃ 17AQ23	SE278	木片	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS	
㊄ 16AP22	SK472 1層	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS	
㊅ 18AM10	SK569 1層	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS	
㊆ 17AO14	SD826 1層	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS	
㊇ 18AP7	SB251-P273 1層	木片	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS	
㊈ 18AM1	SK419 2層	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS	
㊉ 19AJ11	深掘10T IX層	木片	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS	
㊊ 19AJ11	深掘10T IX層	木片	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS	
㊋ 19AJ11	深掘10T IX層	木片	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS	

* AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法



試料横断面の全貌と採取位置 試料㊈ (深掘10T)

左：採取前の年輪計数状況（白のピンは 1 年単位の年輪界を示す）

右：試料採取後（年輪数は、内側を 1 として計数）

第 19 図 ウイグルマッチング試料採取位置

2) 測 定

加速器をベースとした¹⁴C-AMS 専用装置を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

3) 算 出

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である。
- (2) ¹⁴C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として過る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する [Stuiver and Polach 1977]。¹⁴C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を結果表に示す。¹⁴C 年代と誤差は、下 1 術を丸めて 10 年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の¹⁴C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の大気濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma=68.3\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 術を丸めない¹⁴C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal20 データベース [Reimer et al. 2020] を用い、OxCalv4.4 較正プログラム [Bronk Ramsey 2009] を使用する。历年較正年代は、¹⁴C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」・「cal BP」という単位で表される。
- (4) 历年較正を高精度に行うための方法として、ウィグルマッチングが行われる。历年較正曲線には過去の大気や海洋における¹⁴C 濃度の変動を反映した起伏が表れる。この起伏はウィグル (wiggle) と呼ばれ、¹⁴C 年代に対応する历年年代の絞り込みを困難にする原因の一つとなっている。このウィグルを利用して历年年代を求めるのがウィグルマッチングである。まず年輪を持つ測定対象から年輪によって相互の年代差を確認できるように複数の試料を採取し、各々の¹⁴C 年代を求める。次に試料間の年代差と¹⁴C 年代値の変動パターンを較正曲線に重ね合わせ、最外年輪の历年年代を算出する。こうすることで、単独の試料の¹⁴C 年代に対して算出される历年年代よりも範囲を絞り込むことが可能となる場合がある。ウィグルマッチングの計算に用いる¹⁴C 年代値は、历年較正の場合と同様 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 術を丸めない¹⁴C 年代値で、算出される最外年輪の历年年代は 1 標準偏差 ($1\sigma=68.3\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) の範囲で表示される。ウィグルマッチングのグラフとして第 21・22 図を示しており、第 21 図の縦軸は確率密度、第 22 図の縦軸は¹⁴C 年代と確率密度。横軸は第 21・22 図とも最外年輪の历年年代を表す。なお、ウィグルマッチングの結果は、1 測定試料に含まれる年輪数、試料の間隔の取り方など、試料の状況によって異なる可能性がある。また測定結果の重ね合わせに用いる較正曲線や較正プログラムの種類によっても結果が異なってくる可能性がある。このため、年代値の利用にあたっては試料採取の状況、使用した較正曲線とプログラムの種類とバージョンを確認する必要がある。ウィグルマッチングの計算には IntCal20 較正曲線 [Reimer et al. 2020]、OxCalv4.4 較正プログラム [Bronk Ramsey et al. 2001・Bronk Ramsey 2009] を使用し、結果を第 8 表に示した。ウィグルマッチングによる最外年輪の历年年代は較正された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される（第 9 表）。

C 結 果

加速器質量分析法(AMS: Accelerator Mass Spectrometry)によって得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(¹⁴C)年代および曆年年代(較正年代)を算出した。

10 試料の¹⁴C年代測定結果と曆年較正結果(較正曲線)を第8表と第20図に、また、木材のウイグルマッチングの結果を第9表と第21・22図に示す。第21図は較正プログラムによるウイグルマッチングの結果、第22図はそのデータに基づき、木材最外年輪の曆年年代範囲の中で特に確率密度の高い年代頃に最外年輪を合わせた場合のマッチング図である。

D 考 察

土層の堆積年代を検討する目的で、加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定ならびにウイグルマッチングを行った。その結果、SE278の井戸側(試料②)は、補正¹⁴C年代が 1260 ± 20 年BP、 2σ の曆年較正値は673 cal AD ~ 778 cal AD (80.9%)、787 cal AD ~ 827 cal AD (14.5%)で、別の井戸側(試料③)では、補正¹⁴C年代が 1340 ± 20 年BP、 2σ の曆年較正値は649 cal AD ~ 689 cal AD (70.8%)、742 cal AD ~ 774 cal AD (24.7%)であった。SK472の土師器片に付着した炭化物(試料④)は、補正¹⁴C年代が 1710 ± 20 年BP、 2σ の曆年較正値は255 cal AD ~ 285 cal AD (21.9%)、326 cal AD ~ 412 cal AD (73.6%)であった。SK569の炭化物(試料⑤)は、補正¹⁴C年代が 1310 ± 20 年BP、 2σ の曆年較正値は660 cal AD ~ 708 cal AD (46.4%)、726 cal AD ~ 775 cal AD (49.0%)で、SD826の炭化物(試料⑥)は、補正¹⁴C年代が 1280 ± 20 年BP、 2σ の曆年較正値は668 cal AD ~ 775 cal AD (95.4%)であった。P273の柱根(試料⑦)は、補正¹⁴C年代が 1260 ± 20 年BP、 2σ の曆年較正値は672 cal AD ~ 777 cal AD (87.3%)、791 cal AD ~

第8表 測定結果

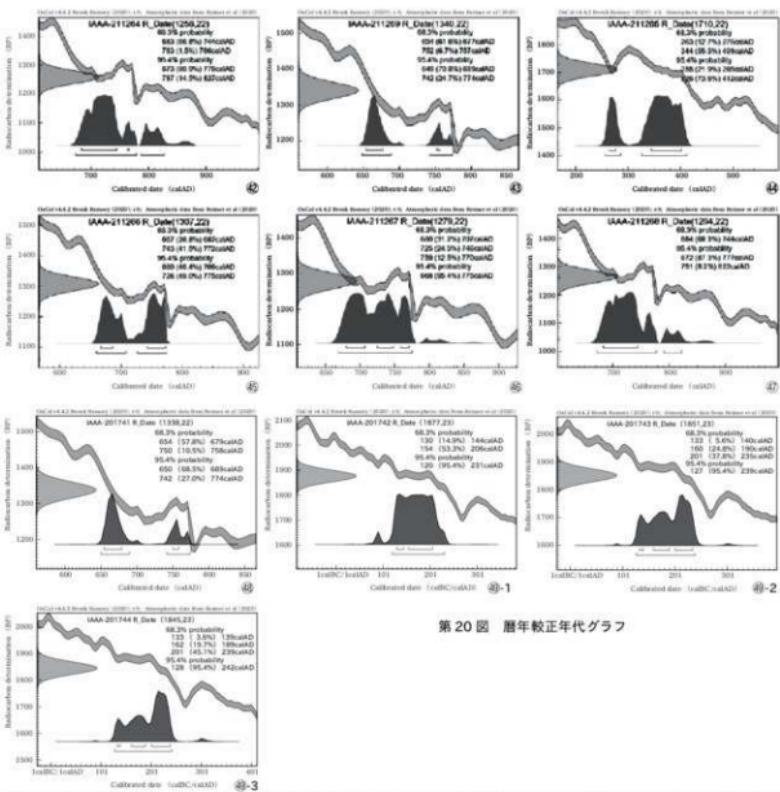
試料番号	測定No. (IAAA-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正年代 (年BP)	¹⁴ C年代 (年BP)	曆年代(内割)	
					1 σ (68.3%確率)	2 σ (95.4%確率)
②	211264	-23.82 ± 0.23	1258 ± 22	1260 ± 20	683 calAD - 744 calAD (66.8%) 763 calAD - 766 calAD (1.5%)	673 calAD - 778 calAD (80.9%) 787 calAD - 827 calAD (14.5%)
③	211269	-25.36 ± 0.28	1340 ± 22	1340 ± 20	654 calAD - 677 calAD (61.6%) 752 calAD - 757 calAD (6.7%)	649 calAD - 689 calAD (70.8%) 742 calAD - 774 calAD (24.7%)
④	211265	-25.40 ± 0.22	1710 ± 22	1710 ± 20	263 calAD - 276 calAD (12.7%) 344 calAD - 401 calAD (55.0%)	255 calAD - 285 calAD (21.9%) 326 calAD - 412 calAD (73.6%)
⑤	211266	-24.53 ± 0.22	1307 ± 22	1310 ± 20	667 calAD - 687 calAD (26.8%) 743 calAD - 772 calAD (41.5%)	660 calAD - 708 calAD (46.4%) 726 calAD - 775 calAD (49.0%)
⑥	211267	-25.50 ± 0.23	1279 ± 22	1280 ± 20	680 calAD - 707 calAD (31.2%) 725 calAD - 748 calAD (24.5%) 759 calAD - 770 calAD (12.5%)	668 calAD - 775 calAD (99.4%)
⑦	211268	-27.58 ± 0.20	1264 ± 22	1260 ± 20	684 calAD - 744 calAD (68.3%)	672 calAD - 777 calAD (87.3%) 791 calAD - 822 calAD (8.2%)
⑧	201741	-24.87 ± 0.21	1388 ± 22	1340 ± 20	654 calAD - 679 calAD (57.8%) 750 calAD - 758 calAD (10.5%)	650 calAD - 689 calAD (68.5%) 742 calAD - 774 calAD (27.0%)
⑨-1	201742	-28.25 ± 0.20	1877 ± 23	1880 ± 20	130 calAD - 144 calAD (14.9%) 154 calAD - 206 calAD (53.3%)	120 calAD - 231 calAD (95.4%)
⑨-2	201743	-28.22 ± 0.20	1851 ± 23	1850 ± 20	133 calAD - 140 calAD (5.6%) 160 calAD - 190 calAD (24.8%) 201 calAD - 235 calAD (37.8%)	127 calAD - 239 calAD (95.4%)
⑨-3	201744	-28.61 ± 0.20	1845 ± 23	1850 ± 20	133 calAD - 139 calAD (3.6%) 162 calAD - 189 calAD (19.7%) 201 calAD - 239 calAD (45.1%)	128 calAD - 242 calAD (95.4%)

BP : Before Physics (Present), AD : 紀元

第9表 ウィグルマッチング結果

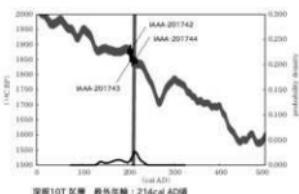
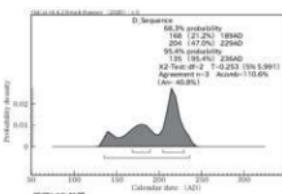
試料番号	測定No. (IAAA-)	採取位置 (最外年輪から)	曆年較正年代 (年BP)	曆年代(内割)	
				1 σ (68.3%確率)	2 σ (95.4%確率)
⑨-1	201742	10年輪	1877 ± 23	159 calAD - 180 calAD (21.2%) 195 calAD - 220 calAD (47.0%)	126 calAD - 227 calAD (95.4%)
⑨-2	201743	6年輪	1851 ± 23	163 calAD - 184 calAD (21.2%) 160 calAD - 190 calAD (24.8%)	130 calAD - 231 calAD (95.4%)
⑨-3	201744	1年輪	1845 ± 23	168 calAD - 189 calAD (21.2%) 204 calAD - 229 calAD (47.0%)	135 calAD - 236 calAD (95.4%)
		最外年輪年代		168 calAD - 189 calAD (21.2%) 204 calAD - 229 calAD (47.0%)	135 calAD - 236 calAD (95.4%)

822 cal AD (8.2%) であった。また、SK419 の須恵器壙状瓶 (195) 直下の炭化材 (試料⑧) は、補正 ^{14}C 年代が 1340 ± 20 年 BP, 2σ の曆年較正値は 650 cal AD ~ 689 cal AD (68.5%), 742 cal AD ~ 774 cal AD (27.0%) であった。さらに深掘 10T の IX 層出土木材 (試料⑨) の最外年輪の曆年年代は、ウイグルマッチングによって 214 cal AD 頃と推定された。



第22図 曆年較正年代グラフ

第21図 ウイグルマッチングによる木材最外年輪の曆年較正年代グラフ

第22図 木材のウイグルマッチング
(第21図のグラフに表れたピークを最外年輪とみなした場合)

第VII章 総括

第1節 遺構について

A 穴建物について

曾我墓所遺跡では9軒の竪穴建物が検出され、出土遺物から8世紀中葉から末期と考えられる。ここでは、県内で検出された同時期の竪穴建物と比較しながら本遺跡の竪穴建物について検討する。

1) 新潟県内の堅穴建物

新潟県内において、古代（8世紀以降）の竪穴建物が検出されたのは53遺跡、総軒数は327軒である（第23図）。しかし、遺存状況や火床の有無などで建物と認定しない場合もあり、実数は前後する可能性がある。

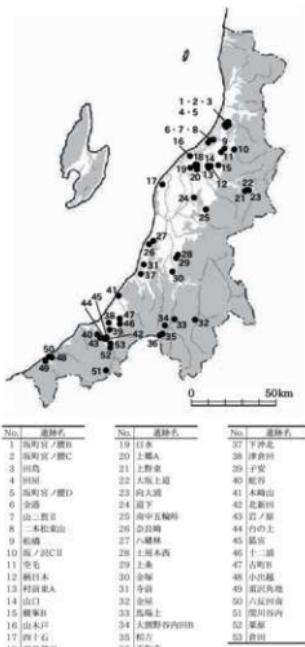
新潟県の古代の竪穴建物を検討した論考として【春日 1996・2016・2017、山崎 2017・2019】などがある。その形態的特徴や差異については【山崎 2017】に詳しく、竪穴建物の構造（規模・柱穴配置・カマド位置・排水溝・周溝）に着目し、7世紀～11世紀の建物の特徴を明らかにしている。さらに、県内の竪穴建物数が8世紀に最多となり、10世紀以降は激減することを示している【山崎 2019】。しかし、地域ごとに若干の差異があるため、7世紀が最多で8世紀以降に減少が始まる高田平野など当てはまらない地域もある。

2) 曾我墓所遺跡の竪穴建物

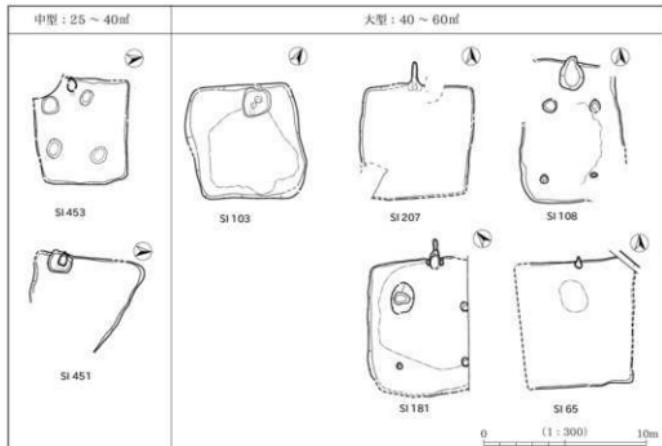
検出された9軒の竪穴建物のうち時期の分かれる遺物が出土しているものは7軒である。これらは、おむね8世紀中葉から末期と考えられ、規模・柱穴配置・カマド構造に特徴がみられる（第24図、第10表）。竪穴建物の規模と柱穴配置は（山崎2019）で示された分類を用いて以下のように表記した。規模は「小型（～25m²）」、「中型（25～40m²）」、「大型（40～60m²）」、「特大（60m²～）」で、柱穴配置は「多主柱」、「4本主柱」、「少主柱」、「無柱」、「側柱」である。

まず規模であるが、8世紀前葉から小型の竪穴建物が増加し、中葉に大型・特大はほぼ確認できなくなるため、8世紀前葉～中葉に竪穴建物が小型化するというひとつの画期を想定する

[山崎 2017]。本遺跡の竪穴建物は中型 2 軒 (SI451・453)、大型 5 軒 (SI65・103・108・181・207) と中・大型で占められ、8世紀中葉～末期に県内で一般的に検出される竪穴建物の傾向とは異なる。柱穴配置については、県内の 8世紀後葉～9世紀初頭の竪穴建物は 4 本主柱・少主柱・無柱・側柱が確認でき、小型で無柱の竪穴建物が主体となる。また、柱穴配置が不明瞭な竪穴建物も 8世紀後半以降に増加する [山崎 2017・2019]。本遺跡の竪穴建物は、中型で 4 本主柱が 1 軒 (SI453)、無柱 1 軒 (SI451)、大型で 4 本主柱が 2 軒 (SI108・181)、無



第23図 県内の古代(8世紀以降)における
堅穴建物検出遺跡



第24図 積穴建物分類図（第10表と対応）

柱1軒（SI103）、不明2軒（SI165・207）で、中・大型の4本主柱及び無柱積穴建物が主体である。県内で同様の積穴建物は、上越市北新田遺跡〔金内ほか2008〕や同市津倉田遺跡〔菅沢1999〕など上越地域に偏る。北新田遺跡（9世紀中葉）では小型の積穴建物、津倉田遺跡（7世紀中葉～8世紀初頭）では小・中型の積穴建物が多く検出されている。柱穴配置は

共通するものの、上越地域とは異なり本遺跡の積穴建物は8世紀中葉～末期に属する中・大型で4本主柱及び無柱の積穴建物が多い点が指摘できる。最後にカマドの設置位置であるが、県内では各時期をとおしてカマドの設置位置は、積穴建物の南側及び東側が優位である〔山崎2019〕。一方、本遺跡では北側及び西側にカマドが付属し、県内の一般的な積穴建物のカマドの位置とは異なる。これは、風向きなどの影響を避けようとしたことと、積穴建物の配置に規制があったためと考えられる。なお、SI165・SI108は明瞭ではないが、SI181とSI207には長煙道のカマドが構築されており、同様の積穴建物は、県内では頸城や魚沼を中心に13遺跡42軒が確認できる〔山崎2017〕。その中で本遺跡の積穴建物の時期に近いのは、十日町市馬場上遺跡〔菅沼2003〕の第44号住居と南魚沼市金屋遺跡〔坂井ほか2006〕の04SI39の2例に限られる。どちらも魚沼地域に所在し9世紀前半に位置付けられている。カマドが長煙道なのか判断が難しい山三賀II遺跡〔坂井ほか1989〕のSI7・SI280を除けば、阿賀北周辺地域で長煙道カマドが付属する積穴建物の検出例は、本遺跡が初めてとなる。長煙道カマドは東北地方に多く分布し、山形県米沢市西谷地1遺跡〔水戸部ほか2015〕、同市駒上遺跡〔草野ほか2017〕、福島県会津坂下町花畠遺跡〔吉田ほか2014〕などがある。また、県内で古代の北方系土器が出土した遺跡が阿賀北地域でいくつか確認されており、旧安栄市松影A遺跡〔加藤2001〕（沼垂地域）、新発田市馬見坂遺跡〔閔2001〕（沼垂地域）、旧神林村砂山VI遺跡〔加藤2004〕（岩船地域）などがある。長煙道カマドの分布から、本遺跡への導入には、魚沼・上越地域の影響が考えられる。また、北方系土器は本遺跡でもわずかに出土しているが、長煙道カマドとの関係については今後の課題としたい。

県内で、小型で無柱の積穴建物が主流になる8世紀中葉～9世紀初頭に、本遺跡では中・大型で4本主柱及

第10表 積穴建物一覧

NO.	遺構名	規模・面積 (m²)	平面形	柱穴配置	カマド位置	備考
1	SI453	中型 (25~40m²)	37.05 (27.66)	長方形 4本主柱	西北面寄り	
2	SI451	37.05 (27.66)	不整形	無柱	西北面寄り	
3	SI103	46.76	方形	無柱	西北面寄り	
4	SI207	47.70	長方形	不明	北側中央	カマド長煙道 柱穴不明
5	SI108	52.40 (52.26)	長方形	4本主柱	北側中央	柱穴4基検出
6	SI181	52.40 (52.26)	長方形	4本主柱	北側中央	カマド長煙道
7	SI65	53.18	長方形	不明	北側中央	柱穴不明

び無柱の竪穴建物が主体となり長煙道カマドが構築される。このような周辺の遺跡との違いは、上越・魚沼地域や東北地方などからの影響が推測される。また、カマドの設置位置が北側及び西側に偏っている点も、県内の傾向と異なり本遺跡独自の様相と捉えられる。

B 建物遺構とその変遷について

1) 建物遺構について

本遺跡の調査区北東側では、竪穴建物のほかに掘立柱建物や性格不明遺構とした竪穴状遺構が多く検出され、建物の変遷を提示することが可能ではないかと考えた。しかし、遺構の重複が著しく遺構からは春日編年IV 1～IV 2・3期〔春日 1999・2019〕の土器が混在して出土するため、各遺構の時期は明瞭でない。ここでは、確実な遺構の切り合いによる新旧関係を基に、第VII章第2節で提示した出土土器の年代から判断した各遺構の主体となる時期を参考に建物の変遷を考えた。第25・26図には遺構と遺物との関係を明確にするため、遺構内出土遺物の出土位置と実測図を示したが、平面図上に番号がないものは小グリッドで取り上げた遺物である。以下、簡単にまとめた。

SI65 (第25図) 他の遺構との重複が著しく、断面から重複するほとんどの遺構より古い。床と捉えた硬化面上に近い位置で出土した7・8から春日IV 1期とした。

SI103 (第25図) SI108を切るカマド(焼土114)から出土した33・34や、床面に置かれた状態で出土した32から春日IV 1～IV 2期と判断した。

SI108 (第25図) SI103に切られる。硬化面上から出土した36から春日IV 1期とした。

SI181 (第25図) カマド(焼土830)から出土した44や硬化面上から出土した42から、春日IV 1～IV 2期とした。

SI207 (第25図) 出土遺物が少なく図化できた遺物は46～48のみである。カマド(焼土823)近くから出土した46や床面上から出土した47から遺構の時期を春日IV 1～IV 2期と判断した。

SI451 (第25図) 出土した土器の復元率が高く、法量や形態に違いがほとんど見られず一括性が高い土器群と判断し、遺構の時期を春日IV 1期とした。

SI453 (第25図) 図化できた遺物は少ないが、出土土器の法量や形態に差が見られないため混入はないと考え、遺構の時期を春日IV 1期と判断した。

SB251 (第25図) 図化できたものは76～82のみである。小片であるが法量及び形態から、遺構の時期を春日IV 2・3期とした。

SB252 (第26図) 杖穴(P191)から出土した83や周溝(SD468)から出土した84～86の土器法量及び形態から、遺構の時期を春日IV 2・3期とした。

SB289 (第26図) 杖穴からの遺物の出土は少なく、図化できたものは95のみである。春日IV 1期の土器より小ぶりなため、遺構の時期を春日IV 2・3期と判断した。

SB288 (第26図) ほかの遺構との重複が著しく、周溝と考えるSD357はSI65 (IV 1期)より新しい。出土した92・93から遺構の時期を春日IV 2・3期と判断した。

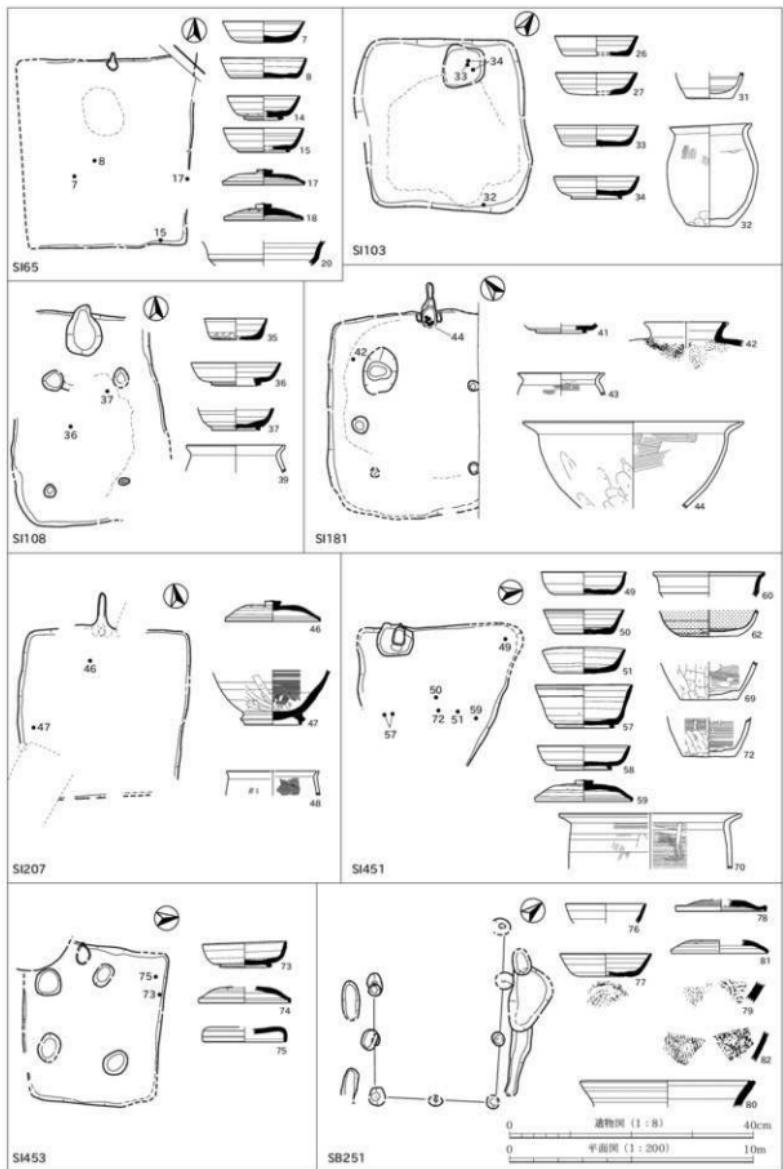
SD420 (第26図) 出土土器は多く、SD357同様に方形を囲むようにL字状を呈することから両者は同一遺構もしくは同時期に機能していたと考え、春日IV 2・3期と判断した。

SX63 (第26図) 竪穴状の掘り込みを確認したため建物遺構とした。出土土器から春日IV 1～2期と判断した。

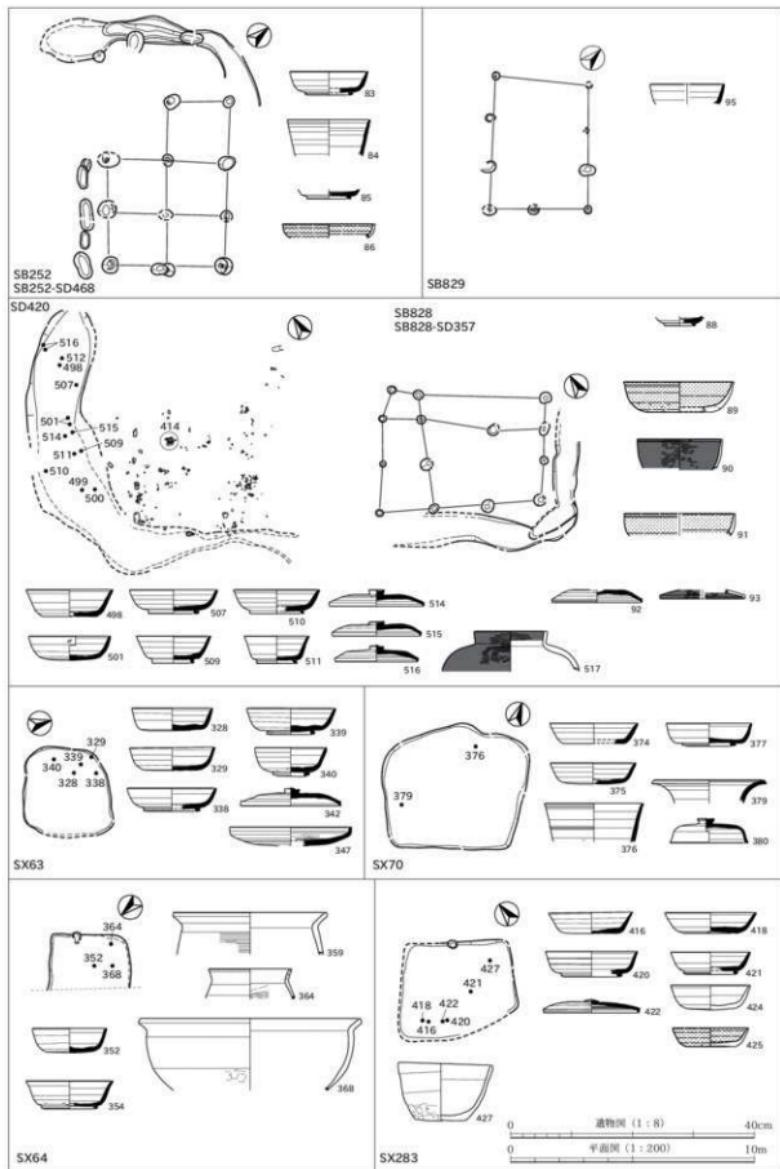
SX64 (第26図) 竪穴状の掘り込みを確認したため建物遺構とした。出土土器から春日IV 2・3期と判断した。

SX70 (第26図) 竪穴状の掘り込みを確認したため建物遺構とした。出土土器から春日IV 1期と判断した。

SX283 (第26図) 竪穴状の掘り込みを確認したため建物遺構とした。ほかの遺構との重複が著しく、断面などから重複するほとんどの遺構より新しい。出土土器から春日IV 2・3期と判断した。



第25図 建物出土遺物の整理 1



第26図 建物出土遺物の整理2

2) 建物造構の変遷

上記で判断した建物の時期を基に、本遺跡における建物造構の変遷を検討する。中・大型の竪穴建物で構成されるⅠ期、周溝もしくは区画溝で囲まれた掘立柱建物が構築され、調査区北西側の祭祀造構（SK413・418・419など）が残されるⅡ期、小・中型の竪穴建物から構成されるⅢ期、調査区南西側の土坑群及び鉢状小溝で構成されるⅣ期に分けられる。春日編年〔春日1997〕に従えば、Ⅰ期は春日編年IV 1～2期、Ⅱ・Ⅲ期は春日編年IV 2・3期、Ⅳ期は春日編年V期に位置づけられる。さらに、Ⅰ・Ⅱ期は出土土器と造構の新旧関係から、それぞれⅠa・b期、Ⅱa・b期に細分した（第27図）。調査区北西側にある鳥形製品や須恵器環状瓶が出土した祭祀造構は、伴出した土器からⅡ期に構築された可能性が高い。また、県内初となる鉄製錫杖頭（696）や鉄鐸（697～700）などの特殊遺物も出土しており、この時期に調査区内の一部が祭祀的に利用されていた可能性を示している。以下、時期ごとに造構構成や空間利用について記す。なお、建物造構が検出されたⅠ～Ⅲ期を扱うこととしⅣ期は省略した。

I a期（春日編年IV 1期）：SI65・SI108・SI451・SI453、SX63・SX70

中・大型の竪穴建物（SI65・108・451・453）が主体で、小型の竪穴状造構（SX63・70）が同時併存する。カマドは、中・大型の竪穴建物にのみ構築される。建物の主軸は、SI65・108及びSX70が南北方向、SI451・453が東西方向で、それぞれおおよそ一致している。SI451とSI453は、近接しているため、同時併存ではなく建て替えの可能性がある。

I b期（春日編年IV 1～2期）：SI103・SI181・SI207

造構の新旧関係と土器の年代観から、Ia期に所属する造構よりも若干新しいと考えた。長煙道カマドが付属する大型のSI181・207はこの時期に所属し、同規模だが煙道がないSI103が同時併存する。建物の主軸方向はすべて一致しない。

II a期（春日編年IV 2・3期）：SB252・SB828、SE278、SD420

区画溝もしくは周溝が付属する掘立柱建物2棟（SB252・828）が主軸を描えて隣接し、両者の中间には井戸（SE278）が構築されている。SB252は総柱建物で、周溝としたSD468は、建物を部分的に囲うだけであり区画溝の可能性もある。また、SB828も造構の重複により一部柱穴が欠損するが柱穴配置から総柱建物の可能性がある。付属するSD357は、その北西側で確認されたSD420に繋がり同一造構とも考えられる。調査区外に伸びる可能性もあるため全容は明瞭でないが、現状ではコの字状に巡っており造構密度が低い空闊地を囲む区画溝と考えることもできる（第26図）。空闊地としたSB828の北西側は、石列381・831や須恵器甕（414）など遺物がまとまって出土したSX125があり（図版62）、儀礼的な空間を意図的に設けていた可能性がある。

II b期（春日編年IV 2・3期）：SB251・SB829

SB829-P160は、IIa期のSB252-P179より新しいことが断面で判断できる。また、SB829はSB251とはP149が重複しているため、短期間での建て直しが想定できる。IIa期を特徴づけるSB828は当期まで継続する可能性もあるが、造構の新旧関係や出土遺物で判断することはできなかった。

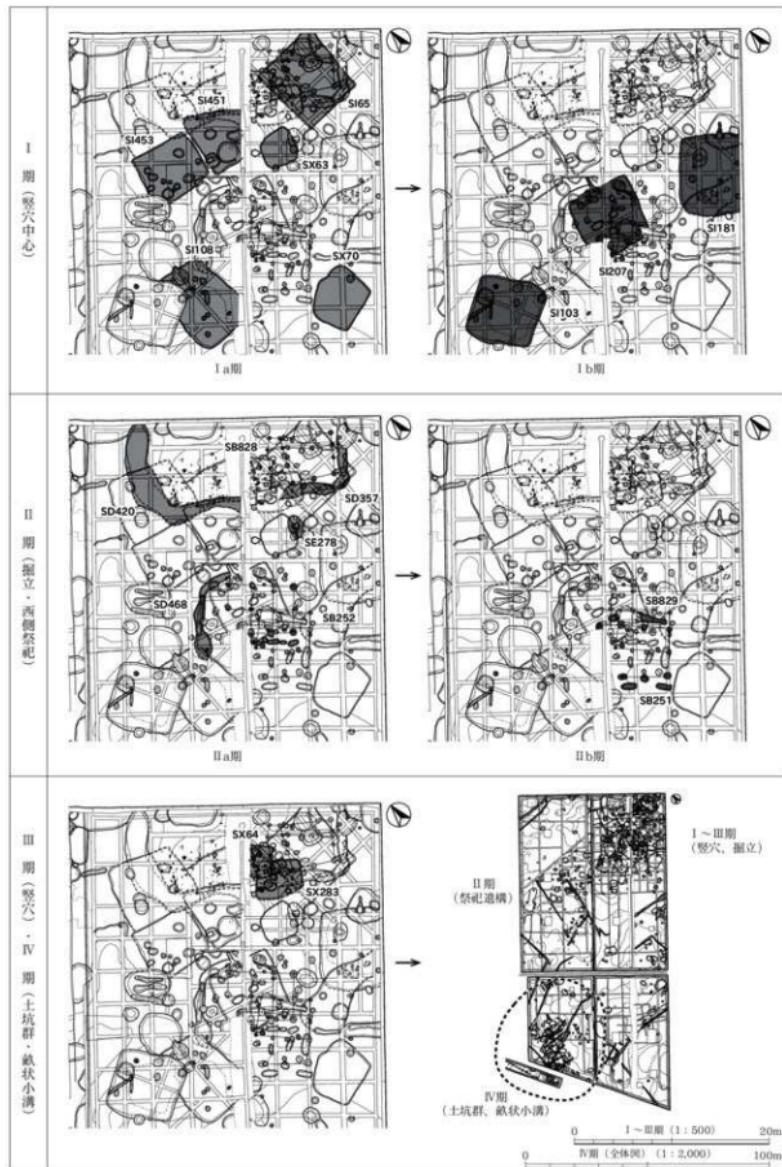
なお、調査区北西側には出土した土器の年代からII期と考えられるSK413やSK418・SK419などの祭祀造構がある。以上から、この時期にSB828-SD357・SD420・SX125を含めた調査区北側の特異な空間利用がうかがえる。

III期（春日編年IV 2・3～）：SX64・SX283

重複関係からSX283はSB828-SD357より新しく出土土器の時期も矛盾がないことからこの時期とした。I期と異なり、大型の竪穴建物は検出されず小・中型の竪穴状造構のみで構成される。II期には調査区内に区画溝で囲まれた掘立柱建物が構築されたが、この時期になり再び竪穴状造構が構築されることが特徴である。

3) 小 結

竪穴建物を中心とした建物造構の変遷について時期ごとに図示した第27図を概観してまとめとする。



第27図 建物遺構の変遷

I期(春日編年IV 1～2期)は中・大型の竪穴建物が主体で、小型の竪穴状遺構が存在する。県内では、8世紀前葉からは小型の竪穴建物が増加し、小・中型の竪穴建物が主体となる[山崎2017・2019]ため、中・大型の竪穴建物が主体で小型の竪穴状遺構が付随する建物構成が本遺跡の特徴と言える。II期(春日編年IV 2・3期)は、区画溝で囲まれたSB252・SB828を中心とする掘立柱建物と、SK413・SK418・SK419などの祭祀に関連すると考えられる遺構が同時に存在する時期である。同じくII期と考えられるSB251・SB829はSB251と重複関係にあり、短期間で建物が建て替えられたと想定される。北西側に儀礼的な空間を設けていた可能性があるSB828は、日常生活以外の用途に使用されていた可能性があり、この時期に祭祀遺物が多く出土していることも含めて調査区内での空間利用の一端を示すものとして注目される。III期(春日編年IV 2・3～)は再び竪穴状遺構(SX64・SX283)が構築される時期で、建物規模はI期よりも小型化する。

以上から、短期間ではあるが中・大型の竪穴建物主体のI期から小・中型主体のIII期に移り変わる過程で、区画溝で囲まれた掘立柱建物や祭祀遺構が構築されるII期を間に挟むことが明らかになった。遺跡は、成立期から竪穴建物を主体とする集落構成を維持するが、その間に建物構造が掘立柱建物で、祭祀に関連する可能性のある遺構が構築される点に特異な状況を見出すことができる。

第2節 遺物について

A 古代土器について

1) 編年の位置づけ

曾我墓所遺跡からは春日編年Ⅲ～VI期の土器が出土した。Ⅲ期とVI期の土器はごく少数であり、主体となるのはIV期である。V期に入ると土器の量は漸減し、VI期に遺跡は廃絶したと推測される。新潟県内の主要遺跡との並行関係については第11表に示した。重複している遺構が多いため遺構一括資料が無く、ひとつつの遺構から複数時期の土器が出土するという状況であった。そのため、第11表に示したのは遺構の新旧関係と出土した土器の様相から判断した時期変遷である。以下では本遺構のI～IV期の土器様相について概観し(第28図)、その変遷について検討する。

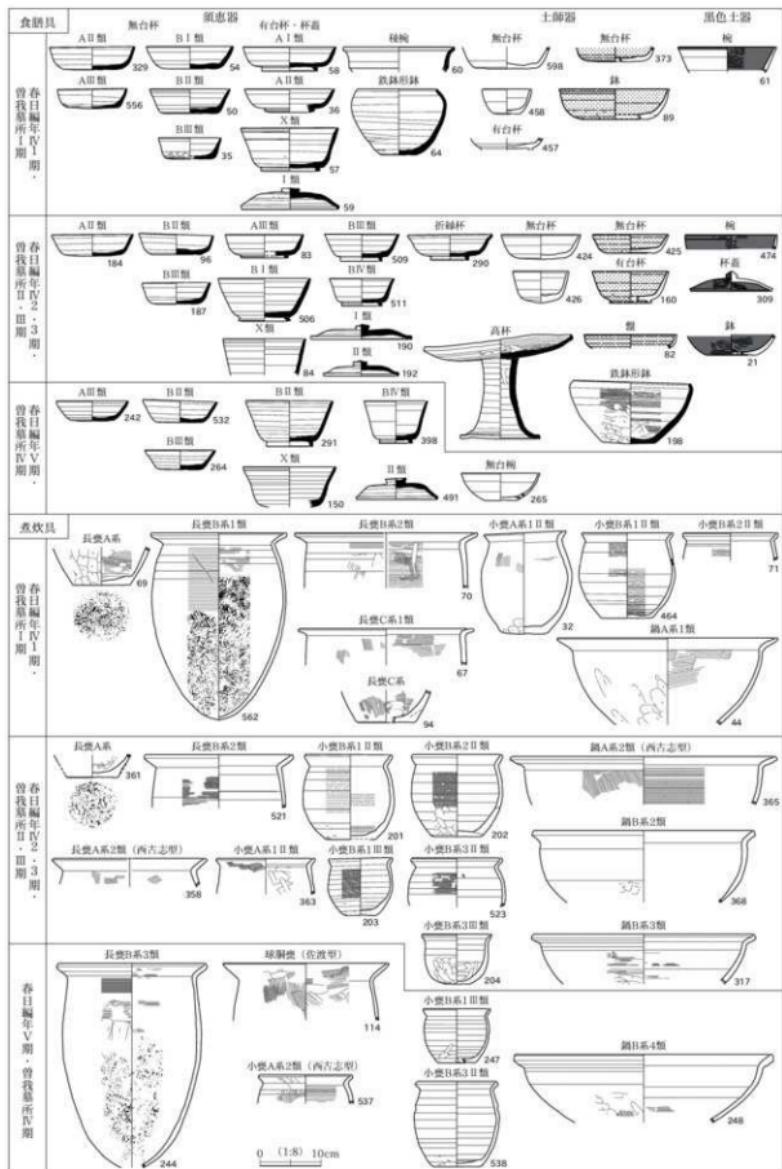
曾我墓所I期：春日編年IV 1期

SI103・SI108・SI451・SI453・SX63・SX70・SX425出土土器が該当する。須恵器無台杯はA II類・A III類、B I～B III類がある。無台杯A II類、B II類とも口径12.5～13.8cm、器高3.5cm以上のものが多く、底部は厚い(50・53・56・451など)。無台杯A III類・B III類の底部外面はクロコケズリされる(35・454・556)。須恵器有台杯はA I類・A II類・X類がある。口径が15cmを超えるA I類は1点のみで、A II類が主流である。A II類は口径14cmを超え、器高は4cm程度で高台・底部とともに厚みがある(36・339・456など)。金属器模倣の有台杯X類は大型で深身の器形である。仏具の器種は稜椎と鉄鉢形鉢がある(図版76-60・64)。

土師器及び黒色土器は食膳具が少數ながら存在する。土師器無台杯は須恵器無台杯と同様の器形のもの(159・

第11表 編年対照表

春日編年	本書	曾我墓所遺跡	信濃川右岸地域 〔伊藤2019〕	阿賀北地域 〔笹澤2019〕	信濃川左岸地域 〔丸山2019〕
		主な遺構			
IV1期	曾我墓所I期	SI103・SI108・SI451・SI453・SX63・SX70・SX425	馬越遺跡II河川3、中田遺跡SK10	山三賀II遺跡S114・S1502B・SK39	八幡林遺跡II地区SD01、梯子谷窓跡SI86、江添D遺跡SD22
IV2・3期	曾我墓所II・III期	SX64・SX283・SX469・SB251・SB252・SB828・SD420・SE278・SE388・SK419・SK488	菅免遺跡SX6・SX10、新保北道跡SK22・SK14・SK83・SK7	山三賀II遺跡S115・S139・S14・S16・S17、丸山A道跡9・27a～c・17・36号土坑	下ノ西遺跡IVSK1053、梯子谷窓跡SI41、八幡林遺跡地区III層、四十石遺跡SK71
V1期	曾我墓所IV期	SK546・SD515・SK532・SK543・SX509	細池遺跡上道跡V12区SE98、小丸山遺跡SE7	山三賀II遺跡S1360・S1100、丸山A道跡11・31号土坑	下ノ西遺跡I SE201、浦反前東SD1085、上町遺跡SK73



第28図 土器の変遷

598)と、口径10cm未満で深身のものがある(457)。土師器有台杯は小破片のため器形は不明である(458)。赤彩された土師器は無台杯(373・597)、鉢(62・89・91)がある。黒色土器は椀があり(61)、ロクロ成形で丁寧なミガキが施される。

長甕はA系・B系・C系が揃う。長甕A系は全形が残る資料は無いが、口縁部は緩く外反し、長胴・平底の器形と推測される(69・603)。長甕B系は口縁端部が丸い1類が主流である。長甕C系は口縁部が水平方向に強く屈曲し、胴部はハケメ調整で平底である(67・94)。小甕はA系1類、B系1・2類がある。小甕A系1類は口縁部が短いものが多い(32・48・461・462など)。ほぼ完形の32は長胴で、器壁は全体的に厚い。小甕B系は長甕と同様に、口縁端部が丸い1類が主流である。底部外面はナデ調整が多い(72・464など)。鍋は出土量が少なく、様相は不明である。図示できたものはA系1類のみである(44)。

貯蔵具の出土量は少ないが、横瓶・長頸瓶・短頸壺・壺蓋・甕は曾我墓所I期～III期を通じて存在する。甕II類の66は口縁端面が内傾し、古相を呈する。

曾我墓所Ⅱ・Ⅲ期：春日編年IV 2・3期

土器編年で細分できる可能性があるため、本遺跡の時期もⅡ・Ⅲ期とした。

SX64・SX283・SX469・SB251・SB252・SB828・SD420・SE278・SE388・SK419・SK488出土土器が該当する。食膳具は曾我墓所I期に比べて小型化し、法量分化により新たな細別器種が増加する。

須恵器無台杯はA II類・B II類・B III類があり、口径14cmを超えるI類は見られなくなる。A II類・B II類とも法量は口径12cm台、器高3.5cm未満のものが多くなる。B III類の底部外面にロクロケズリは施されず、ヘラ切り後未調整が主体となる。須恵器有台杯はA I類・A II類が見られなくなり、A III類が主流となる。大型で深身のB I類、小型で深身のB III類・B IV類が組成に加わる。杯蓋は口端部径14cm未満のII類が出現する。杯蓋I類・II類とも径の小さなボタン状の摘みが多くなり、口端部の屈曲は弱くなる。折縁杯と高杯が新たに組成に加わる。

土師器無台杯は当該期においても組成するが、曾我墓所I期に比べて小型化している。赤彩された土師器では無台杯・有台杯・盤があり、無台杯は曾我墓所I期に比べて小型化している(425)。有台杯は須恵器有台杯B III類に相当する器形(160)で、盤は器壁が薄く丁寧なつくりである(86)。黒色土器は椀のほかに杯蓋・鉢がある。

長甕A系は西古志型が1点確認できるなど少数ながら存在するが、主流はB系2類である。口縁部が水平方向に強く屈曲するC系は見られなくなる。小甕は長甕と同様にB系が主流となり、A系は少数となる。小甕の口縁部形態は1～3類まであり、バリエーションに富む。小甕はI～III類の3法量が確認できるが、I類は破片資料が少數あるにすぎない。II類の数量が最多であることから、II類の使用頻度が高かったと推測される。底部の切り離しは糸切りのほかにヘラ切りがある。鍋は、西古志型のA系2類(365)、B系2類・3類があるが、主流はB系2類である。

貯蔵具の様相は曾我墓所I期とそれほど変わらず、横瓶・長頸瓶・短頸壺・壺蓋・甕は曾我墓所I期に引き続き組成する。祭祀遺構SK419からは甕と環状瓶が出土したが、県内のこの時期の遺跡からの出土例は無く、特殊なケースと思われる。このほかに黒色土器短頸壺(221)や壺・瓶類(477)がある。

阿賀北地域において春日編年IV 2期並行の時期は「食膳具全体における金属器指向が強まる時期で、当地域の食膳具組成上の大きな画期」とされている(篠澤2019)。本遺跡では須恵器有台杯X類をはじめ、折縁杯・鉄鉢形鉢・高杯など金属器指向の器種が多数見られることから、阿賀北地域と同様の傾向にあると言えるだろう。

曾我墓所IV期：春日編年V 1期

SK543・SK546・SD515・SK532・SX509出土土器が該当する。SK543・SK546・SD515出土土器には曾我墓所II・III期のものが含まれる。当期は、建物等ではなく土坑や溝が中心で、本遺跡の衰退期と考えられる。

当該期から佐渡小泊窯跡群産の須恵器(胎土分類B群)が出現する。須恵器無台杯は曾我墓所II・III期よりも小型化が進み、丸底のA類ではA II類が見られなくなり、A III類のみとなる。平底B類は曾我墓所II・III期と

同様にB II類とB III類の2法量がある。須恵器有台杯は大型のB I類と小型のA III類・B III類が欠落するが、B II類とB IV類は存続する。須恵器杯蓋は有台杯I類の消失と連動してI類が姿を消し、II類のみとなる。摘みは頂部が埋んだボタン状が多くなり、全体的に粗雑な作りとなる。折縁杯は出土していないが、稜椀が1点確認できる。曾我墓所II・III期で見られた鉄鉢形鉢及び高杯は出土していない。

曾我墓所II・III期まで存続した赤彩された土師器と黒色土器の食膳具は見られなくなり、新たに土師器無台椀が組成に加わるが、その量は少ない。

長甕A系は姿を消し、長甕B系は口縁端部をつまみ上げる3類が出現する。また、球制甕(佐渡型)もわずかにみられる。小甕は少数の西古志型がみられるものの小甕・鍋とともにB系で占められる。煮炊具は全般的に口縁部形態の種類が曾我墓所II・III期に比べて減少する。

貯蔵具は出土例が少ないため様相は不明瞭である。SK543から赤彩された土師器短頸壺と壺蓋が出土しているが、このような土器の出土は稀で、特殊なケースと思われる。

当該期の土器様相については、阿賀北地域において「法量分化による多種多様な器種構成が金属指向の器種を除き整理・淘汰される段階」とされている(淮澤2019)。曾我墓所II・III期においては須恵器有台杯や杯蓋の細別器種が豊富に存在し、また赤彩された土師器・黒色土器の食膳具も少ながら多数の器種が存在した。しかし、その状況は曾我墓所IV期に入ると一変し、須恵器食膳具の細別器種及び赤彩された土師器・黒色土器の食膳具が減少し、新たに土師器無台椀が組成に加わる。こうした本遺跡の土器様相の変化は阿賀北地域において確認されている流れと同様の動きと捉えることができよう。

2) 遺構別器種構成比率と機能別構成比率

遺構出土土器を対象に口縁部残存率計測法(宇野1992)を用いて器種構成比率・機能別構成比率を算出した(第12・13表)。器種構成比率は遺構全体の出土数に対する各器種の出土数の比率を示したものである。機能別構成比率は各器種を機能により食膳具・貯蔵具・煮炊具に分け、遺構別に3種の構成比率を示したものである。

計測方法は遺構別に土器を器種分類し、器種ごとに口縁部の残存率を36分割の同心円を用いて計測し、集計した。口縁部片のみで須恵器無台杯か有台杯か判別できない場合は、「無台杯か有台杯」として残存率を計測しておき、集計の際に各遺構の無台杯と有台杯の比率に応じてその数値を按分した。稜椀や折縁杯、高杯など出土が稀な器種は食膳具の「その他」としてカウントした。同様に甕・環状瓶は貯蔵具の「その他」、瓶は煮炊具の「その他」に含めた。また小破片のため器種の判別ができないものは、「その他」として集計した。

口縁部を計測の対象とする口縁部残存率計測法では、剥離部や底部片があっても口縁部片が出土していないと数値が現れず、本来の土器組成を示していない場合がある。出土量の少ない貯蔵具は特にこの現象が生じやすい。こうした現象を回避するため、数値には現れない破片が存在する場合は、表中に「*」の印を記入した。

所属時期が特定でき、出土量がある程度まとまっている遺構の計測結果を第12・13表に示した。

器種構成比率

最も多く出土する器種は須恵器無台杯で、全体の35~50%程を占める場合が多い。その次に土師器小甕または長甕が続く。ただしすべての遺構にこの傾向が見られるわけではなく、後述するが遺構の性格によって器種の多寡には差があるようだ。須恵器無台杯と土師器小甕の出土量が多い事象は、日常的に調理し飲食するため、使用頻度が高く破損しやすい器種が多数出土するものと考えている。

機能別構成比率

SI451・SX63・SX70は時期的に曾我墓所I期(春日IV 1期)でまとまり、出土量も豊富で安定した数値である。いずれの遺構も食膳具が70~80%と高い比率である。

曾我墓所II・III期(春日IV 2・3期)はSX64・SB251・SB252・SE278・SE388・SK419・SK488がある。SK419・SK488・SX64以外は食膳具が77~95%と高い比率であり、SK419・SK488以外は貯蔵具がすべて0%である。曾我墓所II・III期に貯蔵具がまったく出土していないわけではないが、その出土量は少なく、食

第12表 器種構成比率(機能別構成比率)1

過橋時期		SI65 IV1～IV2・3期		SI103 IV1期		SI108 IV1期		SI451 IV1期		SI453 IV1期		SX63 IV1期		SX70 IV1期		SI181 IV1～IV2期		
種別	器種	口縁部 比率 残存率 (残存率)																
土師器	無口杯	*	-	2%	1.6%	1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%	3	0.5%	2	1.8%	*	-	
	無口杯	5	0.8%	0	0.0%	*	-	12	0.8%	3	1.3%	4	0.6%	0	0.0%	0	0.0%	
	鉢	2	0.3%	0	0.0%	0	0.0%	19	1.3%	2	0.9%	3	0.5%	2	1.8%	*	-	
	有口杯	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.1%	0	0.0%	*	-	0	0.0%	0	0.0%	
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	*	-	
	無口杯	332	51.6%	87	68.0%	38	54.3%	698	48.9%	117	50.4%	382	61.2%	50	45.5%	34	52.3%	
旅店器	杯盤	115	17.9%	7	5.5%	*	-	114	8.0%	38	16.4%	111	17.8%	6	5.5%	8	12.3%	
	鉢	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	30	2.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	その他の	*	-	0	0.0%	0	0.0%	3	0.2%	0	0.0%	5	0.8%	0	0.0%	0	0.0%	
	鉢	*	-	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	碗	1	0.2%	0	0.0%	*	-	3	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	*	-	0	0.0%	
	杯盤	13	2.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
飲食具	計	534	83.0%	107	83.6%	60	85.7%	1007	70.6%	194	83.6%	554	88.8%	79	71.8%	46	70.8%	
	瓶瓶	5	0.8%	*	-	0	0.0%	*	-	0	0.0%	0	0.0%	*	-	*	-	
	蓋蓋	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	20	1.4%	9	3.9%	6	1.0%	12	10.9%	0	0.0%	
	巻・瓢箪	4	0.6%	*	-	*	-	19	1.3%	*	-	*	-	7	6.4%	0	0.0%	
	甕	*	-	*	-	*	-	14	1.0%	5	2.2%	17	2.7%	31	0.9%	*	-	
	その他の	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
旅店器	知覧市	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	壺蓋	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	黒色土器	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	知観市	*	-	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	町販員	計	10	1.6%	0	0.0%	0	0.0%	53	3.7%	14	6.0%	23	3.7%	29	18.2%	0	0.0%
	長甕	47	7.3%	1	0.8%	4	5.7%	103	7.2%	5	2.2%	13	2.1%	6	5.5%	3	4.6%	
土師器	小甕	50	7.8%	18	14.1%	6	8.6%	248	17.4%	15	6.5%	31	5.0%	5	4.5%	8	12.3%	
	鍋	2	0.3%	2	1.6%	0	0.0%	16	1.1%	4	1.7%	3	0.5%	*	-	8	12.3%	
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	煮炊具	計	99	15.4%	21	16.4%	10	14.3%	367	25.7%	24	10.3%	47	7.5%	11	10.0%	19	29.2%
	旅店器	小片	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	土師器	小片	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
飲食具	黒色土器	小片	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	計	643	100.0%	128	100.0%	70	100.0%	1427	100.0%	232	100.0%	624	100.0%	110	100.0%	65	100.0%	
過橋時期		SI207 IV1～IV2・3期		SX64 IV2・3期		SX283 IV1～IV2・3期		SX469 IV1～IV2・3期		SI251 IV2・3期		SI252 IV2・3期		SI828 IV1～IV2・3期		SI420 IV1～IV2・3期		
種別	器種	口縁部 比率 残存率 (残存率)																
旅店器	無口杯	0	0.0%	6	1.2%	0	0.0%	0	0.0%	*	-	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	無口杯	3	4.2%	4	4.8%	36	4.0%	*	-	0	0.0%	0	0.0%	*	-	7	1.2%	
	鉢	0	0.0%	2	0.4%	22	2.5%	*	-	2	10.0%	0	0.0%	11	6.5%	0	0.0%	
	有口杯	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	9.5%	0	0.0%	
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	5	7.9%	52	31.0%	207	35.3%	
	無口杯	15	21.1%	164	33.5%	467	52.3%	137	34.4%	6	30.0%	14	22.2%	19	11.3%	128	21.8%	
旅店器	蓋蓋	44	62.0%	16	3.3%	97	10.9%	74	18.6%	4	20.0%	24	38.1%	38	22.6%	76	12.9%	
	甕	0	0.0%	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	巻・瓢箪	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	鉢	0	0.0%	1	0.2%	7	0.8%	3	0.8%	0	0.0%	*	-	3	1.8%	*	-	
	碗	0	0.0%	0	0.0%	2	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	1.2%	0	0.0%	
	食器具	計	65	91.5%	233	47.6%	701	78.5%	264	66.3%	19	95.0%	49	77.8%	125	74.4%	434	73.9%
土師器	瓶瓶	0	0.0%	*	-	*	-	*	-	*	0.0%	0	0.0%	2	1.2%	0	0.0%	
	蓋蓋	0	0.0%	0	0.0%	5	0.6%	29	7.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	18	3.1%	
	巻・瓢箪	*	-	*	-	3	0.3%	13	3.3%	0	0.0%	*	-	3	1.8%	13	2.2%	
	鉢	*	-	*	-	*	-	*	-	*	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	10	1.7%	
	その他の	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	知観市	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
土師器	壺蓋	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	黒色土器	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	知観市	0	0.0%	*	-	*	-	*	-	*	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	町販員	計	0	0.0%	0	0.0%	8	0.9%	42	10.6%	0	0.0%	0	0.0%	5	3.0%	47	8.0%
	長甕	2	2.8%	129	26.3%	89	10.0%	31	7.8%	1	5.0%	7	11.1%	14	8.3%	34	5.8%	
	小甕	3	4.2%	90	18.4%	86	9.6%	53	13.3%	*	-	7	11.1%	23	13.7%	70	11.9%	
飲食具	鍋	*	-	37	7.6%	3	0.3%	8	2.0%	*	-	*	-	*	-	2	0.3%	
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	
	煮炊具	計	5	7.0%	256	52.2%	178	19.9%	92	23.1%	1	5.0%	14	22.2%	37	22.0%	106	18.1%
	旅店器	小片	1	1.4%	1	0.2%	2	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	土師器	小片	0	0.0%	0	0.0%	4	0.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.6%	0	0.0%
	黒色土器	小片	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他	計	1	1.4%	1	0.2%	6	0.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.6%	0	0.0%	
	総計	71	100.0%	490	100.0%	893	100.0%	398	100.0%	20	100.0%	63	100.0%	168	100.0%	587	100.0%	

第13表 器種構成比率（機能別構成比率）2

遺構 時期		SE278 IV2・3期	SE388 IV2・3期	SK419 IV2・3期	SK488 IV2・3期	SK543 IV2・3～V期	SK546 IV2・3～V期	SD515 IV2・3～V期	SK532 V期	SX509 V期
種別	器種	口縁部 残存率 /36	比率 残存率 /36	口縁部 残存率 /36	比率 残存率 /36	口縁部 残存率 /36	比率 残存率 /36	口縁部 残存率 /36	比率 残存率 /36	口縁部 比率 残存率 /36
土師器	無台碗	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	10 11.0%	0 0.0% 2 7.4%
	無台杯	*	-	11 11.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	*	0 0.0% 0 0.0%
	鉢	*	-	0 0.0%	10 1.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
漆器類	有台杯	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	その他	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	無台杯	70 54.3%	55 57.3%	123 21.1%	26 26.4%	0 0.0%	33 24.4%	42 46.2%	42 46.2%	10 37.6%
漆器類	有台杯	8 6.2%	8 8.3%	36 6.2%	6 5.7%	0 0.0%	*	0 0.0%	0 0.0%	*
	鉢	22 17.1%	18 18.8%	125 21.4%	2 1.9%	0 0.0%	20 14.8%	13 14.3%	4 5.2%	6 22.2%
	鉢	0 0.0%	0 0.0%	32 5.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
黑色土器	その他	0 0.0%	0 0.0%	70 12.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	鉢	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	鉢	*	-	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
食膳具	杯盤	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	食膳具 計	100 77.5%	92 95.8%	396 67.9%	36 34.0%	0 0.0%	53 39.3%	65 71.4%	46 59.7%	18 66.7%
	横瓶	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	36 34.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
漆器類	漆瓶	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	漆瓶	*	-	0 0.0%	34 5.8%	*	-	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	漆瓶	*	*	-	0 0.0%	34 32.1%	0 0.0%	0 0.0%	*	-
土師器	その他	0 0.0%	0 0.0%	67 11.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	切頭壺	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	26 27.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	黑色土器	切頭壺	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
貯蔵具	貯蔵具 計	0 0.0%	0 0.0%	101 17.3%	70 66.0%	30 31.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	長甕	11 8.5%	2 2.1%	0 0.0%	0 0.0%	*	-	47 34.8%	*	-
	小甕	17 13.2%	2 2.1%	86 14.8%	0 0.0%	39 41.5%	35 25.9%	19 20.9%	14 18.2%	9 33.3%
土師器	輪	0 0.0%	*	-	0 0.0%	0 0.0%	25 26.6%	*	-	7 7.7% 0 0.0%
	その他	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	煮炊具	計	28 21.7%	4 4.2%	86 14.8%	0 0.0%	64 68.1%	82 60.7%	26 28.6%	31 40.3%
漆器類	蓋	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	蓋	小片	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	土師器	小片	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
黑色土器	小片	1 0.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	その他	計	1 0.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0% 0 0.0%
	総計	129 100.0%	96 100.0%	583 100.0%	106 100.0%	94 100.0%	135 100.0%	91 100.0%	77 100.0%	27 100.0%

膳具が高率である傾向はIV1期から変わらず、むしろ微増している。SX64は食膳具と煮炊具はほぼ同率で、ほかの造構とは異なる。SK419は貯蔵具の比率が高い。またSK488はほかの造構とは組成が大きく異なる。SK488はほぼ完形の横瓶と甕が出土しているため貯蔵具が高率である一方、煮炊具はまったく出土していない。両造構は祭祀造構と推測され、このため土器組成はほかの造構とは大きく異なると考えられる。

曾我墓所IV期（春日V期）はSK543・SK546・SD515（以上3基は春日IV2・3期含む）、SK532・SX509がある。SD515・SK532・SX509は貯蔵具が0%であるが、破片資料が少数出土しており貯蔵具がまったく伴わないわけではなさそうである。3造構とも食膳具60～70%程、煮炊具30～40%程度で、曾我墓所I～III期の傾向と大きな差は無いようである。SK546は煮炊具が60.7%と食膳具よりも高く、ほかの造構とは組成が異なる。SK543は赤彩された土器の短頭甕と蓋蓋が出土しており、土器埋納造構である可能性が考えられる。

SK419・SK488・SK543のように、祭祀関連や土器埋納造構の土器組成はほかと大きく異なっており、造構の性格によって土器組成の傾向には違いが存在すると言えよう。

周辺遺跡の土器機能別構成比率を第14表にまとめた。春日IV1～IV2・3期においては、食膳具60～70%強、貯蔵具数%、煮炊具20～30%強という比率（馬越第6次調査河川3、中田SK10、新保北SK36・SK14）と、食膳具・煮炊具はほぼ同率の45～55%で、貯蔵具はごくわずかという比率（馬越SK39・SX21、沖ノ羽第19次調査5区東SK2、細池寺道上第44次調査2区SK411、蓋免SX6）の二つのタイプが存在する。春日V期に入ると食膳具65～70%強、貯蔵具数%、煮炊具20～30%の比率（胸首湯SE2118、沖ノ羽第22次調査3区SK90、沖ノ羽第3次調査8下SK43）に加え、食膳具が90%を超える比率（小丸山SE7、胸首湯SK1266、沖ノ羽第3次調査7下SK134）も現れる。こうした傾向は春日真実氏が新潟県内の土器の機能別構成比率を集成・考察された際に既に指摘されている〔春日2015〕。春日V1期の細池寺道上遺跡2区SE98は食膳具50.4%・貯蔵具2.5%・煮炊

第14表 周辺遺跡の土器機能別構成比率

所在	遺跡名	遺構名	時期	食膳具	貯蔵具	煮炊具	参考	文献
加茂市	馬越	河川3	IV1	77.6%	0.6%	21.8%	[伊藤2009]	
加茂市	馬越	SK39	IV1	45.0%	0.0%	58.7%	[伊藤2005]	
加茂市	馬越	SK21	IV1	45.0%	0.9%	54.1%	[伊藤2005]	
五泉市	中田	SK10	IV1	62.8%	2.4%	34.8%	[長澤aa2004]	
新潟市	沖ノ羽	504東SK2	IV	52.0%	0.0%	48.0%	[遠藤・澤野aa2016]	
新潟市	細池寺道上	295SK411	IV2・3	56.6%	0.0%	43.4%	[立木・京良aa2017]	
新潟市	菅免	SX6	IV3	54.3%	0.0%	45.7%	貯蔵具の破片有り	[立木aa2009]
五泉市	新保北	SK36	IV2	74.6%	1.5%	23.9%	[野水aa2003]	
五泉市	新保北	SK14	IV3	74.0%	5.5%	20.5%	[野水aa2003]	
新潟市	小丸山	SE7	V1	100.0%	0.0%	0.0%	貯蔵具・煮炊具の破片有り	[小池・本間1995]
新潟市	駒首南	SE2118	V	78.7%	7.4%	13.9%	[渡邊aa2009]	
新潟市	駒首南	SK1266	V	94.3%	0.0%	5.7%	[渡邊aa2009]	
新潟市	沖ノ羽	308SK90	V	66.7%	0.0%	33.3%	[遠藤・澤野aa2016]	
新潟市	細池寺道上	296SE98	V1	50.4%	2.5%	47.1%	[立木・京良aa2017]	
新潟市	沖ノ羽	7FSK134	V1	92.4%	0.0%	7.6%	貯蔵具の破片有り	[春日2003]
新潟市	沖ノ羽	8FSK43	V1	73.6%	4.1%	22.4%	[春日2003]	

具 47.1% で、菅免遺跡 SX6 等の比率に近い。

本遺跡では春日 IV 1 ~ IV 2・3 期の遺構の多くが食膳具 70% 強、貯蔵具数%、煮炊具 20% 程の比率を示しており、春日 IV 期においてはこの比率が標準的と思われる。SX64 は食膳具と煮炊具がほぼ同率で、馬越遺跡 SK21 等の比率に近い。SI207・SB251・SE388 は食膳具が 90% を超えているが、計測総数が少ないため、数値が偏っていることも考えられる。春日 IV 2・3 ~ V 期の SK546 は食膳具よりも煮炊具の方が高率である。SK546 は祭祀関連の遺構ではないため、ほかの遺構とは異なる機能があったのかもしれない。

3) 時期別食膳具種類別構成比率

第 12・13 表の数値を元に食膳具種類別構成比率を算出した (第 29 図)。

曾我墓所 I 期 (春日 IV 1 期): SI451・SX63・SX70 で、土師器 5% 弱・須恵器 95% 強・黒色土器は 0 ~ 2% という比率が多い。

曾我墓所 II・III 期 (春日 IV 2・3 期): SX64・SB251・SB252・SE278・SE388 で、SX64 は曾我墓所 I 期の傾向と同じ比率であるが、SB251・SB252・SE388 は土師器が 10% 強とやや高い。一方 SE278 は須恵器 100% である。これは遺構の性格の差であるのか、計測点数の少なさによる数値の偏りなのか判断は難しい。いずれにしても土師器に対して須恵器の比率が高い。

曾我墓所 IV 期 (春日 V 期): 赤彩された土師器及び黒色土器の食膳具が消滅し、土師器無台椀が新たに組成に加わる。曾我墓所 II ~ IV 期 (春日 IV 2・3 ~ V 期) は SK546・SD515、曾我墓所 IV 期 (春日 V 期) は SK532・SX509 で、SD515・SX509 では土師器無台椀が少数見られるが、SK546・SK532 のように土師器無台椀が出土していない遺構もある。土師器無台椀が出現しているがまだ定着していない春日 V 1 期の様相を示していると考える。

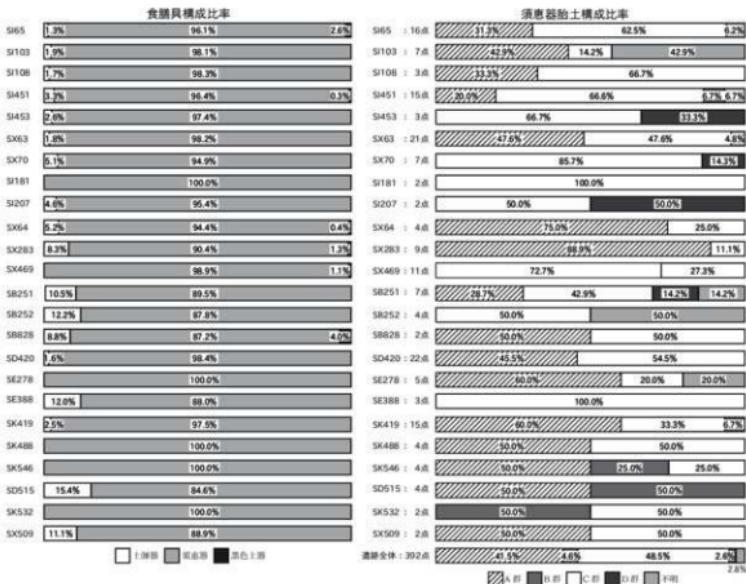
周辺遺跡の食膳具種類別構成比率を見ると (第 14 表)、馬越遺跡河川 3 及び沖ノ羽遺跡 5 区東 SK2 は土師器の比率がやや高いが、春日 IV 1 ~ IV 2・3 期では須恵器食膳具が 90% から 100% と大多数を占める遺跡が多く (馬越 SK39・SX21、中田 SK10、細池寺道上 2 区 SK411、菅免 SX6、新保北 SK36・SK14)、本遺跡もこの傾向に当てはまる。

春日 V 期は IV 期までの須恵器が食膳具の大半を占める状況が変化し、土師器・黒色土器が定量出現する時期である [春日 1999]。周辺遺跡の例では土師器の比率が 20% 以下の遺跡 (小丸山遺跡 SE7、駒首湯遺跡 SK1266、沖ノ羽遺跡 7 FS K134・8 FS K43) がある。このような比率は春日 V 期でも古相の V 1 期に位置付けられており、曾我墓所 IV 期の様相と共に通している。

曾我墓所 I ~ III 期では赤彩された土師器の無台杯・有台杯・鉢などが定量存在する。このような赤彩された土師器はすべての遺跡で普遍的に存在するものではない、とされている [春日 2001]。周辺地域での出土例として

第15表 周辺遺跡の食膳具種類別構成比率

所在地	遺跡名	遺跡名	時期	土器器	須恵器	黒色	備考	文献
加茂市	馬越	河川3	V1	36.9%	61.9%	1.2%	赤彩土顕器有り	[伊藤2009]
加茂市	馬越	SX29	V1	0.0%	100.0%	0.0%		[伊藤2005]
加茂市	馬越	SX21	V1	6.3%	93.7%	0.0%		[伊藤2005]
五泉市	中田	SX10	V1	0.0%	100.0%	0.0%		[長澤as:2004]
新潟市	沖ノ羽	514・SK2	V	32.1%	67.9%	0.0%	赤彩土顕器有り	[渡藤・津野as:2016]
新潟市	鶴池今道上	216SK411	IV2・3	14.1%	85.9%	0.0%		[立木・奈良as:2017]
新潟市	菅免	SX6	V3	3.3%	96.7%	0.0%		[立木as:2009]
五泉市	新保北	SX36	IV2	0.0%	100.0%	0.0%		[野水as:2003]
五泉市	新保北	SX14	V3	0.0%	100.0%	0.0%		[野水as:2003]
新潟市	小丸山	SE7	V1	4.8%	95.2%	0.0%		[小池・本間1995]
新潟市	胸宮湯	SE2118	V	49.4%	50.6%	0.0%		[渡藤as:2009]
新潟市	胸宮湯	SX126	V	7.7%	92.3%	0.0%		[渡藤as:2009]
新潟市	沖ノ羽	314SK90	V	37.4%	61.3%	1.3%		[渡藤・津野as:2016]
新潟市	鶴池今道上	216SE98	V1	38.9%	59.4%	1.6%		[立木・奈良as:2017]
新潟市	沖ノ羽	7 FSK134	V1	0.0%	100.0%	0.0%		[春日2003]
新潟市	沖ノ羽	8 FSK43	V1	20.6%	79.4%	0.0%		[春日2003]



第29図 食膳具種類別構成比率・須恵器の土壌構成比率

は長岡市八幡林遺跡 H 地区 SD01 [田中 1994]、加茂市馬越遺跡河川 3 などがある。八幡林遺跡は官衙関連遺跡、馬越遺跡は莊園関連の遺跡など、いずれも一般的な集落とは異なる遺跡であり、本遺跡も有力者が関わった可能性が考えられる。

4) 須恵器の土壌構成比率

図化した須恵器全 392 点を対象に、第VII章で設定した胎土 A～D 群に分類し、集計した（第29図）。

出土遺構別では、計測点数が少ない（5 点以下）遺構は検討の対象から外した。春日 IV 1～IV 2・3・4 期では A 群が高率（SX283・SX469・SK419）、C 群が高率（SI65・SI451・SX70）、A 群・C 群ほぼ同率（SX63・SD420）の遺構に分かれるが、全体的に見ると A 群・C 群のどちらかに偏っているわけではなく、おおむね半々である。

春日V期以降はSK546・SD515（春日IV・2・3期含む）、SK532・SX509がある。計測点数が5点に満たず安定した数値ではないが、B群が出現しているものの、A群・C群を超える程には至っていない状況である。

周辺遺跡の須恵器胎土構成比率について、報告書の記述を以下にまとめた。

加茂市馬越遺跡：馬越I期（春日IV期） A群 4.8%、C群 85.1%、D群 10.1% ※食膳具対象

五泉市中田遺跡：SK10（春日IV期） C群主体 ※食膳具対象

新潟市沖ノ羽遺跡：古代 1-2期（春日IV期） C群主体 ※食膳具対象

新潟市宣免遺跡：SX6（春日IV・2・3期） C群がほとんどで一部A群がある。B群は皆無。

新潟市小丸山遺跡：SE7（春日V期） A群・C群主体でB群は見られない。

新潟市沖ノ羽遺跡：古代 2-1期（春日V期） B群がC群を凌駕して主体となる。

新潟市沖ノ羽遺跡：7下 SK134（春日V期） A群 6.7%、B群 13.5%、C群 79.8%、

新潟市沖ノ羽遺跡：8下 SK43（春日V期） A群 15.0%、B群 15.3%、C群 55.8%、D群 13.9%

阿賀野市柄目木遺跡〔佐藤ほか2010〕：（春日IV 1～V期） A群 51.7%、B群 0.3%、C群 48.0%

聖籠町山三賀II遺跡〔坂井ほか1989〕 II～III期（春日IV 1～IV 2・3期） A群 80%強、C群 20%弱

春日IV期では信濃川右岸地域の遺跡はC群が主体で、阿賀北地域の遺跡ではA群が主体である。本遺跡はA群・C群はほぼ半々という傾向である。春日V期に入ると本遺跡ではB群が出現するが、A群・C群を超える程ではなく、春日V 1期の小丸山遺跡SE7、沖ノ羽遺跡7下 SK134・8下 SK43と同様の傾向である。

本遺跡全体ではA群 41.2%・B群 4.6%・C群 48.2%・D群 2.6%・不明 3.4%で、柄目木遺跡の比率に近い。本遺跡と柄目木遺跡は阿賀野川を挟んで信濃川右岸地域と阿賀北地域に分かれるが、直線距離は約5kmと近いため、土器様相に共通点が多いと思われる。

B 金属製品・鍛冶関連遺物について

本遺跡からは金属製品・鍛冶関連遺物が非常に多く出土した。金属製品は521点・総重量約3.4kg、鍛冶関連遺物は338点・総重量約3.2kgである。ここでは鍛冶関連遺物が多く出土した遺構のあり方から古代の集落内での鍛冶作業について考える。また、調査区南東側を中心に分布する近世の墓坑出土の金属製品についても若干触れる。

鍛冶関連遺物総重量の約87%は、居住域と考えた調査区北東部（以下北東部）から出土し、18APグリッドは総重量の約34%と突出している（図版8）。18APグリッド内のSB252-SK76・P71、SB829-P161、SK67・73・128は調査時から焼土なども多く認められ、炉壁や鉄滓のほか、粒状滓や鍛造剥片も出土している。各遺構の埋土を土壤洗浄して篩選別作業をした結果、総重量で粒状滓3.0g、鍛造剥片56.4gが確認された（第16表）。粒状滓や鍛造剥片の出土は、付近で鍛打作業を行った鍛冶炉が存在することを示唆する。焼土や硬化面が検出され鍛造剥片総重量の約97%が出土したSK67（第30図）、軒壁らしき焼土が周堤状に残るSB829-P161・SK128（第30図）などは鍛冶炉の可能性がある。鍛冶関連遺物の出土が北東部にほぼ限定される分布状況は、鍛冶作業を行った位置を中心とした廃棄空間が想定される。同グリッドで検出された掘立柱建物SB251・252・829が鍛冶関連遺構に伴うかは判然とせず、関連遺構も不明確で鍛冶工房と判断し得なかった。

出土した鍛冶関連遺物は、羽口・楕形鍛冶滓を含む鉄滓・鍛造剥片・粒状滓など様々である。羽口は合計19点出土し、小片も図化している。羽口は炉の機能によって径の大きさや形状が異なり、製錬炉では内径（通風孔径）4～12cmの大口径、精鍛鍛冶炉では3～6cmの中口径、鍛錬鍛冶炉では2～3cmの小口径が使用されることが多いとされる〔望月ほか2011〕。図化した639以外の羽口は640のように小片で内径が不明瞭であるが、内径を復元できた9点は1～3cmの小口径だった。また、楕形鍛冶滓は重量により1,001g以上を特大、501～1,000gを大、251～500gを中、126～250gを小、125g以下を極小、さらに、重量の重いものは不純物が多く含まれる精鍛鍛冶滓、軽いものは鉄製品加工段階で発生する鍛錬鍛冶滓とされる〔望月ほか2011〕。本遺跡の

楕円形鍛治溝は、125g以下の極小サイズに分類されるものがほとんどであった。出土した鍛冶関連遺物の総重量や、羽口と楕円形鍛治溝の大きさなどからも、本遺跡では主に鉄製品の製作や打ち直しといった鍛錬工程が行われていたと推測される。

鉄製品の原料は、本遺跡で製錬工程を行っていたとは考え難く、鉄素材を搬入して製品を製作していたものと考える。周辺の製錬遺跡としては、遺跡から半径約12km圏内に笛神丘陵や新津丘陵の製錬遺跡群が所在する。鉄滓の分析を行っていないため定かではないが、これらの遺跡群から砂鉄を原料とする鉄素材を搬入した可能性が考えられる。製錬の開始時期は明確ではないが、笛神丘陵では8世紀前半頃、新津丘陵では8世紀後半頃の開始とされ（遠藤・澤野ほか2016、坂井ほか1989）8世紀後半を中心とする本遺跡も時期の範囲に収まる。

調査で出土した金属製品は、鉄製と銅製に大別される。出土金属製品総重量の約99%を鍛造鉄製品が占め、銅製品は近世遺構からごく少量出土したのみである。鉄製品の小グリッドごとの重量分布を図版8に示した。古代に属する鉄製品は、鍛冶関連遺物と同様に北東部に集中するものの、そこから西方へ帶状に分布する。その中には錫杖頭などが出土したSK419も含まれる。居住域と考える北東部では、釘を含む工具類・刀子・鎌など実用的な遺物が出土している。このような生活に利用した道具のほか、居住域では鍛冶作業も行っていたことから、鍛冶道具・製作・打ち直しをした製品、再利用するために持ち込んだ屑鉄なども含まれる可能性がある。SK419からは環状瓶・仏鉢・鳥形製品などと共に錫杖頭・鉄鋸・鉄鋸の舌が出土し、これらは祭祀に用いた製品と考える。居住域出土の実用的な製品とは様相が異なり、集落で製作したものではなく持ち込んだもの可能性がある。なお、溝状構造群が分布する南西部からは、鉄鎌（704）や紡錘車（705）が出土している。

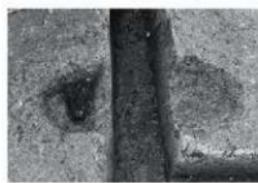
調査区南東側を中心に近世の墓坑が検出され、鉄製釘が多数出土している（第17表）。実際に木棺（底板）が検出されたのはSK15のみだが、ほかの墓坑にも木棺が使用されていた可能性がある。また、銅製品はごく少数で、煙管（726）・錢貨（727～731）が出土している。遺構から出土した錢貨16枚のうち、12枚が近世墓坑からの出土で、六道銭として納めたものと考える。

第16表 遺構別鍛冶関連遺物出土重量（g）

遺構名	羽口	炉壁	鉄滓	粒状滓	鍛造鋸片	鉄製品	焼成灰土塊
SB251-SD153	—	2.7	3.8	—	0.2	—	0.1
SB252-SK71	—	1.1	5.0	0.1	0.1	—	2.2
SB252-SK76	—	4.0	13.7	0.1	0.2	—	—
SB252-SK132	—	—	0.9	0.1	0.1	—	—
SB829-P161	—	0.9	22.5	0.1	0.3	—	—
SK67	—	14.1	365.7	1.4	54.6	1.1	17.7
SK73	—	—	0.7	—	0.1	—	—
SK82	—	—	—	0.6	—	—	—
SK112	12.3	38.0	19.3	0.1	—	—	—
SK128	—	19.1	127.3	0.5	0.8	—	0.3
合計	12.3	79.9	558.9	3.0	56.4	1.1	20.3

第17表 近世墓坑出土鉄製品及び釘頭部点数

遺構名	鉄質 (枚)	鉄製品 (g)	工具類 (点)	釘頭部 (点)
SK1	1	1.3	62.7	20
SK8	1	1.4	66.0	72 (±)
SK10	4	8.8	109.9	82 (±)
SK13	—	—	4.7	4
SK16	4	9.6	0.1	—
SK478	—	—	3.3	5
SK544	3	9.2	65.2	36
SK545	—	—	2.9	6
SK556	2	2.2	48.1	28
合計	15	32.5	362.9	99
				181



SK67 肉化物検出状況（南から）



SBB29-P161 肉化物検出状況（北西から）



SBB29-P161 断面（南東から）

第30図 鍛冶関連遺構

第3節 曽我墓所遺跡の位置づけ

A 祭祀の痕跡について

1) 祭祀遺物

第3次調査で調査区北西側を中心に非日常的な遺物が次々と出土した。SK413・SK418の須恵器質の鳥形製品、SK419の須恵器環状瓶と鉄製錫杖頭や鉄鋸、SK488の鉄鋸の舌などである。これらは、それぞれが全国的にも類例の少ない希少な祭祀遺物である。ここでは、本遺跡を特徴づける鳥形製品・須恵器環状瓶を主に扱い、遺跡の性格や位置づけを検討するため、本遺跡以外では、いつ頃のどのような遺跡・遺構で出土しているかまとめた（第31～34図・第18表）。ただし、9世紀代の鉄鋸が出土している石川県寺家遺跡（石川県立埋蔵文化財センター1988ほか）、9～12世紀代の鉄鋸が出土している福岡県沖ノ島（第三次沖ノ島学術調査隊1979ほか）は、祭祀遺跡として第33図に地點のみ示している。鉄製錫杖頭と鉄鋸・舌については特徴に触れ、必要な図のみ掲載した（第35図）。なお、個々の遺物については第V章で記載している。

鳥形製品 中空の胴体に翼や羽が表現され、基本的に2本（右馬之糸窯跡資料は3本）の脚が付き、鳥を写実的に象った陶製品で、鳥形土器・鳥形須恵器・鳥形土製品などと呼称される。実用品としての容器のほかにオブジェとしての機能も考えられるため、本報告では鳥形製品と呼称し土製品として扱った。なお、古墳時代に広島県・岡山県などでみられる鳥を抽象的に表現した鳥形瓶や、鳥を装飾的に用いる鳥形鏡などは含めていない。この鳥形製品は北陸地方に分布が集中することが指摘され集められている〔望月1997・植木2002・吉田2004〕が、新資料もあり今回改めて集められた（第31～33図・第18表）。完形品など形の分かる資料のほかに尾部・脚部の破片で「鳥形の可能性がある」と報告されているものも含めているため、鳥形製品ではない資料が含まれる可能性もある。また、本遺跡や石川県上越市山野谷窯跡（安中1999）で出土した頭部（第32図23）も含めた。なお、実見していないが、富山県小杉流通業務団地内遺跡群No.18-C遺跡出土の第31図17は鳥形製品の頭部と考え、報告とは天地逆に掲載した。また、石川県戸水C遺跡出土の第32図22（左）は鳥形製品の尾部と考え、左へ90°回転させて掲載した。年代は基本的に報告書に準じたが、古墳時代後期と報告された第32図22（左）は同一個体と記載のあった同図右の報告に合わせている。

鳥形製品は、秋田県から石川県まで日本海側を中心に本遺跡を含め23遺跡から出土している。同一遺跡の別地点から出土しているものや、破片のため個体識別が難しいものもあり総点数は分からず。ひとつの遺跡から多く出土しないため、特殊容器と考え土器として報告される場合と土製品として扱われる場合がある。大きさや形状から「非日常的な特殊容器」〔望月1997〕や「律令祭祀具」〔望月・大橋1999〕、「非実用的容器」〔吉田2004〕などとされる。形態は第32図18が猛禽類とされる以外は、水鳥を模したと考えられるものが圧倒的に多い。また、従来の研究どおり須恵器の窯跡からの出土が多く、山形県では河川・溝などからの出土が目立つ。ほかに、工人集団の集落や移住した渡来人の集落とされる遺跡でも見られる。鳥形製品が出土する新津丘陵窯跡群・富山県射水丘陵窯跡群や石川県池崎窯跡などは同丘陵で製鉄も行われており、その強い関連が指摘され、「鳥の形を模した容器は、その起源が朝鮮にあり、日本で出土する鳥形須恵器は、渡来人の手によるものとの仮説も立てられていい」という〔望月1998〕。時期は小杉流通業務団地内遺跡群No.18-C遺跡が8世紀前半と最も古い。本遺跡を含め8世紀後半～9世紀前半が最も多く、10世紀半ば以降のものは出土していない。

本遺跡の鳥形製品は本体2点（625a・b・626と同一個体脚部627・628）と頭部2点（629・630）である。本体は水鳥を模して非常に繊細な線刻で丁寧に表現されている。625aの胸部に見られる羽毛を表現したような円形の刺突文は第31図5・6に類似する。同様に羽毛を表現したと考えられる鋸歯状や格子状の沈線文はほとんど個体に見られるが、ひとつとして同じものはない。また、本遺跡のものは第31図6や第32図18と同様

にほかの個体より大きい。脚部は本体を支えるよう大きく作られ、第31図13・17同様に水かきが表現されている。ほかに、刻みなどで指が表現されるもの（第31図16、第32図24）や刻みも表現されないもの（第32図25）がある。頭部は第32図23の頭部とは異なり挿入形を呈し、第31図17のNo.18遺跡出土の個体も同様の頭部と考えた。

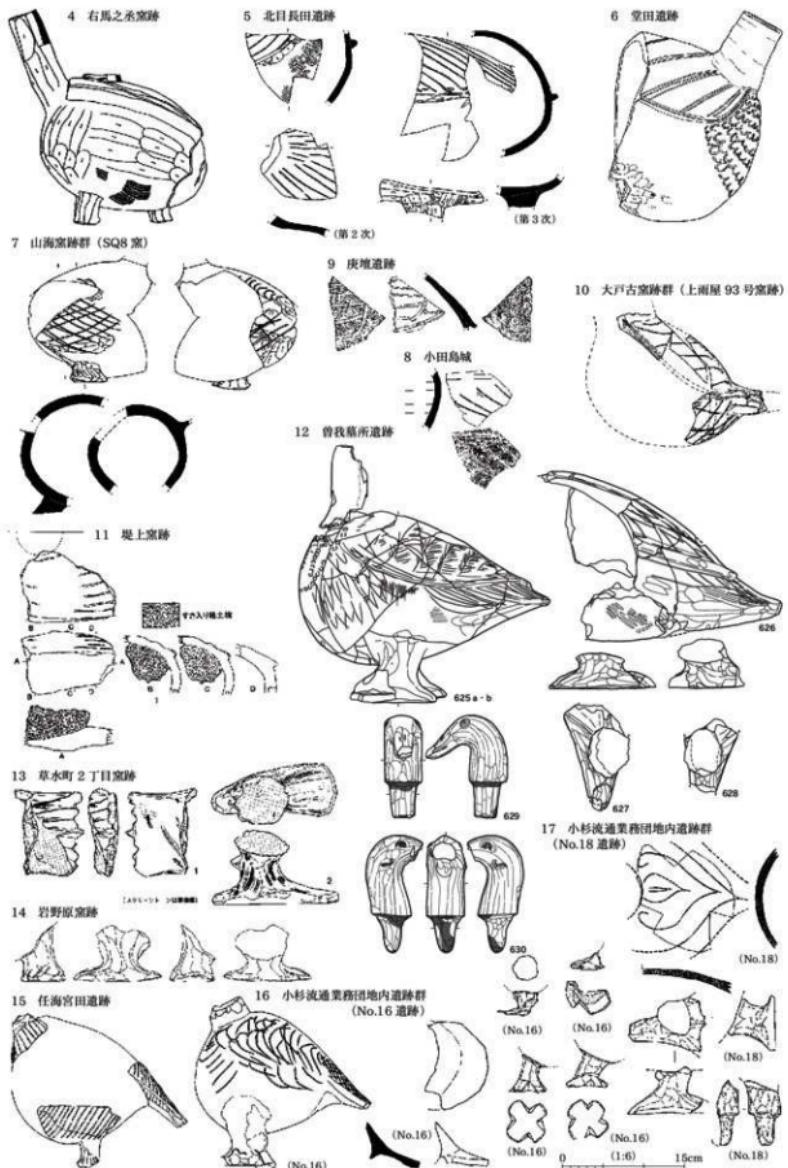
次に本遺跡の鳥形製品の出土状況であるが、625aは鳥形製品体部・脚部で明確な掘り込みが認められなかったSK418から出土した。SK419・499など広範囲から出土した接合しない頭部の625b同様に粉々になった小破片が広範囲に散っていた。特にSK419の2層から多く出土している。また、626は鳥形製品体部で浅い土坑SK413から出土した。脚部は、両足とも南へ約18m離れたSK419の2層から出土し、接合しないが第1次調査の試掘坑19Tからも体部の破片がみられる。今回の調査で出土したのは尾部側のみで、頭部側や破碎時に出ると思われる小破片などはほとんど出土していない。このように異なる2点の鳥形製品の出土状況から以下のように推察する。625a・bはSK419で頭部と体部に割られた後、体部は西へ移動してさらに割られ、頭部破片は破碎した際に周囲に広く飛んだか、故意に散らしたのではないかと考える。626は出土部位が少ないので、調査区外で頭部と尾部に割られて、この場所に持ち込まれ体部と脚部を別々に廃棄したのではないかと考える。

第18表 鳥形製品・模型須恵器環状瓶・鉄製錫杖頭（古代）出土地一覧

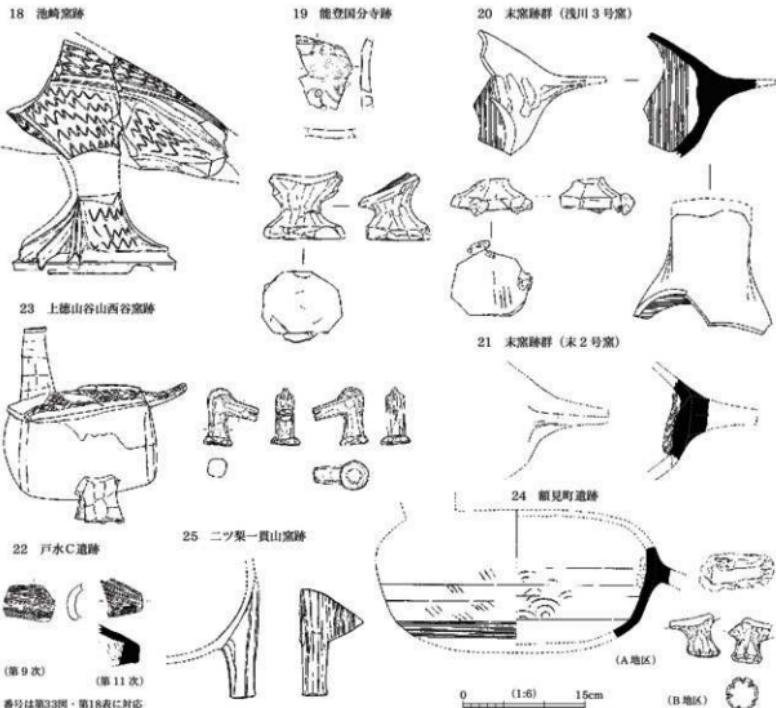
No.	所在地	遺跡名	出土地	鳥形 製品	模型 須恵器 環状 瓶	鉄製 錫杖 頭 (古代)	年代	備考	文献
1	吉森郡尾上町	李平下原遺跡	143H（住居跡） 覆土	○	8世紀後半～11世紀初頭				[吉森県教育委員会 1986]
2	若干郡宮古町	山口遺跡	SI14覆土	○	9世紀後半～10世紀前半	三點鏡・鍔跡とともに出土			[小山内・島崎1999]
3	宮城県東松島市	矢木根穴墓群	11号墓	○	7世紀中葉～9世紀初頭頃				[宮城県東松島市教育委員会 2010]
4	秋田県秋田市	石山之糸室跡	灰塚	○	8世紀後半～9世紀前半	脚3本			[伊藤2001]
5	山形県鶴岡市	北ノ長田遺跡（第2次 調査）	SD1272	○	9世紀～10世紀	脚は[吉田2004]より転載			[野尻・佐藤1996]
	山形県鶴岡市	北ノ長田遺跡（第3次 調査）	SG702（河川跡）	○	9世紀前半	脚は[吉田2004]より転載			[伊藤・豊田1998]
6	山形県鶴岡市	羽田遺跡	瓦片解	○	9世紀前半頃				[鈴木・川田1995]
7	山形県平田町	山西窯跡群	SQ8焼成場	○	9世紀後半				[名和・水戸1992]
8	山形県東根市	小山城跡	35SG99（河川跡）	○	奈良～平安				[吉田2004]より転載
9	山形県南陽市	奥山遺跡	燒造外	○	9世紀前半				[押切・須賀2007]
10	福島県会津若松市	大戸古窯跡群	上面屋93号窯	○	8世紀後葉	分布調査採集			[会津若松市教育委員会 1994]
11	新潟県阿賀野市	堤上窯跡	—	○	9世紀代	表探			[小林2002]
12	新潟県江南区	曾我窯系遺跡	SK413・418・ 419ほか	○ ○ ○	8世紀後葉～9世紀初頭				[本書]
13	新潟県秋葉区	草木町2丁目窯跡	灰塚	○	9世紀初頭頃	国外以外の破片も出土			[渡邊1993]
14	新潟県長岡市	岩野原窯跡	TT灰塚	○	9世紀前半				[山賀2018]
15	富山県富山市	住吉町遺跡	B6地蔵(KSD317(区 画))ほか	○	8世紀後半～10世紀				[武田2007]
16	富山県射水市	小引流通業社付地内遺 跡群（No.16遺跡）	1号窯灰塚	○	8世紀前半				[上野・久々2018]
17	富山県射水市	小引流通業社付地内遺 跡群（No.16C遺跡）	C地区（工人村落）	○	8世紀前半	右下の図は天地逆に掲載			[上野・久々2018]
18	石川県七尾市	池崎窯跡	池崎1号窯灰塚	○	9世紀中葉～後半				[上肥・近藤1985]
19	石川県七尾市	能登国分寺跡	包含層	○	7世紀中葉～10世紀前葉				[上肥2018]
20	石川県金沢市	末室窯跡群	西端13号窯灰塚	○	8世紀後葉				[井越2018]
21	石川県金沢市	末室窯跡群	末2号窯灰塚	○	8世紀後葉	国外以外の破片も出土			[井越2018]
22	石川県金沢市	日本C遺跡（第9次）	包含層	○	9世紀～10世紀前葉	左へ90度回転して掲載			[柳本・大西2000]
23	石川県金沢市	日本C遺跡（第11次）	包含層	○	9世紀～10世紀前葉				[大西・道2003]
24	石川県能美市	上野谷山山西谷窯跡	灰塚	○	8世紀後半～9世紀初頭頃				[安中1999]
25	石川県小松市	頬見町遺跡（A地区）	S124	○	8世紀後半				[豊月2006]
26	石川県小松市	頬見町遺跡（B地区）	灰塚（鍍金系移 住者の集落）	○	8世紀後半				[豊月2007]
27	石川県小松市	二ツ契一貫山窯跡	17号1層削除或成 堆（2次火）	○	8世紀後半				[豊月2002]
28	京都府京丹後市	阿澄田窯跡	C支群2号窯	○	8世紀中頃				[森1990・1991]
29	兵庫県豊岡市	荒尾遺跡	—	○	8世紀前半頃～9世紀	脚は[名村2020a]より転載			[名村2020a]
30	兵庫県加古川市	白浜3・5号窯跡	工房跡SD1	○	8世紀初頭				[森内・瀬江1999]
31	奈良県奈良市	歌麿内領忍辱寺跡	11号地点1号窯	○	7世紀後半				[吉木2014]
32	石川県津幡市	笈茂遺跡 [#]	C区包含層	○	9世紀前葉～中葉	同一側体含め3点 本書に掲載なし			[川柳2021]

No.は第33図に対応

[#]密石川加茂遺跡で、羽毛が織継で表現された空中の鳥形製品群の出土例があることを集成後に確認している。



第31図 鳥形製品 1



第32図 鳥形製品2

- | | |
|-----------------------|----------------------------|
| 1 李平下安原 | 16 小杉道道置窯团地内遺跡群 (No.16 遺跡) |
| 2 山口窯跡 | 17 小杉道道置窯团地内遺跡群 (No.18 遺跡) |
| 3 矢木瀬穴窯群 (11号窯) | 18 池崎窯跡 |
| 4 右馬之糸窯跡 | 19 能登國分寺跡 |
| 5 北日良田遺跡 | 20 末室窯跡群 (浅川 3号窯) |
| 6 堂田遺跡 | 21 末室窯跡群 (末 2号窯) |
| 7 山海窯跡群 (SQB窯) | 22 戸水C道跡 |
| 8 小田丸城 | 23 上徳山谷山西谷窯跡 |
| 9 庚尾遺跡 | 24 須見町遺跡 |
| 10 大戸古窯跡群 (上雨屋 93号窯跡) | 25 ニツ梨一貫山窯跡 |
| 11 雨上窯跡 | 26 阿賀田遺跡 |
| 12 曽我窯所遺跡 | 27 斎木遺跡 |
| 13 草軒町 2丁目窯跡 | 28 白沢 3・5号窯跡 |
| 14 岩井畠窯跡 | 29 改新西京窯器窯跡 |
| 15 仕荷田遺跡 | 30 加茂遺跡 |

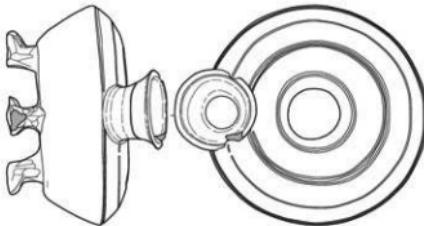
凡例
 ● 鳥形製品
 ■ 模型須恵器環状版
 ▲ 鉄製錫杖頭 (古代)



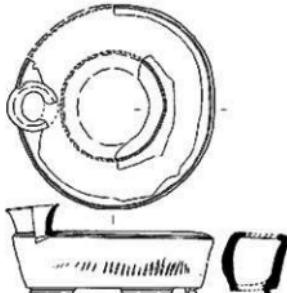
第33図 鳥形製品・横型須恵器環状版・鉄製錫杖頭 (古代) の出土遺跡

横型須恵器環状瓶 環状瓶は、環状の胴部の1か所に注口を持つ特異な形をしている。從来から広島県周辺の古墳などから出土する地域性の強い特殊な器形の須恵器とされ、有台と無台に分かれる。有台のものを「台付環状瓶」、無台のものは単に「環状瓶」と呼称され縦型の環状瓶の写真が掲載されている(田辺1981)。また、環状の胴部に注口部が付かない資料もあるため「環状形土器」とも呼称される(青木2014)。破片資料で判別できない場合もあるが、注口が付く個体が多く本遺跡資料(195)にも注口部があることから本書では環状瓶とした。

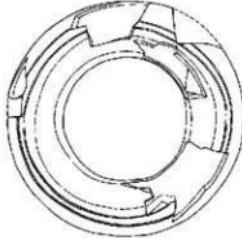
12 曽我墓所遺跡



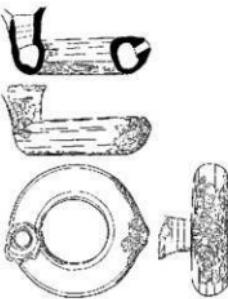
26 阿波田窯跡



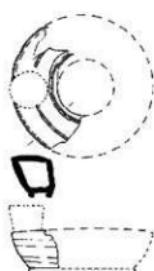
28 白沢3・5号窯跡



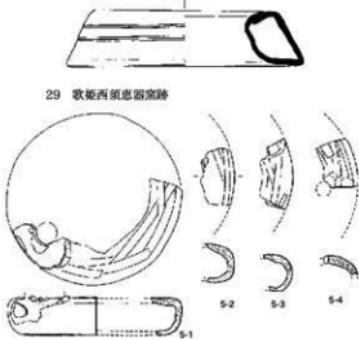
3 矢本横穴墓群(11号墓)



27 茅木遺跡



29 歌姫西須恵器窯跡



番号は第33回・第18表に対応

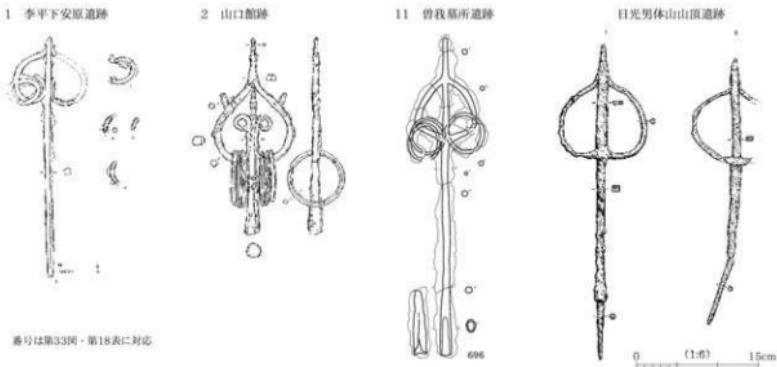
第34図 模型須恵器環状瓶

近年の資料増加によって、環状胴部の成形技法の変化により胴部の断面形態が円形から方形へと変わること、さらに8世紀以降には成形技術の変化とともに横型の環状瓶が製作され分布域が広がることが指摘されている〔青木2014・2016、名村2017b〕。8世紀以降に製作される環状瓶は、組み合わせ手法による成形や方形を呈する環状胴部の断面形で、横型のものも見られる。また、特異な形状の環状胴部については、「おそらく、粘土紐を貼り合せてまず長方形の板を作り、それを丸めて管を作ったのち、さらにそれを環状に成形した」ものであろうと推定され〔田中・田辺1977〕。その後、成形手法について具体的に言及された〔田辺1981〕。しかし、この手法以外に、粘土の「細長い板を複数枚作成し、これらを上下左右に貼りあわせ、断面方形でドーナツ状の胴部となるように成形する」という「組み合わせ手法」があることが報告された〔青木2014〕。名村はX線CTスキャンを利用した製作方法の分析〔名村2017a〕と、年代が推定できる遺跡出土の個体を中心とした断面形状や文様の変化の方向性から環状瓶の編年をしている〔名村2017b〕。その際、「粘土を引き伸ばし3枚の粘土帯を作り、そのうち1枚はL字状に折り曲げ、残りはそのまま円環状につなげて調整する」とした製作技術による分類のⅢ類が本遺跡例に類似する〔名村2017b〕。また、環状瓶は7世紀前半から8世紀半ばまでは確実に製作されていたと推測したうえで、7世紀と8世紀を境に見られる技術的な断絶は、制作目的の明らかな差異であろうとしている。そして、「仏教を中心とした奈良時代へと大きく文化が変化していく中で、古墳祭祀の一部が仏教的な祭祀の中に受け入れられていったことを示して」と結論付けている〔名村2017b〕。

本遺跡資料(195)は、鳥形品や鉄製錫杖頭・鉄鋸などとともにSK419から出土した横型の須恵器環状瓶である。ここでは、上記研究から成形技法もあわせて8世紀以降の製作であるとされる横型の須恵器環状瓶に限定して考えてみたい。兵庫県白浜3・5号窯跡のように明確な注口部を持たない個体(第34図28)や、宮城県矢本横穴墓群のように注口部の反対側にも注口を設け題と報告されている個体(第34図3)などを含めると全国で6例が確認されている(第33・34図・第18表)。本遺跡と宮城県矢本横穴墓(第34図3)、兵庫県荒木遺跡(第34図27)を除き窯跡からの出土である。外径や内径の大きさ、器高や高台の有無、さらに断面形状にも違いがみられ「横型須恵器環状瓶」のバリエーションの多さが際立つ。本遺跡資料の195は前方部が割れていたため環状胴部の内部が観察できた。X線CT画像などもあわせてみると、4枚の粘土板のうち1枚をL字状に折り曲げ貼り合わせて円環状にし、端を合わせて環状に仕上げる「組み合わせ手法」であることが分かる。断面形状は方形というより五角形を呈しているが名村のⅢ類に該当する。本遺跡資料(195)にはほかの個体にはない3本の鳥足を模した脚部が付くが、同一遺構の土器の年代から8世紀後半と考えられ、分布域・断面形態からも青木・名村の編年に合致する。

鉄製錫杖頭 本遺跡を特徴づける遺物のひとつである。古代の遺跡から出土している錫杖頭は、本遺跡のほかには青森県李平下安原遺跡〔青森県教育委員会1988〕と岩手県山口館跡〔小山内・鳥居1999〕、栃木県日光男体山山頂遺跡〔日光二荒山神社1963〕である(第33・35図・第19表)。「いうまでもなく錫杖は仏具の一種である」とされ〔三宅1963〕、現代でも使用されている。三宅は9~12世紀代と考えられる日光男体山山頂遺跡出土の34点(うち鉄製20点)の錫杖頭を輪の形態などで分類し、第一形式として「中心になる柄に宝珠形の輪を附着させたきわめて簡素な」錫杖頭2点を示している(第35図右)。また、輪の下部が柄に沿って上昇し蘇手状に巻き込むものを第二形式としており、出土品の多くがこの分類に含まれる。大和久は、錫杖頭に関して記載された仏典や文献を詳細に調べ、「この仏具が本来は音を発する杖として僧侶が携行する実用の道具であり、音を出す仕掛けは金属の輪と環の単純な組み合わせである」と、簡素から複雑化・多様化へという変化の方向性を示した。そして、三宅分類を参考にして柄と輪の関係で大きく第1~4類に分類、輪や下端部の形態的特徴で細分し編年案を示した〔大和久1989・1991〕。また、水澤も柄と輪の関係や鍛鉄・鋳造などの製作技法、下端部の形状も含めI~IV類に分類し大和久とは逆に退化の方向性で捉えて編年している〔水澤2011〕。

本遺跡出土の鉄製錫杖頭(696)は、柄に輪を付着させるだけの簡素な鍛鉄製の錫杖頭で、遊環は左右で異なる1個と2個確認された。輪の形状などから三宅分類の第一形式、大和久分類の第1類、水澤分類のIV類に該



第35図 鉄製錫杖頭(古代)

当するが、下端部が袋穂形を呈している点はどの分類にも当てはまらない。柄の下端部の形状は、挿入形から袋穂形へという新旧の変化として捉えられている。696が同構造 SK419出土土器の年代から8世紀後半を下らないと考えると、大和久のいう複雑化の方向性で捉えられるのかもしれない。しかし、下端部の形状からは簡素な作りの古い錫杖頭の中でも新しい段階と考える。また、輪の付着方法は鋸により明確にできなかった。李平下安原遺跡(第35図1)や日光男体山山頂遺跡(第35図2)のように柄に付着するのか、山口館跡(第35図2)に類似し、左右の輪が柄とともに上端で付着するのかは明瞭でない。

鉄鐸 鉄鐸は大陸からもたらされた古墳の副葬品として西日本を中心に分布するが、本遺跡のように古代に位置づけられる鉄鐸もある。いずれも板鉄を筒状に巻いた中に舌を下げ、振ることで音を鳴らす道具である。長野県諏訪神社などの伝世品は知られていたが、栃木県日光男体山山頂遺跡で初めて出土した(日光二荒山神社 1963)。これまでの研究をふまえて「サナキまたはヌリデ(ヌデ)と呼ばれて神聖視され(中略)古くは神聖な神の憑代とも考えられた鐸」と、日本で古くから用いられてきた状況を述べている(佐野 1963)。古代の鉄鐸は長野県で10世紀以降のものが多く出土しており、古代の鉄鐸出土遺跡の特徴とともに研究史を含め集成されている(川崎 2015)。鉄鐸は時代が下ると大型化するとされるが(原 1996)、川崎の集成によると古代では4~10cmの全長であり本遺跡の鉄鐸も当てはまる。そして、官衙関連遺跡からの出土は稀で、鉄鐸が一般集落の中における祭祀でも用いられるとしている。また、先行する時期の石川県寺家遺跡(石川県立埋蔵文化財センター 1988注)や日光男体山山頂遺跡(日光二荒山神社 1963)から出土している点を、律令期初頭には海外との交流にかかる国家的な祭祀や国衙にかかる山岳祭祀としての性格を帯びていたと推測し、東アジア的視野で考えることが重要であると指摘している(川崎 2015)。

なお、鉄鐸とは別に東北地方を中心とする錫杖状鉄製品に伴う筒形鉄製品がある(井上 2002・2006・2007)。全長4cm前後で基本的に舌を持たないが、鉄鐸同様に振ることで音を鳴らす道具である。井上は古代の鉄製祭祀具について詳細に検討する中で、この錫杖状鉄製品に付属する筒形鉄製品の祖型が、日光男体山山頂遺跡や長野県で出土する鉄鐸である可能性が高いとしている(井上 2006)。本遺跡からは鉄鐸4点(697~700)と舌3点(701~703)が出土した。そのうち2点の鉄鐸と鉄製錫杖頭がSK419から出土している。

2) 祭祀の場

非日常的な祭祀遺物が調査区の北西側を中心に出土した。それらはいくつかのまとまり(土坑)で捉えられ、さらにそれらの土坑が検出される東西約20m、南北約27mの範囲を当初は祭祀の場ではないかと考えた。中でも須恵器環状瓶を中心に壺や鉄製錫杖頭・鉄鐸などの遺物がまとまって出土したSK419、破碎された鳥形製

第19表 祭祀関連遺構出土遺物一覧

	須恵器										土器				黒色土器				七輪器		石製品		鉄製品	
	無台杯	有台杯	杯	高杯	環状瓶	瓶	長颈瓶	壺	蓋	鉢	無台杯	鉢	長甕	小甕	鍋	桶	杯	豆皿	鳥形製品	焼課	鐵杖頭	鉄鋸	舌子	
SK413	1																							
SK418																								
SK419	4	1	4	2	1	1		1	1			1		5										
SK488	1				1	1			1				1											1
SK499																								
SK740																								
SK758																								1
SB828	*	*	*	*	*					*	*	*	*	*	*	*	*	*					18	
SB828-SD357	*	*	*							*	*		*	*	*	*								1
SD420	*	*	*			*	*	*	*		*	*	*	*	*	*	*	*					109	
SX64-石列381																								8
SX125	*	*	*			*			*	*	*	*	*	*	*	*	*							
SX125-石列831																								8
SX415	*	*	*							*														208
SX416	*													*										170

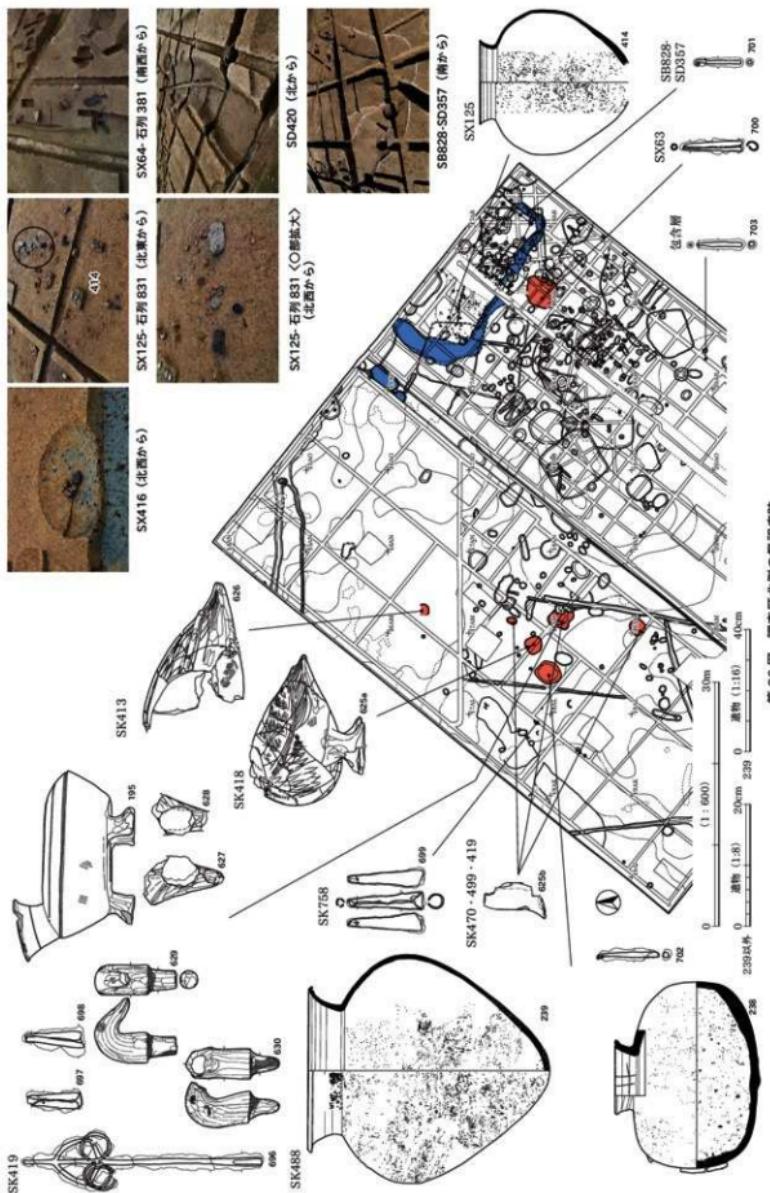
数字は点数、*は出土していることを示す

品が出土した SK413・SK418、須恵器大型甕・横瓶などが廃棄された SK488 が検出された東西約 10m、南北約 9m の範囲を中心的な場所と考えた。第VII章第1節・第2節 A では、いずれの遺構も曾我墓所Ⅱ・Ⅲ（春日編年 IV 2・3）期と位置づけた。この時期には、調査区北東側の居住域は大型の竪穴建物から溝で区画された掘立柱建物が建てられる。特に北側の SB828 に付属する SD357 からは鉄鋸の舌が出土しており、西側の SD420 に繋がる遺構の可能性もある。仮に同一遺構と考えた場合、掘立柱建物と区画溝（SD420）の間には南北を軸に配された石列が 2 基（SX64-石列381、SX125-石列831）確認されている。さらに各石列南端の中央にも石が置かれ、遺物が集中する SX125 からは器高約 50cm の須恵器甕が出土している（414）。また、SD420 の西側には焼穢集積遺構が 2 基（SX415・416）確認されている。居住域と考えた北東側で検出されたこれらの遺構から、北西側の一角だけでなく少し離れてはいるものの調査区北側がこの時期には祭祀の場だったのではないかと考えた（第36図）。なお、第III章で述べたとおり遺構のプランや掘り込みは非常に認識しにくく、遺物の有無や色調及び粘性などを総合的に判断して遺構検出をしている。そのため、SK418・419 のように土坑や性格不明遺構としたが明確な掘り込みが確認できかった遺構も多く、わずかに落ち込んだ自然地形の可能性もある。祭祀の場には土坑は 7 基、掘立柱建物 1 棟、区画溝 2 条、石列 2 基、性格不明遺構 3 基があり、出土遺物（石製品は焼課のみ）の一覧は第19表に示した。なお、北東側の遺構出土遺物は総点数をカウントしていないため「*」で表記している。

SK419 では、上記の非日常的な祭祀遺物は日常的な遺物とともに出土している。中には灯りをともすために使われた須恵器無台杯（184・185）もあるが、この遺構から出土しなければ、日常の器として扱うであろう。須恵器有台杯は須恵器有台杯でしかない。SK419 の遺物が廃棄された状態をとどめていると仮定すると、この遺構から出土したままにこそ意味があるのだと考える。何かを目的に持ち込まれ、何かが行われてこの場所に廃棄された痕跡である。この場所で何が行われたのか、出土遺物を詳細に見ても使用される場面や目的は明瞭でない。この場所自体の意味などを含め考えなければならない。

B 遺跡の性格と位置づけ

本遺跡で出土した遺物は、コンテナ（内寸 54.5×33.6×10.0cm）で 433 箱と水槽（内寸 1.6×1.0×0.6m）2 槽分に及ぶ。そのほとんどが古代の土器であり須恵器が特に多い。産地は阿賀北の窯跡群と新津丘陵窯跡とで 9 割以上を占める。8 世紀後半から 9 世紀初頭が主体であり、3 時期（曾我墓所 I・II・III、IV 期）に分けられる（第VII章第2節 A）。また、複数基検出された建物も切り合いによる新旧関係や出土遺物などから 4 期の変遷が想定された（第VII章第1節 B）。大型の竪穴建物が複数建てられる 1 期、溝で区画された掘立柱建物が建ち祭祀的な様



第36図 調査区北側の祭祀遺跡

相を帯びるⅡ期、小・中型の竪穴建物がわずかにみられるⅢ期、土坑と歓状小溝で構成されるⅣ期である。そして、Ⅱ期の祭祀的な様相は、鳥形製品や横型須恵器環状瓶、鉄製錫杖頭や鉄鋸などが出土した調査区北西側だけでなく、居住域と考えた北東側も含めた調査区北側の広範囲に及ぶと考えた。本遺跡の古代における最終段階は、調査区南側に広がる歓状の小溝が主体となる生産域と考えられ、明確な居住域は検出されていない。Ⅰ期からⅡ期へ移行する過程で居住域が調査区外へと移動したのではないかとも考えられる。そして平安時代の始めころに衰退した後、中世では時期認定まではできない溝状遺構と遺物が調査区南側でごくわずかにみられる。近世になると、調査区南側を中心に井戸や土坑、調査区中央部では大規模な方形区画になる溝状遺構が複数基検出されている。土坑には、埋土に焼土と炭化物が非常に多く含まれ焼骨片や焼成粘土塊、数珠玉や錢貨が出土する墓坑が16基確認された。中には土坑底面に底板が検出されるものもあった(SK15)。墓坑は調査区北側でも検出されており(SK600)、南側だけでなく調査区全体が墓域の一部として利用されていた状況がうかがえる。

今回の調査で得られた圧倒的な物量と、当初から複数の竪穴建物が建てられていることから、阿賀野川沿いに立地する本遺跡は物流の拠点として機能していたと同時に人々が集う場所であったと考える。出土する土器の産地は阿賀北の窯跡群と新津丘陵窯跡が偏りなく見られ(第Ⅷ章第2節A)、土地利用の変遷からⅡ期に何らかの祭祀が行われたと想定される。祭祀の様子が最も明確に残るSK419で使われたのも阿賀北の窯跡群と新津丘陵窯跡で生産された土器・土製品である(1点のみ信濃川右岸の窯跡と推定される須恵器壺(197)がある)。そこには横型須恵器環状瓶や鳥形製品も含まれ、鉄製錫杖頭と鉄鋸などが加わる。そして、SK418の鳥形製品の出土状況が割られたような状態を呈しているのに対し、SK419の横型須恵器環状瓶や灯明に使用された須恵器無台杯(184・185)、須恵器杯蓋(187・191・192)や鳥形製品の頭部(629・630)は割られずに出土している。判断が難しいが、中には190・193・198などのように割られた状態で出土した須恵器もあり、行われた祭祀の様相の違いを示している。

鳥形製品は、窯跡をはじめ官的な色彩をもつ消費遺跡や須恵器生産の工人集落などから多く出土するため、日本海側の秋田県から石川県まで分布する特殊な祭祀具を考える。横型須恵器環状瓶は、成形手法の変化から8世紀を境に広範囲に広まった器形であり、全国的に類例が少ないものの窯跡や埋葬施設、官衙的な施設が想定される遺跡から出土している。鉄製錫杖頭は現在でも使用される仏具の一種である。鉄鋸は、その位置づけが難しく古墳時代に大陸から伝えられた副葬品と、神聖な神の憑代としての祭祀具という側面がある。国内で古代の遺跡から出土する鉄鋸は、石川県寺家遺跡(石川県立埋蔵文化財センター1988ほか)、宮城県の多賀城関連遺跡として知られる東山遺跡(宮城県多賀城跡調査研究所1989)があり、10世紀以降は長野県で墓などの埋葬施設を中心に出土例が増加する。また、時期は明瞭でないが栃木県日光男体山山頂遺跡(日光二荒山神社1963)や福岡県沖ノ島〔第三次沖ノ島学術調査隊1979ほか〕などの祭祀遺跡がある。以上のように、遺跡を特徴づける各遺物は祭祀具であるとともに官衙的・仏教的な色彩をもつ。しかし、調査区からは官衙や寺院などが想定される明確な出土遺物はなく、「奈良時代後半から平安時代初頭に、官衙が関連する仏教を主体とした祭祀が日本海に近い物流拠点で行われたことを示す遺跡である」とまとめられるのかもしれない。

鳥形製品が出土した最北端に秋田県右馬之塗窯跡がある(伊藤2001)。秋田城の窯跡である可能性が指摘されており、秋田城は大陸の渤海国との交易も行われていたと推定される遺跡である(秋田城跡調査事務所2014ほか)。鳥形製品が大陸の工人によって伝えられた可能性が指摘され(望月1998)、長野県の鉄鋸を集めた川崎は、より理解を深めるために東アジア的視点が重要であると指摘している(川崎2015)。また、奈良・平安時代の祭祀について地方・地域社会における律令制祭祀の複雑さや多様性から「とくにこの時期の祭祀は大陸文化・半島文化を考えながら、前後の時代の祭祀の状況を考慮しながら、変革期であることを充分認識して遺跡・遺物を見ていく必要がある」と言うように(相山2004)、ここで行われた祭祀は国内だけでなく大陸の文化も含めて考えることできらに見えてくるのかもしれない。より広い視野が本遺跡を考える上で必要なであろう。今後の課題としたい。

引用・参考文献

- ア 相澤裕子 2013 「下郷南遺跡第1・2次調査」『新潟市文化財センター年報』第2号 新潟市文化財センター
- 会津若松市教育委員会 1994 『会津大戸窯 大戸古窯跡群発掘調査報告書 遺物編』 会津若松市文化財調査報告書第37号
- 青木 敬 2014 「第V章 考察 2環状形土器の変遷と特質」『奈良山発掘調査報告II 一歌姬西須恵器室の調査-』 奈良文化財研究所学報第93冊 独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所
- 青木 敬 2016 「寺院造営技術からみた白鳳」『國學院雜誌』第117卷第12号 國學院大学
- 青木 敬^(は) 2014 『奈良山発掘調査報告II 一歌姫西須恵器室の調査-』 奈良文化財研究所学報第93冊 独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所
- 青森県教育委員会 1988 「李平下原遺跡発掘調査報告書 - 主要地方道大鰐浪岡線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-」青森県埋蔵文化財調査報告書第111集
- 赤羽正春・高橋知之 1994 「横雲バイパス関係発掘調査報告書 上郷遺跡I」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第62集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 秋田市教育委員会 1989 『秋田県秋田市 遺跡詳細分布調査報告書』
- 秋田城跡調査事務所 2014 「秋麻呂くん通信 古代秋田に集った人々」 秋田市教育委員会
- 秋田城跡歴史資料館 2020 「秋麻呂くん通信 つながる海のみち～秋田城と日本海交流～」
- 朝岡政康・丹下昌之^(は) 2009 「手代山北遺跡 第2・3次調査 -市道亀田南線建設事業に伴う手代山北遺跡第2・3次発掘調査報告書-」新潟市教育委員会
- 朝岡政康・諫山えりか 2003 「東回遺跡 即売市場建設に伴う市道東8-273建設事業用地内発掘調査報告書」 新潟市教育委員会
- 朝岡政康^(は) 2010 「三王山遺跡II 第4・7次調査 -新潟市立亀田中学校校舎・体育館改築工事に伴う三王山遺跡第2・4次発掘調査報告書-」新潟市教育委員会
- 浅川滋男^(は) 1998 「先史日本の住居とその周辺」 同成社
- 荒川隆史・加藤 学^(は) 1999 「上信越自動車道関係発掘調査報告書V 和泉A遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 安中哲徳 1999 「上徳山谷山西谷窯跡 辰口丘陵公園第2園地整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-」(財)石川県埋蔵文化財センター
- 飯坂盛泰^(は) 2006 「関越自動車道関係発掘調査報告書 金屋遺跡2」新潟県埋蔵文化財調査報告書第155集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 家田順一郎 1987 「小丸山遺跡 小丸山遺跡緊急発掘調査報告書」 横越村教育委員会
- 諫山えりか 2004 「新潟市木戸遺跡 マンション等建設予定地内発掘調査報告書」 新潟市教育委員会
- 石川県立埋蔵文化財センター 1988 「寺家遺跡発掘調査報告書」 II 能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
- 石川茂雄 1994 「原色日本植物種子写真図鑑」 石川茂雄図鑑刊行委員会
- 石川日出志^(は) 1981 「上野林丘陵埋蔵文化財発掘調査報告書 横峯A遺跡 横峯B遺跡」 安田町文化財調査報告5 新潟県安田町教育委員会
- 石田守之^(は) 2009 「金港遺跡」聖籠町埋蔵文化財調査報告書第4集 新潟県聖籠町教育委員会
- 伊藤武士 2001 「右馬之糸窯跡」『秋田市史』第七巻 古代 史料編 秋田市
- 伊藤 元・豊野潤子 1998 「北日長田遺跡第3次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター報告書第56集 (財)山形県埋蔵文化財センター
- 伊藤秀和 2001 「鬼倉遺跡 -国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書-」加茂市文化財調査報告(13) 新潟県加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2005 「馬越遺跡 -国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書-」加茂市文化財調査報告(14) 新潟県加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2009 「馬越遺跡II -一般国道403号交通連携事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書-」加茂市文化財調査報告(18) 新潟県加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2019 「第5章 古代 第2節 土器・木製容器 第3項 越後平野信濃川右岸」『新潟県の考古学III』 新潟県考古学会
- 伊藤廉倫 1993 「二本松東山遺跡発掘調査報告書」 山武考古学研究所
- 井上雅孝 2002 「賜杖款製品の研究 -北東北における古代祭祀具の一形態-」『岩手考古』14 岩手考古学会

- 井上雅孝 2006 「古代鉄製祭祀具から見た蝦夷の信仰と儀礼－錫杖・三鉛鏡・鉄鐸・錫杖状鉄製品－」『立正史学』第99号 立正大学史学会
- 井上雅孝 2007 「古代蝦夷社会における古密教の受容と展開－錫杖状鉄製品の分析を中心に－」『原始・古代日本の祭祀』(株)同成社
- 猪狩俊哉・橋田健一・名村威彦・片平雅俊 2020 「環状瓶の新2例－ひたちなか市市毛本郷跡と日立市前原跡－」『茨城県考古学協会誌』第32号 茨城県考古学協会
- 今井さやかほか 2007 『日本遺跡 第3次調査 鍋田土地区画整理事業に伴う日本遺跡第3次発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 植木久美子 2002 「北陸の鳥羽須恵器と円面鏡－任海宮田遺跡出土資料の紹介－」『富山考古学研究 紀要第5号』(財)富山県文化振興財團 埋蔵文化財調査研究所
- 上野 章・久々忠義ほか 1982 『富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺跡群 第3・4次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 上野 章ほか 1984 『富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺跡群 第6次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 上野一久・春日真実 1997 『上郷遺跡II 国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書』新潟県埋蔵文化財調査報告書第87集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 宇野隆夫 1992 『食器計量の意義と方法』『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館
- 江口友子ほか 1999 『金塚遺跡 三仏生遺跡 刹目A遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第92集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 遠藤雄雄・澤野慶子ほか 2016 『沖ノ羽道跡VI 第19・22・24次調査－県営ほ場整備事業(担い手育成型)満日地区に伴う沖ノ羽道跡第12・15・17次発掘調査報告書－』新潟市教育委員会
- 遠藤雄雄ほか 2020 『砂崩前郷遺跡 第3次調査－市道砂崩南線建設事業に伴う砂崩前郷遺跡第2次発掘調査報告書－』新潟市教育委員会
- 大熊 孝 1996 『越後平野の治水と河川開発史』『第四紀研究』第35巻第3号 日本国第四紀学会
- 大西 顯・端 猛ほか 2003 『金沢市 戸水C遺跡・戸水C古墳群(第11・12次)』金沢港埠頭用地整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 大家 健 2003 『中世 第三章 第二節「永禄六年北国下りの遺足」にみる中世の旅』『横越町史』通史編 横越町史編さん室・横越町
- 大矢雅彦・加藤泰彦 1984 『阿賀野川水害地形分類図・同説明書』建設省北陸地方建設局・阿賀野川工事事務所
- 大和久震平 1989 『古式の錫杖』『山岳修験』第5号 日本国山岳修験学会
- 大和久震平 1990 『古代山岳信仰遺跡の研究』名著出版
- 大和久震平 1991 『古式錫杖の形式』『帝京短期大学紀要』8号 帝京短期大学
- 岡村 浩 2005 『小林存遺集』横越町
- 小山内透・鳥居達人 1999 『山口館跡発掘調査報告書』宮古市道北部環状線道路改良工事関連発掘調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第310集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 尾崎高宏 2001 『新潟県における古代の鉄生産－鍛冶関連遺構の検討－』『研究紀要』第3号 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 押切智紀・須賀井明子 2007 『庚塙遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第161集 (財)山形県埋蔵文化財センター
- 小田由美子ほか 2006 『上信越自動車道関係発掘調査報告書XVI 滝寺古窯群 大貫古窯群』新潟県埋蔵文化財調査報告書第149集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野本敦・阿部友晴ほか 2017 『柄日本遺跡III』新潟県埋蔵文化財調査報告書第270集 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 温故談話会 1891 『温故之采』第16編
- 温故談話会 1892 『温故之采』第32編
- カ 春日真実 1996 『越後における5世紀から8世紀の堅穴建物の変遷』『新潟考古学談話会会報』第16号 新潟考古学談話会
- 春日真実 1999 『第4章 古代 第2節 土器編年と地域性』『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 春日真実 2001 『第VI章 まとめ 2. 和島・出雲崎地域における7世紀末から10世紀の土器の変遷』『国道116号埋蔵文化財発掘調査報告書 梓子谷窯跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 春日真実 2003 「磐越自動車道関係発掘調査報告書 沖ノ羽遺跡Ⅲ（C地区）」 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について－「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に－」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 春日真実 2007 「越後ににおける古代の煮炊具について」『新潟考古』第18号 新潟県考古学会
- 春日真実 2015 「土器・陶磁器の機能別比率－越後の古墳時代～古代を中心に－」『研究紀要』第8号 （公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2016 「古代越後の竖穴・掘立柱併用建物」『三面川流域の考古学』第14号 奥三面を考える会
- 春日真実 2017 「古代越後の周溝付建物」『三面川流域の考古学』第15号 奥三面を考える会
- 春日真実 2019 「第5章 古代 第2節 土器・木製容器 第1項 土師器・須恵器の器種分類」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 春日真実ほか 1996 「江内遺跡」新潟県埋蔵文化財調査調査報告書第76集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実ほか 1997 「上郷遺跡Ⅱ」新潟県埋蔵文化財調査報告書第87集 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実ほか 2002 「奈良崎遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2001 「日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 松影A遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第106集 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2004 「新潟県における北方系の土師器甕－事例紹介と問題提起－」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 加藤 学ほか 2010 「村前東A遺跡 村前東B遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第223集 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学ほか 2011 「領沢角地遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第225集 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学ほか 2012 「柄目木遺跡Ⅱ」新潟県埋蔵文化財調査報告書第237集 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金内 元ほか 2008 「北前田遺跡Ⅰ 北新田遺跡Ⅰ」新潟県埋蔵文化財調査報告書第197集 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金内 元ほか 2011 「向大浦遺跡 上空野中丸遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第222集 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 上町よろずこと編集委員 2011 「上町よろずこと」横越上町よろず研究会
- 亀田郷土地改良区 1976 『水と土と農民 亀田郷土地改良史』亀田郷土地改良区・新潟日報社
- 亀田町史編さん委員会 1988 『亀田の歴史』通史編上巻 亀田町
- 亀田町史編さん委員会 1990 『亀田の歴史』資料編 亀田町
- 亀田町文化財保護審議会 1982 『ふるさとの地名 亀田』亀田町教育委員会
- 鶴井幸彦・田中里志・安井 賢 2015 「暦年較正年代による新潟砂丘の形成年代の見直し」『第四紀研究』第54巻第3号 日本第四紀学会
- 川上貞雄 1982 「中の山遺跡」亀田町文化財調査報告書2 亀田町教育委員会
- 川上貞雄 1993 「山ん家遺跡 緊急発掘調査報告書」横越村文化財調査報告② 横越村教育委員会
- 川上貞雄 1996a 「金津丘陵製鐵遺跡群 居村B・D地区」新津市教育委員会
- 川上貞雄 1996b 「荒木前遺跡 第2次調査」亀田町文化財調査報告書第4集 亀田町教育委員会
- 川上貞雄 1997 「上浦A遺跡 新津市工業団地第2期工事地内発掘調査報告書」新津市文化財調査報告書 新津市教育委員会
- 川崎 保 2012 「磨形須恵器についての一考察」『古代学研究』第193号 古代学研究会
- 川崎 保 2015 「古代信濃の鉄鋤についての一考察」『信濃』第67巻第10号 信濃史学会
- 川畑 信ほか 2021 「津幡町 加茂遺跡Ⅱ」一般国道8号津幡北ハイバスに係る埋蔵文化財発掘調査報告書2 石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター
- 神田一正 2000 「原始・古代の横越」『横越町史』資料編 横越町史編さん室 横越町
- 神田勝郎 1997 「『中世』横越の風景－阿賀の舟旅をよむ－」神田勝郎

- 木村宗文 1993 「初期莊園の成立」『新津市史』通史編 上巻 新津市史編さん委員会
- 北村 亮ほか 1992 「北陸自動車道関係発掘調査報告書 木崎山遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第28集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 木村理恵 2019 「大漁の生産・流通の変遷について 一重下形縁帶状口縁をもつ大漁を中心にして」『第22回 古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と大漁』奈良文化財研究所研究報告第23集 (独)国立文化財機構 奈良文化財研究所
- 桐原雅史ほか 2008 『大坂上道遺跡Ⅱ 猿顧遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第186集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 久々忠義 1983 「水鳥を形作った須恵器 小杉流通常業団地内遺跡の調査からー』『埋文とやま』第5号 富山県埋蔵文化財センター
- 草野潤平 2017 「駆上遺跡 第2～4・6次発掘調査報告書』(公財)山形県埋蔵文化財センター
- 小池邦明・本間桂吉 1995 『新潟市小丸山遺跡 直り山团地建設事業地内発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 小池義人ほか 1998 『閼川谷内遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第90集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小嶋芳孝 1997 『第4章 古代 第1節 金属製品』『石川県考古資料調査・集成事業報告書 祭祀具Ⅱ』石川考古学研究会
- 小嶋芳孝 2004 「鍔杖状鉄製品と蝦夷の宗教』『アイヌ文化の成立』宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会
- 後藤一雄 2003 『近世 第一章 第三節 汽海藩の成立と村々』『横越町史』通史編 横越町史編さん室・横越町
- 小林昌二編 1996 『越と古代の北陸』名著出版
- 小林 存 1952 『横越村誌』横越公民館
- 小林 弘 2002 『新潟県北蒲原郡豊浦町堤上窯跡採集の鳥形と須恵器』『新潟考古学談話会会報』第24号 新潟考古学談話会
- 小山正忠・竹原秀雄 1967 『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社
- サ 酒井和男 1980 『三王山遺跡発掘調査報告書』亀田町教育委員会
- 酒井和男 2000 『第一章 横越町の遺跡概観』『第二章 考古資料』『横越町史』資料編 横越町史編さん室・横越町
- 坂井秀弥ほか 1982 『栗原遺跡(第4次・第5次発掘調査概報)』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1983 『栗原遺跡(第6次発掘調査概報)』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1984 『上新バイパス関係発掘調査報告1 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1989 『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 新潟県教育委員会・建設省北陸地方建設局新潟国道工事事務所
- 坂井秀弥 1989 『第2章 旧国別における手工業生産の様相 4 越後における古代手工業生産の様相』『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会
- 坂井秀弥 1990 『新潟県三島郡と板町の製鉄遺跡』『新潟考古』第1号 新潟県考古学会
- 菅澤正史ほか 1999 『新潟県上越市上千原地区は場整備事業関連発掘調査報告書 津倉田遺跡』上越市教育委員会
- 菅澤正史 2019 『第5章 古代 第2節 土器・木製容器 第2項 阿賀北』『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 佐藤友子ほか 2010 『一般国道 49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 桜日本遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第216集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤 懇 2013 『倉田遺跡』妙高市埋蔵文化財調査報告書第5集 妙高市教育委員会
- 佐藤雅一 1995 『相吉遺跡』津南町文化財調査報告書第20輯 新潟県中魚沼郡津南町教育委員会
- 佐藤雅一 2008 『大割野谷内田A遺跡 大割野谷内田B遺跡』津南町文化財調査報告書第53輯 津南町教育委員会
- 佐藤雅一ほか 2008 『天狗寺遺跡』津南町文化財調査報告書第57輯 津南町教育委員会
- 佐野大和 1963 『第四章 遺物 10 鉢群』『日光男体山 山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店
- 澤野慶子 2020 『曾我墓所遺跡 一阿賀野川沿いで見つかった古代の掘立柱建物と竪穴状造構群ー』『新潟市遺跡発掘調査速報2019』新潟市文化財センター
- 菅沼 亘ほか 2003 『馬場上遺跡発掘調査報告書』十日町市文化財発掘調査報告書第22集 新潟県十日町市教育委員会
- 柏山林雄 2004 『古代祭祀遺跡の展開』『季刊考古学』第87号 古代祭祀の世界 (株)雄山閣
- 鈴木 晚ほか 2012 『空毛遺跡 発掘調査報告書』経営体育成基盤整備事業 (佐々木南部郷2期地区) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書『新発田市埋蔵文化財調査報告第43』新潟県新発田市教育委員会
- 鈴木俊成ほか 1988 『小出遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集 新潟県教育委員会

- 鈴木良仁・川田嘉信 1995 『北日長田遺跡・横持遺跡・堂田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター報告書第24集（財）山形県埋蔵文化財センター
- 関 雅之 2001 『新潟県新発田市馬見坂遺跡出土の土師器－阿賀北地方の7世紀の土師器様相とその意義－』『北越考古』第12号 北越考古学会
- 曾我廣見 1973 『横越村の民俗』
- 曾我廣見 1984 『横越村地名考』 横越村
- タ 第三次沖ノ島学術調査隊 1979 『宗像 沖ノ島』 I 本文 II 図版 III 史料 宗像大社復興期成会
- 高桑 登・菅原哲文 2004 『小田島城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター報告書第131集（財）山形県埋蔵文化財センター
- 高野宏丈・村田晃一ほか 1989 『東山遺跡II』 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第13集 宮城県多賀城跡調査研究所・宮城県文化財保護協会
- 高橋健自 1911 『古式の鍋柱』『考古学雑誌』第1巻第7号 考古学会
- 高橋 保ほか 1993 『八幡林遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第2集 新潟県和島村教育委員会
- 高橋 保ほか 2008 『寺前遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第198集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 勉 1984 『栗原遺跡 第7次・第8次発掘調査報告書』新井市教育委員会
- 高橋 勉 1989 『杉明遺跡発掘調査報告書』新井市教育委員会
- 高橋保雄ほか 2006 『上野東遺跡 現明嶽遺跡1』新潟県埋蔵文化財調査報告書第160集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄ほか 2010 『山口遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第215集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 2021 『道正遺跡・岡崎遺跡』『新潟市遺跡発掘調査速報2020』新潟市文化財センター
- 滝沢規朗 2019 『第4章 古墳時代 第2節 土器 第1項 前期』『新潟県の考古学III』新潟県考古学会
- 武田健次郎ほか 2007 『任海宮田遺跡発掘調査報告II－公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VII－』富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第34集（財）富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 龍田優子 2020 『新潟市 曾我墓所遺跡』『新潟県考古学会 2020年度秋季シンポジウム・第32回大会研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 龍田優子 2021a 『曾我墓所遺跡－阿賀野川沿いにある交通の要所－』『新潟市遺跡発掘調査速報2020』新潟市文化財センター
- 龍田優子 2021b 『新潟市 曾我墓所遺跡の調査成果』『新潟県考古学会 第33回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 龍田優子ほか 2015 『下新田遺跡 第6・8・9次調査 一県営ほ場整備事業(経営体育基盤整備型)道上地区に伴う第3・5・6次発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 田中久夫ほか 1996 『新潟砂丘の形成史』『第四紀研究』35(3) 日本国第四紀学会
- 田中 琢・田沼昭三 1977 『作品解説』『日本陶磁全集』4須恵器 中央公論社
- 田中 靖 1994 『八幡林遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第3集 新潟県和島村教育委員会
- 田中 靖 2005 『八幡林遺跡IV』和島村埋蔵文化財調査報告書第16集 新潟県和島村教育委員会
- 田中 靖(ほか) 2007 『土用木西遺跡』新潟県長岡市内ブール建設に伴う埋蔵文化財報告書 新潟県長岡市教育委員会
- 田沼昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 田畠 弘 1994 『道下・白地遺跡 大正川筋小規模河川改修事業及び道路新設事業埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』田上町埋蔵文化財調査報告書第4集 田上町教育委員会
- 千葉英一 1977 『新潟県南蒲原郡下田村東晉前谷塙整備地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 南中赤坂遺跡・南中五輪峠遺跡・飯田五輪峠遺跡』下田村文化財調査報告書第7 新潟県下田村教育委員会
- 立木宏明ほか 2009 『萱免遺跡 第2次調査 一宅地造成に伴う萱免遺跡第2次発掘調査報告書－』新潟市教育委員会
- 立木宏明・相澤(高野)裕子ほか 2014 『細池寺道上遺跡III 第26次調査 一県営ほ場整備事業(担い手育成型)両新地区に伴う第12次発掘調査報告書－』新潟市教育委員会
- 立木宏明・奈良佳子ほか 2017 『細池寺道上遺跡VI 第44次調査 一県営ほ場整備事業(担い手育成型)両新地区に伴う細池寺道上遺跡第19次発掘調査報告書－』新潟市教育委員会
- 立木宏明・奈良佳子ほか 2018 『細池寺道上遺跡VII 第46次調査 一県営ほ場整備事業(担い手育成型)両新地区に伴う細池寺道上遺跡第21次発掘調査報告書－』新潟市教育委員会

- 立木（土橋）由理子ほか 1999 「牛道遺跡 国道 49 号横雲バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 91 集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 津野 仁 2017 「古代須恵器大甕の耐久－一板木県域の事例から－」『研究紀要』第 25 号 (公財)とちぎ未来づくり財團 埋蔵文化財センター
- 鶴巻康志 1998 「市道関係道路発掘調査報告書 山王遺跡第 1・2 次調査 松崎遺跡 岡塚館跡」新潟市埋蔵文化財調査報告書第 19 号 新潟県新発田市教育委員会
- 出越茂和ほか 1989 「金沢市末塙跡群」金沢市文化財紀要 76 金沢市、金沢市教育委員会
- 土肥富士夫・近間 強 1985 「池崎塙跡 転作促進対策特別事業（転換水田整備事業）に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」七尾市埋蔵文化財調査報告第 4 号 七尾市教育委員会
- 土肥富士夫ほか 1989 「史跡 能登国分寺跡－第五・六・七次発掘調査報告書－」七尾市埋蔵文化財調査報告第 10 号 七尾市教育委員会
- 東京国立博物館・中日新聞社 1983 「韓國古代文化展－新羅千年の美－」中日新聞社
- 田海義正ほか 2015 「山口野中遺跡Ⅱ」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 258 集 新潟県教育委員会・(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 時枝 邦 1991 「日光男体山頂遺跡出土遺物の性格－新資料を中心として－」『MUSEUM』No.479 ミュージアム出版
- 柄木英道・大西 順ほか 2000 「金沢市戸戸C 遺跡・戸戸C 古墳群（第 9・10 次）」(財)石川県埋蔵文化財センター
- 戸根与八郎ほか 2010 「北前田遺跡II 野畔遺跡II 調査前遺跡 北新田遺跡II 中田原遺跡II 石ノ原遺跡II」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 212 集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由理子 2005 「蛇谷遺跡 崖岸遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 151 集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由理子ほか 2007 「一般国道 49 号線亀田バイパス関係発掘調査報告書I 城所道下遺跡・武左衛門裏遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 177 集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由理子ほか 2009 「一般国道 49 号線亀田バイパス関係発掘調査報告書II 西郷遺跡・大蔵遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 200 集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ナ 長澤辰生ほか 2004 「能代川関係発掘調査報告書VI 中田遺跡」五泉市文化財報告 (13) 五泉市教育委員会
- 名村威彦 2017 「環状瓶の製作技術とその系譜」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第 9 号 広島大学大学院文学研究科考古学研究室
- 名村威彦・野島 永・津牧伸吉 2017 「広島大学考古学研究室所蔵遺物の紹介－環状瓶と鳥形瓶－」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第 9 号 広島大学大学院文学研究科考古学研究室
- 名村威彦 2020a 「古墳築造終焉後の環状瓶（上）」『京都府埋蔵文化財情報』第 137 号 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 名村威彦 2020b 「古墳築造終焉後の環状瓶（下）」『京都府埋蔵文化財情報』第 138 号 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 名和達朗・水戸弘美 1992 「山海窯跡群第 2 次 山橋 7・8 遺跡 山橋跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第 172 集 東北農政局 山形県教育委員会
- 新潟県寺院名鑑企画編集委員会編 1983 「新潟県寺院名鑑」新潟県寺院名鑑刊行会
- 新潟市 2007 「新・新潟歴史双書 2 新潟市の遺跡」(株)文久堂
- 新潟市 2011 「新・新潟歴史双書 6 新潟砂丘」(株)文久堂
- 新潟市合併町村史編集室 1986 「新潟市合併町村の歴史 新潟原都から合併した町村の歴史（下）一島屋野・石山・曾野木・岡川・大江山」第 4 卷 新潟市合併町村史編集室
- 新潟市教育委員会 1987 「大江山地区的遺跡」新潟市文化財調査報告書
- 新潟市文化財センター 2021 「新潟県新潟市 曽我墓所遺跡」『文化財発掘出土情報 2021.4』第 479 号 (株)ジャパン通信情報センター
- 新潟市文化財センター 2023 「2023 年度 新潟市文化財センター 企画展 1 展示解説パンフレット 新たに探る新潟市の遺跡－織文時代の平道跡と古代の岡崎・道正遺跡－」
- 日光二荒山神社 1963 「日光男体山 山頂遺跡発掘調査報告書」角川書店
- 日本考古学会新潟大会実行委員会 1993 「東日本における古墳出現過程の再検討」
- 野尻 侃・佐藤義春 1996 「北日長田遺跡・植待遺跡第 2 次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター報告書第 31 集 (財)山形県埋蔵文化財センター

- 野水晃子ほか 2003 「能代川関係発掘調査報告書」新保北遺跡』五泉市教育委員会
- 野村忠司ほか 2009 『子安遺跡』上越市教育委員会
- 八 泰繁治 1993 『古町B遺跡発掘調査報告書』吉川町教育委員会
- 原 明芳 1996 『信濃の鉄跡』『信州の人と鉄』信濃毎日新聞社
- 兵庫県教育委員会 1994 『ひょうごの遺跡』兵庫県埋蔵文化財情報 14号
- 広沢 康・中川浩宣 2000 「中世の横越」『横越町史』資料編 横越町史編さん室・横越町
- 廣野耕造 1997 『篠山前遺跡・神明社裏遺跡・城山遺跡』新潟市教育委員会
- 廣野構造・朝岡政康 1999 『大瀬遺跡 宅地開発事業に伴う発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 福田仁史 1999 『第5章 第6節 第8項 越後沢海藩主溝口政義の墓』『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 文化庁文化財部記念物課 2010 『第VI章 遺構の記録』『発掘調査のてびき 一集落遺跡発掘編』
- 帆刈喜久男 2000 『近世の横越』『横越町史』資料編 横越町史編さん室・横越町
- 帆刈喜久男 2003 『第四章 文化 第一節 第一項 横越の寺院』『横越町史』通史編 横越町史編さん室・横越町
- マ 丸山一昭 2019 『第5章 古代 第2節 土器・木製容器 第4項 島崎川・西川流域』『新潟県の考古学III』新潟県考古学会
- 水澤幸一 2011 「古式鍛冶考 一日光男体山山頂遺跡出土鋸杖の位置付けをめぐってー」『経塚考古学論叢』岩田書院
- 水戸部秀樹ほか 2015 『西谷地b遺跡 第1・2・2次発掘調査報告書』(公財)山形県埋蔵文化財センター
- 南 恵一 2003 『近世 第一章 第一節 新発田領の成立と村々』『横越町史』通史編 横越町史編さん室・横越町
- 南 恵一 2003 『近世 第三章 第三節 第一項 街道と櫓所』『横越町史』通史編 横越町史編さん室・横越町
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1989 『東山遺跡II』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第13冊 宮城県文化財保護協会
- 宮城県東松島市教育委員会 2010 『矢本横穴墓群II 一飛島・奈良時代における社庭地方の墓ー』東松島市文化財調査報告書第7集
- 三宅敏之 1963 『第四章 遺物 3 鋸杖頭 附仏像形杖頭』『日光男体山 山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店
- 宮本長二郎 1996 『日本原始の住居建築』中央公論美術出版
- 宮本長二郎 2002 『古代末から中世の住居建築』秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第16号 秋田県埋蔵文化財センター
- 望月精司 1997 『第4章 古代 第4節 特殊土製品』『石川県考古資料調査・集成事業報告書 祭祀具II』石川考古学研究会
- 望月精司 1998 『額見町遺跡(額見町遺跡A地区) 串・額見地区土地区画整理事業関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書 -1-』石川県小松市教育委員会
- 望月精司・大橋由美子 1999 『額見町遺跡(額見町遺跡B地区) 串・額見地区土地区画整理事業関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書 -2-』石川県小松市教育委員会
- 望月精司 2002 『二ツ梨一貫山窯跡 一日本自動車博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』小松市教育委員会
- 望月精司ほか 2006 『額見町遺跡I (A・D地区の調査) 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -1-』小松市教育委員会
- 望月精司ほか 2007 『額見町遺跡II (B地区及びC地区一部区域の調査) 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -2-』小松市教育委員会
- 望月精司ほか 2011 『額見町遺跡VI (製鉄・鍛冶関連遺物の報告)』小松市教育委員会
- 森内秀造・深江英憲 1999 『兵庫県加古川市所在 白沢3・5号窓 -山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXIX-』兵庫県文化財調査報告第184冊 兵庫県教育委員会
- 森 正 1990 『阿婆田窯跡群の発掘調査』『京都府埋蔵文化財情報』第36号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 森 正 1991 『(1)阿婆田窯跡群』『京都府遺跡調査概報』第44冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- ヤ 柳内壽彦 1995 『鳥形須恵器 -大戸窯跡群の表面採集遺物より-』『会津地域史研究ノート』
- 山賀和也ほか 2016 『上条高畑土地区画整理事業及び浜療法人立川メディカルセンター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県長岡市教育委員会
- 山賀和也ほか 2018 『岩野原窯跡 -国営越後丘陵公園開拓整備事業に伴う確認調査報告書-』新潟県長岡市教育委員会
- 山崎忠良 2005 『東原町遺跡 下沖北遺跡23』新潟県埋蔵文化財調査報告書第140集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎忠良 2017 『新潟県の古代の竪穴建物について』『三面川流域の考古学』第15号 奥三面を考える会

- 山崎忠良 2019 「第5章 古代 第3節 集落 第2項 建物跡」『新潟県の考古学III』 新潟県考古学会
- 山本 審(せん) 1985 『金屋遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第37 新潟県教育委員会
- 横越町 2000 『横越町史』資料編 横越町史編さん室・横越町
- 横越町 2003 『横越町史』通史編 横越町史編さん室・横越町
- 吉井雅勇 1993 『坂町宮ノ腰B道跡 カントリーエレベーター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』荒川町埋蔵文化財発掘調査報告第1集 新潟県荒川町教育委員会
- 吉井雅勇 2000 『坂町宮ノ腰D道跡 公共下水道最終処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』荒川町埋蔵文化財発掘調査報告第6集 新潟県荒川町教育委員会
- 吉井雅勇 2001 『田島遺跡 純営園場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III』荒川町埋蔵文化財発掘調査報告第7集 新潟県荒川町教育委員会
- 吉井雅勇 2003 『田屋遺跡・坂町宮ノ腰C道跡 町道西大通線建設および純営園場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IV』荒川町埋蔵文化財発掘調査報告第10集 新潟県荒川町教育委員会
- 吉井雅勇 2007 『荒川町道端遺跡出土の精円礎について 一古墳時代中後期の編物石錐の出土例ー』『新潟考古学談話会報』第33号 新潟考古学談話会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉岡弘文館
- 吉川久 2008 『三和中部第1地区埋場整備事業地内発掘調査報告書 越中田遺跡・十二浦遺跡』上越市教育委員会
- 吉田江美子 2004 『鳥形須恵器について』『山形考古』第7巻第4号 山形考古学会
- 吉田博行(よしむか) 2014 『花畠遺跡 会津坂下町内遺跡発掘調査報告書VI』福島県河沼郡会津坂下町教育委員会
- ワ 渡邊朋和(わたなべ ともかず) 1998 『金津丘陵製鉄跡群発掘調査報告書IV(分析・考察編)』新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1993 『新津市草木町(くそうちばくちょう)2丁目窯跡』『新潟県考古学会連絡紙』第18号 新潟県考古学会
- 渡邊裕之 2005 『台の上遺跡 略ノ上遺跡 五反田遺跡3』新潟県埋蔵文化財調査報告書第138集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 渡辺 誠 1981a 「もじり編み用木製鍼の考古資料について」『考古学雑誌』第66巻第4号 日本書学会
- 渡辺 誠 1981b 「編み物用鍼具としての自然石の研究」『名古屋大学文学部研究論集LXXX』名古屋大学文学部
- 渡辺ますみ 1991 『荒木前遺跡』亀田町文化財調査報告書第3集 亀田町教育委員会
- 渡辺ますみ(はな) 1994 『緒立C道跡発掘調査報告書』黒崎町教育委員会
- 渡邊ますみ(はな) 2009 『駒首湯遺跡 第3・4次調査 一小型小売店舗建設に伴う駒首湯遺跡第3・4次発掘調査報告書ー』新潟市教育委員会
- 渡邊ますみ(はな) 2012 『四十石道跡 第2次調査(仮称)新赤塚埋立処分地整備工事に伴う四十石道跡第2次発掘調査報告書』新潟市教育委員会・新潟市文化財センター
- 渡邊美穂子 2001 『坂ノ沢C道跡II(平安時代編)県営広域農業農地整備事業(北蒲原東部地区)関係 発掘調査報告書』新発田市埋蔵文化財調査報告第23-2 新潟県新発田市教育委員会

第VI章

- ア 阿部 永 1994 『日本の哺乳類』東海大学出版会 195p
- イ 伊東隆夫 1995 『日本産広葉樹材の解剖学的記載I』『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 pp.81-181
- 伊東隆夫 1996 『日本産広葉樹材の解剖学的記載II』『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 pp.66-176
- 伊東隆夫 1997 『日本産広葉樹材の解剖学的記載III』『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 pp.83-201
- 伊東隆夫 1998 『日本産広葉樹材の解剖学的記載IV』『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 pp.30-166
- 伊東隆夫 1999 『日本産広葉樹材の解剖学的記載V』『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 pp.47-216
- 伊東隆夫・山田昌久 2012 「木の考古学」『出土木製品用材データベース』海青社 444p
- カ 春日真実 2008 「越後における古墳時代～中世の柱材について」『新潟考古』19 新潟県考古学会 pp.43-74
- 金子清俊・谷口博一 1987 「線形動物・扁形動物」『新版臨床検査講座8 医動物学』医歯薬出版 pp.9-55
- 金原正明 1993 『花粉分析法による古環境復原』『新版古代の日本第10巻 古代資料研究の方法』木下正史編 角川書店 pp.248-262
- 金原正明 1999 「寄生虫」『考古学と自然科学2 考古学と動物学』同成社 pp.151-158
- 金原正明・金原正子 1992 「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の梗所遺構—藤原京7条1坊—』奈良国立文化財研究所 pp.14-15
- 金原正明・金原正子 1993 「石棺内の花粉分析および消化管内残渣の分析」『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所 pp.18-26

- 金原正明・福富恵津子・金原正子 2005 「喪石の基礎的研究」 日本文化財科学会 第22回 pp.118-119
- 金原正明・金原正子・松井章 2012 「寛永寺徳川將軍族遺体に由来する環境考古学的分析」『東叡山寛永寺徳川將軍家御方靈廟第三回』寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編 吉川弘文館 pp.428-440
- 金原正明・金原正子 2013 「植生と農耕における土壤層分析の実証的研究」『日本文化財科学会第30回大会研究発表会要旨集』 pp.112-113
- 金原正明・金原正子 2015 「堆積物と植物遺体の総合的研究」『日本文化財科学会第32回大会研究発表要旨集』 pp.146-147
- シ 烏倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 大阪市立自然科学博物館 60p
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 「図説 木材組織」 地球社 176p
- ス 杉山真二 2000 「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』辻誠一郎編 同成社 pp.189-213
- 杉山真二 2009 「植物珪酸体と古生態」『縄文時代の考古学3 人と植物の関わりあい④ 大地と森の中で—縄文時代の古生態系—』小杉康ほか編 同成社 pp.105-114
- 杉山真二 2017 「植物珪酸体分析による古環境推定—タケア科の植生変遷と気候および積雪量の変動—」『文化財学研究』2 文化財技術研究会編 pp.1-14
- 杉山真二・藤原宏志 1986 「繊毛細胞珪酸体の形態によるタケア科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—」『考古学と自然科学』19 日本文化財科学会 pp.69-84
- 鈴木貞雄 1996 「タケ科植物の概説 日本タケ科植物図鑑」 聚衆書林 pp.8-27
- ツ 辻誠一郎 1984 「栃木県南部、二ノ宮町における立川期の植物遺体群集」『第四紀研究』23 日本第四紀学会 pp.21-29
- ト 土質工学会編 1979 「土質試験法」 pp.2-5-1 ~ 2-5-23 pp.4-2-1 ~ 4-3-11
- ナ 中村 純 1967 「花粉分析」 古今書院 pp.82-102
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について。とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として」『第四紀研究』13 日本第四紀学会 pp.187-193
- 中村 純 1977 「稻作とイネ花粉」『考古学と自然科学』10 日本文化財科学会 pp.21-30
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標識」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集 91p
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の¹⁴C年代』日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編 日本第四紀学会 pp.3-20
- 中村俊夫 2003 「放射性炭素年代測定法と曆年代較正」『環境考古学マニュアル』 同成社 pp.301-322
- ハ 林 昭三 1991 「日本産木材」『頑微鏡写真集』 京都大学木質研究所
- フ 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) —数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9 pp.15-29
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) —プラント・オパール分析による水田址の探し出し—」『考古学と自然科学』17 pp.73-85
- マ 松井 章 2008 「動物考古学」 京都大学学術出版会 312p
- 松井 章・西本豊弘 1999 「考古学と動物学」 同成社 210p
- ム 室井 翠 1960 「竹籠の生態を中心とした分布」『富士竹類植物園報告』5 富士竹類植物園 pp.103-121
- B Bronk Ramsey, C. et al. 2001 'Wiggle matching' radiocarbon dates, Radiocarbon, 43 (2A) pp.381-389
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates, Radiocarbon, 51 (1), pp.337-360
- P Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard 1992 Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science, 19, pp.231-245
- R Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere Radiocarbon Age Calibration Curve (0-55cal kBP) Radiocarbon, 62 (4), pp.725-757
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006 『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社 70p
- [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification]
- S Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion : Reporting of ¹⁴C data Radiocarbon, 19 (3) pp.355-363
- W Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修) 海青社 122p
- [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]

中世道場計測表

卷之三

別表2 土器觀察表

以上は土器：陶器に於て記載してあるため、ここでは主たる通称名・グリッドのみ記した。

当 有：當内に含まれる概要などについて記した。石＝石英岩、長＝長石、雲＝長石母岩あるいは黒雲母、チャ＝セライト、焼＝燒土器、白＝白色凝灰岩、角＝角閃石、青＝海綿骨灰。

分 類：第五章に記した。

道：「新規 想像土色點」(小山・竹原1967) の土色名のみ記した。

形：「新規 形態土色點」(小山・竹原1967) の形態名のみ記した。網羅的な記載は行っていない。底部の「希少」・「ヘラ切り」はいずれも回転台を用いたものである。回転方向は回転台の回転方向を表す。

内 容：36部の発見地を示した。

測定番号 No. No.	产地 Locality	出土位置 Site Loc.	法線 Normal	断面 Section	形状 Shape	分類 Category	表面 Surface	製作船・手法 Manufacturing Boat & Method		地質 Geology	付着物等 Associated Objects	備考 Remarks
								外面 Exterior	内面 Interior			
73 61 1 SSK84 22AH18	1 土地部 焼		19.0		直 G-長	△-凹-圓	ヨコナナ	ヨコナナ		4	スヌ	2と同一色
73 61 2 SK84 22AH18	1 土地部 焼		2.4		輪 G-長・角	丸白	ハケナ	ナナ		36		1と同一色
73 61 3 SK125 17AQ1	1 土地部 焼		19.0		輪 G-長・ナ	△-凹-圓	ナナ	ナナ		7		
73 61 4 SK299 23AG24	1 土地部 白	(10.0)			直 G-白	明赤端	ミガキ	ミガキ、ナナ		1		受取済用 既使用済み
73 61 5 SK40 16AQ21	1 土地部 焼		21.6		直 G-長・直	丸白	ヨコナナ	ハ タケナ		8		
73 61 6 24AK25 IV	1 土地部 焼		3.4		直 G-直	直面	ケツリナ	タヂカ		30		第1次調査 Z1
73 61 7 SK65 17AQ19	1 土地部 無釉	AII	13.3	9.2	3.5 直 G-白	C 黒	ロクロナ	ロクロナ	ヘラ切り	6	3.36	
73 61 8 SK65 17AQ15	1 土地部 無釉	BII	13.9	10.4	3.3 直 G-長・白	A 黒	ロクロナ	ロクロナ	ヘラ切り後子 ダ	6	30.36	地盤や下 段
73 61 9 SK65 17AQ20	1 土地部 無釉	BII	12.0	9.8	3.3 直 G-白	C 黒	ロクロナ	ロクロナ	ヘラ切り後子 ダ	6	14.15	
73 61 10 SK65 17AQ20	1 土地部 無釉	AII	11.8	7.8	3.7 輪 G-長・直	C 黒	ロクロナ	ロクロナ	ヘラ切り後子 ダ	6	18.20	柱人有り 底盤内に ハマガリ等 倒壊千段
73 61 11 SK65 17AR6	1 土地部 無釉	BII	13.0	9.2	3.2 直 G-白	C 黒	ロクロナ	ロクロナ	ヘラ切り	7	10	
73 61 12 SK65 17AQ10	1 土地部 無釉		9.8		直 G-長・白	A 黒	ロクロナ	ロクロナ	ヘラ切り後子 ダ	6	14	
73 61 13 SK65 17AQ15	1 土地部 無釉		8.8		直 G-長	C 黒	ロクロナ	ロクロナ	ヘラ切り後子 ダ	6	10	
73 61 14 SK65 17AQ18-19	1 土地部 有釉	AII	11.8	5.3	4.0 直 G-長・白	C 黒	ロクロナ	ロクロナ	ヘラ切り後子 ダ	6	10.14	底盤外に ハマガリ等
73 61 15 SK65 17AR21	1 土地部 有釉	AII	13.0	8.6	4.0 直 G-白	A 黒	ロクロナ	ロクロナ	ヘラ切り後子 ダ	7	13	
73 61 16 SK65 17AQ10	1 土地部 有釉	AII	11.8	7.8	3.9 直 G-白	C 黑	ロクロナ	ロクロナ	ヘラ切り	6	14.35	薄 壁
73 61 17 SK65 17AQ17	1 土地部 砂基	II	13.2		2.6 直 G	C 黑	ロクロナ	ロクロナ	ヘラ切り後子 ダ	12	自然崩	
73 61 18 SK65 17AQ18	1 土地部 砂基	II	12.8		2.8 直 G-白	A 黑	ロクロナ	ロクロナ		6	14	
73 61 19 SK65 17AQ19	1 土地部 砂基				直 G-長・白	A 黑	ロクロナ	ロクロナ		6		
73 61 20 SK65 17AQ15	1 土地部 砂基				直 G-白	C 黑	ロクロナ	ロクロナ		6		
73 61 21 SK65 17AQ19	1 黒色 磁		8.0		輪 G-直・直	黑	ミガキ	ミガキ	ミガキ	6	10	中空白色 無釉色
73 61 22 SK65 17AQ15-19	1 黑色 砂基		14.7		3.3 輪 G-直・直	黑	ミガキ	ミガキ	ミガキ	6		内空白色 無釉色
74 61 23 SK65 17AR11	1 土地部 磁				直 G-長・白	C 黑	カキメ	カキメ	底盤内に残 留したロクロナ 等			自然崩
74 61 24 SK65 17AQ14	1 土地部 磁		10.8		直 G-白	C 黑	ロクロナ	ロクロナ		6		自然崩
74 61 25 SK65 17AQ15	1 土地部 小底	BII	15.0		直 G-白・角	C 黑	カキメ	カキメ	ヘラ切り後子 ダ	7	スヌ	コゾエ
74 61 26 SK65 18AO6	1 土地部 無釉	III(13.4)	10.0	3.3	輪 G-長・白	C 黑	ロクロナ	ロクロナ	ヘラ切り後子 ダ	2	6	
74 61 27 SK103 18AN09	1 土地部 無釉	AII	13.2	10.0	3.7 輪 G-白・角	A 黑	ロクロナ	ロクロナ	ヘラ切り	6	5	
74 61 28 SK103 18AO6	1 土地部 磁				直 G-白	不明	カキメ	カキメ	ナザカカミ			
74 62 29 SK103 18AO13	1 土地部 磁				直 G-長・白	不明	カキメ	カキメ	ナザカカミ			
74 62 30 SK103 18AO14	1 土地部 磁				輪 G-白	不明	カキメ	カキメ	ナザカカミ			
74 62 31 SK103 18AO15	1 土地部 小底	B	7.8		直 G-長・白	不明	カキメ	カキメ	ナザカカミ			
74 62 32 SK103 18AO16- g.12	1 土地部 有釉	AII	13.4	7.5	16.9 直 G-長・白	C 黑	ヨコナナ	ヨコナナ	ヘラ切り後子 ダ	12.29	スヌ	コゾエ
74 62 33 SK103 18AO14	2 土地部 無釉	BII	13.6	10.6	3.4 直 G-長・白	A 黑	ヨコナナ	ヨコナナ	ヘラ切り後子 ダ	30.36		
74 62 34 SK103-1114 18AO1	1 土地部 有釉	AII	13.6	8.2	3.7 直 G-長・白	A 黑	ヨコナナ	ヨコナナ	ヘラ切り後子 ダ	7	15	
74 62 35 SK103 18AO18	1 土地部 有釉	BII(10.2)	8.0	3.5 直 G-長・白	A 黑	ヨコナナ	ヨコナナ	ヨコナナ	ヨコナナ	6	1.27	自然崩 自然崩
74 62 36 SK103 18AO18	1 土地部 有釉	AII	14.0	6.6	3.8 直 G-長・白	C 黑	ヨコナナ	ヨコナナ	ヨコナナ	5	3	
74 62 37 SK103 18AO14	1 土地部 有釉				直 G-長・白	C 黑	ヨコナナ	ヨコナナ	ヨコナナ	6	17	
74 62 38 SK103 18AO19	1 土地部 磁	A	9.4		輪 G-長・白	不明	ナザ	ナザ	ナザ	9		
74 62 39 SK103 18AO9	1 土地部 小底	AII	16.0		直 G-角	不明	ヨコナナ	ヨコナナ		3	スヌ	コゾエ
74 62 40 SK103-1211 18AO8	2 土地部 磁	BII	17.8		直 G-長・白	C 黑	ヨコナナ	ヨコナナ		4		
75 62 41 SK181 18AQ10	1 土地部 有釉		7.1		輪 G-白・直	C 黑	ヨコナナ	ヨコナナ	ヘラ切り	6		
75 62 42 SK181 18AQ8	1 土地部 磁		(12.2)		直 G-長・白	C 黑	ヨコナナ	ヨコナナ	ヨコナナ	6.26		内面にヘラ 等
75 62 43 SK181 18AQ11	1 土地部 小底	BII	14.0		直 G-長・白	穀	ヨコナナ	ヨコナナ	ヨコナナ	4		コゾエ
75 62 44 SK181-18AQ10	2 土地部 磁	AII	36.0		輪 G-長・チ・ 直 G-長・チ・ 直 G-長・チ	白	ナナ	ナナ	ナナ	6	スヌ	
75 62 45 SK181- PBI 18AQ8	1 土地部 小底	B	7.7		輪 G-チ・ 直 G-チ・ 直 G-チ	穀	ヨコナナ	ヨコナナ	ナナ	10	スヌ	
75 62 46 SK207 17AP22	1 土地部 磁	I	15.5	3.4	直 G-長・直	D 面	ヨコナナ	ヨコナナ	ヨコナナ	6.26		内面にヘラ 等
75 62 47 SK207 18AP2	1 土地部 磁		9.0		直 G-白	C 黑	ヨコナナ	ヨコナナ	ヨコナナ	6	19	自然崩
75 62 48 SK207 17AP23	1 土地部 小底	AII(15.0)			直 G-直・角	C 黑	ヨコナナ	ヨコナナ	ヨコナナ	2	スヌ	コゾエ
75 62 49 SK451 17AP4	1 土地部 無釉	BII	13.9	9.7	3.8 直 G-白	C 黑	ヨコナナ	ヨコナナ	ヘラ切り後子 ダ	12.26	自然崩	
75 62 50 SK451 17AP5	1 土地部 無釉	BII	13.1	9.2	4.0 直 G-長・直	A 黑	ヨコナナ	ヨコナナ	ヘラ切り後子 ダ	5	36	

固有 名前 固有 名前 番号 No.	固有 名前 固有 名前 番号 No.	上山松				樹高 木径 cm	分類 木径 木高 cm	赤皮				割合率・手法		固有 名前 番号 No.	固有 名前 番号 番号 No.	付生物 内面	備考
		直径 cm	木径 cm	樹高 cm	形状・含有物 分類			外表面 色調	内面 色調	割合率 %	手法	外表面 色調	内面 色調				
75 63 51 SB451 17AP10	1	底地路 無白材 AII	13.8	10.3	4.3	哲 G・白	A 白皮	クロロナデ	ヘラ刈り	6	20	自然林	赤木青い 成木不良				
75 63 62 SB451 17AP10	1	底地路 無白材 AII	13.8	10.0	4.1	哲 G・白	C 白皮	クロロナデ	ヘラ刈り	6	21	自然林	成木不良				
75 63 53 SB451 17AP4	1	底地路 無白材 BII	13.2	8.7	3.8	哲 G・白	A 白皮	クロロナデ	クロロナデ	6	27	36					
75 63 54 SB451 17AP20	1	底地路 無白材 BII	14.2	9.0	3.7	哲 G・白・無	C 白皮	クロロナデ	ヘラ刈り	6	19	22					
75 63 65 SB451 17AP10	1	底地路 無白材 AII	13.6	9.3	3.4	哲 G・白	C 白皮	クロロナデ	クロロナデ	6	22	30					
75 63 51 SB451 17AP15	1	底地路 無白材 BII	13.7	8.9	3.8	哲 G・白・無	C 白皮	クロロナデ	クロロナデ	6	23	36					
76 63 57 SB451 17AP10	1	底地路 有白材 X	15.8	9.5	7.1	哲 G・白・白	C 白皮	クロロナデ	クロロナデ	6	23	36	自然林	底部根部			
76 63 58 SB451 17AP14-20	1	底地路 有白材 AII	15.1	9.0	4.0	哲 G・白・白	C 白皮	クロロナデ	クロロナデ	6	6	22					
76 63 59 SB451 17AQ6	1	底地路 种苗	1	1.57	—	哲 G・白・白	C 白皮	クロロナデ	クロロナデ	6	20		地表平丘				
76 63 60 SB451 17AP20	1	底地路 植被	18.0	—	—	哲 G・白	不规则	クロロナデ	クロロナデ	6	3						
76 63 61 SB451 17AP20	1	黑色 植	16.0	—	—	哲 G・白	浅黄	コロナデ	ガサギ	3			内面と外縁 の緑葉の色				
76 63 62 SB451 17AP9-10	1	上部路 路	—	9.3	—	哲 G・白・白	浅黄	クロロナデ	クロロナデ	6	21		内面表面				
76 63 63 SB451 17AP5	1	上部路 路 B	22.4	—	—	哲 G・白・白	シノイチ	コロナデ, ハナコロナデ	ハナコロナデ, ハナコロナデ	4	6	22	土壤内外 の緑葉の色				
76 63 64 SB451 17AP14	1	底地路 路	12.9	5.8	10.8	哲 G・白・白	D 植被	クロロナデ	クロロナデ	6	30	15	自然林 (自然林 へ移り) みる 風景				
76 64 65 SB451 17AP10	1	底地路 矢箇帶	11.6	—	—	哲 G・白・白	C 白皮	クロロナデ, タタキナデ	クロロナデ	16							
76 64 66 SB451 17AP20	1	底地路 痘 II	24.0	—	—	哲 G・白	C 白皮	クロロナデ, タタキナデ	クロロナデ, タタキナデ	6			自然林 (自然林				
76 64 67 SB451 17AP10	1	上部路 長便 C1	28.0	—	—	哲 G・白・角	浅黄	クロロナデ, ハケナメ	クロロナデ, ハケナメ	5							
76 64 68 SB451 17AP8	1	上部路 長便 A	8.2	—	—	哲 G・白・白	角	クロロナデ	クロロナデ	14							
76 64 69 SB451 17AP20	1	上部路 長便 A	9.4	—	—	哲 G・白・白	角	シノイチ	ケズリ	36							
76 64 70 SB451 17AP15	1	上部路 長便 BII (29.7)	—	—	—	哲 G・白・白	浅黄	カキメ, ハナコロナデ, カキメ, ハナコロナデ	カキメ, ハナコロナデ, カキメ, ハナコロナデ	1							
77 64 71 SB451 17AP20	1	上部路 小便 II	15.2	—	—	哲 G・白・白	シノイチ	カキメ	カキメ	6							
77 64 72 SB451 17AP5	1	上部路 小便 B	8.6	—	—	哲 G・白・白	角	カキメ, ハナコロナデ, カキメ, ハナコロナデ	カキメ, ハナコロナデ, カキメ, ハナコロナデ	36							
77 64 73 SB451 17AP1	1	底地路 有白材 AII	13.6	8.5	4.3	哲 G・白	C 白皮	クロロナデ	クロロナデ	6	21	20	標識林 付生物				
77 64 74 SB453 17AP1	1	底地路 种苗	14.8	—	—	哲 G・白・白	C 白皮	クロロナデ	クロロナデ	6	3		地表平丘				
77 64 75 SB453 17AP1	1	底地路 備蓄	13.0	—	—	哲 G・白・白	D 植被	クロロナデ	クロロナデ	9			天井原に沈 没する				
77 64 76 SB251 17AP4	1	底地路 有白材	13.0	—	—	哲 G・白・白	C 白皮	クロロナデ	クロロナデ	4							
77 64 77 SB251 17AP13	1	底地路 有白材 BII (14.8)	9.2	3.8	3.8	哲 G・白	A 白皮	クロロナデ	クロロナデ	2	12						
77 64 78 SB251 17AP13	1	底地路 种苗	14.6	—	—	哲 G・白・白	A 白皮	クロロナデ	クロロナデ	21			自然林				
77 64 79 SB251 17AP14	1	底地路 痘 I	—	—	—	哲 G・白	不规则	タタキメ	タタキメ								
77 64 80 SB251 17AP8	1	底地路 痘 II	28.0	—	—	哲 G・白	C 白皮	クロロナデ	クロロナデ	3							
77 64 81 SB251 17AP6	1	底地路 种苗	15.6	—	—	哲 G・白・白	D 植被	クロロナデ	クロロナデ	4							
77 64 82 SB251 17AP7	1	底地路 痘	—	—	—	哲 G・白・白	C 白皮	タタキメ	タタキメ								
77 64 83 SB251 17AP12	1	底地路 有白材 AII (12.6)	6.7	3.9	哲 G・白・白	C 白皮	クロロナデ	クロロナデ	11								
77 64 84 SB252 18AO5	1	底地路 有白材 X	13.4	—	—	哲 G・白	C 白皮	クロロナデ	クロロナデ	9							
77 64 85 SB253 18AO5	1	底地路 有白材	—	7.0	—	哲 G・白・白	不规则	クロロナデ	クロロナデ	15							
77 64 86 SB252 17AP22	1	上部路 痘	15.0	—	—	哲 G・白	浅黄	クロロナデ	クロロナデ	6			内面表面				
77 64 87 SB252 18AP4	1	底地路 痘	—	—	—	哲 G・白・白	不规则	タタキメ	タタキメ								
77 64 88 SB252 17AP16	1	底地路 有白材	—	5.0	—	哲 G・白・白	C 白皮	クロロナデ	クロロナデ	9							
77 64 89 SB258 P383 17AQ14	1	上部路 路	17.9	10.6	5.0	哲 G・白・白	角	クロロナデ	クロロナデ	5	18		内面表面				
77 64 90 SB258 P450 17AQ22	1	黑色 植	14.0	—	—	哲 G・白・白	角	ミガキ	ミガキ	3			内面表面				
77 64 91 P452 17AR11	1	上部路 痘	(18.0)	—	—	哲 G・白	不规则	クロロナデ	クロロナデ	2							
77 65 88 SB258 17AQ19	1	底地路 种苗	14.6	—	—	哲 G・白・白	A 白皮	クロロナデ	クロロナデ	19							
77 65 93 SB257 17AQ20-25	1	黑色 种苗	(13.8)	—	—	哲 G・白	黑	ミガキ	ミガキ	2			内面表面				
77 65 94 SB257 SB257 17AR17	1	上部路 長便 C	9.4	—	—	哲 G・白・角	角	ハケナメ	ハケナメ	9			地表平丘				
77 65 95 SB258 P160 18AP20	1	底地路 有白材 (12.0)	—	—	—	哲 G・白・白	C 白皮	クロロナデ	クロロナデ	2			地表平丘				
78 65 96 SB278 17AQ22	3	底地路 有白材 BII	12.0	8.2	3.5	哲 G・白・白	A 白皮	クロロナデ	クロロナデ	27	36		底地路に ある骨立				
78 65 97 SB278 17AQ23	3	底地路 有白材 BII	13.7	8.2	3.5	哲 G・白・白	C 白皮	クロロナデ	クロロナデ	7	9		底地路に ある骨立				
78 65 98 SB278 17AQ22	5	底地路 有白材 X (20.0)	—	—	—	哲 G・白・白	不规则	クロロナデ	クロロナデ	2			地表平丘 地表や不 良				
78 65 99 SB278 17AQ22	3	底地路 有白材	—	8.0	—	哲 G・白・白	A 白皮	クロロナデ	クロロナデ	5							
78 65 100 SB278 17AQ23	3	底地路 种苗	—	—	—	哲 G・白・白	A 白皮	クロロナデ	クロロナデ								
78 65 101 SB278 17AQ22	3	上部路 路	—	9.0	—	哲 G・白・白	角	クロロナデ	クロロナデ	24			地表平丘 地表や不 良				
78 65 102 SB278 17AQ23	3	上部路 小便 B	—	8.0	—	哲 G・白・白	浅黄	クロロナデ	クロロナデ	24							

別 表

固有 名前 No.	固有 名前 No.	通称	上位群	種群	種類	面積	分類	基準 (cm)		地上部	地下部	根状茎・手芋			地下茎 外側	地下茎 内側	茎葉 外側	茎葉 内側	付着物 外側	付着物 内側	備考
								目付	底径			状態・含有物	分類	色調	外側	内側	底茎	固有 名前	各品	内側	
78	65	103	SK368	17AQ13	1	柔毛路	無白种	AII	12.4	8.6	3.8	晋	石・長・白	C 黄白	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り	E 34.36			内側黒色地 斑
78	65	104	SK368	17AQ13	1	柔毛路	有白种	AII	12.6	7.2	3.4	綠	石・長・黃	C 黄白	クロナデ	クロナデ	クロナデ		6.7		
78	65	105	SK368	17AQ13	1	柔毛路	有白种	I	17.3		3.6	晋	石・長・白	C 绿	クロナデ	クロナデ	クロナデ		6.13		
78	65	106	SK369	22AM25	2	柔毛路	有白种		(11.4)			晋	石・長・白	C 黄白	クロナデ	クロナデ					自然軸
78	65	107	SK30	22AM25	1	柔毛路	無白种		8.4			綠	石・長・白・角・ 胸	C 黄白	クロナデ	クロナデ	クロナデ		14		
78	65	108	SK32	22AN17-22	2	柔毛路	無白种	BII	12.6	9.1	3.0	晋	石・長・白	C 黄白	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り種子		16.36		
78	65	109	SK48	21AO4	1	柔毛路	無白种		10.6			晋	石・長・白	不開	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り種子		7		
78	65	110	SK48	21AO4-4	1	柔毛路	小種	AII	11.0			晋	石・長・白	C 白	クロナデ	クロナデ	ヨコナデ		23.3.2	コゴ	亂生系
78	65	111	SK48	21AO5	1	柔毛路	小種	BII	16.0			晋	石・長・白	C 不開	クロナデ	クロナデ	ヨコナデ		15		
78	65	112	SK53	23AM23	1	柔毛路	無白种	AII	13.2	9.6	3.5	晋	石・長・白	A 開	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り		16.30		
78	65	113	SK53	23AM23	1	柔毛路	有白种	I	13.3		2.9	晋	石・長・白	A 開	クロナデ	クロナデ	ヨコナデ		26		
78	65	114	SK53	23AM19-23	1	柔毛路	無白种		27.0			晋	石・長・白	不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ハナツメ		3	スス	花茎型
78	65	115	SK53	23AM19	1	柔毛路	小種	BII	13.2	6.6	(13.5)	晋	石・長・チ	C 深黄	クロナデ	クロナデ	ヨコナデ		10.24	スス	
78	66	116	SK74	19AP12	1	柔毛路	有白种		(12.0)			晋	石・白	C 開	クロナデ	クロナデ	ヨコナデ		1		
78	66	117	SK74	19AP16	1	柔毛路	無白种	BII	24.0			晋	石・長・チ	C 浅黄	クロナデ	クロナデ	ヨコナデ		3		
79	66	118	SK79	19AQ5	1	柔毛路	有白种	I	16.4			晋	石・白	C 開	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り		4		
79	66	119	SK79	19AQ5-7	1	柔毛路	小種	A	10.6			晋	石・長・チ	C 不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ハナツメ		12		
79	66	120	SK85	20AP7	1	柔毛路	小種	B	10.7			晋	石・長・チ	C 不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ハナツメ		5		
79	66	121	SK90	19AM3	1	柔毛路	無白种	AII	13.6	10.2	5.7	晋	石・白	C 黄白	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り		10		
79	66	122	SK90	19AO1	1	柔毛路	有白种		10.0			晋	石・長・白	A 黄白	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り		14		自然軸
79	66	127	SK12	17AQ24- 17AQ25	1	柔毛路	無白种	BII	12.2	7.2	3.7	晋	石・長・チ	C 白	クロナデ	クロナデ	ヨコナデ		8.6		
79	66	128	SK131	18AP5	1	柔毛路	無白种		9.6			晋	石・長・チ	C 黄白	タタキ・施力ヨコナデ	ヨコナデ	ハナツメ		1		
79	66	129	SK30	19AO1	1	柔毛路	長種	C	8.9			晋	石・長・チ	C 不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ハナツメ		27		
79	66	129	SK104	18AP15	1	柔毛路	有白种		6.0			晋	石・長・チ	C 開	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り		7		
79	66	125	SK107	18AP5	1	柔毛路	有白种	BII	12.8	6.6	5.2	晋	石・長・白	A 黄白	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り		18.36		馬鹿ヒダ 年輪
79	66	126	SK118	17AQ15	1	柔毛路	無白种		10.0			晋	石・長・白	A 黄白	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り		14		
79	66	127	SK12	17AQ24- 17AQ25	1	柔毛路	無白种	BII	12.2	7.2	3.7	晋	石・長・チ	C 白	クロナデ	クロナデ	ヨコナデ		8.6		
79	66	128	SK131	18AP5	1	柔毛路	無白种		9.6			晋	石・長・チ	C 黄白	タタキ・施力ヨコナデ	ヨコナデ	ハナツメ		8		
79	66	129	SK139	19AQ21	1	柔毛路	小種	BII	15.8			晋	石・長・チ	C 不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		10	スス	コゴ
79	66	130	SK145	17AP23	1	柔毛路	小種		9.2			晋	石・長・チ	C 不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ハナツメ		10		
79	66	131	SK145	19AQ19	1	柔毛路	無白种		12.8			晋	石・長・チ	C 黄白	タタキ・施	ヨコナデ	ハナツメ		10		
79	66	132	SK146	19AQ20	1	柔毛路	無白种		9.5			晋	石・白	A 黄	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り		28		内側にマ スラ紙
79	66	133	SK161	18AP21	2	柔毛路	無白种		9.6			晋	石・長・白	A 黄白	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り		8		
79	66	134	SK182	19AQ23	1	柔毛路	無白种		9.0			晋	石・白	C 黄白	タタキ・施力ヨコナデ	ヨコナデ	ハナツメ		1		
79	66	135	SK15	17AP23	1	柔毛路	小種	B	7.0			晋	石・長・白	C 不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		5.5.2		
79	66	136	SK22	17AQ17	1	柔毛路	有白种		12.8			晋	石・長・白	C 黄白	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		5		
79	66	137	SK22	17AQ17	1	柔毛路	無白种		9.0			晋	石・長・白	C 黄白	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		7		
79	66	138	SK22	17AQ17	1	柔毛路	小種	B	7.0			晋	石・長・チ	C 不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		11		外側に墨
80	66	139	SK228	24AJ11	1	柔毛路	長種	AII				晋	石・長・白	C 白	ヨコナデ	ヨコナデ	ハナツメ		8.6		西古志型
80	66	140	SK281	17AQ11-17	1	柔毛路	無白种	AII	13.0	9.0	3.4	晋	石・長・白	A 黄白	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り		1.11		
80	66	141	SK281	17AR7	1	柔毛路	無白种	BII	13.4	10.0	3.2	晋	石・長・白	C 黄白	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り		5.8		
80	66	142	SK281	17AR13	1	柔毛路	種		13.1			晋	石・長・白	C 黄白	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		6.7		自然軸
80	66	143	SK285	17AR7	1	柔毛路	無白种		18.0			晋	石・長・白	C 不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		2		
80	66	144	SK285	17AR18	1	柔毛路	有白种		(9.0)			晋	石・長・白	C 黄白	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		3		
80	67	145	SK285	17AR18	1	柔毛路	有白种	BII	10.3	5.8	4.1	晋	石・長・白	A 不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		9		
80	67	146	SK285	17AR13	1	柔毛路	種		19.0			晋	石・長・白	C 不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		5		
80	67	147	SK285	17AR13	1	柔毛路	長種		8.0			晋	石・長・白	C 不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		5		内側に影
80	67	148	SK285	17AR13	1	柔毛路	無白种		13.0			晋	石・長・白	C 不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		1		
80	67	149	SK285	17AR13	1	柔毛路	小種	B	(19.0)			晋	石・長・白	C 不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		1	コゴ	
80	67	150	SK291	23AG13	1	柔毛路	有白种	N	15.0			晋	石・長・白	A 白	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		10		
80	67	161	SK298	23AG13	1	柔毛路	有白种	BII	10.3	5.8	4.1	晋	石・長・白	A 黄白	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		10.23		自然軸(自然軸)
80	67	152	SK299	23AG14	1	柔毛路	小種	BII	15.8			晋	石・長・白	C 黄白	ヨコナデ	ヨコナデ	ハナツメ		6		コゴ
80	67	153	SK333	22AG17	1	柔毛路	無白种	BII	(12.8)	9.8	3.3	晋	石・長・白	A 黄白	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		2.22		
80	67	154	SK333	22AG22	1	柔毛路	種		17.4			晋	石・長・白	C 黄白	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		6.10		馬鹿ヒダ 年輪
80	67	155	SK333	22AG22	1	柔毛路	種		12.8		3.1	晋	石・長・白	D 黄	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		6.23		
80	67	156	SK333	23AG09	1	柔毛路	長種	B				晋	石・長・白	C 不開	タタキ・施	ヨコナデ	ハナツメ		36		
80	67	157	SK333	17AQ13	1	柔毛路	無白种	BII	(13.9)	9.8	3.5	晋	石・長・白	C 黄白	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		2.4		
80	67	158	SK341	17AQ13	1	柔毛路	有白种	BII	(12.8)	9.8	3.3	晋	石・長・白	C 黄白	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		1.9		
80	67	159	SK341	17AQ13	1	柔毛路	有白种		10.0			晋	石・長・白	C 黄白	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		12		
80	67	160	SK341	17AQ13	1	柔毛路	有白种		12.4	7.0	5.2	晋	石・長・白	C 黄白	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		12.18		内側に影
80	67	161	SK341	17AQ14	1	柔毛路	種	A	20.0			晋	石・長・白	C 不開	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		4		根折りしい
80	67	162	SK341	17AQ13	1	柔毛路	有白种		13.0			晋	石・長・白	C 黄白	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り		5		自然軸

別 表

固有 固有 固有 No. No. No.	名前 名前 名前 通称 通称 通称	地上部				茎葉 (cm)			地上部		葉質	地下根、芋			固有 固有 固有 外側 外側 外側	固有 固有 固有 内側 内側 内側	付着物 付着物 付着物	備考
		被毛 被毛 被毛	グリッド グリッド グリッド	被毛 被毛 被毛	裸葉 裸葉 裸葉	分離 分離 分離	口往 口往 口往	底延 底延 底延	葉面 葉面 葉面	状態 状態 状態		含有物 含有物 含有物	分類 分類 分類	色調 色調 色調	外側 外側 外側	内側 内側 内側	底延 底延 底延	
85	71 211 SK455 17AP14-2D	I	柔毛部	有台种	X	17.5	8.6	8.6	晋	石・白・海	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 14-31	根茎・葉基 葉基方にへつ る	
85	71 212 SK455 17AP14	I	柔毛部	种直		10.6			晋	G・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 6	自然動	
85	71 213 SK455 17AP15	I	柔毛部	种直	I	14.4			晋	G・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 29	自然動	
85	71 214 SK455 17AP20	I	柔毛部	种直					晋	G・白・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E	自然動	
85	71 215 SK455 17AP20	I	柔毛部	种直	A	27.0			晋	G・白・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	3		
85	71 216 SK455 17AP15-2D	I	柔毛部	种直	A	7.6			晋	G・白・海	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	9		
85	71 217 SK455 17AP20	I	柔毛部	种直	B2	21.6			晋	G・白・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	4		
85	71 218 SK455 17AP14-19	I	柔毛部	种直	B1 II	16.0			晋	G・白・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 5	コサ	
85	71 219 SK460 17AP15	I	柔毛部	种直	AII	12.3	7.1	3.6	晋	石・白・白	A	黄	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 9-36		
85	71 220 SK460 17AP15	I	柔毛部	种直	BII	(12.4)	8.0	3.7	晋	G・白・白	A	黄	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 1-36	根茎外側に へつる	
85	71 221 SK460 17AP15	I	柔毛部	种直		10.0	(10.2)	(17.8)	晋	G・白・白	A	黄	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	35	内側黄色 高苔	
85	70 222 SK462 17AP18	I	柔毛部	有台种	X	(18.0)			晋	G・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	2		
85	70 223 SK466 17AO24	I	柔毛部	种直	BII	(14.0)	10.0	3.0	晋	G・白・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 7	根茎不良	
85	70 224 SK466 17AO22	I	柔毛部	种直		14.2			晋	G・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 4		
85	71 225 SK470 17AO13	I	柔毛部	种直	BII	13.0	8.6	3.4	晋	G・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 14	地城中や平 原	
86	71 226 SK470 17AO13	I	柔毛部	种直		9.6			晋	G・白・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	4	地城平	
86	71 227 SK472 16AP22	I	柔毛部	种直	BII	12.8	8.5	3.5	晋	石・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 7-15		
86	71 228 SK472 16AP22	I	柔毛部	种直		16.0			晋	G・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	4		
86	71 229 SK472 16AP22	I	柔毛部	种直		12.0			晋	G・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	5		
86	71 230 SK472 16AP22	I	柔毛部	种直		12.4	8.4	4.2	晋	G・白・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	19-35ス	ス	
86	71 231 SK472 16AP22	I	柔毛部			8.0			晋	石・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	6	内側白色 地	
86	71 232 SK472 16AP22	I	柔毛部	直	I	61.0			晋	G・白・白	A	黄	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	7	14部外側 自然動	
86	71 233 SK472 16AP22	I	柔毛部	直	III	20.0			晋	G・白	A	黄	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	4	自然動(直)	
86	71 234 SK472 16AP22	I	柔毛部	直	BII	23.4			晋	G・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	5		
86	71 235 SK472 16AP22	I	柔毛部	小直	BII	14.0			晋	石・白・海	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	4	スス、コサ	
86	72 226 SK486 17AL23-24	I	柔毛部	种直	AII	12.5	8.3	3.2	晋	石・白・白	A	黄	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 28-36		
86	72 227 SK486 17AL22-23	I	柔毛部	直		11.6			晋	G・白・海	C	赤	タタキメ、 タタキメ、 タタキメ	タタキメ、 タタキメ、 タタキメ	タタキメ、 タタキメ、 タタキメ	15	地城内面七 ダケ類	
86	72 237 SK486 17AL23	I	柔毛部	直		11.5			晋	G・白・海	C	赤	タタキメ、 タタキメ、 タタキメ	タタキメ、 タタキメ、 タタキメ	タタキメ、 タタキメ、 タタキメ	26	自然動(直)	
87	73 229 SK486 17AL23	I	柔毛部	直		11.5			晋	G・白・白	C	赤	タタキメ、 タタキメ、 タタキメ	タタキメ、 タタキメ、 タタキメ	タタキメ、 タタキメ、 タタキメ	34	地城外面 直状文 地帯	
88	74 240 SK499 17AM31	I	上端部	直直	BII	21.0	(30.0)		晋	G・白・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	5		
88	74 241 SK530 23AH1	I	柔毛部	种直	AII	12.0	7.5	3.4	晋	G・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 13-20	自然動(直)	
88	74 242 SK532 22AH23	I	柔毛部	种直	AII	11.6	7.4	3.3	晋	G・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 17-22		
88	74 243 SK532 22AH23	I	柔毛部	种直	AII	11.2	7.8	3.6	晋	石・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 17-36		
88	74 244 SK533 17AM17	I	上端部	直直	BII	24.0			晋	G・白・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	19		
88	74 245 SK543 17AM12-13	I	上端部	直直		12.2			晋	G・白・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 4		
88	74 246 SK543 17AM12	I	上端部	直直		10.0	12.3	16.9	晋	G・白・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 23-20		
88	74 247 SK543 17AM12	I	上端部	小直	BII	10.9	6.2	8.9	晋	G・白・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 15-18		
88	74 248 SK543 17AM12	I	上端部	直	BII	41.8			晋	G・白・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	27		
89	74 249 SK546 22AH8	I	柔毛部	种直	BII	12.4	8.8	3.1	晋	石・白	A	黄	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 13-36		
89	74 250 SK546 22AH12	I	柔毛部	种直		5.6			晋	白	B	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 33		
89	74 251 SK546 22AH12	I	柔毛部	种直		13.9			晋	白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 6	根茎不良	
89	74 252 SK546 22AH12	I	柔毛部	种直	BII	11.7			晋	石・白	A	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 16		
89	75 253 SK546 22AH12-13	I	上端部	直直	BII	21.8			晋	石・白・海	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	9	スス	
89	74 254 SK546 22AH17	I	上端部	直直	BII	20.6			晋	石・白・海	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	4		
89	75 255 SK546 22AH17	I	上端部	直直	BII	19.0			晋	石・白	D	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	13	スス	
89	74 256 SK546 22AH12	I	上端部	小直	BII	15.4			晋	石・白	D	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	9	スス、コサ	
89	75 257 SK547 22AH13	I	柔毛部	种直	BII	10.7	10.3	6.7	晋	石・白	D	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 4-14		
89	75 258 SK553 22AH13	I	柔毛部	种直	BII	14.4	9.2	4.0	晋	石・白	C	赤	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	ロクロナヂ、 ロクロナヂ、 ロクロナヂ	E 6-10	地城中や平 原	

原種 品種 名 No.	別名 通称 名 No.	茎上部枝			葉			花序			果実 (cm)			地上部			葉			花序軸・子房			被子植物 科		
		部位	種類	面積	分類	日付	底經	高さ	状態・有合物	分類	色調	外側	内面	底經	周長	被子植物 科	外側	内面	被子植物 科						
89 75 259 SK553 22AH2-4	1	茎上部	無白粉	BII	12.3	8.4	3.4	昔 G・白	C	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	9.20	地味や小 豆、内外部 セダスナホ									
89 75 260 SK553 22AH2-3・1	1	茎上部	無白粉	AII	13.0	10.0	3.8	昔 G・長・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	20.23	地味や小 豆、内外部 セダスナホ									
89 75 261 SK553 22AH2	1	茎上部	無白粉	BII	20.0			昔 G・長・露		黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	20.23	地味や小 豆、内外部 セダスナホ									
89 75 262 SK556 17AM2	1	茎上部	無白粉	BII	12.0	8.8	3.3	昔 G・長・露	B	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	14.20										
89 75 263 SK561 22AH2-5	1	茎上部	無白粉	(14.0)				昔 G・長・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	2										
89 75 264 SK564 22AH18	1	茎上部	無白粉	BII	11.4	7.0	3.3	昔 G・白	C	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	33.36	中や小豆									
89 75 265 SK564 22AH18	1	茎上部	無白粉	(12.6)	5.2	(4.5)		昔 G・長	C	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	20.20										
89 75 266 SK564 22AH19	1	茎上部	無白粉	C	7.0	4.0	3.5	昔 G・白・青	B	黒	クロナデ	クロナデ	ヘラ切り	6	5.12										
90 75 267 SK568 22AH14	1	茎上部	小葉	BII	15.0			昔 G・長・白		黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	8.8										
90 75 268 SK569 16AP17	1	茎上部	無白粉	AII	14.0	10.4	3.9	昔 G・白	C	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	17.20	地味不良									
90 75 269 SK569 16AP17	1	茎上部	無白粉	BII	14.0	8.6	3.2	昔 G・長・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	5.10	地味や小 豆									
90 75 270 SK568 16AP17	1	茎上部	有白粉	AII	14.4	9.0	4.0	昔 G・長・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	9.5	地味や小 豆									
90 75 271 SK568 16AP17	1	茎上部	無白粉	BII	14.2			昔 G・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	26	地味ヒダス ナホ									
90 75 272 SK569 16AP17	1	茎上部	無白粉	CII	23.0			昔 G・長・露		黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	5										
90 75 273 SK569 16AP17	1	茎上部	小葉	BII	17.0			昔 G・長・チ		黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	8.8	コゴメ									
90 75 274 SK602 17AP20	1	茎上部	無白粉	BII	12.8	9.5	3.7	昔 G・白	D	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	29.36	地味ヒダス ナホ									
90 75 275 SK616 16AN2	1	茎上部	小葉	AII	12.0	6.8	1.5	昔 G・長・露		黒	ハナコナデ	ハナコナデ	ヘラ切り	6	4.24	スズ									
90 76 276 SK617 17AN24	1	茎上部	長葉	AII	(12.8)			昔 G・長・露		黒	ハナコナデ	ハナコナデ	ヘラ切り	6	1										
90 76 277 SK624 22AH19	1	茎上部	長葉	BII	21.0			昔 G・長・露		黒	ハナコナデ	ハナコナデ	ヘラ切り	6	8										
90 76 278 SK631 22AH25	1	茎上部	無白粉	BII	13.8	10.6	5.1	昔 G・長・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	3.14										
90 76 279 SK631 22AH25	1	茎上部	無白粉	BII	13.0	8.0	3.0	昔 G・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	26										
90 76 280 SK631 22AH4-5	1	茎上部	有白粉	BII	14.2			昔 G・長・白		黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	4	蓮									
90 76 281 SK647 21AH13-2	2	茎上部	無白粉	(14.0)				昔 G・長・白		黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	1										
90 76 282 SK647 21AH13-18	1	茎上部	無白粉	BII	21.0			昔 G・長・露		黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	17	スズ									
90 76 283 SK654 22AH19	1	茎上部	長葉	BII	22.0			(33.0)	昔 G・長・露	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	12.27	スズ								
90 76 284 SK654 22AH19	1	茎上部	小葉	B	6.4			昔 G・長・露		黒	ハナコナデ	ハナコナデ	ヘラ切り	6	17	537上同 地味									
91 76 285 SK656 21AH16-17	1	茎上部	長葉	BII	22.0			昔 G・長・露		黒	ハナコナデ	ハナコナデ	ヘラ切り	6	5.22	スズ									
91 76 286 SK666 22AH12	1	茎上部	無白粉	BII	(13.0)	10.0	3.2	昔 G・白	C	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	1.18	地味不良									
91 76 287 SK674 21AH13	1	茎上部	無白粉	BII	12.6			昔 G・長・露	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	1.4	自然飼									
91 76 288 SK674 21AH13	1	茎上部	無白粉	BII	14.0			昔 G・長・露		黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	3	スズ									
91 76 289 SK686 22AH14	1	茎上部	有白粉	BII	6.6			昔 G・長・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	32	地味外壁に ハナ咲き									
91 76 290 SK686 22AH15	1	茎上部	無白粉	BII	13.6	6.2	4.3	昔 G・長・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	24.33	地味不良 外壁に開裂す ように現れてる									
91 76 291 SK689 22AJ15	1	茎上部	有白粉	BII	14.1	7.4	7.6	昔 G・白	B	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	23.36										
91 76 292 SK690 22AJ11	1	茎上部	無白粉	AII	13.4	7.3	4.1	昔 G・長・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	6.33										
91 76 293 SK690 22AJ11	1	茎上部	無白粉	BII	13.0			昔 G・白	E	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6											
91 76 294 SK691 22AJ12	1	茎上部	有白粉	BII	14.4	8.0	0.5	昔 G・白	B	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	5.22										
91 76 295 SK691 21AJ11	1	茎上部	有白粉	BII	10.4			昔 G・白	C	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	23	地味ヒダス ナホ									
91 77 296 SK699 21AJ11	1	茎上部	無白粉	BII	12.9	5.9	4.5	昔 G・長・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	15.36										
91 77 297 SK700 21AH24	1	茎上部	無白粉	BII	11.5	7.5	3.6	昔 G・白	C	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	22.36										
91 77 298 SK706 22AJ18	1	茎上部	無白粉	BII	37.0			昔 G・長・露		黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	5										
91 77 299 SK708 19AJ24	1	茎上部	有白粉	BII	6.4			昔 G・白	C	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	36	自然飼									
91 77 300 SK721 19AL2	1	茎上部	秆蓋	I	15.2			昔 G・白	C	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	35	自然飼									
91 77 301 SK722 19AL2	1	茎上部	無白粉	C	7.1	5.5	6.2	昔 G・長・露		黒	ハナコナデ	ハナコナデ	ヘラ切り	6	23.32	地味ヒダス ナホ									
91 77 302 SK723 19AL2	1	茎上部	無白粉	BII	11.4			昔 G・白		黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	23	自然飼									
91 77 303 SK741 18AL18	1	茎上部	無白粉	BII	12.9			昔 G・長・露		黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	3	自然飼									
91 77 304 SK741 17AL15	1	茎上部	有白粉	BII	8.8			昔 G・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	23	自然飼									
91 77 305 SK781 18AM3	1	茎上部	秆蓋	BII	9.9			昔 G・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	36	自然飼									
92 77 306 SK785 18AN6	1	茎上部	長葉	BII	37.0			昔 G・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	自然飼										
92 77 307 SK802 17AL10	1	茎上部	秆蓋	I	15.3			昔 G・長・白	A	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	33										
92 77 308 SK802 17AL10	1	茎上部	秆蓋	I	14.3			昔 G・白	C	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	35	自然飼									
92 77 309 SK802 17AL10	1	茎上部	無白粉	BII	14.0	9.6	3.1	昔 G・長・白	C	黒	クロロナデ	クロロナデ	ヘラ切り	6	7.17	地味不良									
92 77 311 SK802 17AL10	1	茎上部	小葉	BII	15.0			昔 G・長・白		黒	ハナコナデ	ハナコナデ	ヘラ切り	6	4	コゴメ									
92 77 312 SK802 17AP23	1	茎上部	長葉	BII	(19.0)			昔 G・長・白	C	黒	ハナコナデ	ハナコナデ	ヘラ切り	6	1										

別 表

回数 No.	品目 名 称 No.	原産地 地 名 No.	工具部材				形状 寸 法 (cm)	加工上 の 特 徴	外観	製作組・手作			販路 地 名 No.	販路 地 名 No.	販路 地 名 No.	備考		
			部位	種類	面種	分類				外面	内面	底面						
92	77	313 SX33	24AJT	1	底面部	種面	I	18.3	2.8	粗 石・長・白 A	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	18				
92	77	314 SX33	24AJS	1	底面部	種面	I	14.3	1.8	粗 石・長・白 A	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	36			西に在る 地名	
92	77	315 SX33	24AS	1	底面部	種面	II	13.3	2.7	粗 石・長・白 A	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	4	13			
92	77	316 SX33	24AJL	1	底面部	種面		12.2	7.4	3.4	粗 石・長・白 にぶい骨	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	7	30	5.5		
92	77	317 SX33	24AJZ-8-12	1	底面部	種面	B3	26.0		粗 石・長・白・ 鰐	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	3				
92	77	318 SX33	22AN11	1	黑色	種面		12.8	8.0	3.5	細 石・長・白 鰐	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	4	5		内面黒色地 帶
92	77	319 SX31	22AM15	2	上端部	底面	B			粗 石・長・白 鰐	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	5				
92	77	320 SX33	22AN11	2	上端部	底面	A11	18.0		粗 石・チ・ 白・魚	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	8				
92	78	321 SX37	21AO7	1	底面部	鰐白柄		9.0		粗 長・白 C	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	9			地成不良	
92	78	322 SX37	21AO7	1	底面部	鰐白柄	A3	13.4	8.9	3.4	粗 長・白・ 鰐	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	8	14		
92	78	323 SX38	21AN22	2	底面部	鰐白柄		10.6		粗 石・長・白 C	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	6	7		地成不良	
92	78	324 SX62	24AL1	1	底面部	鰐白柄	A3	13.6	9.4	3.4	粗 長・白・ 鰐	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	13	18	治療	地成不良
92	78	325 SX62	24ALB	1	底面部	種面	I	14.6		2.4	細 石・長 C	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	25			
92	78	326 SX62	24ALJ	1	底面部	種面				粗 石・長 C	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ					
92	78	327 SX62	24ALR	1	底面部	種面				粗 石・長・白 C	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ				自然動	
92	78	328 SX62	24ALU	1	底面部	種面				粗 石・長・白 鰐	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ					
92	78	329 SX63	17AQ21	1	底面部	鰐白柄	BII	13.0	10.4	3.7	粗 石・白 C	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	6	14-36		
93	78	329 SX63	17AQ16	1	底面部	鰐白柄	A3	13.8	9.4	3.8	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	9	23		
93	78	330 SX63	17AQ16-17-22	1	底面部	鰐白柄	A3	13.8	10.0	4.2	粗 石・長・チ・ 白 C	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	18	18		
93	78	331 SX63	17AQ21	1	底面部	鰐白柄	A3	13.8	10.0	3.7	粗 石・白・C	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	5	15		
93	78	332 SX63	17AQ16-21-22	1	底面部	鰐白柄	A3	12.7	9.0	3.7	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	18	36		内面にダ ムラ有り
93	78	333 SX63	17AQ17	1	底面部	鰐白柄	BII	13.2	9.6	3.6	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	17	36		
93	78	334 SX63	17AQ16	1	底面部	鰐白柄	A3	12.4	8.6	3.6	粗 石・長・白 A	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	18	21		底面外に ハラタキ
93	78	335 SX63	17AQ25	1	底面部	鰐白柄	BII	13.4	9.8	3.3	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	2	14		
93	78	336 SX63	17AQ16	1	底面部	鰐白柄	A3	12.8	9.6	3.9	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	18	14		
93	78	337 SX63	17AQ17-22	1	底面部	鰐白柄	A3	12.2	7.8	3.7	粗 石・長・白 A	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	8	10		
93	78	338 SX63	17AQ16-17	1	底面部	鰐白柄	A3	14.2	8.1	3.8	粗 石・長・白 A	黒	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	ロクロナナ、 ロクロナナ、 ロクロナナ	6	14		
93	79	339 SX63	17AQ16	1	底面部	鰐白柄	A3	14.3	6.6	4.4	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	8	22		
93	79	340 SX63	17AQ21	1	底面部	鰐白柄	BII	11.8	4.4	4.7	粗 石・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	6	14-30		地成外に ハラタキ
93	79	341 SX63	17AQ21	1	底面部	種面	I	17.5		4.6	粗 石・白・C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	7			自然動
93	79	342 SX63	17AQ16-21-22	1	底面部	種面	I	16.2		3.0	粗 石・白・C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	10			自然動
93	79	343 SX63	17AQ16	1	底面部	鰐白柄	A3	15.8		3.7	粗 石・白・A	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	7			
93	79	344 SX63	17AQ17-21-22	1	底面部	種面	I	16.0		2.5	粗 石・長 A	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	28			
93	79	345 SX63	17AQ17- 21-22	1	底面部	種面	II	13.3		3.2	粗 石・長・白 A	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	17			
93	79	346 SX63	17AQ16	1	底面部	鰐白柄		15.8		4.4	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	8			
93	79	347 SX63	17AQ16	1	底面部	高柄		19.8		3.0	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	5			
94	79	348 SX63	17AQ17- 21-22	1	底面部	度	III	18.0	12.4	25.3	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	17-12			
94	79	349 SX63	17AQ22	1	上端部	小柄	A10	13.0		粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	6	スコ			
94	79	350 SX63	17AQ21	1	上端部	小柄	BII	14.0		粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	6	スコ			
94	79	351 SX63	17AQ16	1	上端部	小柄	A	6.1		粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	36	スコ			
94	79	352 SX64	17AQ8	1	底面部	鰐白柄	A3	12.0	8.0	4.0	細 石・チ・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	19-36			
94	79	353 SX64	17AQ8	1	底面部	鰐白柄		7.0		粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	6				
94	79	354 SX64	17AQ8	1	底面部	鰐白柄	A3	14.0	8.2	4.0	粗 石・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	14-11			
94	79	355 SX64	17AQ3	1	底面部	鰐白柄	A3	12.5	7.2	4.0	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	8			
94	80	356 SX64	17AQ7	1	上端部	鰐白柄	A3	14.0		5.0	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	4	スコ		
94	80	357 SX64	17AQ7	1	上端部	鰐白柄	B	(28.0)		5.0	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	1			
94	80	358 SX64	17AQ8	2	上端部	度	A2	(24.6)		5.0	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	2			西点志型
94	80	359 SX64	17AQ8	2	上端部	度	B2	25.0		5.0	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	5			
94	80	360 SX64	17AQ8-12	2	上端部	度	B2	23.8		5.0	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	5	スコ		
94	80	361 SX64	17AQ7-2	2	上端部	度	A	8.0		5.0	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	27			西点志型
94	80	362 SX64	17AQ8	1	上端部	小柄	A	6.0		5.0	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	36	スコ		
94	80	363 SX64	17AQ7	2	上端部	小柄	A10	16.0		5.0	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	7	スコ		
94	80	364 SX64	17AQ8	2	上端部	小柄	BII	13.0		5.0	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	7	スコ		
95	80	365 SX64	17AQ13	1	上端部	度	A2	43.2		5.0	粗 石・長・白 C	黒	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	ロクロナズ、 ロクロナズ、 ロクロナズ	3	スコ		西点志型

回数 No.	品目 名 称 No.	原産地 名 称 No.	工具 (cm)				形状 外見	形状 内見	操作性・手法			操作率 回数 No.	付着物 各部 内見	参考				
			直角 鉗	グリップ 鉗	側鉗	面鉗			形状 有・無	分類	色調	外面	内面	底付				
95	80	366	SX64	17AQ07	1	上端鉗	直	B2	40.0		青 石・長・白・ 角	ロクロナデ, カキメ, タグ	ロクロナデ, カキメ, タグ	4	久ス			
95	80	367	SX64	17AQ07	1	上端鉗	直	B2	(39.6)		青 石・長・白・ 角	ロクロナデ	ロクロナデ	2				
95	80	368	SX64	17AQ13	1	上端鉗	直	B2	36.0		青 石・白	ロクロナデ, タグ	ロクロナデ, タグ	7	久ス			
95	80	369	SX64	18AQ09	2	直端鉗	無柄			9.0	青 石・長・白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り抜子 引	11		
95	80	370	SX64	18AQ09	1	直端鉗	有柄	AII	14.4	7.8	4.3	青 石・長・白・ 角	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	14/18	吸成不良	
95	80	371	SX64	18AQ09	1	直端鉗	有柄	AII	12.9	7.0	4.1	青 石・長・白・ 角	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	10/21		
95	80	372	SX64	18AQ10	1	直端鉗	有柄	BII	12.5	6.8	4.9	青 石・長・白・ 角	ロクロナデ, タグ	ロクロナデ, タグ	ヘラ切り後 ロクロナデ	27/36		
95	80	373	SX64	18AQ09	2	上端鉗	無柄			9.8	青 石・長・白・ 角	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後子 引	16			
95	80	374	SX70	18AQ13	1	直端鉗	無柄	B1	14.3	10.2	3.4	青 石・長・白	C	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	5/11	内面吸わ ず
95	80	375	SX70	18AQ13	1	直端鉗	無柄	AII	13.8	10.0	3.5	青 石・長・白・ 角	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	6/6	吸成不良	
95	80	376	SX70	18AQ13	1	直端鉗	有柄	X	16.0		青 石・長・白	ロクロナデ, タグ	ロクロナデ, タグ	ヘラ切り	10	内面吸わ ず		
95	80	377	SX70	18AQ13	1	直端鉗	有柄	AII	13.9	7.1	3.7	青 石・長・白	C	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	5/4	内面吸わ ず
96	81	378	SX70	18AQ13	1	直端鉗	無柄			9.0	青 石・長・白・ 角	ロクロナデ, タグ	ロクロナデ, タグ	ヘラ切り後子 引	自然動			
96	80	379	SX70	18AQ18	1	直端鉗	云母板	A	18.0		4.0	青 石・長・白	C	ロクロナデ	ロクロナデ	自然動	7	自然動(自然動)
96	80	380	SX70	18AQ18-13	1	直端鉗	雲母			12.6	青 石・長・白	D	ロクロナデ	ロクロナデ	自然動	12	自然動	
96	81	381	SX124	18AQ20	1	直端鉗	無柄	BII	12.9	10.0	3.4	青 石・長・白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	11/19	内面吸わ ず
96	81	382	SX124	18AQ22	1	直端鉗	無柄	AII	13.6	9.0	3.6	青 石・長・白・ 角	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	9/18	
96	81	383	SX124	18AQ22	1	直端鉗	無柄	BII	9.0		青 石・長・白・ 角	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後子 引	36	吸成や不 良	
96	81	384	SX124	18AQ22	1	直端鉗	無柄	BII	(13.2)	9.4	3.7	青 石・長・白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後子 引	2/14	
96	81	385	SX124	18AQ24	1	直端鉗	無柄			9.5	青 石・長・白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	25		
96	81	386	SX124	18AQ28	1	直端鉗	有柄	AII	(14.4)	7.8	4.3	青 石・長・白・ 角	C	ロクロナデ, タグ	ロクロナデ, タグ	ヘラ切り	3	
96	81	387	SX124	18AQ20	1	直端鉗	有柄	BII	14.2	7.2	3.9	青 石・長・白	C	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後子 引	14/36	
96	81	388	SX124	18AQ20	1	直端鉗	有柄	I	14.8		2.1	青 石・長	C	ロクロナデ	ロクロナデ	自然動	9	自然動
96	81	389	SX124	19AQ01	1	上端鉗	直			16.5	10.6	4.0	青 石・長・チ・ 白・角	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケツ引	6/20	内面吸わ ず
96	81	390	SX124	18AQ22	1	黑色	曲直			8.0	青 石・長	ミガキ	ミガキ	ミガキ		内面吸わ ず		
96	81	391	SX124	18AQ18	1	直端鉗	直			9.0	青 石・長・チ・ 白	C	ロクロナデ	タタキメ	自然動		自然動	
96	81	392	SX125	16AQ20-24	1	直端鉗	無柄	AII	13.3	9.0	3.6	青 石・長・チ・ 白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	19/36	久ス、 スル、 修理
96	81	393	SX125	17AQ05	1	直端鉗	無柄	BII	13.4	9.5	3.1	青 石・長・白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り後子 引	6/10	直端鉗に ハニカム
96	81	394	SX125	16AQ24	1	直端鉗	無柄	AII	13.0	9.2	3.6	青 石・長・チ・ 白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	8	
96	81	395	SX125	16AQ25	1	直端鉗	無柄	AII	14.2	8.0	4.0	青 石・長・白	C	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	8/20	直端鉗に ハニカム
97	81	396	SX125	16AQ24-2	1	直端鉗	有柄	AII	13.8	7.5	3.8	青 石・長・チ・ 白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	16/36	
97	81	397	SX125	16AQ24-24	1	直端鉗	有柄	AII	11.8	5.9	3.9	青 石・白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	23/36	直端鉗に ハニカム
97	82	398	SX125	16AQ25-2	1	直端鉗	有柄	BIV	(10.3)	5.5	6.9	青 石・長・白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	2/36	直端鉗(白)自然動
97	82	399	SX125	16AQ24	1	直端鉗	有柄	X	19.4		8.4	青 石・長	C	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	27/36	直端鉗(白)自然動
97	82	400	SX125	16AQ17	1	直端鉗	曲直	I	14.1		3.6	青 石・長・白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	17	
97	82	401	SX125	16AQ24	1	直端鉗	曲直			14.6	1.7	青 石・長・チ・ 白	A	オリーブ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	19	
97	82	402	SX125	16AQ25	1	直端鉗	曲直			13.4	2.3	青 石・長・チ・ 白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	3	
97	82	403	SX125	16AQ23	1	直端鉗	曲直			15.0	2.6	青 石・長	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラカミ	3	
97	82	404	SX125	16AQ19-24	1	直端鉗	有柄	BII			8.4	青 石・長・白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	27/36	直端鉗(白)自然動
97	82	405	SX125	16AQ24	1	黑色	曲直			11.2	2.5	青 石・長・白・ 角	機	ミガキ	ミガキ	天井部ヘラ引 子引	30	直端鉗(白)自然 動
97	82	406	SX125	17AQ01	1	上端鉗	鉛	A	19.4	15.3	7.7	青 石・長・チ・ 白・角	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	4		
97	82	407	SX125	16AQ21-22	1	上端鉗	鉛	C	25.0			青 石・長・白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラカミ	6		
97	82	408	SX125	17AQ05	1	上端鉗	小鉛	A	7.5			青 石・長・チ・ 白	ケズリ	ケズリ	ケズリ	36		
97	82	409	SX125	17AQ01	1	上端鉗	小鉛	A	8.7			青 石・長・チ・ 白	ケズリ	ケズリ	ケズリ	36	スス、コゾ	
97	82	410	SX125	16AQ23	1	直端鉗	直			11.2	2.5	青 石・長・白・ 角	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	10	コゾ	
97	82	411	SX125	17AQ5	1	上端鉗	直	BII	12.4	8.5	3.6	青 石・長・白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	13	コゾ	
97	82	412	SX125	16AQ19	1	上端鉗	直	B	13.8			青 石・長・白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	36		
97	82	413	SX125	16AQ21-22	1	上端鉗	直	A	(42.0)	15.0	(13.5)	青 石・長・白・ 角	ケズリ	ケズリ	ケズリ	1	6	
98	82	414	SX125	16AQ20-24	1	直端鉗	直	B	27.4			青 石・長・白	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ヘラ切り	17	自然動(自然動)
98	81	415	SX240	23AM11	2	直端鉗	無柄	BII	12.4	8.5	3.6	青 石・長・白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	30/36	
98	83	416	SX283	17AQ12	1	直端鉗	無柄	BII	13.7	9.0	3.5	青 石・長・白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	12/36	直端鉗不 良
98	83	417	SX283	17AQ12	1	直端鉗	無柄	AII	13.4	9.0	3.4	青 石・長・白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	25/36	内面吸わ ず
98	83	418	SX283	17AQ12	2	直端鉗	無柄	BII	14.8	8.4	3.4	青 石・長・白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	14/36	直端鉗不 良
98	83	419	SX283	17AQ14	1	直端鉗	無柄	AII	12.2	9.0	3.9	青 石・長・白	A	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	21/36	

別 表

固有 名前 固有 名前 番号 No.	固有 名前 固有 名前 番号 No.	工具 (cm)				形状	部位	外見	操作法・手法		操作率	付着物	備考				
		通称	グリップ	握位	被削				口径	底径		合有物	分量				
98	83 420 SN283 17AQ17	2	底面削	有白杆	AⅢ	15.0	8.8	4.2	削	G・長	C	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	5.8	操作不良	
98	83 421 SN283 17AQ13	1	底面削	有白杆	AⅢ	12.9	7.9	3.7	削	G・長	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	13.15	操作不良 因に柄の使用感	
98	83 422 SN283 17AQ17	1	底面削	種直	I	15.6		2.2	削	右・長・自	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	6.27		
98	83 423 SN283 17AQ13-14	1	底面削	種直	(14.6)			削	右・長・自	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	1			
98	83 424 SN283 17AQ18	2	上端部削	有白杆	I	12.8	7.8	4.1	削	右・白	種	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	6.8	操作不良	
98	83 425 SN283 17AQ14	1	上端部削	無白杆	I	12.3	8.0	3.1	削	G・直・白・自	角	赤	ロクロナヂ	ロクロナヂ	8.36	内面弯曲	
98	83 426 SN283 17AQ14	1	上端部削	無白杆	I	9.0	5.2	5.2	削	G・直・チ・自	種	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	9.30		
98	83 427 SN283 17AQ14	1	上端部削	直	A	15.3	8.4	9.6	削	G・直・チ・自	にぶい	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	13.30	スス	コヅ
98	83 428 SN283 17AQ8	1	底面削	直削		4.5			削	右・直・白	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	36.10	操作不良 底面外側に へきるき	
99	83 429 SN283 17AQ14	1	底面削	小直	BII	(15.0)			削	G・長		白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	1	スス	コヅ
99	83 430 SN283 17AQ14	1	上端部削	小直	AII	13.8			削	G・長		白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	6	大ス	コヅ
99	83 431 SN265 23AG14-20	1	直面削	直					削	右・角	直	白	ハマケミ	ハマケミ		内面黑色化	
99	83 432 SN406 16AQ21	1	底面削	小直	BII	15.6			削	G・直・チ	直	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	8	スス	コヅ
99	83 433 SN407 16AQ12	1	底面削	直	I	14.2		3.0	削	G・直・白	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	6.28	操作不良	
99	83 434 SN407 16AQ18	1	底面削	高直		9.4			削	G・直・直	D	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	7		
99	83 435 SN407 16AQ18	1	上端部削	高直	BII	22.0			削	G・直・直	直	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	4		
99	83 436 SN407 16AQ17	1	上端部削	直	BII	(34.0)			削	右・直		白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	1		
99	83 437 SN411 15AN11	1	底面削	無白杆		9.2			削	右	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	6.23	打ち欠き	
99	83 438 SN411 15AN11	1	上端部削	直		13.4	5.0	4.6	削	G・長・角	直	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	4.5	内面弯曲 (無直)	
99	83 439 SN415 15AP21	1	底面削	無白杆	BII	(13.4)	9.6	3.6	削	G・直・E	C	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	1.8		
99	83 440 SN415 15AP21	1	底面削	無白杆			10.0		削	G・直・E	C	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	0	操作不良	
99	83 441 SN415 15AP21	1	底面削	無白杆	BII	(13.4)	9.6	3.2	削	G・直・E	C	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	1.0		
99	83 442 SN415 15AP21	1	底面削	有白杆	AII	13.4	7.5	4.2	削	G・直・E	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	12.11	中心丸み	
99	83 443 SN415 15AP21	1	底面削	直	I	45.8			削	G・直	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	6.2	自然軸(自然軸) に直状	
99	83 444 SN415 15AP22	1	底面削	直	BII	27.0			削	G・直	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	5	自然軸	
99	83 445 SN415 16AO10	1	底面削	直	BII	13.0		3.4	削	G・直・A	B	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	6.27		
99	83 446 SN416 16AO10	1	上端部削	小直	BII	(16.0)			削	G・直・角		白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	2	スス	コヅ
99	84 447 SN421 15AP23	1	底面削	直	BII	12.3	8.4	3.8	削	G・直・直	C	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	3.9	操作不良	
99	84 448 SN421 15AP24	1	底面削	直	BII	13.2	7.6	4.2	削	G・直・直	C	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	4.18		
99	84 449 SN421 15AP22	1	底面削	高直		11.2			削	G・直	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	10	操作不良	
100	84 450 SN421 15AP17-22	23	1	底面削	直	38.8			削	右・直	A	白	タタキナヂ	タタキナヂ	4	自然軸(自然軸) に直状	
100	84 451 SN425 17AQ7	1	底面削	無白杆	BII	13.5	7.7	4.1	削	G・直	C	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	14.36	操作不良	
100	84 452 SN425 17AQ7	1	底面削	無白杆	AII	13.6	9.8	3.6	削	G・直	B	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	18.20	操作不良 底面外側に へきるき	
100	84 453 SN425 17AQ7	1	底面削	無白杆	BII	13.8	8.0	4.2	削	G・直	C	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	15.18		
100	84 454 SN425 17AQ12	1	底面削	無白杆	BII	11.0	7.2	3.7	削	G・直・E	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	27.36	操作やや不 良	
100	84 455 SN425 17AQ12	1	底面削	無白杆	BII	13.7	9.4	3.2	削	G・直・E	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	16.19	操作不良 底面外側に へきるき	
100	84 456 SN425 17AQ7	1	底面削	直	AII	14.3	8.8	4.3	削	G・直・白	C	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	9.18		
100	84 457 SN425 17AQ7	1	上端部削	直		7.8	4.5	4.1	削	G・直・角	直	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	6.36		
100	84 458 SN425 17AQ12	1	底面削	有直					削	G・直・角	直	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ		操作困難	
100	84 459 SN425 17AQ12	1	底面削	直					削	右・直	直	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	4	自然軸	
100	84 460 SN425 17AQ12	1	底面削	直					削	右・直	直	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	3		
100	84 461 SN425 17AQ7	1	上端部削	小直	AII	16.0			削	G・直・角	直	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	3	スス	コヅ
100	84 462 SN425 17AQ12	1	上端部削	直	AII	12.6			削	G・直・角	直	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	5	スス	コヅ
100	84 463 SN425 17AQ12	1	上端部削	直	B	9.6			削	G・直・角	直	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	36.33		
101	84 464 SN425 17AQ12	1	上端部削	直	BII	14.8	9.4	(14.0)	削	G・直・直	C	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	5.20		
101	85 465 SN469 16AP17-23	23	1	底面削	無白杆	AII	13.4	8.0	4.0	削	G・直・直	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	6.36	操作不良
101	85 466 SN469 16AP17-2	2	底面削	無白杆	BII	12.7	8.4	3.5	削	G・直・直	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	12.18		
101	85 467 SN469 16AP23	1	底面削	無白杆	BII	13.6	10.1	3.3	削	G・直	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	15.30		
101	85 468 SN469 16AP23-4	1	底面削	無白杆	BII	13.8	9.7	3.1	削	G・直	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	14.24		
101	85 469 SN469 16AP22	1	底面削	無白杆	BII	13.0	7.0	3.5	削	G・直・直	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	9.23	操作やや不 良	
101	85 470 SN469 16AP17-23	23	1	底面削	有白杆	AII	14.1	8.7	4.0	削	G・直	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	27.30	
101	85 471 SN469 16AP17-22	23	1	底面削	直	14.4		2.9	削	G・直・直	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	6.8		
101	85 472 SN469 16AP22-23	1	底面削	新直		14.0			削	G・直	A	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	6.16	自然軸	
101	85 473 SN469 16AP17	1	上端部削	無白杆		7.0			削	G・直	直	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ	21	内面弯曲	
101	85 474 SN469 16AP23	1	底面削	直		15.0			削	G・直	直	白	カギナヂ	カギナヂ	3	内面弯曲	
101	85 475 SN469 17AP23	1	底面削	高直		14.0			削	G・直	C	白	ロクロナヂ	ロクロナヂ			

別 表

原产地 No.	製作物 No.	田上耕種		苗床 (cm)				地上		製作所・手作				販売年 月日		販賣地		備考		
		通欄	グリッド	番号	播種	播種	分量	口徑	底径	高さ	状態・合物	分量	色調	外面	内面	底面	(日) 花 各品	(日) 茎 各品	(日) 叶 各品	
101-91	91-476	SNX469	16AP21	1	底北部	番菜		7.8	2.9	綠	石・白	C	米白	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	29	白黒脚	青色にへき 出	
101-85	85-477	SNX469	16AP23	1	底北部	番菜			6.8	青	石・白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ カキモチ ケイズゲ ナダ	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	6	21	黑色 青色 青物	
101-85	85-478	SNX469	16AP23	1	上部側	長梗	B2	(25.0)		青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ カキモチ ケイズゲ ナダ	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	1	スス		
101-85	85-479	SNX469	16AP17	1	上部側	長梗	C1	23.0		青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	3			
101-85	85-480	SNX469	16AP11	1	上部側	長梗	B1	13.0		青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ ハマツヨロ ナダ	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	6	スス	コガ	
101-85	85-481	SNX469	16AP23	1	上部側	小梗	B1	17.0		青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ ハマツヨロ ナダ	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	4		コガ	
101-85	85-482	SNX469	16AP23	1	上部側	短梗	B2	(40.0)		青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	2			
102-85	85-483	SNX476	23A196	1	底北部	番菜	B2	12.8	6.6	3.1	青	白	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	G	5 / 36	打ち込み 栽培	
102-85	85-484	SNX476	23A1H1	1	底北部	番菜	B1	(12.0)	9.4	3.0	青	白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ ハマツヨロ ナダ	ロクロナデ ロクロナデ	ヘラ切り	G	2	地被不良
102-85	85-485	SNX476	23A1H1	1	底北部	番菜	B1		7.3	青	石・白・ 黄	A	米白	ロクロナデ ロクロナデ ハマツヨロ ナダ	ロクロナデ ロクロナデ	ヘラ切り	N	15		
102-85	85-486	SNX476	23A1H7	1	底北部	番菜	A1	12.4	7.4	4.0	青	白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	6	5 / 白熱	白熱
102-85	85-487	SNX476	23A1H6	1	底北部	番菜	B1	(15.6)	11.0	7.9	青	石・白・ 黄	A	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	1	5 / 35	コガ
102-85	85-488	SNX476	23A1H2	1	底北部	番菜	B1		7.4	青	石・白・ 黄	A	米白	ロクロナデ ロクロナデ ハマツヨロ ナダ	ロクロナデ ロクロナデ	ヘラ切り	3		弱弱高 温栽培	
102-85	85-489	SNX482	23A1H7	1	底北部	番菜	B1	(16.0)	11.1	16.8	青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ ハマツヨロ ナダ	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	2	13	
102-85	85-490	SNX509	22G2G5	2	底北部	番菜	A1	11.2	7.8	3.6	青	白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ ハマツヨロ ナダ	ロクロナデ ロクロナデ	ヘラ切り	G	4 / 35	打ち込み 栽培
102-85	85-491	SNX509	22G2G5	2	底北部	番菜	B1		12.9	3.6	青	白	A	米白	ロクロナデ ロクロナデ ハマツヨロ ナダ	ロクロナデ ロクロナデ	ヘラ切り	N	7	
102-85	85-492	SNX509	22G2G5	2	土壌側	小梗	B1	16.2		青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ カキモチ	ロクロナデ	ロクロナデ	3	スス	コガ	
102-85	85-493	SNX509	17A002	1	底北部	有柄A	A1	15.6	10.0	3.4	青	石・白	A	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5	5	
102-85	85-494	SDN504	23A1H6	1	底北部	有柄A	A1	(12.2)	7.6	3.4	青	石・白・ 黄	A	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	1	8	
102-85	85-495	SDN504	23A1K1	1	上部側	小梗	B1	(18.0)		緑	白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ カキモチ	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	1			
102-85	85-496	SDN423	23A1G13	1	上部側	葉		25.0		青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ カキモチ	ロクロナデ	ロクロナデ	4			
102-85	85-497	SDN397	17AP18	1	底北部	番菜	B1	12.4	9.6	3.4	青	石・白・ 黄	A	青白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	15	14	低湿外部 へき出栽培
102-86	86-498	SDN420	16AP19	2	底北部	番菜	B1	14.1	8.8	4.4	青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り種子	G	7 / 20	
102-86	86-499	SDN420	16AP18	1	底北部	番菜	A1	13.2	9.7	3.6	青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り種子	G	29 / 36	
102-86	86-500	SDN420	16AP18	1	底北部	番菜	B1	12.5	8.7	3.4	青	石・白・ 黄	A	青白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	G	18 / 36	2.9
102-86	86-501	SDN420	16AP13	1	底北部	番菜	A1	13.2	8.0	4.0	青	石・白・ 黄	A	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	G	21 / 24	
102-86	86-502	SDN420	16AP5	1	底北部	番菜	A1	13.8	8.2	3.6	青	石・白・ 黄	C	青白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り種子	G	15	
102-86	86-503	SDN420	16AP13	1	底北部	番菜	B1	13.6	9.8	3.0	青	石・白・ 黄	C	青白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	G	8 / 34	
102-86	86-504	SDN420	16AP12	1	底北部	番菜	B1	12.6	9.8	3.3	青	石・白・ 黄	A	青白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	G	12 / 22	低湿内部 栽培
102-86	86-505	SDN420	16AP4	2	底北部	番菜	B1		8.8	青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ 不完全方位 ナダ	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	18	白熱		
103-86	86-506	SDN420	16AP18	1	底北部	番菜	B1	15.0	7.4	2.0	青	石・白・ 黄	A	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り種子	G	17	
103-86	86-507	SDN420	16AP4	1	底北部	番菜	A1	14.8	9.0	3.9	青	石・白・ 黄	A	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	G	9 / 21	
103-86	86-508	SDN420	17AP5	1	底北部	番菜	B1	14.3	8.1	4.8	青	石・白・ 黄	A	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロケサ G	16 / 34		
103-86	86-509	SDN420	16AP13	1	底北部	番菜	B1	12.2	6.8	4.4	青	石・白・ 黄	A	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	G	22 / 32	
103-86	86-510	SDN420	16AP12-17	1	底北部	番菜	A1	14.0	8.9	3.9	青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	カキモチ	G	25 / 34	
103-86	86-511	SDN420	16AP13	1	底北部	番菜	B1	10.5	6.7	4.5	青	石・白・ 黄	A	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	G	4 / 21	
103-86	86-512	SDN420	16AP9	2	底北部	番菜	B1	11.5	7.0	4.1	青	石・白・ 黄	A	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り種子	G	19 / 35	
103-86	86-513	SDN420	16AP18	1	底北部	番菜	X	16.0	9.6	8.5	青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	7	3	
103-86	86-514	SDN420	16AP13	1	底北部	番菜	B1		15.4	2.7	青	石・白・ 黄	A	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	G	5	
103-86	86-515	SDN420	16AP13	1	底北部	番菜	B1		14.4	2.4	青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	N	17	自燃熱
103-86	86-516	SDN420	16AP4	1	底北部	番菜	B1		13.4	2.7	青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ ロクロケサ G	ロクロナデ	ロクロナデ	G	10	自燃熱
103-86	86-517	SDN420	16AP23	1	温帯	細胞膜		10.3		青	石・白	黑	米白	ミガキ ミガキ	ミガキ	ミガキ	5			
103-87	87-518	SDN420	16AP8-13	1	底北部	番菜		11.4		3.6	青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	G	8	白黒脚
103-87	87-519	SDN420	17A002	1	底北部	番菜		11.2		3.6	青	石・白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	15	白黒脚	白熱
103-87	87-520	SDN420	16AP9	2	底北部	番菜	B		25.2	青	石・白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	19			
103-87	87-521	SDN420	16AP13	1	上部側	長梗	B2	23.0		青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ カキモチ	ロクロナデ	ロクロナデ	9			
103-87	87-522	SDN420	16AP13	1	上部側	長梗	B2	23.0		青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ カキモチ	ロクロナデ	ロクロナデ	3			
103-87	87-523	SDN420	17AP5-4	1	上部側	小梗	B3	14.6		青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ カキモチ	ロクロナデ	ロクロナデ	8	スス	コガ	
103-87	87-524	SDN420	16AP9	2	上部側	細胞膜	B	6.6		青	石・白・ 黄	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	G	24 / 34	温栽培	
104-87	87-525	SDN420	16AP9	2	底北部	細胞膜	B1	11.8	8.2	3.1	青	石・白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	G	33 / 36	植物園
104-87	87-526	SDN420	17A002	1	底北部	細胞膜	B1	12.0	7.4	2.9	青	石・白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	G	5 / 36	植物園
104-87	87-527	SDN420	17A002	1	底北部	細胞膜	(12.0)			青	白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	2			
104-87	87-528	SDN477	23A1G5	1	底北部	番菜	(12.4)			青	白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	2			
104-87	87-529	SDN477	23A1H6	1	底北部	番菜	(11.4)			青	白	B	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	7		自燃熱	
104-87	87-530	SDN477	23A1H6	1	底北部	番菜	(11.4)			青	白	B	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	15		自燃熱	
104-87	87-531	SDN477	23A1H7	1	底北部	細胞膜	(12.0)			青	白	B	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	10		白熱	
104-87	87-532	SDN477	23A1H2	1	底北部	細胞膜	(12.0)			青	白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5		温栽培	
104-87	87-533	SDN477	23A1H2	1	底北部	細胞膜	(12.0)			青	白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5		温栽培	
104-87	87-534	SDN477	23A1H2	1	底北部	細胞膜	(12.0)			青	白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5		温栽培	
104-87	87-535	SDN477	23A1H2	1	底北部	細胞膜	(12.0)			青	白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5		温栽培	
104-87	87-536	SDN477	23A1H2	1	底北部	細胞膜	(12.0)			青	白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5		温栽培	
104-87	87-537	SDN477	23A1H2	1	底北部	細胞膜	(12.0)			青	白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5		温栽培	
104-87	87-538	SDN477	23A1H2	1	底北部	細胞膜	(12.0)			青	白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5		温栽培	
104-87	87-539	SDN477	23A1H2	1	底北部	細胞膜	(12.0)			青	白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5		温栽培	
104-87	87-540	SDN477	23A1H2	1	底北部	細胞膜	(12.0)			青	白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5		温栽培	
104-87	87-541	SDN477	23A1H2	1	底北部	細胞膜	(12.0)			青	白	C	米白	ロクロナデ ロクロナデ</td						

別 表

回数 No.	年月 年 No. 月 No.	製品名 商品名	工具寸法				形状 口径 底径 高さ 分類	加工上 形状 形状・有合物 分類	色調	製作順・手法			機器等 機器 外側 内面 底面	付与物質 付与物 外側 内面	備考			
			直角 溝	グリッド 溝	斜溝	面溝				外面	内面	底面						
104	87	530	S04777	22AH117	1	上端部	長角	B2	24.0	普 G・長・白 G・白	にがい形	ロクロナヂ	ロクロナヂ		3			
104	87	531	S0515	22AH113	1	底面部	直角	B2	13.4	8.0	3.8	普 G・白	B 黄黄褐	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ	6 13		
104	87	532	S0515	22AH113	1	底面部	直角	B2	12.1	7.6	3.8	普 G・白	B 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	28 26		
104	87	533	S0515	22AH114	2	底面部	斜角	B2	16.6	普 G・白	A 黄	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ		8	自然鈍		
104	87	534	S0515	22AH113	1	底面部	斜角	I	(14.6)	(2.8)	普 G・白	A 黄	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ	2	地平不良		
104	87	535	S0515	22AH114	2	上端部	直角	B2	13.8	普 G・長・少 G・白	根	ロクロナヂ	ロクロナヂ		3			
104	87	536	S0515	22AH112	1	上端部	直角	B2	11.9	5.0	3.3	普 G・白	根	ロクロナヂ	ロクロナヂ	16		
104	87	537	S0515	22AH113	1	上端部	小直	A2	15.0	普 G・長・白 G・白	根	ハケメ、 カキメ	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ	3	26.4と同 期種、西 大空型		
104	87	538	S0515	22AH113	1	上端部	直角	B2	12.8	7.6	14.0	普 G・長・白 G・白	根	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ	12 36	スズ、コヅ 他の外因 物質	
104	87	539	S0525	23AG5	1	底面部	無角	B2	7.9	普 G・白	B 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り	19			
104	87	540	S0631	22AH113	1	底面部	無角	B2	12.2	9.0	3.7	普 G・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	11 18	底面部外に へだ書き	
104	87	541	S0637	22AH117-18	1	上端部	直角	B2	36.8	輪 G・長・白	輪白	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ		6	スズ、コヅ 地面上に種 類		
104	87	542	S0638	22AH113	1	底面部	直角	A2	13.6	10.0	3.4	輪 G・長・白	A 黄	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ	27	自然鈍	
104	87	543	S0659	17AO14-19	1	底面部	直角	B2	13.2	普 G・長・白	輪白	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ		4	内部墨跡		
104	87	544	S0692	17AO14	1	上端部	小直	B2	15.0	普 G・長・白	輪白	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ		3	スズ、コヅ		
104	87	545	S0651	22AH	1	底面部	直角	B2	7.4	普 G・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り	36			
104	87	546	S0652	22AH110	1	底面部	有合 角	B2	15.2	普 G・長・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ		8	自然鈍		
104	87	547	S0673	22A20	1	底面部	直角	B2	13.2	2.7	普 G・白	C 黄	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ	23			
105	88	548	P183	18AO13	1	底面部	無角	B2	(13.4)	9.6	3.0	輪 G・長・少 G・白	C にがい形	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り	1 3 5.5	
105	88	549	P184	19AP5	1	底面部	無角	B2	8.4	普 G・白・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後	9			
105	88	550	P212	18AO13	1	底面部	無角	B2	8.0	普 G・白・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後	9			
105	88	551	P393	18AP1	1	底面部	直角	B2	(14.0)	10.4	3.6	普 G・長・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り	1 10	底面部外に へだ書き
105	88	552	P393	18AP1	1	底面部	直角	B2	14.2	3.2	普 G・長・白	A 黄	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ		3		
105	88	553	P414	18AO12	1	底面部	無角	B2	13.2	8.8	3.2	普 G・長・白 G・白	C にがい形	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後	10 19	
105	88	554	P414	18AO11-12	1	底面部	直角	B2	11.8	6.9	4.5	普 G・長・白 G・白	A 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り	3 8	地城や不 良
105	88	555	P434	17AN3	1	上端部	小直	B2	12.4	8.0	13.1	普 G・長・白 G・白	浅槽	ロクロナヂ	ロクロナヂ		4 14 5.5	
105	88	556	P437	17AQ7	1	底面部	無角	A2	13.2	8.7	3.3	普 G・長・白	A 黄	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ	15 36	地城に有 り	
105	88	557	P448	17AQ20	1	底面部	直角	B2	21.0	普 G・長・白	C 黄	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ	定刃ナシ	6	自然鈍		
105	88	558	P489	17AN3	1	上端部	直角	B2	(13.9)	5.8 (3.5)	2.7	普 G・長・白	C 黄	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ	地城	2 7	
105	88	559	P489	17AN3	1	上端部	小直	B2	(15.0)	7.2	(14.0)	普 G・長・内	C にがい形	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ	2 28	スズ	
105	88	560	P526	17AM18	1	上端部	小直	B2	10.0	6.0	(12.0)	普 G・長・白 G・白	浅槽	ロクロナヂ	ロクロナヂ	28 36		
105	88	561	P551	22AH12	1	上端部	長角	B1	22.0	普 G・長・白	根	ロクロナヂ	ロクロナヂ		16			
105	88	562	P551	22AH12	1	上端部	此直	B1	22.0	36.6	普 G・長・端 白・角	根	ロクロナヂ	ロクロナヂ		20	体外外に へだ書き	
105	88	563	P587	16AP23	1	底面部	知合	B1	11.0	普 G・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ナシ	21	自然鈍		
105	88	564	P590	16AF19	1	上端部	直角	A	22.0	9.0	3.8	普 G・長・白	C にがい形	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後の クロロナヂ	28 32	底面部外に へだ書き
106	89	565	P610	14AM14	1	底面部	直角	A2	12.8	9.0	3.8	普 G・長・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後	4 18	地城外に へだ書き
106	89	566	P610	14AM14	1	底面部	直角	A2	13.3	8.9	3.8	普 G・長・白	C 根	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後	25 36	地城外に
106	89	567	P626	17AL21	1	上端部	小直	B2	(13.8)	4.3	(9.0)	普 G・長・白	C 黄	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ	ナシ	1 38	スズ
106	89	568	P716	20AK25	1	上端部	高根	(20.0)				普 G・長・白	浅槽	ロクロナヂ	ロクロナヂ			
106	89	569	P716	20AK20	1	底面部	直角					普 G・白	C 黄	カキメ、タタ キメ、ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ			
106	89	570	P815	17AQ13	1	上端部	小直	A1B	12.0	普 G・長・白	根	ハケメヨコナヂ、ハ ナヂ、ハサミメ	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ナシ	スズ、コヅ		
106	89	571	P815	17AQ16	1	底面部	直角	B2	13.8	10.2	4.0	普 G・長・白 G・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後	36 36	
106	89	572	25A2	III	底面部	直角	B1	14.0	9.1	3.7	普 G・長・白	A 黄	オリー ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り	14 28		
106	89	573	19AL18	N~V	底面部	直角	B1	14.0	9.2	3.8	輪 G・長	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ナシ	7 13	第1次適合 15T	
106	89	574	18AN23-24	V	底面部	直角	A2	13.4	9.8	3.5	普 G・長・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後	6 18		
106	89	575	16AP15	V	底面部	直角	B2	13.6	10.4	3.6	普 G・長・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後	6 10		
106	89	576	17AP20	V	底面部	直角	B2	13.8	9.0	4.0	普 G・長・白	C 黄	ロクロナヂ ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後	6 13	地城外に	
106	89	577	21AO15-13	V	底面部	直角	B2	13.4	10.0	3.5	普 G・長・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後	7 8	底面部外に へだ書き	
106	89	578	16AQ18	V	底面部	直角	A2	(13.2)	8.4	3.9	普 G・長・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後	6 12	内面ヒダ 内面	
106	89	579	18AB5	V	底面部	直角	A2	13.0	8.8	3.2	普 G・長・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後	3 15		
106	89	580	17AO17	V	底面部	直角	B2	13.2	10.0	3.6	普 G・長・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後	6 5 5		
106	89	581	18AP4-9	V	底面部	直角	A2	12.4	9.4	3.0	普 G・長・白	C 黄	ロクロナヂ	ロクロナヂ	ヘラ切り後	6 10 12		

回数 No.	年月 年 No. 月 No.	製品名 品名	工具寸法				加工			形状寸法			形状寸法			形状寸法		備考
			直位 直位	横位 横位	面接 面接	分類 分類	口径 口径	底径 底径	高さ 高さ	形状 形状	含有物 含有物	分量 分量	色調 色調	外面 外面	内部 内部	底厚 底厚	内壁厚 内壁厚	
106. 89. 582	19AO03-25	N 亂毛器 無柄 AIII	11.8	6.7	3.5	輪 石・長・白	C 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	低温外気に 耐えず
106. 89. 583	18AP21	N 亂毛器 無柄 AIII	11.4	7.6	3.3	輪 石・長・白	A 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	△
107. 89. 584	24AL1	N 亂毛器 無柄 BII	(12.8)	7.6	3.3	輪 長・白・角	B 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	地底不良
107. 89. 585	19AP25, 19AQ16	N 亂毛器 無柄 BII	12.0	8.0	3.5	輪 石・長・白	C 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	地底不良
107. 89. 586	17AQ5	N 亂毛器 無柄 BII	13.0	10.0	3.0	普 石・長・白	C 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	
107. 89. 587	23AK10	N 亂毛器 無柄 CII			8.4	輪 長・白・角	B 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	
107. 89. 588	17AQ16	N 亂毛器 有柄 AII	14.2	7.8	4.3	普 石・白	C 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	低温外気に 耐えず 湿度 中程度
107. 89. 589	18AO10-22	N 亂毛器 有柄 BIV	10.4	5.2	5.1	輪 長・白	C 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	
107. 89. 590	25AK12	III 亂毛器 有柄 CIII	11.5	7.8	4.4	輪 石・長・白	A 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	低温外気に 耐えず
107. 89. 591	25AE2	N 亂毛器 有柄 AII	12.0	6.3	3.9	普 石・白	C 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	△
107. 90. 592	18AP13	N 亂毛器 有柄 CII	19.2		4.5	普 石・白	C 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	地底不良
107. 90. 593	23AK5	N 亂毛器 有柄 CII	16.1		3.5	輪 石・長・白	C 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	内壁にへら 音き
107. 90. 594	23AL1	N 亂毛器 有柄 CII	14.8		3.5	輪 石・長・白	A 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	
107. 90. 595	18AO17-18, 19AO2	N 亂毛器 有柄 CII	14.6		2.6	普 石・白	C 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	
107. 90. 596	20AO21	N 亂毛器 有柄 CII	13.0		2.5	普 石・長・白	A 黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	自然動
107. 90. 597	26AH4	N 土被器 無柄 CII	14.2	9.5	3.9	輪 石・長・角	薄黄	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	内表面彩色
107. 90. 598	17AP24-25, 18AQ15	N 土被器 無柄 CII			10.7	普 石・長・白	薄黄	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	△	△	△	△	△	△	
107. 90. 599	18AM15	N 高台 有柄 (12.0)			普 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	内表面彩色 既用
107. 90. 600	18AP16, 19AM15-16	N 高台 有柄 (11.4)			普 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	内表面彩色 既用
107. 90. 601	16AP7	N 高台 有柄 II	28.0		普 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
107. 90. 602	17AQ7	N 上被器 有柄 AII	24.0		輪 石・長・手	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
107. 90. 603	17AQ16	N 上被器 有柄 AII	22.4		輪 石・長・手	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
107. 90. 604	17AP17	N 上被器 小柄 BII	14.0		普 石・長・手	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
107. 90. 605	22AL23	I-II 土被器 有柄			普 石・長・雲	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	地底にへら 音き
108. 90. 606	SD147	24AL6	1 亂毛器 口付棒		輪 石・長	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
108. 90. 607	SD226	25AL7	1 亂毛器 有柄		輪 石・白	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
108. 90. 608	SD20	21AN4	2 亂毛 剥離		輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
108. 90. 609	SD20	21AN4	3 亂毛 剥離	37.2	輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
108. 90. 610	SD20	21AN4	4 亂毛 剥離		輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
108. 90. 611	SK19	21AO2	6 亂毛 剥離		輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
108. 90. 612	SK19	21AO2	7 亂毛 剥離		輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
108. 90. 613	SK19	21AO2	3 亂毛 剥離		輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
108. 90. 614	SK19	21AO2	2 亂毛 剥離	(37.0)	輪 石 白	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
108. 90. 615	SD21	21AN7	1 亂毛 剥離	13.6	(8.4)	4.4	輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	地底付着
108. 90. 616	SD25	20AO25	1 亂毛 剥離		3.2	輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
108. 90. 617	SD25	20AO29	1 亂毛 剥離		3.0	輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
108. 90. 618	SD25	20AN19	1 亂毛 剥離		輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
108. 90. 619	SD25	20AO25	1 亂毛 剥離	(38.4)	輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
108. 90. 620	24AK18	I-II 亂毛 剥離			4.2	輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
108. 90. 621	21AN14	I-II 亂毛 剥離			9.9	3.6	4.6	輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
108. 90. 622	22AN5	I-II 花被 剥離			7.2	輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△		
108. 90. 623	22AN5	I-II 花被 剥離			12.4	輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△		
108. 90. 624	21AL24	I-II 土被 剥離	(25.2)	(23.4)	輪 石	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△		

別 表

別表3 土製品銀察表

別表4 鍛冶関連遺物觀察表

回数 No.	英名 No.	出上位置 部位	頭棘	法量 (mm)			半重(g)	備考	
				長さ Length	幅 Width	厚さ Thickness			
112/94	649	S1108	18AOA-9	1	0.01	76.0	0.80	49.5	102.0(動)上に斜め左凸 身厚2.5mm前後 遠端15~20mm前後(柄円形)
112/94	640	SK777	18APQ-1	1	0.01	(35.5)	[18.5]	13.0	6.0
112/94	641	S1102	18AOA-1	1	0.01	71.5	0.70	26.0	127.0(動)前面斜め左凸面 後面直角
112/94	642	S1104	18AOA-2	1	0.01	74.0	0.70	26.0	130.0(動)前面斜め左凸面 後面直角
112/94	643	S1104	17AQG-1	1	0.01	73.0	0.50	26.0	95.0(動)前面斜め左凸面 後面直角
112/94	644	SX124	19AQE-1	1	0.01	70.0	0.70	35.5	153.0(動)前面斜め左凸面 後面直角
112/94	645	SX67	18APZ-2	1	0.01	36.0	27.5	1.60	11.0
112/94	646	S1102	18APZ-1	1	0.01	40.0	27.0	17.0	20.0(非機能性)

別表5 石器・石製品觀察表

番号 No.	報告 No.	出土地点 遺物	剖面 グリッド	層位	器種	法線 (cm)			重量 (g)	保存状況	石材	備考
						長さ	幅	厚さ				
112.95	647	SX53	24AK6	1	鉢底(瓦面)	1.2	3.2	1.1	2.01	完形	石英	近鉄
112.95	648	SX53	24AK6	1	鉢底	0.9	0.9	0.7	1.01	完形	石英	近鉄
112.95	649	SX52	24AK6	1	鉢底	0.7	0.7	0.6	0.56	完形	水晶	近鉄
112.95	650	SX51	21AN24	1	鉢底	0.4	0.4	0.2	0.05	完形	石英	近鉄
112.95	651	SX51	21AN24	1	鉢底	0.3	0.3	0.2	0.05	完形	石英	近鉄
112.95	652	SX51	21AN25	1	鉢底	0.3	0.3	0.2	0.05	完形	石英	近鉄
112.95	653	SX51	21AN25	1	鉢底	0.3	0.3	0.2	0.05	完形	石英	近鉄
112.95	654	SX51	21AN25	1	鉢底	0.3	0.3	0.2	0.05	完形	石英	近鉄
112.95	655	SX52	21AN25	1	鉢底	0.3	0.3	0.2	0.05	完形	石英	近鉄
112.95	656	SX51	21AN25	1	鉢底	0.3	0.3	0.2	0.05	完形	石英	近鉄
112.95	657	SX51	21AN25	1	鉢底	0.3	0.3	0.2	0.05	完形	石英	近鉄
112.95	658	SOD20	16AP13	1	鉢底	7.7	8.3	5.4	427.5	完形	麻料	熱
112.95	659	SOD20	16AP13	1	鉢底	6.2	6.2	5.2	10.2	完形	麻料	熱
112.95	660	SN63	17AQ23	1	鉢底	7.2	7.2	5.3	61.0	下限欠損	麻料	本筆作手筋
112.95	661	SN63	17AQ23	1	鉢底	7.2	7.2	5.3	61.0	下限欠損	麻料	本筆作手筋
112.95	662	SOD20	16AP18	1	鉢底	13.7	5.4	2.9	277.0	上端(鉢底)欠損	麻料	熱
112.95	663	SOD20	17AR18	1	鉢底	10.5	5.2	3.3	199.7	上端(鉢底)欠損	麻料	熱
112.95	664	SX409	16AP22	1	鉢底	11.0	3.25	3.8	218.6	完形	麻料	熱
112.95	665	S1018	18AO9	1	鉢底	9.5	4.4	3.2	21.20	完形	麻料	熱
112.95	666	S1018	18AO9	1	鉢底	10.0	6.9	5.7	52.10	完形	麻料	熱
112.95	667	S1018	17AP15	1	鉢底	10.2	7.7	5.4	595.5	下限欠損	麻料	熱
112.95	668	S1018	17AQ13	1	鉢底	18.5	6.4	4.4	586.6	完形	麻料	熱
112.95	669	SOD20	16AP9	2	鉢底斜面	7.5	6.2	4.0	89.5	完形	麻料	熱
114.96	670	S1018	17AP10	1	鉢底斜面	6.3	6.4	2.5	47.6	完形	麻料	熱
114.96	671	S1025	21ZH1	1	鉢底斜面	6.4	3.7	2.0	27.25	欠損	麻料	熱
114.96	672	S1025	20AO25	1	鉢底斜面	6.3	4.2	1.6	23.30	欠損	麻料	熱
114.96	673	S1025	20AO25	1	鉢底斜面	4.8	5.6	3.6	44.45	欠損	麻料	熱
114.96	674	S1025	20AO25	1	鉢底斜面	10.0	8.6	3.6	131.0	右斜下端欠損	麻料	熱
114.96	674	SX19	21AO3	2	鉢底斜面	6.0	5.3	3.5	38.00	完形	麻料	熱
114.96	675	SX19	21AP19	1	鉢底斜面	3.0	4.6	2.2	11.77	下端欠損	麻料	熱
114.97	676	SX409	16AP24	1	鉢底	10.1	7.0	6.7	609.0	完形	麻料	熱
114.97	677	SX409	21AH1	1	鉢底	14.1	5.5	4.3	43.00	上端(鉢底)欠損	麻料	熱
115.97	678	SE20	21AN4	3	片打石	5.3	2.6	2.3	28.8	完形	チャート	表面にぼく
115.97	679	SE20	17AQ21	3	片打石	4.0	4.15	2.3	32.4	上下端欠損	チャート	表面にぼく

測量 No. No.	報告 No. No.	出土位置 通路	断位 グリッド	断位 番号	断位 番号	法量 (cm)			重量 (g)	遺存状況	石材	備考
						長さ	幅	厚さ				
115	97-080	SK8455	17AP19	1	右石	10.3	10.2	0.7	1,622.0	一面のみ	砂岩	熱然、本量化石有
115	97-081	SK8451	24AK15	1	右石	11.1	14.2	0.7	1,211.0	一面のみ	細粒砂岩	熱然
115	97-082	SK8608	15AO4	1	塊状	14.9	11.3	7.7	1,777.0	下限欠損	高鉄岩	熱然付帯
115	97-083	SD3092	17AO19	1	塊状	14.0	13.1	12.9	2,600.0	一面のみ	高鉄岩	熱然付帯
115	97-084	SK8215	17AP23	1	塊状	8.5	3.6	0.7	118.0	一面のみ	高鉄岩	熱然
115	97-085	SK8451	17AP15	1	塊状	8.5	2.8	2.7	103.0	一面のみ	玉武岩	
115	97-086	SK8451	17AP19	1	塊状	7.7	3.6	3.0	119.5	一面のみ	玉武岩	
115	97-087	SK8451	17AP19	1	塊状	7.7	3.6	3.0	119.5	一面のみ	玉武岩	
115	97-088	SK8451	17AP19	1	塊状	7.7	3.6	3.0	119.5	一面のみ	玉武岩	
115	97-089	SK8451	17AP19	1	塊状	11.8	4.7	4.6	230.0	一面のみ	高鉄岩	
115	97-090	SK8451	17AP19	1	塊状	11.6	4.0	2.6	194.0	一面のみ	高鉄岩	
115	97-091	SK8453	17AM12	2	塊状	10.0	4.4	3.3	234.0	一面のみ	玉武岩	
115	97-092	SK8453	17AQ22	1	塊状	10.2	5.0	3.1	230.0	一面のみ	高鉄岩	熱然、付帯物あり
115	97-093	SK8453	17AQ22	3	塊状	13.9	5.6	3.3	375.0	一面のみ	高鉄岩	
115	97-094	SK8453	17AQ12	1	塊状	13.0	5.3	4.6	352.0	一面のみ	高鉄岩	
115	97-095	SK8453	17AQ12	1	塊状	12.6	4.9	4.9	337.5	一面のみ	高鉄岩	
115	97-096	SK8453	17AQ12	1	塊状	13.0	6.0	3.5	406.0	一面のみ	高鉄岩	

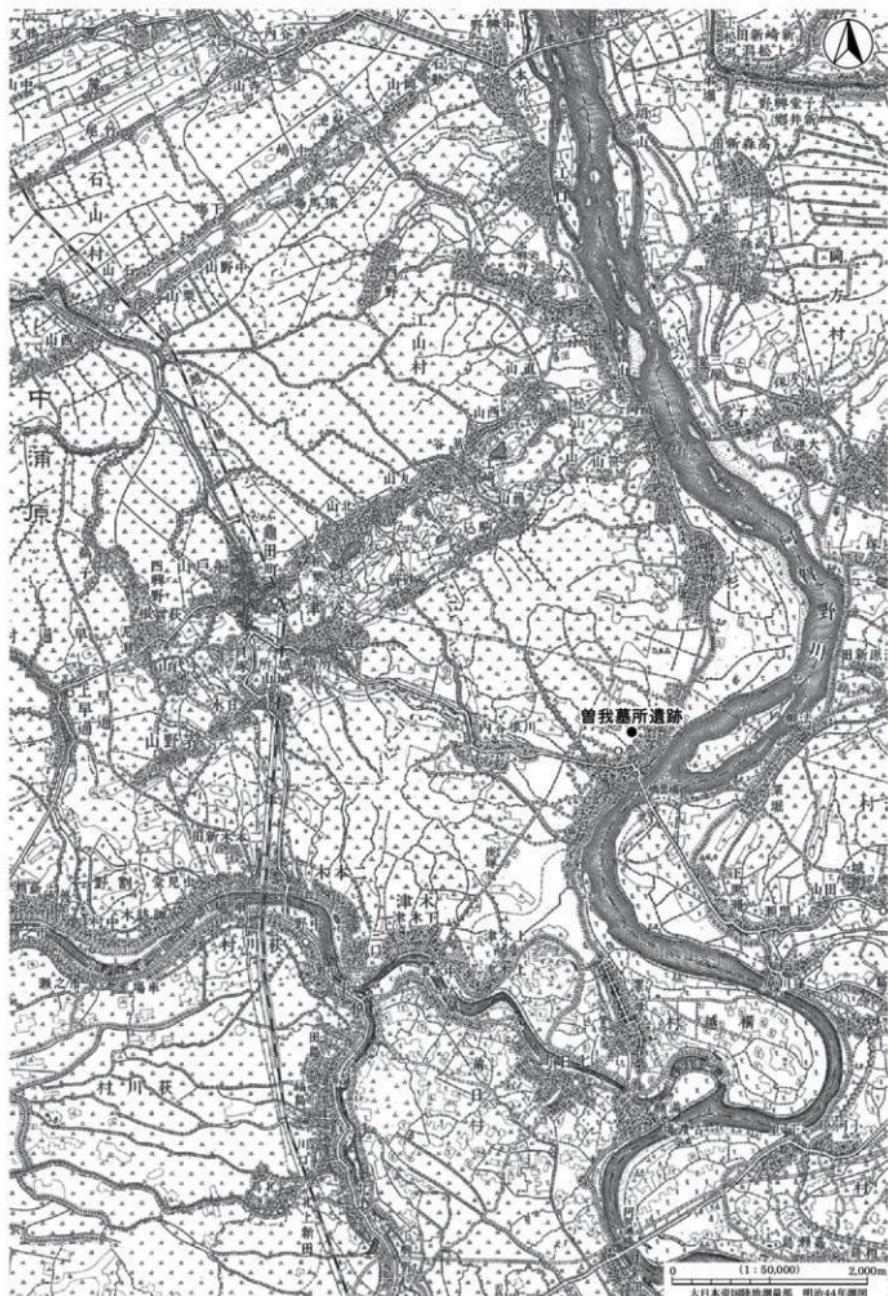
別表 6 金属製品観察表

測量 No. No.	報告 No. No.	出土位置 通路	断位 グリッド	断位 番号	断位 番号	断位 番号	法量 (mm)			重量 (g)	備考	
							長さ	幅	厚さ			
116	98	696	SKA119	18AM1	2	鉛錠(鉛) [心形遮断部]	50	396.0	67.0	33.0	298.0	
					2	鉛錠(鉛) [心形遮断部]	50	92.5	39.0	32.0	65.8	
116	98	696	SKA119	18AM21	2	鉛錠	50	102.5	51.5	34.0	118.7	
116	98	696	SKT78	17AK25	1	鉛錠	50	130.5	32.0	32.0	97.2	
116	98	701	SK8453	17AQ21	1	鉛錠	50	100.0	23.0	17.0	51.0	
116	98	701	SK8453	SD357	1	鉛錠の芯	50	45.5	17.0	15.0	25.0	
116	98	702	SKA486	18AJ12	9	鉛錠の芯	50	(103.0)	22.0	15.5	38.0	
116	98	703	SKA486	18AJ22	9	鉛錠の芯	50	(60.0)	19.0	18.0	31.7	
117	99	100	703	SK8564	21AH16	1	鉛錠	50	(75.5)	(40.0)	9.0	24.5
117	99	100	703	SK8564	22AH12	1	鉛錠	50	47.0	48.5	コマ15.5	純錠(22.0) 38.5 第1次調査?
117	99	100	703	SK8564	19AP9	1	刃子	50	126.5	16.5	8.0	21.0
117	99	100	707	SK8564	17AQ1	14	刃子	50	(116.0)	29.0	17.0	35.6
117	99	100	707	SK8564	17AQ1	10	刃子	50	18.0	16.0	—	17.0
117	99	100	709	SKA119	17AM21	2	鉛錠	50	(88.0)	26.0	5.0	28.8
117	99	100	710	SKA119	17AQ18	1	刃子	50	48.5	18.0	9.0	7.6
117	99	100	710	SKA119	17AQ18	1	刃子	50	(77.0)	25.5	10.0	17.0
117	99	100	712	SKA444	17AQ10	1	刃子	50	(72.0)	13.0	10.0	8.6 中央部に鉛残存
117	99	100	713	SKA466	17AQ20	1	刃子	50	63.0	16.0	10.0	10.5 中央部に鉛残存
117	99	100	714	SD3059	17AQ25	1	刃子	50	(48.0)	16.0	12.0	11.5
117	99	100	714	SD3059	17AQ25	1	IV型刀身型金具、留め具	50	(60.0)	80.0	0.0	28.0
117	99	100	716	SK8478	17AQ22	1	刃子	50	50.0	24.0	20.0	27.6
117	99	100	717	SK115	21AN24	1	刃子	50	(26.0)	12.0	7.0	1.8
117	99	100	718	SK115	21AN25	2	刃子	50	44.0	13.5	7.0	9.3
117	99	100	719	19AP3	N/縫	1	刃子	50	211.0	54.5	16.0	393.0
117	99	100	720	18AC22	N/縫	1	刃子	50	248.0	69.0	28.0	355.5 鋼の鉛跡あり
117	99	100	721	18AK4	N/縫	1	刃子	50	(87.5)	(17.0)	(6.0)	14.0 鋼合しない個体
117	99	100	722	18AK5	17AQ15	1	刃子	50	(88.0)	22.0	10.0	39.0
117	99	100	723	18AK5	17AQ15	1	刃子	50	(6.0)	4.8	3.0	3.0
117	99	100	724	SKN63	17AQ16	1	刃子	50	59.0	31.0	14.0	42.0
117	99	100	725	18AP18	田口	1	刃子	50	(25.0)	26.0	—	17.0 錠体
117	99	100	726	SD3055	24AI15	1	環状の底面	50	(56.0)	13.0	11.5	9.4
117	99	100	727	SKA1	24AL6	2	鍔	50	9.5	22.5	1.5	1.4 变水通穴 (変水)
117	99	100	728	SKA1	25AI14	2	鍔	50	20.5	21.5	1.5	1.3 变水通穴
117	99	100	729	SKA16	18AN15	2	鍔	50	23.0	23.0	1.0	2.3 古瓦等
117	99	100	730	SKA10	22AK42	3	鍔	50	26.0	25.5	5.0	8.6 4枚古瓦等 1枚は古瓦通穴 (古瓦)
117	99	100	731	SKA15	17AQ15	1	鍔	50	25.0	25.0	3.0	1.3 古瓦等を含む 下には古瓦等の中では古瓦

別表 7 木製品観察表

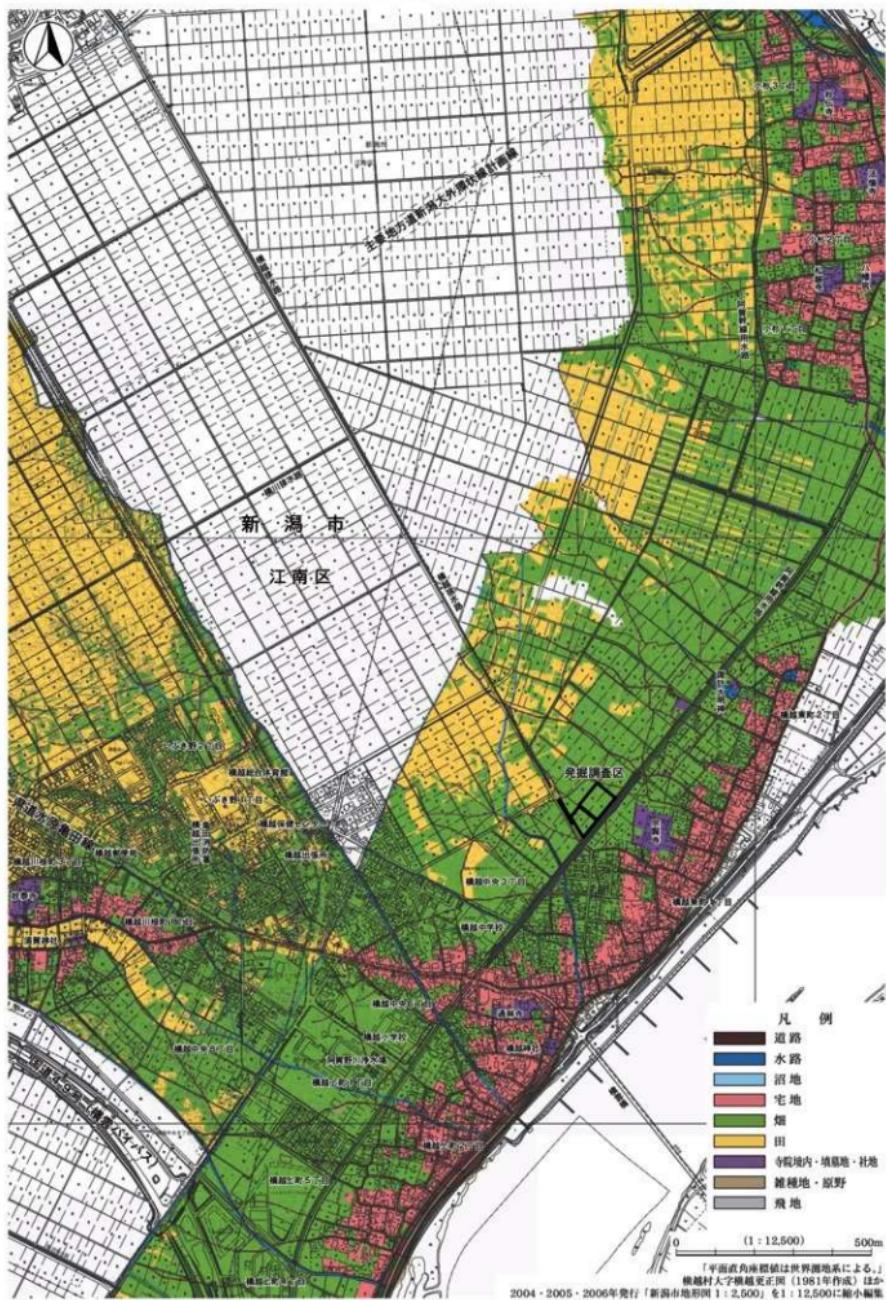
測量 No. No.	報告 No. No.	出土位置 通路	断位 グリッド	断位 番号	断位 番号	断位 番号	法量 (cm)			備考	
							長さ	幅	厚さ		
118	101	732	SK8278	17AQ23	8	木製品	木手	—	—	1.0	下限欠損、上端化粧
118	101	732	SK8278	17AQ23	4	木製品	木手	梅田	9.4	9.3	2.4
118	101	734	SK8278	17AQ23	4	木製品	木手	梅田	(49.2)	2.0	1.2 下限欠損、一部折損
118	101	736	SK8278	17AQ23	4	木製品	木手	梅田	(43.0)	1.5	1.4 下限欠損
118	101	736	SK8251-PI25	18AP7	1	木製品	木手	カゴツ	41.0	18.8	13.6
118	101	736	SK8251-PI25	18AP7	2	木製品	木手	カゴツ	(67.1)	21.0	9.5
118	101	739	SI04-PI21	18AC3	1	木製品	木手	木手	29.5	—	15.0 他の木材と利用用
118	101	740	SK8278	17AQ23	1	木製品	木手	梅田	18.8	6.1	6.8
118	101	740	SK8278	17AQ23	2	木製品	木手	梅田	(62.0)	14.4	2.6
118	101	741	SK8278	17AQ23	2	木製品	木手	梅田	(71.9)	11.8	3.3 軸角材の再利用
118	101	742	SK8278	17AQ23	2	木製品	木手	梅田	(44.0)	10.8	1.6
119	102	743	SK8278	17AQ23	2	木製品	木手	梅田	(74.0)	21.2	4.8
119	102	744	SK8278	17AQ23	2	木製品	木手	梅田	(57.2)	20.5	2.0
119	102	745	SK8278	17AQ23	2	木製品	木手	梅田	(49.0)	18.6	2.5
119	102	746	SK8278	17AQ23	2	木製品	木手	梅田	(98.2)	23.7	6.7
119	102	747	SK8278	17AQ23	2	木製品	木手	梅田	(141.1)	51.8	20.8 丸木舟(転用)
120	103	748	SK8278	17AQ23	2	木製品	木手	梅田	(156.5)	45.1	40.8 丸木舟(転用)
120	103	749	SK8278	17AQ23	2	木製品	木手	梅田	(126.6)	(40.6)	(34.3) 丸木舟(転用)
120	103	750	SK8278	25AI14	2	木製品	木手	—	0.5	0.5	0.4
120	103	751	SK8278	25AI14	2	木製品	木手	—	0.4	0.6	0.4
120	103	751	SK8278	25AI14	2	木製品	木手	—	0.4	0.5	0.4
120	103	751	SK8278	25AM21	2	木製品	木手	—	0.6	0.6	0.5
120	103	751	SK8278	25AM21	2	木製品	木手	—	0.6	0.6	0.4
120	103	751	SK8278	25AM21	2	木製品	木手	—	0.6	0.6	0.4

図 版



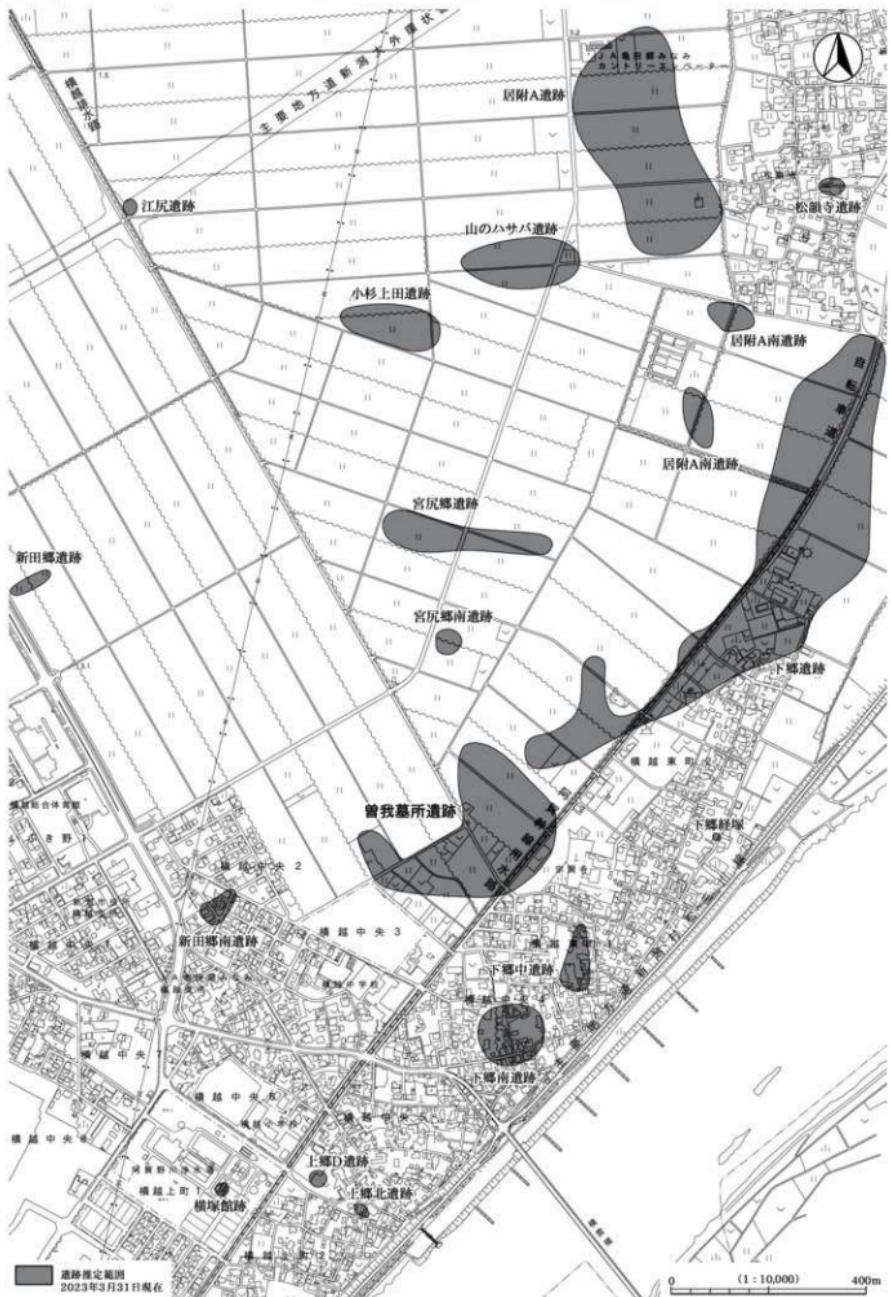
図版 2

周辺の旧土地利用図 (1/12,500)



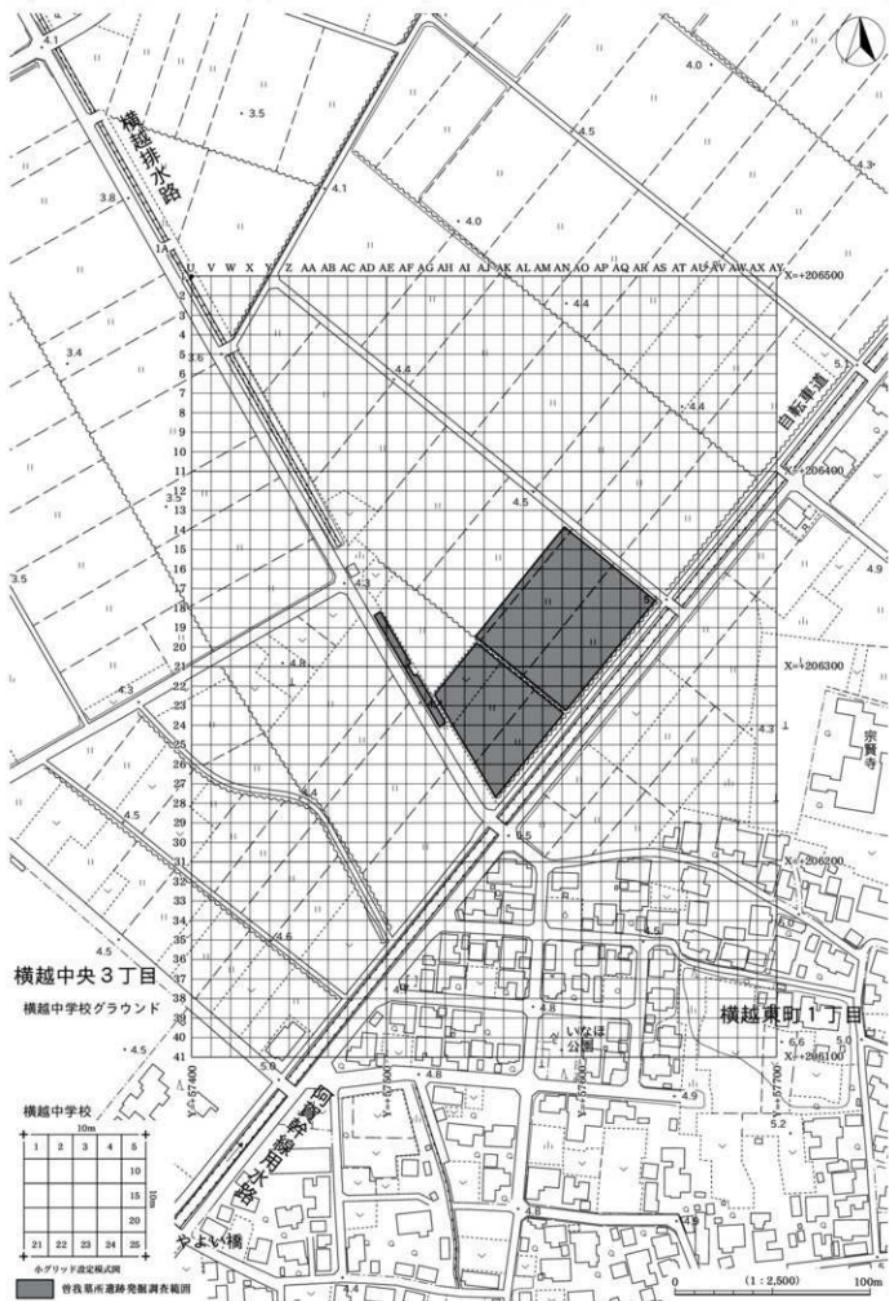
周辺の遺跡 (1/10,000)

図版 3



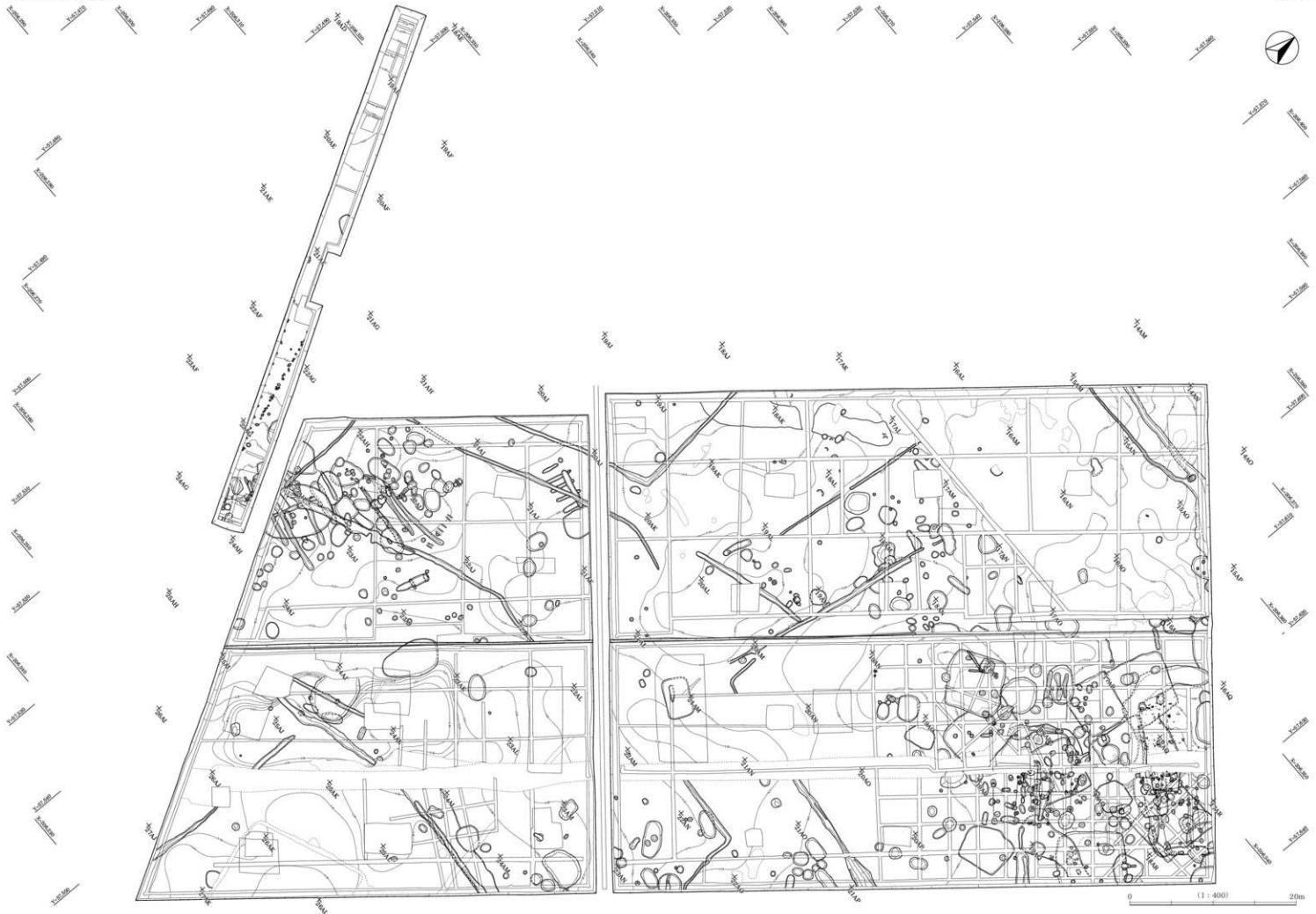
圖版 4

グリッド設定図(1/2,500)



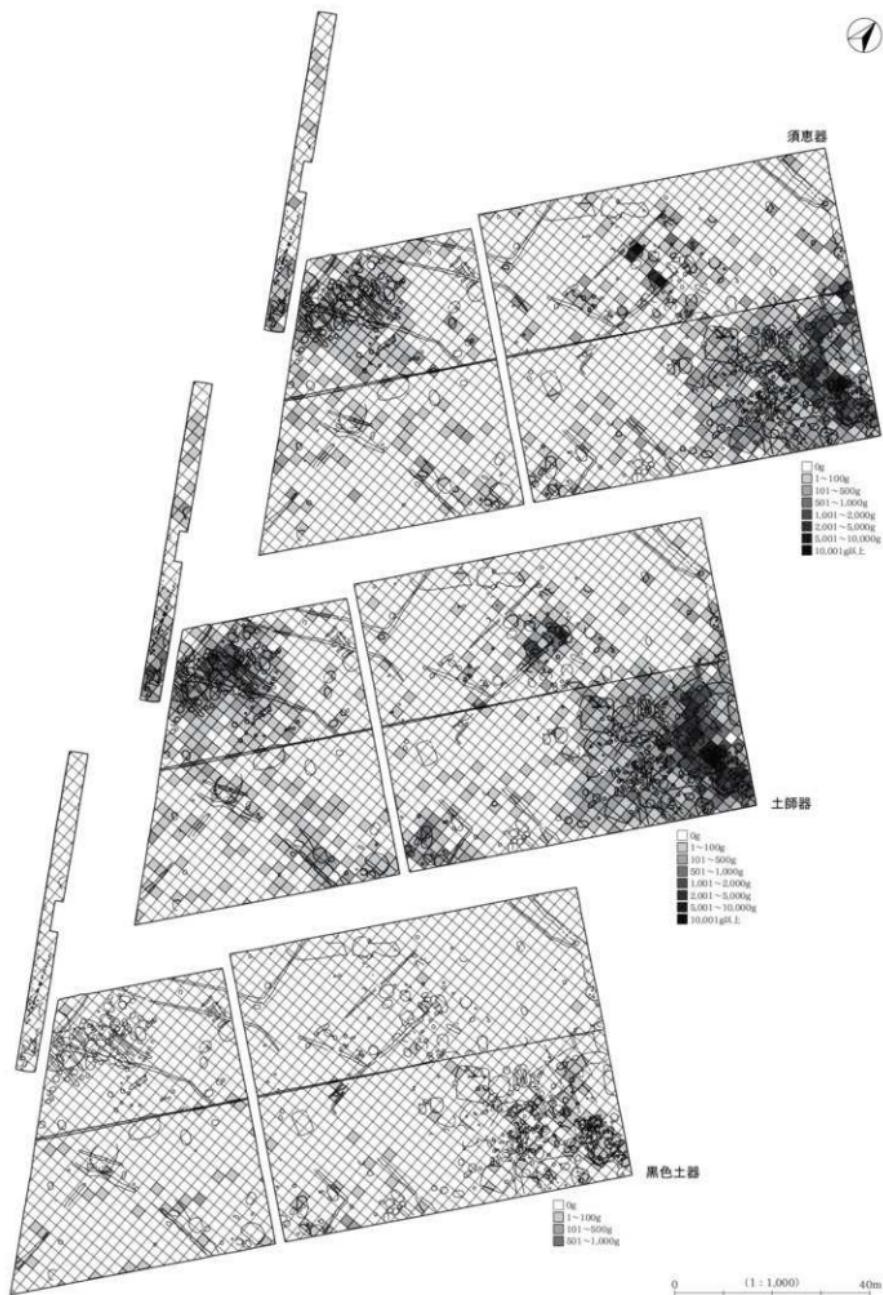
「平面直角座標値は世界測地系（測地成果2011）による。」
2004年発行「新潟市地形図1:2,500」を加筆修正

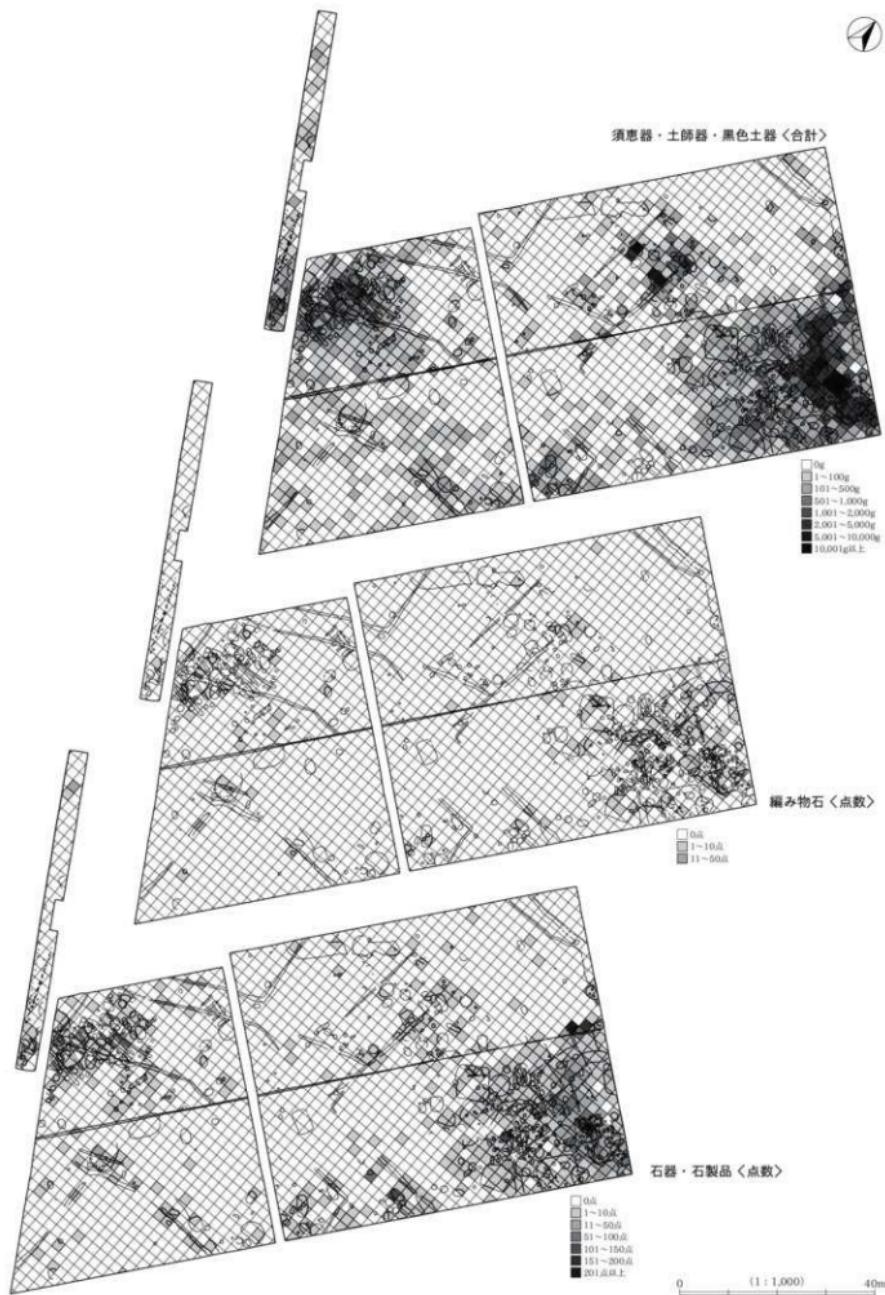
遺構全体図 (1/400)

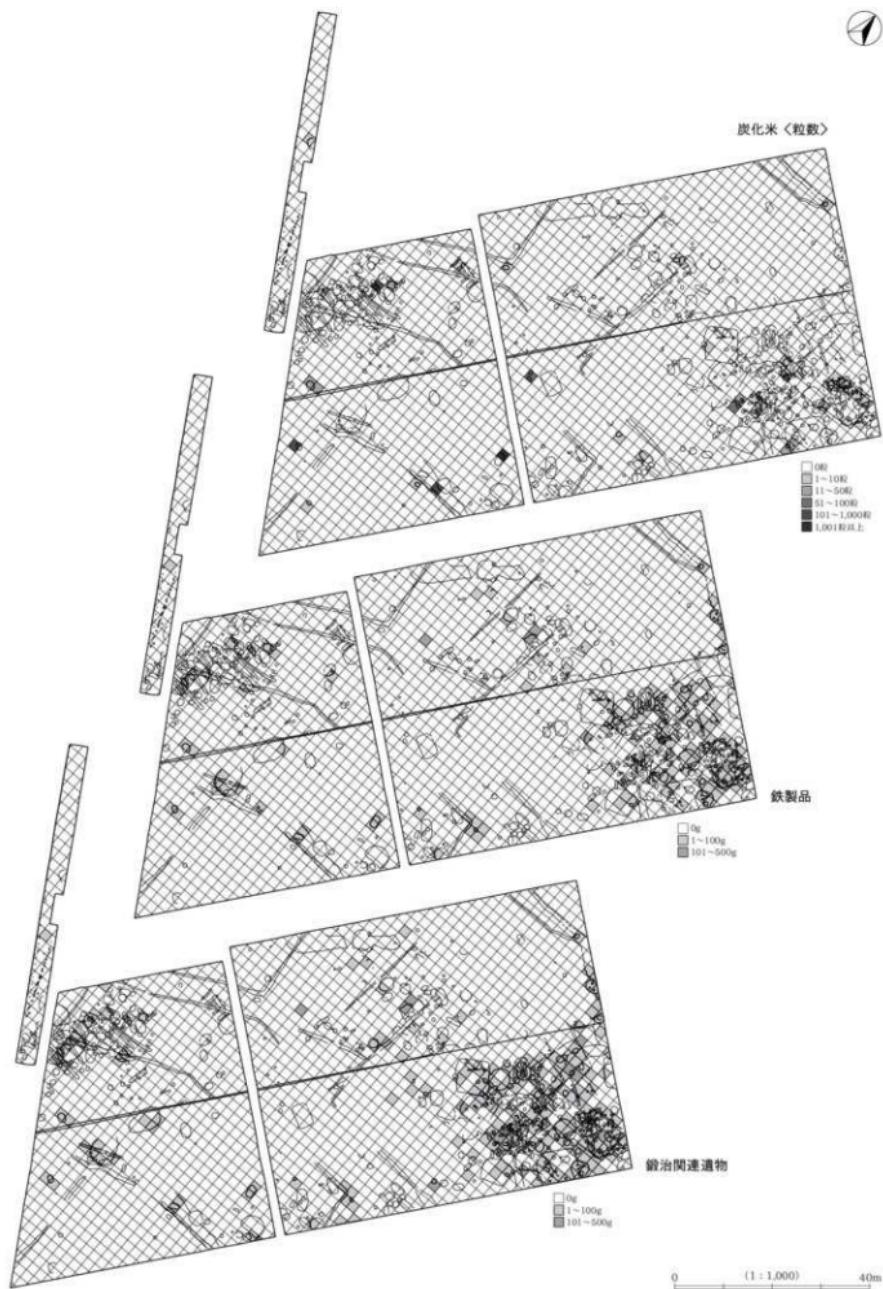


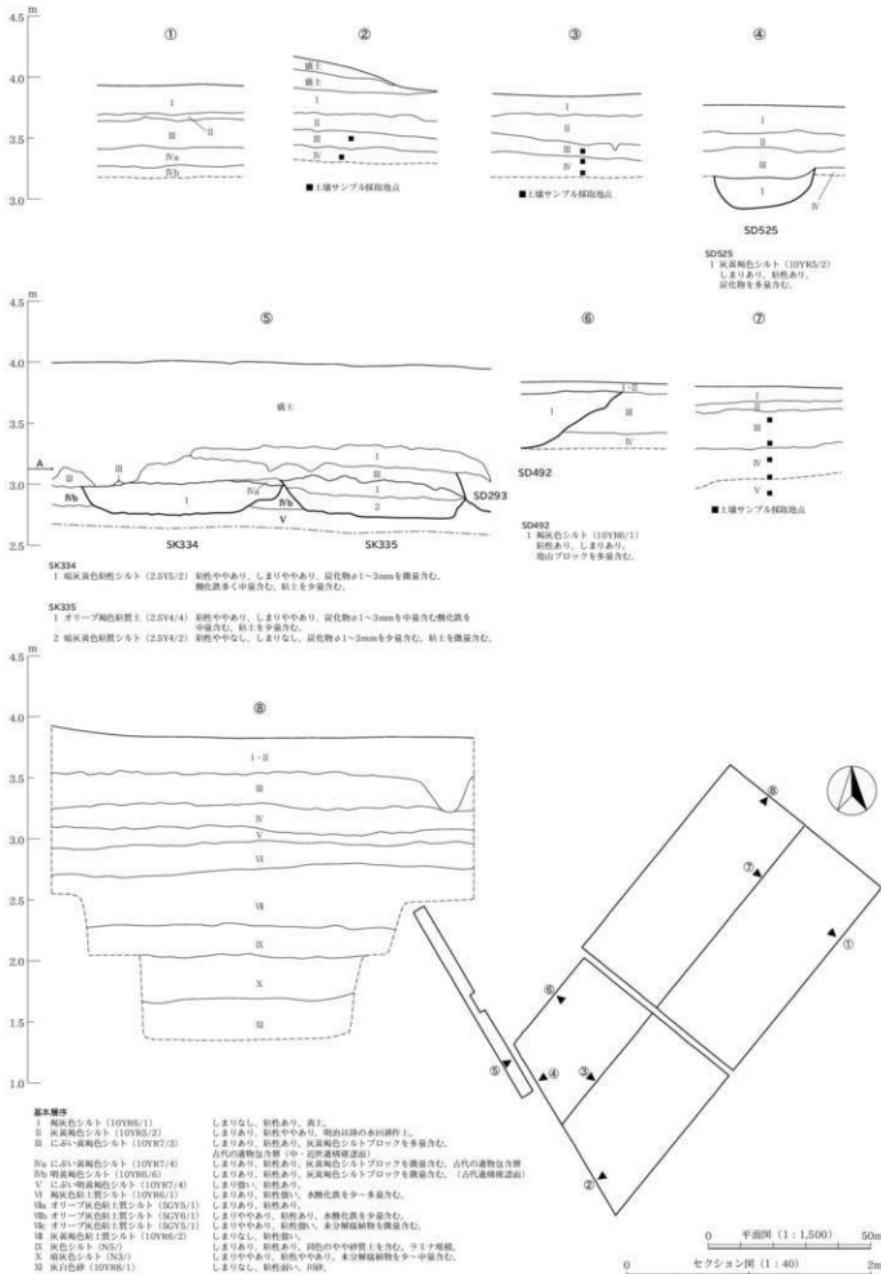
小グリッド別出土遺物重量分布図 1 (1/1,000)

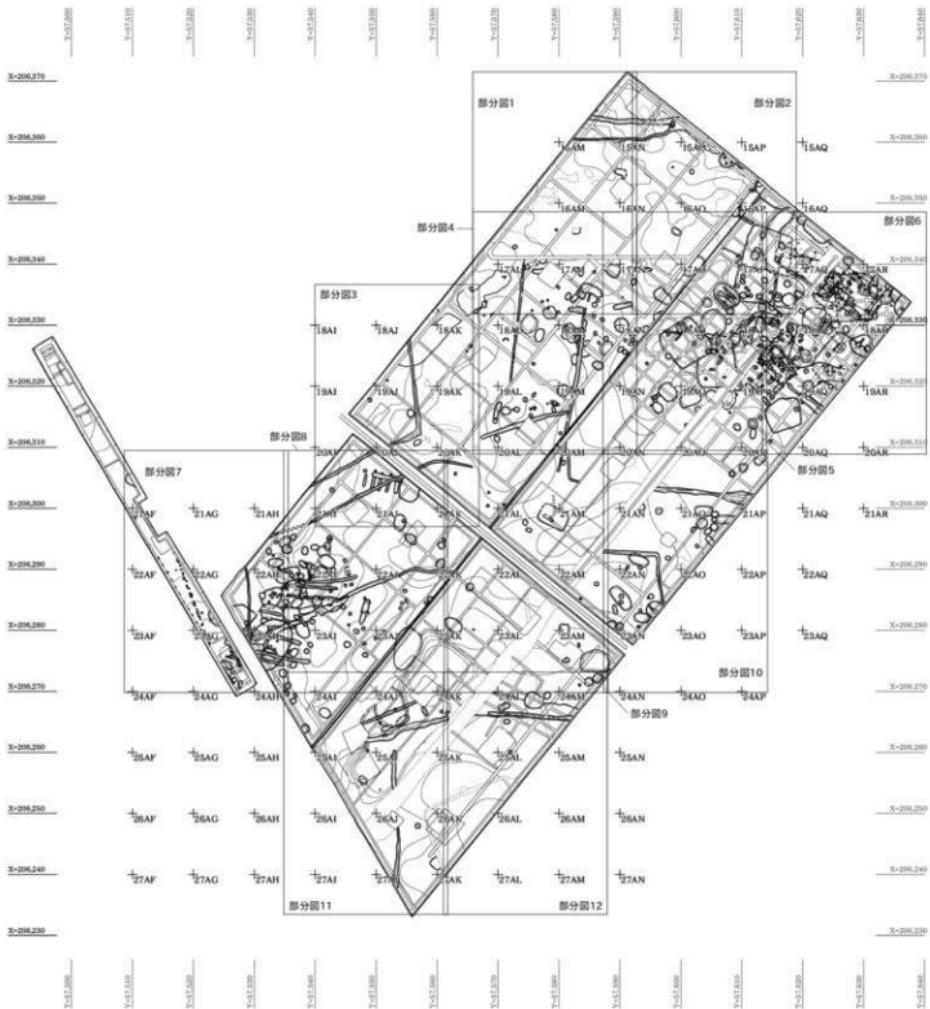
図版 6





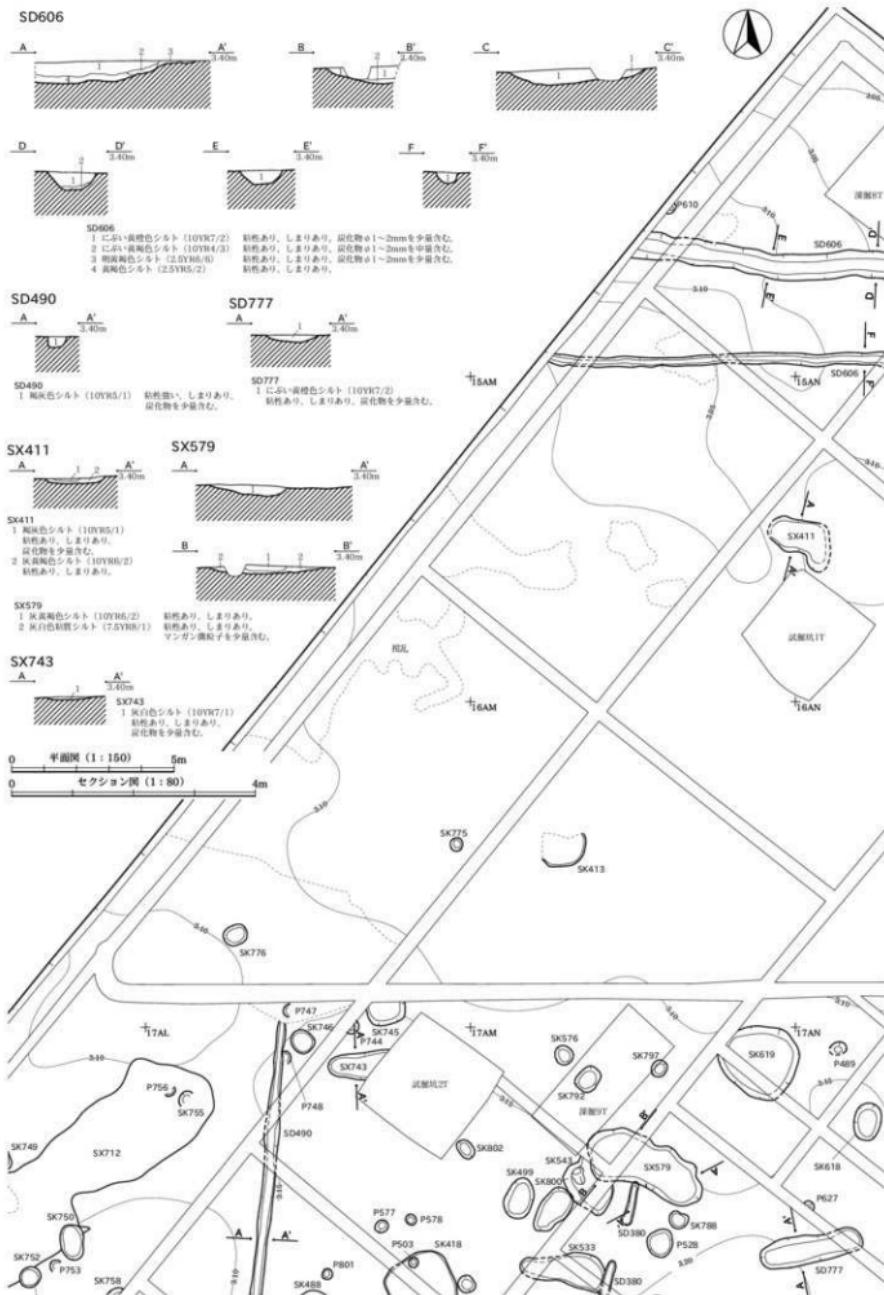






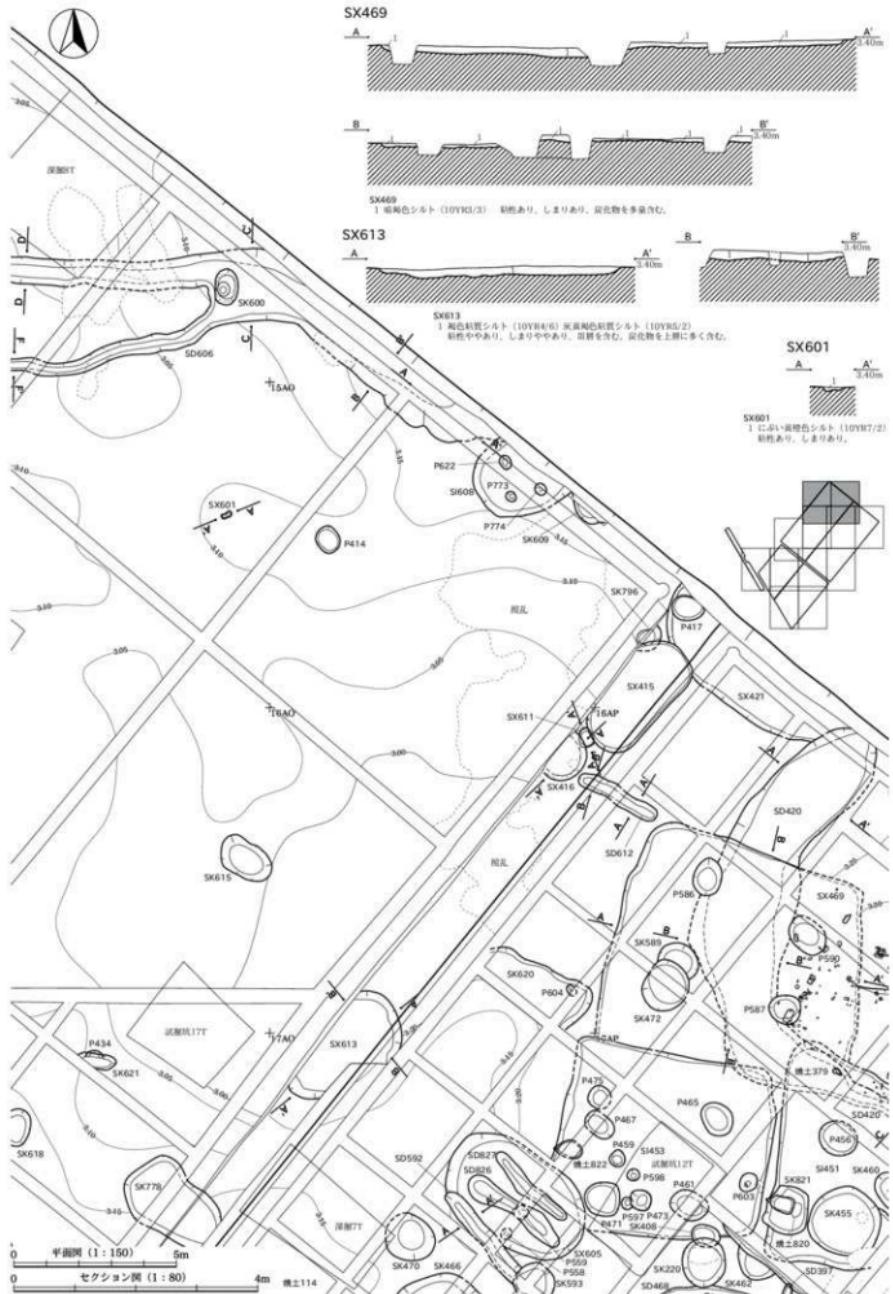
圖版 11

遺構平面部分図 1 (1/150)・古代・近世遺構個別図 (1/80)



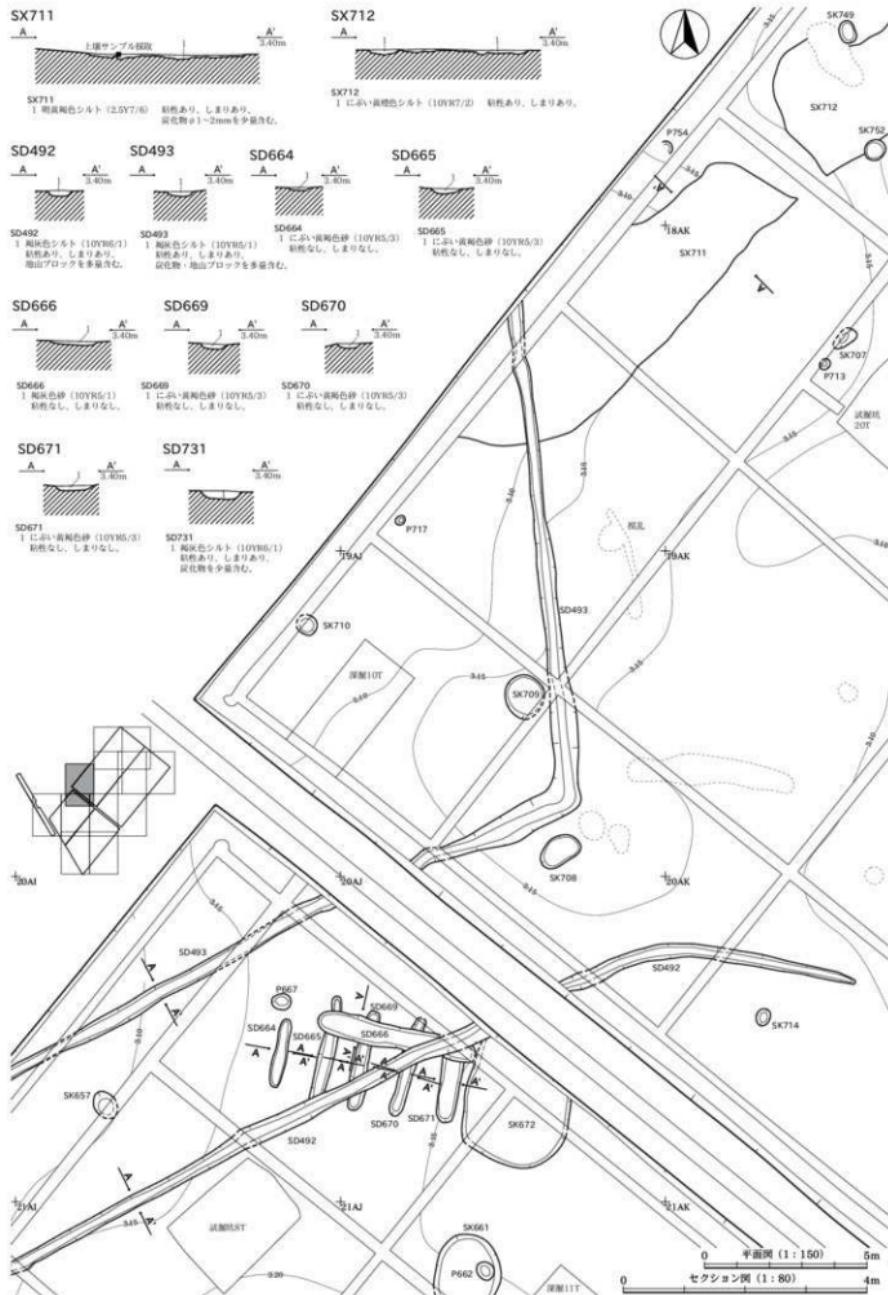
遺構平面部分図 2 (1/150)・古代遺構個別図 (1/80)

図版 12



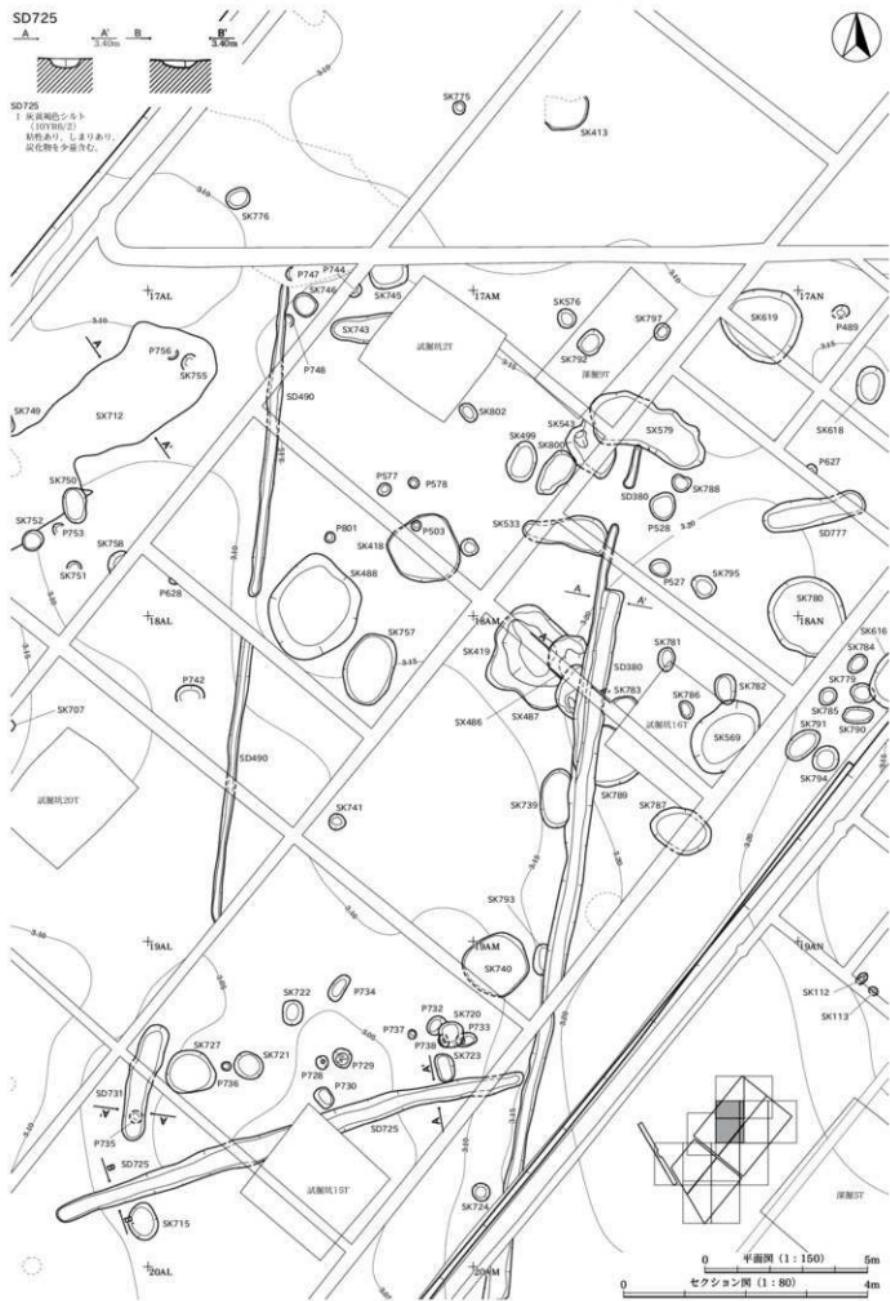
圖版 13

遺構平面部分図 3 (1/150)・古代・近世遺構個別図 (1/80)

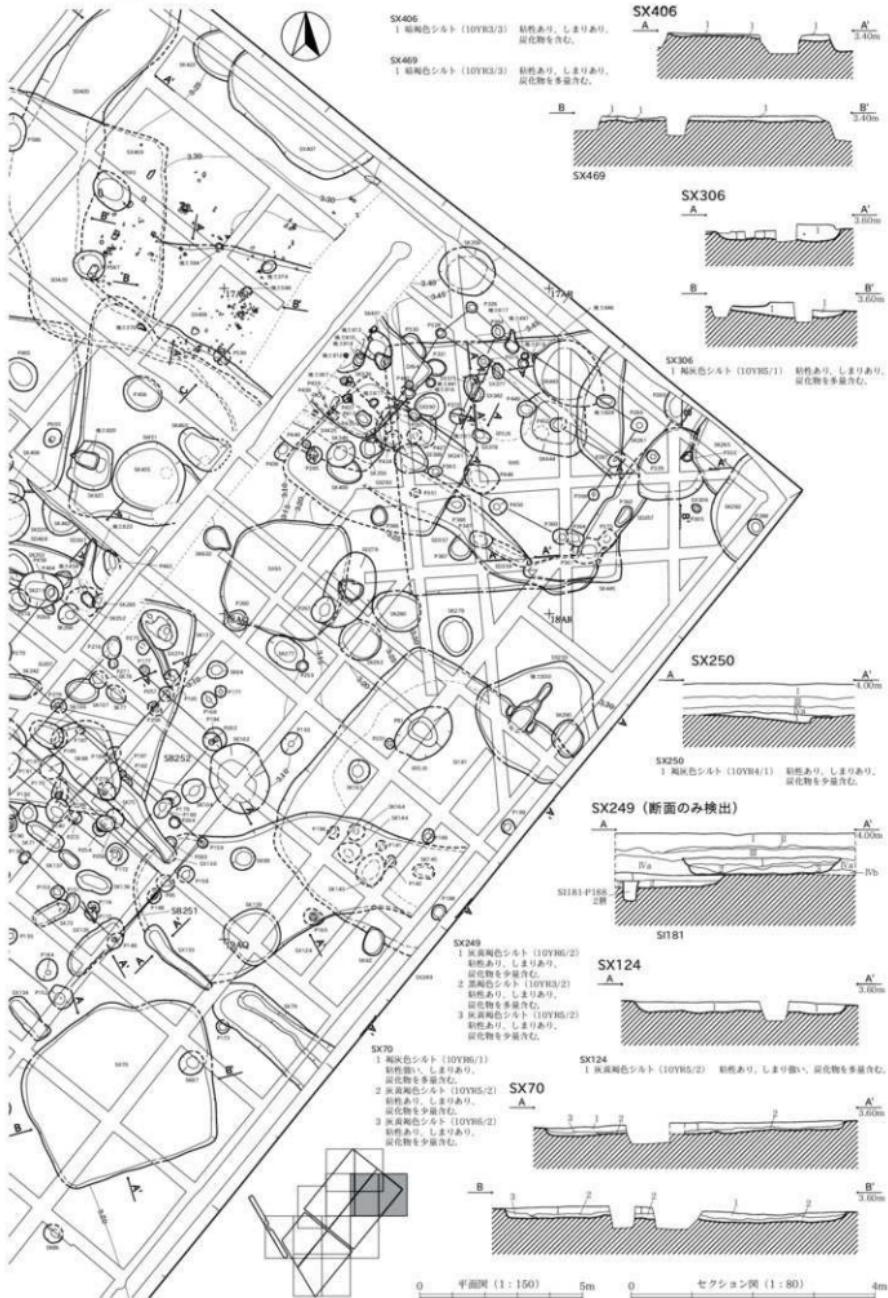


遺構平面部分図 4 (1/150)・古代遺構個別図 (1/80)

圖版 14

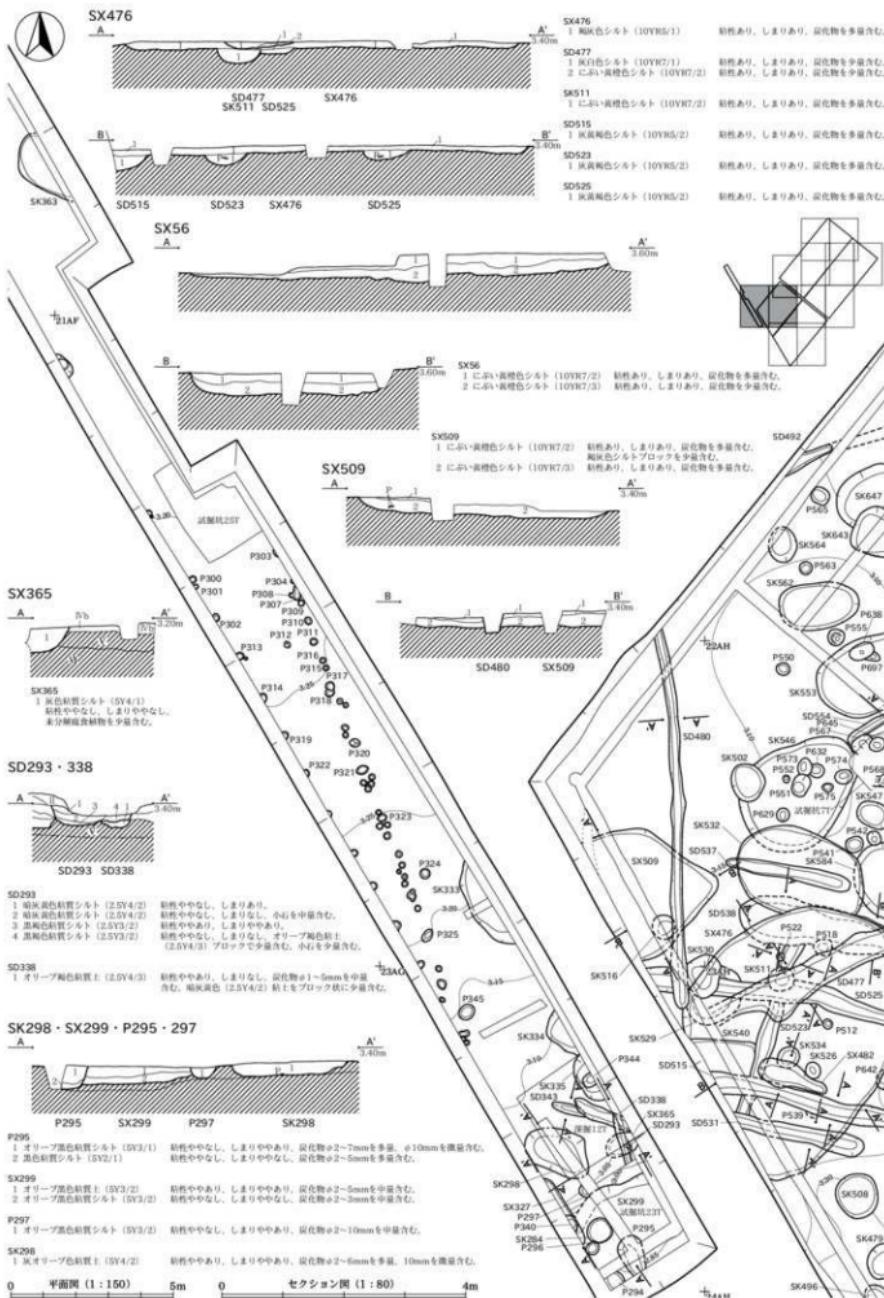






圖版 17

遺構平面部分図 7 (1/150)・古代・近世遺構個別図 (1/80)



遺構平面部分図 8 (1/150)・近世遺構個別図 (1/80)

圖版 18



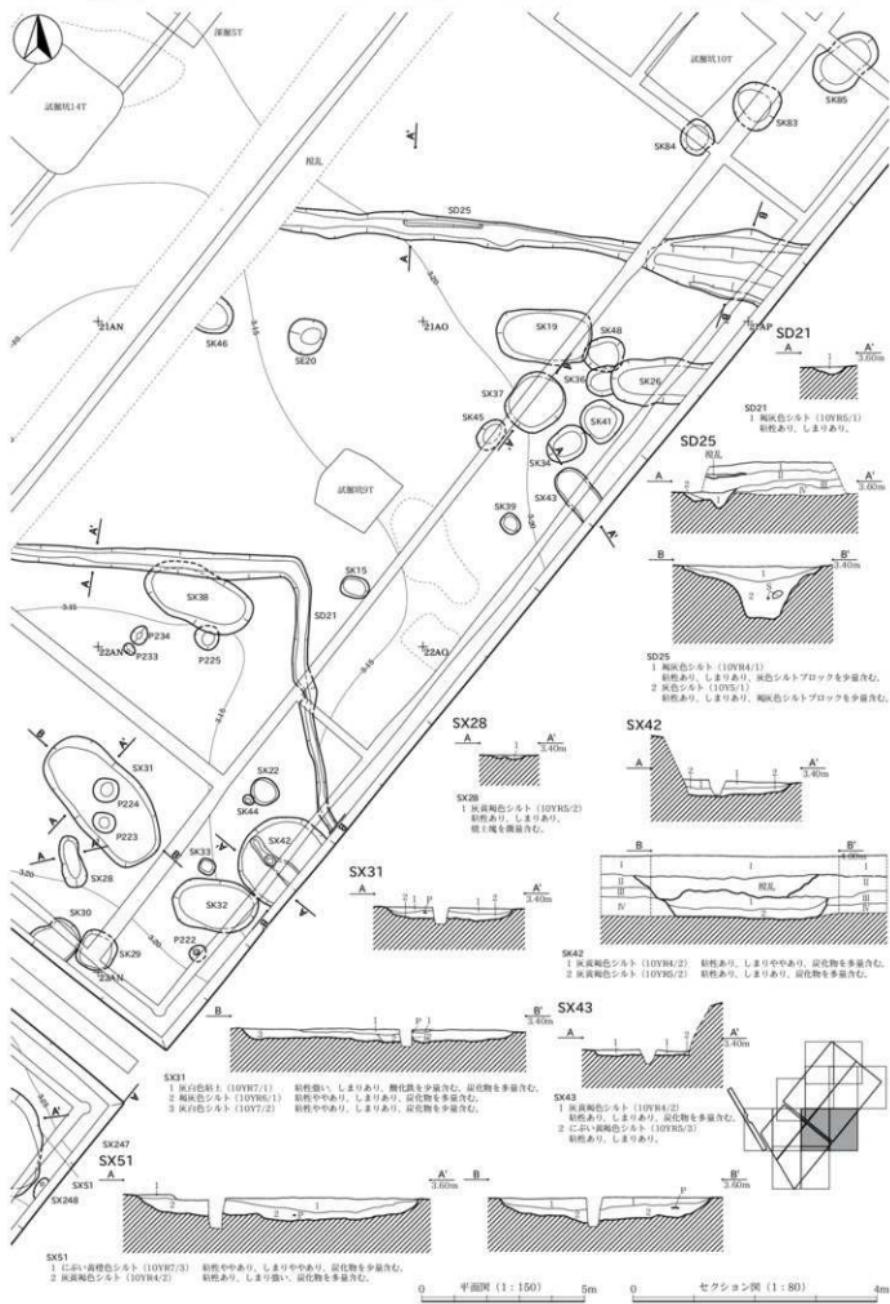
圖版 19

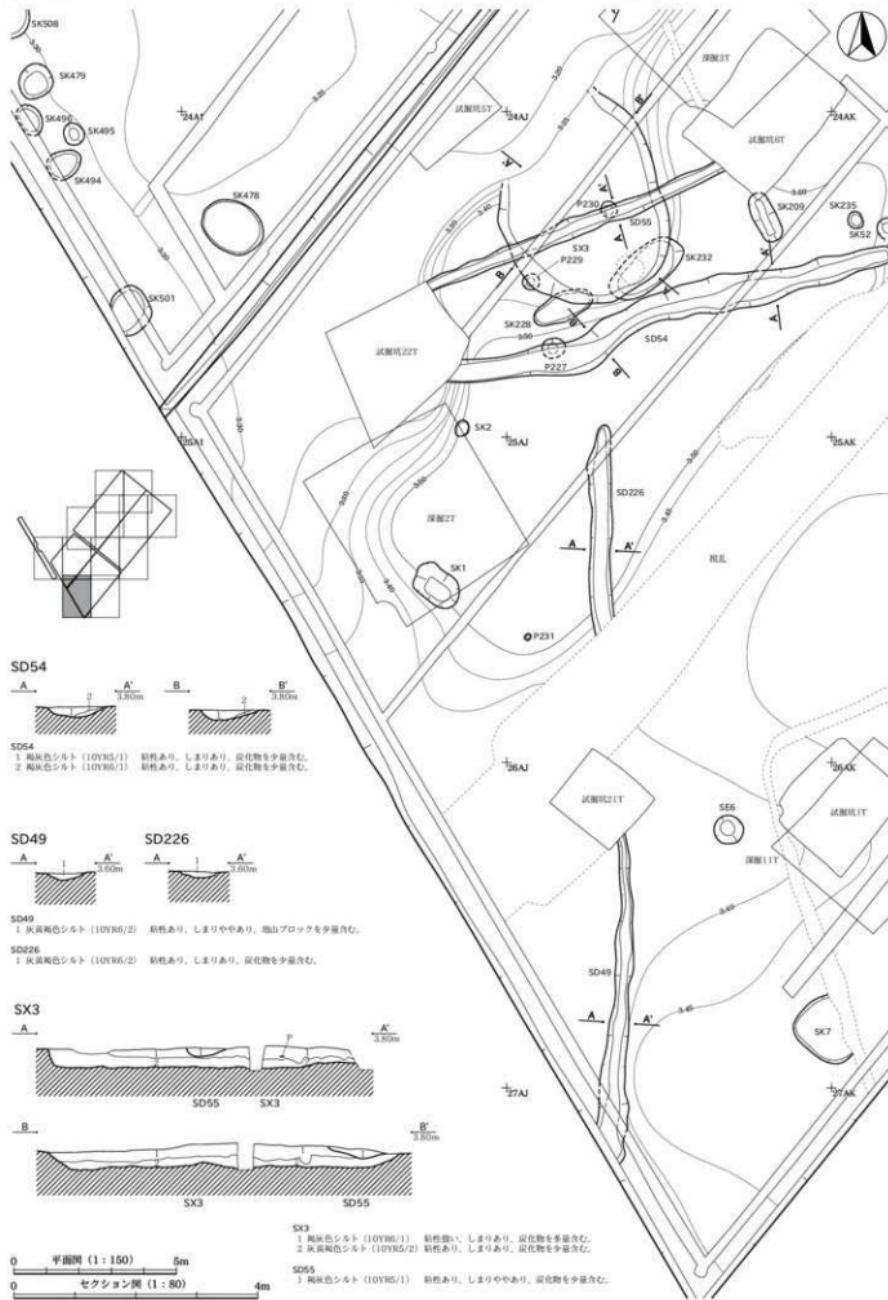
遺構平面部分図 9 (1/150)



遺構平面部分図 10 (1/150)・古代・近世遺構個別図 (1/80)

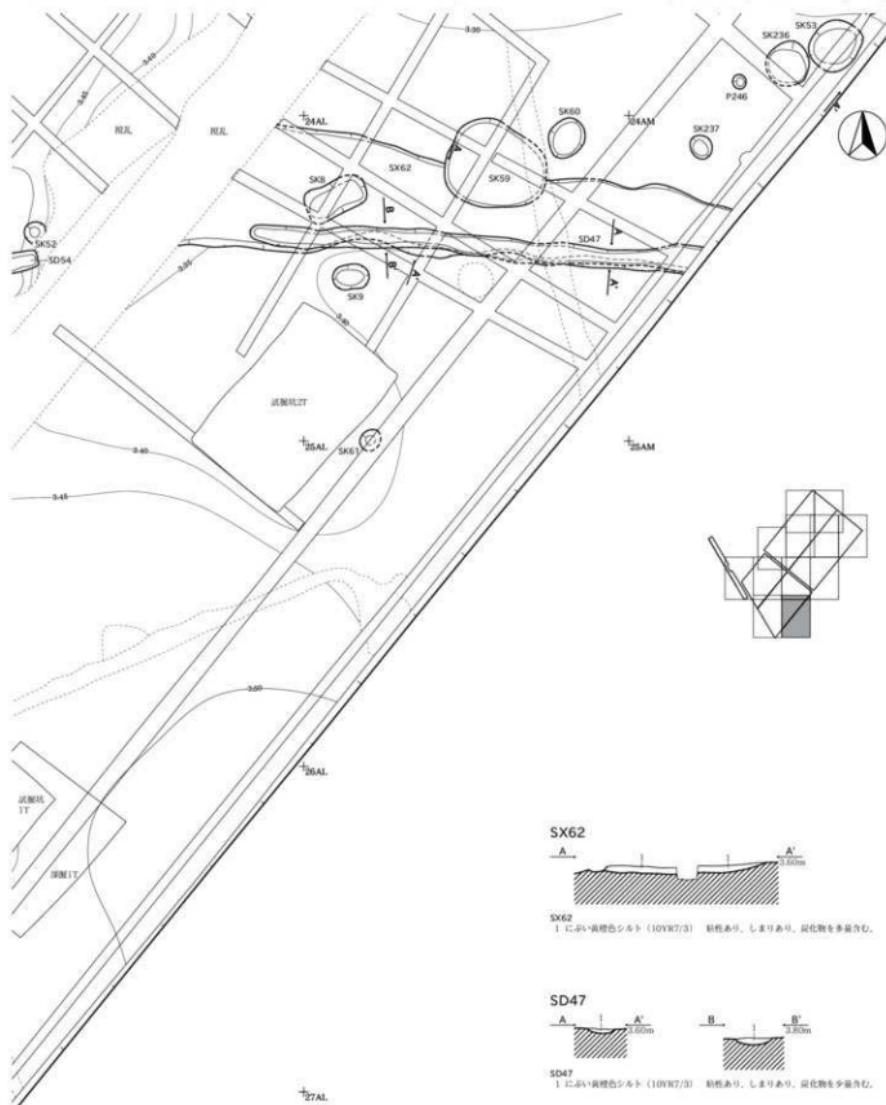
圖版 20



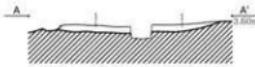


遺構平面部分図 12 (1/150)・古代・中世遺構個別図 (1/80)

圖版 22



SX62



5X62 1にぶい黄褐色シルト (JOYR7/3) 粘性あり、しまりあり。炭化物を多量含む。

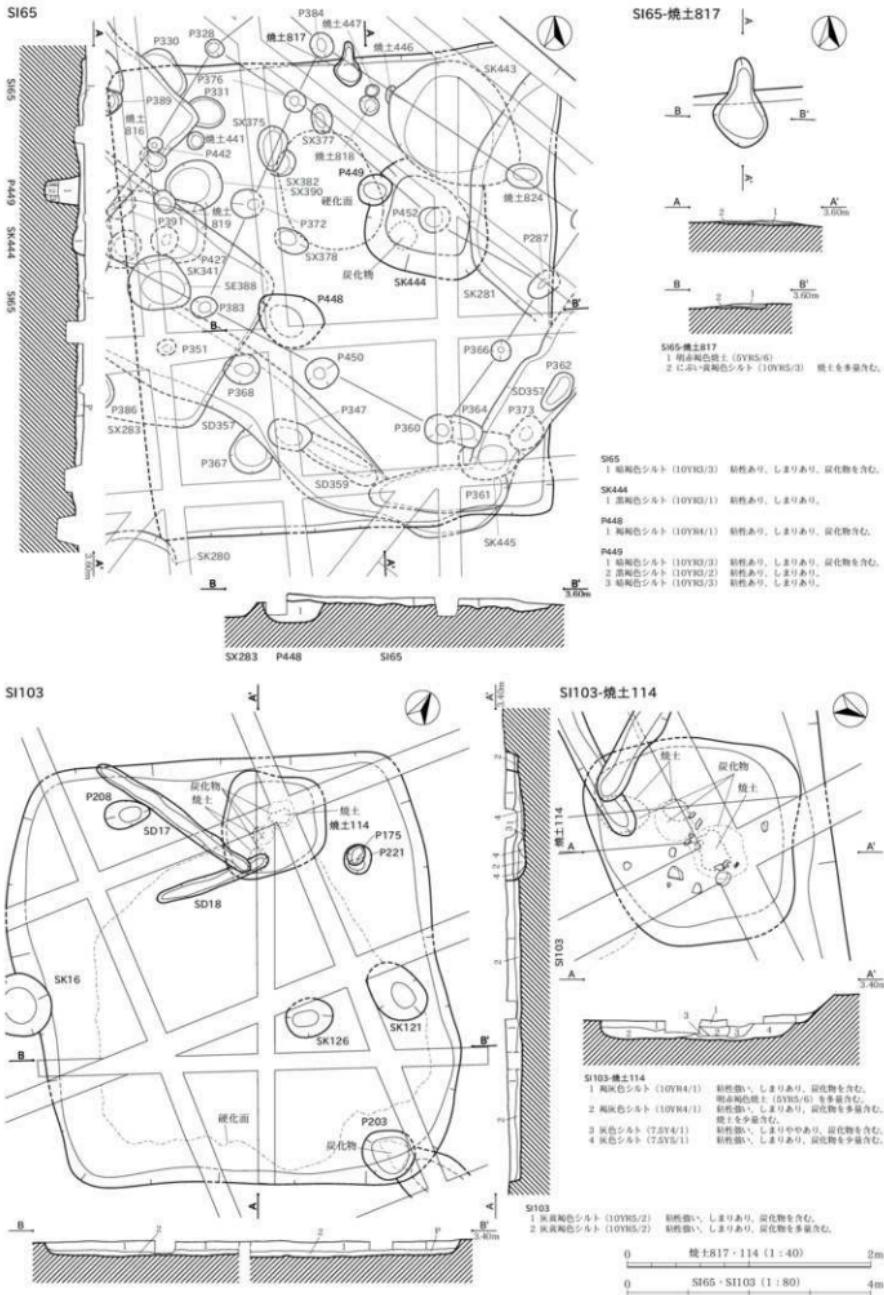
SD47

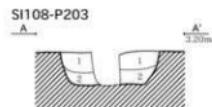
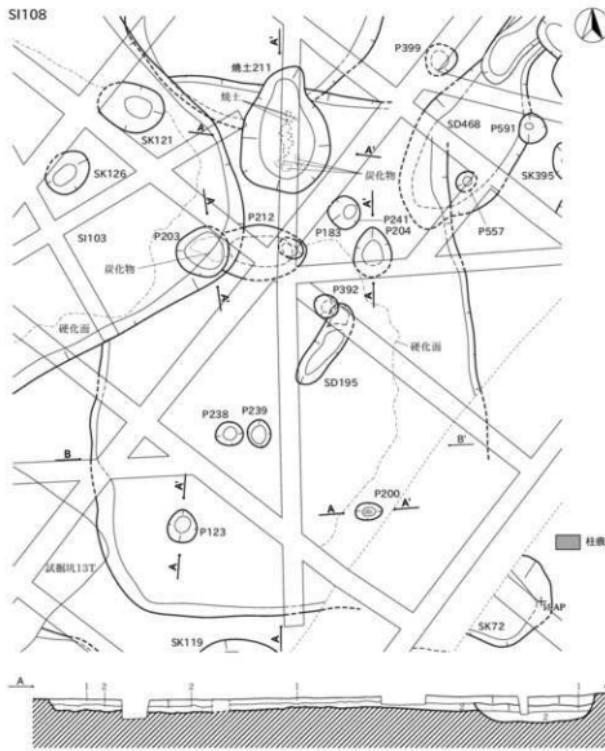


SD47
1に長い黄褐色シルト (10W87/30) 粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む

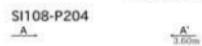
○ 平面圖 (1:150) 5

セクション図 (1 : 80)





SI108-P203
1 灰黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり、
炭化物を少量含む。
2 灰黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり、
炭化物を極端に多量含む。



SI108-P204
1 灰色粘土 (10Y6/1) 粘性あり、しまりあり、
炭化物を少量含む。粘性
2 灰色シルト (10YR6/1) 粘性あり、しまりあり、
炭化物を少額含む。
3 灰色シルト (10YR5/1) 粘性あり、しまりあり、
炭化物を少量含む。



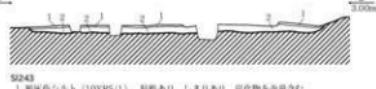
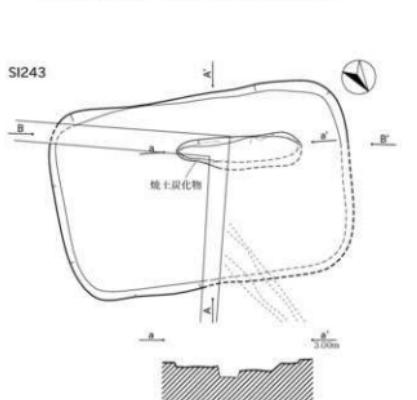
SI108-P200
1 灰色粘土 (10Y6/1) 粘性強い、しまりやあり、
炭化物を少量含む。粘性
2 灰黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり、
炭化物を多量含む。



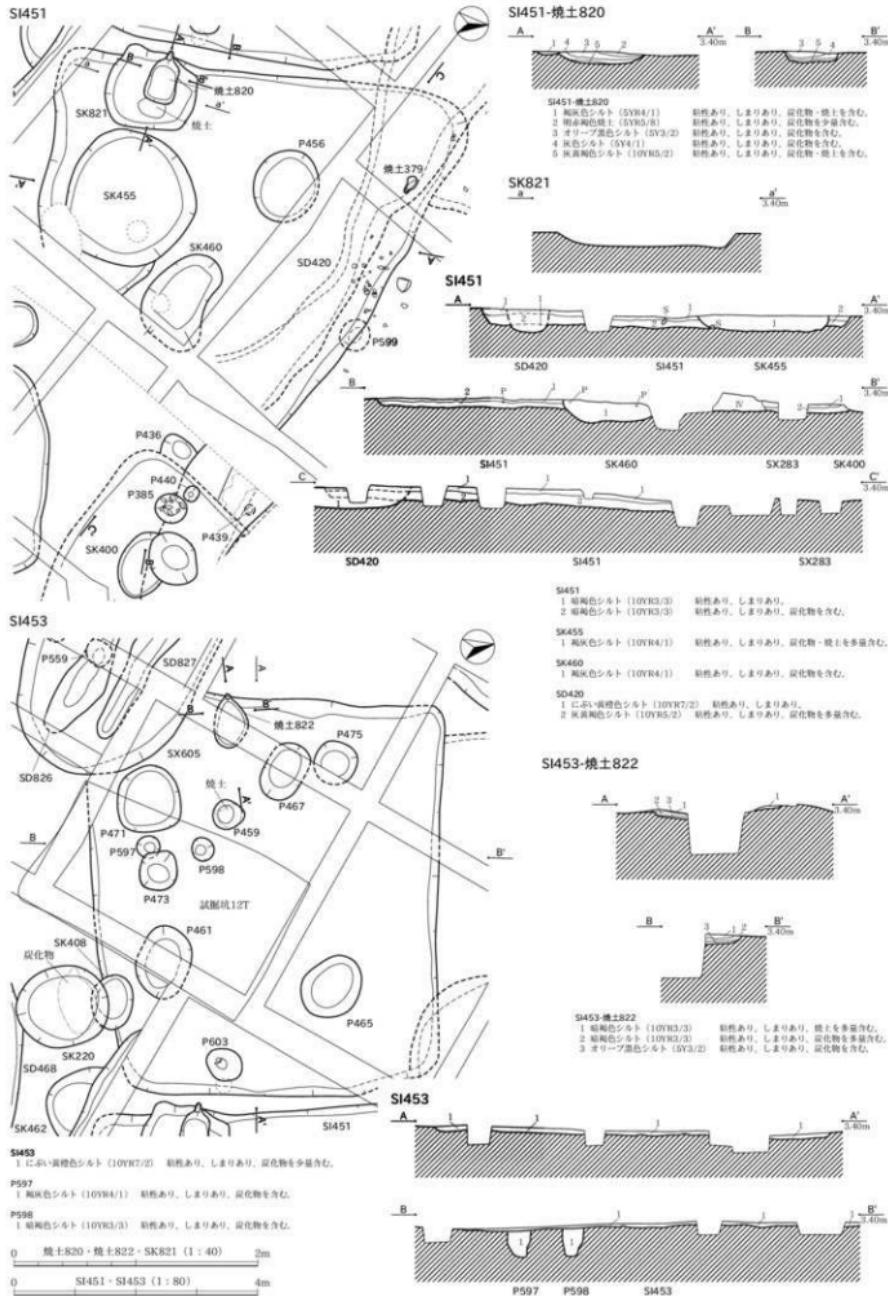
SI108-P123
1 灰黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり、
炭化物を少量含む。

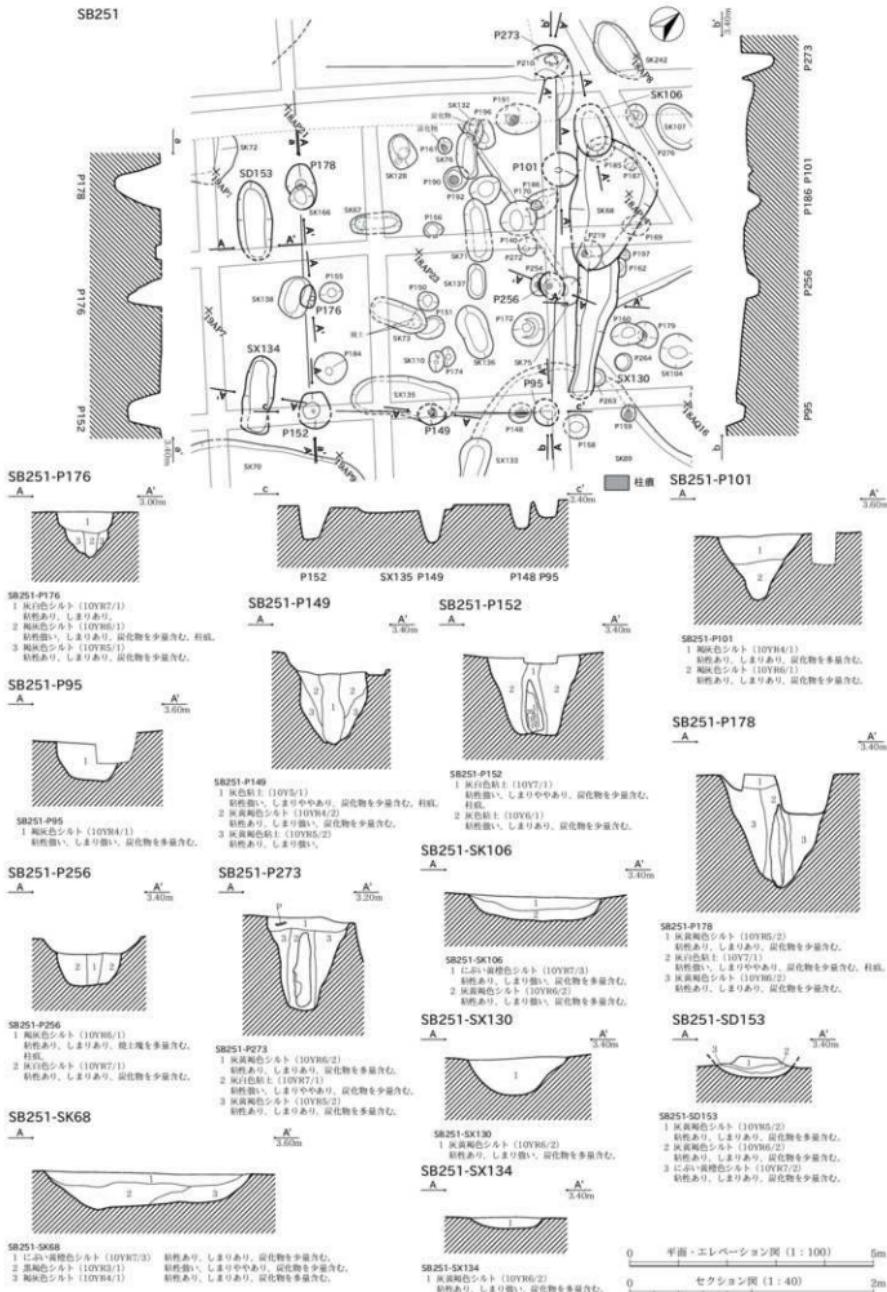


SI108-焼土211
1 灰色シルト (10YR6/1) 粘性強い、しまりあり、炭化物を少量含む。
2 灰色シルト (10YR6/1) 粘性強い、しまりあり、炭化物を多量含む。

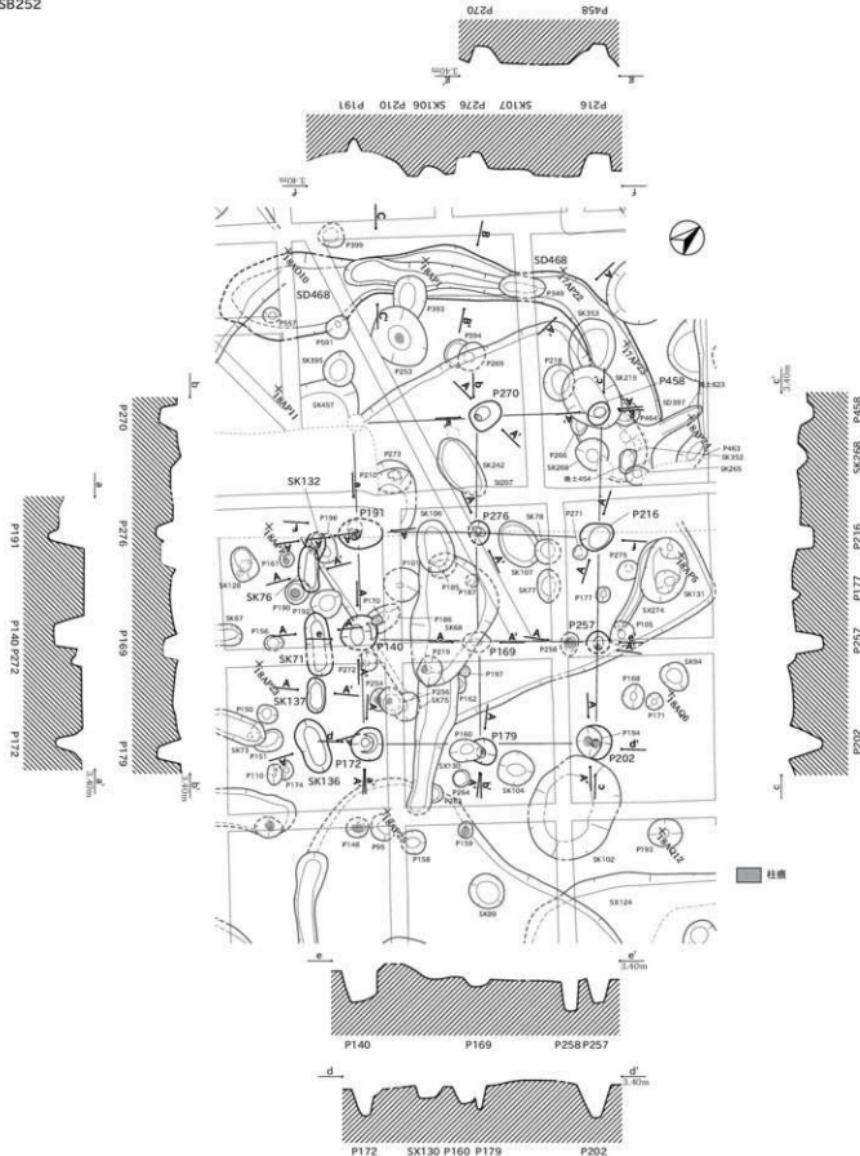


0 焼土211・P123・P200・P203・P204 (1 : 40) 2m
0 SI108・SI243 (1 : 80) 4m

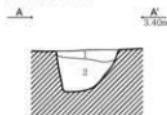




SB252



SB252-P270



SB252-P270

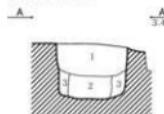
1 黄褐色シルト (10YR5/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。
2 黄褐色シルト (10YR5/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

SB252-P458



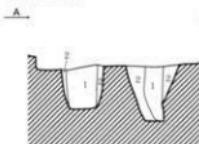
SB252-P458
1 黄褐色シルト (10YR4/1)
粘性あり、しまりあり、炭化物を含む。

SB252-P216



SB252-P216
1 黄褐色シルト (10YR6/2)
粘性強い、しまりあり。
2 黄褐色シルト (10YR6/1)
粘性弱い、しまりややあり。
3 黄褐色シルト (10YR7/1)
粘性あり、しまりあり。
炭化物を少量含む。

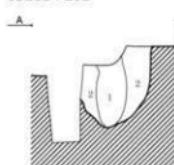
SB252-P257



P258

1 黄褐色シルト (10YR5/1)
粘性強い、しまりややあり。
炭化物を多量含む。粘性
強度ややあり、しまりややあり。
炭化物を少量含む。

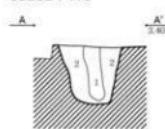
SB252-P202



SB252-P202

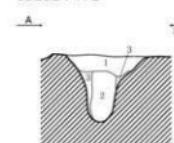
1 黄褐色土 (10YR4/1)
粘性強い、しまり強い。
炭化物を多量含む。粘性
強度ややあり、しまりややあり。
2 黄褐色シルト (10YR6/4)
粘性あり、しまりあり。

SB252-P179



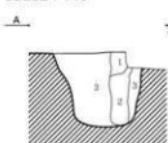
SB252-P179
1 黄褐色シルト (10YR4/1)
粘性強い、しまり強い。
炭化物を多量含む。粘性
強度ややあり、しまりややあり。
2 黄褐色シルト (10YR4/2)
粘性強い、しまりややあり。
炭化物を少量含む。

SB252-P172



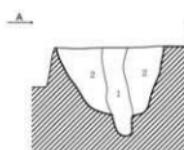
SB252-P172
1 黄褐色シルト (10YR6/2)
粘性弱い、しまりややあり。
炭化物を多量含む。粘性
強度ややあり、しまりややあり。
2 黄褐色土 (10YR6/1)
粘性強い、しまりややあり。
炭化物を多量含む。
3 黄褐色シルト (10YR5/2)
粘性強い、しまり強い。
炭化物を少量含む。

SB252-P140



SB252-P140
1 黄褐色シルト (10YR5/1)
粘性強い、しまりあり。
炭化物を多量含む。粘性
強度ややあり、しまりややあり。
2 黄褐色シルト (10YR7/1)
粘性ややあり、しまりややあり。
3 黄褐色シルト (10YR4/2)
粘性あり、しまり強い。炭化物を少量含む。

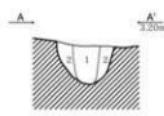
SB252-P191



SB252-P191

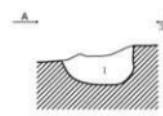
1 にじみ黄褐色シルト (10YR7/2)
粘性ややあり、しまりあり。粘性
強度ややあり、しまりややあり。
2 黄褐色シルト (10YR5/2)
粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。

SB252-P276

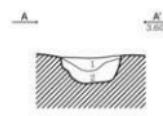
SB252-P276
1 にじみ黄褐色シルト (10YR6/3)
2 にじみ黄褐色シルト (10YR7/3)

粘性あり、しまりあり。

SB252-P169

SB252-P169
1 黄褐色シルト (10YR6/2)
粘性あり、しまりあり。
炭化物を少量含む。

SB252-SK71



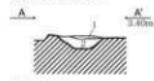
SB252-SK71
1 黄色シルト (10YR2/1)
粘性あり、しまり強い。
炭化物を多量含む。
2 黄褐色シルト (10YR5/2)
粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。

SB252-SK76



SB252-SK76
1 黄褐色シルト (10YR5/1)
粘性あり、しまりあり。炭化物を
多量含む。

SB252-SK132



SB252-SK132
1 黄褐色シルト (10YR3/1)
粘性あり、しまりあり。炭化物を
多量含む。
2 黄褐色シルト (10YR5/1)
粘性あり、しまりあり。炭化物を
少量含む。

SB252-SK136



SB252-SK136
1 にじみ黄褐色シルト (10YR6/3)
粘性あり、しまり強い。炭化物を多量含む。

SB252-SK137



SB252-SK137
1 にじみ黄褐色シルト (10YR6/3)
粘性あり、しまり強い。炭化物を多量含む。

SB252-SD468



SB252-SD468
1 黄褐色シルト (10YR3/3)
粘性あり、しまりあり。炭化物を含む。

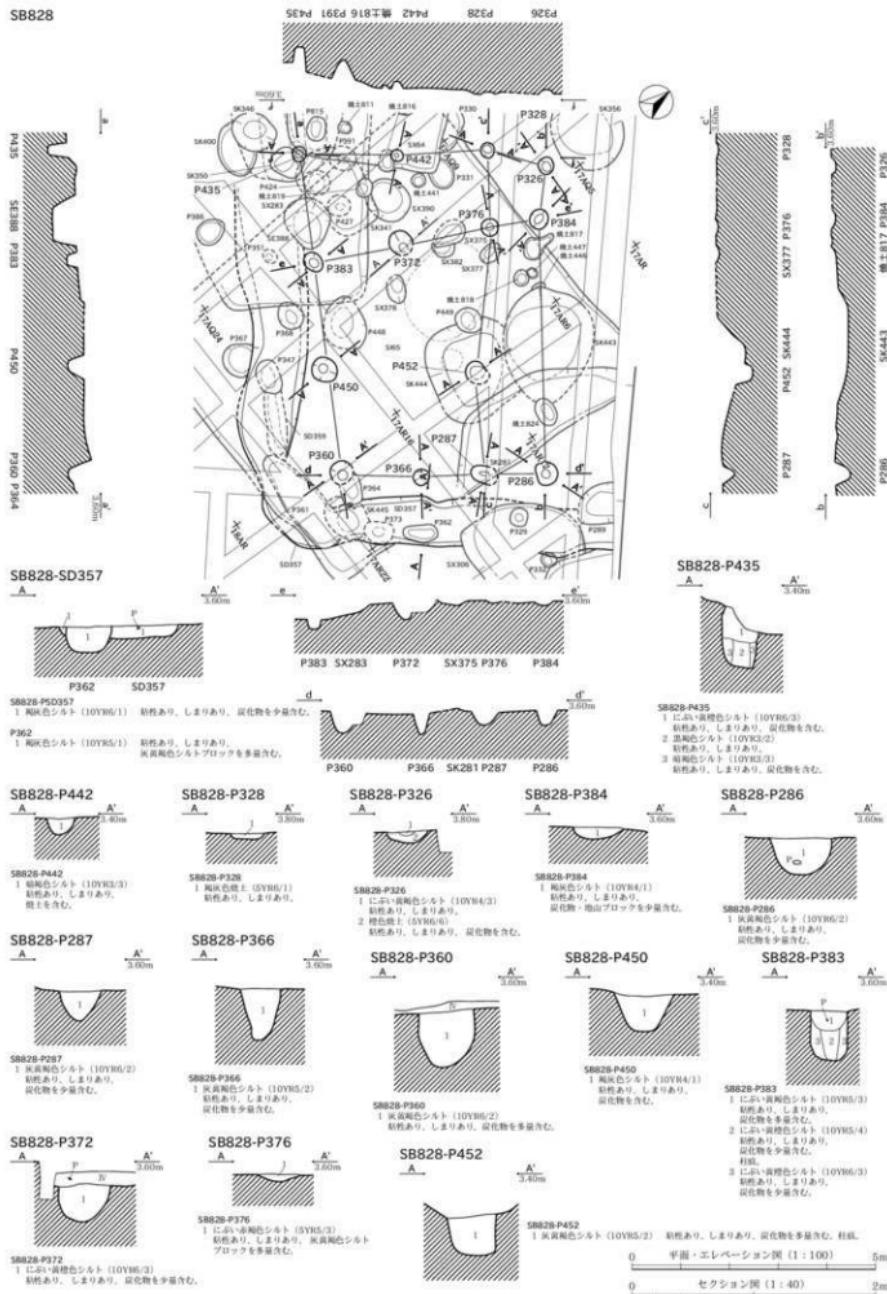


SB252-SD468
1 黄褐色シルト (10YR3/3)
粘性あり、しまりあり。炭化物を含む。

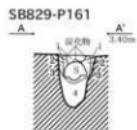
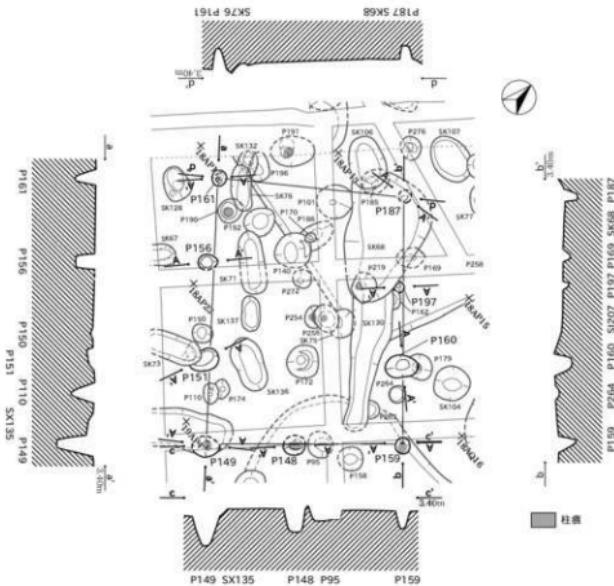


SB252-SD468
1 黄褐色シルト (10YR3/3)
粘性あり、しまりあり。炭化物を含む。

SB829

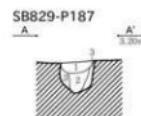


SB829



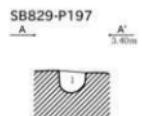
SB829-P161

- 1 黄褐色シルト (10YR5/1) 粘性あり、しまりあり。炭化物を多量含む。
2 黄褐色シルト (10YR6/1) 粘性弱い、しまりあり。炭化物を多量含む。
3 黑褐色シルト (10YR3/1) 粘性弱い、しまりあり。炭化物を多量含む。
4 淡黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性弱い、しまりあり。炭化物を少量含む。



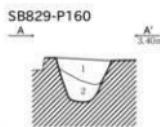
SB829-P187

- 1 淡い黄褐色シルト (10YR6/3) 粘性あり、しまり弱い。
2 黄褐色粘土 (10YR4/2) 粘性弱い、しまりやや強め。
3 淡い黄褐色シルト (10YR6/4) 粘性弱い、しまり弱い。



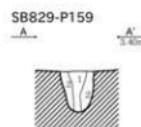
SB829-P197

- 1 黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまり弱い。
炭化物を少量含む。



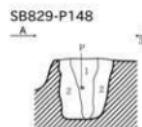
SB829-P160

- 1 淡い黄褐色シルト (10YR7/2) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。
2 淡い黄褐色シルト (10YR6/3) 粘性あり、しまりあり。炭化物を板状に多量に含む。



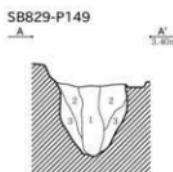
SB829-P159

- 1 黄褐色シルト (10YR4/2) 粘性あり、しまりややあり。炭化物を多量含む。柱頭。
2 黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性やや多く、しまり弱い。炭化物を少量含む。



SB829-P148

- 1 淡黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりややあり。炭化物を少量化する。
2 淡い黄褐色シルト (10YR6/3) 粘性あり、しまり弱い。炭化物を少量含む。



SB829-P149

- 1 褐色粘土 (10Y5/1) 粘性弱い、しまりややあり。炭化物を少量含む。柱頭。
2 黄褐色シルト (10YR4/2) 粘性弱い、しまりややあり。炭化物を少量含む。
3 黄褐色粘土 (10YR5/2) 粘性弱い、しまり弱い。



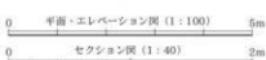
SB829-P151

- 1 淡い黄褐色シルト (10YR6/3) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。

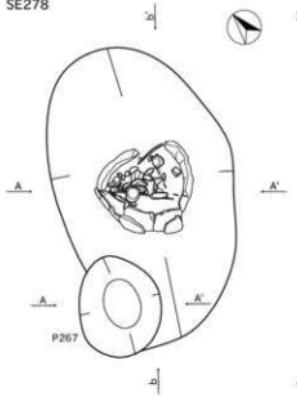


SB829-P156

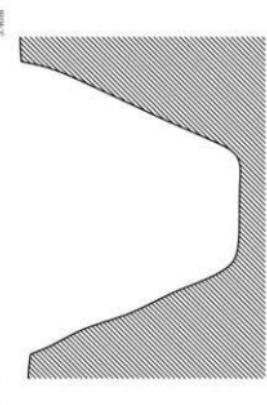
- 1 黄褐色シルト (10YR5/2) 粘性あり、しまり弱い。炭化物を多量含む。柱頭。
2 黄褐色シルト (10YR5/2) 粘性弱い、しまりややあり。炭化物を多量含む。柱頭。
3 黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性弱い、しまり弱い。



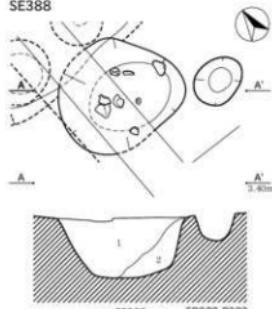
SE278



P267

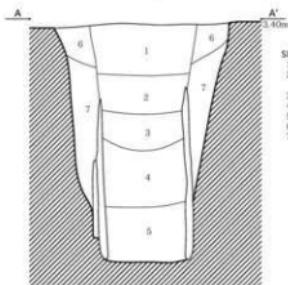


SE388



SE388

1 从黃褐色シルト (10YR5/2) 粒性あり、しまりあり、
粘土質土 (10Y6/1) 硬化物を少部分含む。
2 棕褐色シルト (10YR4/1) 粒性あり、しまり無い、
粘土質土 (10Y6/1) 硬化物を多量含む。



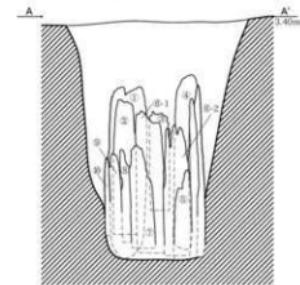
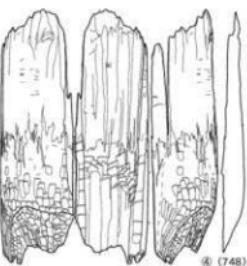
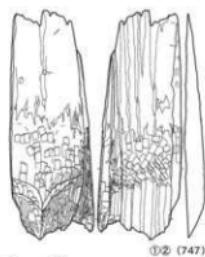
SE278

1 黄色粘土 (10Y4/1)
2 黄色粘土 (10Y6/1)
3 黄色粘土 (10Y4/1)
4 黄色粘土 (7.2Y5/1)
5 黄色粘土 (7.2Y5/1)
6 从黄褐色粘土 (10YR5/2)
7 从黄褐色粘土 (10YR4/2)

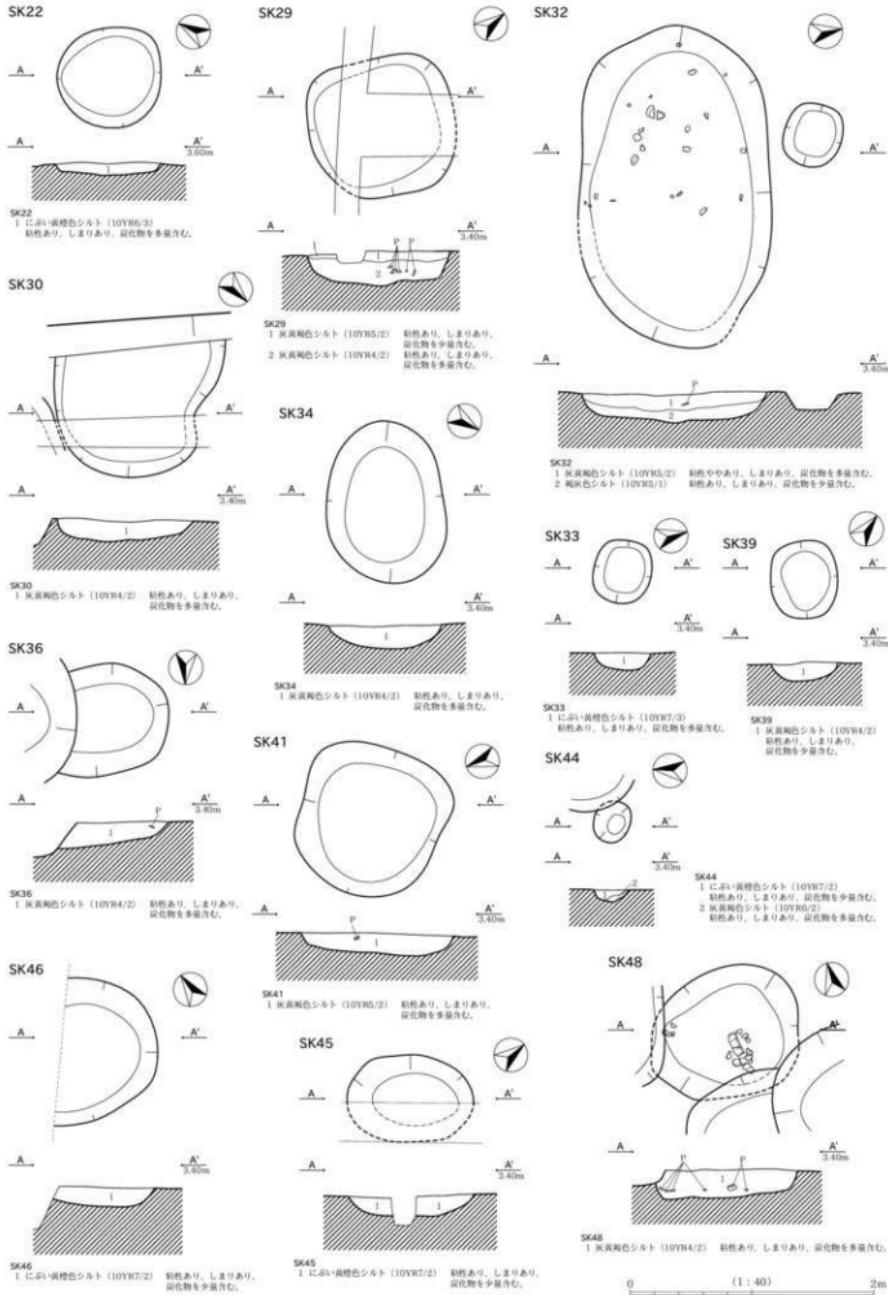
粒性強、しまり中やあり、硬化物を少部分含む。
粒性強、しまりややあり、
粘土質土 (10Y6/1) 硬化物を少部分含む。
粒性強、しまりややあり、
粘土質土 (10Y6/1) 硬化物を少部分含む。
粒性強、しまりややあり、
粘土質土 (10Y6/1) 硬化物を少部分含む。
粒性強、しまりややあり、
粘土質土 (10Y6/1) 硬化物を少部分含む。

P267

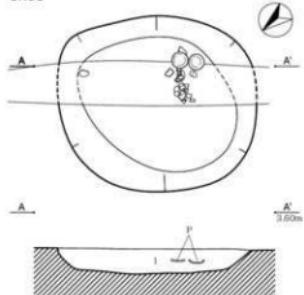
1 从黃褐色シルト (10YR5/1) 粒性あり、しまりあり、
粘土質土 (10Y6/1) 硬化物を多量含む。



0 月戸断 (1:30) 1m
(1:40) 2m



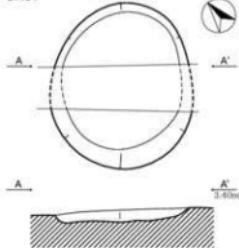
SK53



SK53

1 从黄褐色シート (10YR4/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

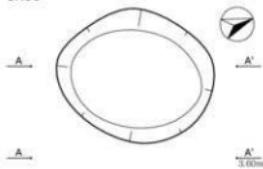
SK57



SK57

1 に赤い黄褐色シート (10YR7/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

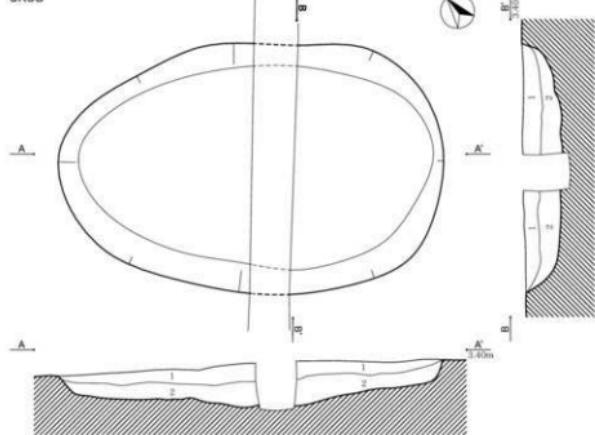
SK60



SK60

粘性やあり、しまりあり、炭化物を多量含む。

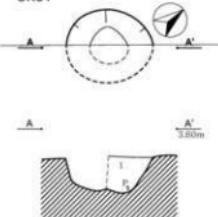
SK58



SK58

1 に赤い黄褐色シート (10YR7/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。
2 从黄褐色シート (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

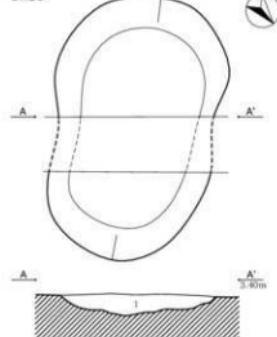
SK61



SK61

粘性やあり、しまりあり、炭化物を少量含む。

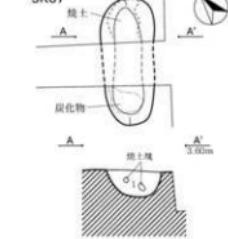
SK85



SK85

1 に赤い黄褐色シート (10YR7/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

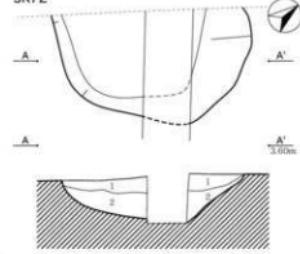
SK67



SK67

1 に赤い黄褐色シート (10YR6/4) 粘性ややあり、しまり強く、炭化物を多量含む。積上層を多量含む。硬化面あり。

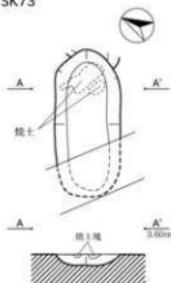
SK72



SK72

1 に赤い黄褐色シート (10YR7/3) 粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。
2 从黄褐色シート (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり、硬化面あり、炭化物を多量含む。

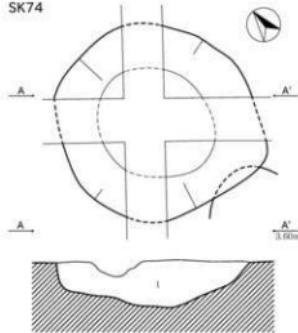
SK73



SK73

1. に高い黄褐色シルト (10YR6/4)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。
壁上端を少量化。

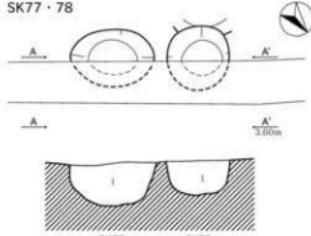
SK74



SK74

1. (C-H) 黄褐色シルト (10YR7/3) 粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

SK77・78



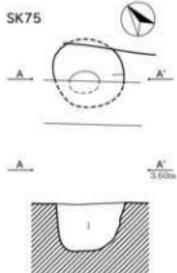
SK77

1. 黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

SK78

1. 黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

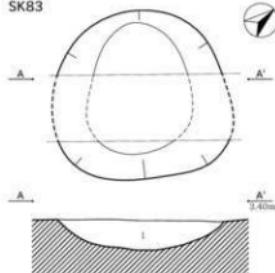
SK75



SK75

1. 黄褐色シルト (10YR4/1)
粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

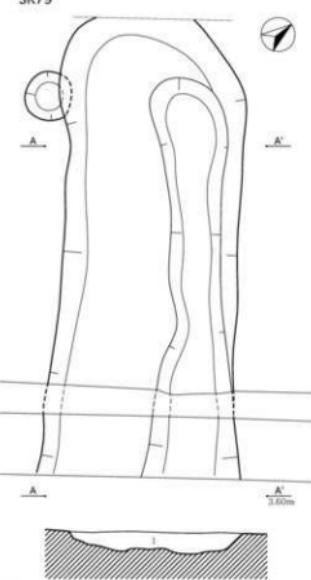
SK83



SK83

1. 黄褐色シルト (10YR8/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

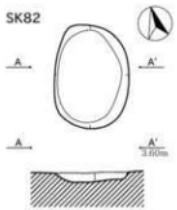
SK79



SK79

1. に高い黄褐色シルト (10YH7/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

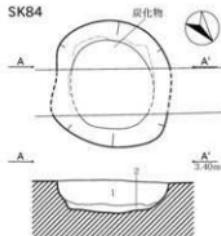
SK82



SK82

1. に高い黄褐色シルト (10YH7/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

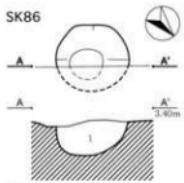
SK84



SK84

1. に高い黄褐色シルト (10YH7/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。
2. に高い黄褐色シルト (10YH7/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を板状に多量含む。

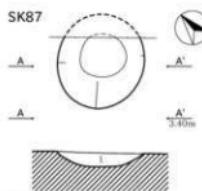
SK86



SK86

1. に高い黄褐色シルト (10YH7/3)
粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

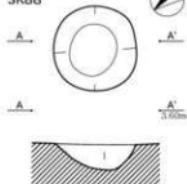
SK87



SK87

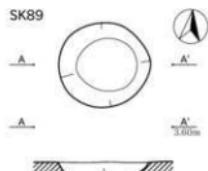
1. 黄褐色シルト (10YHS/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

SK88

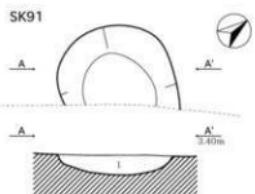


SK88

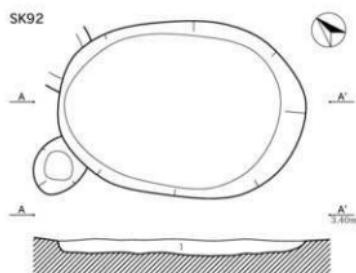
1. に高い黄褐色シルト (10YH7/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。



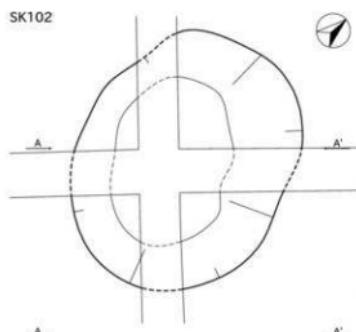
SK89
1 に赤・黄褐色シルト (10YR7/3) 硫化物あり、しまりあり。
炭化物を多量含む。



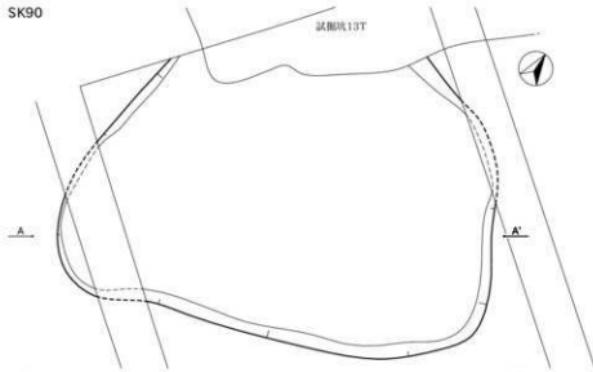
SK91
1 に赤・黄褐色シルト (10YR7/3) 硫化物あり、しまりあり、炭化物を多量含む。



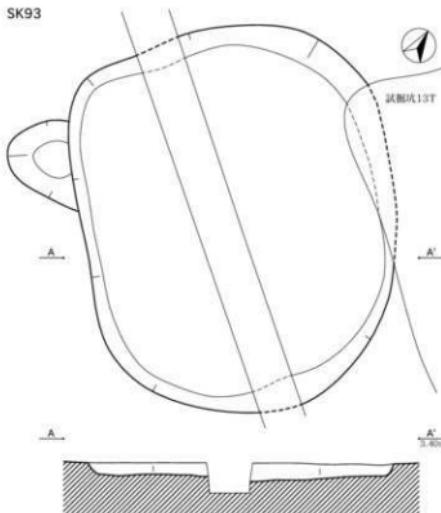
SK92
1 に赤・黄褐色シルト (10YR7/3) 硫化物あり、しまりあり、炭化物を多量含む。



SK102
1 に赤・黄褐色シルト (10YR7/3) 硫化物あり、しまり微々、炭化物を多量含む。
2 黄褐色シルト (10YR6/2) 硫化物あり、しまり微々、炭化物を多量含む。



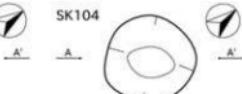
SK90
1 に赤・黄褐色シルト (10YR7/2) 硫化物あり、しまりあり、炭化物を少量含む。



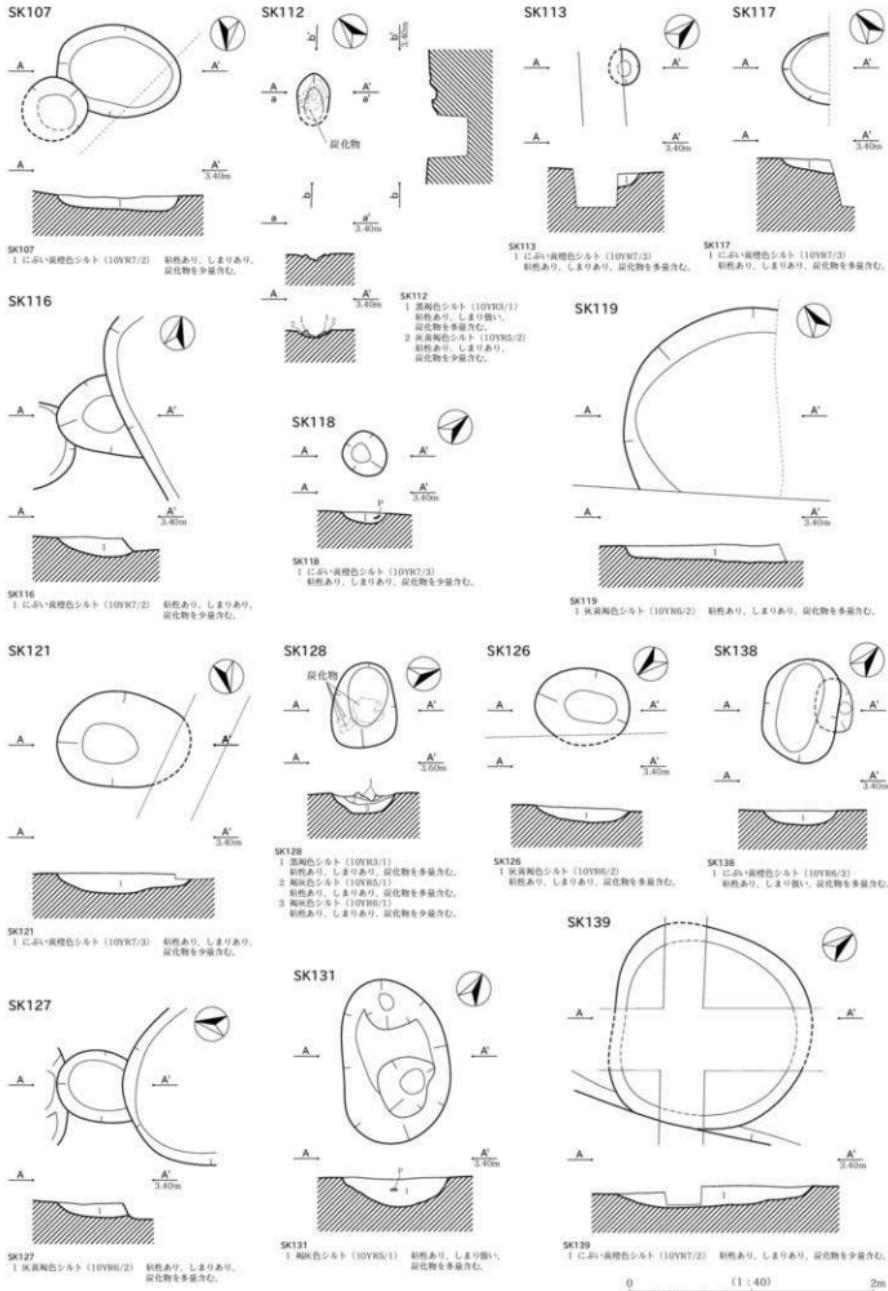
SK93
1 に赤・黄褐色シルト (10YR7/2) 硫化物あり、しまりあり、炭化物を少量含む。



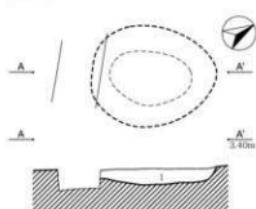
SK94
1 に赤・黄褐色シルト (10YR7/2) 硫化物あり、しまり微々、炭化物を多量含む。
2 黄褐色シルト (10YR6/2) 硫化物あり、しまり微々、炭化物を少量含む。



SK104
1 に赤・黄褐色シルト (10YR7/2) 硫化物あり、しまり微々、炭化物を多量含む。
2 黄褐色シルト (10YR6/2) 硫化物あり、しまり微々、炭化物を少量含む。

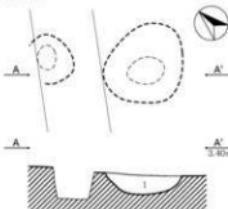


SK143



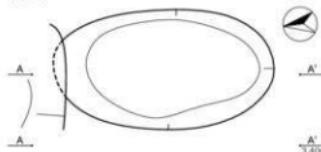
SK143
1. 淡黄褐色シルト (10YR6/2) 粒性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

SK144



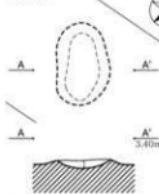
SK144
1. 淡黄褐色シルト (10YR6/2) 粒性あり、しまり無い、炭化物を少量含む。

SK147



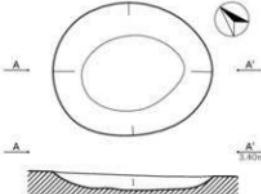
SK147
1. 淡黄褐色シルト (10YR6/2) 粒性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

SK145



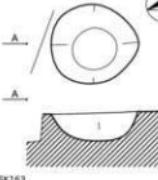
SK145
1. 淡黄褐色シルト (10YR6/2)
粒性やあり、しまりあり、炭化物を多量含む。

SK146



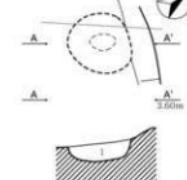
SK146
1. 淡黄褐色シルト (10YR6/2) 粒性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

SK163



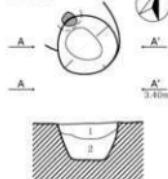
SK163
1. 淡黄褐色シルト (10YR6/2)
粒性あり、しまり無い、炭化物を多量含む。

SK164



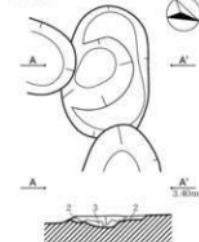
SK164
1. 淡黄褐色シルト (10YR7/2)
粒性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

SK166



SK166
1. にじ・淡褐色シルト (10YR7/2)
粒性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。
2. にじ・淡褐色シルト (10YR6/2)
粒性あり、しまりあり、炭化物を極めて多量含む。

SK182



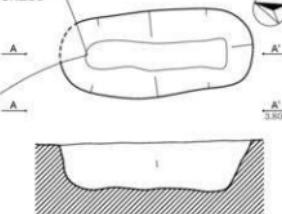
SK182
1. 淡褐色シルト (10YR6/1)
2. 淡褐色シルト (10YR6/1)
3. 淡黄褐色シルト (10YR6/2)

粒性あり、しまりあり、炭化物を少量含む、燒土塊を多量含む。

粒性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

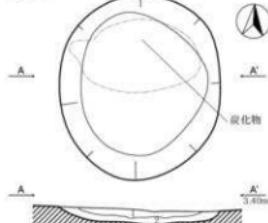
粒性あり、しまり無い、炭化物を少量含む。

SK209



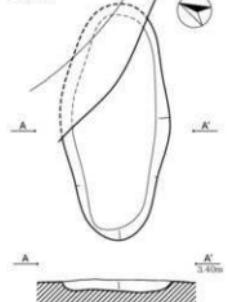
SK209
1. 淡黄褐色シルト (10YR6/2) 粒性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

SK220



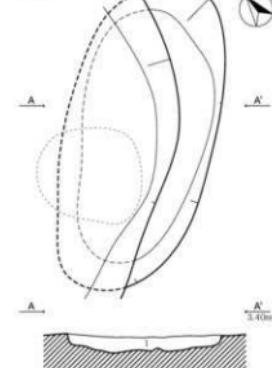
SK220
1. 淡黄褐色シルト (10YR6/2) 粒性あり、しまり無い、
炭化物を多量含む。
2. 淡黄褐色シルト (10YR6/2) 粒性あり、しまり無い、
炭化物を少量含む。

SK228

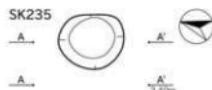


SK228
1. にじ・淡褐色シルト (10YR7/2) 粒性あり、しまりあり、
炭化物を少量含む。

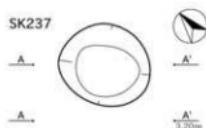
SK232



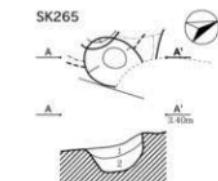
SK232
1. にじ・淡褐色シルト (10YR7/2) 粒性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。



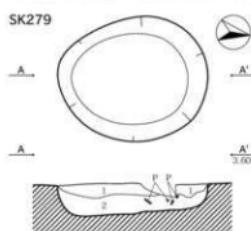
SK235
1 黄褐色シルト (10YR7/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。



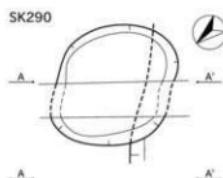
SK237
1 黄褐色シルト (10YR7/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。



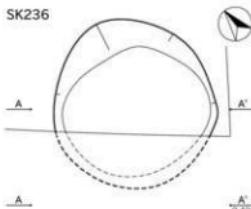
SK265
1 黄褐色シルト (10YR5/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。
2 灰褐色シルト (10YR6/1) 粘性ややあり、しまりあり。



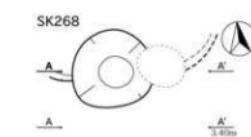
SK279
1 黄褐色シルト (10YR6/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。
2 灰褐色シルト (10YR5/1) 粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。黄褐色シルトブロックを少量含む。



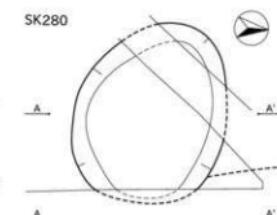
SK290
1 黄褐色シルト (10YR6/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。



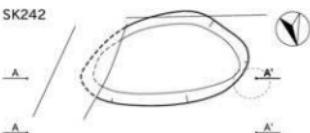
SK236
1 黄褐色シルト (10YR7/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。



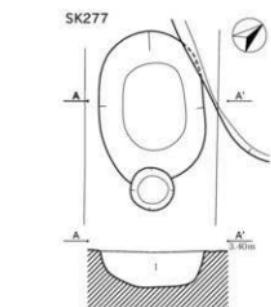
SK268
1 黄褐色シルト (10YR5/2)
粘性ややあり、しまりあり、炭化物を多量含む。
2 灰褐色シルト (10YR6/1)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。



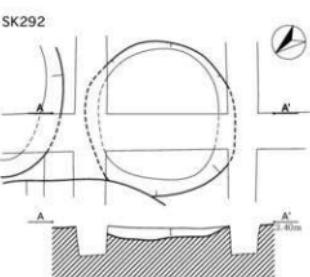
SK280
1 黄褐色シルト (10YR6/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。
2 黄褐色シルト (10YR5/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。灰褐色シルトブロックを少量含む。



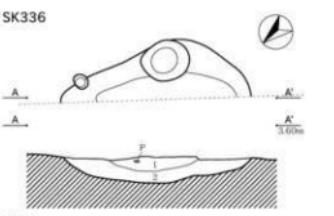
SK242
1 黄褐色シルト (10YR7/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。
2 黄褐色シルト (10YR5/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。
3 黄褐色シルト (10YR6/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。



SK277
1 黄褐色シルト (10YR5/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。



SK292
1 和灰色シルト (10YR4/1)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

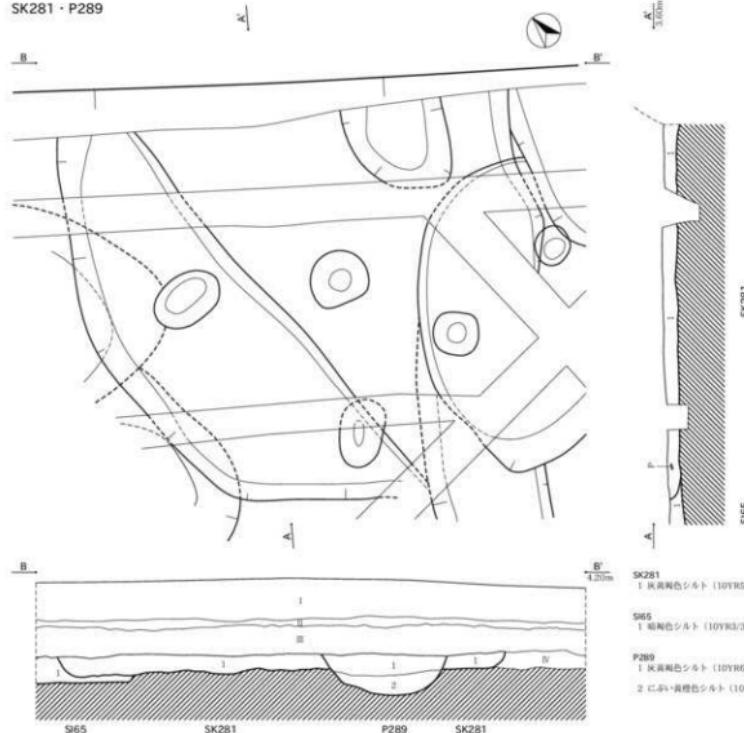


SK336
1 和灰色シルト (10YR4/1)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。
2 黄褐色シルト (10YR5/2)
粘性あり、しまりあり。

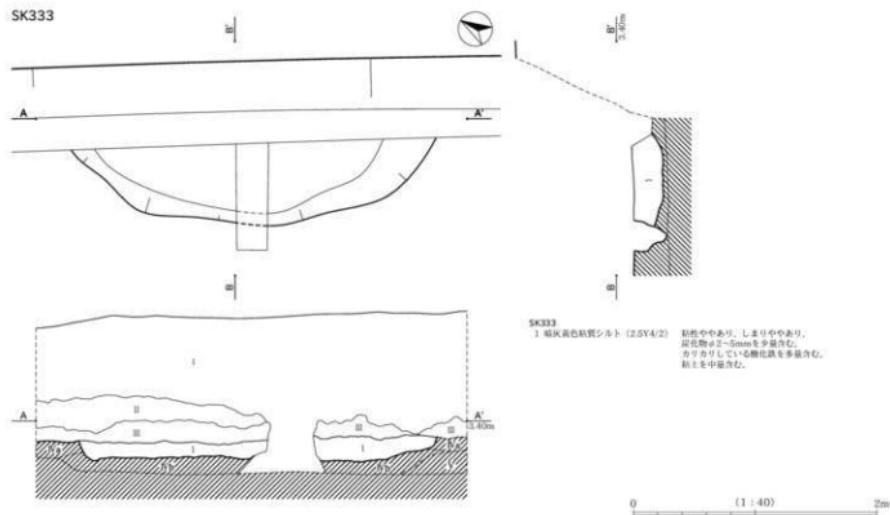
図版 41

古代遺構個別図 (1/40)

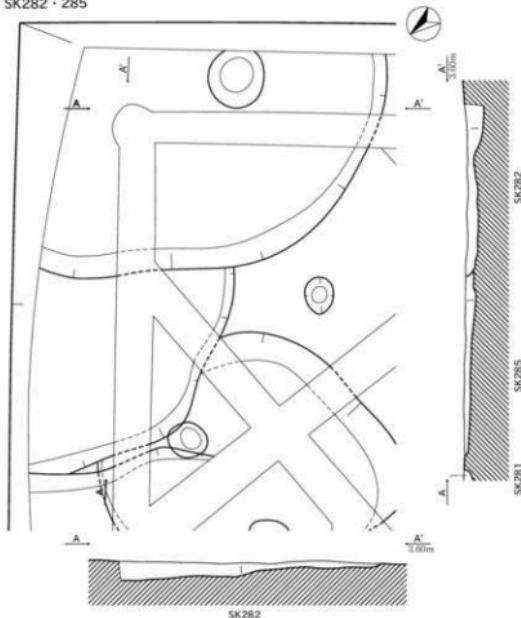
SK281・P289



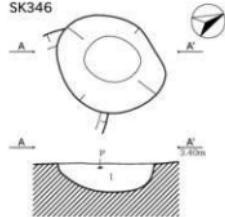
SK333



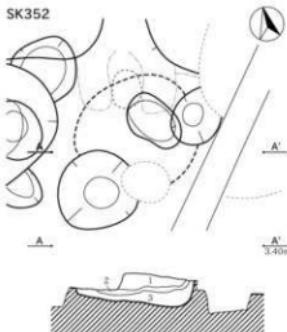
SK282・285

SK282
1 黄褐色シート (10YR4/2) 粒性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。SK285
1 にい黄褐色シート (10YR5/3) 粒性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

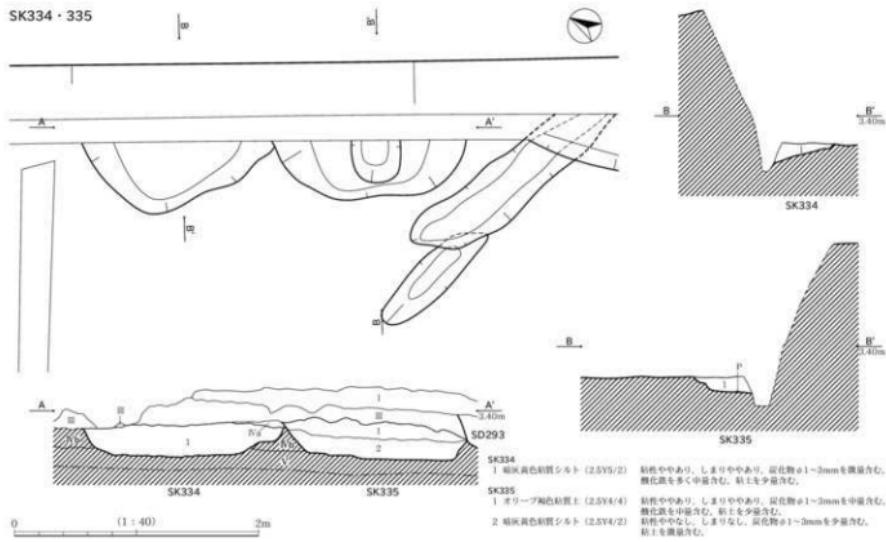
SK346

SK346
1 黄褐色シート (10YR5/2) 粒性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

SK352

SK352
1 黒灰色シート (10YR4/1) 粒性あり、しまりあり、炭化物を含む。
2 黑色シート (10YR2/1) 粒性ややあり、しまりややあり、炭化物を多量含む。
3 海灰色シート (10YR5/1) 粒性あり、しまりあり、炭化物を含む。

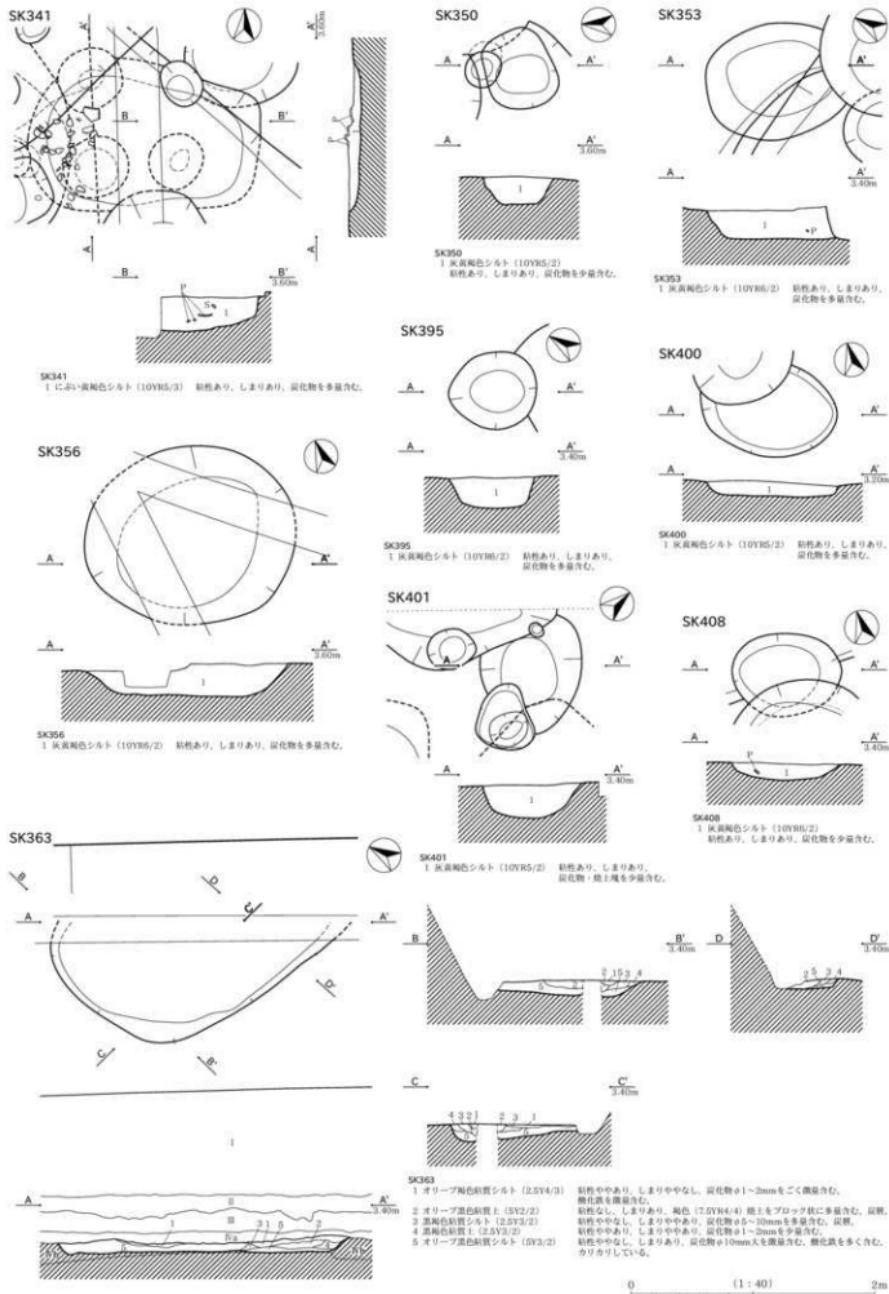
SK334・335

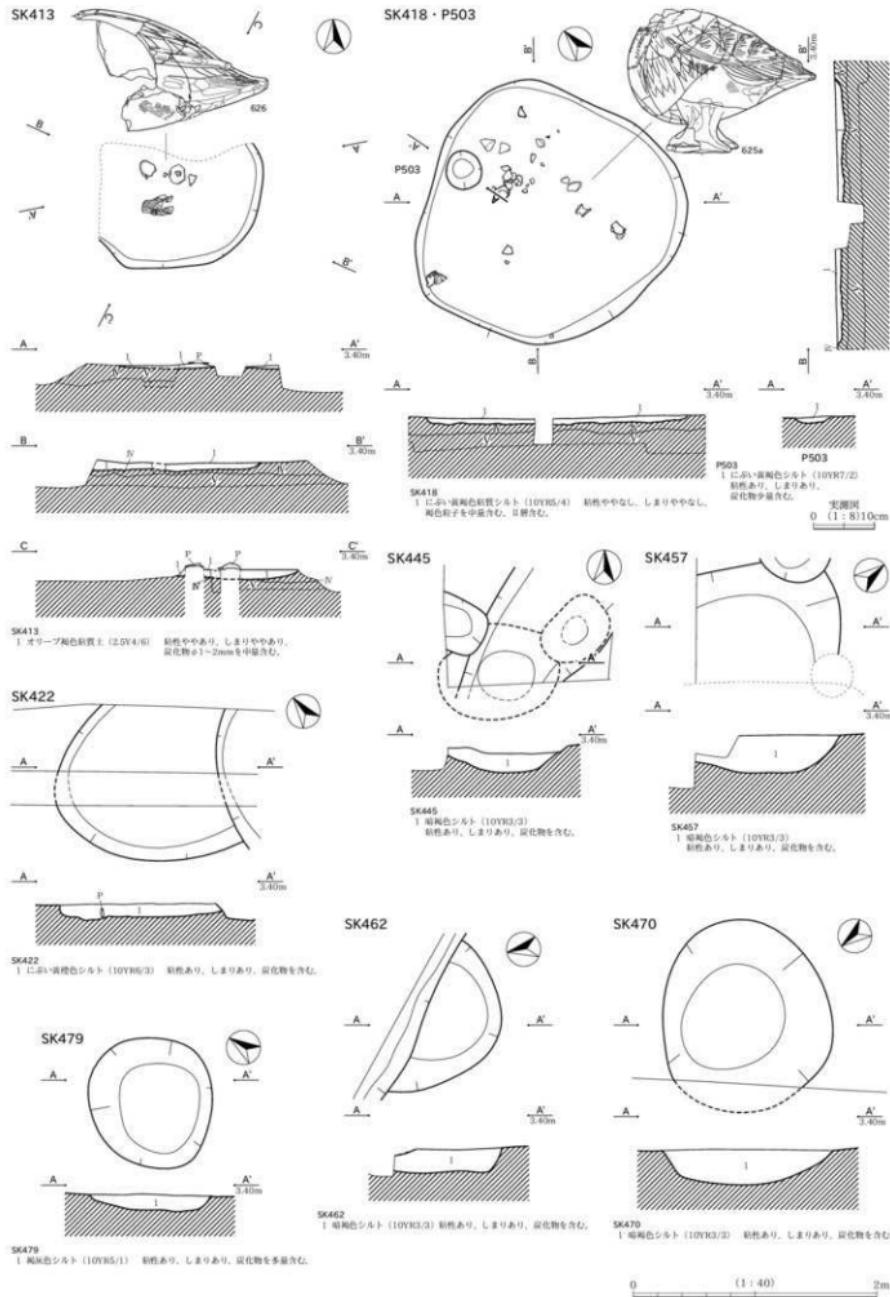
SK334
1 オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/2) 粒性ややあり、しまり中あり、炭化物φ1~3mmを微量含む。粘化物を多く中量含む。土を少量含む。SK335
1 布灰黄色粘質土 (2.5Y4/4) 粒性ややあり、しまり中あり、炭化物φ1~3mmを中量含む。粘化物を少く含む。土を少量含む。

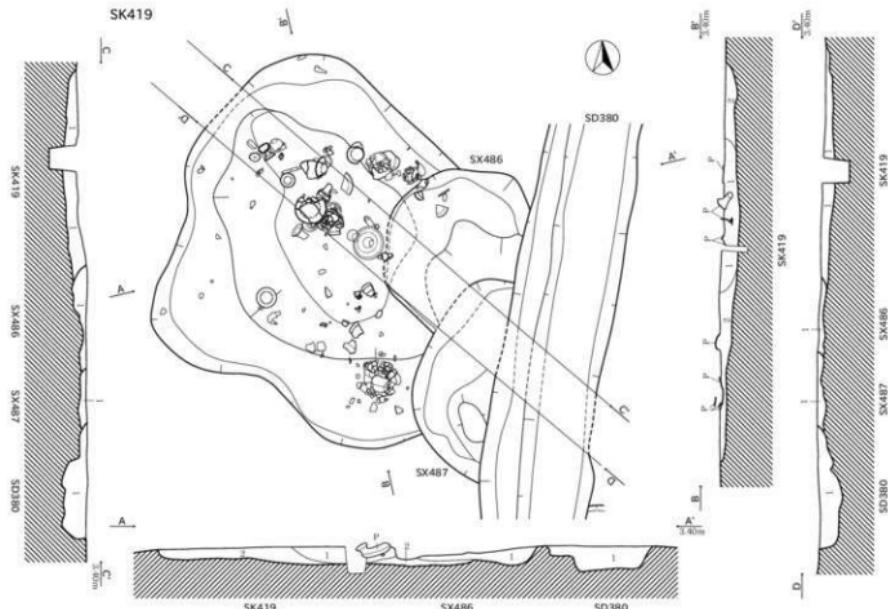
2 布灰黄色粘質シート (2.5Y5/2) 粒性ややなし、しまりなし、炭化物φ1~3mmを少量含む。土を微量含む。

図版 43

古代遺構個別図 (1/40)







SK419

1. 黄褐色粘土シート (107Y4/4)
2. 黄褐色粘土質シート (107Y5/4)
- 剥離ややあり、しまりややあり、サビ（褐色粒子）を微量含む。黒褐褐色粒子を微量含む。
- 剥離ややあり、しまりややあり、炭化物を下層（底面）に含む。

SX486

1. 黄褐色シート (25Y3/2)
2. 土灰リーブ褐色粘土質シート (25Y5/2)
- 剥離なし。しまりややあり、炭化物をごく微量含む。II層（粘土リーブ25Y3/3）を多量に含む。黄褐色シートを多量に含む。
- 剥離ややあり、しまりややあり、炭化物を多量に含む。

SX487

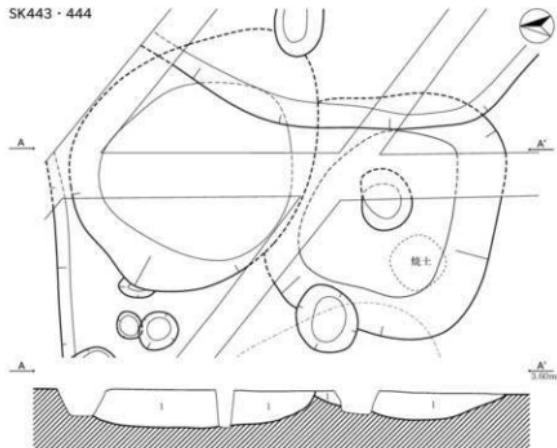
1. 黄褐色シート (25Y5/3)
- 剥離なし。しまりややあり、炭化物をごく微量含む。II層（粘土リーブ褐色25Y3/3粘質シート）がブロック状に含まれる。黄褐色粒子が多量に含まれる。

SD380

1. 土灰リーブ褐色粘質シート (25Y3/3)
- 剥離ややあり、しまりなし。オリーブ褐色 (5Y3/3) 粘質土をブロック状に中量含む。炭化物をごく微量含む（下層）。

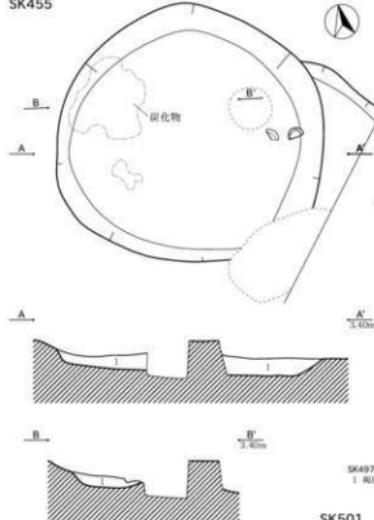


SK443 • 444

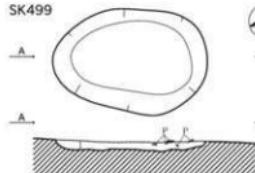


SK443

SKAEE

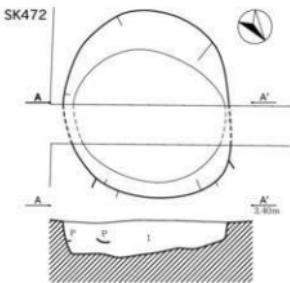


SK455
1 黒灰色シルト (TOYRA/1) 効性あり。しまりあり。炭化物・焼土を多量含む。



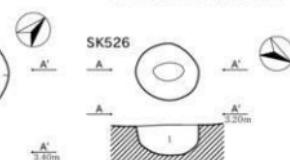
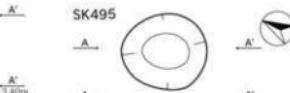
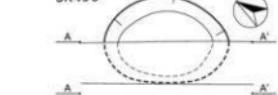
SK-499 1 黄褐色粘膜上 (10YR5/6) 黏性あり。しまりやなし。褐色粒子・黑色粒子を中混含む。

SK472 |



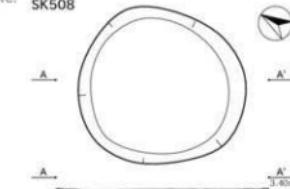
SK472
1) 暗灰色シルト (10YR4/1) 黏性あり。しまりあり、腐化物を含む。

10



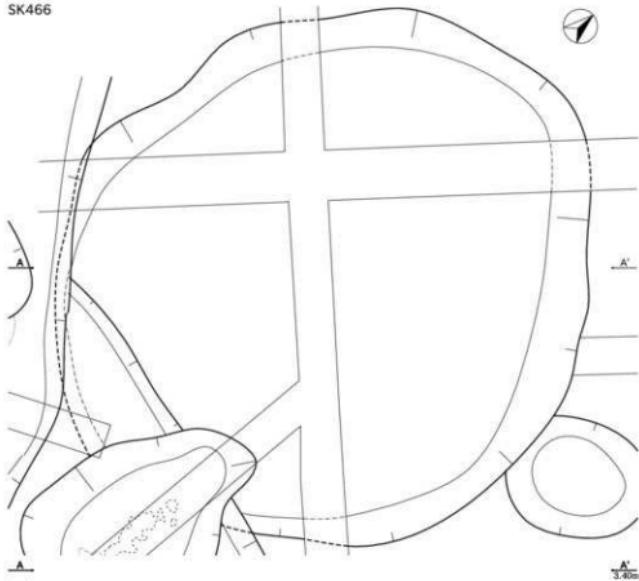
SK526
1 水溶性色シルト (10YR5/2)
點作あり、しまりあり、酸化物を含む。

第十一章



SK508
↑に赤い真横色シルト(10YR8/3) 粘性あり。しまりあり。

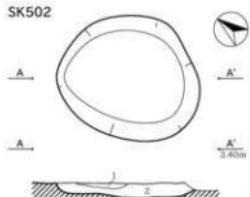
SK466



SK466

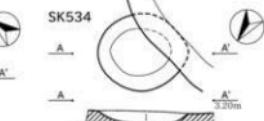
1 黄褐色シート (10YR3/3) 粘性あり、しまりあり、炭化物を含む。

SK502



SK502

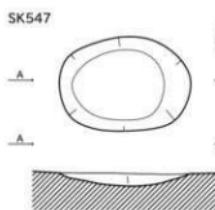
SK534



1 水黄褐色シート (10YR5/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を含む。

2 仁木黄褐色シート (10YR7/3) 粘性あり、しまりあり、炭化物を含む。

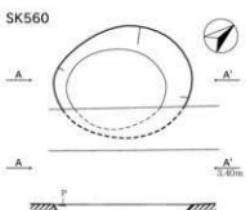
SK547



SK547

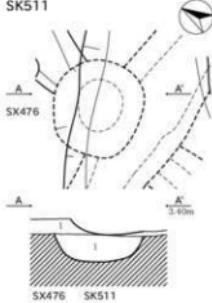
1 に赤い黄褐色シート (10YR8/3) 粘性あり、しまりあり。

SK560



1 C-赤い黄褐色シート (10YR7/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

SK511



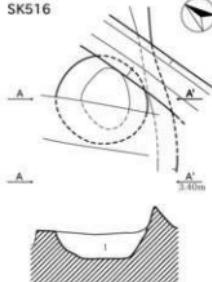
SK511

1 に赤い黄褐色シート (10YR7/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

SK476

2 黒灰褐色シート (10YR5/1) 粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

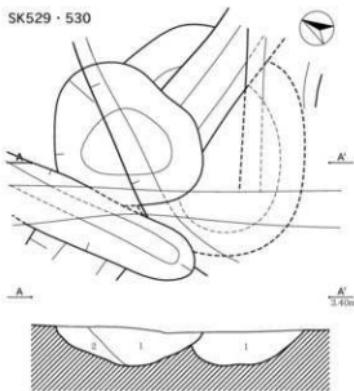
SK516



SK516

1 に赤い黄褐色シート (10YR7/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を少量化。

SK529・530



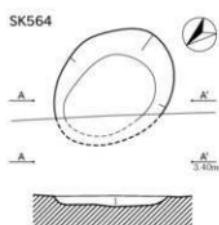
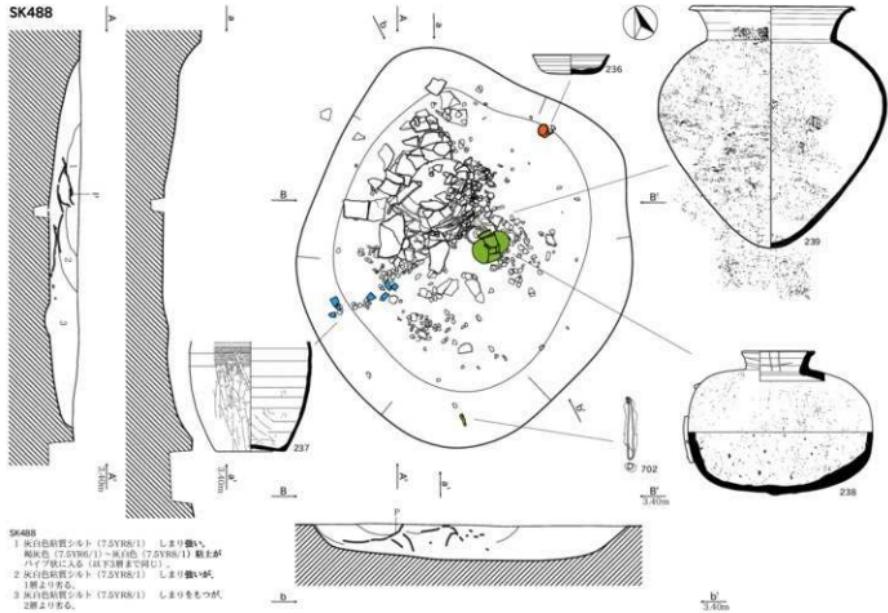
SK529

1 に赤い黄褐色シート (10YR7/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

SK530

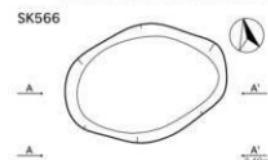
1 黒灰褐色シート (10YR4/1) 粘性あり、しまりあり、陶灰色シートブロックを多量含む。

2 黑黄褐色シート (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。



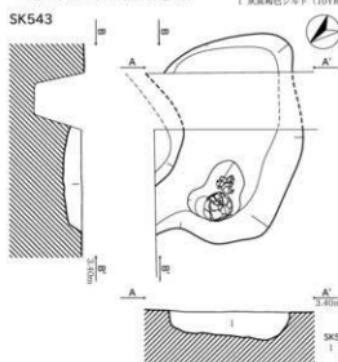
SK564

1. に赤い黄褐色シルト (10YR7/2)
粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。



SK566

1. 黄褐色シルト (10YR6/2)
粘性あり、しまりあり。炭化物を多量含む。



SK543

1.

2.

3.

4.

5.

6.

7.

8.

9.

10.

11.

12.

13.

14.

15.

16.

17.

18.

19.

20.

21.

22.

23.

24.

25.

26.

27.

28.

29.

30.

31.

32.

33.

34.

35.

36.

37.

38.

39.

40.

41.

42.

43.

44.

45.

46.

47.

48.

49.

50.

51.

52.

53.

54.

55.

56.

57.

58.

59.

60.

61.

62.

63.

64.

65.

66.

67.

68.

69.

70.

71.

72.

73.

74.

75.

76.

77.

78.

79.

80.

81.

82.

83.

84.

85.

86.

87.

88.

89.

90.

91.

92.

93.

94.

95.

96.

97.

98.

99.

100.

101.

102.

103.

104.

105.

106.

107.

108.

109.

110.

111.

112.

113.

114.

115.

116.

117.

118.

119.

120.

121.

122.

123.

124.

125.

126.

127.

128.

129.

130.

131.

132.

133.

134.

135.

136.

137.

138.

139.

140.

141.

142.

143.

144.

145.

146.

147.

148.

149.

150.

151.

152.

153.

154.

155.

156.

157.

158.

159.

160.

161.

162.

163.

164.

165.

166.

167.

168.

169.

170.

171.

172.

173.

174.

175.

176.

177.

178.

179.

180.

181.

182.

183.

184.

185.

186.

187.

188.

189.

190.

191.

192.

193.

194.

195.

196.

197.

198.

199.

200.

201.

202.

203.

204.

205.

206.

207.

208.

209.

210.

211.

212.

213.

214.

215.

216.

217.

218.

219.

220.

221.

222.

223.

224.

225.

226.

227.

228.

229.

230.

231.

232.

233.

234.

235.

236.

237.

238.

239.

240.

241.

242.

243.

244.

245.

246.

247.

248.

249.

250.

251.

252.

253.

254.

255.

256.

257.

258.

259.

260.

261.

262.

263.

264.

265.

266.

267.

268.

269.

270.

271.

272.

273.

274.

275.

276.

277.

278.

279.

280.

281.

282.

283.

284.

285.

286.

287.

288.

289.

290.

291.

292.

293.

294.

295.

296.

297.

298.

299.

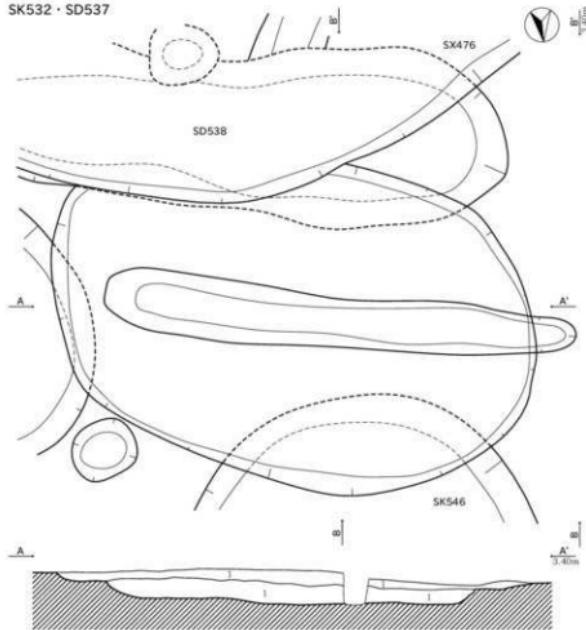
300.

301.

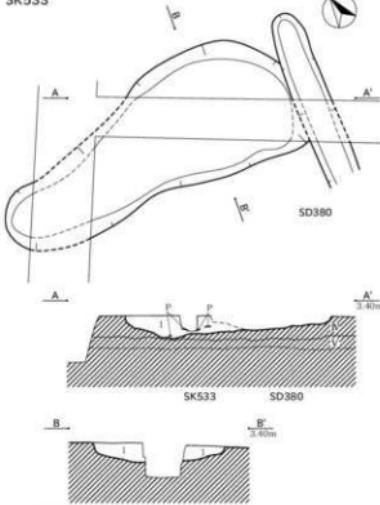
図版 49

古代遺構個別図 (1/40)

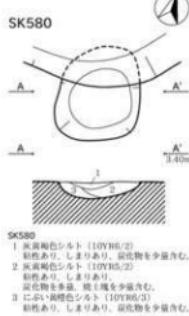
SK532・SD537

SK532
1 黄褐色シート (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。SD537
1 黄褐色シート (7.5YR5/2) 粘性あり、しまりあり。炭化物・斑玉塊を多量含む。SD538
1 褐灰色シート (10YR6/1) 粘性あり、しまりあり。炭化物を多量含む。

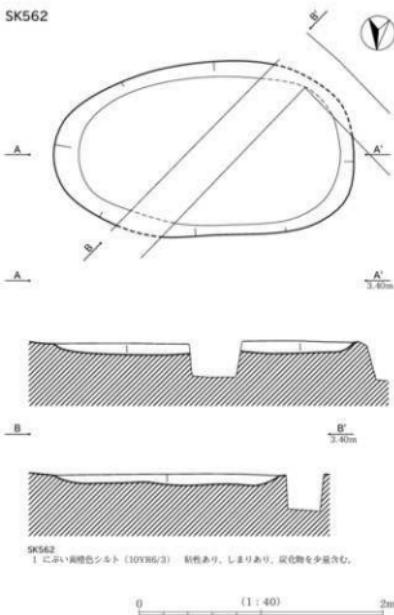
SK533

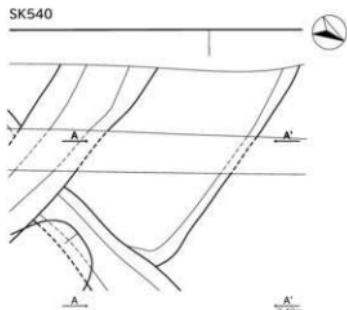
SK533
1 に深い黄褐色粘土質シート (10YR5/4) 粘性ややあり、しまりややあり。目巣含む。
サビ (褐色粒子) を微量含む。

SK576

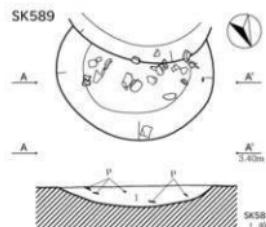
SK576
1 黄褐色粘土 (7.5YR6/4) 粘性あり、しまりあり。褐色 (7.5YR4/6) 粒子がまたに覆し、褐色粒子を多く含む。SK580
1 黄褐色シート (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。
2 黄褐色シート (10YR5/2) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。
3 に深い褐色シート (10YR6/3) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。

SK562

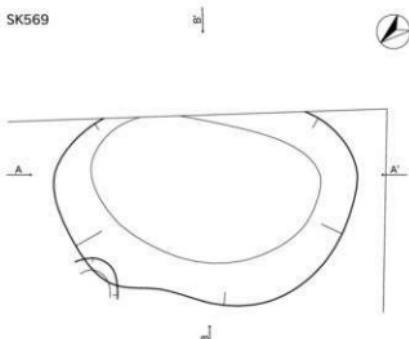
SK562
1 に深い褐色シート (10YR6/3) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。



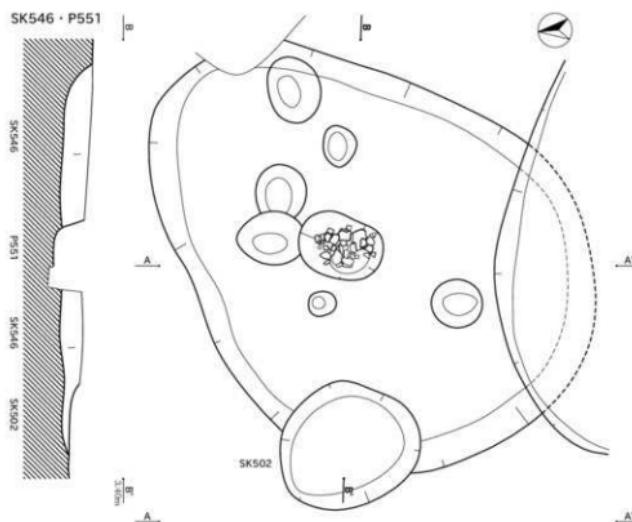
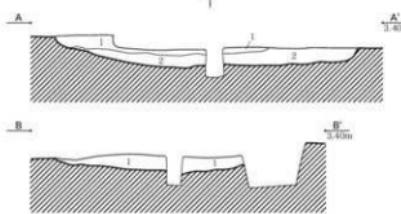
SK540
1. 朱黄褐色シルト (10YR8/2) 粒状あり。しまりあり。炭化物を少量含む。



SK589
1. 朱白色シルト (10YR8/3) 粒状あり。しまりあり。炭化物を含む。

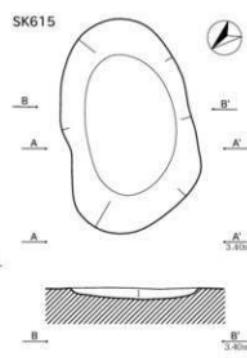
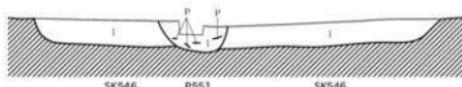


SK569
1. 朱白色粘質シルト (7.5YR8/1~8/2) 炭化物φ1~5mmを比較的多く含む。マンガン粒子φ1~2mmを含む。
2. 朱白色粘質シルト (7.5YR8/1~8/2) 炭化物を微量含む。マンガン粒子φ1~2mmを含む。



SK546
1. 朱黄褐色シルト (10YR8/2) 粒状あり。しまりあり。炭化物を多量含む。

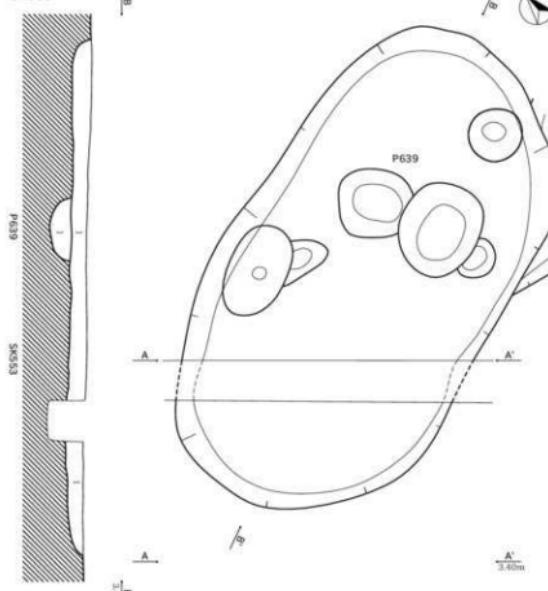
P551
1. 朱褐色シルト (10YR8/1) 粒状あり。しまりあり。炭化物を多量含む。



SK615
1. 朱黄褐色シルト (10YR8/2) 粒状あり。しまりあり。炭化物を少量含む。

(1 : 40)
2m

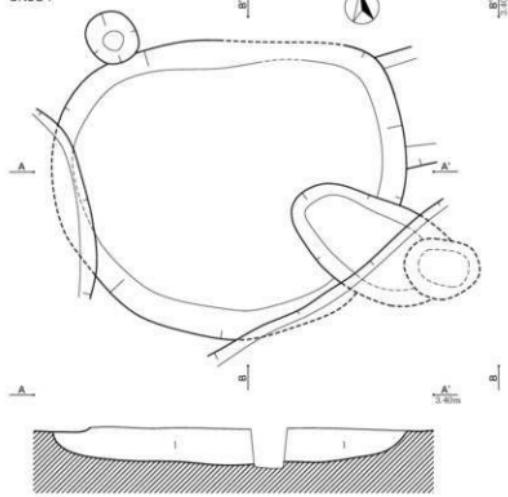
SK553



SK553
1. 黄褐色シルト (10YR5/1) 粒性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

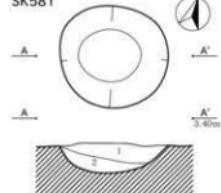
P639
1. 黄褐色シルト (10YR6/1) 粒性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

SK584



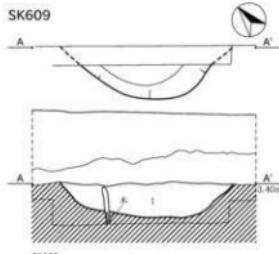
SK584
1. 黄白色シルト (10YR7/1) 粒性弱い、しまりあり、炭化物を多量含む。

SK581



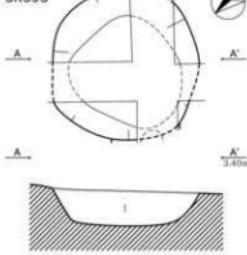
SK581
1. に赤い黄褐色シルト (10YR7/2)
粒性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。
2. 黄褐色シルト (10YR6/2)
粒性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。
3. 黄褐色シルト (10YR6/2)
粒性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

SK609



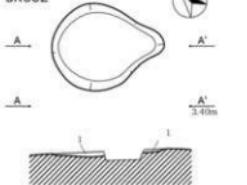
SK609
1. 黄褐色シルト (10YR5/2) 粒性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

SK593



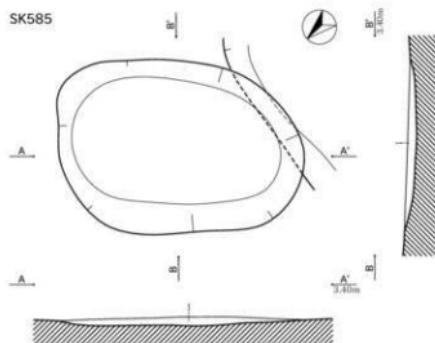
SK593
1. 黄褐色シルト (10YR3/3) 粒性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。

SK602

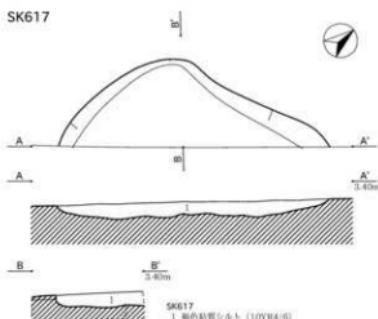


SK602
1. 黄褐色シルト (10YR4/1) 粒性あり、しまりあり、炭化物を含む。

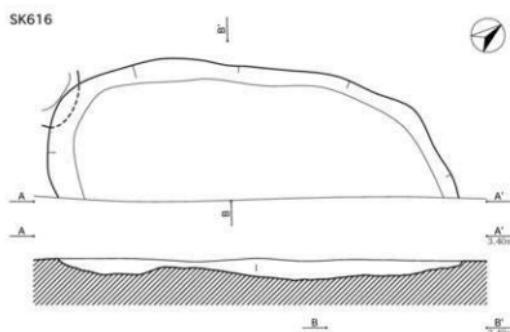
SK585



SK617



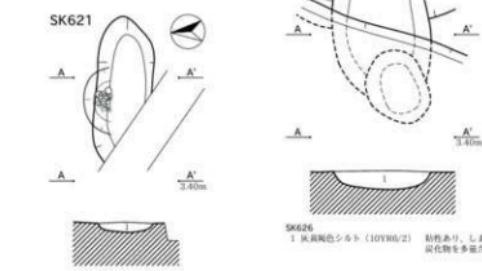
SK616



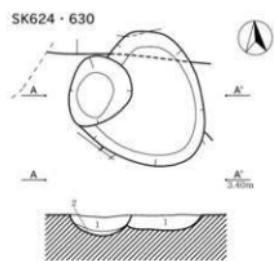
SK618



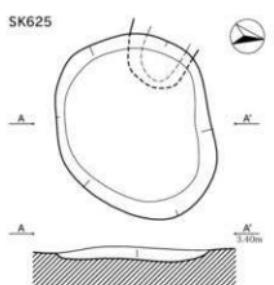
SK621



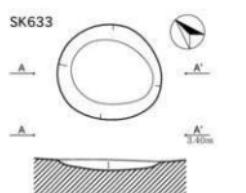
SK624・630

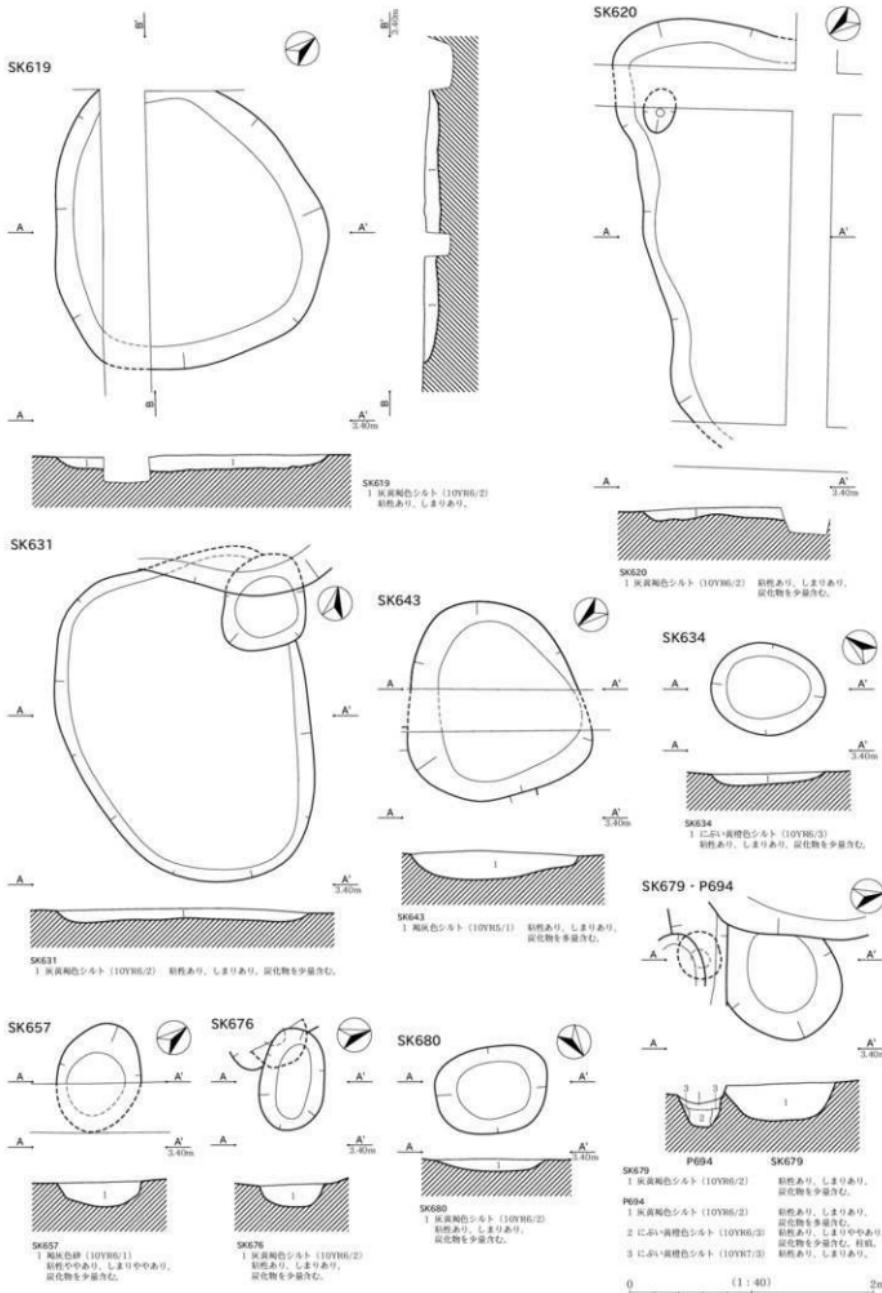


SK625

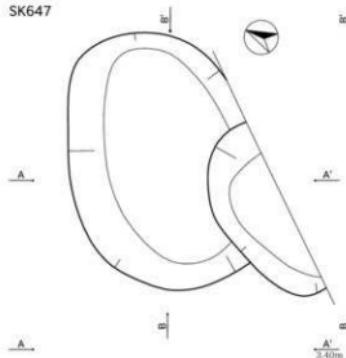


SK633

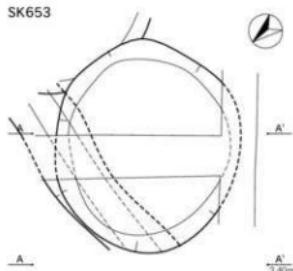




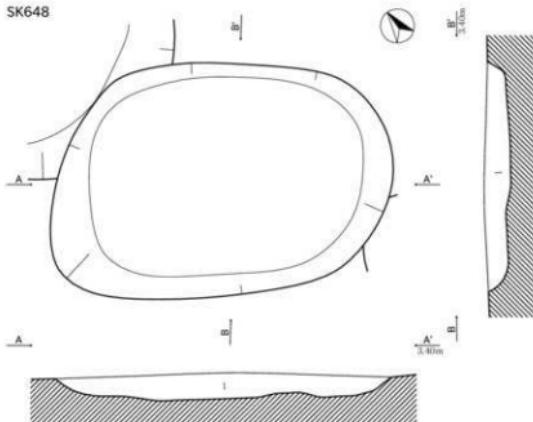
SK647



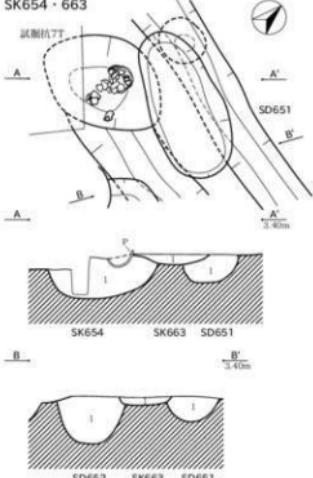
SK653



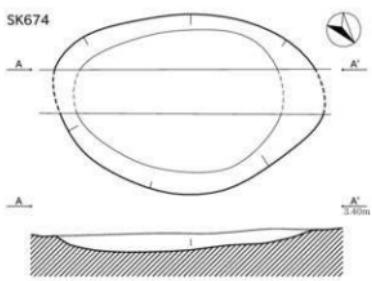
SK648



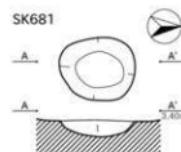
SK654・663



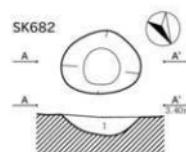
SK674

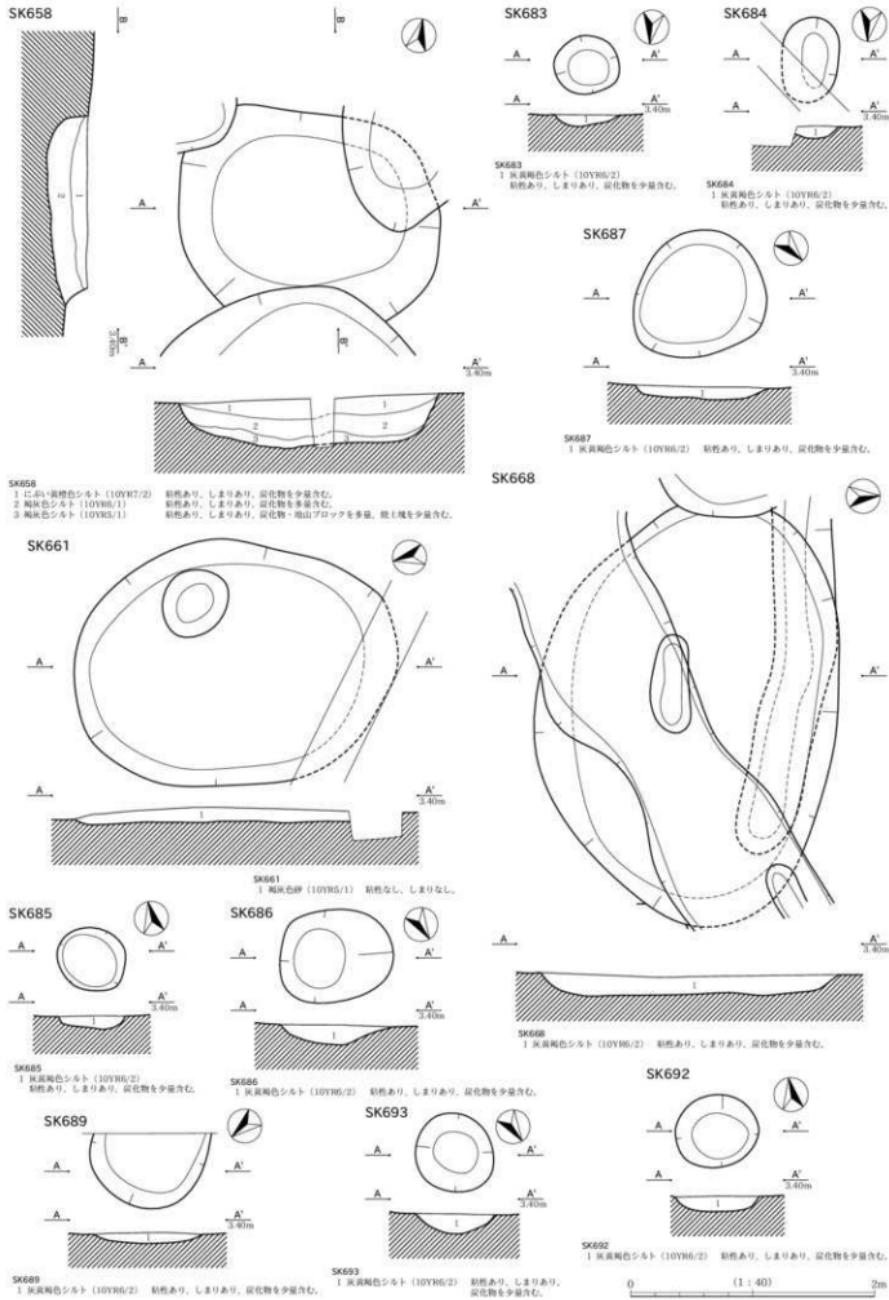


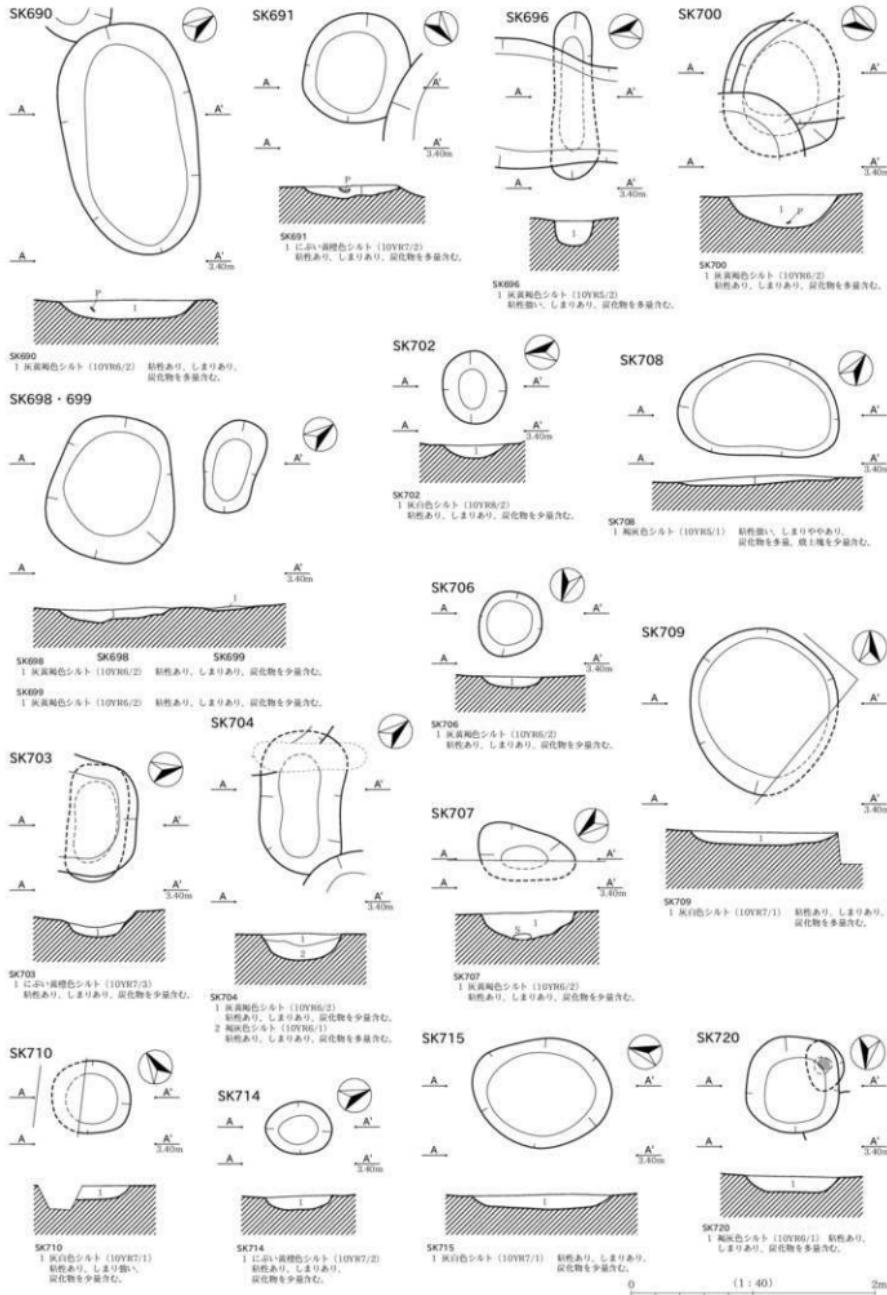
SK681

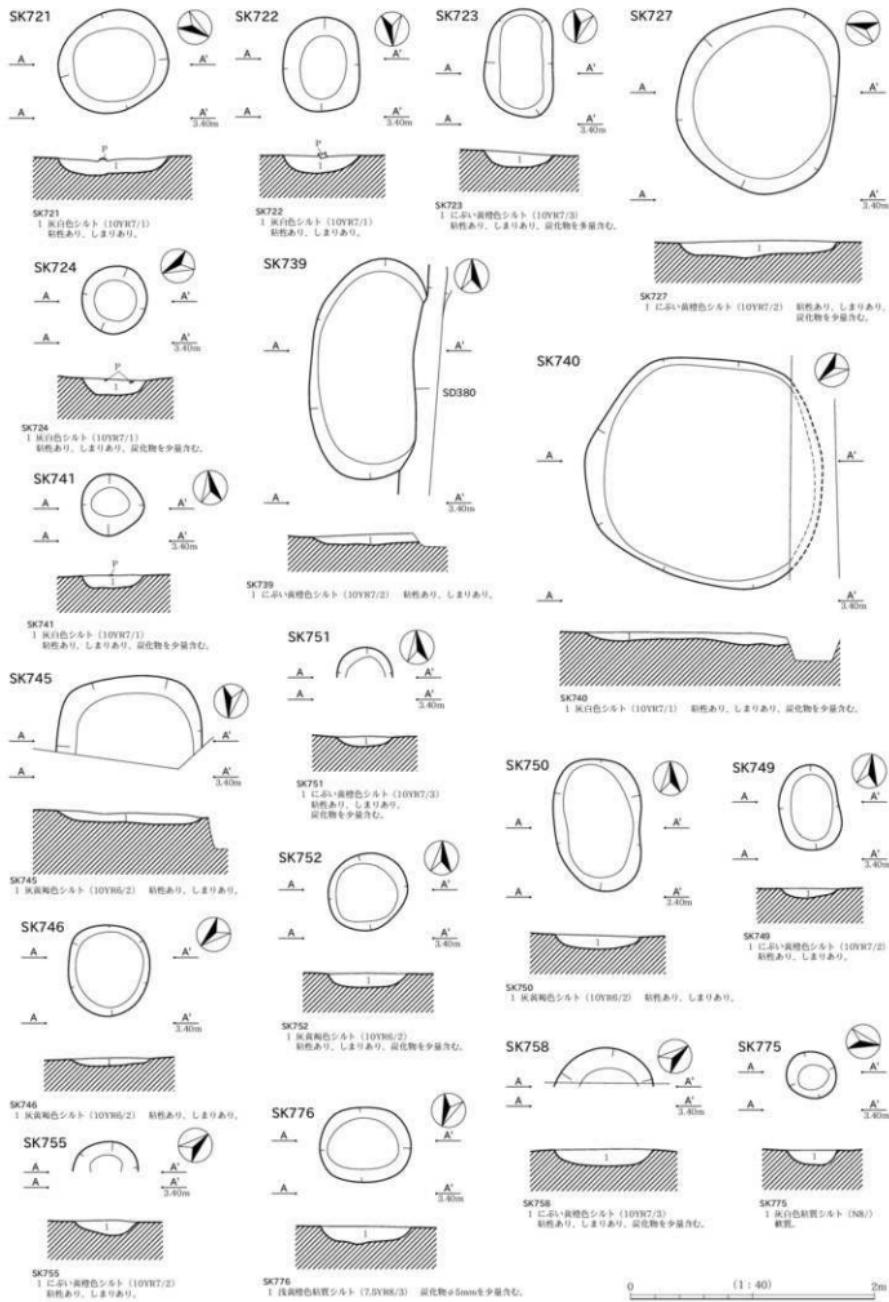


SK682

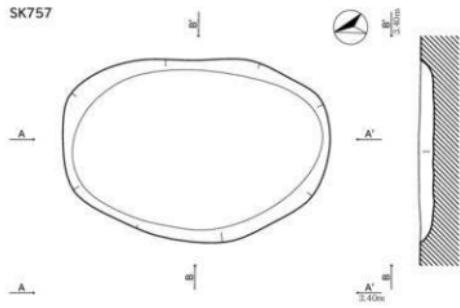




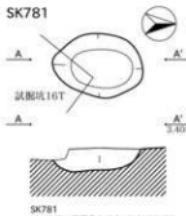




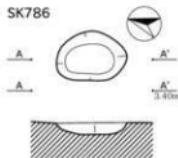
SK757



SK781

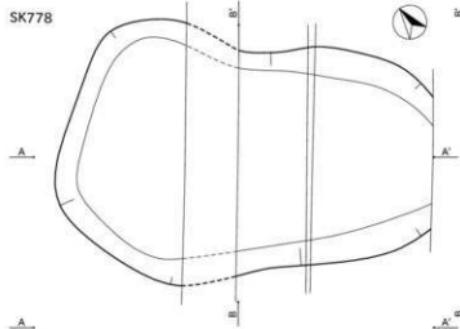


SK786



1 明眞褐色シルト (10YR7/6)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

SK778



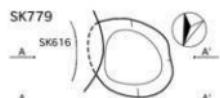
SK781

1 に赤い黄褐色シルト (10YR7/2)
粘性あり、しまりあり。

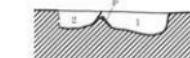
2 に赤い黄褐色シルト (10YR7/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

SK779

SK616

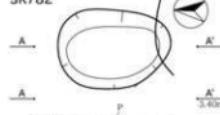


SK616



1 明眞褐色粘土 (2.5Y5/3)
粘性あり、しまりやなし。
炭化物を2~3mm程度を少量含む。赤色系をプロック層に含む。
褐色粒子を多量含む。

SK782

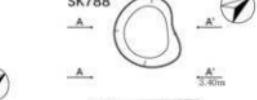


SK782

1 に赤い黄褐色シルト (10YR7/3)
粘性あり、しまりあり。
炭化物を多量含む。炭化物を少量、鐵土層を少量含む。

2 黄灰褐色シルト (10YR6/1)
粘性あり、しまりあり。

SK788



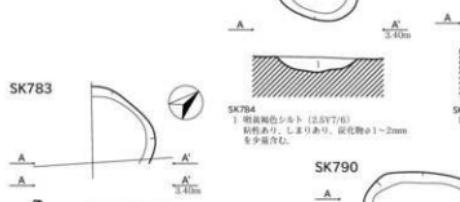
SK788

1 に赤い黄褐色シルト (10YR7/2)
粘性あり、しまりあり。

SK778

1 黄灰褐色シルト (10YR6/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

SK784



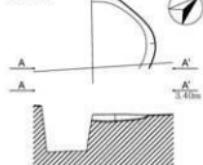
SK785



SK785

1 に赤い黄褐色シルト (10YR7/2)
粘性あり、しまりあり。

SK783

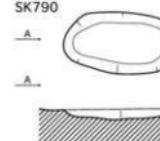


1 黄灰褐色シルト (10YR6/1)
粘性あり、しまりあり。

SK784

1 明眞褐色シルト (2.5Y7/6)
粘性あり、しまりあり、炭化物φ1~2mm
を少量含む。

SK790



1 に赤い黄褐色シルト (10YR7/2)
粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。

SK791



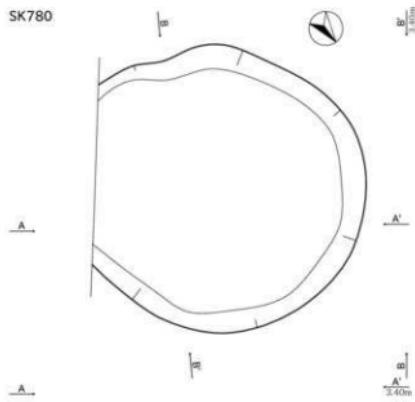
SK791

1 に赤い黄褐色シルト (10YR7/2)
粘性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

SK790

0 (1 : 40) 2m

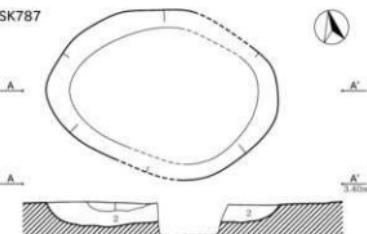
SK780



SK780

1 黒黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。

SK787



SK787

1 黒黄褐色シルト (7.5YR6/1) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量、壁上面を少量含む。
2 黑黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり。

SK792



SK792

1 黒黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり。

SK794



SK794

1 黒黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。

SK793



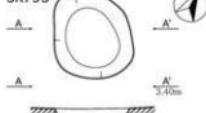
SD380

SK793

SK793

1 黒黄褐色シルト (5YR6/1) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。

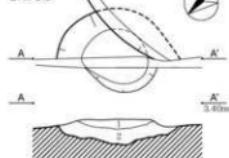
SK795



SK795

1 黒黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり。炭化物を多量含む。

SK796

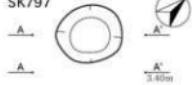


SK796

1 黒黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。

2 黑黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり。

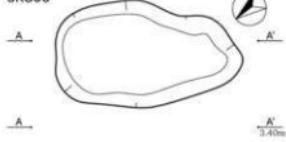
SK797



SK797

1 黑黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。

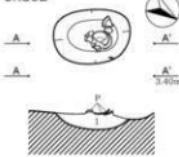
SK800



SK800

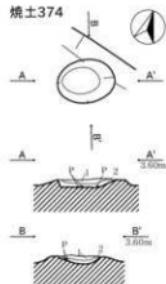
1 黑白色粘質シルト (7.5YR6/2) しまり強い。炭化物を2mmを比較的多く含む。

SK802



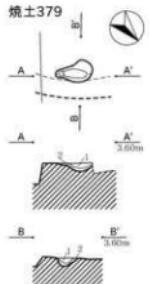
SK802

1 黑黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり。



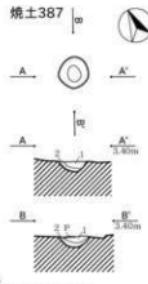
焼土374

1 朱褐色シルト (10YR5/3)
粘性あり、しまりあり。
2 朱褐色土塊を含む。



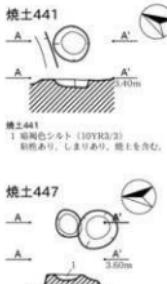
焼土379

1 朱褐色シルト (10YR5/3)
粘性あり、土塊を多量含む。
2 朱褐色シルト (10YR5/3)



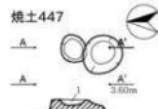
焼土387

1 朱褐色シルト (10YR5/2)
粘性あり、しまりあり。



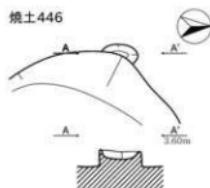
焼土441

1 朱褐色シルト (10YR3/2)
粘性あり、しまりあり。土塊を含む。



焼土447

1 朱褐色シルト (10YR3/2)
粘性あり、しまりあり。土塊を含む。



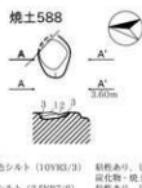
焼土446

1 朱褐色シルト (10YR3/3)
粘性あり、しまりあり。土塊を含む。



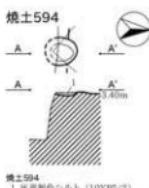
焼土454

1 朱褐色シルト (10YR3/1)
粘性あり、しまりあり。
2 硫化物・土塊を多量含む。



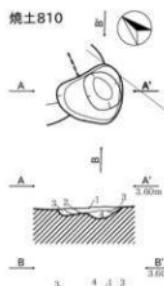
焼土588

1 朱褐色シルト (10YR3/3)
粘性あり、しまりあり。
2 棕褐色シルト (2.5YR7/6)
3 绿褐色シルト (2.5YR6/6)



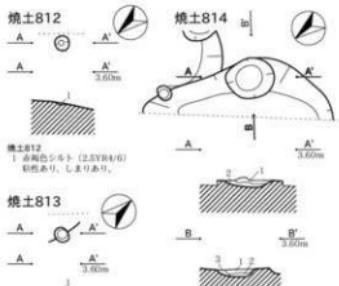
焼土594

1 朱褐色シルト (10YR3/2)
粘性あり、しまりあり。土塊を含む。



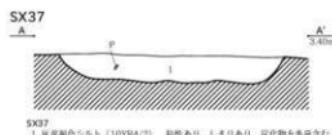
焼土810

1 朱褐色シルト (10YR5/1)
粘性あり、しまりあり。
2 硫化物・土塊を含む。
3 朱褐色シルト (10YR5/1)
粘性あり、しまりあり。
4 朱褐色シルト (10YR5/1)
粘性あり、しまりあり。
5 硫化物を多量含む。



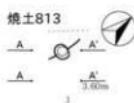
焼土812

1 朱褐色シルト (2.5YR4/6)
粘性あり、しまりあり。



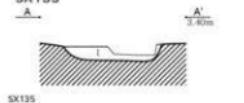
SX37

1 朱褐色シルト (10YR4/2)
粘性あり、しまりあり。硫化物を多量含む。



焼土813

1 朱褐色シルト (2.5YR4/6)
粘性あり、しまりあり。



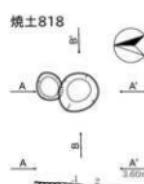
SX135

1 朱褐色シルト (10YR6/3)
粘性あり、しまりあり。硫化物を多量含む。



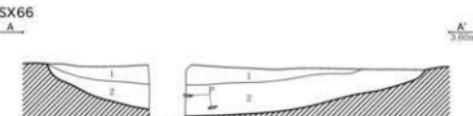
焼土824

1 朱褐色シルト (5YR4/2)
粘性あり、しまりあり。
2 硫化物を少量、土塊を多量含む。



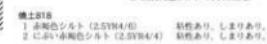
焼土818

1 朱褐色シルト (2.5YH4/6)



SX66

1 朱褐色シルト (10YR7/3)
2 朱褐色シルト (2.5YR6/2)



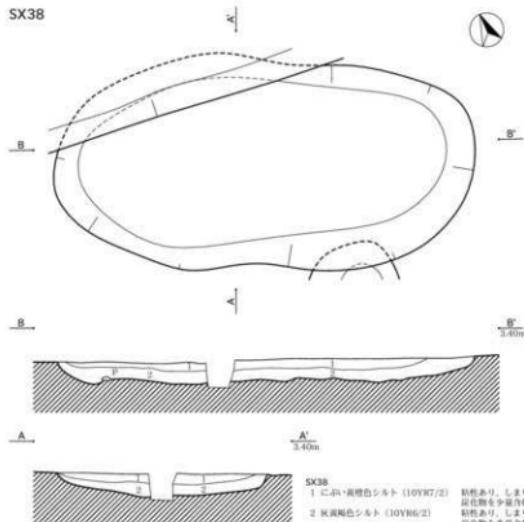
焼土819

1 朱褐色シルト (2.5YH4/6)
2 朱褐色シルト (2.5YH4/4)

粘性あり、しまりあり。硫化物を多量含む。
粘性あり、しまりあり。硫化物を多量含む。

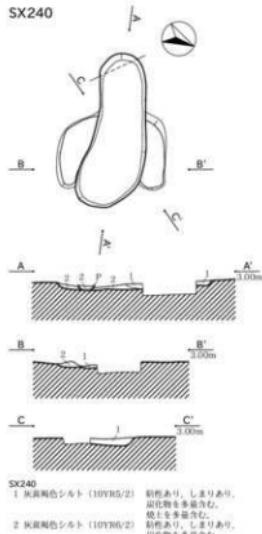
0 (1:40) 2m

SX38



$\frac{B'}{B}$
3.00m
 A'
3.40m

SX240

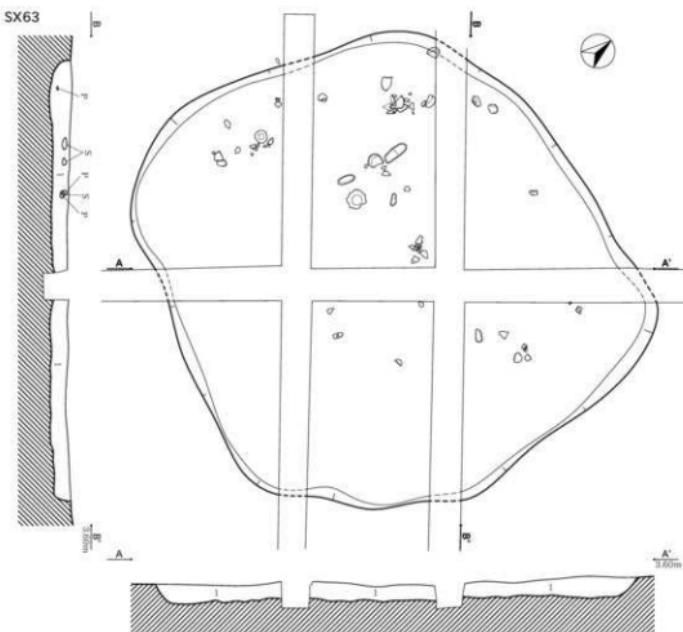


$\frac{A'}{A}$
3.00m
 B'
3.00m
 C'
3.00m

- SX38
 1. 黄褐色シート (10YR7/2) 蒜性あり、しまりあり。
 反応物を少量含む。
 2. 黄褐色シート (10YR6/2) 蒜性あり、しまり強い。
 反応物を多量含む。

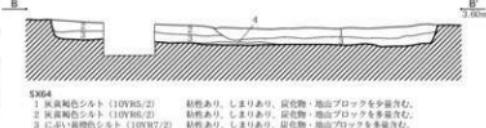
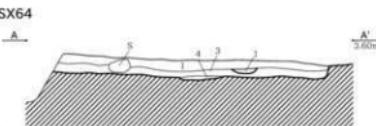
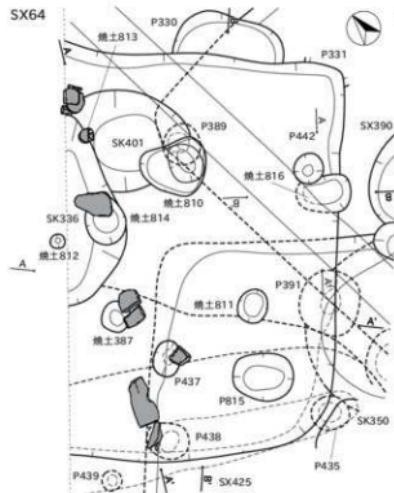
- SX240
 1. 黄褐色シート (10YR5/2) 蒜性あり、しまりあり。
 反応物を多量含む。
 2. 黄褐色シート (10YR6/2) 蒜性あり、しまりあり。
 反応物を多量含む。

SX63

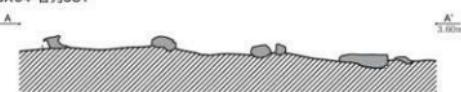


- SX63
 1. 黄褐色シート (10YR5/2) 蒜性やもあり、しまり強い。反応物を多量含む。

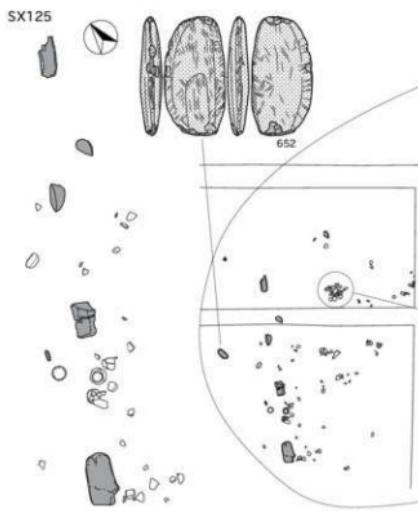
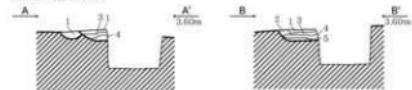
0 (1 : 40) 2m



SX64-石列381



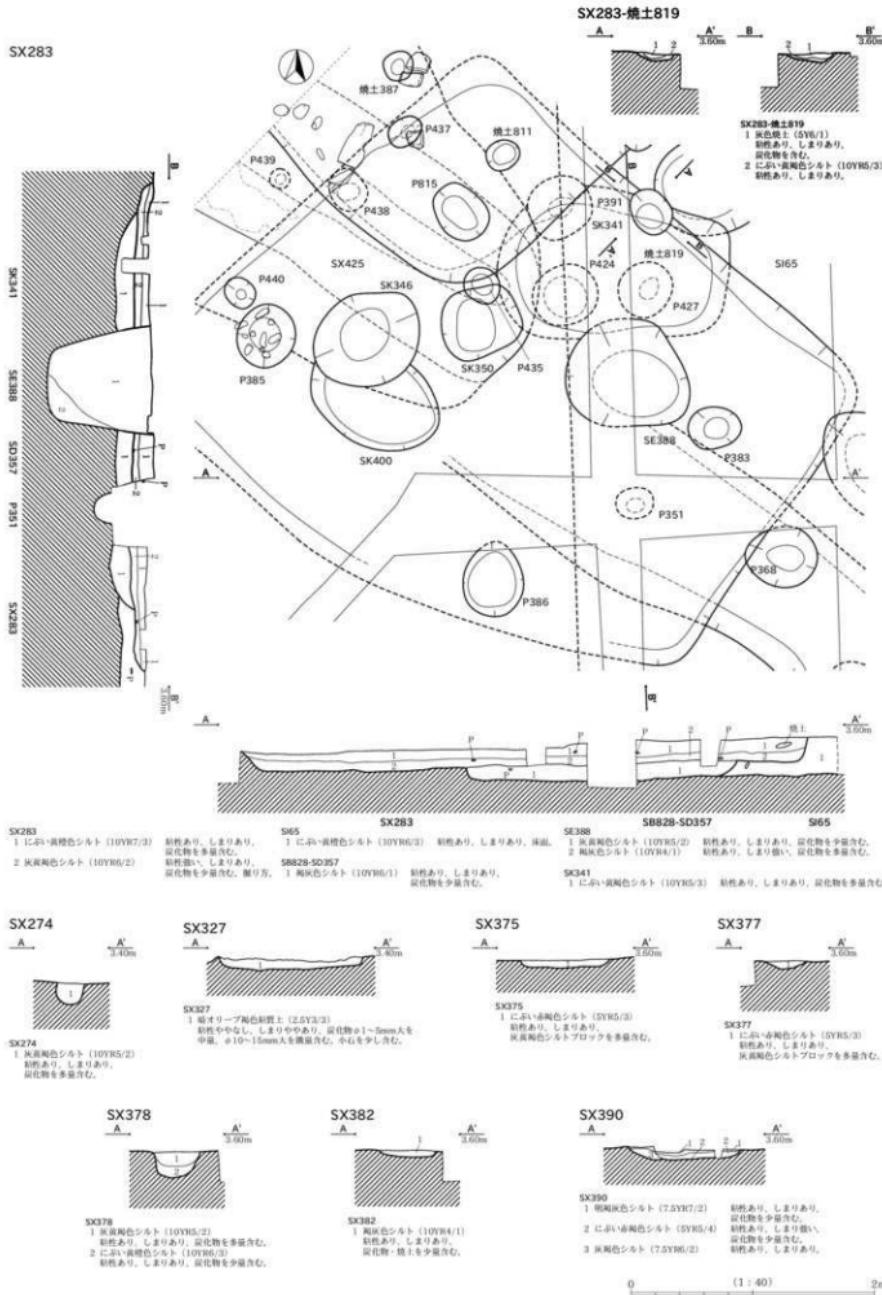
SX64-猥土816



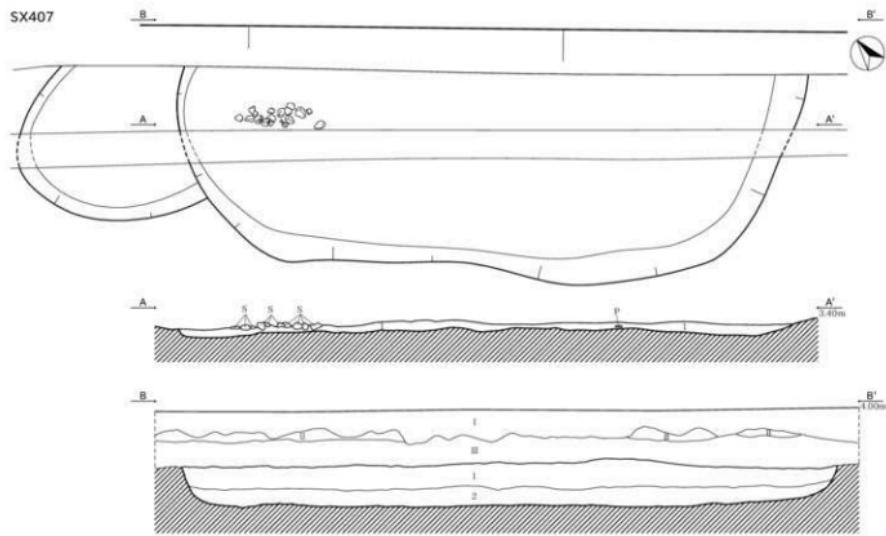
圖版 63

古代遺構個別図 (1/40)

SX283



SX407



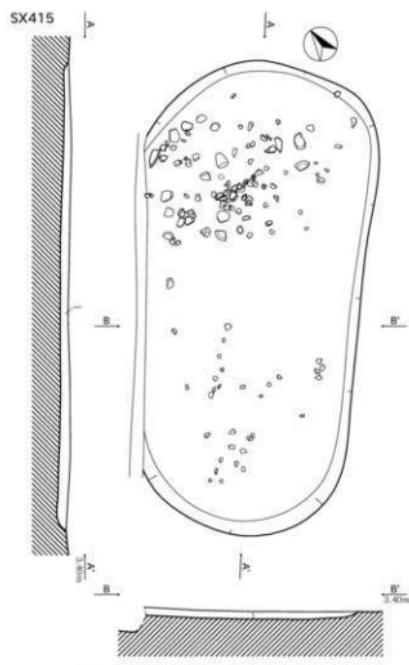
SX407

- 1 に高い黄褐色シルト (10YR6/3) 粒性あり、しまりあり、炭化物を含む。
2 に低い黒褐色シルト (10YR5/3) 粒性あり、しまりあり、炭化物を含む。

SX416



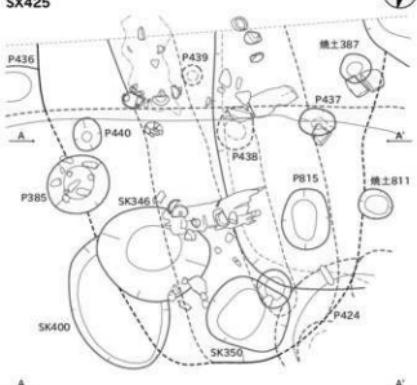
SX415



SX415

- 1 に高い黄褐色シルト (10YR7/2) 粒性あり、しまりあり、炭化物を少量含む。

SX425



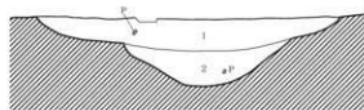
SX425

- 1 黒褐色シルト (10YR3/3) 粒性あり、しまりあり、炭化物を多量含む。
2 黑褐色シルト (10YR3/2) 粒性あり、しまりあり。

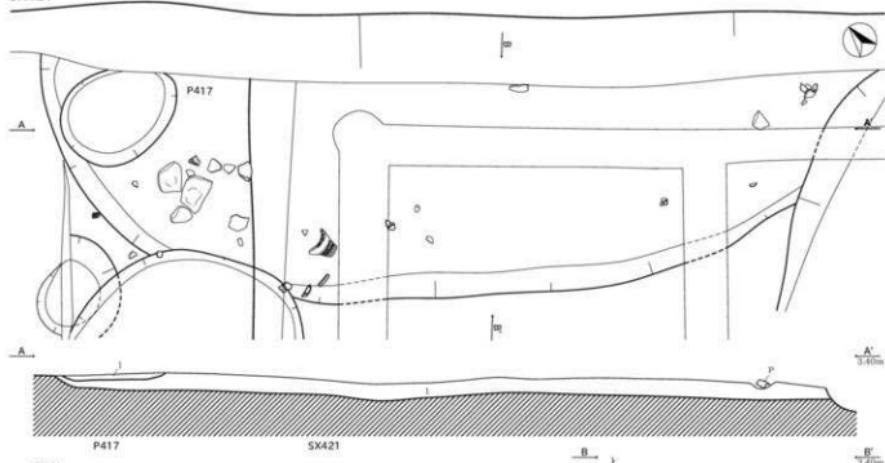
0

(1:40)

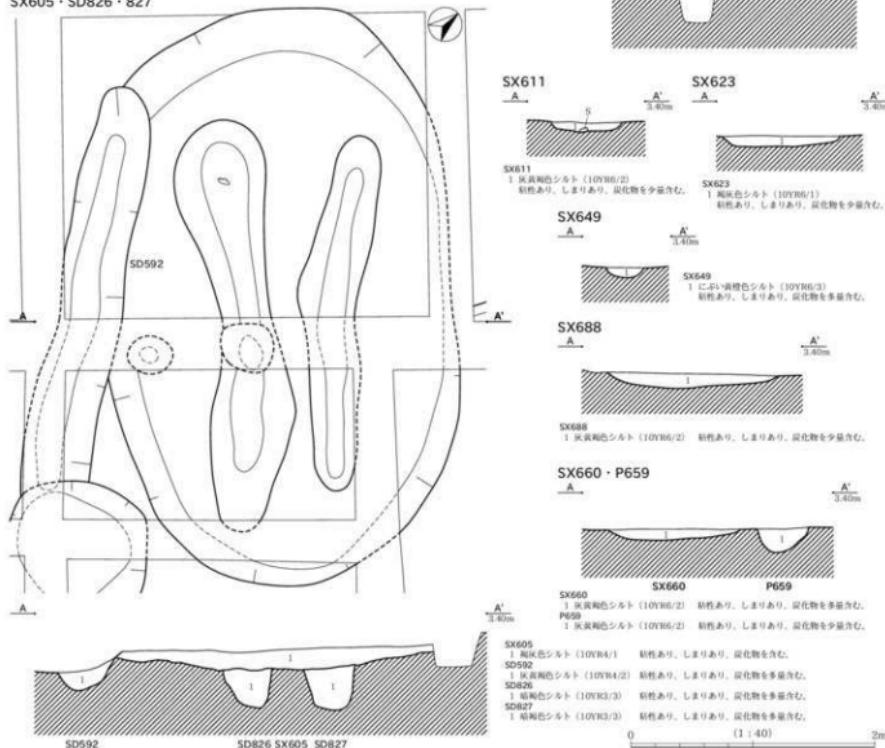
2m

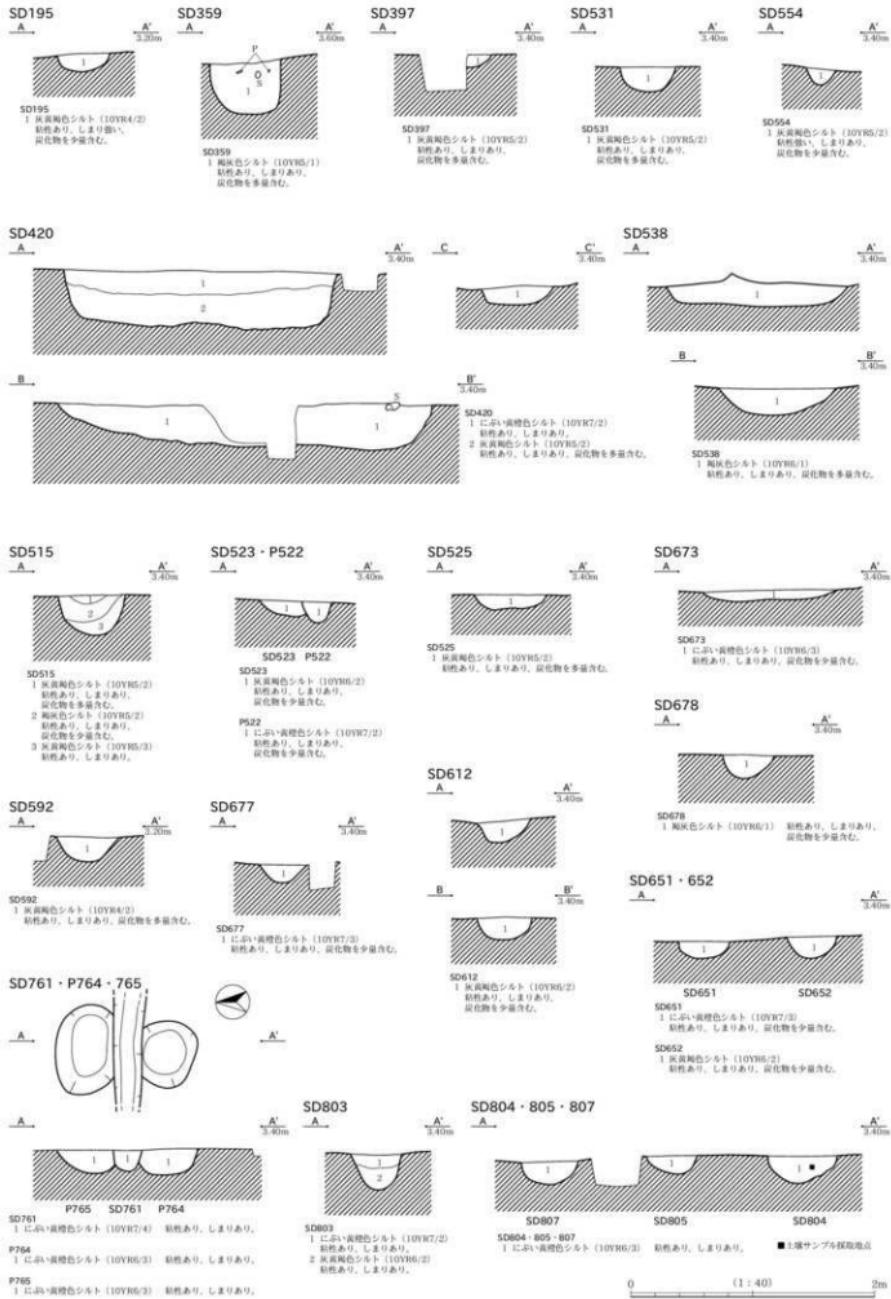


SX421



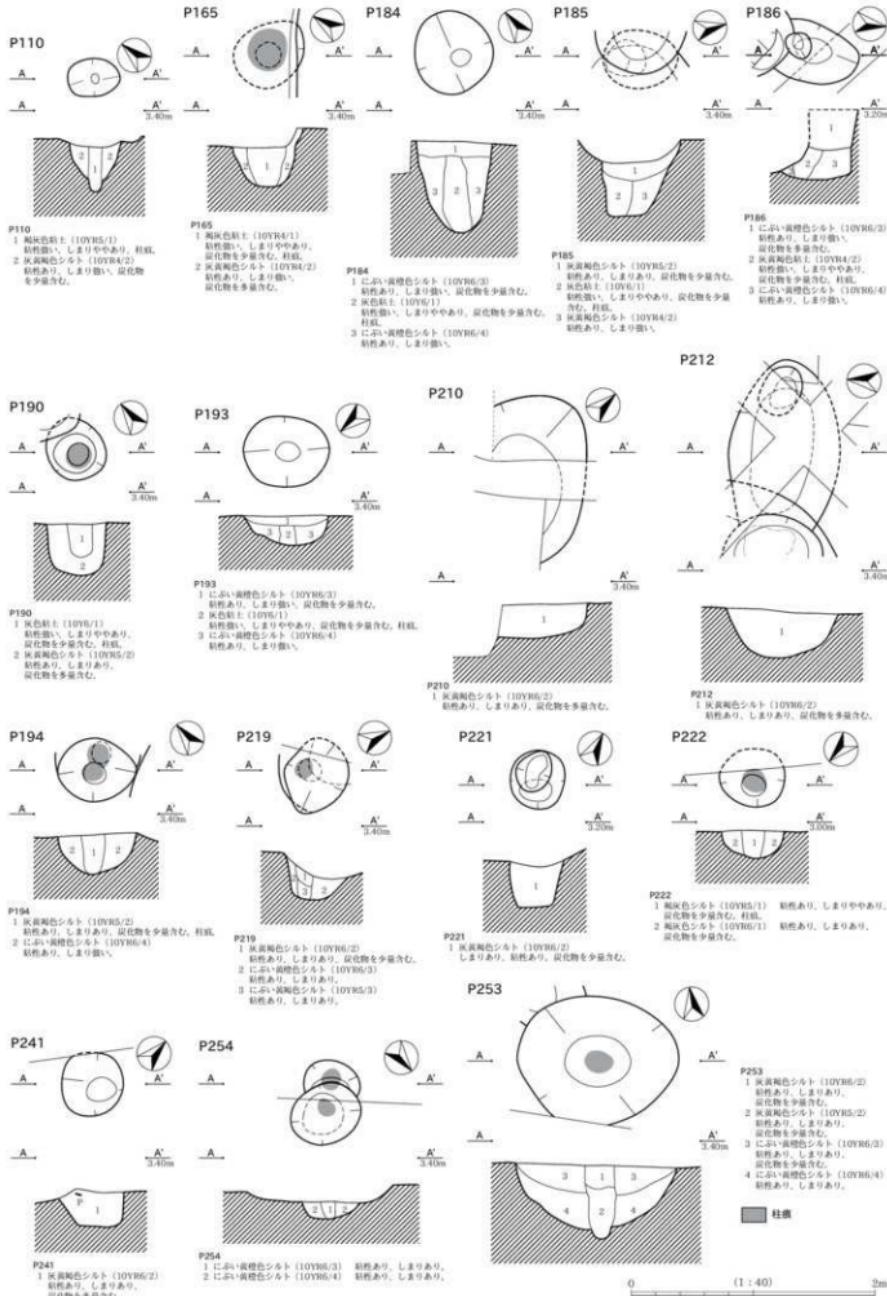
SX605・SD826・827

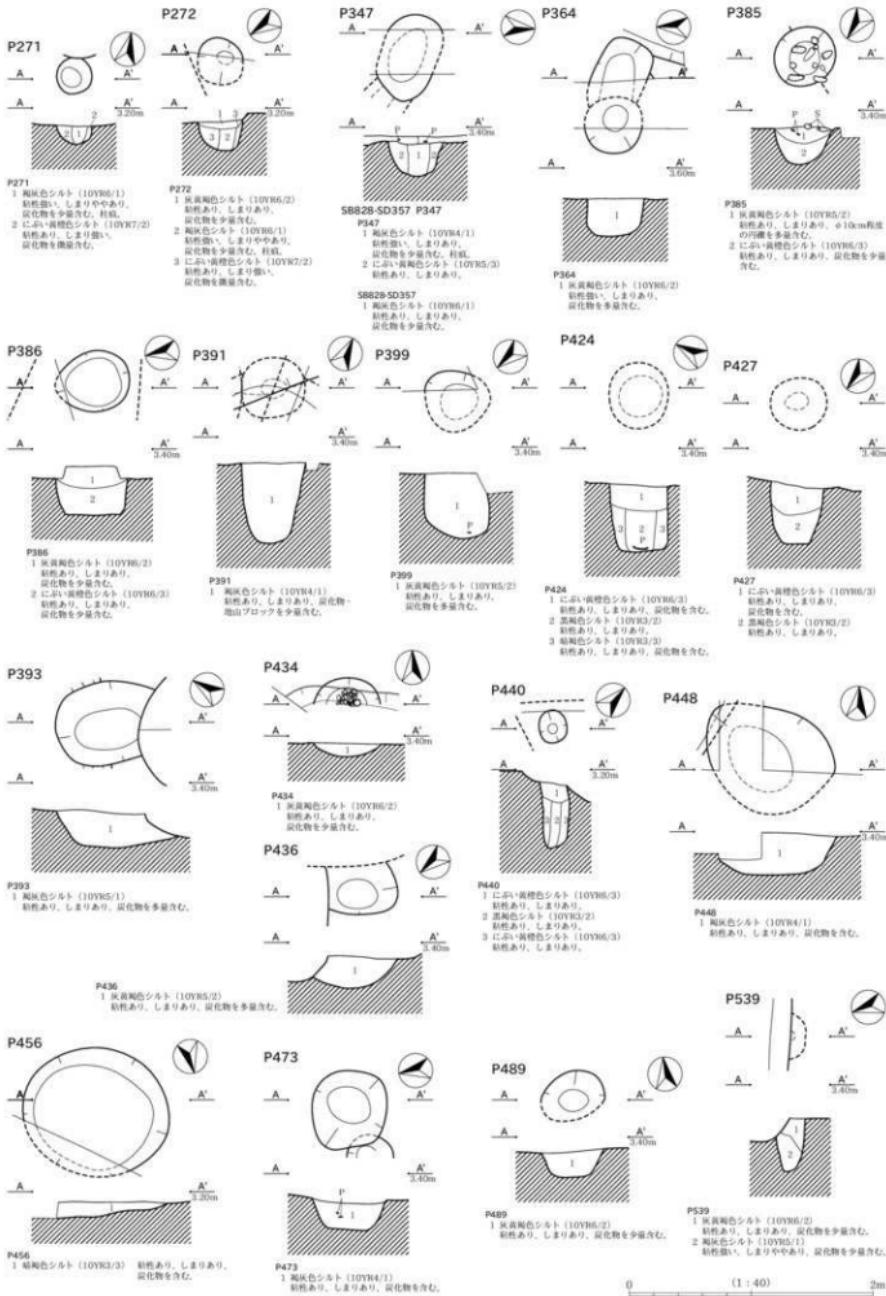


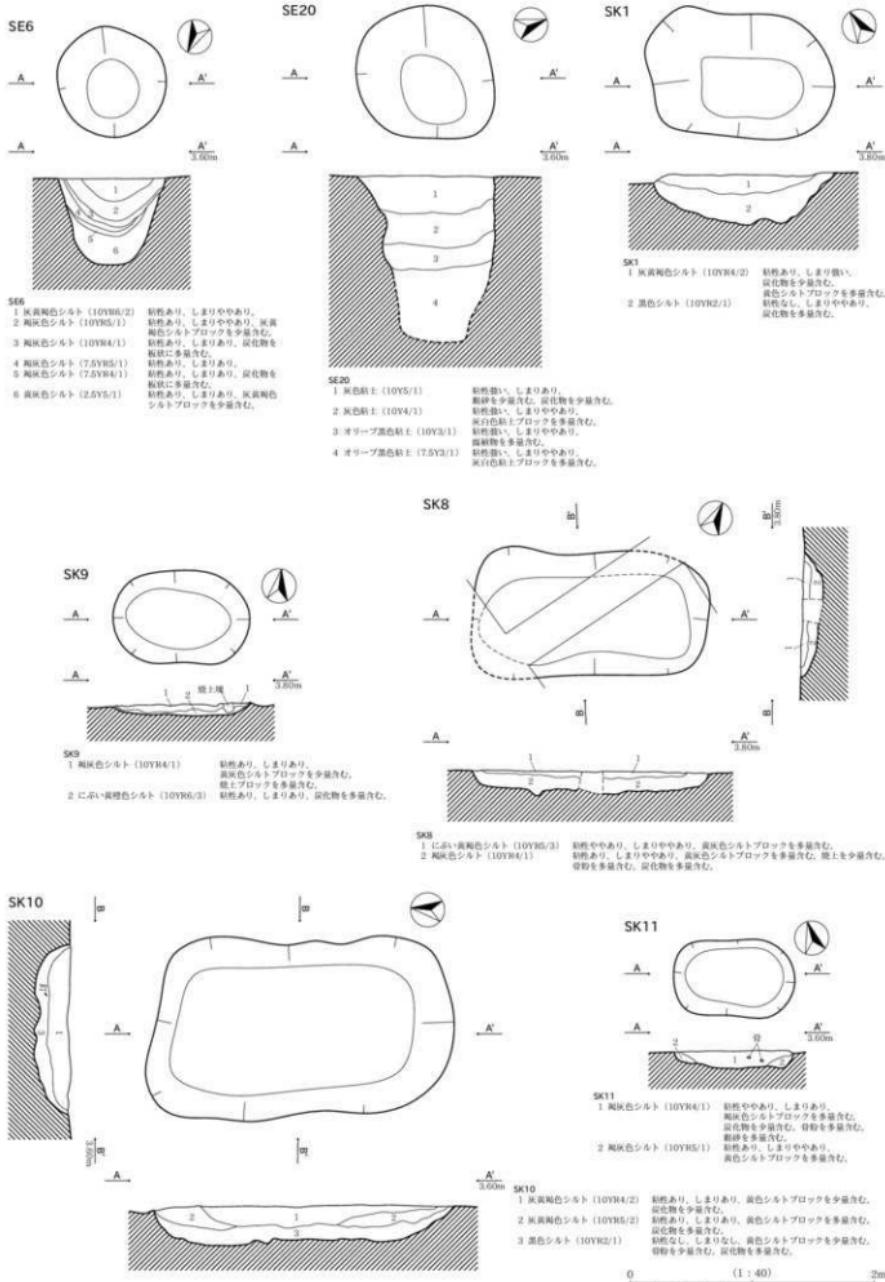


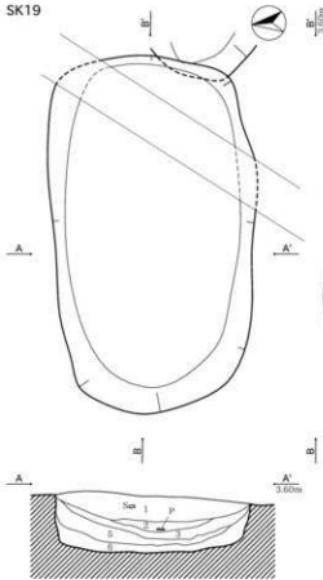
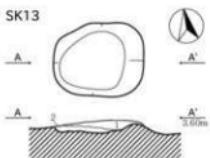
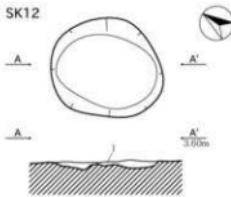
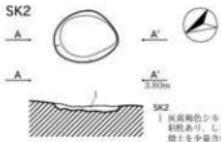
圖版 67

古代遺構個別図 (1/40)

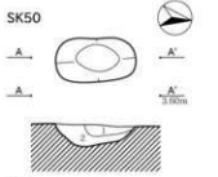
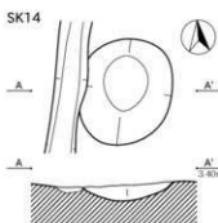
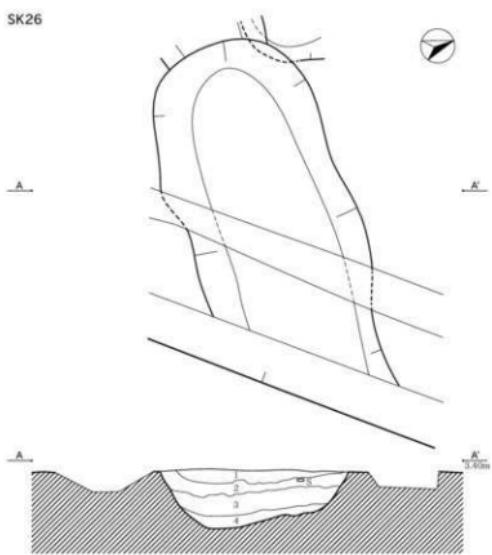




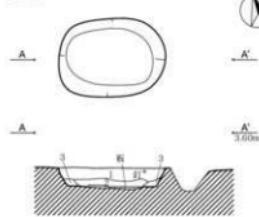




SK26



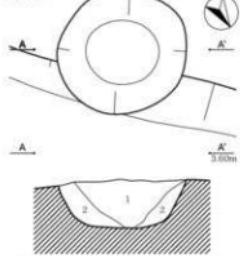
SK15



SK15

- 1 黄褐色シルト (10YR5/1) 粘性あり、しまりあり。
2 黄褐色粘土 (10YR4/1) 黄褐色シルトブロックを多量含む。
3 黄褐色シルト (10YR4/2) 粘性あり、しまりあり。
黄褐色シルトブロックを多量含む。

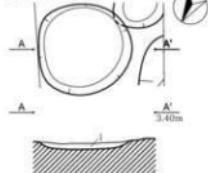
SK16



SK16

- 1 黄褐色シルト (10YR3/1) 粘性あり、しまりややあり。
地山ブロックを多量含む。
2 黄褐色シルト (10YR4/1) 粘性あり、しまりややあり。
地山ブロックを多量含む。

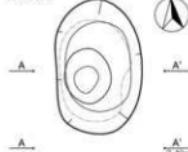
SK284



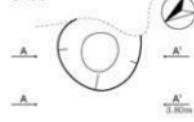
SK284

- 1 黄褐色粘土 (10YH2/3) 粘性ややあり、しまりなし。
炭化物を微量含む。

SK600



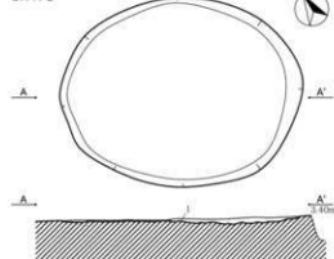
SK52



SK52

- 1 にらい黄褐色シルト (10YR7/3) 粘性弱い、しまりあり、地山ブロックを多量含む。

SK478



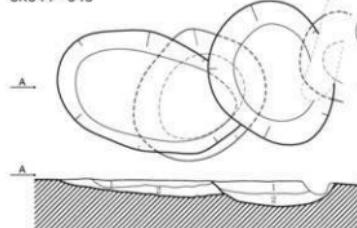
SK478

- 1 黒色シルト (10YR2/1) 粘性なし、しまりなし。炭化物を少量含む。

SK600

- 1 黒色シルト (7.5Y6/1) 粘性あり、しまりあり。
炭化物を少量化する。
2 黒色シルト (7.5Y4/1) 粘性弱い、しまりあり。
炭化物を含む。
3 黒色シルト (10YR1.7/1) 粘性弱い、しまりあり。
地山ブロックを多量含む。
4 黄褐色シルト (10Y5d/1) 粘性あり、しまりあり。
7.5Y6/1色シルトブロックを含む。
5 黄褐色シルト (10YR5/1) 粘性弱い、しまりあり。
炭化物を含む。
6 黑色シルト (7.5Y6/1) 粘性弱い、しまりあり。
地山ブロック (10YR1.7/1) を含む。

SK544・545



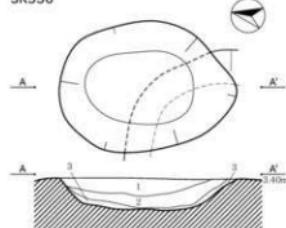
SK544

- 1 黄褐色シルト (10YR5/2) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。
2 黑色シルト (10YR2/1) 粘性なし、しまりなし。炭化物を少量含む。

SK545

- 1 黑色シルト (10YR2/1) 粘性なし、しまりなし。炭化物を少量含む。
2 黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性なし、しまりあり。炭化物を少量含む。

SK556



SK556

- 1 黄褐色シルト (10YR4/2) 粘性あり、しまり強い。炭化物を少量含む。
2 黑色シルト (10YR2/1) 粘性弱い、しまりあり。炭化物を多量含む。
3 C-らし黄褐色シルト (10YR7/4) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。

SD17



SD17

- 1 黄褐色シルト (10YR4/1) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。

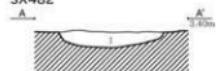
SD18



SD18

- 1 黄褐色シルト (10YR5/1) 粘性弱い、しまりあり。炭化物を少量含む。

SX482



SX482

- 1 黄褐色シルト (10YR6/2) 粘性あり、しまりあり。炭化物を多量含む。

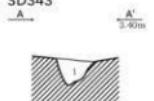
SD55



SD55

- 1 黄褐色シルト (10YR5/1) 粘性あり、しまりややあり。炭化物を少量含む。

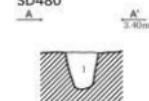
SD343



SD343

- 1 黄褐色粘土 (10Y4/1) 粘性中弱い、しまりややなし。炭化物約1~3mmを含む。5mm以上をごく微量含む。オーラー黒色 (SY3/1) 粘土をブリッカウ様に少量含む。

SD480



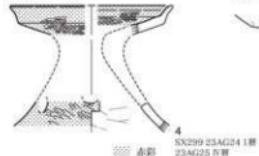
SD480

- 1 黑色シルト (10YR5/1) 粘性あり、しまりあり。炭化物を少量含む。

SK584 (1・2)



SX299 (4)



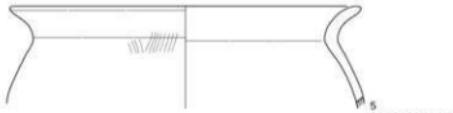
包含層 (6)



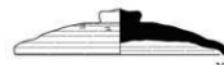
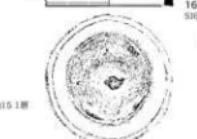
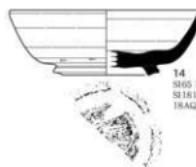
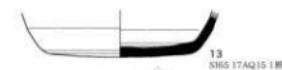
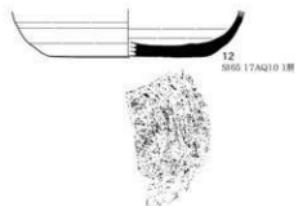
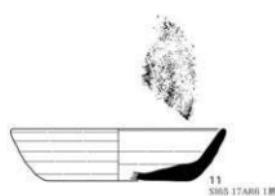
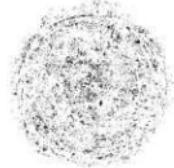
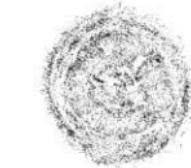
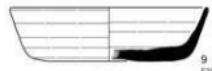
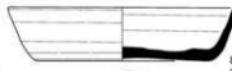
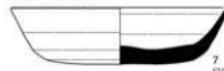
SX125 (3)



SX406 (5)

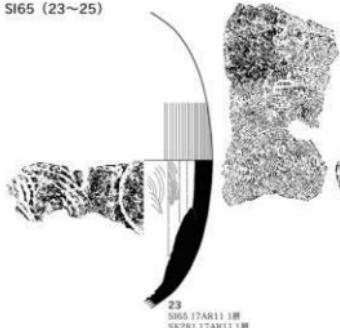


SI65 (7~22)

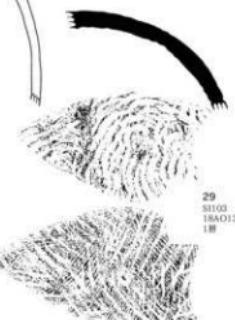
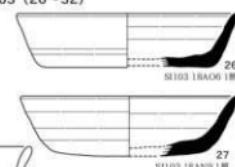


■ 黒色處理
0 (1:3) 10cm

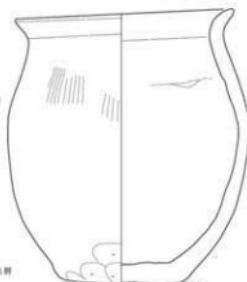
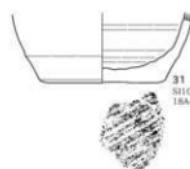
SI65 (23~25)



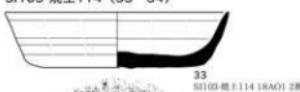
SI103 (26~32)



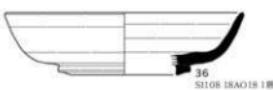
SI65 17AQ15 1層



SI103-焼土114 (33~34)



SI108 (35~39)

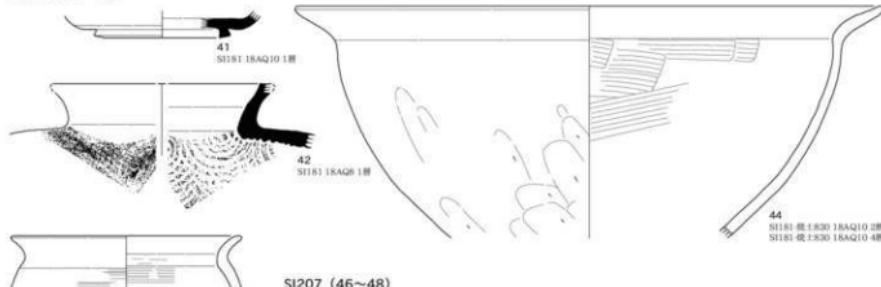


SI108-焼土211 (40)



0 (1 : 3) 10cm

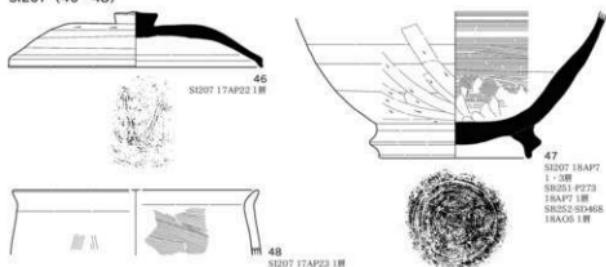
SI181 (41~44)



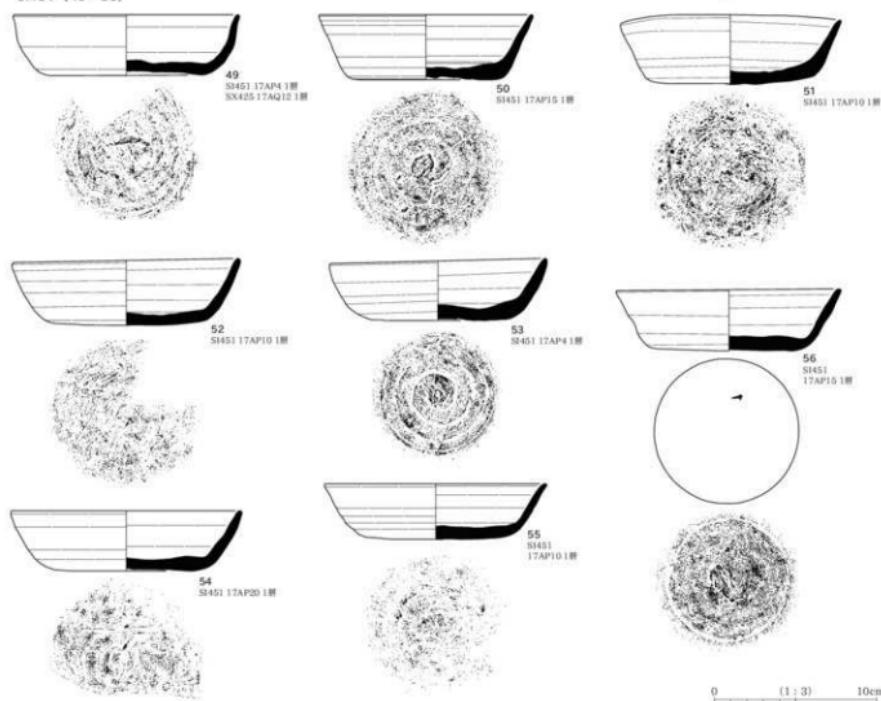
SI181-P81 (45)



SI207 (46~48)

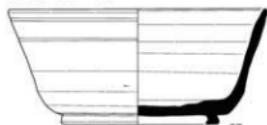


SI451 (49~56)

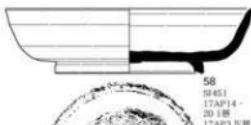


0 (1 : 3) 10cm

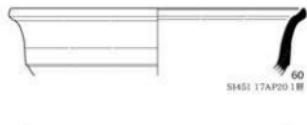
SI451 (57~70)



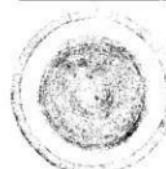
57
SI-451 17AP20 1勝
SX-63 17AQ17-22 1勝
SX-425 17AQ7-12 1勝
SD-420 17AP3 1勝
17AQ13 1勝



58
M451
17AP14 -
2015
17AP13 155



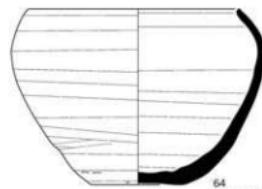
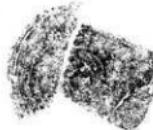
SHS1 17AP20 100



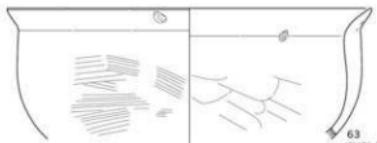
■ 黑色地带



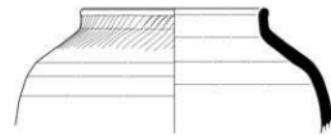
62



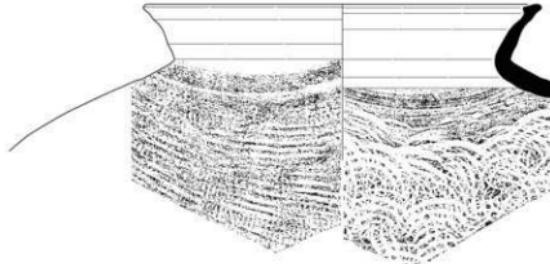
64
SI-451 17AP14 1勝
SK94 18AP5 3勝
SK460 17AP15 1勝
SK472 16AP10 1勝
SD420 16AP8 - 9 2勝
15AP22 - 29, 17AQ12
16 - 20 25勝
17AP15 カクラン



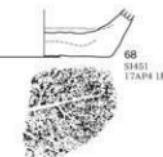
S1451 17AP5 1B



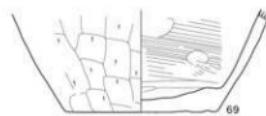
65
S1451 11AP10 18
SH251 SK68 18AP13 18
20AP6 18



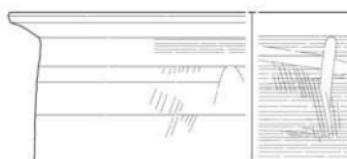
S451 17AP20 19



53451 17AP10 100



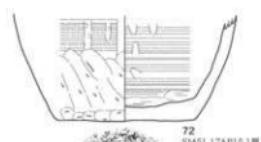
69
S1451
17AP2018
S003



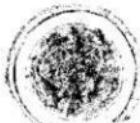
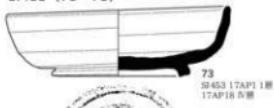
70



SI451 (71·72)



SI453 (73~75)



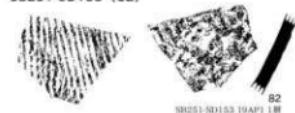
SB251-P149 (76)



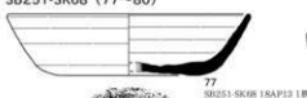
SB251-SK106 (81)



SB251-SD153 (82)



SB251-SK68 (77~80)



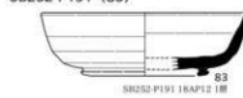
SB251-SK68 18AP13 1#

SN124 18AQ21 1#

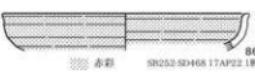
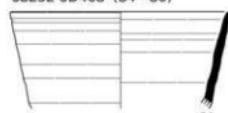
18AP13 - 18 AP13



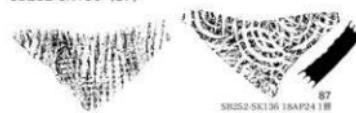
SB252-P191 (83)



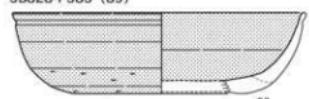
SB252-SD468 (84~86)



SB252-SK136 (87)



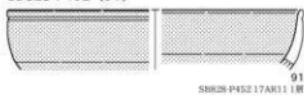
SB828-P383 (89)



SB828-P450 (90)



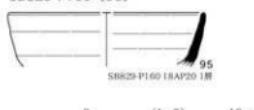
SB828-P452 (91)



SB828-SD357 (92~94)

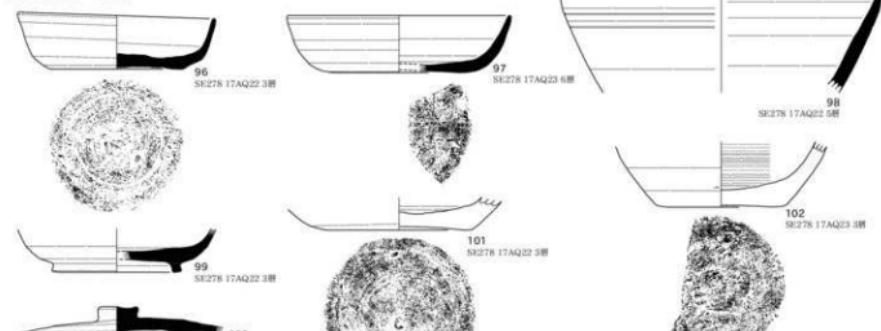


SB829-P160 (95)

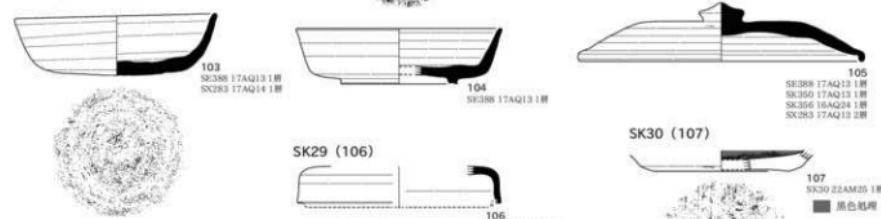


0 (1 : 3) 10cm

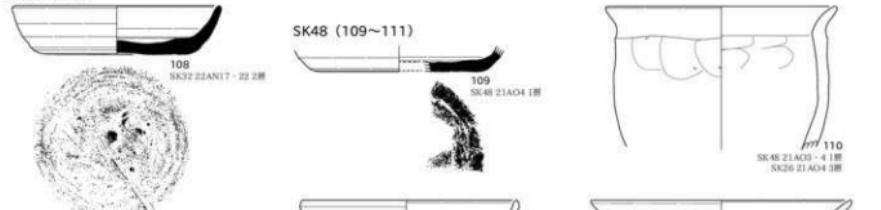
SE278 (96~102)



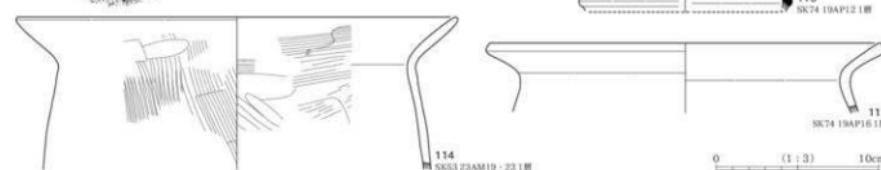
SE388 (103~105)



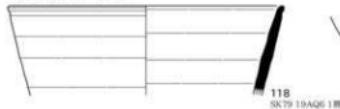
SK32 (108)



SK53 (112~115)



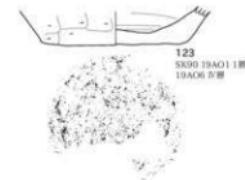
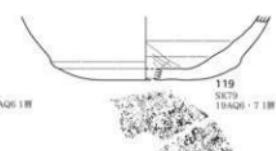
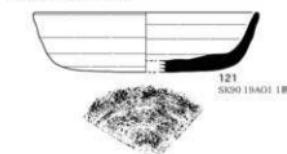
SK79 (118·119)



SK85 (120)



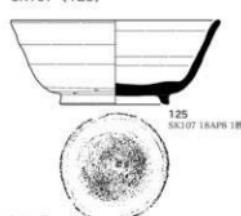
SK90 (121~123)



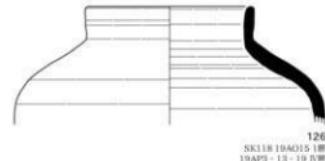
SK104 (124)



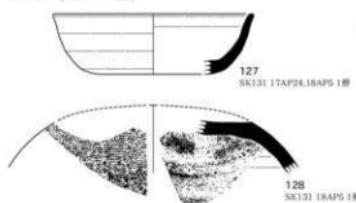
SK107 (125)



SK118 (126)

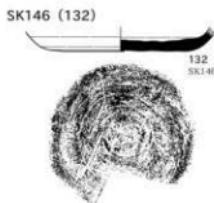
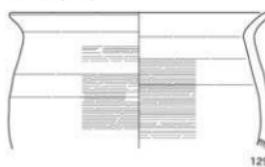


SK131 (127·128)



SK145 (130·131)

SK139 (129)



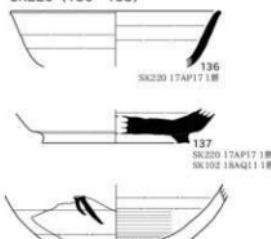
SK215 (135)



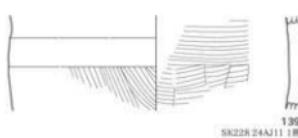
SK182 (134)



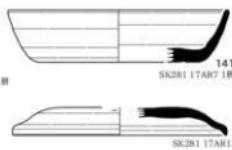
SK220 (136~138)



SK228 (139)



SK281 (140~143)



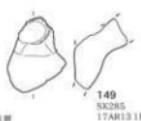
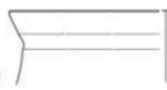
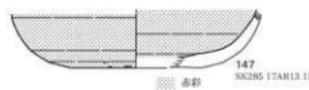
SK282 (144)



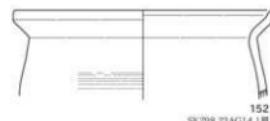
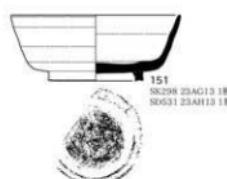
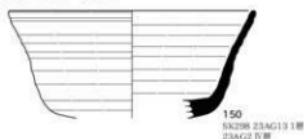
SK285 (145~149)



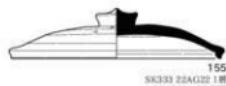
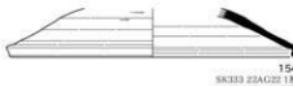
SK281 17AR7 1B
■ 黒色處理



SK298 (150~152)



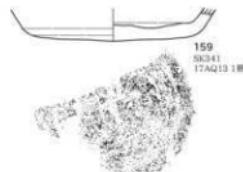
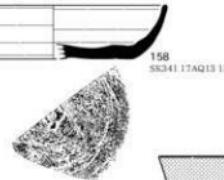
SK333 (153~155)



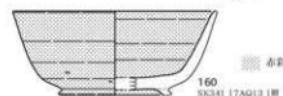
SK335 (156)



SK341 (158~163)

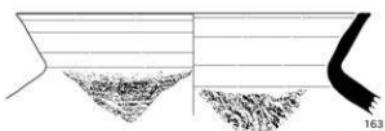


SK336 (157)



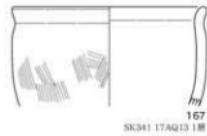
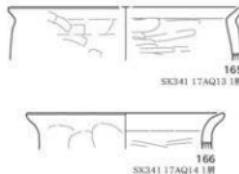
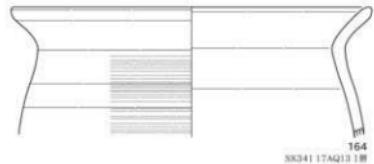
SK341 17AQ14 1B

162
SK341 17AQ13 1B
SD420 16AP13 1B

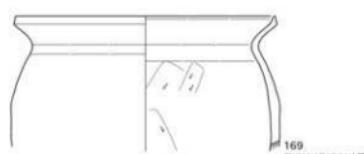


0 (1:3) 10cm

SK341 (164~169)



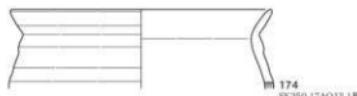
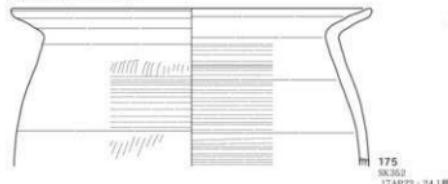
SK346 (170~172)



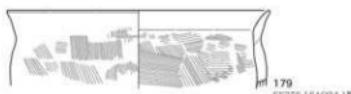
SK350 (173·174)



SK352 (175·176)



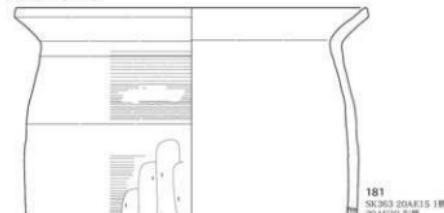
SK356 (178~180)



SK400 (182)



SK363 (181)

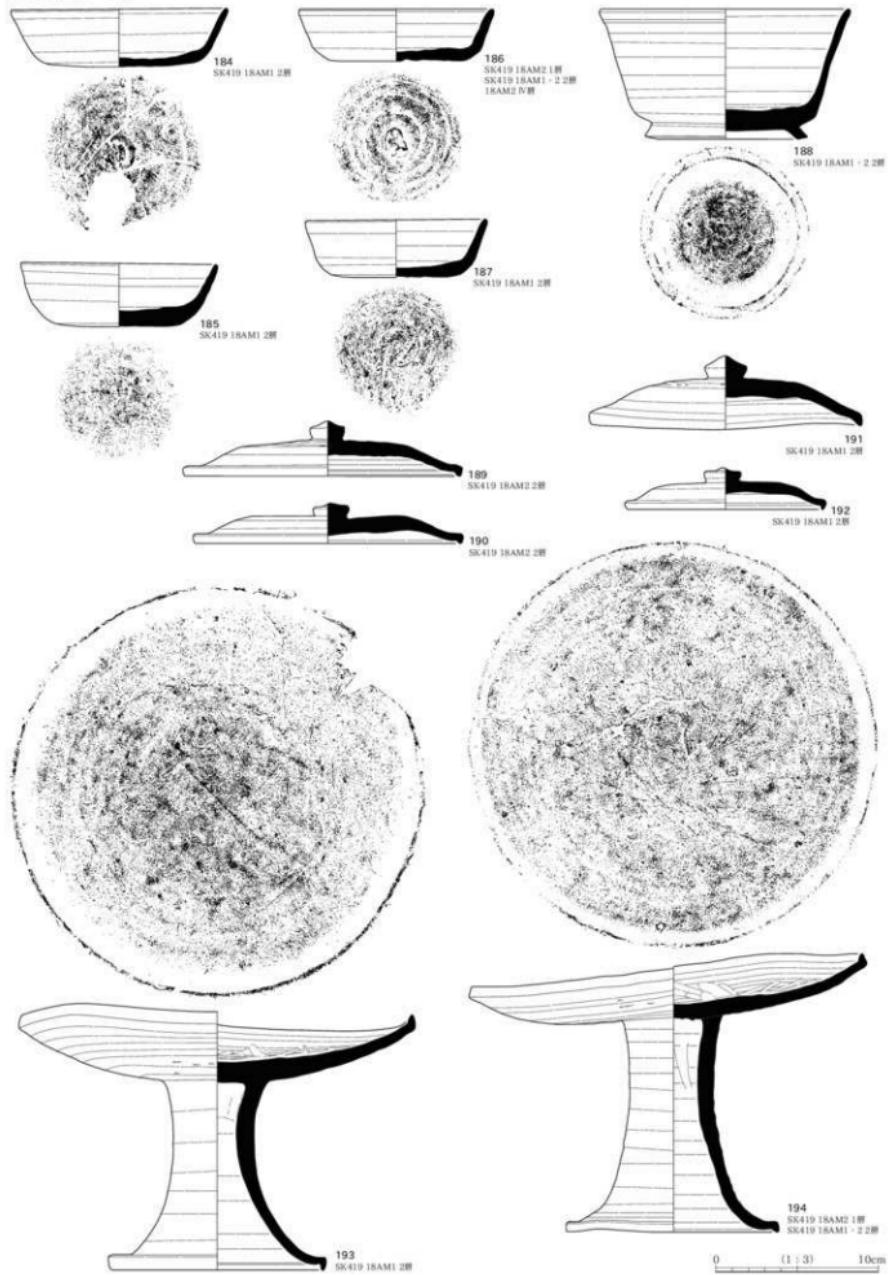


SK413 (183)

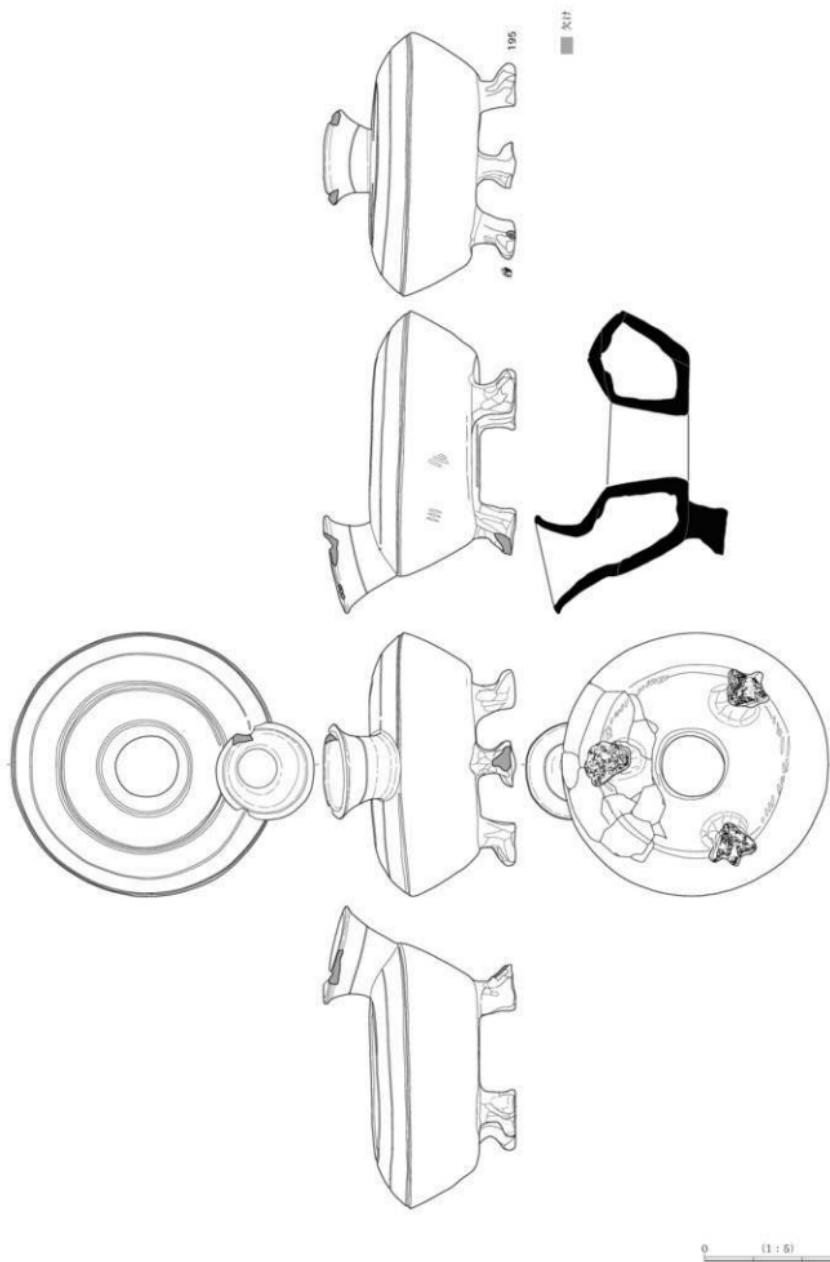


0 (1 : 3) 10cm

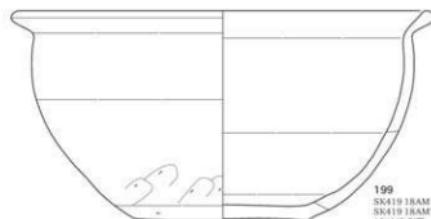
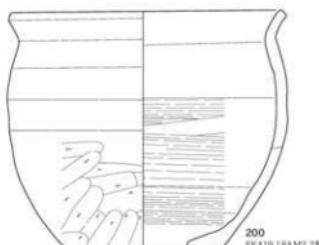
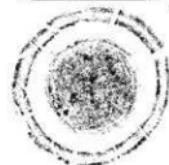
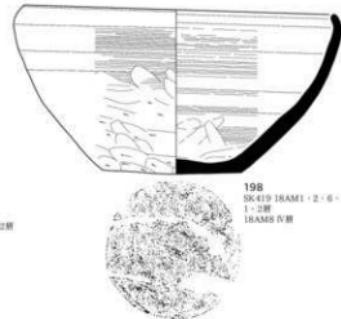
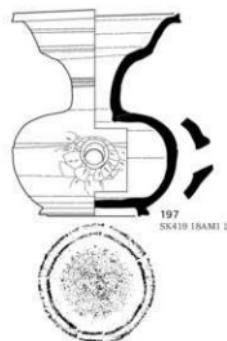
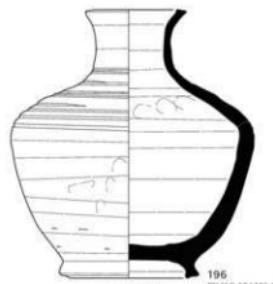
SK419 (184~194)



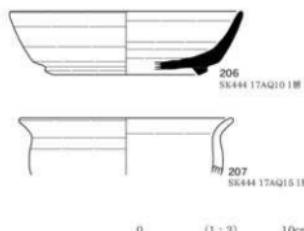
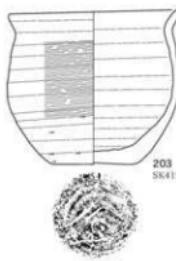
SK419 (195)



SK419 (196~204)

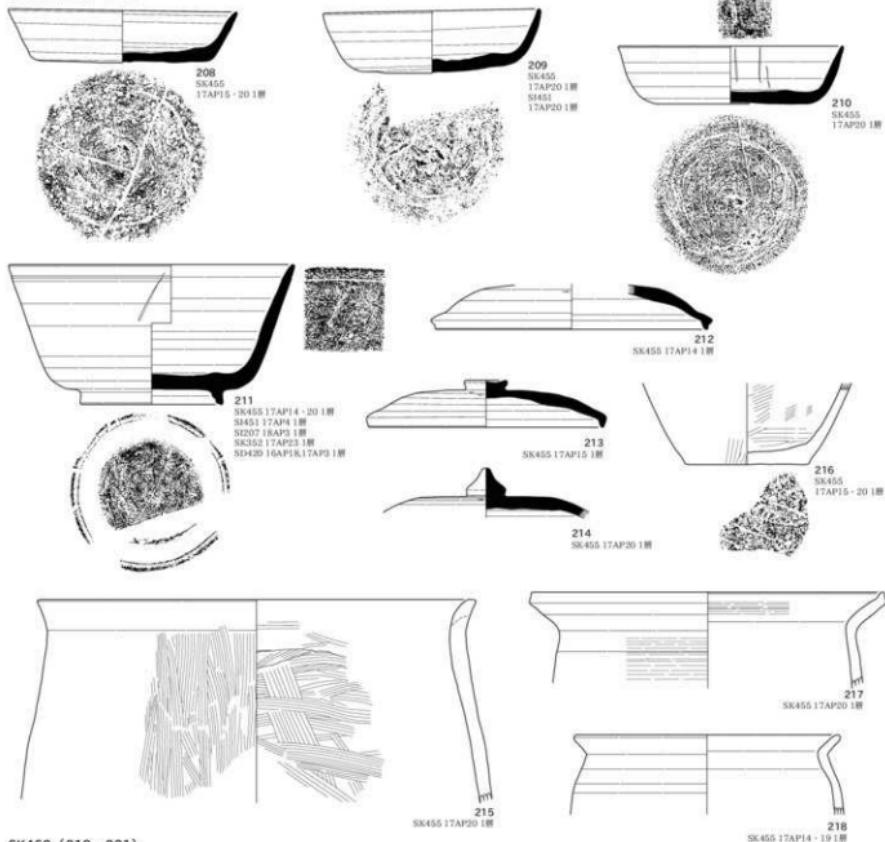


SK444 (205~207)

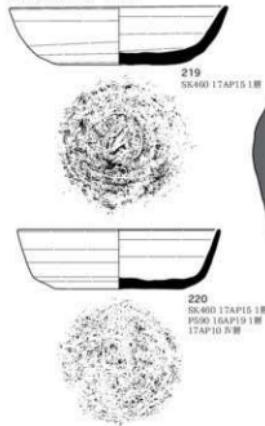


0 (1 : 3) 10cm

SK455 (208~218)



SK460 (219~221)



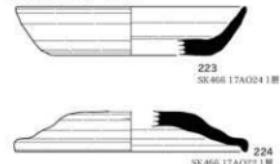
■ 黒色處理

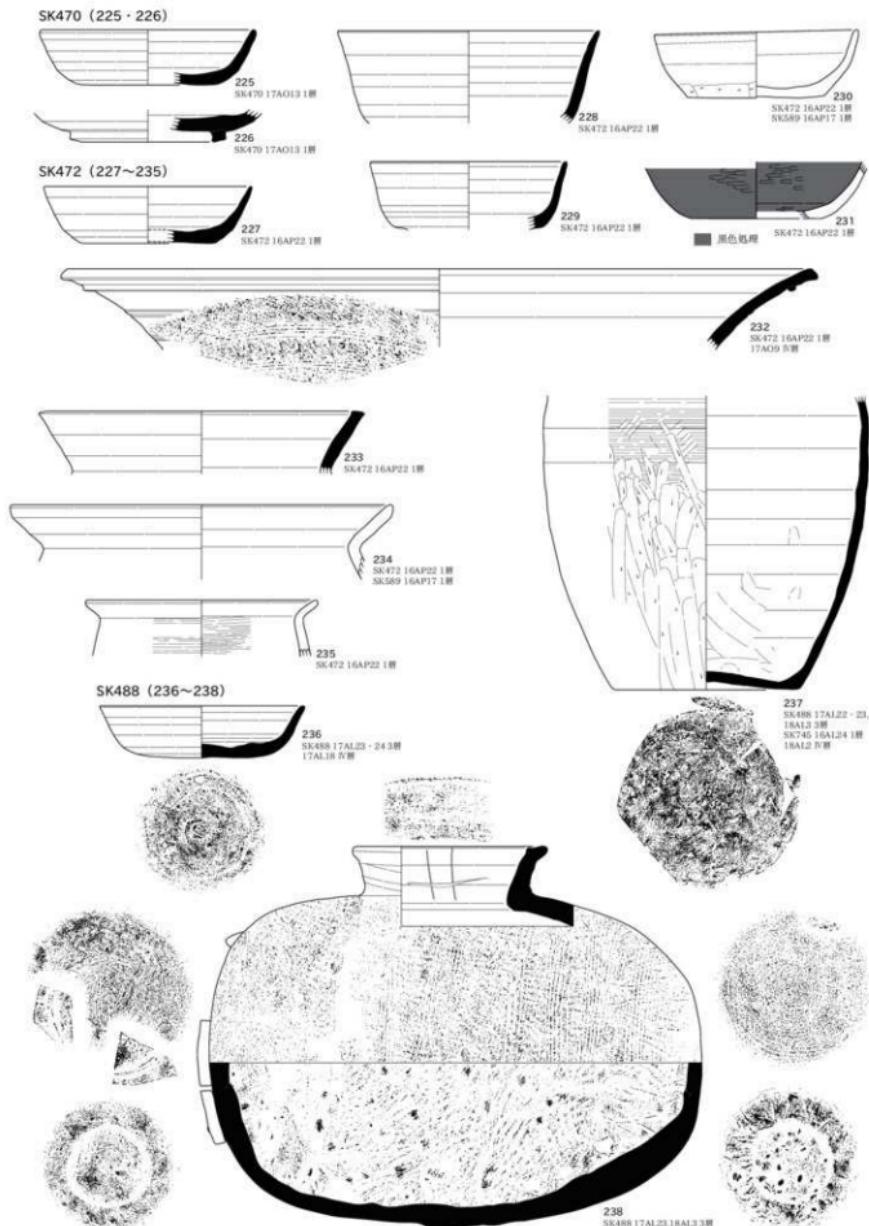
221:
SK460 17AP15 1層
SK451 17AP15 1層
17AQ11 4層
17AP15 カクラン

SK462 (222)



SK466 (223・224)





0 (232 1 : 4) 10cm 0 (その他 1 : 3) 10cm

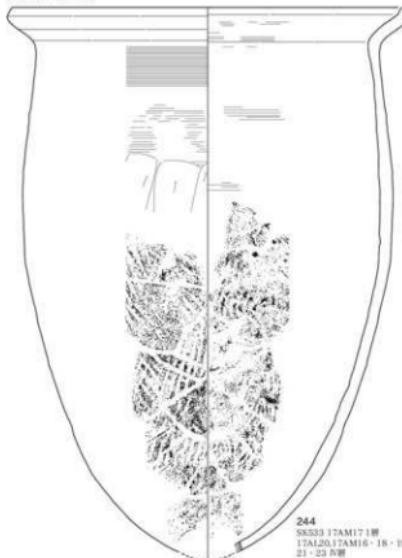
SK488 (239)



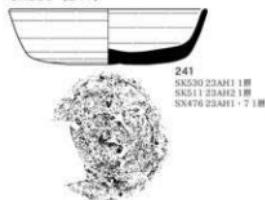
SK499 (240)



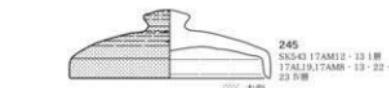
SK533 (244)



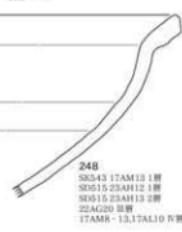
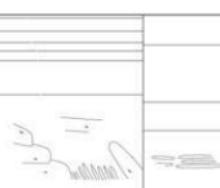
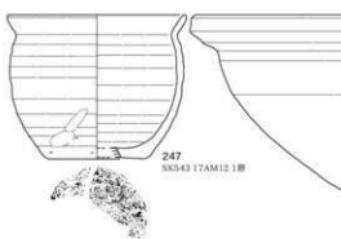
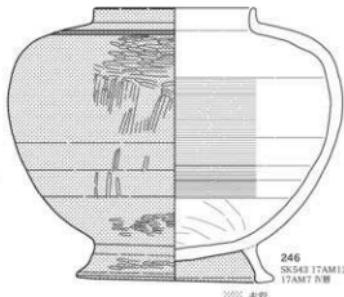
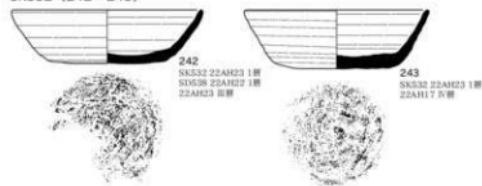
SK530 (241)



SK543 (245~248)

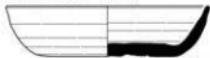
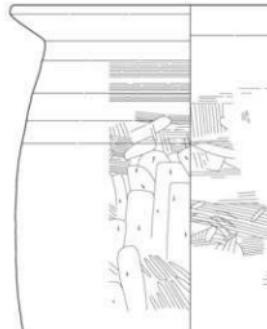
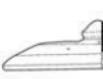
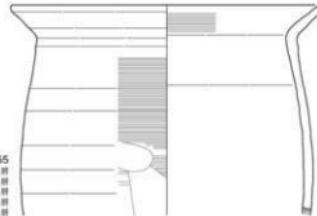


SK532 (242 - 243)

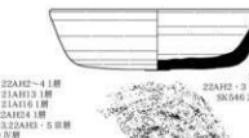


0 (1 : 3) 10cm

SK546 (249~256)

249
SK546 22AH12 1番
P650 22AH8 1番250
SK546 22AH12 1番
SK532 22AH17 1番
23AK22 22AH251
SK546 22AH12 1番252
SK546 22AH12 1番
SK547 22AH13 1番
22AH12 22AH
22AH13 カクラン253
SK546 22AH7・8・12 1番
SK524 22AH19 1番
SK523 22AH19 1番
SK573 22AH19 1番
P551 22AH12 1番255
SK546 22AH12 1番254
SK546 22AH17 1番

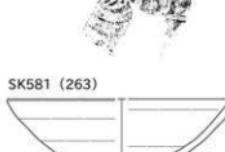
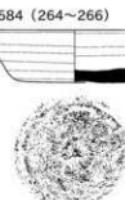
SK547 (257)

257
SK547 22AH13 1番
SK547 22AH17 1番
SK547 22AH17 2番
SD515 22AH13 1番
22AH13 カクラン260
SK553 22AH2~4 1番
SK647 21AH13 1番
SK658 21AH16 1番
P644 22AH24 1番
21AH13 22AH24 8 1番
21AH19 8 1番

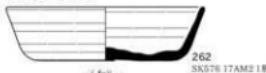
SK553 (258~261)

258
SK553 22AH3 1番

SK581 (263)

263
SK581 22AH25 1番265
SK584 22AH8 1番

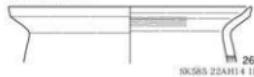
SK576 (262)

262
SK576 17AM2 1番
17AM7 4番

SK584 (264~266)

264
SK584 22AH18 1番
SK515 22AH12 1番
SK537 22AH18 1番266
SK584 22AH19 1番

SK585 (267)



SK585 22AH14 1番

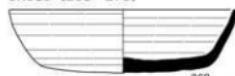


SK589 16AP17 1番

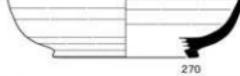


SK589 16AP17 1番

SK589 (268~273)



SK589 16AP17 1番



SK589 16AP17 1番



SK589 16AP17 1番

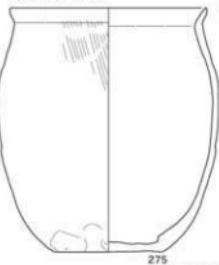
SK472 16AP22 1番

36AP16 1番



SK589 16AP17 1番

SK616 (275)

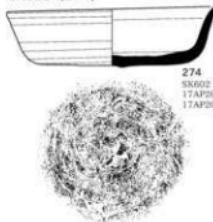


SK616 18AN3 1番

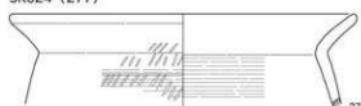
SK617 (276)

SK617 17AN24 1番
SK616 18AN3 1番

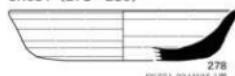
SK602 (274)

SK602
17AP20 1番
17AP20 2番

SK624 (277)

SK624 22AH1 1番
SD492 21AH10 1番

SK631 (278~280)



SK631 22AH25 1番

SK631 22AH25, 23AH1 1番
22AH25 田畠SK631 23AH4~5 1番
SK476 23AH1 1番

SK647 (281~282)



SK647 21AH13 2番

282

SK647 21AH13~18

SK647 21AH13 2番

SK560 21AH14 1番

SK624 22AH9 1番

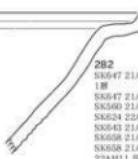
SK643 21AH18 1番

SK643 21AH18 2番

SK558 21AH16 2番

22AH11 田畠

22AH11 カクラン

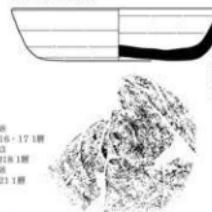
SK654 22AH9 1番
22AH9~14 カクラン

0 (1:3) 10cm

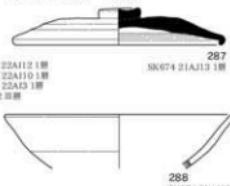
SK658 (285)



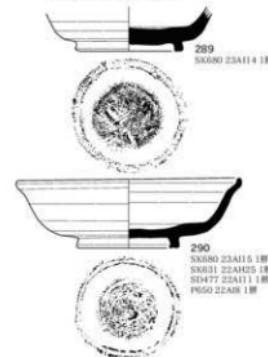
SK668 (286)



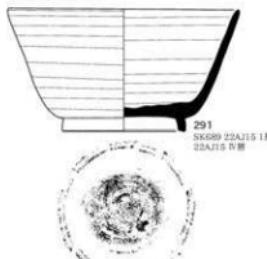
SK674 (287 - 288)



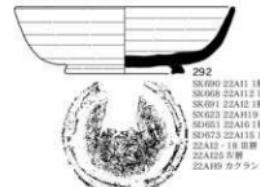
SK680 (289 - 290)



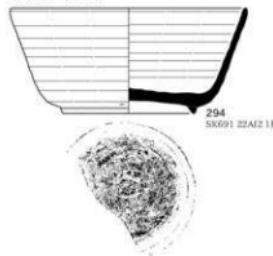
SK689 (291)



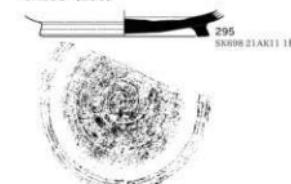
SK690 (292 - 293)



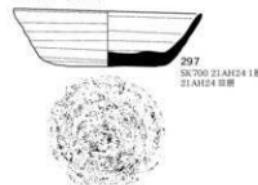
SK691 (294)



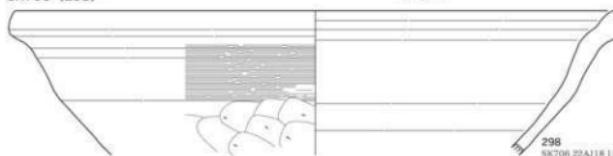
SK698 (295)



SK700 (297)



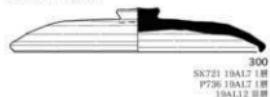
SK706 (298)



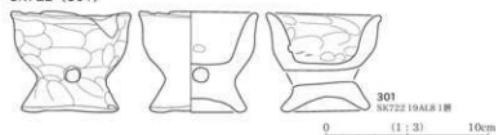
SK708 (299)



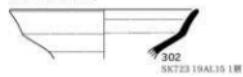
SK721 (300)



SK722 (301)



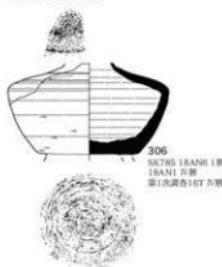
SK723 (302)



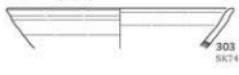
SK746 (304)



SK785 (306)



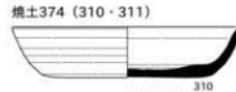
SK741 (303)



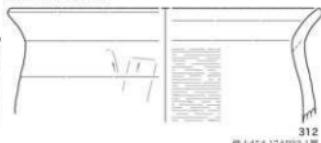
SK781 (305)



SK802 (307~309)



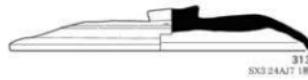
燒土454 (312)



■ 黒色處理

SK802 17AL10 1層

SX3 (313~317)



315

SX3 24AJ8 1層

SX3 24AJ12 2層

SD55 24AJ7 1層

24AJ1 3層

316

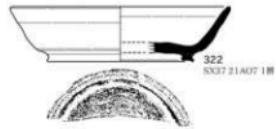
SX3 24AJ11 1層



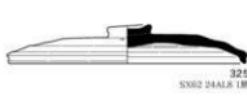
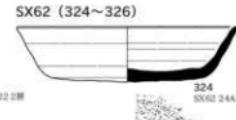
SX37 (321・322)



SX31 (318~320)



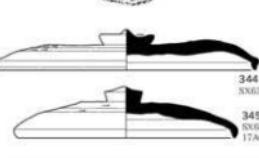
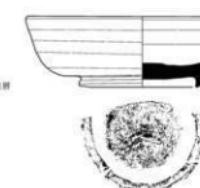
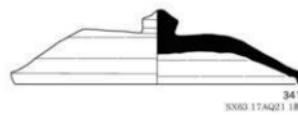
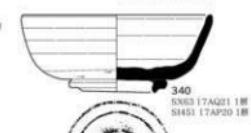
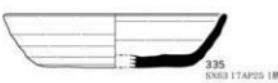
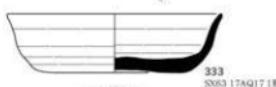
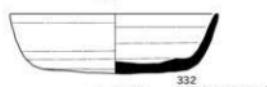
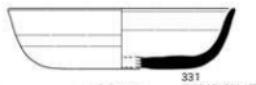
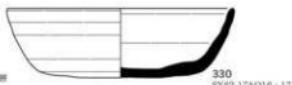
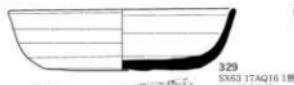
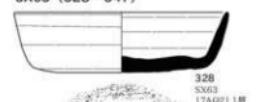
SX38 (323)



SX62 (327)

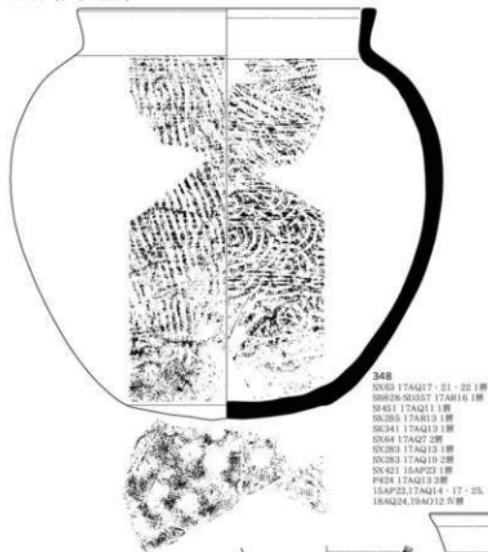


SX63 (328~347)

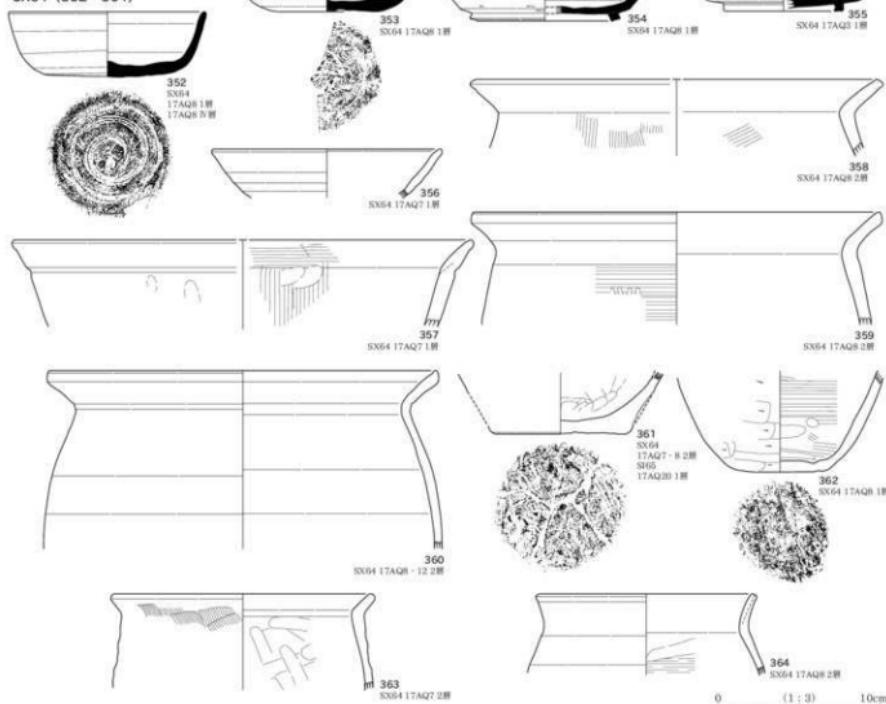


0 (1 : 3) 10cm

SX63 (348~351)

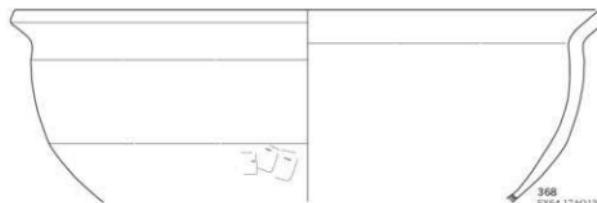
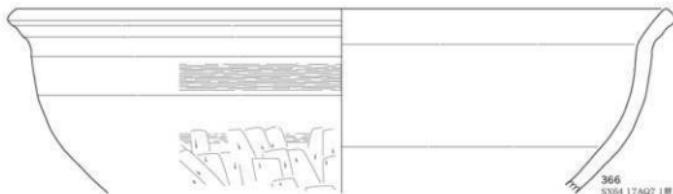
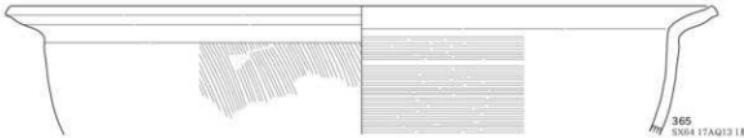


SX64 (352~364)

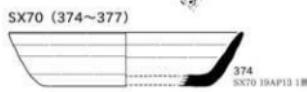
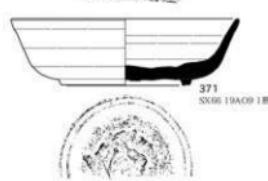
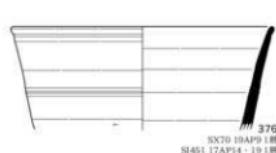
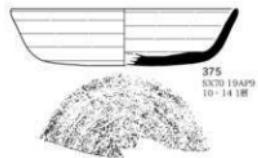
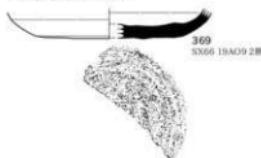


0 (1 : 3) 10cm

SX64 (365~368)

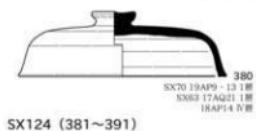
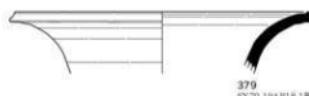
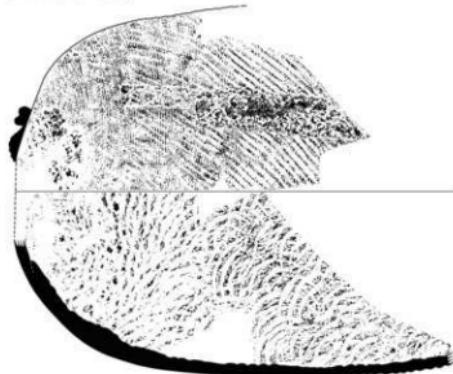


SX66 (369~373)

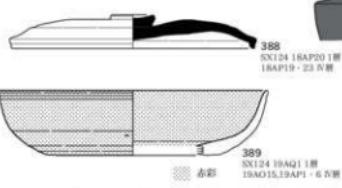
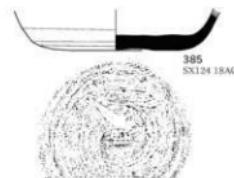
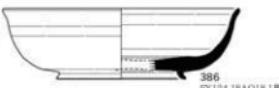
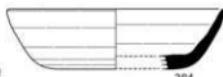
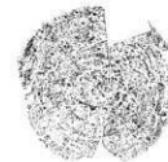


0 (1 : 3) 10cm

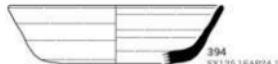
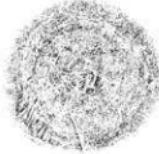
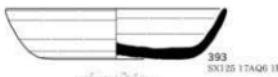
SX70 (378~380)



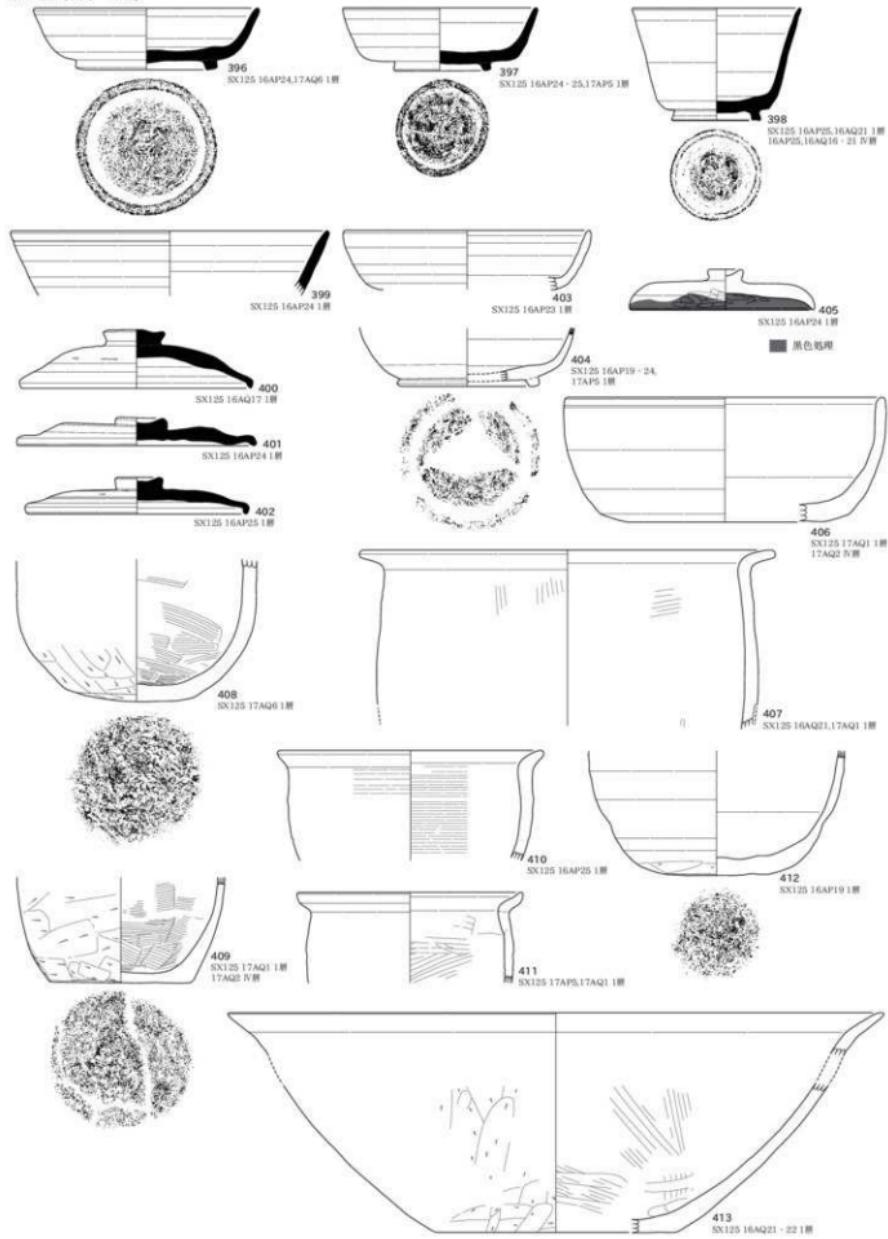
SX124 (381~391)



SX125 (392~395)

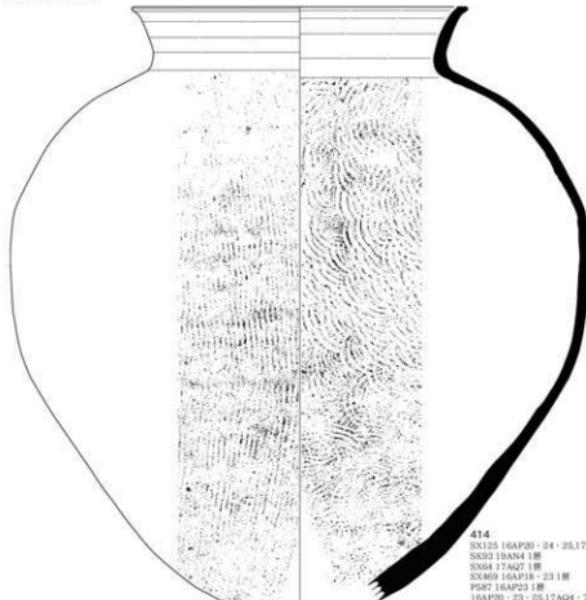


SX125 (396~413)



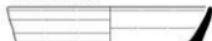
0 (1 : 3) 10cm

SX125 (414)



414
SX125 16AP20・24・25,17AP5 1番
SK03 1BAN4 1番
16AP20・24・25,17AQ4 1番
SX469 16AP18・23 1番
PS67 16AP23 1番
16AP20・24・25,17AQ4・7～9 N番

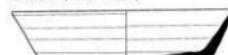
SX240 (415)



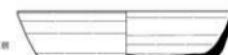
415
SX240 23AM11 2番



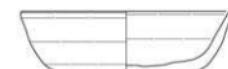
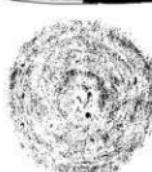
SX283 (416～427)



416
SX283 17AQ12 2番



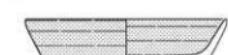
417
SX283 17AQ12 3～2番
17AQ12 N番



418
SX283 17AQ12 2番



419
SX283 17AQ14 1番



420
SX283 17AQ17 2番



421
SX283 17AQ13 1番



422
SX283 17AQ17 1番



423
SX283 17AQ13・14 1番



424
SX283 17AQ18 2番



425
SX283 17AQ14 1番
赤彩

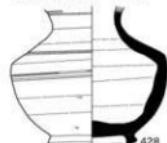


426
SX283 17AQ14 1番

427
SX283 17AQ14 1番

0 (414 1:4) 10cm
0 (その他 1:3) 10cm

SX283 (428~430)



SX283 17AQ8 1号

428



SX283 17AQ14 1号

429



SX283 17AQ14 1号

430

SX365 (431)

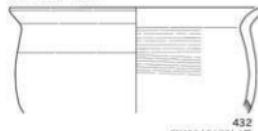


SX365 23AG14・20 1号

■ 黒色處理

431

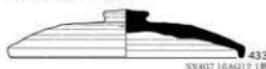
SX406 (432)



SX406 16AQ21 1号

432

SX407 (433~436)



SX407 16AQ12 1号

433



SX407 16AQ18 1号

434



SX407 16AQ18 1号

435

SX411 (437・438)



SX411 15AN11 1号

437



赤彩

438

SX411 15AN11 1号

SX415 (439~444)



SX415 15AP21 1号

439



SX415 15AP21 1号

441



SX415 15AP21 1号

440



SX415 15AP21 1号

442

SX421 (447~449)



SX421 15AP23 1号

447



SX421 15AP24 1号

448

SX421 15AQ26 1号



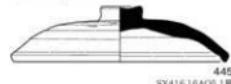
SX421 15AP22 1号

449

SX421 17AQ13 1号

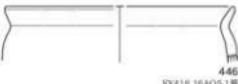
SD420 16AP13 1号

SX416 (445・446)



SX416 16AO5 1号

445



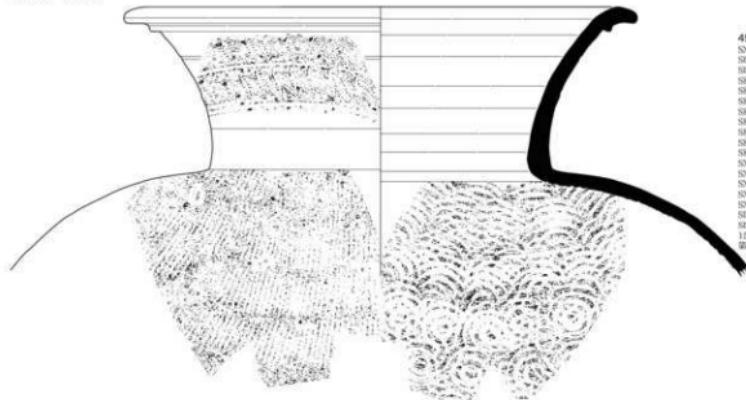
SX416 16AO5 1号

446

0 (445 1:4) 10cm

0 (その他 1:3) 10cm

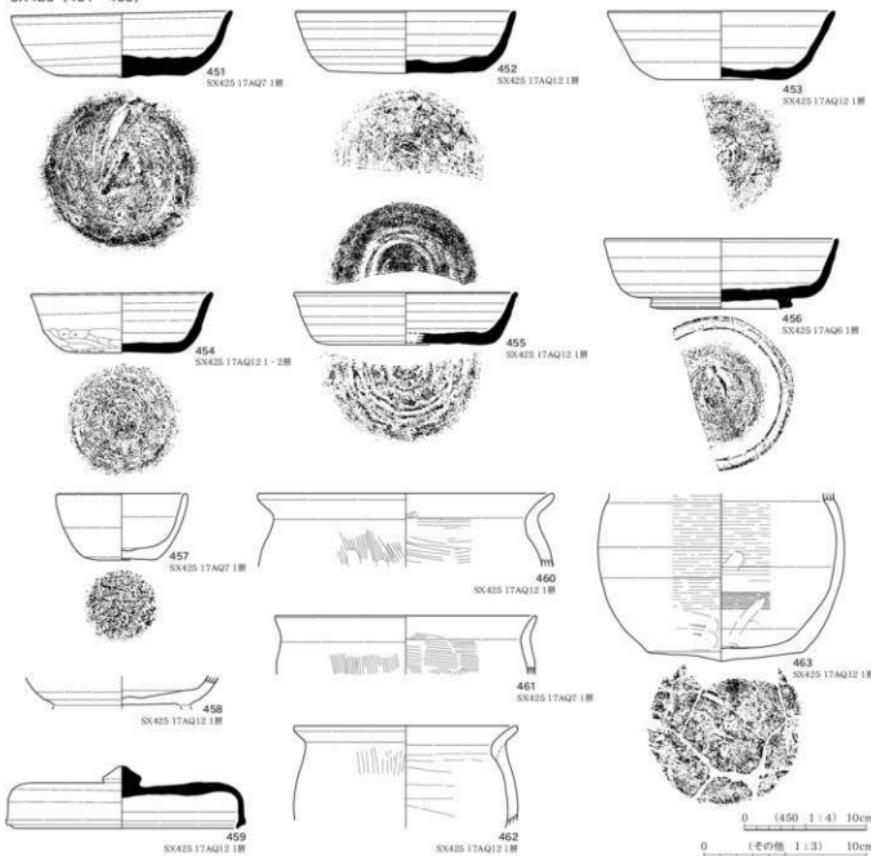
SX421 (450)



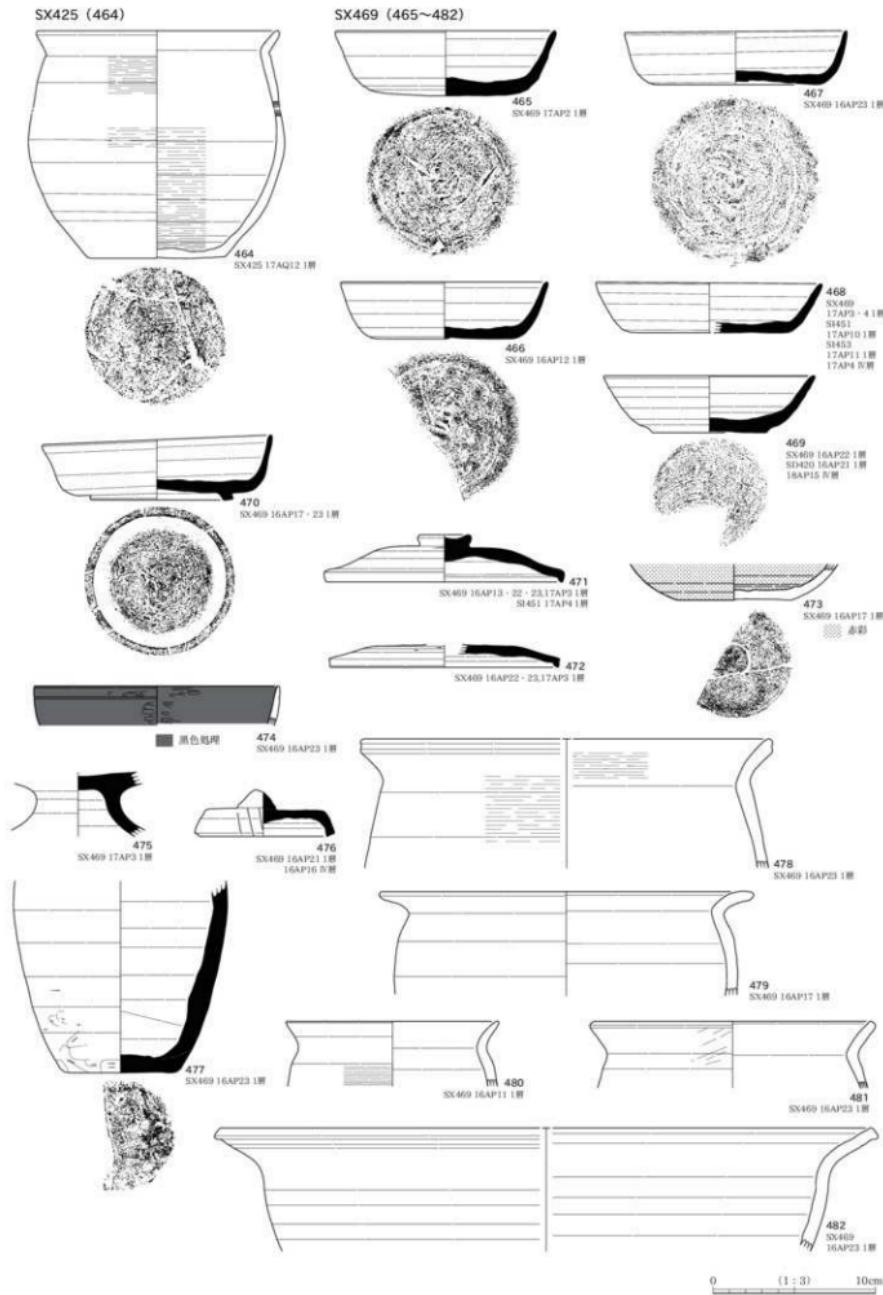
450

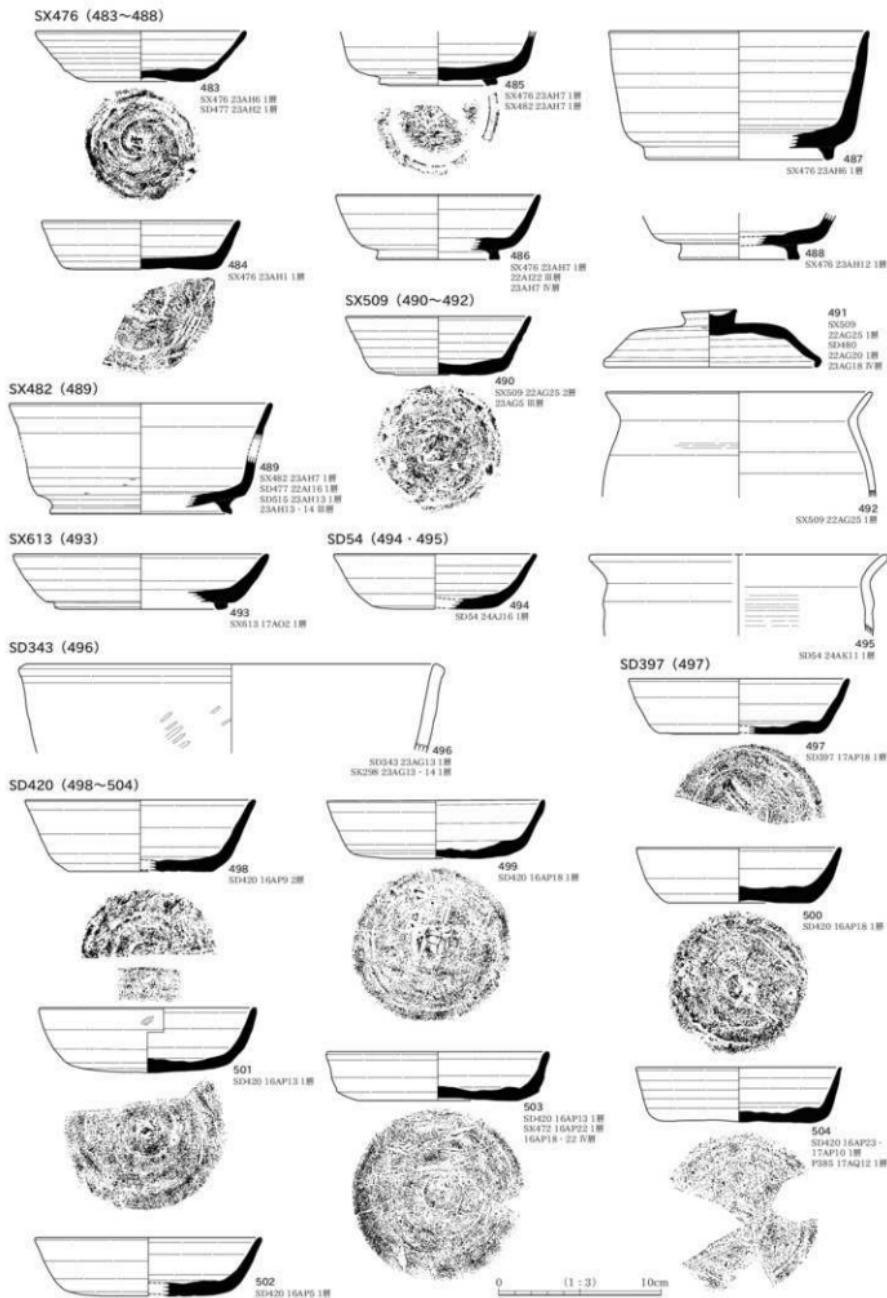
SX421 15AP17 - 22・23.1層
 SG5 17AQ25/17AQ16 1層
 SJ45 17AP4 1層
 SK279 18AQ4 2層
 SK325 17AQ11 12層
 SK341 17AQ14 1層
 SK444 17AQ15 1層
 SK478 17AQ16 1層
 SK728 17AQ11, 18AM5, 18AN1 1層
 SK784 18AN1 1層
 SK795 15AP16 1層
 SK93 17AQ12 1層
 SX64 17AQ8 1層
 SX64 17AQ11 3層
 SX915 15AP22 1層
 SX915 15AP23 1層
 SD420 16AP4 1層
 SD420 16AP4 2層
 SD420 16AP4 2層
 15AQ25, 15AP11 - 22, 18AN1 N層
 第1次調査107

SX425 (451~463)

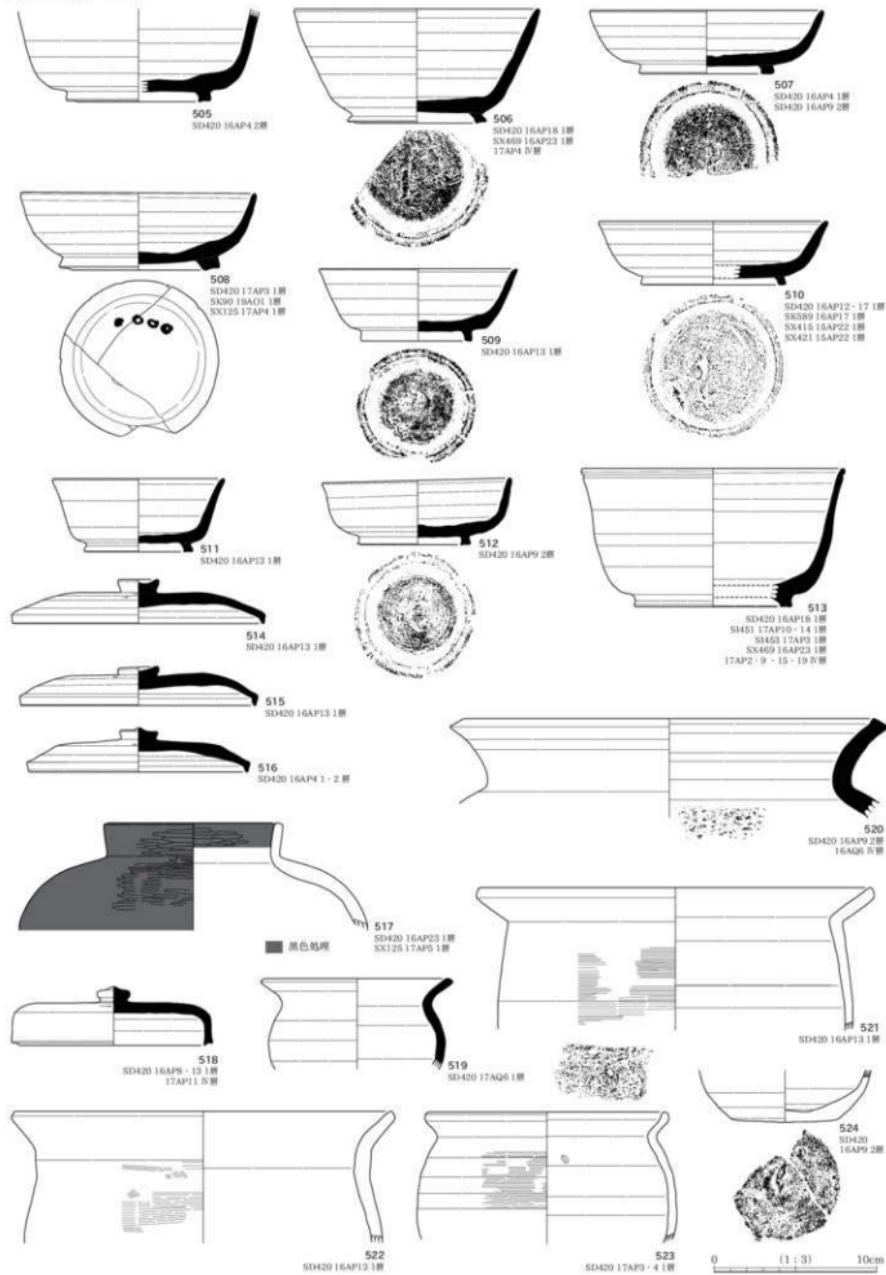


0 (450 1:4) 10cm
 0 (その他の 1:3) 10cm

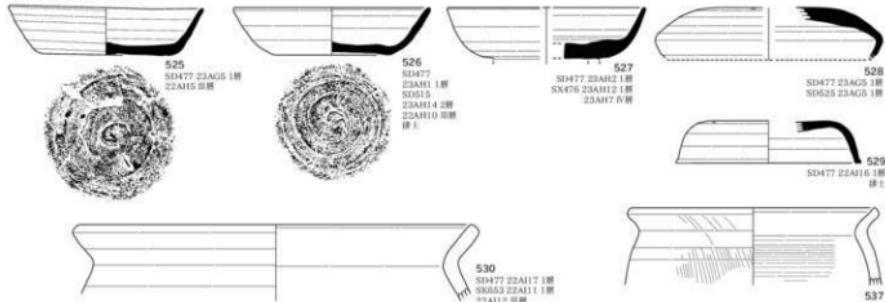




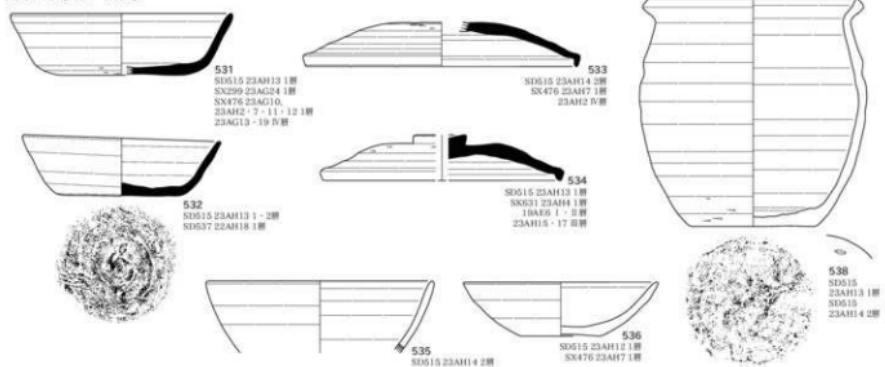
SD420 (505~524)



SD477 (525~530)



SD515 (531~538)



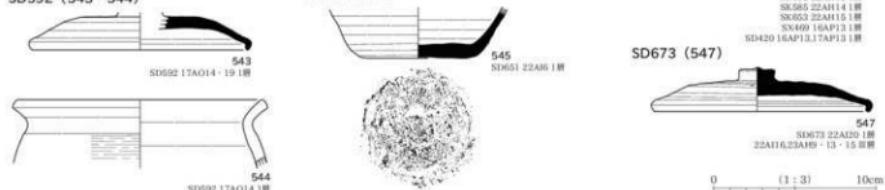
SD525 (539)



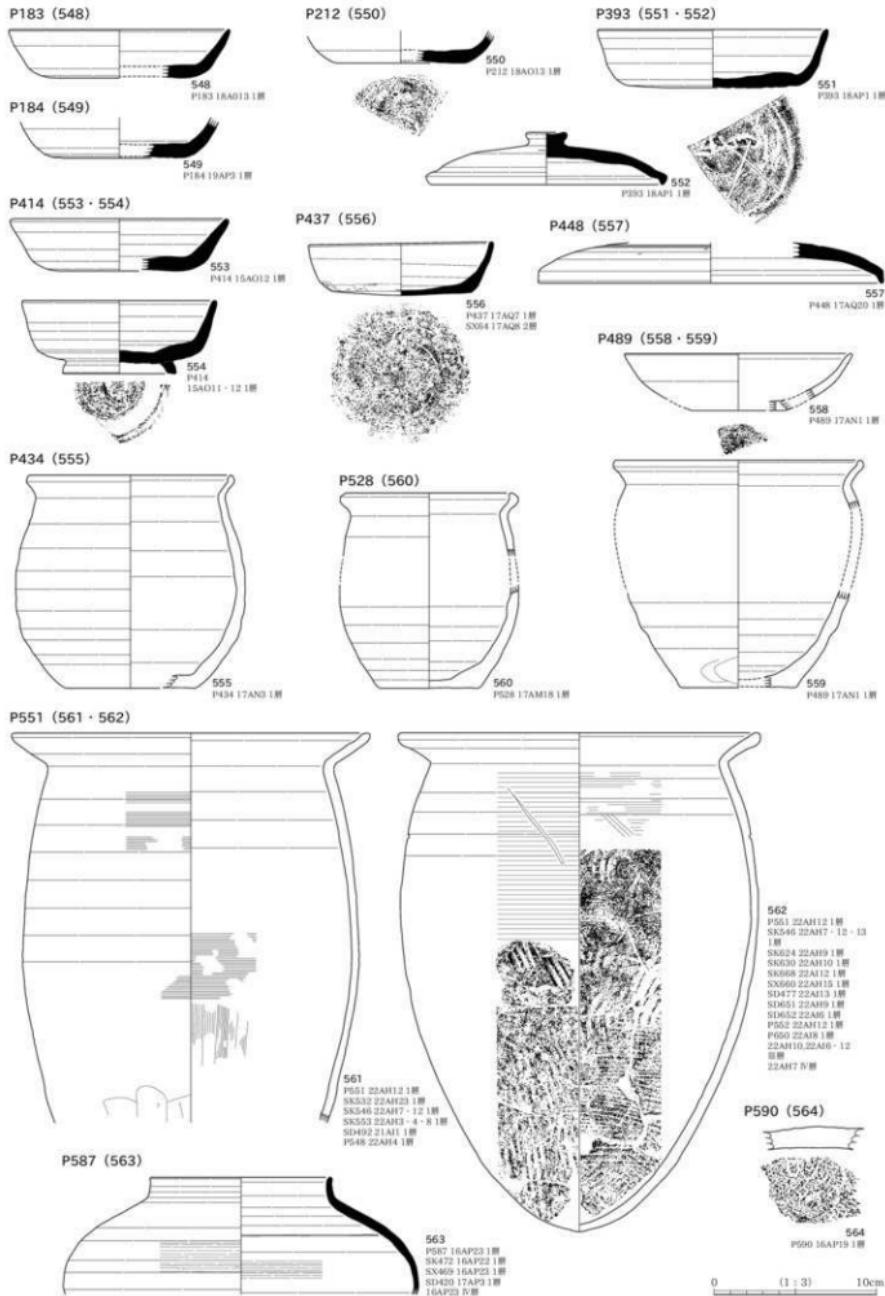
SD531 (540)



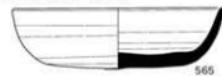
SD592 (543・544)



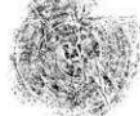
0 (1 : 3) 10cm



P610 (565 · 566)



565
P610 14AM14 1層
14AM15 田耕
14AM14 カラシ



566
P610 14AM14 1層



P716 (568)



568
P716 20AK25 1層

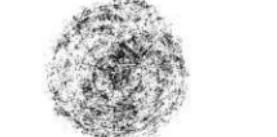
P718 (569)



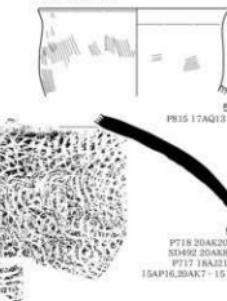
包含層 (571~583)



571
17AQ16 N層



P815 (570)

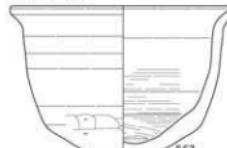


570
P815 17AQ15 1層

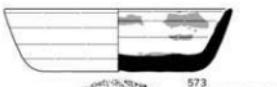
569
P718 20AK25 1層
SD492 20AK8 1層
P717 18AJ21 1層
15AP16.2DAK7 - 15 N層



P628 (567)



567
P628 17AL21 1層

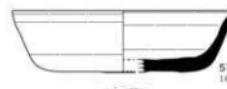
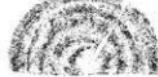


573
第1次調査10T N-V層

■ 泥



574
18AN23 - 24 N層



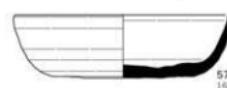
575
16AP15 N層



576
17AP20 N層



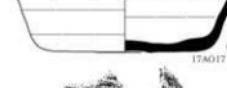
577
21AO9 - 13 N層



578
16AQ18 N層



579
18AQ16 N層



580
17AO17 N層



581
18AP4 - 9 N層



582
18AQ20 - 25 N層



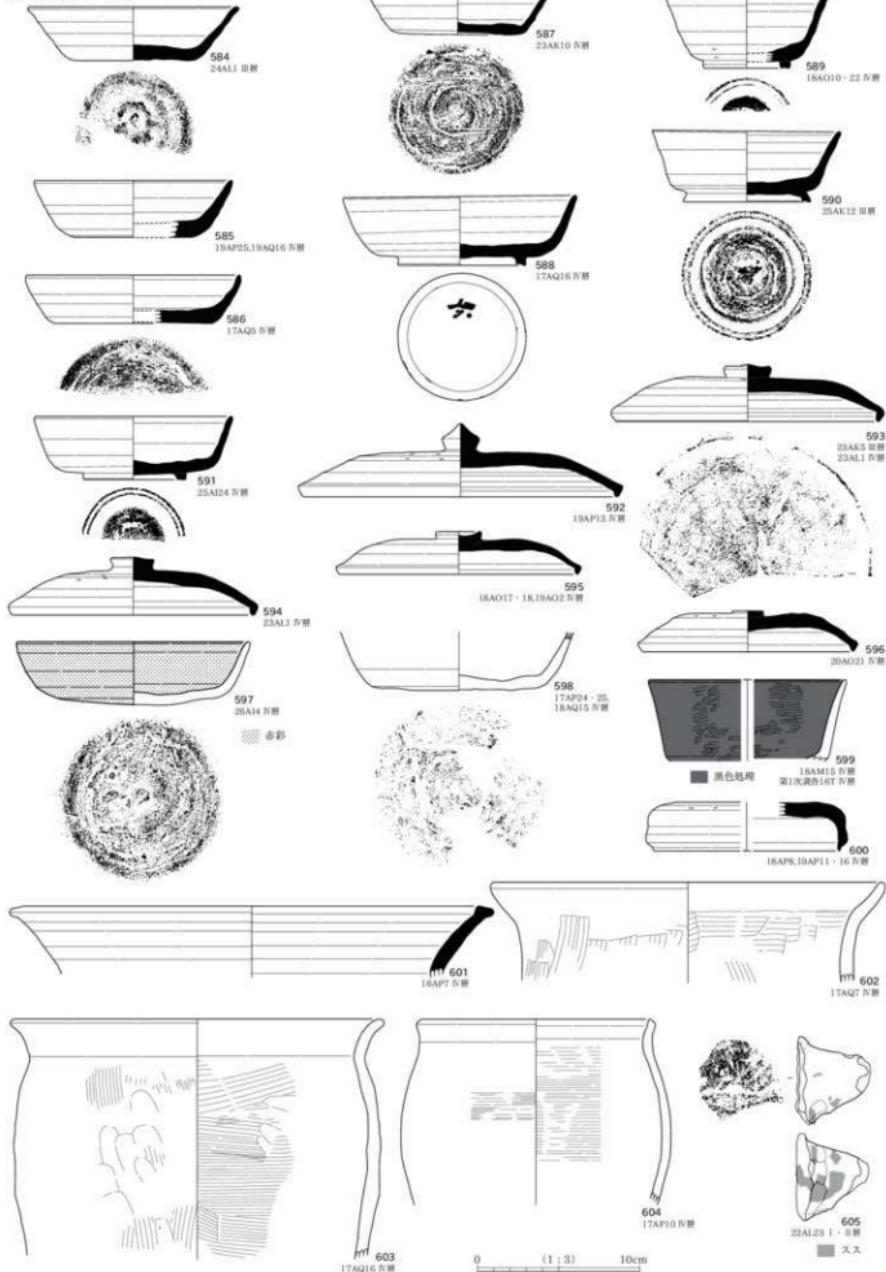
583
18AP21 N層



0 (569 1:4) 10cm

0 (その他 1:3) 10cm

包含层 (584~605)



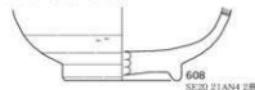
SD47 (606)



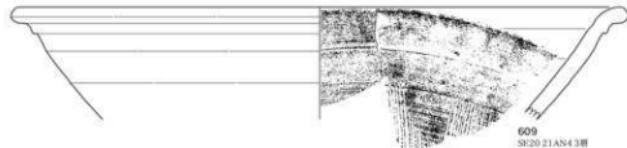
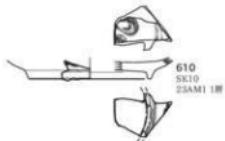
SD226 (607)



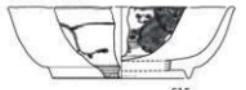
SE20 (608・609)



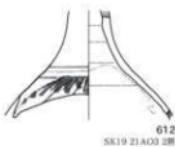
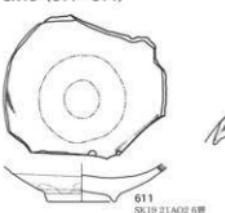
SK10 (610)



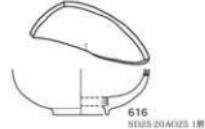
SD21 (615)



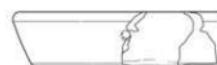
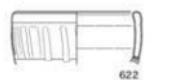
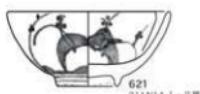
SK19 (611~614)



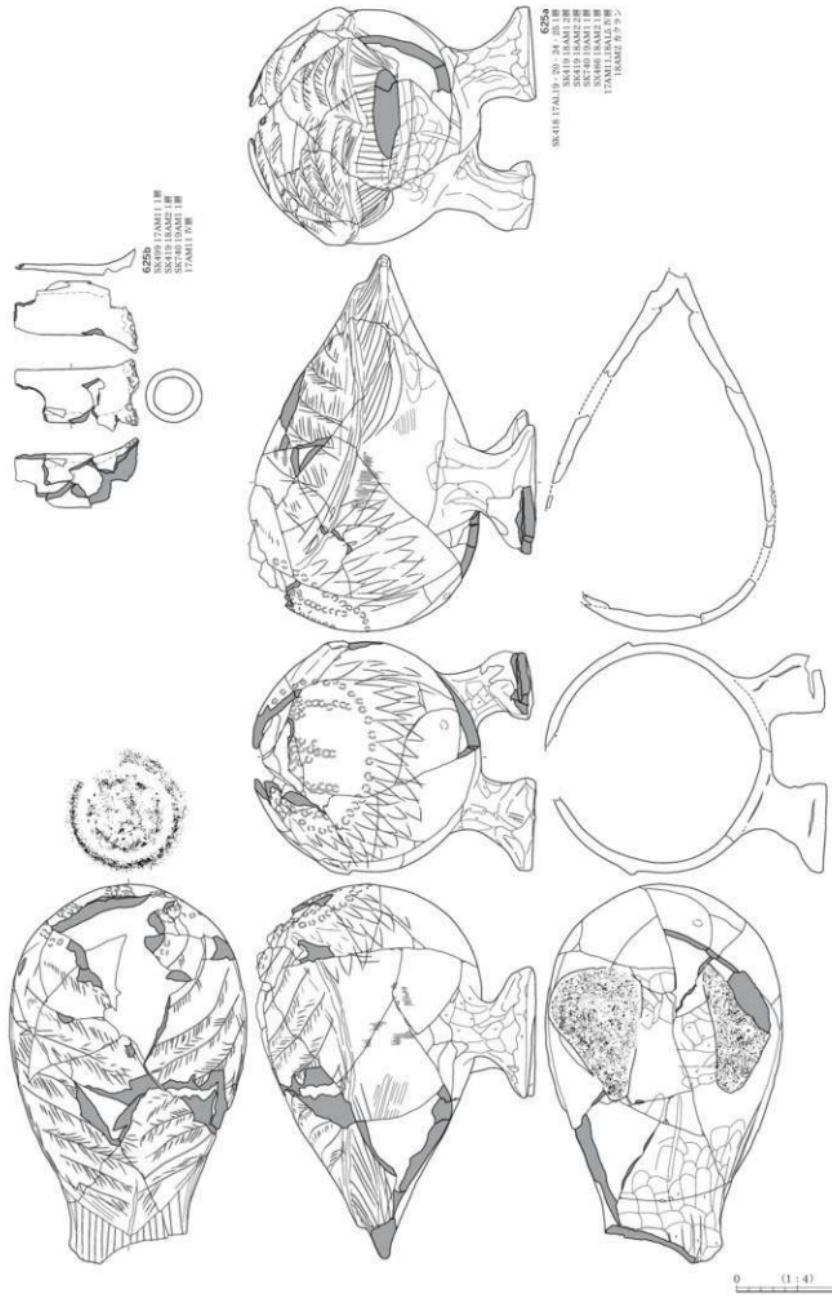
SD25 (616~619)

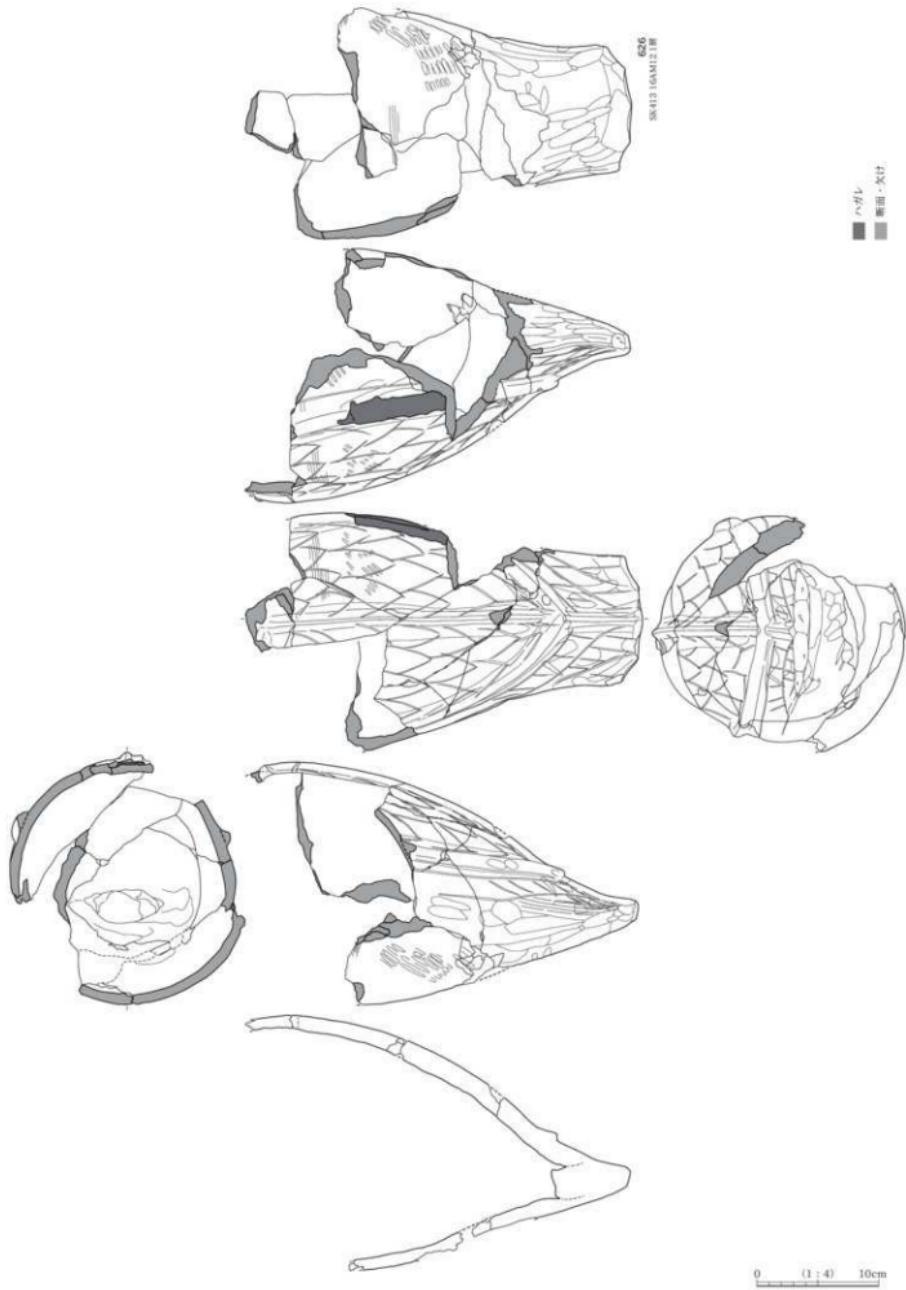


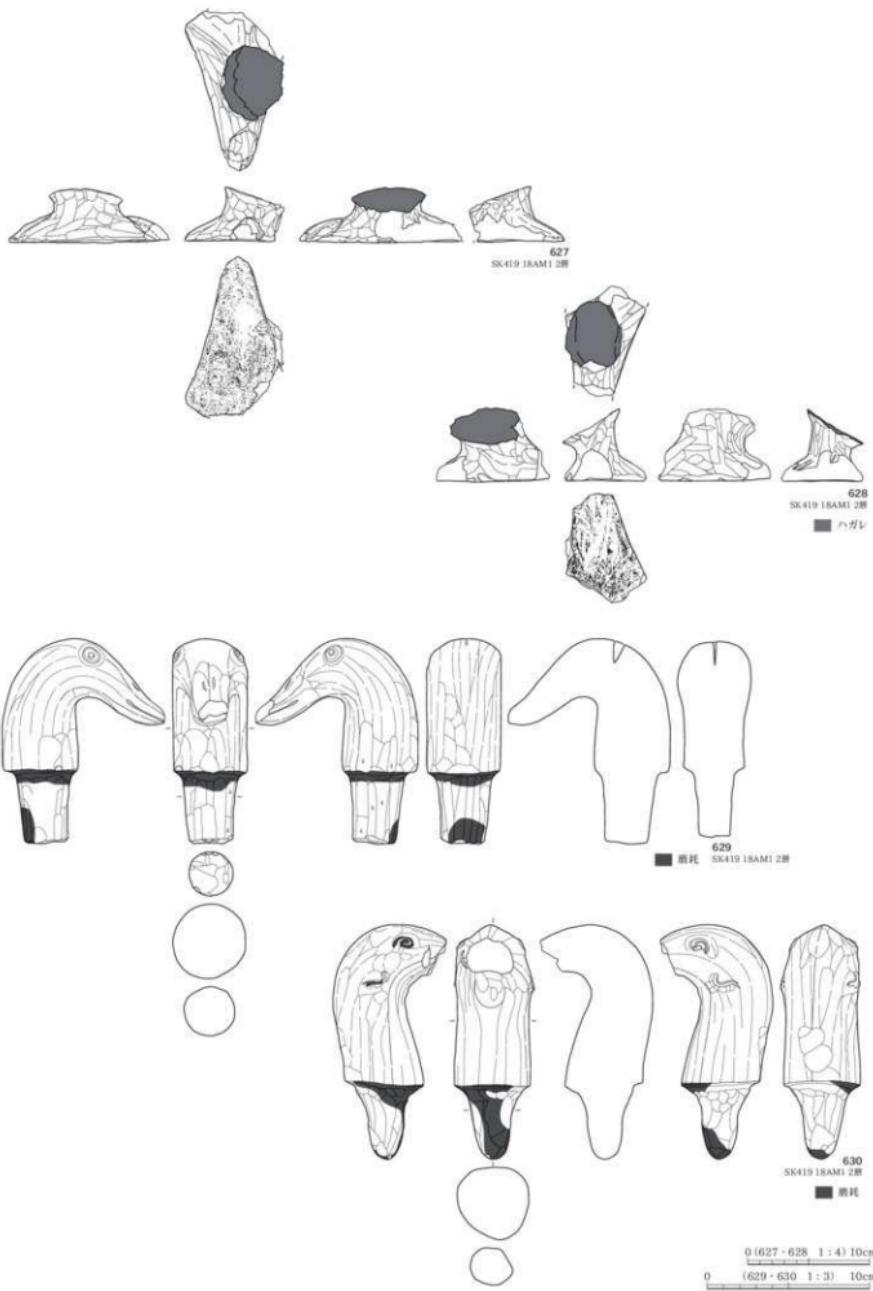
包含層 (620~624)

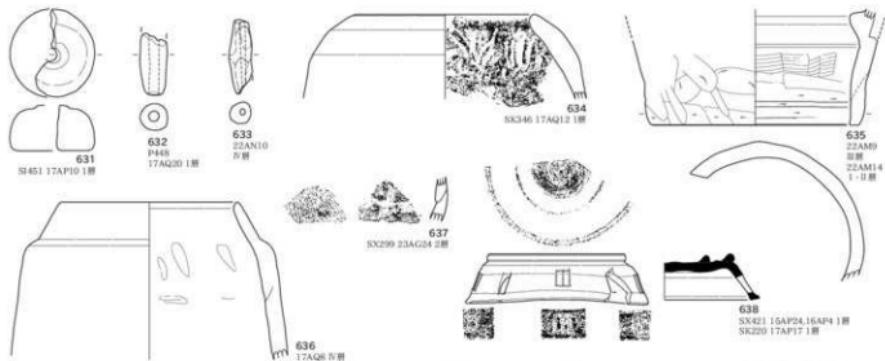


0 (1 : 3) 10cm

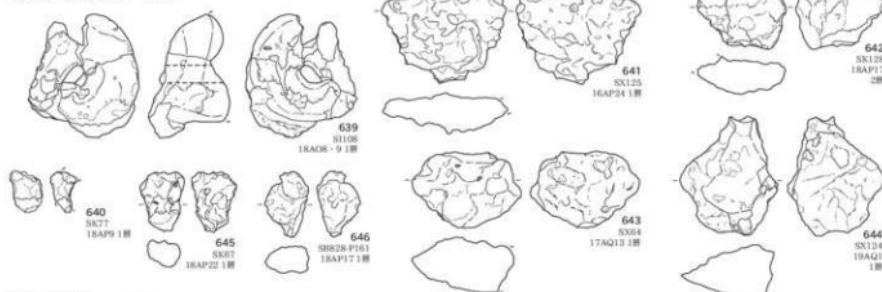




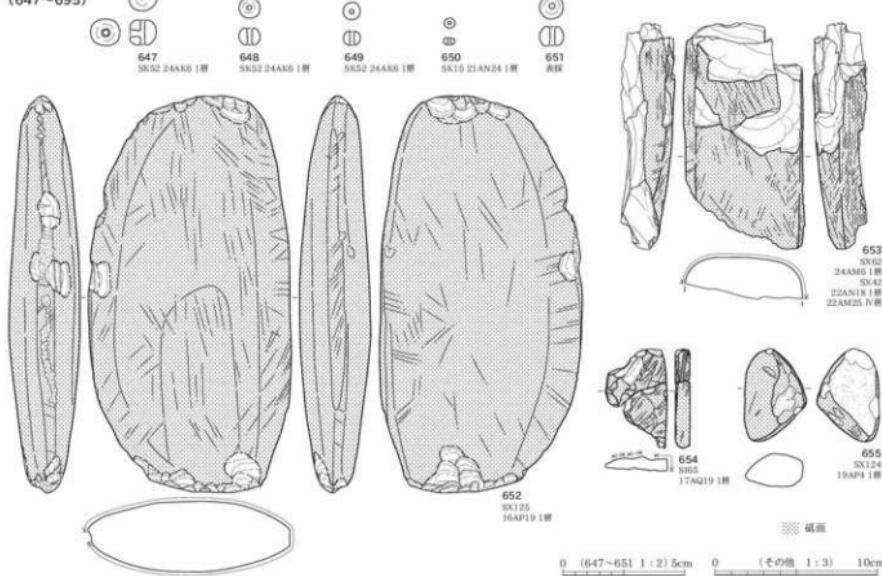


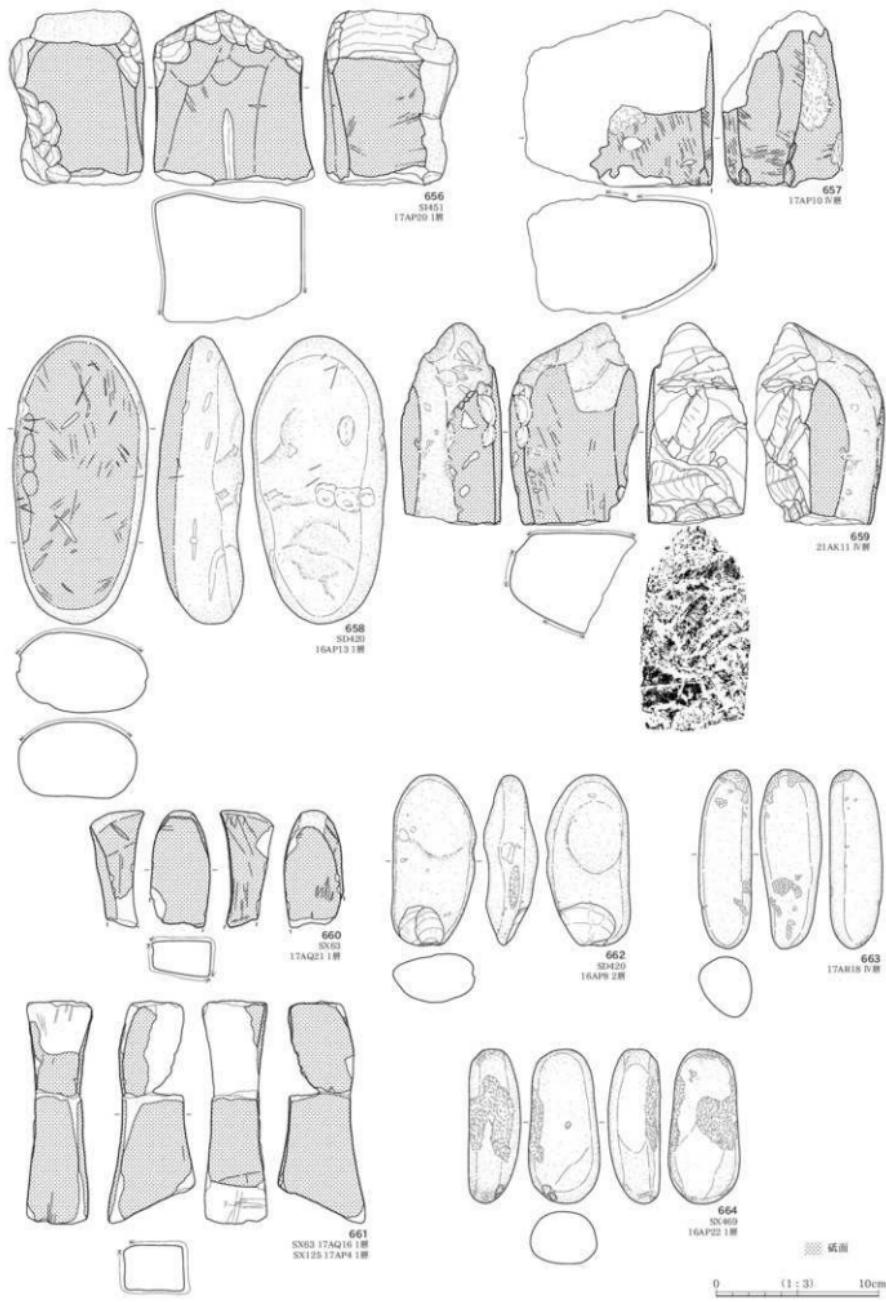


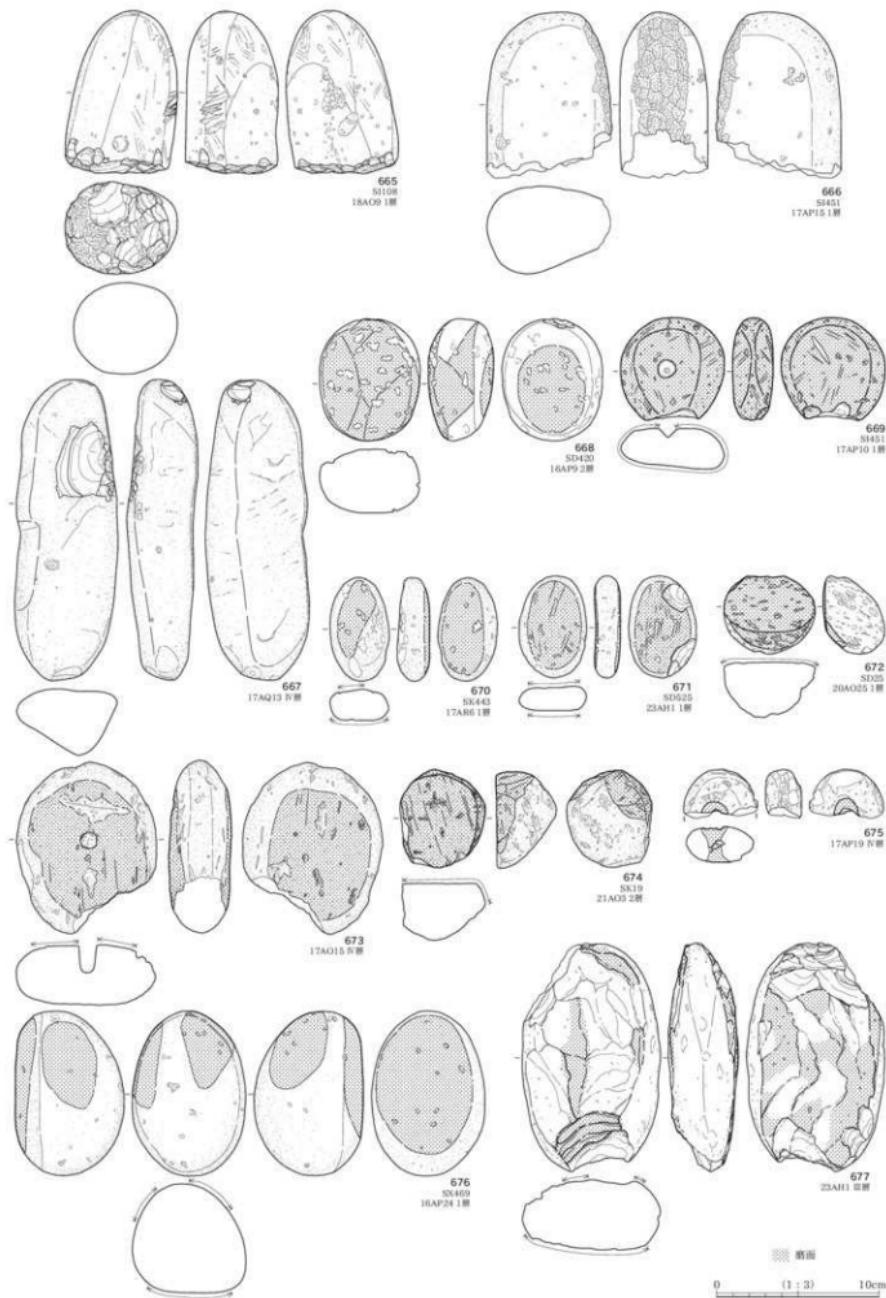
鍛冶関連遺物 (639~646)

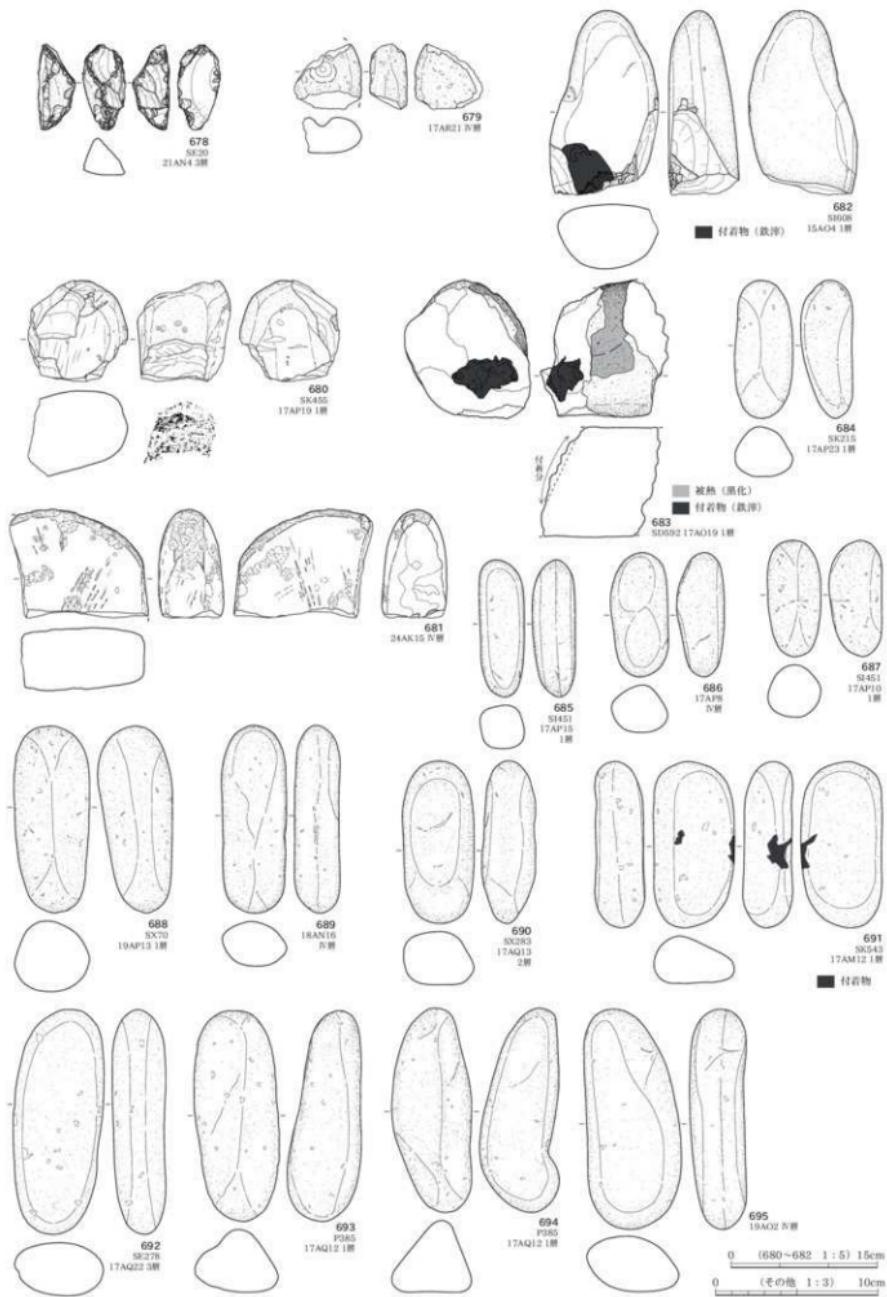


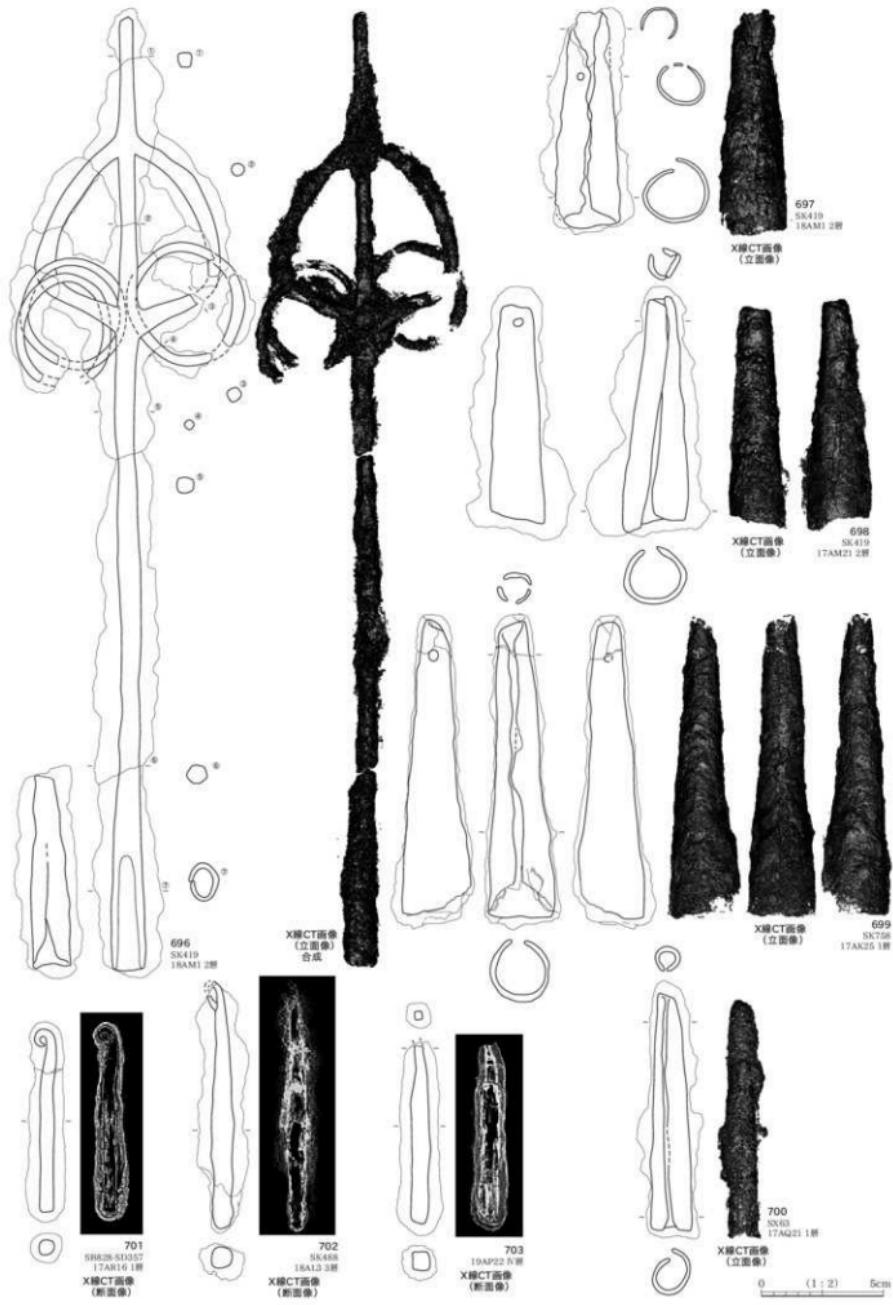
石器・石製品 (647~695)

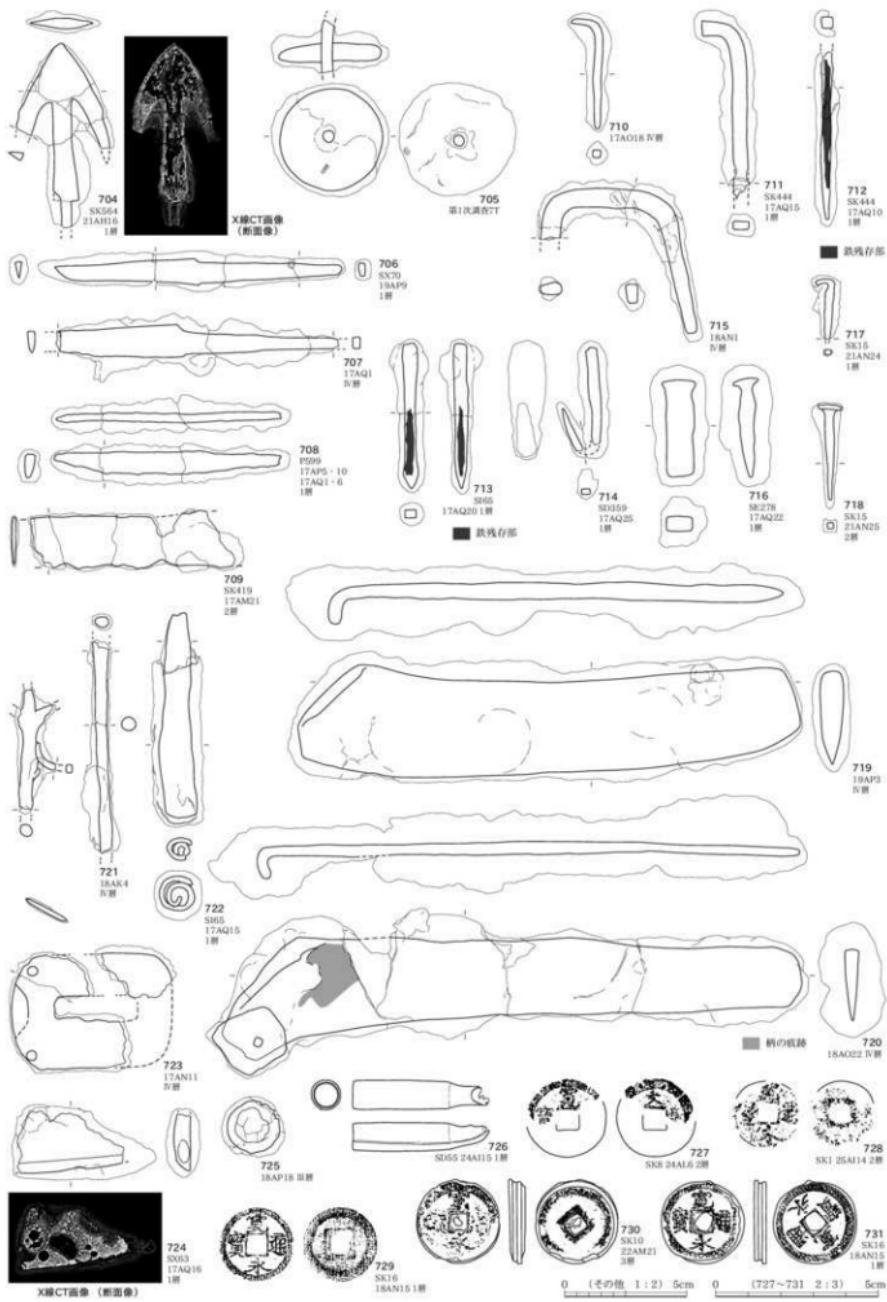


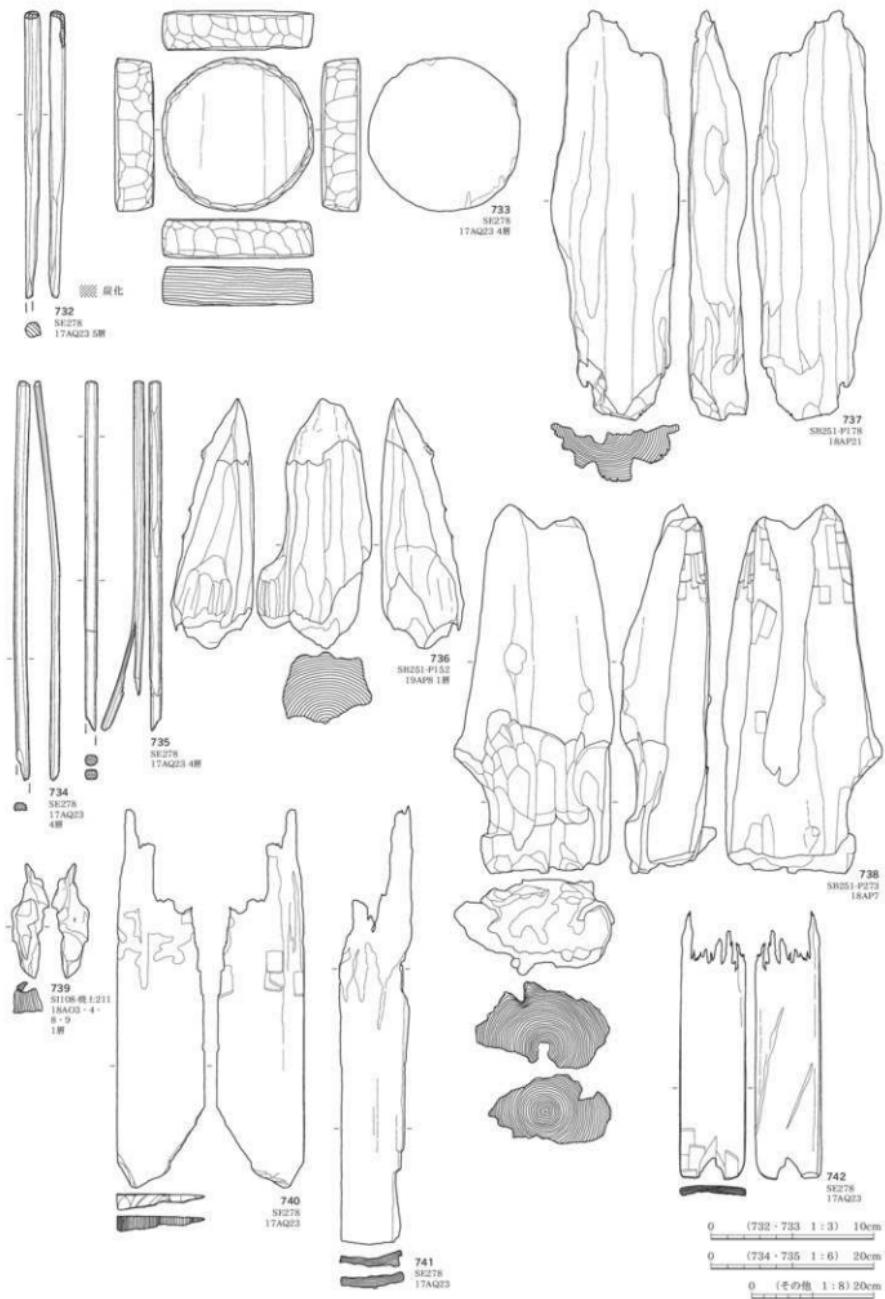


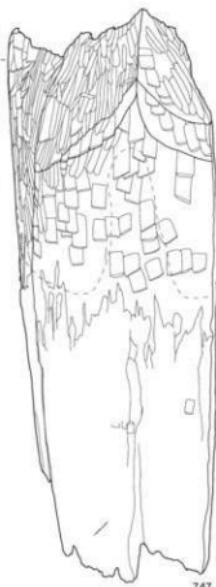
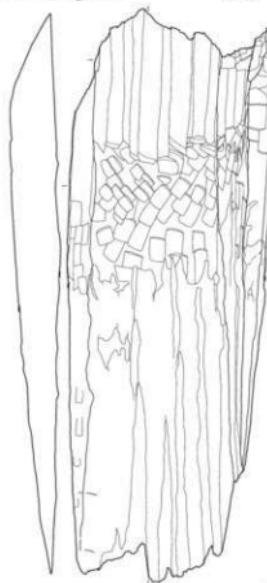
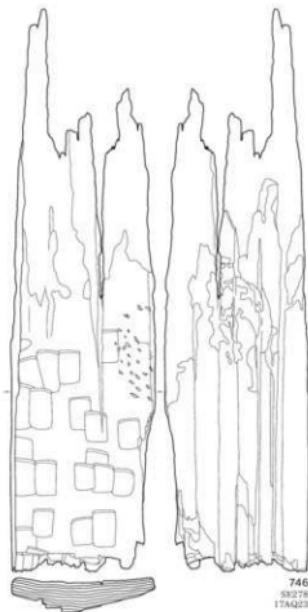
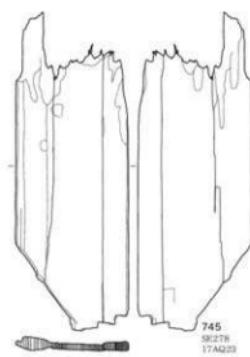
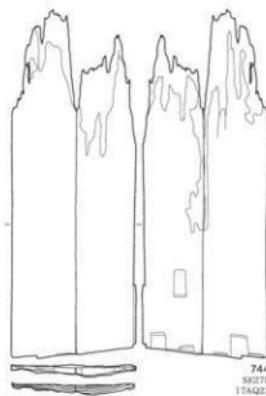
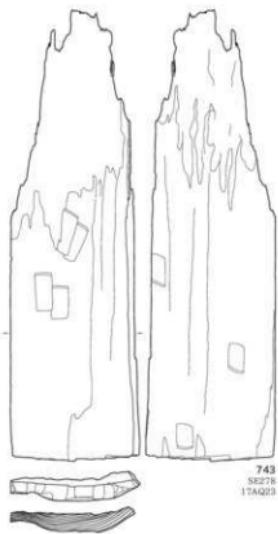












0 (747 1 : 12) 40cm
0 (その他 1 : 8) 20cm





曾我墓所遺跡周辺空中写真 1

〔米軍撮影 1948〕



曾我墓所遺跡周辺空中写真 2（北から）



曾我墓所遺跡周辺空中写真 3（北西から）



曾我墓所遺跡 完掘（上が北西）



路線部分 完掘（上が北東）



豊穴建物・掘立柱建物集中区 完掘（上が北西）



溝状造構集中区 完掘（上が西）



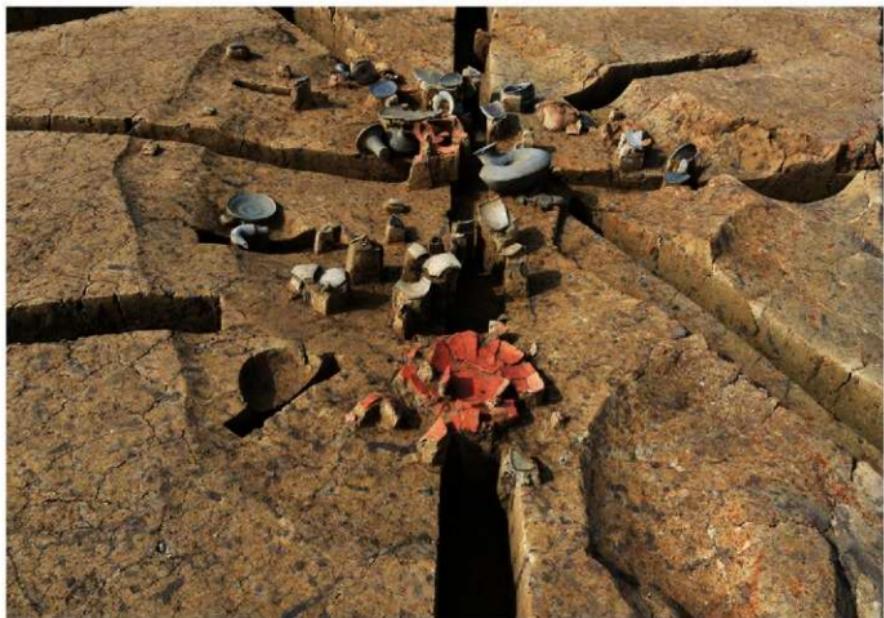
SK413・418・419・488 完掘（上が北西）



SK418・419 遺物出土（上が北東）



SK419 遺物出土 (北から)



SK419 遺物出土 (南から)



調査前風景（南西から）



調査前風景（北東から）



調査前風景（北から）



調査前風景 路線区（西から）



基本層序①（北西から）



基本層序②（北西から）



基本層序③（北東から）



基本層序④（北東から）



基本順序⑤（南西から）



基本順序⑥（南東から）



基本順序⑦（北西から）



基本順序⑧（南西から）



SI65 A-A' 土層断面（西から）



SI65 B-B'・P448 土層断面（南から）



SI65-焼土 817 A-A' 土層断面（西から）



SI65-焼土 817 B-B' 土層断面（北西から）



SI165 完掘（南から）



SI103 A-A'・B-B' 土層断面（東から）



SI103- 焼土 114 土層断面（北東から）



SI103 完掘（南から）



SI108 A-A' 土層断面（南東から）



SI108 B-B' 土層断面（南から）



SI108- 焼土 211 土層断面（南から）



SI108-P123 土層断面（東から）



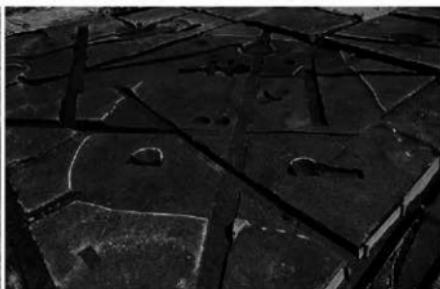
SI108-P200 土層断面（南から）



SI108-P203 土層断面（西から）



SI108-P204 土層断面（東から）



SI108 完掘（南から）



SI181 A-A' 土層断面（南西から）



SI181 C-C' 土層断面（北西から）



SI181-焼土 830 A-A' 土層断面（南西から）



SI181-焼土 830 B-B' 土層断面（南東から）



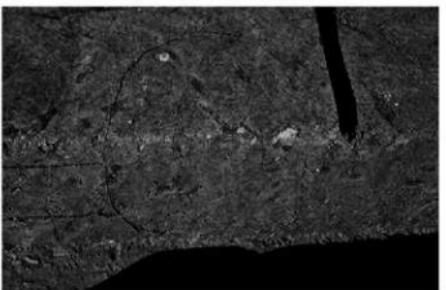
SI181-P81 土層断面（西から）



SI181-P188 土層断面（北西から）



SI181-P189 土層断面（北西から）



SI181-P198 土層断面（南東から）



SI181 完掘（南西から）



SI207 A-A'・SK242 土層断面（南から）



SI207 B-B'・SK215 土層断面（北西から）



SI207- 焼土 823 A-A' 土層断面（北東から）



SI207- 焼土 823 B-B'・C-C' 土層断面 (南から)



SI207- 焼土 823 C-C'・SB252-SD468 土層断面 (南から)



SI207 完掘 (南から)



SI243 B-B' 土層断面 (北東から)



SI243 完掘 (北西から)



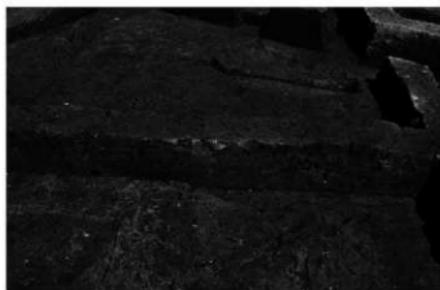
SI451 A-A' ① 土層断面 (北西から)



SI451 A-A' ② 土層断面 (北西から)



SI451 A-A' ③・SK455 土層断面 (北西から)



SI451 B-B' ① 土層断面（南から）



SI451 B-B' ②・SK460 土層断面（南から）



SI451 C-C' ① 土層断面（南西から）



SI451 C-C' ② 土層断面（南西から）



SI451 C-C' ③ 土層断面（南西から）



SI451 遺物出土（東から）



SI451- 焼土 820 A-A' 土層断面（南から）

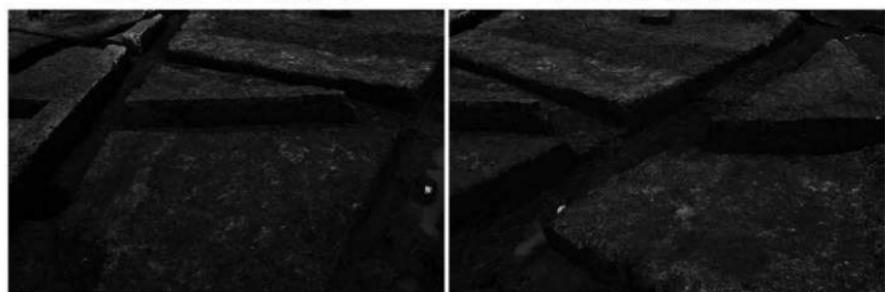


SI451- 焼土 820 B-B' 土層断面（東から）



SI451・SK455・460 完掘(東から)

SI453 A-A' ① 土層断面(南から)



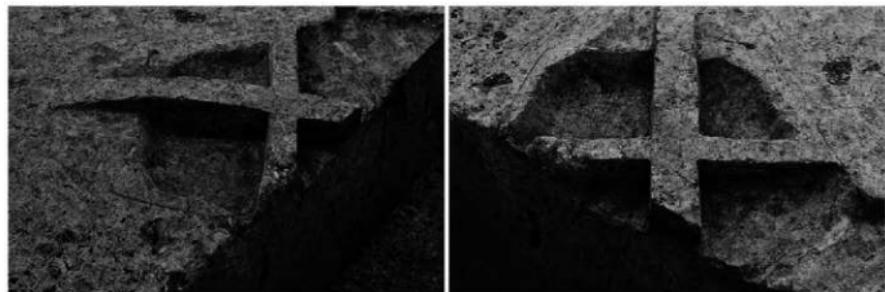
SI453 A-A' ② 土層断面(南から)

SI453 A-A' ③ 土層断面(南から)



SI453 B-B' ①・P597・598 土層断面(東から)

SI453 B-B' ② 土層断面(東から)



SI453- 焼土 822 A-A' 土層断面(南から)

SI453- 焼土 822 B-B' 土層断面(東から)



SI453 完掘 (東から)



SI608 A-A' 土層断面 (北西から)



SI608-P622 土層断面 (南東から)



SI608-P773 土層断面 (南東から)



SI608-P774 土層断面 (南西から)



SI608 B-B' 土層断面・完掘 (南西から)



SB251 完掘 (上が北西)



SB251-P95 土層断面 (北東から)



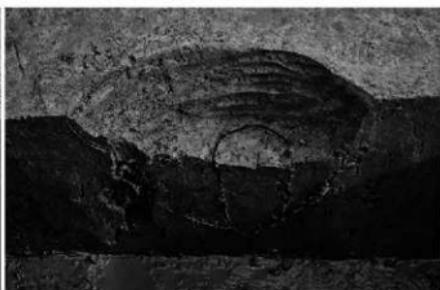
SB251-P101 土層断面（南西から）



SB251-P149 土層断面（北西から）



SB251-P152 土層断面（南西から）



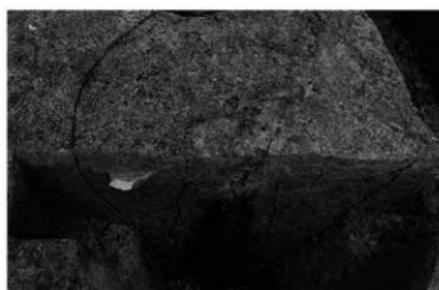
SB251-P176 土層断面（南西から）



SB251-P178 土層断面（南西から）



SB251-P256 土層断面（北西から）



SB251-P273 土層断面（南西から）



SB251-SD153 土層断面（南東から）



SB251-SK68 土層断面（南東から）



SB251-SK68 完掘（南東から）



SB251-SK106 土層断面（南西から）



SB251-SX130 土層断面（南東から）



SB251-SX134 土層断面（北西から）



SB252 完掘（上が北西）



SB252-P140 土層断面（南西から）



SB252-P169 土層断面（南東から）



SB252-P172 土層断面（南西から）



SB252-P179 土層断面（南西から）



SB252-P191 土層断面（北西から）



SB252-P202 土層断面（南西から）



SB252-P216 土層断面（北東から）



SB252-P257 土層断面（南東から）



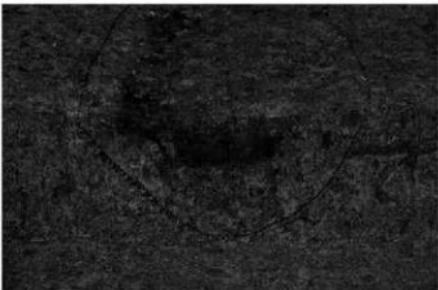
SB252-P270 土層断面（南から）



SB252-P276 土層断面（南西から）



SB252-P458 土層断面（北西から）



SB252-SK71 土層断面（南東から）



SB252-SK76 土層断面（南東から）



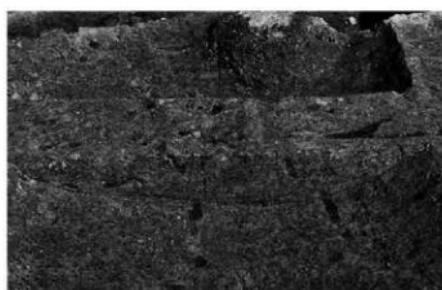
SB252-SK132 土層断面（北西から）



SB252-SK136 土層断面（北西から）



SB252-SK137 土層断面（南東から）



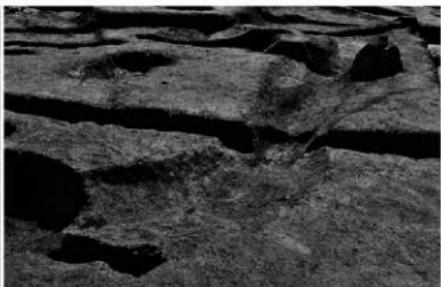
SB252-SD468 A-A' 土層断面（西から）



SB252-SD468 B-B' 土層断面（南西から）



SB252-SD468 C-C' 土層断面（南西から）



SB252-SD468 完掘（北東から）



SB828 完掘（上が北西）



SB828-P286 土層断面（南東から）



SB828-P287 土層断面（南西から）



SB828-P326 土層断面（北から）



SB828-P328 土層断面（南東から）



SB828-P360 土層断面（東から）



SB828-P366 土層断面（南西から）



SB828-P372 土層断面（東から）



SB828-P376 土層断面（南西から）



SB828-P383 土層断面（西から）



SB828-P384 土層断面（南西から）



SB828-P435 土層断面（西から）



SB828-P442 土層断面（南西から）



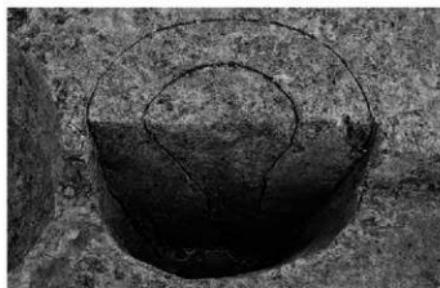
SB828-P450 土層断面（西から）



SB828-P452 土層断面（東から）



SB829 完掘（上が北西）



SB829-P148 土層断面（北西から）



SB829-P151 土層断面（西から）



SB829-P156 土層断面（南東から）



SB829-P159 土層断面（北西から）



SB829-P160 土層断面（南西から）



SB829-P161 土層断面（北西から）



SB829-P187 土層断面（南から）



SB829-P197 土層断面（北西から）



SE278 土層断面（南西から）



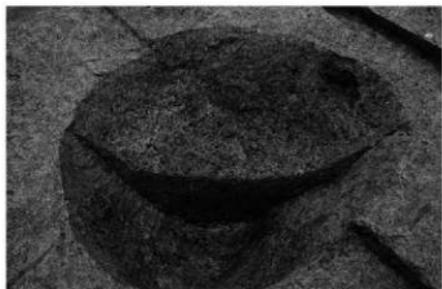
SE278 遺物出土（南西から）



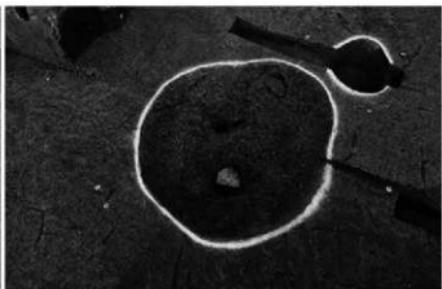
SE278 井戸側出土（南西から）



SE278 井戸側内 土層断面（南西から）



SE388 土層断面（南西から）



SE388 遺物出土・完掘（南西から）



SK29 土層断面（南東から）



SK29 遺物出土・完掘（北東から）



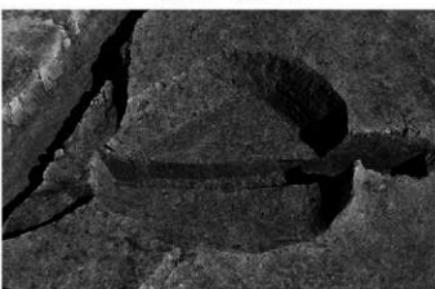
SK32 土層断面（東から）



SK32 遺物出土・完掘（北から）



SK48 土層断面（南から）



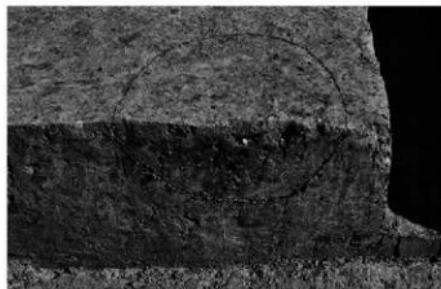
SK48 完掘（南から）



SK53 土層断面（北西から）



SK53 遺物出土・完掘（北西から）



SK67 土層断面（南西から）



SK67 焼土検出（北西から）



SK67 完掘（南西から）



SK73 土層断面（南西から）



SK73 完掘（南西から）



SK79 土層断面（南東から）



SK79 完掘（北西から）



SK107 土層断面（北から）



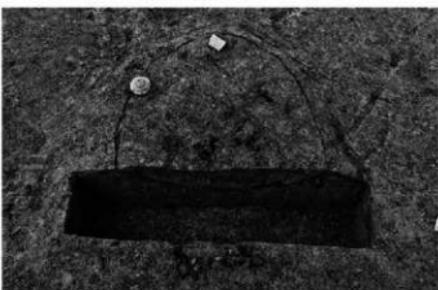
SK107 完掘（北から）



SK131 土層断面（南から）



SK131 完掘（南から）



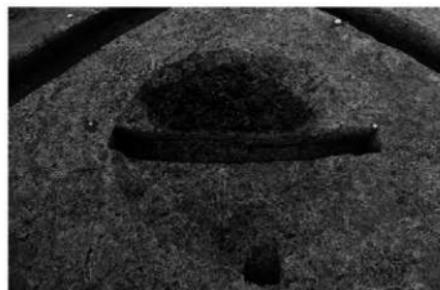
SK145 土層断面（東から）



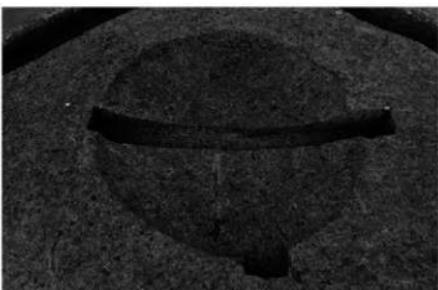
SK145 遺物出土・完掘（東から）



SK220 土層断面（南から）



SK220 炭化物検出（南から）



SK220 完掘（南から）



SK281 A-A' 土層断面 (南東から)



SK281 B-B'・P289 土層断面 (南西から)



SK281 完掘 (南西から)



SK285 土層断面 (南西から)



SK285 完掘 (南西から)



SK298 土層断面 (北東から)



SK298 完掘 (東から)



SK336 土層断面 (北西から)



SK341 A-A' 土層断面 (東から)



SK341 B-B' 土層断面 (南から)



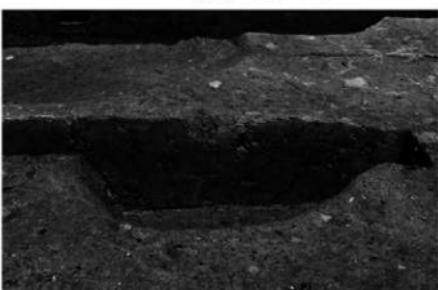
SK341 遺物出土・完掘 (東から)



SK346 土層断面 (南東から)



SK346 完掘 (南東から)



SK350 土層断面 (西から)



SK350 完掘 (西から)



SK352 土層断面 (南から)



SK352 完掘（南から）



SK356 土層断面（南西から）



SK356 完掘（南西から）



SK363 A-A'・D-D' 土層断面（南西から）



SK363 完掘（南西から）



SK413 遺物出土（北から）



SK413 B-B' 土層断面（南西から）



SK413 C-C' 土層断面（北西から）



SK413 完掘（南西から）



SK418 A-A' 土層断面（南西から）



SK418 B-B' 土層断面（南東から）



SK418 遺物出土（西から）



SK418 遺物出土（南から）



SK418 完掘（北東から）



SK419 A-A' 土層断面（北から）



SK419 B-B' 土層断面（北東から）



SK419・SX486・SD380 土層断面（南から）



SK419・SX486・487 土層断面（南西から）



SK419 遺物出土（南東から）



SK419 遺物出土（北西から）



SK419 遺物出土（南から）



SK419 遺物（鳥足）出土（北西から）



SK419 遺物出土（北から）



SK419 遺物（鉄鋤・錫杖頭）出土（西から）



SK419 完掘（東から）



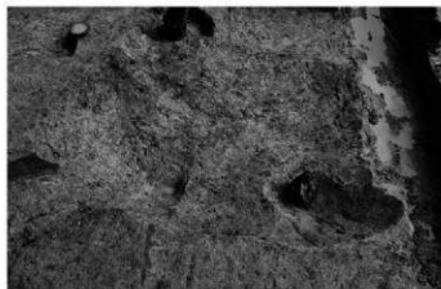
SK455 A-A' 土層断面（南西から）



SK455 完掘（南西から）



SK460 土層断面（南西から）



SK460 完掘（南西から）



SK472 土層断面（北東から）



SK472 完掘（北東から）



SK488 A-A' ① 土層断面（南東から）



SK488 A-A' ② 土層断面（北西から）



SK488 B-B' ① 土層断面（南西から）



SK488 B-B' ② 土層断面（南西から）



SK488 遺物出土（西から）



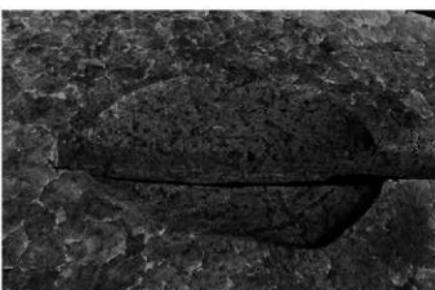
SK488 遺物出土（西から）



SK488 完掘（南西から）



SK499 土層断面（北西から）



SK499 完掘（北西から）



SK532 A-A' · SD537 土層断面（北から）



SK532 B-B' · SK546 · SD537 · 538 土層断面（西から）



SK532 完掘（北から）



SK533 A-A' 土層断面 · SD380 完掘（南西から）



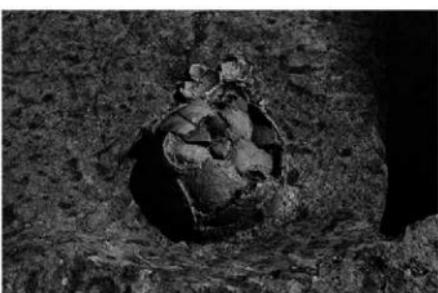
SK533 B-B' 土層断面（西から）



SK533 完掘（南から）



SK543 B-B' 土層断面（北東から）



SK543 遺物出土（北から）



SK543 完掘（北西から）



SK546・P551 A-A' 土層断面（西から）



SK546・P551 B-B' 土層断面（北から）



SK546・P551 完掘（西から）



SK553 A-A' 土層断面（南西から）



SK553 B-B' 土層断面（北から）



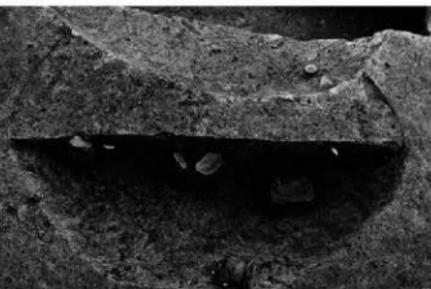
SK553 完掘（北から）



SK584 A-A' 土層断面（南から）



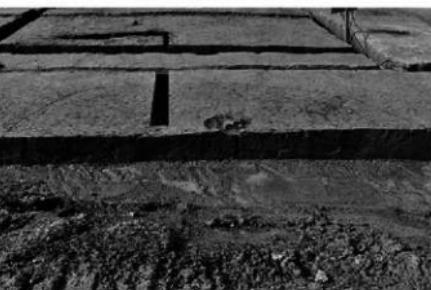
SK584 完掘 (南から)



SK589 土層断面 (北から)



SK589 遺物出土 (北から)



SK616 A-A' 土層断面 (南東から)



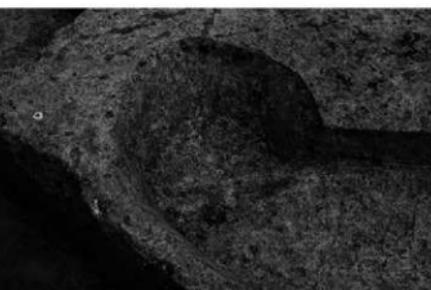
SK616 遺物出土 (北東から)



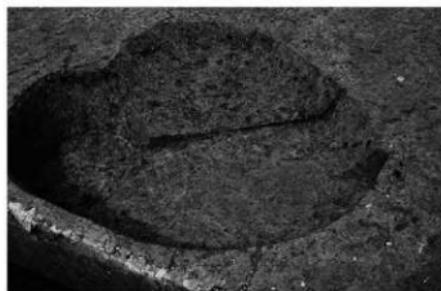
SK616 完掘 (南東から)



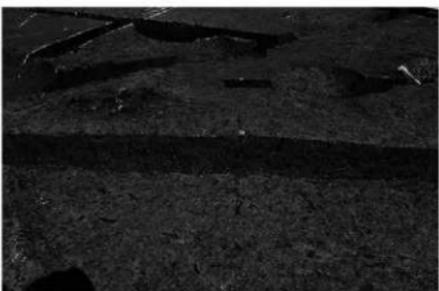
SK624・630 土層断面 (南から)



SK624 完掘 (南から)



SK630 完掘（南から）



SK631 土層断面（南から）



SK631 完掘（南から）



SK647 B-B' 土層断面（南東から）



SK647 完掘（南東から）



SK654・663・SD651 土層断面（南東から）



SK654 土層断面（南東から）



SK654 完掘（南東から）



SK658 A-A' 土層断面（南から）



SK658 完掘（南から）



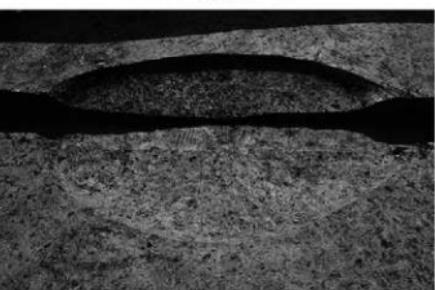
SK668 土層断面（東から）



SK668 完掘（東から）



SK674 土層断面（北東から）



SK674 完掘（北東から）



SK680 土層断面（北東から）



SK680 完掘（北東から）



SK689 土層断面（北西から）



SK690 土層断面（南東から）



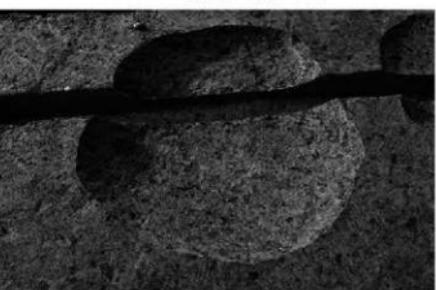
SK690 完掘（南東から）



SK691 土層断面（北東から）



SK698 土層断面（南東から）



SK698 完掘（南東から）



SK699 土層断面（南東から）



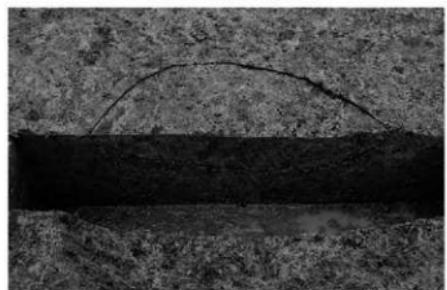
SK699 完掘（南から）



SK700 土層断面（北東から）



SK700 完掘（北東から）



SK706 土層断面（北から）



SK706 完掘（北から）



SK721 土層断面（北東から）



SK721 完掘（北東から）



SK722 土層断面（北から）



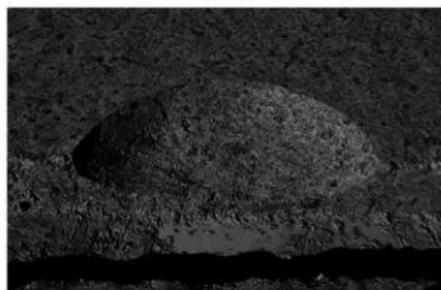
SK722 完掘（北から）



SK758 土層断面（南東から）



SK758 遺物出土（南東から）



SK758 完掘（南東から）



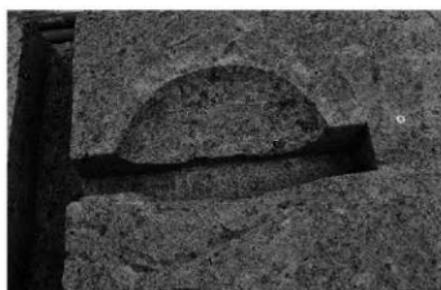
SK781 土層断面（東から）



SK781 完掘（東から）



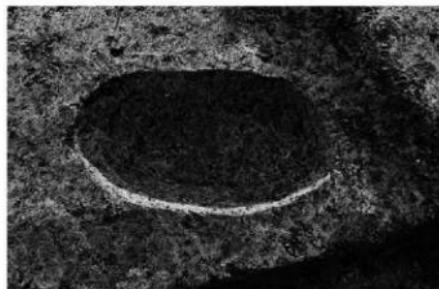
SK785 土層断面（南東から）



SK785 完掘（南東から）



SK802 土層断面（北東から）



SK802 完掘（北東から）



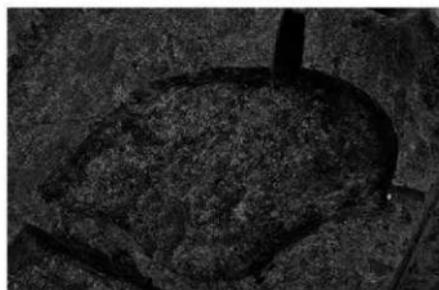
焼土 374 A-B' 土層断面（南西から）



焼土 374 A'-B 土層断面（北東から）



焼土 454 土層断面（東から）



焼土 454 完掘（東から）



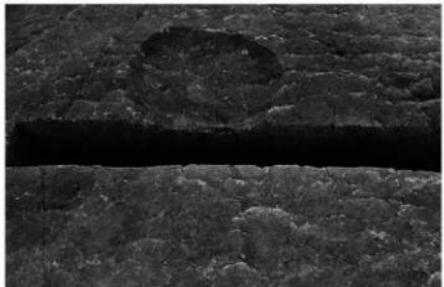
焼土 588 土層断面（西から）



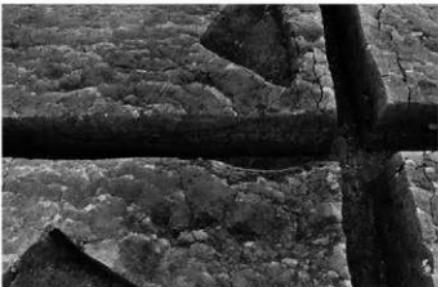
焼土 810 A-A' 土層断面（南西から）



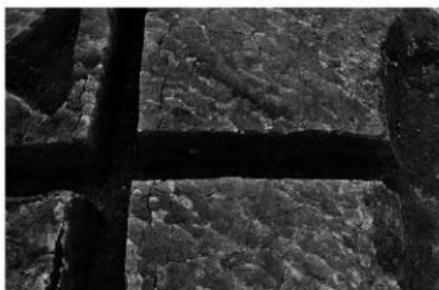
焼土 810 B-B' 土層断面（南東から）



SX3 A-A' ① 土層断面（北東から）



SX3 A-A' ② 土層断面（北東から）



SX3 A-A' ③ 土層断面（北東から）



SX3 遺物出土・完掘（南東から）



SX31 A-A' 土層断面（南東から）



SX31 B-B' 土層断面（南から）



SX31 遺物出土・完掘（南から）



SX63 A-A'・B-B' 土層断面（南から）



SX63 完掘（南東から）



SX64 A-A' ① 土層断面（南西から）



SX64 A-A' ② 土層断面（南西から）



SX64 B-B' ① 土層断面（北西から）



SX64 B-B' ② 土層断面（北西から）



SX64- 焼土 816 A-A' 土層断面（北西から）



SX64- 焼土 816 B-B' 土層断面（北東から）



SX64- 石列 381 検出・SX64 完掘（北西から）



SX66 土層断面（南東から）



SX70 A-A' 土層断面（南西から）



SX70 完掘（北から）



SX124 土層断面（南西から）



SX125 遺物分布範囲（北から）



SX240 A-A' 土層断面（南から）



SX247・248 土層断面（北西から）



SX249 土層断面（北西から）



SX283 A-A' ① 土層断面（南から）



SX283 A-A' ②・SB828-SD357 ① 土層断面（南から）



SX283 A-A' ③・SD828-SD357 ② 土層断面（南から）



SX283 B-B' ①・SE388 土層断面（西から）



SX283 B-B' ② 土層断面（西から）



SX283 B-B' ③ 土層断面（西から）



SX283- 焼土 819 A-A' 土層断面（北西から）



SX283- 焼土 819 B-B' 土層断面（南西から）



SX283 遺物出土 (南から)



SX283 完掘 (南西から)



SX406 B-B' 土層断面 (南から)



SX406 完掘 (南から)



SX407 土層断面・完掘 (南西から)



SX411 土層断面 (北西から)



SX415 遺物出土 (北西から)



SX415 A-A' 土層断面 (北西から)



SX416 土層断面（北西から）



SX421 土層断面（南西から）



SX421 遺物出土・完掘（南西から）



SX425 土層断面（南東から）



SX425 炭化物検出（南東から）



SX425 完掘（南東から）



SX469 A-A' ① 土層断面（南から）



SX469 A-A' ② 土層断面（南から）



SX469 A-A' ③ 土層断面（南から）



SX469 B-B' ① 土層断面（西から）



SX469 B-B' ②・SI453 土層断面（西から）



SX469 完掘（南から）



SX509 A-A' 土層断面（北東から）



SX509 B-B' 土層断面（北西から）



SX605・SD592・826・827 土層断面（南東から）



SX605・SD592・826・827 完掘（南東から）



SX711 土層断面（北東から）



SX712 土層断面（南西から）



SD338 土層断面・完掘（南西から）



SD359 土層断面（南から）



SD397 土層断面（北西から）



SD420 A-A' 土層断面（南西から）



SD420 B-B' 土層断面（南から）



SD420 C-C' 土層断面（南東から）



SD420 完掘（北西から）



SD515 土層断面（西から）



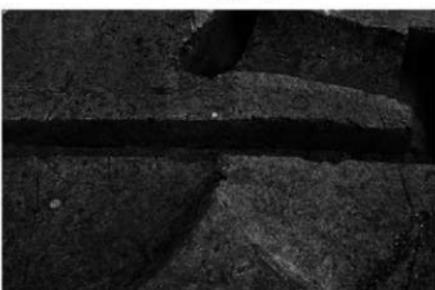
SD523・P522 土層断面（北東から）



SD525 土層断面（西から）



SD531 土層断面（西から）



SD538 A-A' 土層断面（西から）



SD538 B-B' 土層断面（西から）



SD592 土層断面（南東から）



SD606 A-A' 土層断面（南西から）



SD606 C-C' 土層断面（東から）



SD606 E-E' 土層断面（西から）



SD606 完掘（東から）



SD651 土層断面（西から）



SD652 土層断面（西から）



SD651・652・678 完掘（西から）



SD673 土層断面（南西から）



SD678 土層断面（東から）



SD725 A-A' 土層断面（南東から）



P110 土層断面（南西から）



P165 土層断面（南西から）



P184 土層断面（南西から）



P185 土層断面（東から）



P186 土層断面（東から）



P212 土層断面（西から）



P219 土層断面（南東から）



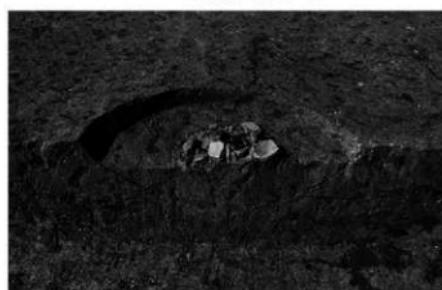
P254 土層断面（北東から）



P272 土層断面（北西から）



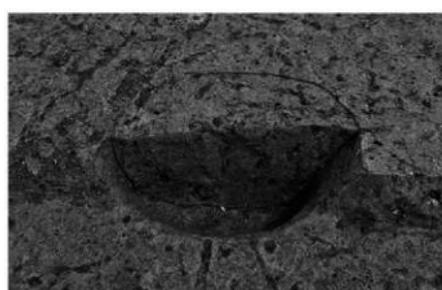
P385 土層断面（北西から）



P434 土層断面（南から）



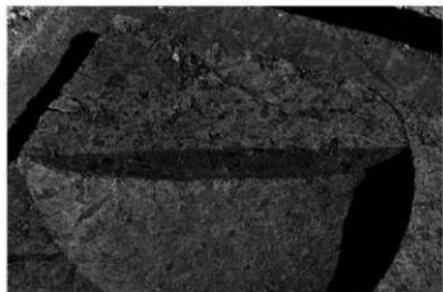
P448 土層断面（南から）



P489 土層断面（南から）



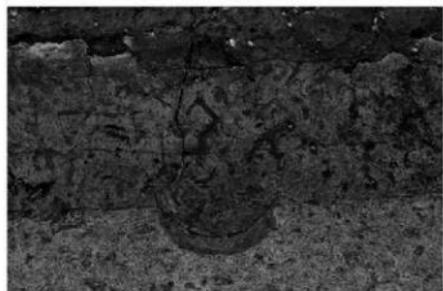
P551 遺物出土（西から）



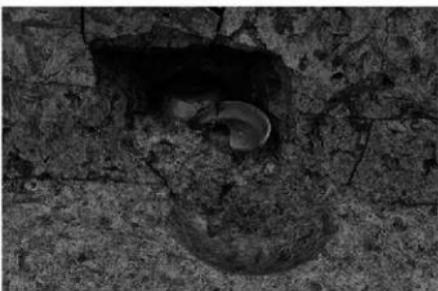
P587 土層断面（南から）



P590 土層断面（北から）



P610 土層断面（南東から）



P610 遺物出土・完掘（南東から）



P716 土層断面（南から）



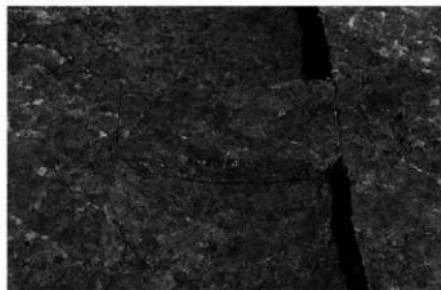
P718 土層断面（北東から）



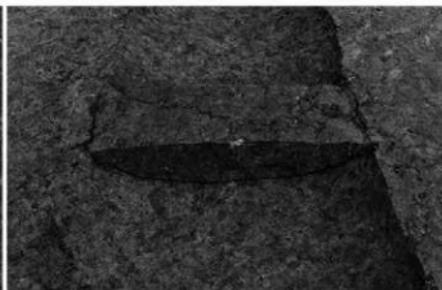
P806 土層断面（東から）



P815 土層断面（北西から）



SD47 A-A' 土層断面 (西から)



SD47 B-B' 土層断面 (西から)



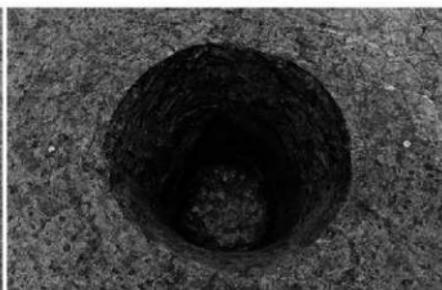
SD226 土層断面 (南から)



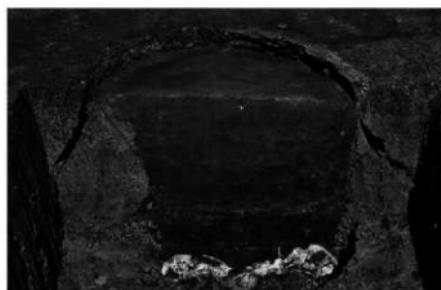
SD226 完掘 (北から)



SE6 土層断面 (北から)



SE6 完掘 (北から)



SE20 土層断面 (南東から)



SE20 完掘 (南東から)



SK1 土層断面 (南西から)



SK8 A-A' 土層断面 (南から)



SK9 土層断面 (南から)



SK10 A-A' 土層断面 (西から)



SK10 完掘 (西から)



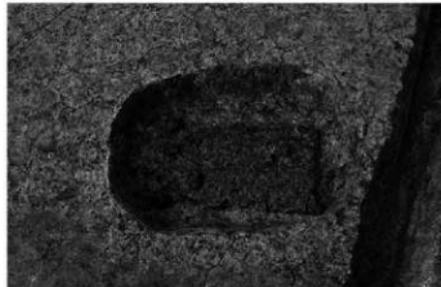
SK11 土層断面 (南から)



SK13 土層断面 (南から)



SK15 土層断面 (南から)



SK15 遺物出土・完掘（南から）



SK16 土層断面（北から）



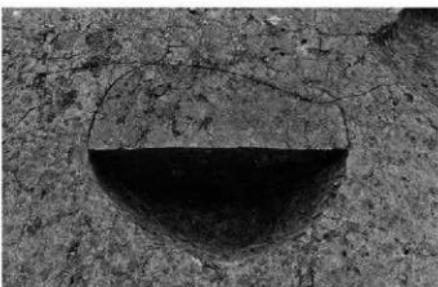
SK19 A-A' 土層断面（西から）



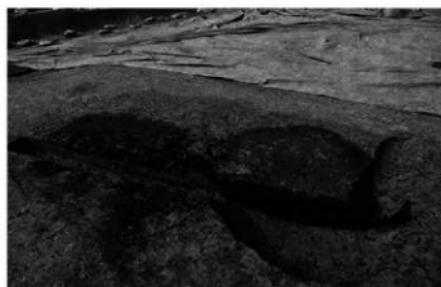
SK19 B-B' 土層断面（南から）



SK26 土層断面（東から）



SK52 土層断面（北西から）



SK544・545 土層断面（南西から）



SK556 土層断面（西から）



SK600 土層断面（南から）



SK600 完掘（南から）



SX42 B-B' 土層断面・完掘（北西から）



SX476 A-A' · SK511 · SD477 · 525 土層断面（南西から）



SX476 B-B' · SD515 · 523 · 525 土層断面（南東から）



SD25 A-A' 土層断面（東から）



SD25 B-B' 土層断面（西から）



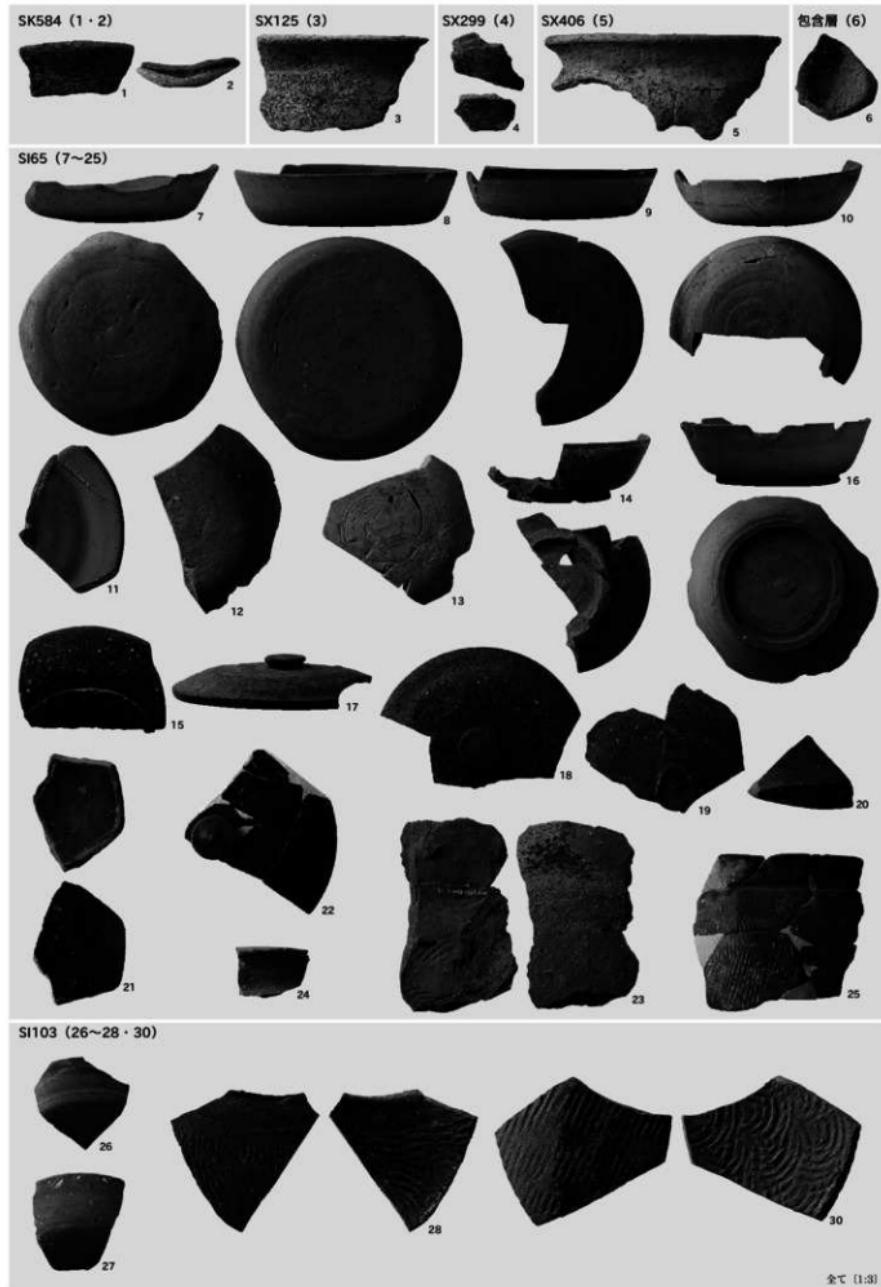
SD25 完掘（西から）



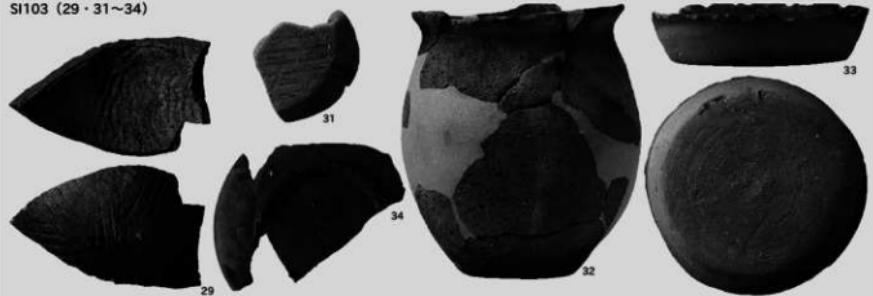
SK419 出土遺物



鳥形製品



SI103 (29・31~34)



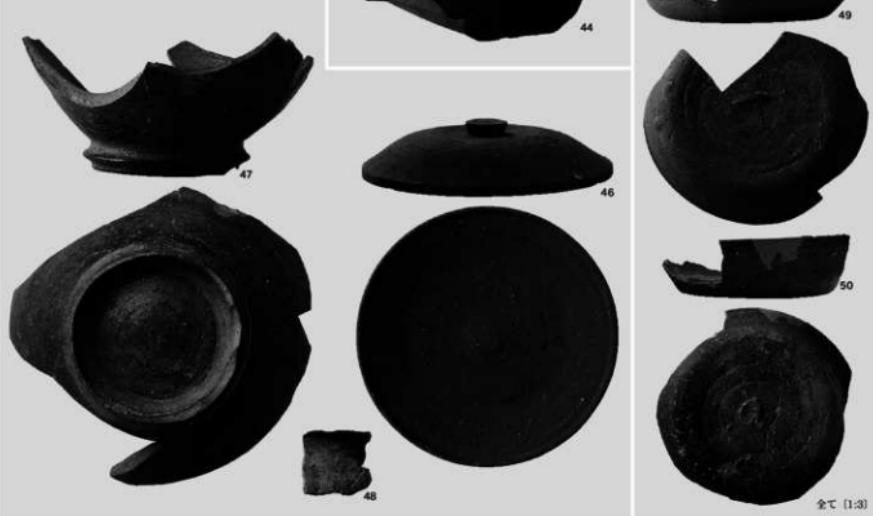
SI108 (35~40)



SI181 (41~45)

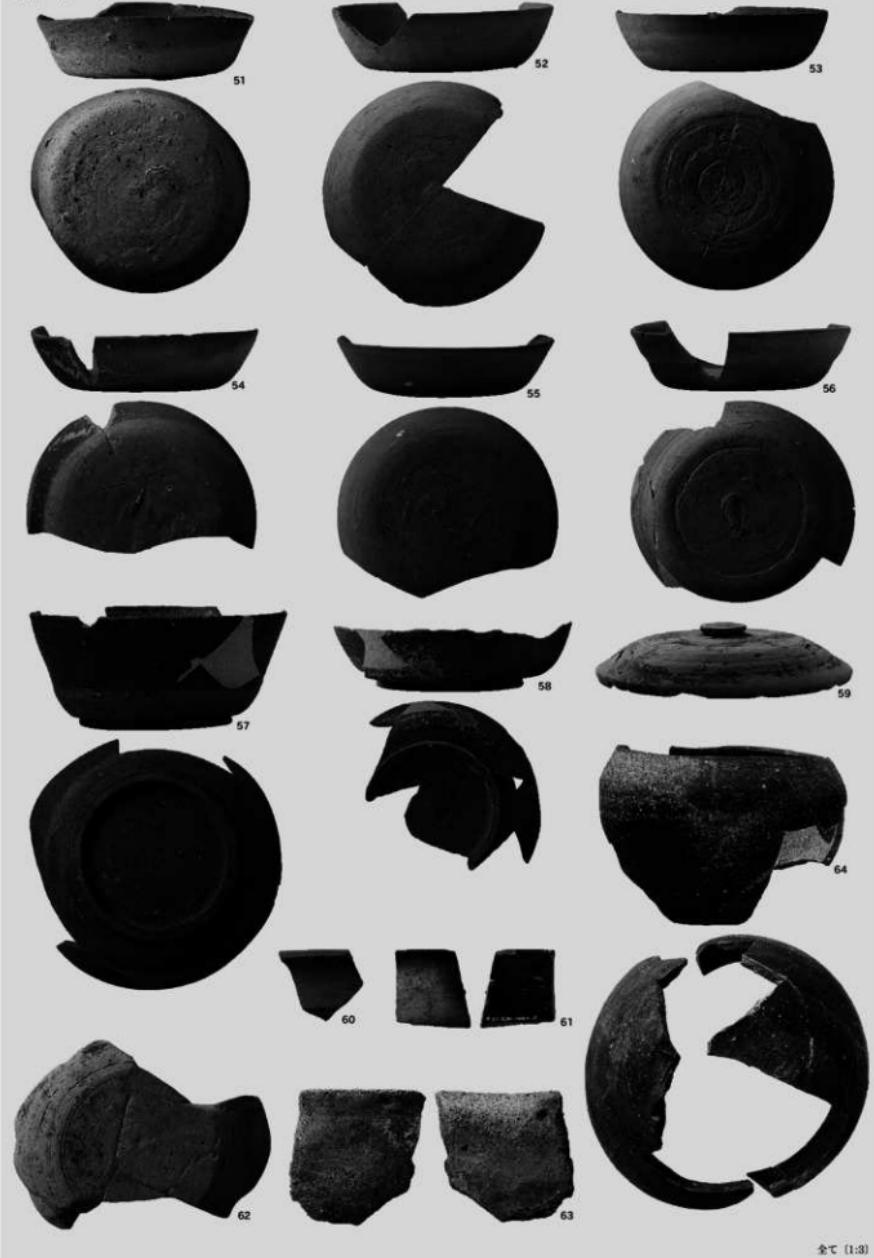


SI207 (46~48)



全て [1:3]

SI451 (51~64)

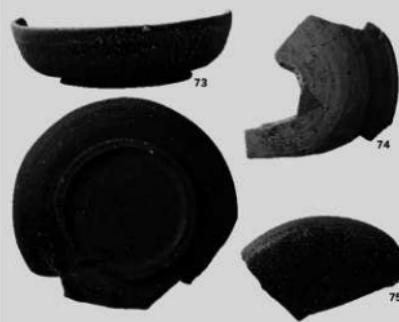


全て (1:3)

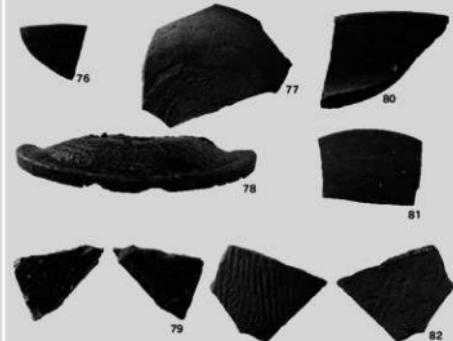
SI451 (65~72)



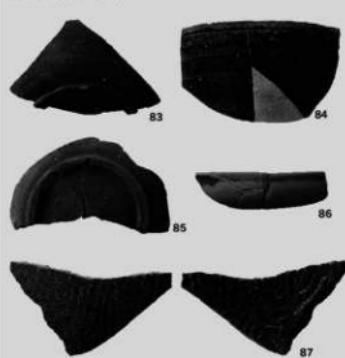
SI453 (73~75)



SB251 (76~82)



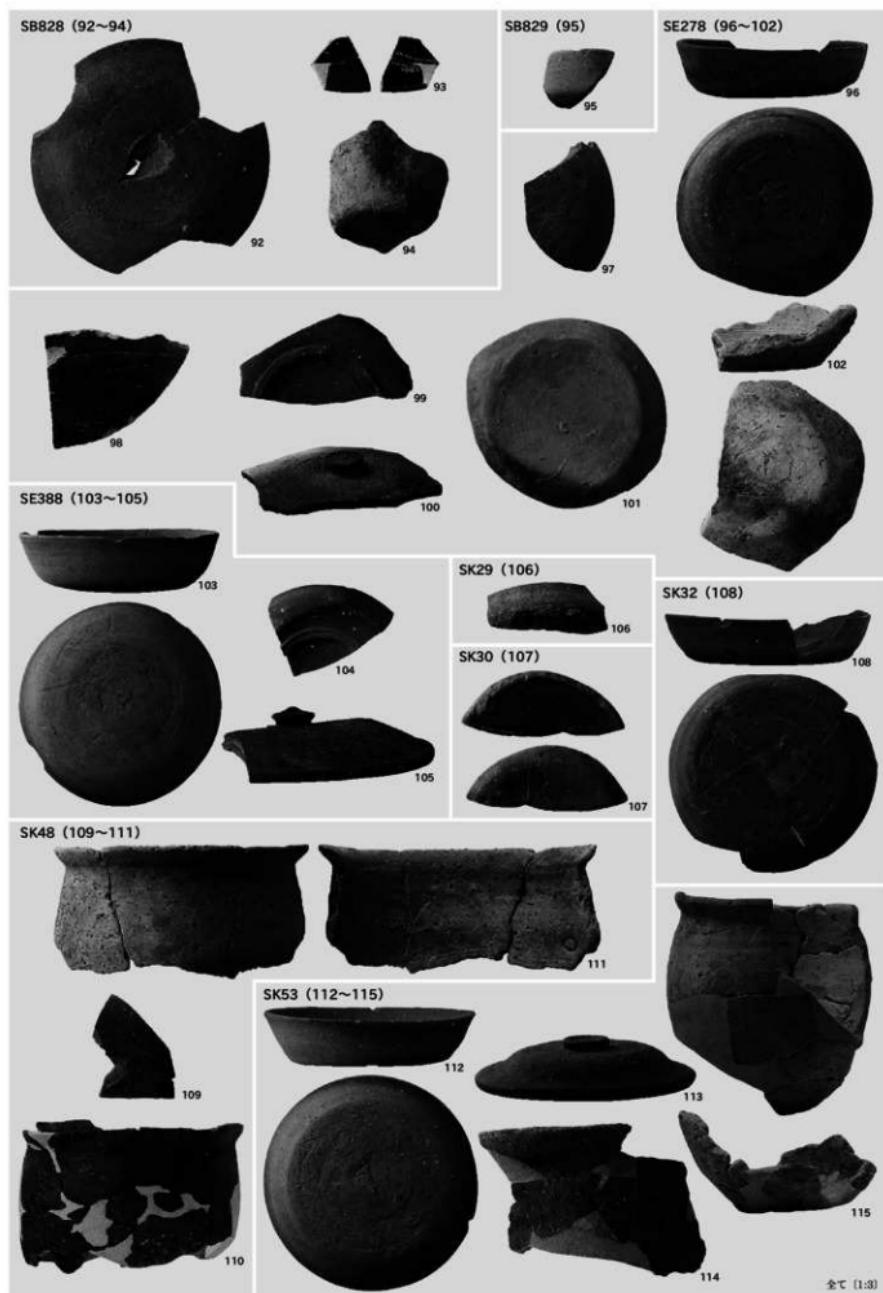
SB252 (83~87)

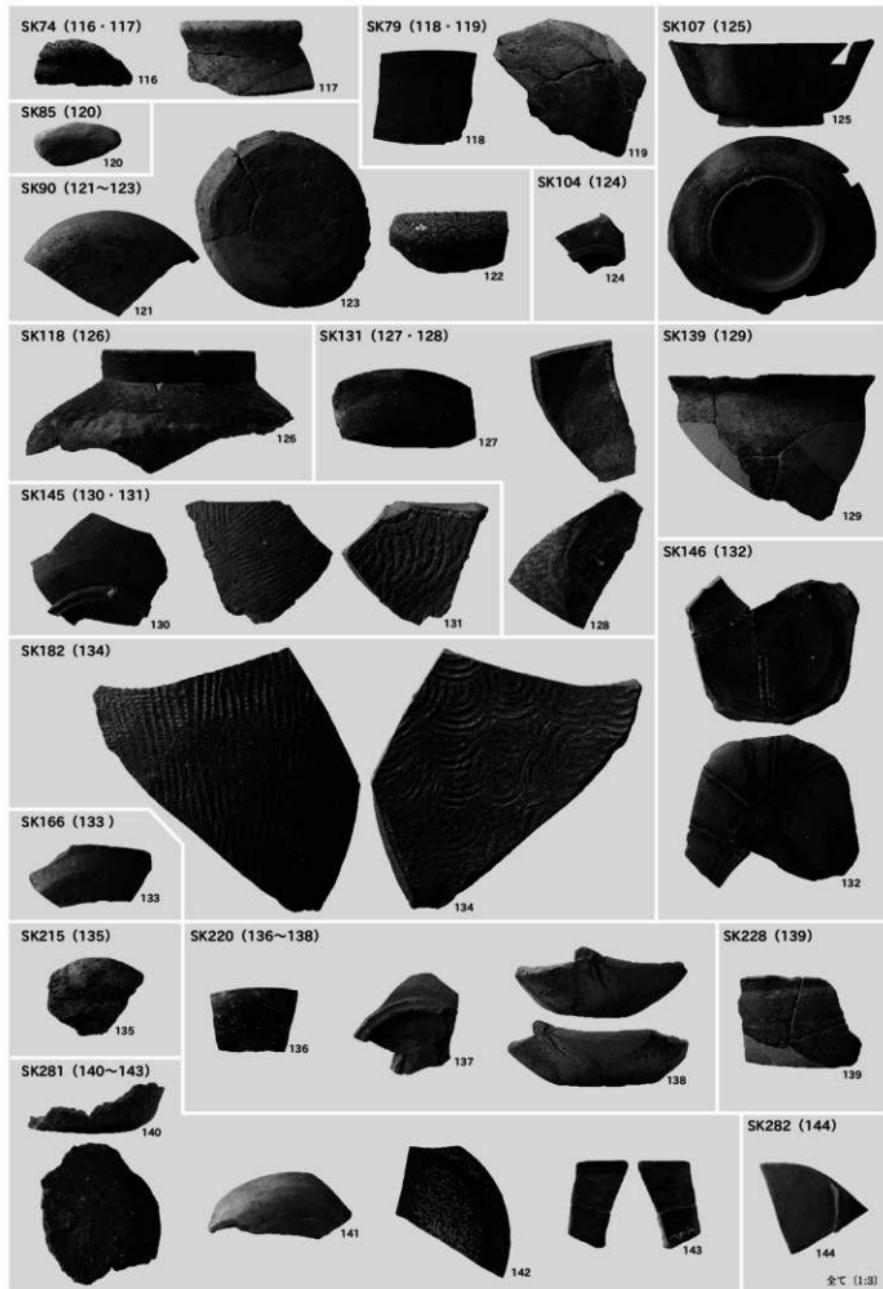


SB828 (88~91)



全て [1:3]





SK285 (145~149)



SK298 (150~152)



SK333 (153~155)



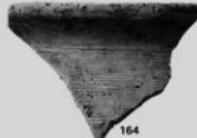
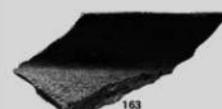
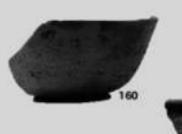
SK335 (156)



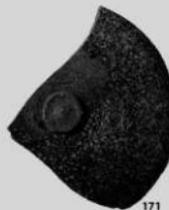
SK336 (157)



SK341 (158~169)



SK346 (170~172)



SK350 (173・174)



SK352 (175・176)



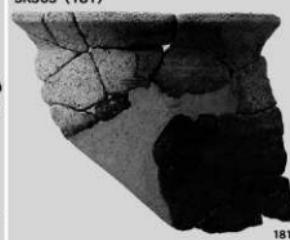
SK353 (177)



SK356 (178~180)



SK363 (181)



SK400 (182)



SK413 (183)



全て [1:3]

179

180

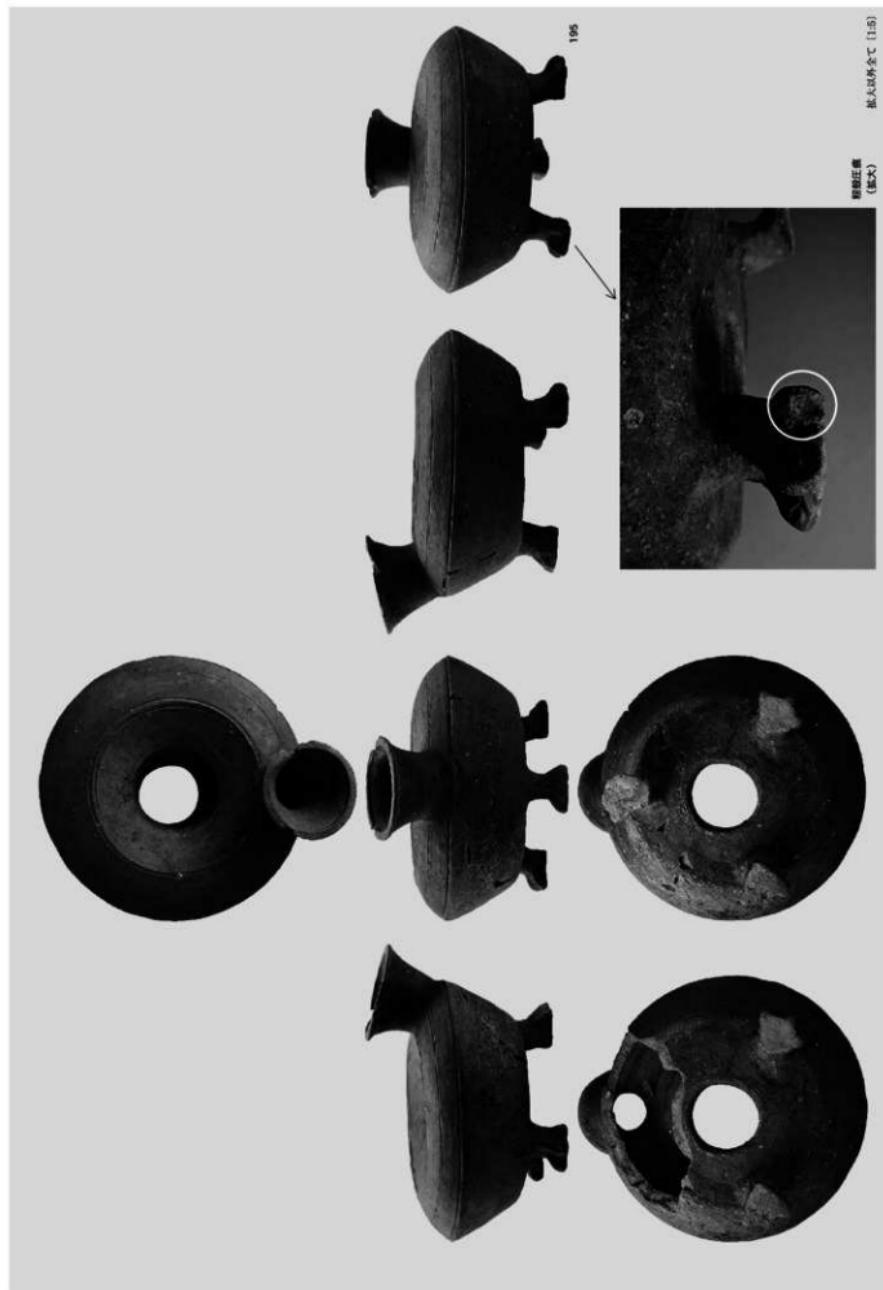
181

183

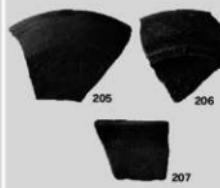
SK419 (184~188・193・194)



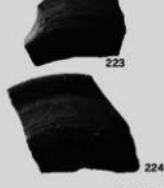
194 全て (1:3)



SK419 (189~192・196~204)

SK444
(205~207)SK462
(222)

SK466 (223・224)



全て 1:3

SK455 (208~218)



208



210



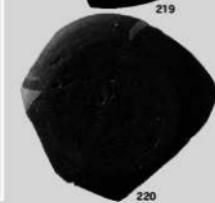
211



SK460 (219~221)



219



220



216



217

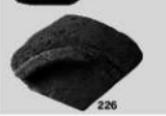


218

SK470 (225・226)



225



226

SK472 (227~235)



227



228



229



230



221



231



232



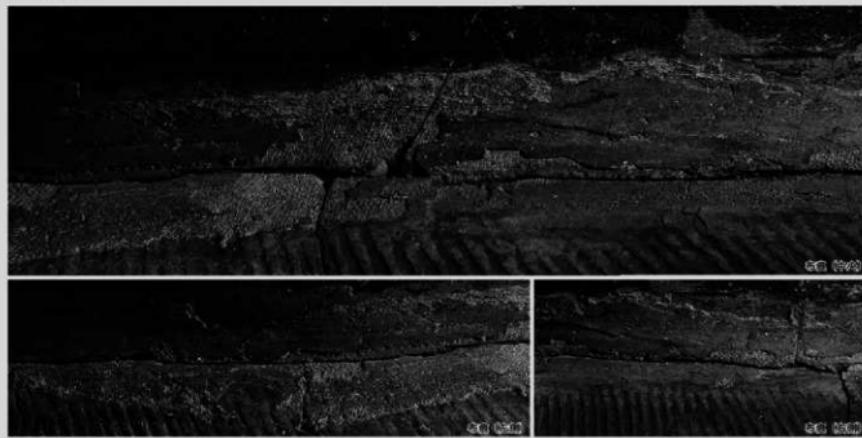
233

234 全て (1:3)

SK488 (236~238)

238 [1:4]
その他 [1:3]

SK488 (239)



[いずれも縮尺不同]



239

(1:5)

SK499 (240)

SK533
(244)

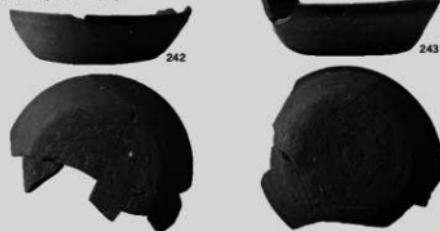
SK530 (241)



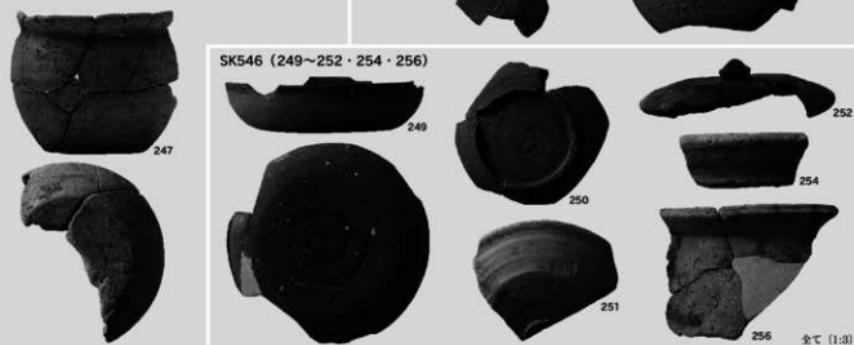
SK543 (245~248)



SK532 (242・243)



SK546 (249~252・254・256)



全て (1:3)

SK546 (253・255)



SK547 (257)



SK576 (262)



SK553 (258~261)



SK581 (263)



SK585 (267)



SK602 (274)



SK584 (264~266)



264

SK589 (268~273)



268



269



270



271



272

SK616 (275)

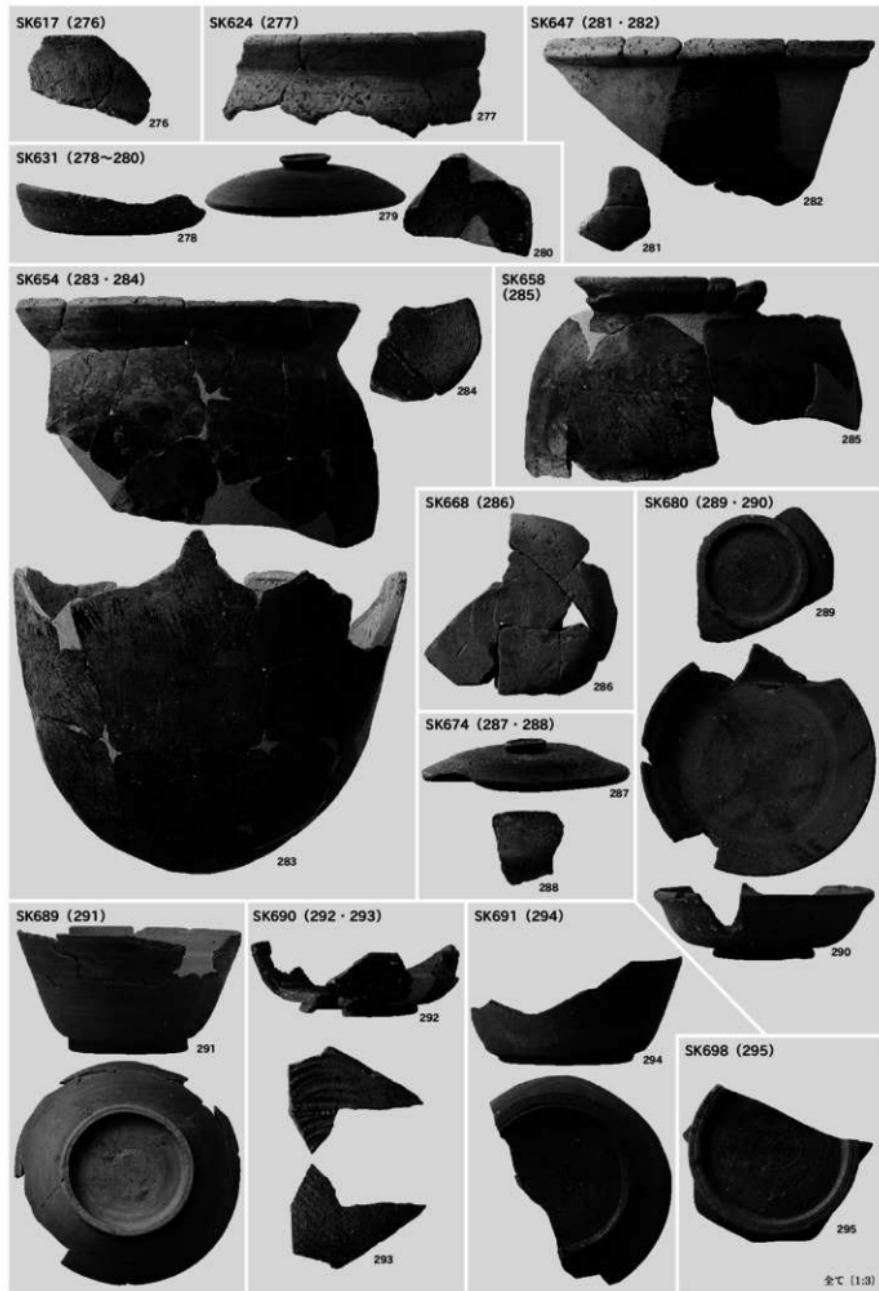
273

SK616 (275)

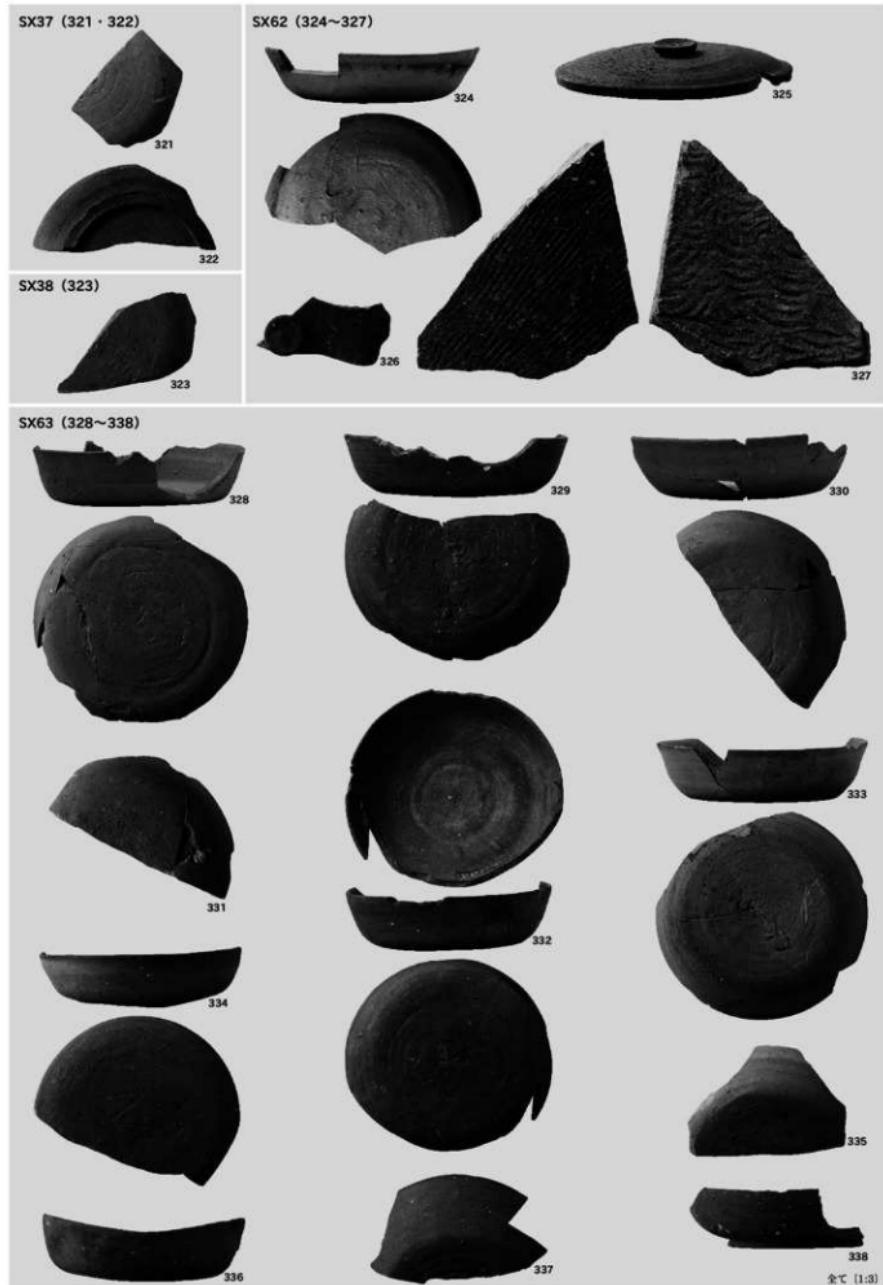


275

全て (1:3)



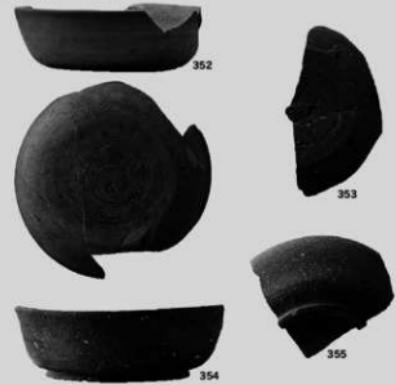


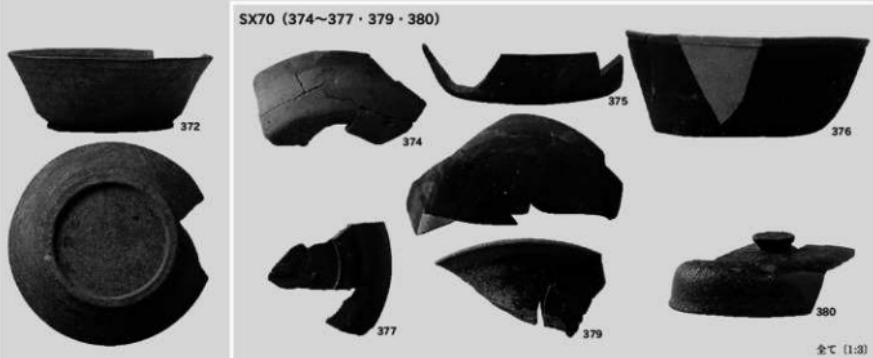


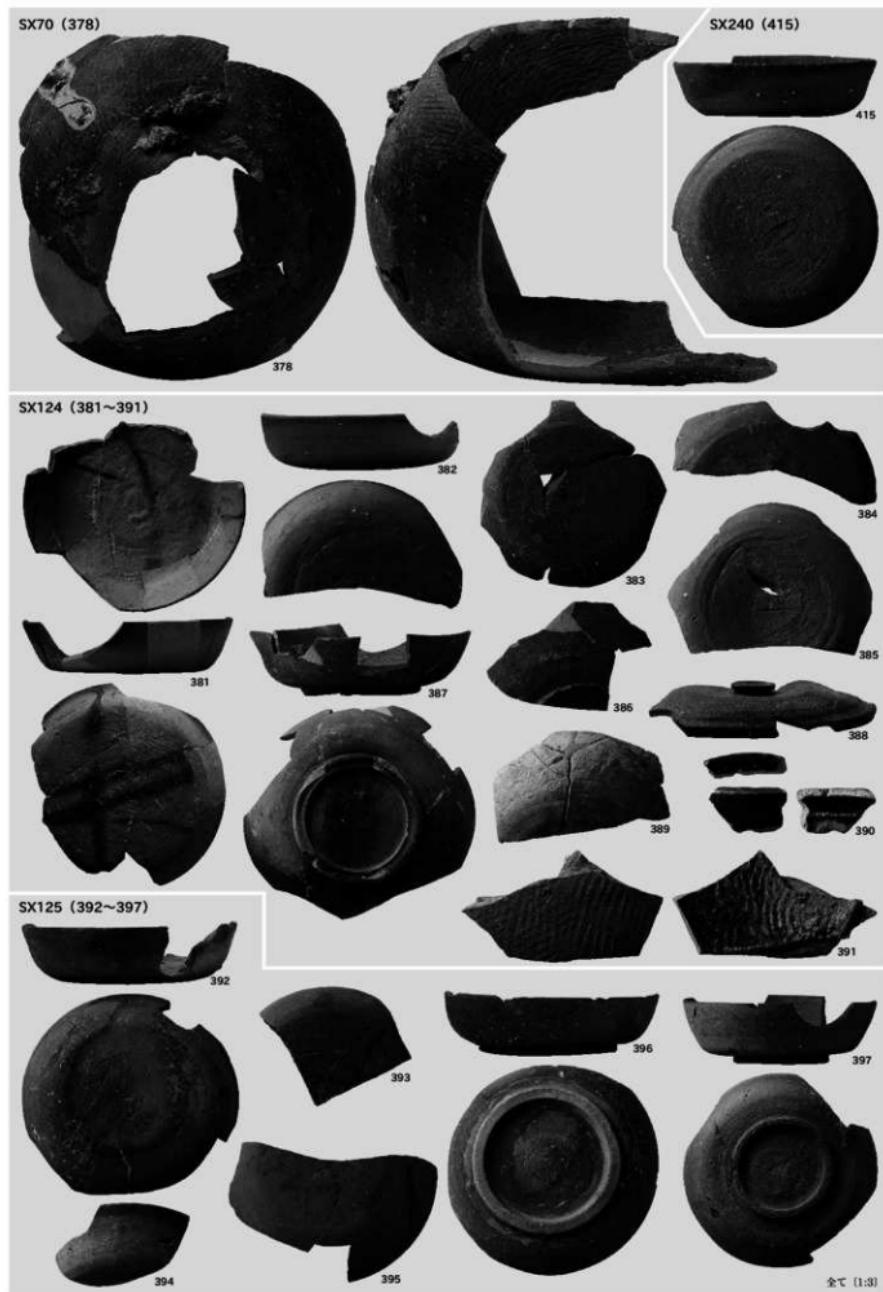
SX63 (339~351)



SX64 (352~355)

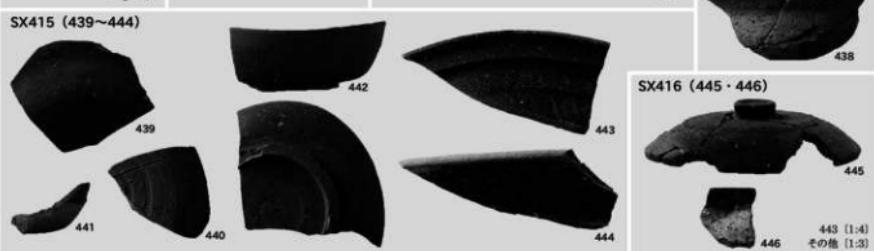
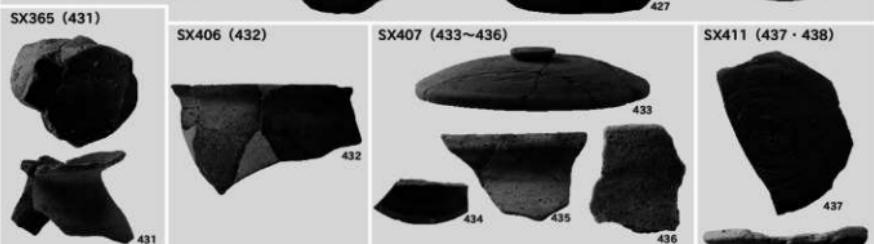
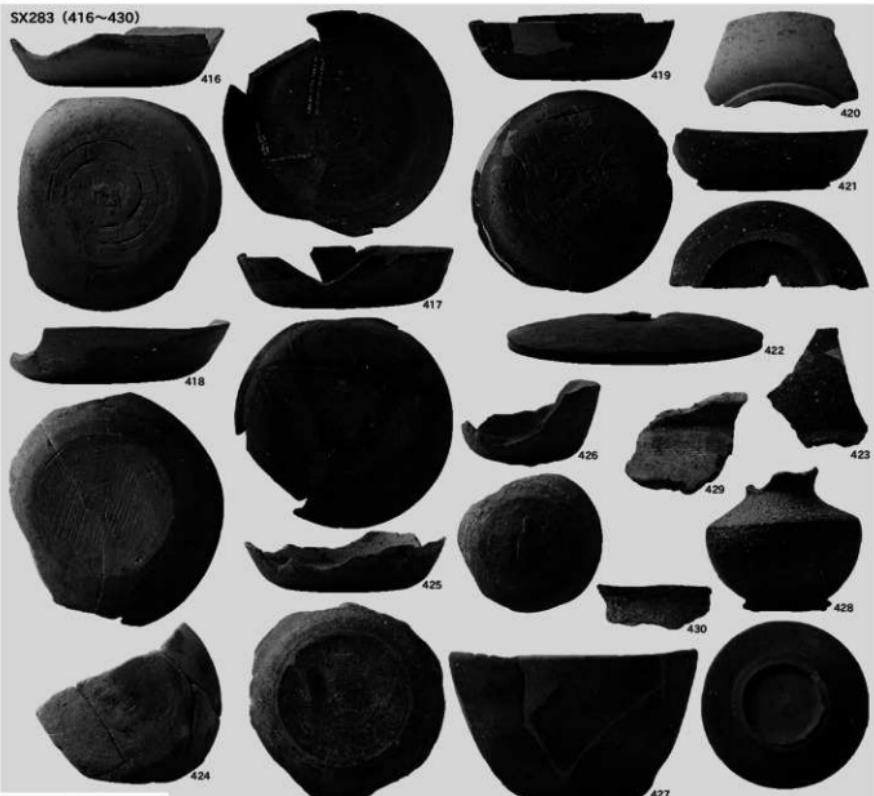


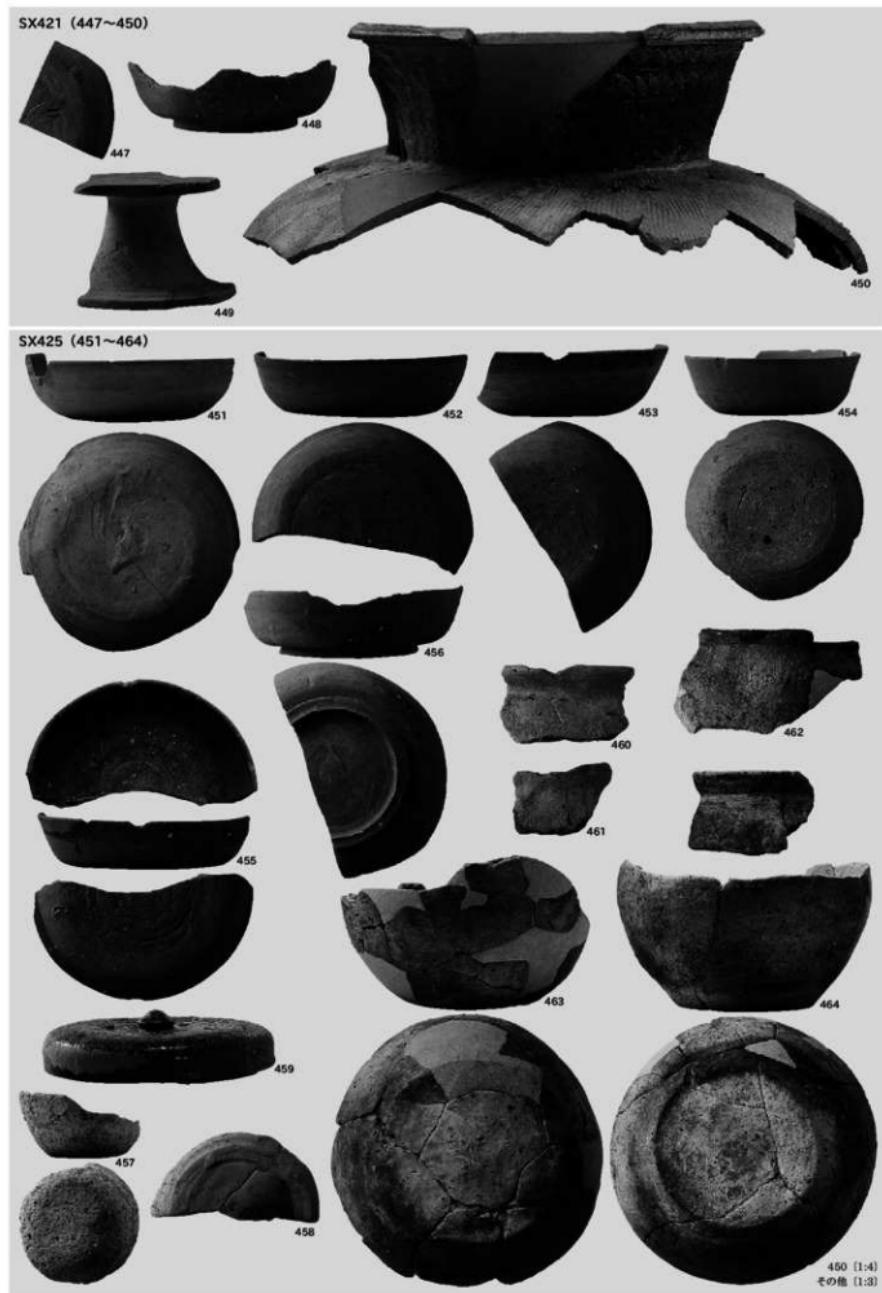


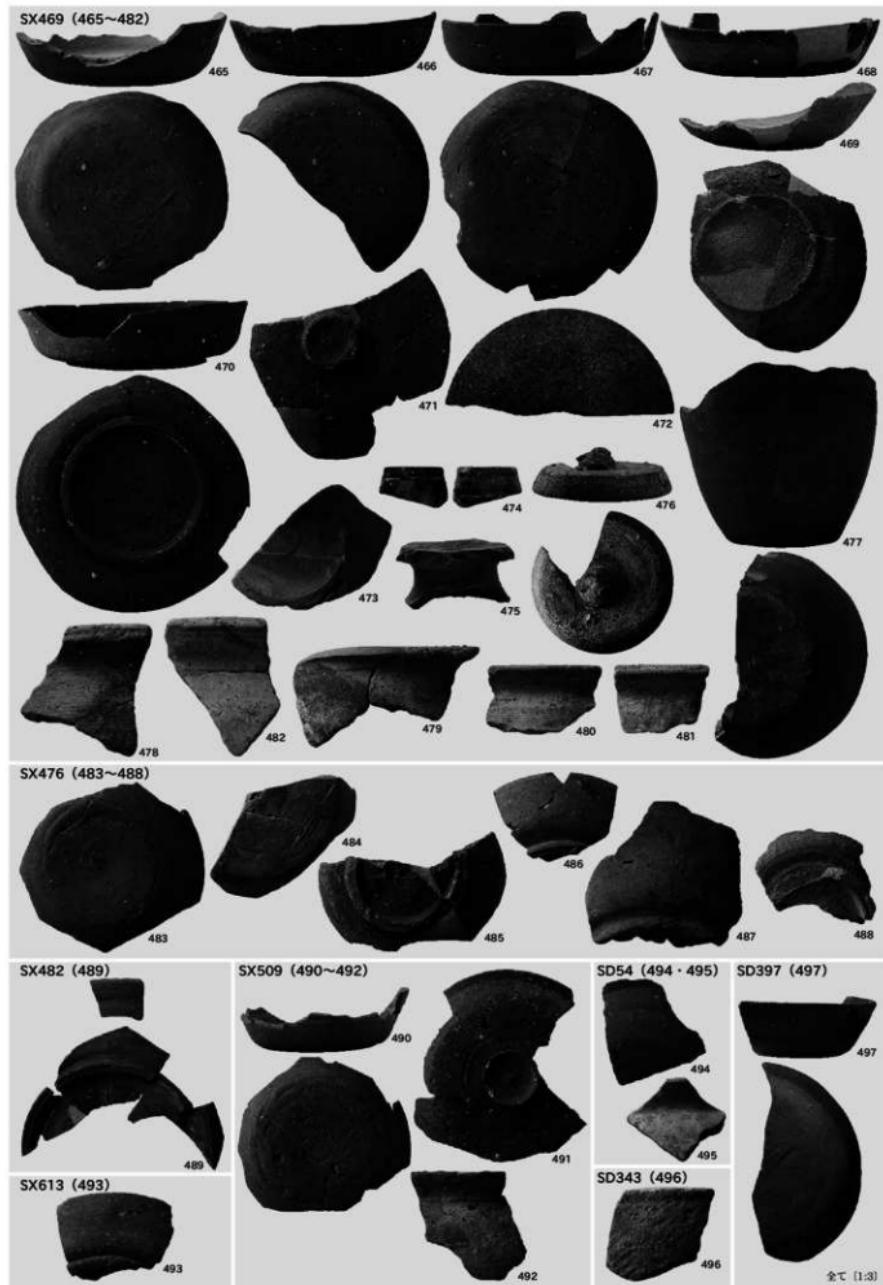


SX125 (398~414)





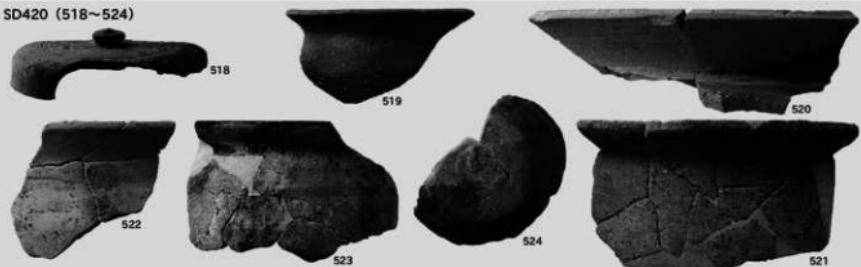




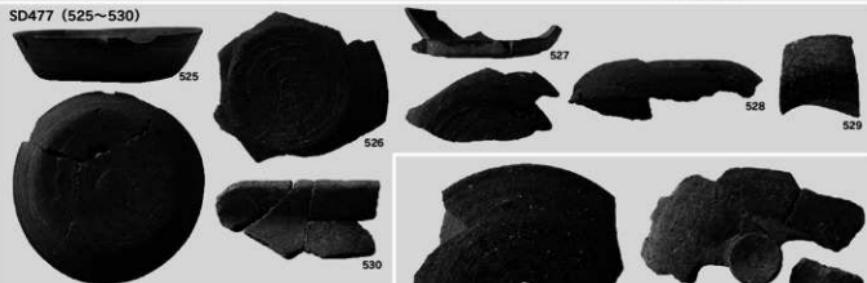
SD420 (498~517)



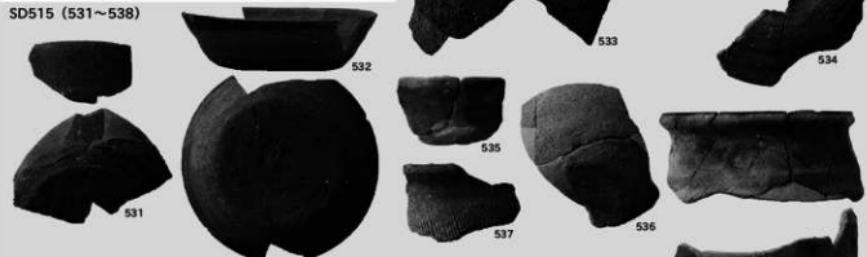
SD420 (518~524)



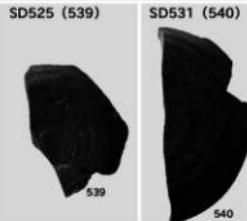
SD477 (525~530)



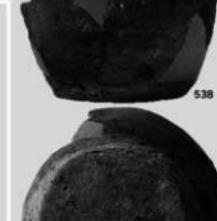
SD515 (531~538)



SD525 (539)



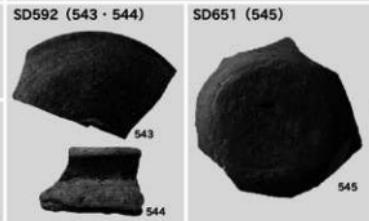
SD531 (540)



SD538 (542)



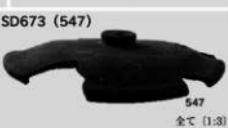
SD592 (543・544)



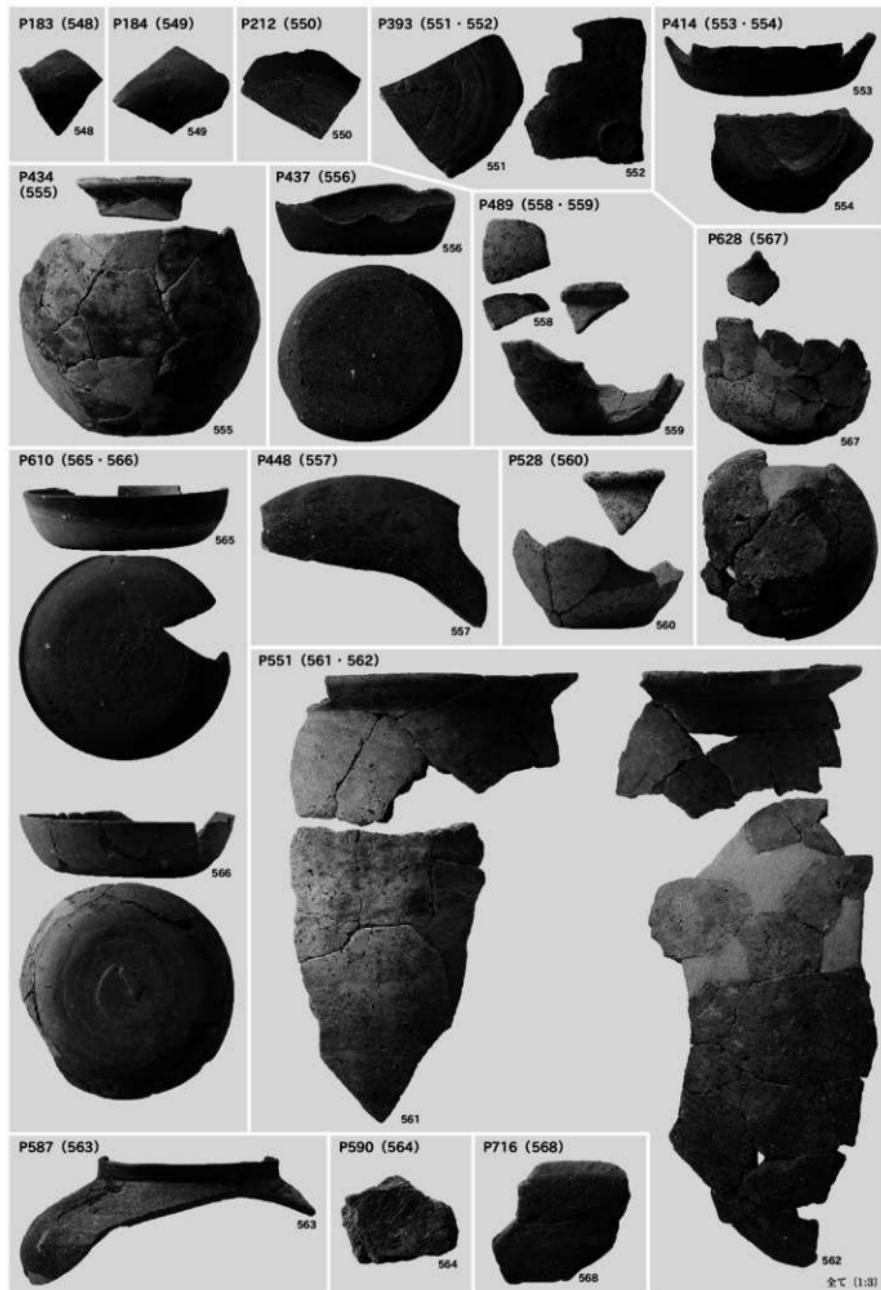
SD652 (546)

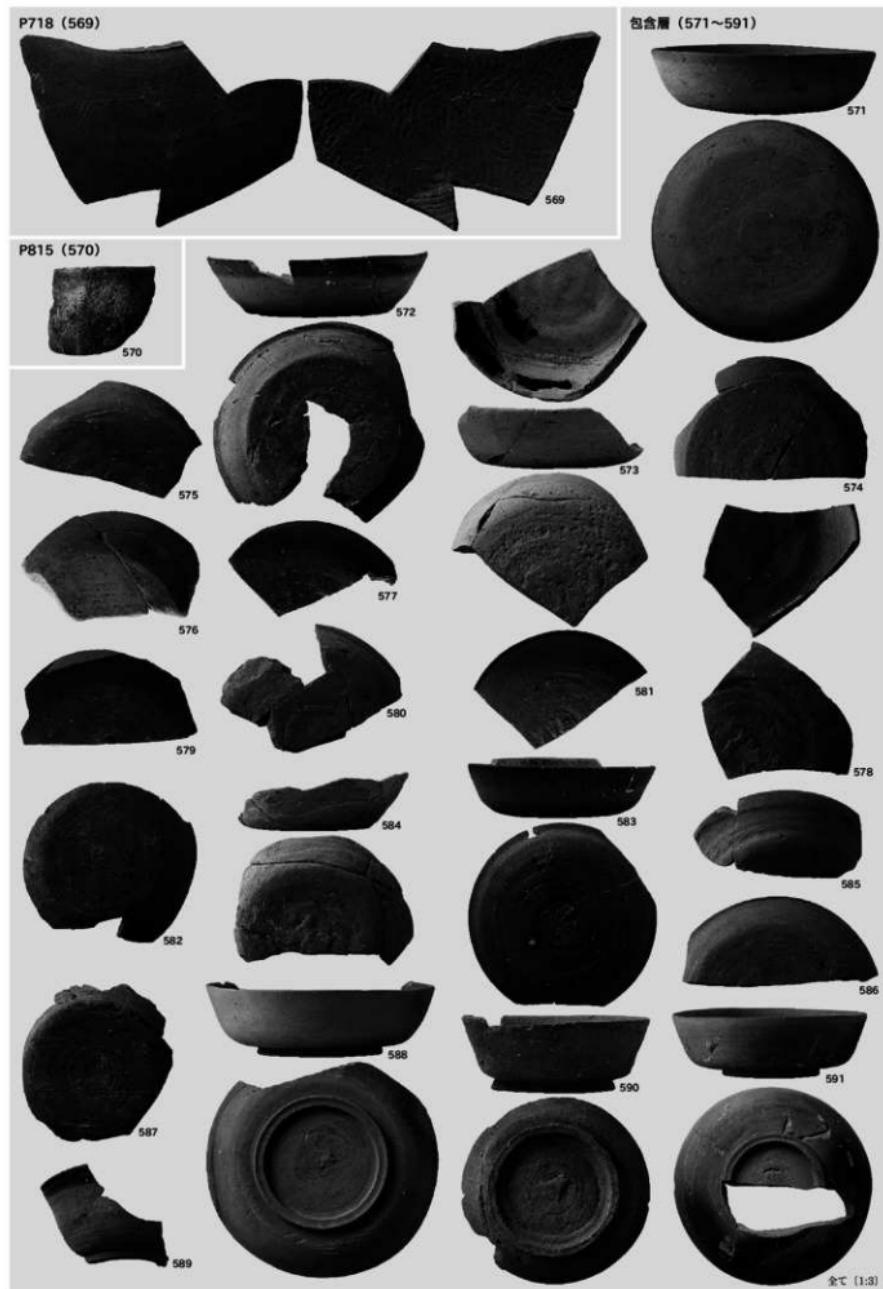


SD673 (547)



全て 1:3

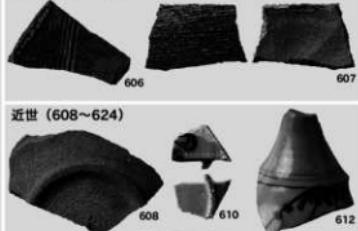




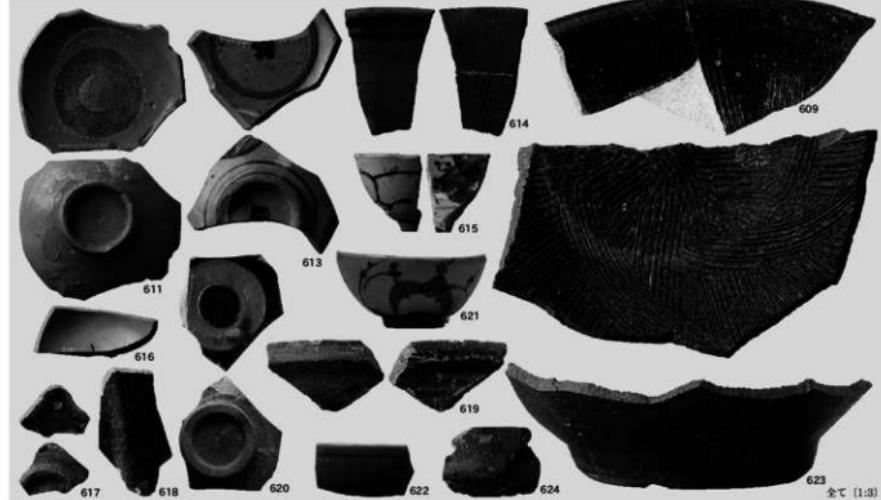
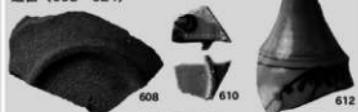
包含層 (592~605)



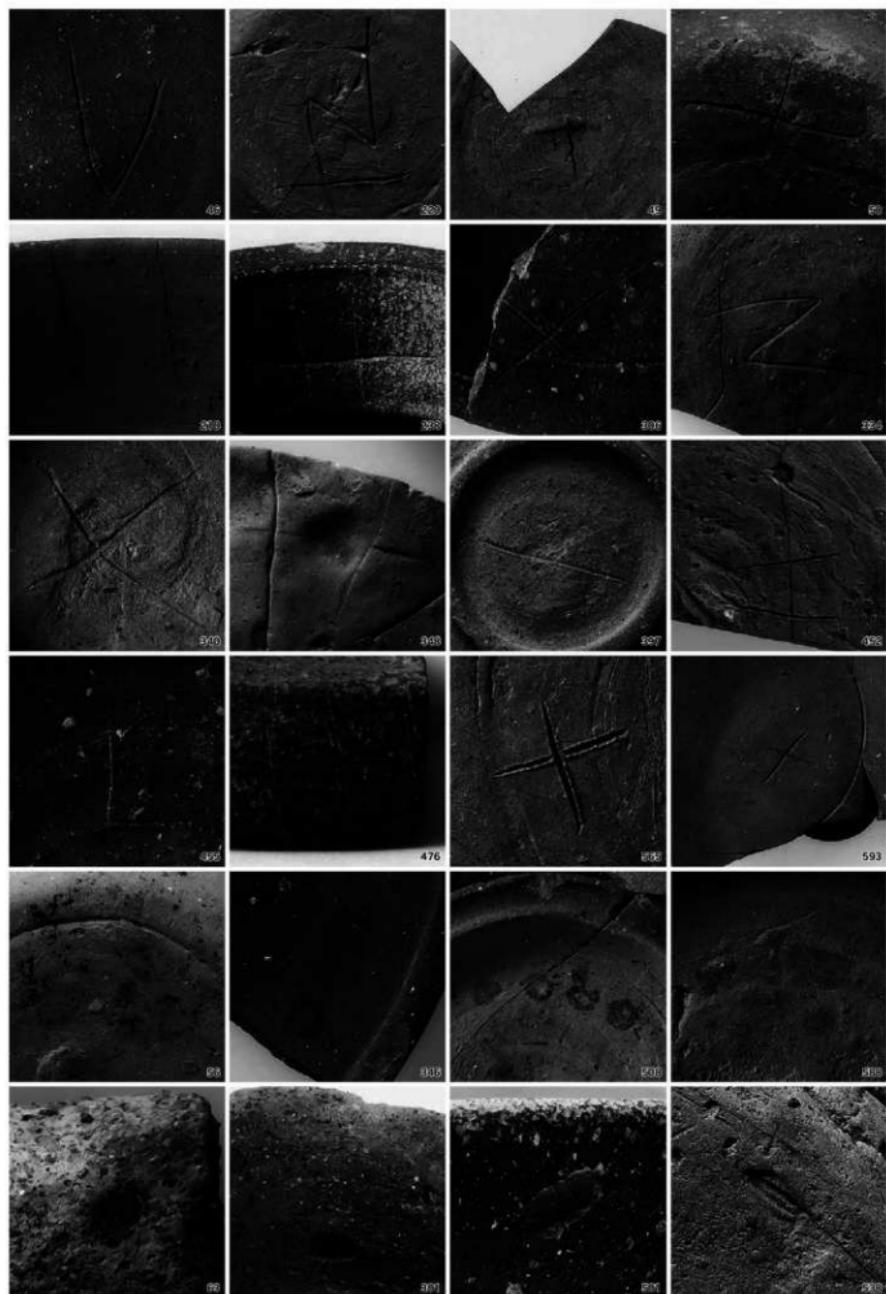
中世 (606~607)

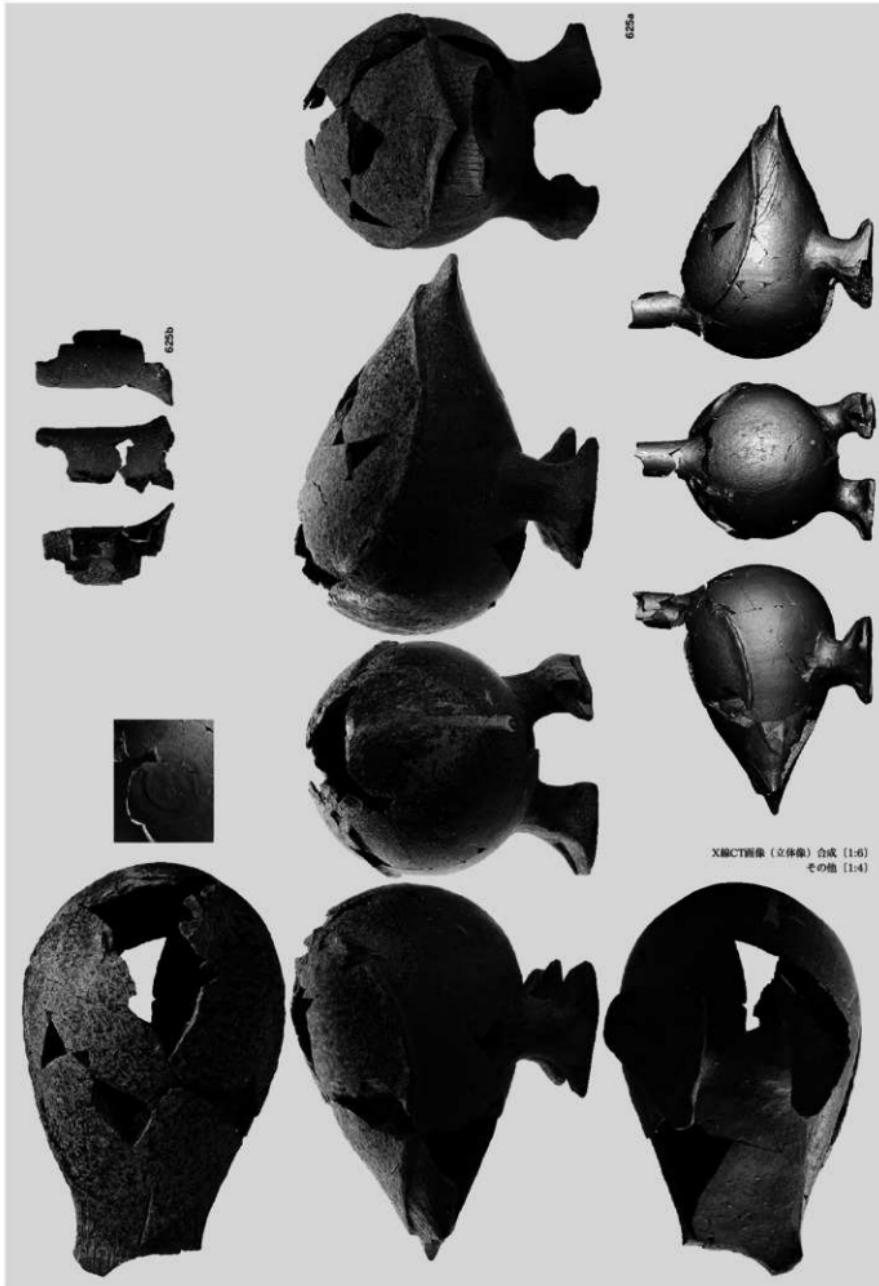


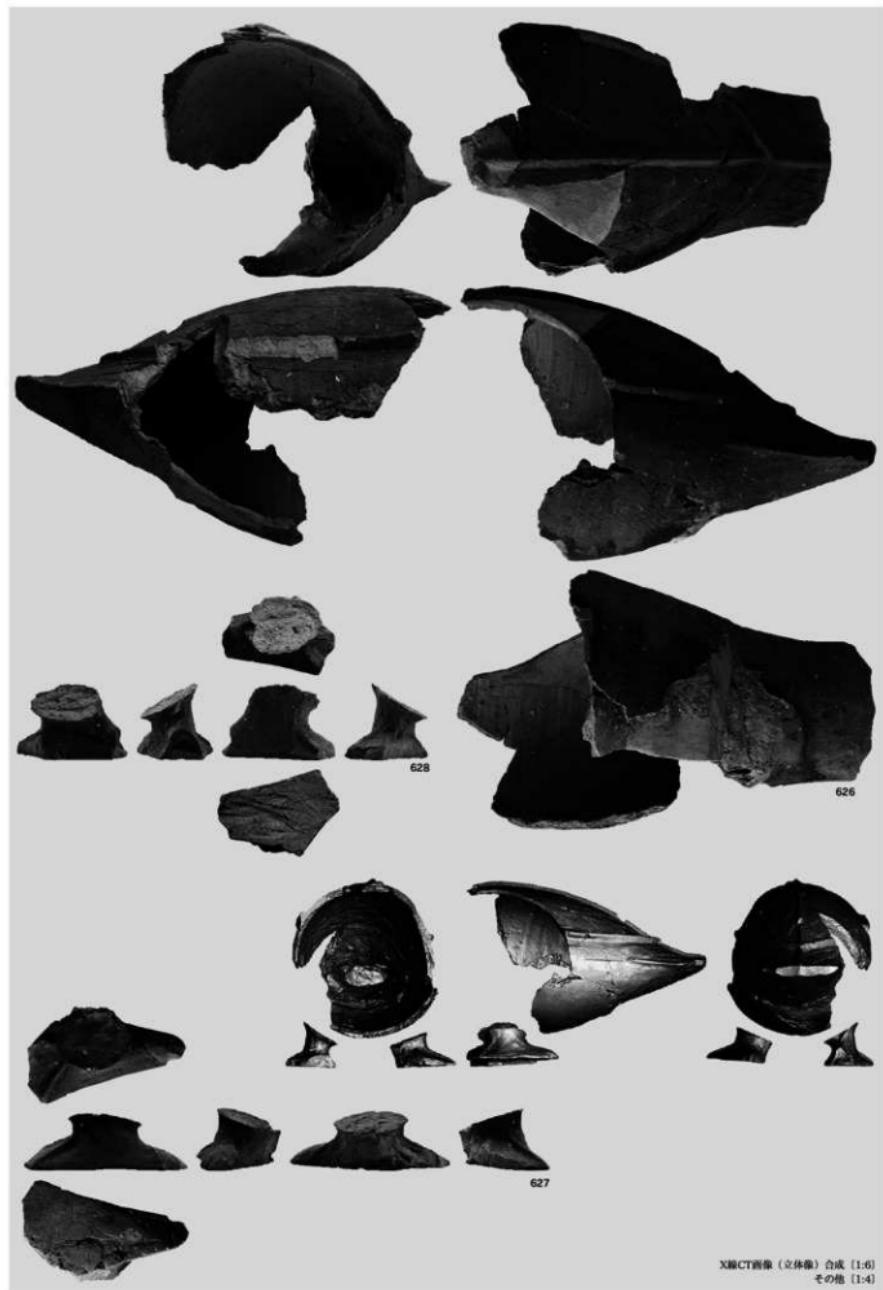
近世 (608~624)

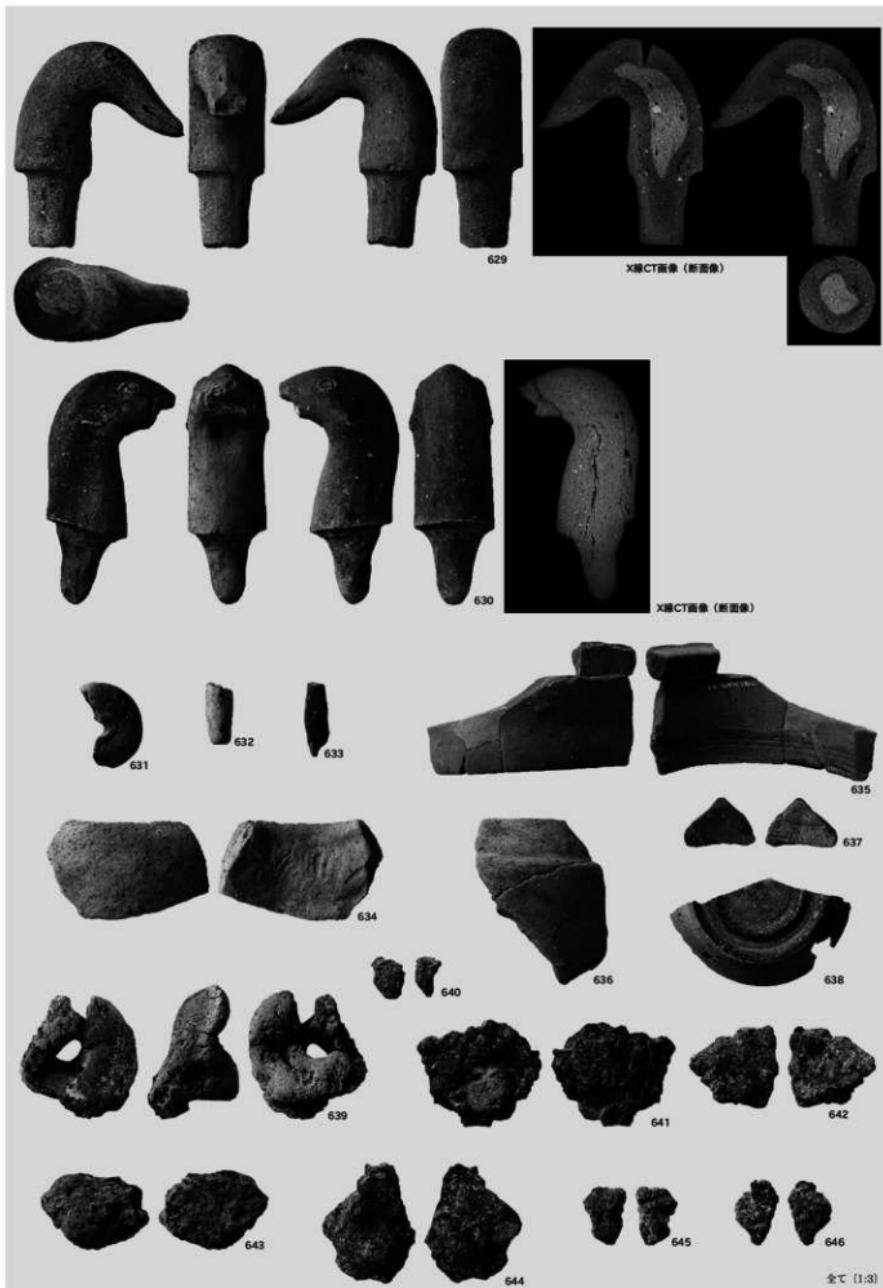


全て (1:3)



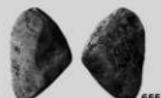




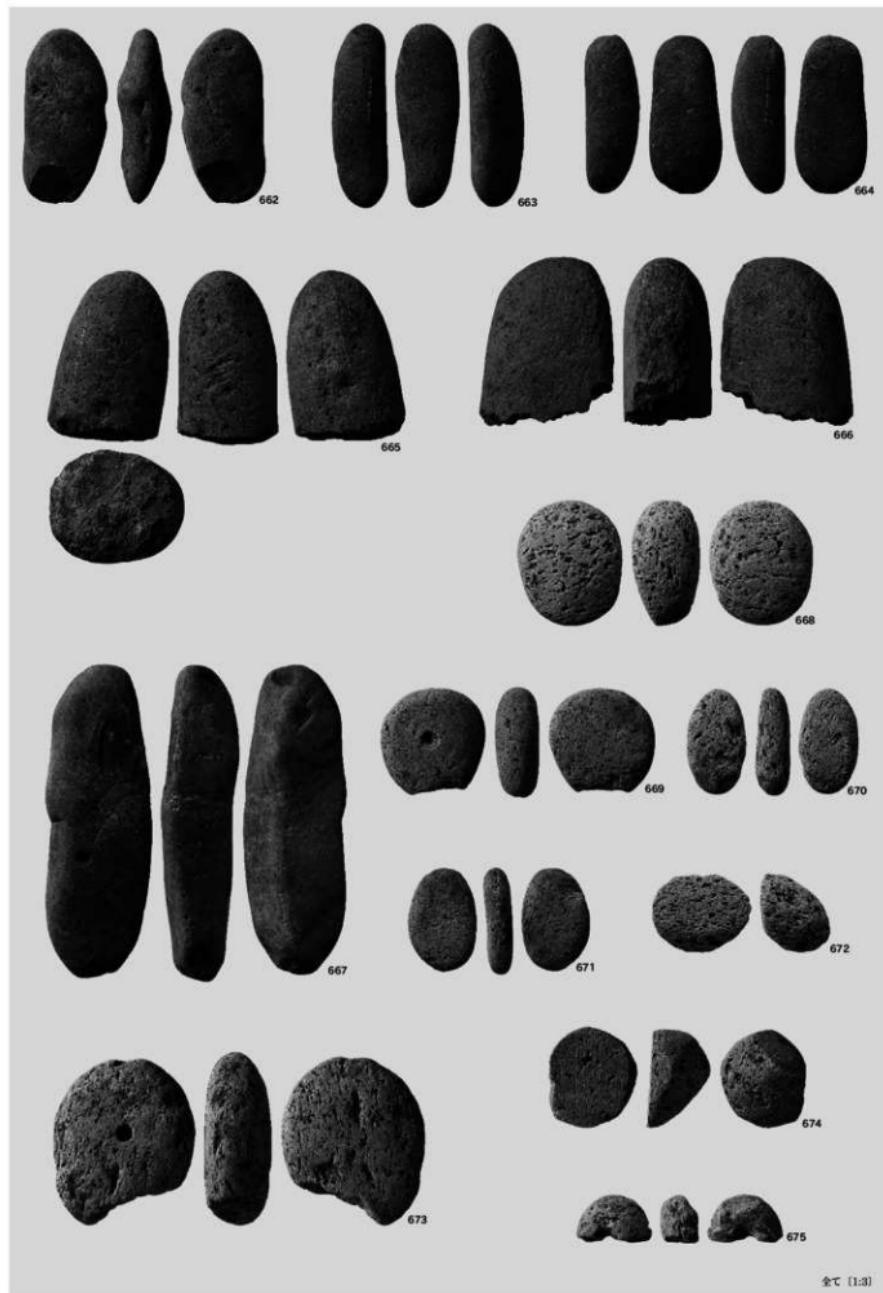


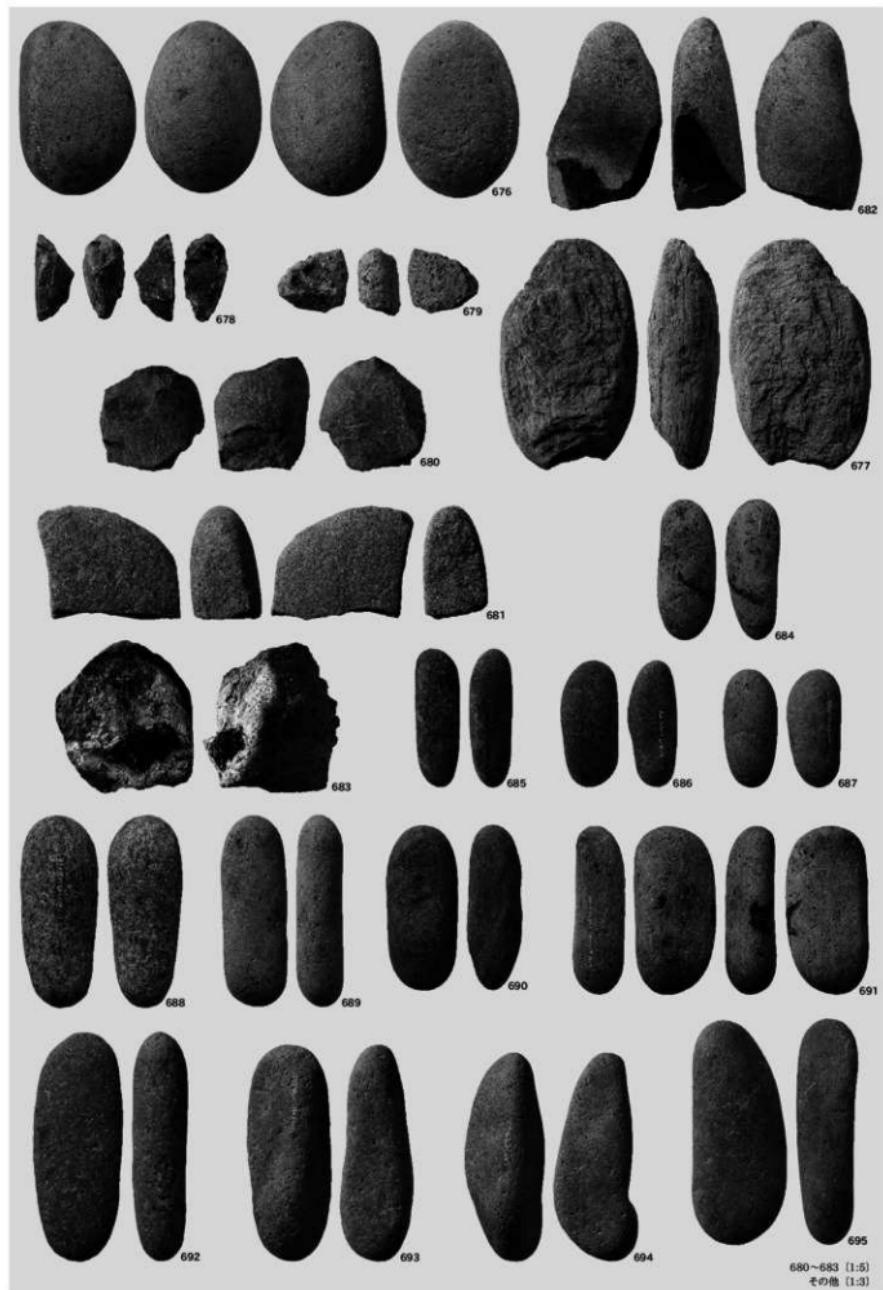


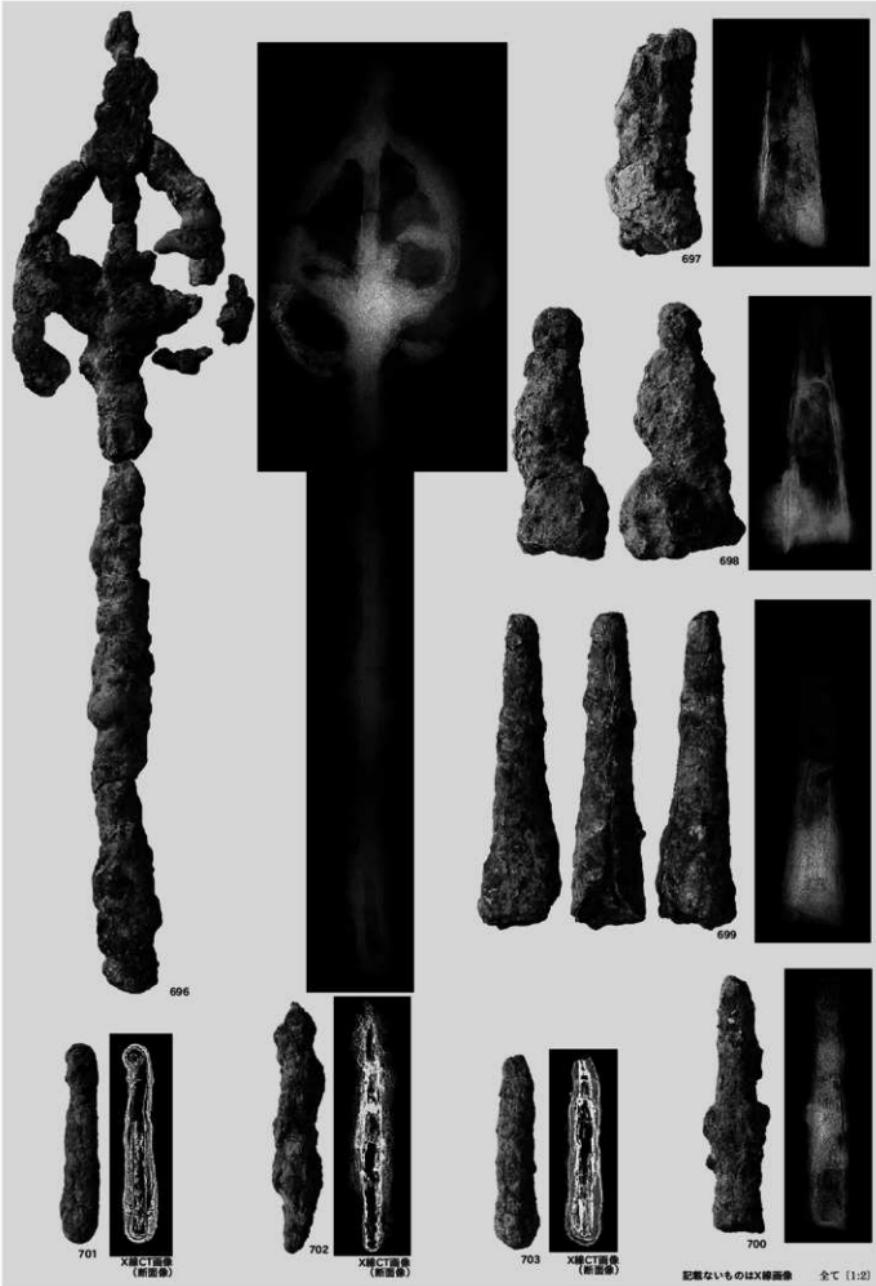
647 648 649 650 651



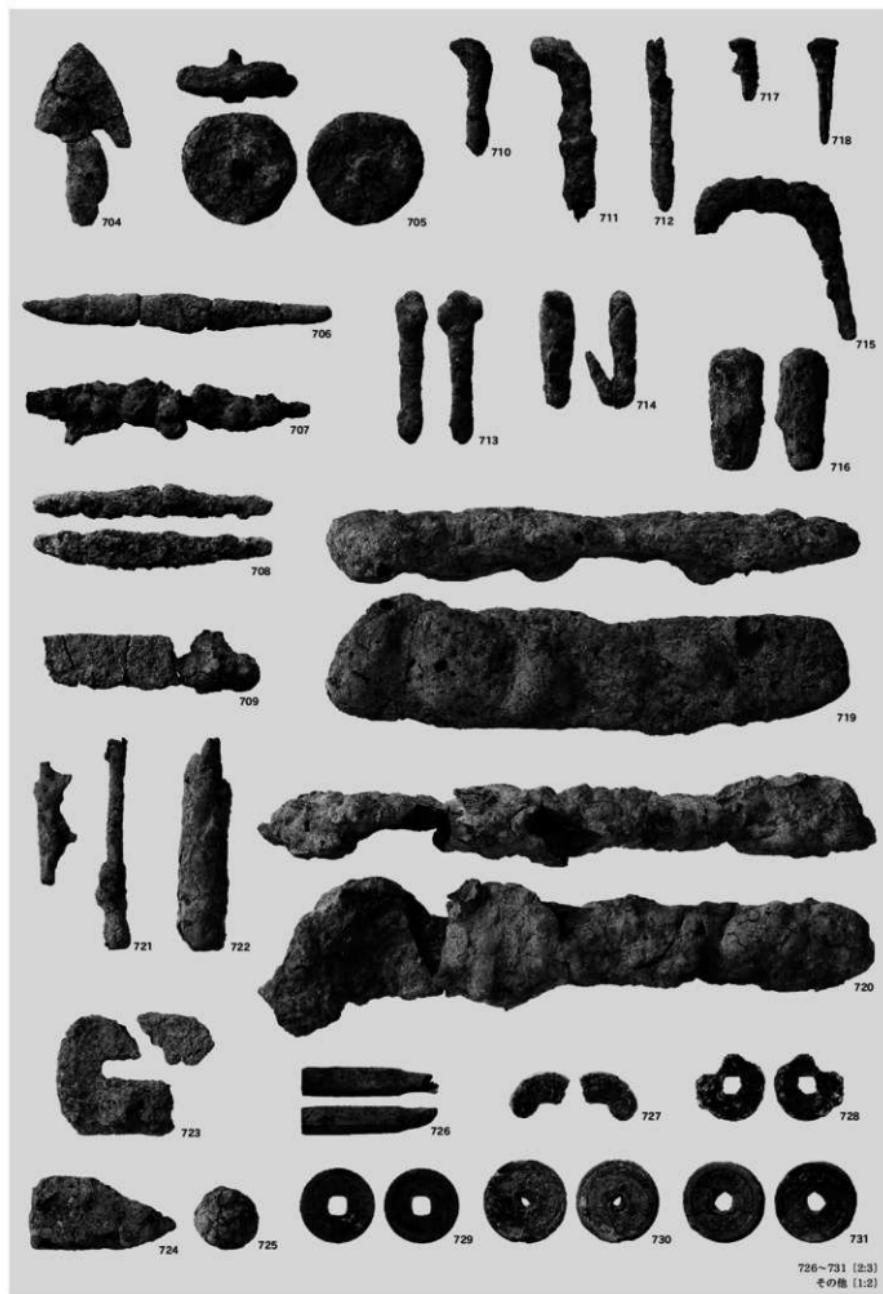
647~651 [1:2]
その他 [1:3]

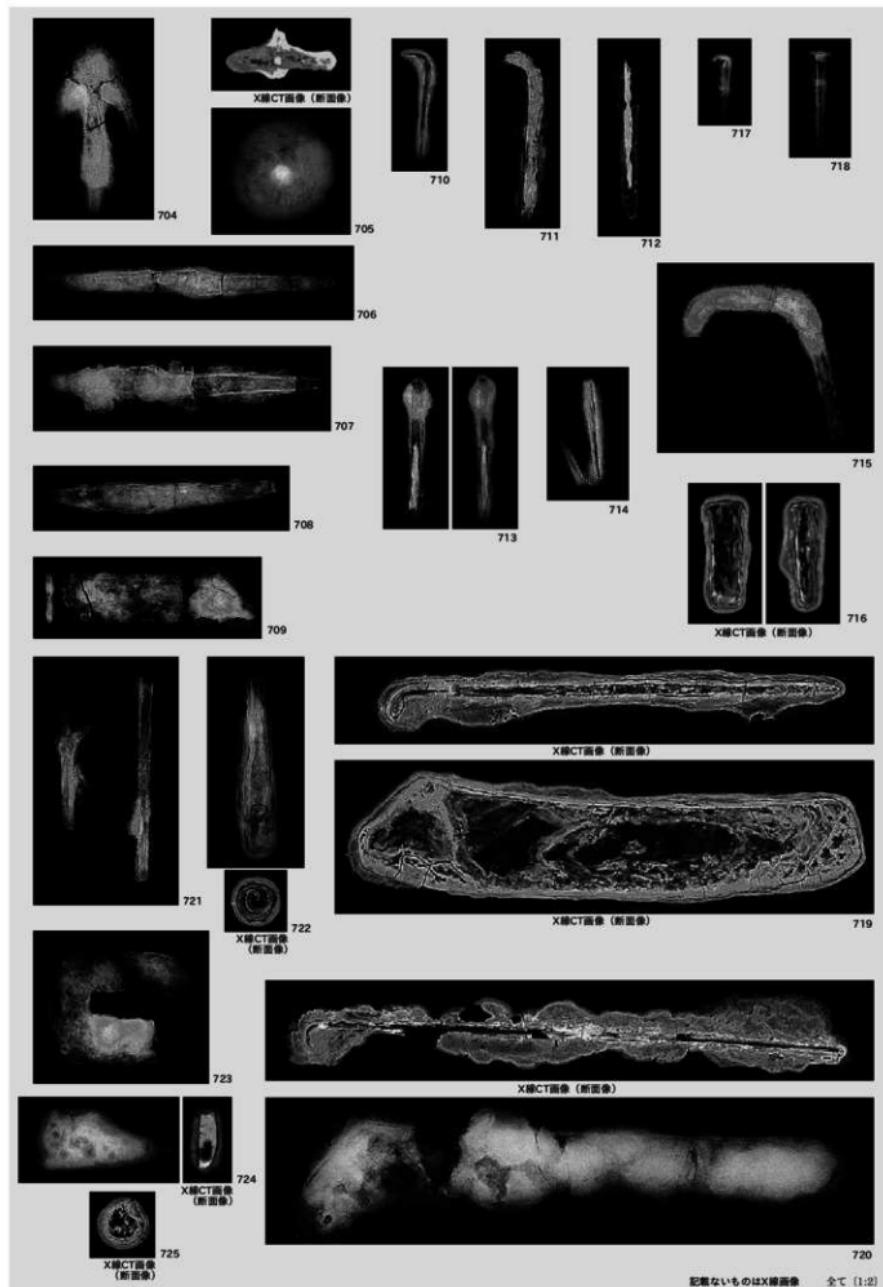


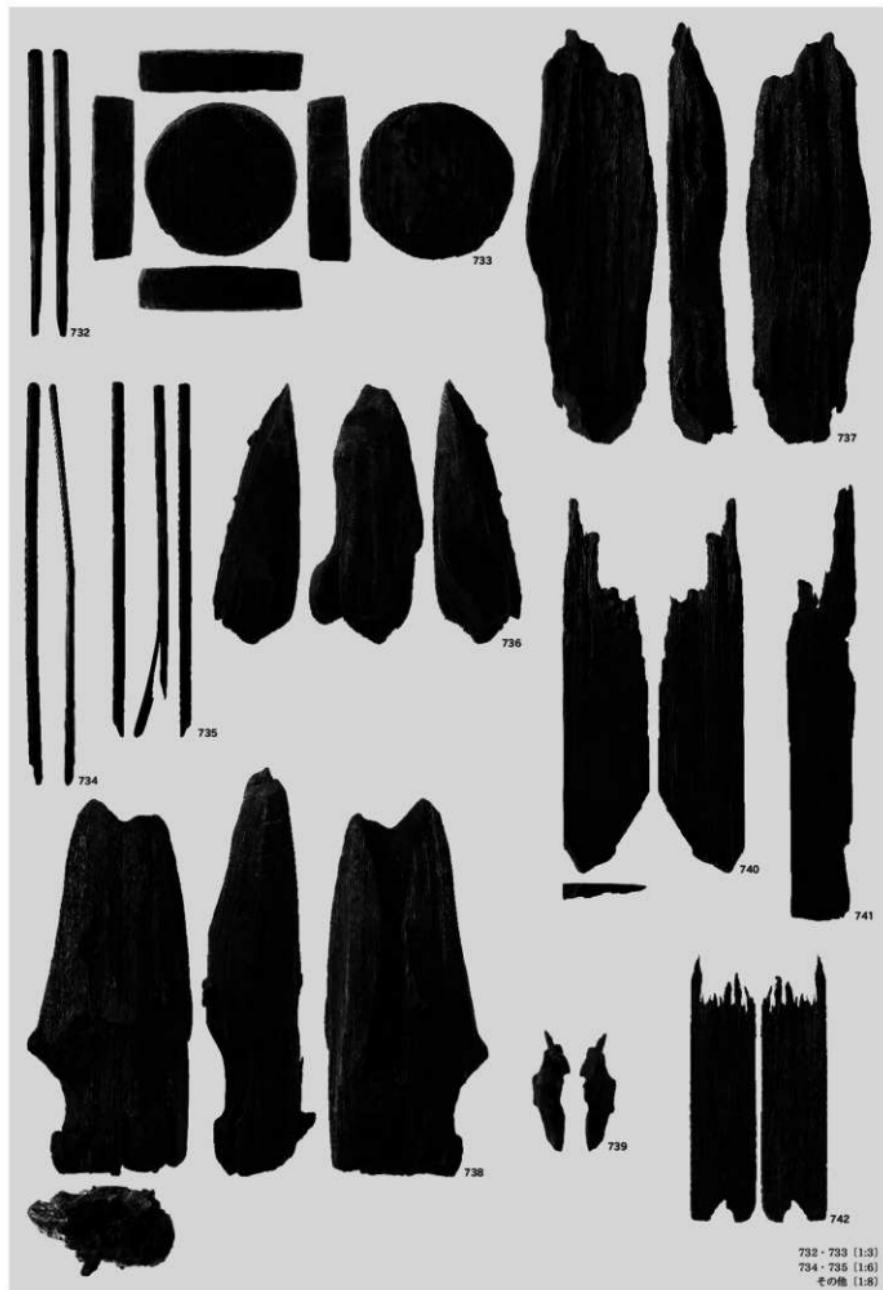




記載ないものはX線画像 全て [1:2]



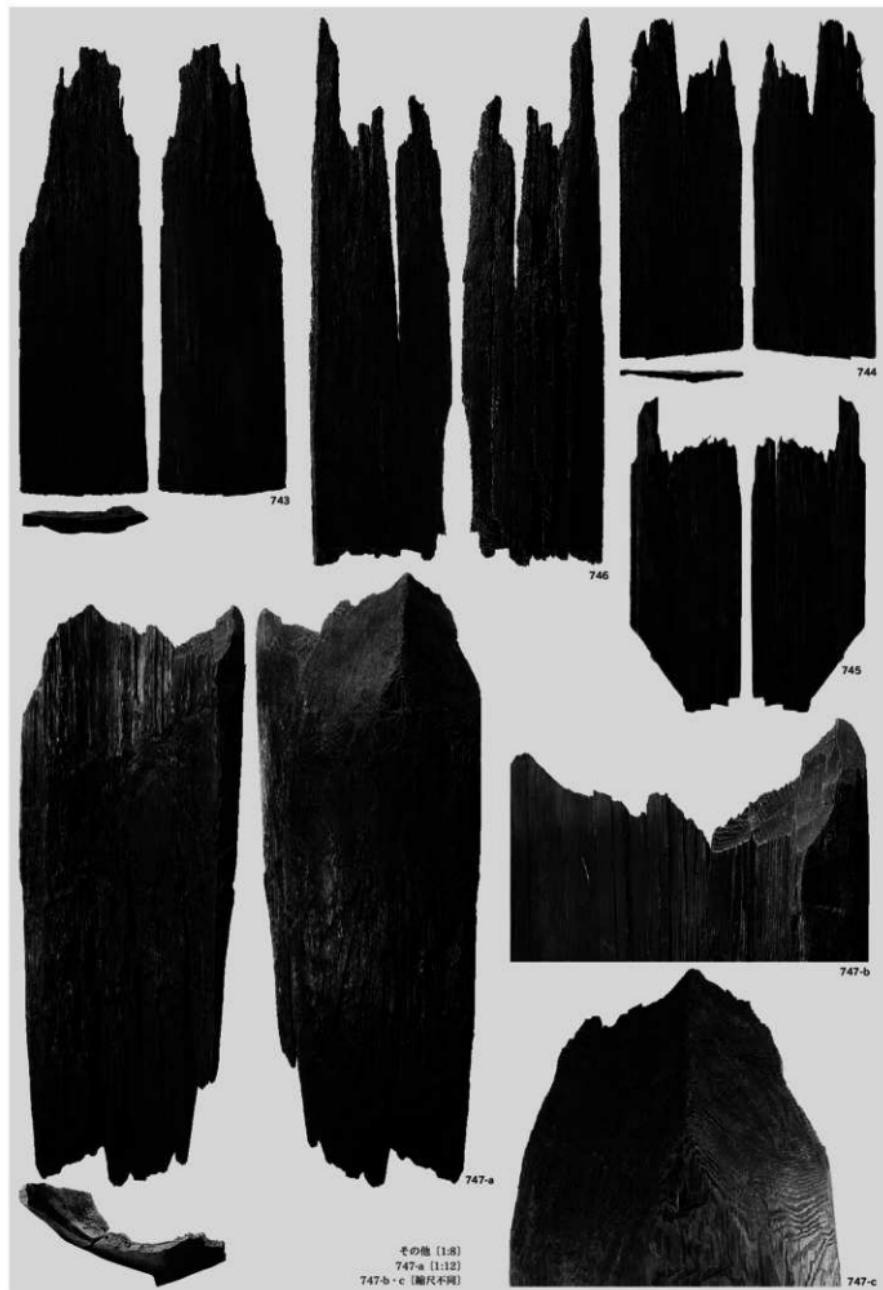


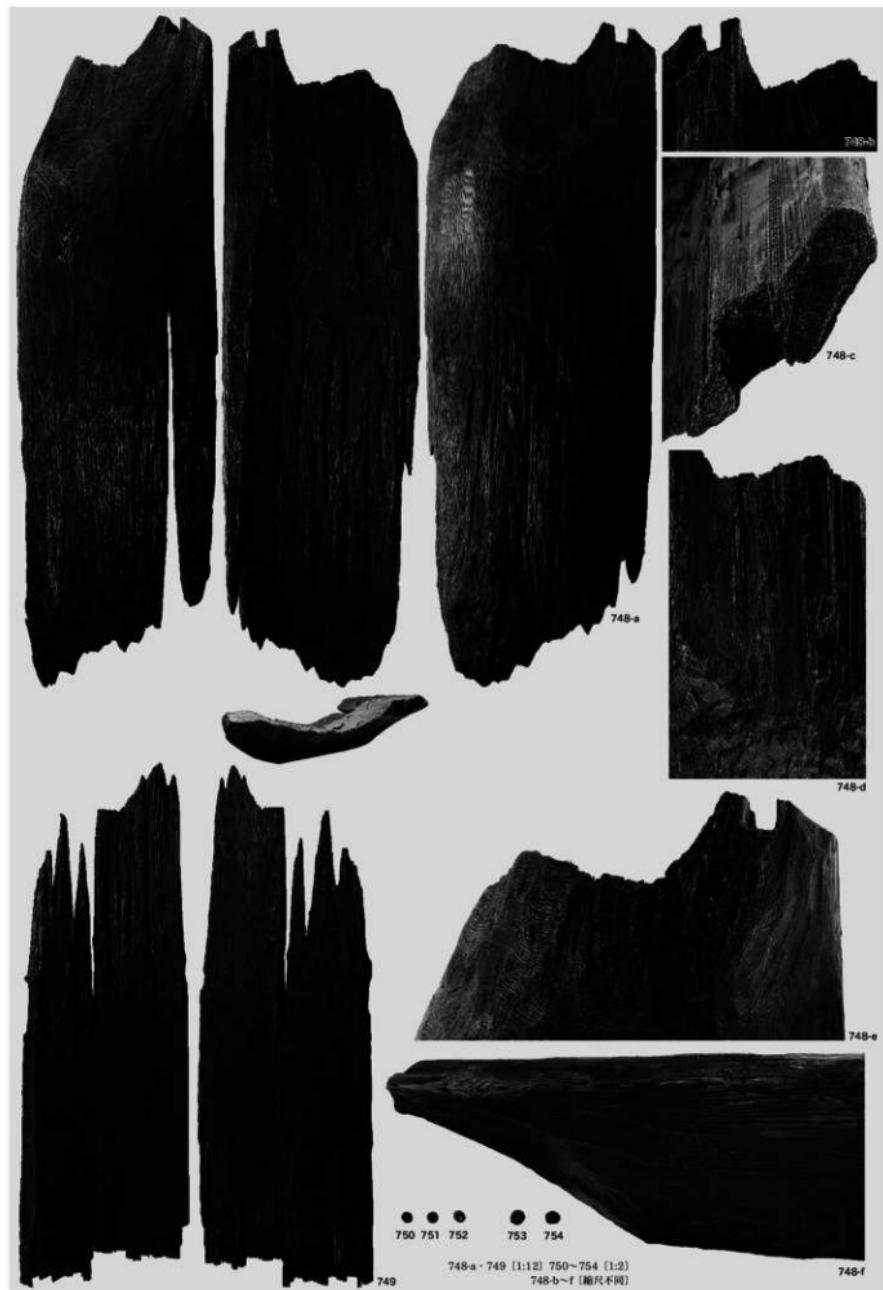


732 - 733 [1:3]

734 - 735 [1:6]

その他 [1:8]





報告書抄録

ふりがな	そがぼしおいせき だいに・さんじちょうさ					
書名	曾我墓所遺跡 第2・3次調査					
副書名	－横越排水区雨水調整池築造工事に伴う曾我墓所遺跡第2・3次発掘調査報告書－					
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号						
編著者名	龍田優子・西山美那（新潟市文化財センター）、高柳俊輔・中川晃子・脇本博康（株式会社吉田建設）、株式会社古環境研究所					
編集機関	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 文化財センター					
所在地	〒 950-1122 新潟市西区木場 2748番地1 TEL 025-378-0480					
発行年月日	西暦 2023年11月15日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²
曾我墓所遺跡	新潟市江南区横越字下郷 6052番地ほか	15104 379	37° 51° 27° (第2次)	139° 09° 16° (第2次)	20190603～ 20191216 (第2次) 20200501～ 20201127 (第3次)	3,726.2 (第2次) 4,345.7 (第3次)
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
曾我墓所遺跡	集落遺跡	古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世	竪穴建物・掘立柱建物・井戸・土坑・溝状遺構・性格不明遺構・ピット	土器類・須恵器・土製品・石製品・金属製品・木製品	鉄製錫杖頭・鉄鋤・須恵器環状瓶・鳥形製品などが遺構からまとめて出土	
要約	曾我墓所遺跡は、阿賀野川左岸の自然堤防上に立地し標高約3.8～4.5mを測る。周辺は水田であるが、東側は南北に延びる自然堤防上が住宅地となっている。調査は、横越排水区雨水調整池築造工事に伴い令和元（2019）・2年に実施した。発掘調査面積は8,071.9m ² である（2か年順次で調査している場所もあるため実際には7,198.7m ² ）。調査の結果、大量的遺物が出土し8世紀後半から9世紀初頭を最盛期とする奈良・平安時代の集落跡であることが分かった。調査区は、居住域と生産域・祭祀的な空間に分かれており、短期間に竪穴建物や掘立柱建物の建て替えをしていた様子がうかがえる。また、鉄製錫杖頭・鉄鋤と鳥形製品や鳥足の付いた須恵器環状瓶などが8世紀後半の土器とともにまとめて出土した。					

曾我墓所遺跡 第2・3次調査

－横越排水区雨水調整池築造工事に伴う曾我墓所遺跡第2・3次発掘調査報告書－

2023年11月14日印刷
2023年11月15日発行

編集 新潟市歴史文化課文化財センター

〒 950-1122 新潟市西区木場 2748番地1

TEL 025(378)0480

発行 新潟市教育委員会

〒 951-8554 新潟市中央区古町通7番町1010番地

古町ルフル4階

TEL 025(228)1000

印刷・製本 株式会社ハイングラフ

〒 950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号

TEL 025(233)0321